

(財)長野県埋蔵文化財センター  
発掘調査報告書 1

中央自動車道長野線  
埋蔵文化財発掘調査報告書 1

—岡谷市内— 大久保 B、下り林、西林 A、大洞、膳棚 A、  
膳棚 B(白山)、膳棚 B、中島 A、中島 B、柳海途、

本 文 編

日本道路公団名古屋建設局  
長野県教育委員会  
(財)長野県埋蔵文化財センター

(財)長野県埋蔵文化財センター  
発掘調査報告書 1

中央自動車道長野線  
埋蔵文化財発掘調査報告書 1

—岡谷市内— 大久保B、下り林、西林A、大洞、膳棚A、  
膳棚B(白山)、膳棚B、中島A、中島B、柳海途、

本文編

日本道路公団名古屋建設局  
長野県教育委員会  
(財)長野県埋蔵文化財センター



大久保B遺跡 瑞雲雙鸞八花鏡

# 序

中央自動車道長野線（以下「長野線」という）は、南信の下伊那・上伊那・諏訪地方を縦断する既設の西宮線に対し、岡谷市から分岐して松本平を北進し、筑摩山地を抜け、更埴市に至る、延長約77kmに及ぶ高速自動車道である。南北に長い長野県の南信・中信・北信の5市2町5村を貫通する、県民待望の大動脈である。

この長野線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査が開始されたのは、建設工事が発注されたと同じ昭和57年のことであった。従来の西宮線では、「長野県中央道遺跡調査会」を設置して対応してきたが、丁度昭和56年度をもって同線関連の発掘調査事業が終了したのを機に、長野県教育委員会では機構を一新した財団法人長野県埋蔵文化財センター（以下「埋文センター」という）を設立して長野県の3大開発プロジェクトに対応した埋蔵文化財の発掘調査と、県内の埋蔵文化財全般の保護と活用を推進することとし、当面、主として長野線に関わる埋蔵文化財発掘調査に当ることになった。

昭和57年4月、職員12名でスタートした埋文センターは、岡谷市内6遺跡の発掘調査に着手し、以来、本年度まで5年間、塩尻市・松本市・豊科町まで合計41遺跡約47万㎡に及ぶ調査が、一部を残しほぼ終了した。この間、とくに昭和60・61年度は、塩尻市の鉢伏山麓から松本市西郊の水田地帯にかけての発掘調査総面積約37万㎡、29遺跡という膨大な事業量をこなすため、調査研究員も60数名に増員して対応するという非常事態体制がとられた。そして関係各機関の絶大なる御支援・御協力によりこの難関を突破し、多大の成果を収めることができたことを、あらためて深く感謝申し上げたい。しかしながら、こうした諸般の情勢から発掘調査が優先されたので記録保存のための室内での諸作業に少なからず遅れが生ずることになったが、ようやくここに懸案だった岡谷市域分の報告書を初めて刊行することとなった。

さて、本報告書の舞台となる岡谷市は、従来から遺跡の多い地域として知られているが、幸いにも長野線は市街地西山麓の一部を通過するにとどまったため、著名な大遺跡などを破壊せずにすんだ。しかし一方では、予期しなかったような新知見を加えた遺跡もあった。奈良時代の墳墓2基と八花鏡の出土した大久保B遺跡、縄文時代草創期や同晩期資料を多出した中島A・同B遺跡、全国的にも良好な資料となった大洞遺跡の縄文前期末～中期初頭土器群など、その成果には見るべきものが多くあった。こうした結果の収録であるこの報告書が、すでに高速道下に煙滅した諸遺跡の記録保存に、十分な役割を果すことを念じてやまない。

最後に、発掘調査やその後の整理作業・報告書刊行に深い御理解をいただいた日本道路公団名古屋建設局、同松本工事事務所、県高速道局、同岡谷・松本高速道事務所、岡谷市当局、地区被買収（地権）者組合等の関係各機関、現場作業に従事された多くの方々、長期間精励された県教育委員会文化課及び埋文センター職員に対し深甚なる謝意を表する次第である。

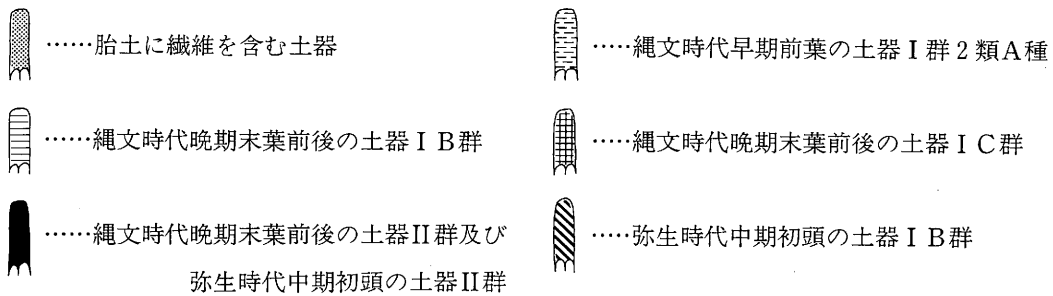
昭和62年3月20日

（助）長野県埋蔵文化財センター理事長

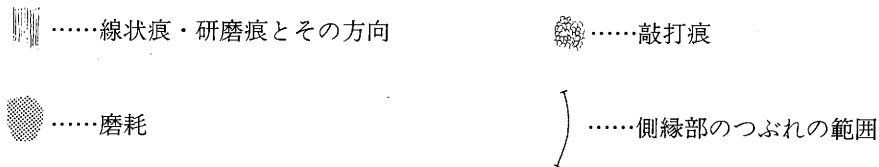
村 山 正

## 例 言

- 本書は中央自動車道長野線建設工事に関わる岡谷市内の9遺跡(大久保B、下り林、西林A、大洞、膳棚B(白山)、膳棚B、中島A、中島B、柳海途)と、県営住宅代替地に関わる岡谷市内の1遺跡(膳棚A)の発掘調査報告書である。
- 調査契約及び経費については第1章第2節で記した。
- 本書作成の方針・方法及び指導・助言者については第1章第4節で記した。
- 本書で使用した地図は、岡谷市役所発行の岡谷市全図(1:10,000)、岡谷市都市計画図(1:2,500)、岡谷市教育委員会発行の岡谷市文化財地図(1:10,000)、日本道路公団作成の中央自動車道長野線平面図(1:1,000)をもとに作成した。
- 本書で使用した空中写真は、建設省国土地理院長の承認を得て、複製したものである。(承認番号 昭62関復 第4号)
- 本書で報告した各遺跡の記録及び出土遺物は、(財)長野県埋蔵文化財センターで保管している。
- 本書に掲載した実測図の表記中、以下については特に意味をもたせている。  
土器実測図・拓影の断面は白ぬきを原則とし、胎土差を次のように表示した。



石器実測図中平面図内及び平面図外側には次の内容を表示した。



- 発掘調査及び文責等本書刊行に関する分担は、巻末に一括して掲載した。
- 参考文献は節末に一括した。註は脚註とした。

# 本文目次

巻首図版 大久保B遺跡瑞雲双鸞八花鏡

序

例言

第1章 調査の経緯と方法	1
第1節 調査の契約	1
1 発掘調査委託契約	1
2 契約対象遺跡と契約業務の経過	5
第2節 調査体制	6
第3節 調査の経過	9
第4節 調査の方法	10
1 発掘調査の方法	10
(1) 調査方針 (2) 遺跡名称と記号 (3) トレンチ調査の方法と視点 (4) 面的調査	
(5) 遺構の調査 (6) 遺物の取り上げ (7) その他	
2 記録の方法	11
(1) 測量 (2) 写真 (3) その他	
3 整理の方法	11
(1) 発掘記録の整理 (2) 遺物の整理と記録 (3) 記録と遺物の保管	
4 指導・助言等	12
5 編集・刊行の方法	12
(1) 編集方針 (2) 土器の記述 (3) 石器の記述	
第2章 岡谷地区の概観	14
第1節 岡谷市の地質学的環境	14
1 地形と地質	14
(1) 概況 (2) 断層と地形形成の関連について (3) 地形形成史	
第2節 岡谷地区の遺跡分布	21
第3章 調査遺跡	31
第1節 大久保B遺跡	31

1	遺跡の概観	31
2	調査の概要	31
3	調査の経過	32
4	調査の結果	33
	(1) 層序と地形形成	
	(2) 遺構と遺物の概観	
	(3) 縄文時代の遺構と遺物	
	(4) 奈良時代の遺構と遺物	
	① 墳墓    ② 出土遺物	
	(5) 平安時代以降の遺物	
5	成果と課題	47
6	小結	48
<b>第2節</b>	<b>下り林遺跡</b>	<b>50</b>
1	遺跡の概観	50
2	調査の概要	51
3	調査の経過	52
4	調査の結果	52
	(1) 層序と地形形成	
	(2) 遺構と遺物の概観	
	(3) 縄文時代の遺構と遺物	
	① 遺構と遺物の出土状況    ② 遺物	
	(4) 弥生時代中期初頭の遺物	
	(5) 平安時代の遺構と遺物	
5	小結	76
<b>第3節</b>	<b>西林A遺跡</b>	<b>77</b>
1	遺跡の概観	77
2	調査の概要	77
3	調査の経過	78
4	調査の結果	79
	(1) 層序と地形形成	
	(2) 遺構と遺物の概観	
	(3) 縄文時代の遺構と遺物	
	① 1号住居址    ② 土壌    ③ 遺構外の遺物	
	(4) 弥生時代中期初頭の遺構と遺物	
5	小結	98
<b>第4節</b>	<b>大洞遺跡</b>	<b>99</b>
1	遺跡の概観	99

2	調査の概要	99
3	調査の経過	101
4	調査の結果	101
	(1) 層序と地形	
	(2) 遺構と遺物の概観	
	(3) 縄文時代の遺構と遺物	
	① 遺構と遺物の出土状況    ② 遺構及び遺物の様相と分類	
	(4) 平安時代の遺構と遺物	
5	成果と課題 ～縄文時代前期末から中期初頭の遺物と集落をめぐって～	186
	(1) 前期末葉～中期初頭土器の編年	
	(2) 石器群をめぐって	
	(3) 集落とその性格	
6	小結	199
<b>第5節 膳棚A遺跡</b>		201
1	遺跡の概観	201
2	調査の概要	201
3	調査の経過	201
4	調査の結果	201
<b>第6節 膳棚B（白山）遺跡</b>		203
1	遺跡の概観	203
2	調査の概要	203
3	調査の経過	205
4	調査の結果	205
	(1) 層序と地形形成	
	(2) 遺構と遺物の概観	
	(3) 縄文時代の遺構と遺物	
	① 遺構と遺物の出土状況    ② 出土遺物	
	(4) 奈良、平安時代の遺構と遺物	
	① 1号石組墓	
	(5) 近世の遺構と遺物	
5	小結	218
<b>第7節 膳棚B遺跡</b>		220
1	遺跡の概観	220
2	調査の概要	220
3	調査の経過	221
4	調査の結果	223
	(1) 層序と地形	



(2) 遺構と遺物の概観	
(3) 縄文時代の遺構と遺物	
(4) 弥生時代以降の遺構と遺物	
(5) 河川址	
5 成果と課題	246
(1) 縄文時代早期末葉の土器 ～絡条体圧痕文系土器をめぐって～	
(2) 縄文時代早期末葉の石器	
(3) 縄文時代早期末葉の遺構群	
6 小結	252
<b>第8節 中島A遺跡</b>	<b>253</b>
1 遺跡の概観	253
2 調査の概要	253
3 調査の経過	256
4 調査の結果	257
(1) 地形形成と層序	
① 中島A遺跡付近における地形形成	② 地区の区分
③ 層序	④ 文化層の年代
(2) 古環境の復元	
① 花粉分析	② 植物遺体の同定
③ 昆虫鞘翅の同定	④ 文化層と環境
(3) 遺構と遺物の概観	
(4) J・P・O・I地区の遺構と遺物	
(5) K・L地区 縄文時代晩期前葉以前の遺物	
(6) K・L地区 縄文時代晩期末葉前後の遺構と遺物	
① 遺物出土状況	② 遺物のブロック
③ ブロック外出土遺物・出土地点不明の遺物	④ 遺物
(7) K・L地区 弥生時代の遺構と遺物	
(8) K・L地区 古墳時代～平安時代の遺物	
(9) K・L地区 中世～近世の遺物	
5 成果と課題	347
(1)縄文時代晩期末葉～弥生時代中期初頭の中島A遺跡周辺	
(2)平安時代の中島A遺跡周辺	
6 小結	351
<b>第9節 中島B遺跡</b>	<b>352</b>
1 遺跡の概観	352
2 調査の概要	352
3 調査の経過	353
4 調査の結果	354
(1) 層序と地形形成	
(2) 遺構と遺物の概観	

(3) 縄文時代草創期の遺構と遺物	
① ブロックの認定    ② 遺物の認定    ③ 1号ブロック群    ④ 2号ブロック群	
⑤ 3号ブロック    ⑥ 土壌    ⑦ 中島B遺跡VI層中の植物珪酸体	
(4) 縄文時代前期～晩期の遺構と遺物	
(5) 弥生時代以降の遺物	
5 成果と課題 .....	431
(1) 遺跡の成り立ち	
(2) 槍先形尖頭器について	
(3) 遺跡の評価と編年的位置	
6 小結 .....	436
<b>第10節 柳海途遺跡 .....</b>	<b>437</b>
1 遺跡の概観 .....	437
2 調査の概要 .....	437
3 調査の経過 .....	437
4 調査の結果 .....	439
(1) 層序と地形形成	
(2) 遺構と遺物の概観	
(3) 縄文時代の遺構と遺物	
(4) 弥生時代以降の遺構と遺物	
5 小結 .....	447
<b>第4章 結語 .....</b>	<b>448</b>

発掘調査及び執筆等の分担一覧

写真図版 (P L) (別冊)

## 目 次

図1 財団法人長野県埋蔵文化財センター組織図	図11 調査遺跡地形図4 (1:2,500)
図2 諏訪盆地周辺の地質概略図 (1:150,000)	図12 大久保B遺跡発掘範囲及び地形図 (1:1,000)
図3 岡谷地区地形区分図 (1:30,000)	図13 大久保B遺跡土層図 (1:120)
図4 岡谷地区地質断面図1	図14 大久保B遺跡遺構配置図 (1:600)
図5 岡谷地区地質断面図2	図15 大久保B遺跡土壌実測図 (1:60)
図6 岡谷地区地形発達史概念図	図16 大久保B遺跡遺構外出土遺物実測図・拓影1 (1:3)
図7 岡谷地区遺跡分布図 (1:10,000)	図17 大久保B遺跡遺構外出土遺物実測図・拓影2 (1:3、1:4、2:3)
図8 調査遺跡地形図1 (1:2,500)	
図9 調査遺跡地形図2 (1:2,500)	
図10 調査遺跡地形図3 (1:2,500)	

- 図18 大久保B遺跡1号墳墓実測図(1:60)
- 図19 大久保B遺跡2号墳墓実測図(1:60)
- 図20 大久保B遺跡瑞雲双鸞八花鏡拓影(1:2)
- 図21 大久保B遺跡瑞雲双鸞八花鏡の鉛同位体比
- 図22 下り林遺跡発掘範囲及び地形図(1:400)
- 図23 下り林遺跡土層図(1:80)
- 図24 下り林遺跡遺構配置図(1:160)
- 図25 下り林遺跡1号土壙・1号焼土址実測図(1:60)
- 図26 下り林遺跡遺構外出土遺物拓影1(1:2)
- 図27 下り林遺跡遺構外出土遺物実測図・拓影2(1:2)
- 図28 下り林遺跡遺構外出土遺物拓影3(1:3)
- 図29 下り林遺跡遺構外出土遺物拓影4(1:3)
- 図30 下り林遺跡遺構外出土遺物拓影5(1:3)
- 図31 下り林遺跡遺構外出土遺物拓影6(1:3)
- 図32 下り林遺跡遺構外出土遺物実測図・拓影7(1:3)
- 図33 下り林遺跡遺構外出土遺物実測図・拓影8(1:3)
- 図34 下り林遺跡遺構外出土遺物実測図9(2:3)
- 図35 下り林遺跡遺構外出土遺物実測図10(2:3)
- 図36 下り林遺跡遺構外出土遺物実測図11(2:3)
- 図37 下り林遺跡遺構外出土遺物実測図12(1:4)
- 図38 下り林遺跡遺構外出土遺物実測図13(1:4)
- 図39 下り林遺跡遺構外出土遺物実測図・拓影14(1:4、1:3)
- 図40 下り林遺跡1号住居址実測図(1:60)・出土遺物実測図(1:4)
- 図41 西林A遺跡発掘範囲及び地形図(1:2,000)
- 図42 西林A遺跡土層図(1:160)
- 図43 西林A遺跡第1地点遺構配置図(1:200)
- 図44 西林A遺跡第2地点遺構配置図(1:200)
- 図45 西林A遺跡1号住居址実測図(1:60)・出土遺物拓影(1:3)
- 図46 西林A遺跡1号住居址出土石器実測図(2:3、1:3、1:6)
- 図47 西林A遺跡土壙実測図(1:60)
- 図48 西林A遺跡土壙出土遺物実測図(1:4、2:3)
- 図49 西林A遺跡遺構外出土縄文時代土器拓影1(1:3)
- 図50 西林A遺跡遺構外出土縄文時代土器実測図・拓影2(1:4、1:3)
- 図51 西林A遺跡遺構外出土縄文時代土器拓影3(1:3)
- 図52 西林A遺跡遺構外出土縄文時代土器実測図4(1:4)
- 図53 西林A遺跡第1地点出土縄文時代石器実測図1(2:3)
- 図54 西林A遺跡第1地点出土縄文時代石器実測図2(1:4)
- 図55 西林A遺跡第2地点出土縄文時代石器実測図1(2:3)
- 図56 西林A遺跡第2地点出土縄文時代石器実測図2(2:3)
- 図57 西林A遺跡第2地点出土縄文時代石器実測図3(1:4)
- 図58 西林A遺跡1号炉址実測図(1:40)及び弥生時代遺物分布図(1:240)
- 図59 西林A遺跡第2地点出土弥生時代の遺物実測図1(1:4)
- 図60 西林A遺跡第2地点出土弥生時代の遺物実測図2(1:4)
- 図61 大洞遺跡発掘範囲・トレンチ配置及び地形図(1:1,000)
- 図62 大洞遺跡土層図(1:160)
- 図63 大洞遺跡土層模式図
- 図64 大洞遺跡遺構配置図(1:400)
- 図65 大洞遺跡遺構の垂直分布図
- 図66 大洞遺跡1号住居址・11号土壙実測図(1:60)
- 図67 大洞遺跡1号住居址出土遺物実測図・拓影(1:4、1:3、2:3)
- 図68 大洞遺跡2・3号住居址、13号土壙実測図(1:60)
- 図69 大洞遺跡2・3号住居址土器出土状況図
- 図70 大洞遺跡2号住居址出土遺物実測図・拓影(1:4、1:3、2:3)
- 図71 大洞遺跡3号住居址出土遺物実測図・拓影1(1:4、1:3)
- 図72 大洞遺跡3号住居址出土遺物実測図・拓影2(1:3、2:3)
- 図73 大洞遺跡3号住居址出土遺物実測図3(1:4、1:6)
- 図74 大洞遺跡土壙実測図1(1:60)
- 図75 大洞遺跡土壙出土遺物拓影1(1:3)
- 図76 大洞遺跡土壙出土遺物実測図2(2:3、1:6)
- 図77 大洞遺跡集石炉実測図1(1:40)

- 図78 大洞遺跡集石炉及び土壙実測図2 (1:40)
- 図79 大洞遺跡3号及び5号集石炉出土遺物実測図・拓影(1:4、1:3、2:3)
- 図80 大洞遺跡ブロック及び焼土址実測図1(1:10)
- 図81 大洞遺跡ブロック実測図2(1:10)
- 図82 大洞遺跡ブロック実測図3(1:10)
- 図83 大洞遺跡1号及び2号ブロック出土黒曜石実測図(1:3)
- 図84 大洞遺跡2号・3号・5号及び7号ブロック出土黒曜石実測図(1:3)
- 図85 大洞遺跡遺構外出土石器個別別出土状況図
- 図86 大洞遺跡遺構外出土石器時期別出土状況図1
- 図87 大洞遺跡遺構外出土石器時期別出土状況図2
- 図88 大洞遺跡遺構外出土押型文土器実測図・拓影(1:2、1:4)
- 図89 大洞遺跡遺構外出土諸磯b式及び諸磯c式土器実測図・拓影1(1:3、1:4)
- 図90 大洞遺跡遺構外出土諸磯c式土器実測図・拓影2(1:3、1:6)
- 図91 大洞遺跡遺構外出土縄文時代中期後半～晩期土器実測図・拓影(1:3、1:4)
- 図92 大洞遺跡遺構外出土石器分布図1
- 図93 大洞遺跡遺構外出土石器分布図2
- 図94 大洞遺跡遺構外出土石器実測図1(2:3)
- 図95 大洞遺跡遺構外出土石器実測図2(2:3)
- 図96 大洞遺跡遺構外出土石器実測図3(2:3)
- 図97 大洞遺跡遺構外出土石器実測図4(2:3)
- 図98 大洞遺跡遺構外出土石器実測図5(2:3)
- 図99 大洞遺跡遺構外出土石器実測図6(2:3)
- 図100 大洞遺跡遺構外出土石器実測図7(2:3)
- 図101 大洞遺跡遺構外出土石器実測図8(2:3)
- 図102 大洞遺跡遺構外出土石器実測図9(2:3)
- 図103 大洞遺跡遺構外出土石器実測図10(2:3)
- 図104 大洞遺跡遺構外出土石器実測図11(2:3)
- 図105 大洞遺跡遺構外出土石器実測図12(1:4)
- 図106 大洞遺跡遺構外出土石器実測図13(1:4、1:2)
- 図107 大洞遺跡遺構外出土石器実測図14(1:4、1:6)
- 図108 大洞遺跡遺構外出土石製品及び土製品実測図・拓影(2:3)
- 図109 縄文時代前期末～中期初頭第I群土器模式図
- 図110 縄文時代前期末～中期初頭第IV群土器模式図
- 図111 大洞遺跡縄文時代前期末～中期初頭第I群土器実測図・拓影1(1:4、1:3)
- 図112 大洞遺跡縄文時代前期末～中期初頭第I群土器拓影2(1:3)
- 図113 大洞遺跡縄文時代前期末～中期初頭第I群土器拓影3(1:3)
- 図114 大洞遺跡縄文時代前期末～中期初頭第I群土器拓影4(1:3)
- 図115 大洞遺跡縄文時代前期末～中期初頭第I群土器拓影5(1:3)
- 図116 大洞遺跡縄文時代前期末～中期初頭第I群土器実測図・拓影6(1:4、1:3)
- 図117 大洞遺跡縄文時代前期末～中期初頭第I群土器実測図・拓影7(1:4、1:3)
- 図118 大洞遺跡縄文時代前期末～中期初頭第I群土器実測図・拓影8(1:4、1:3)
- 図119 大洞遺跡縄文時代前期末～中期初頭第I群・第II群土器拓影9(1:3)
- 図120 大洞遺跡縄文時代前期末～中期初頭第III群土器実測図・拓影(1:6、1:3)
- 図121 大洞遺跡縄文時代前期末～中期初頭第IV群土器実測図1(1:4)
- 図122 大洞遺跡縄文時代前期末～中期初頭第IV群土器拓影2(1:3)
- 図123 大洞遺跡縄文時代前期末～中期初頭第IV群土器拓影3(1:3)
- 図124 大洞遺跡縄文時代前期末～中期初頭第IV群土器拓影4(1:3)
- 図125 大洞遺跡縄文時代前期末～中期初頭第IV群土器実測図・拓影5(1:4、1:6、1:3)
- 図126 大洞遺跡縄文時代前期末～中期初頭第IV群土器実測図・拓影6(1:4)
- 図127 大洞遺跡縄文時代前期末～中期初頭第IV群土器拓影7(1:3)
- 図128 大洞遺跡石鏃様相図
- 図129 大洞遺跡石錐、スクレイパー、ピエス・エスキュー様相図
- 図130 大洞遺跡小剥離痕のある剥片、打製石斧、横刃形石器様相図
- 図131 大洞遺跡1号石組墓実測図(1:40)及び周辺出土遺物実測図(1:4)
- 図132 縄文時代前期末～中期初頭の土器の文様構成模式図
- 図133 縄文時代前期末葉土器の変遷
- 図134 石器組成の比較
- 図135 岡谷市内の諸磯a式から中期中葉の遺跡分布

- 図 (1 : 40,000)
- 図136 <sup>14</sup>C年代測定値の対比
- 図137 膳棚A遺跡発掘範囲及び地形図 (1 : 1,000)
- 図138 膳棚A遺跡土層図 (1 : 160)
- 図139 膳棚B (白山) 遺跡発掘範囲・遺構配置及び地形図 (1 : 400)
- 図140 膳棚B (白山) 遺跡土層図 (1 : 150)
- 図141 膳棚B (白山) 遺跡1号住居址実測図 (1 : 60)
- 図142 膳棚B (白山) 遺跡1号住居址出土遺物実測図・拓影 (1 : 4、1 : 3、2 : 3)
- 図143 膳棚B (白山) 遺跡土壙実測図 (1 : 60)
- 図144 膳棚B (白山) 遺跡遺物分布図(上)・接合図(下) (1 : 200)
- 図145 膳棚B (白山) 遺跡遺構外出土遺物拓影1 (1 : 3)
- 図146 膳棚B (白山) 遺跡遺構外出土遺物拓影2 (1 : 3)
- 図147 膳棚B (白山) 遺跡遺構外出土遺物実測図3 (2 : 3、1 : 4)
- 図148 膳棚B (白山) 遺跡1号石組墓実測図 (1 : 60)
- 図149 膳棚B (白山) 遺跡近世遺構実測図(1 : 60)及び出土銭貨拓影 (1 : 3)
- 図150 膳棚B遺跡トレンチ配置・発掘範囲及び地形図 (1 : 1,000)
- 図151 膳棚B遺跡土層図 (1 : 160)
- 図152 膳棚B遺跡土層模式図
- 図153 膳棚B遺跡遺構配置図
- 図154 膳棚B遺跡1号住居址実測図 (1 : 60)
- 図155 膳棚B遺跡1号住居址出土遺物実測図・拓影 (1 : 4、1 : 3、2 : 3、1 : 6)
- 図156 膳棚B遺跡土壙実測図 (1 : 60)
- 図157 膳棚B遺跡土壙出土遺物実測図・拓影及び1号土壙リン分析結果 (2 : 3、1 : 3、1 : 4、1 : 8)
- 図158 膳棚B遺跡1号集石址及び1号・2号ブロック実測図 (1 : 200)
- 図159 膳棚B遺跡1号集石址実測図 (1 : 60)
- 図160 膳棚B遺跡1号集石址出土遺物実測図・拓影1 (2 : 3、1 : 3)
- 図161 膳棚B遺跡1号集石址出土遺物実測図2 (2 : 3、1 : 2、1 : 4、1 : 6)
- 図162 膳棚B遺跡1号ブロック出土遺物実測図・拓影 (1 : 3、2 : 3)
- 図163 膳棚B遺跡2号ブロック出土遺物実測図・拓影1 (1 : 3、2 : 3)
- 図164 膳棚B遺跡2号ブロック出土遺物実測図2 (2 : 3、1 : 4、1 : 6)
- 図165 膳棚B遺跡遺構外出土土器拓影 (1 : 3)
- 図166 膳棚B遺跡遺構外出土土器実測図1 (2 : 3)
- 図167 膳棚B遺跡遺構外出土土器実測図2 (2 : 3)
- 図168 膳棚B遺跡遺構外出土土器実測図3 (2 : 3)
- 図169 膳棚B遺跡遺構外出土土器実測図4 (2 : 3、1 : 4)
- 図170 膳棚B遺跡遺構外出土土器実測図5 (1 : 4、1 : 6)
- 図171 膳棚B遺跡水田址実測図 (1 : 200)
- 図172 膳棚B遺跡遺構外出土遺物実測図・拓影(1 : 3、2 : 3)
- 図173 膳棚B遺跡石器様相図
- 図174 中島A遺跡発掘範囲及び地形図 (1 : 1,000)
- 図175 中島A遺跡付近の地形分類図
- 図176 中島A遺跡A・E・Gトレンチ南東側壁面スケッチ
- 図177 岡谷断層を横断する総合模式断面図
- 図178 中島A遺跡トレンチ配置及び地区区分図 (1 : 800)
- 図179 中島A遺跡土層図1 (1 : 120)
- 図180 中島A遺跡土層図2 (1 : 120)
- 図181 中島A遺跡柱状図
- 図182 中島A遺跡S23・W10付近採取の花粉分析ダイアグラム1
- 図183 中島A遺跡S23・W10付近採取の花粉分析ダイアグラム2
- 図184 中島A遺跡S44・E5付近採取の花粉分析ダイアグラム
- 図185 中島B遺跡N47・W44及びN60・W53付近採取の花粉分析ダイアグラム1
- 図186 中島B遺跡N47・W44及びN60・W53付近採取の花粉分析ダイアグラム2
- 図187 中島A遺跡K・L地区遺構配置図 (1 : 500)
- 図188 中島A遺跡P地区土壙実測図 (1 : 60)
- 図189 中島A遺跡J地区出土遺物実測図・拓影(1 : 3、2 : 3、1 : 4)
- 図190 中島A遺跡P地区出土遺物実測図・拓影(1 : 3、2 : 3、1 : 4)
- 図191 中島A遺跡O地区出土土器拓影 (1 : 3)
- 図192 中島A遺跡O地区出土土器実測図 (2 : 3、1 : 4)

- 図193 中島A遺跡I地区縄文時代早期土器分布図(1:500)
- 図194 中島A遺跡I地区出土遺物実測図・拓影(1:3、2:3、1:4)
- 図195 中島A遺跡K・L地区VI層の土器分布図(1:400)
- 図196 中島A遺跡K・L地区VI層出土遺物実測図・拓影1(1:4、1:3)
- 図197 中島A遺跡K・L地区VI層出土遺物実測図・拓影2(1:4、1:3)
- 図198 中島A遺跡K・L地区VI層出土遺物実測図3(1:4)
- 図199 中島A遺跡K・L地区I～IV層出土遺物拓影1(1:3)
- 図200 中島A遺跡K・L地区I～IV層出土遺物実測図・拓影2(1:4、1:3)
- 図201 中島A遺跡縄文時代草創期の遺物実測図(2:3)
- 図202 中島A遺跡K・L地区V層遺物分布図(1:400)
- 図203 中島A遺跡K・L地区V層遺物接合図(1:400)
- 図204 中島A遺跡地区・層別にみた遺物出土量
- 図205 中島A遺跡K・L地区ブロック間の接合遺物実測図(1:4、2:3)
- 図206 中島A遺跡1号ブロック出土遺物実測図1(1:4)
- 図207 中島A遺跡1号ブロック出土遺物実測図・拓影2(1:4、1:3)
- 図208 中島A遺跡1号ブロック出土遺物実測図・拓影3(1:3、2:3、1:4)
- 図209 中島A遺跡1号ブロック出土遺物実測図4(1:4、1:2)
- 図210 中島A遺跡2号ブロック出土遺物実測図1(1:4)
- 図211 中島A遺跡2号ブロック出土遺物実測図2(1:4)
- 図212 中島A遺跡2号ブロック出土遺物実測図・拓影3(1:4、1:3)
- 図213 中島A遺跡2号ブロック出土遺物実測図・拓影4(1:3、2:3)
- 図214 中島A遺跡2号ブロック出土遺物実測図5(2:3、1:4)
- 図215 中島A遺跡2号ブロック出土遺物実測図6(1:4、1:2)
- 図216 中島A遺跡3号ブロック出土遺物実測図1(1:4)
- 図217 中島A遺跡3号ブロック出土遺物実測図・拓影2(1:3、2:3、1:4)
- 図218 中島A遺跡4号ブロック出土遺物実測図・拓影1(1:4、1:3)
- 図219 中島A遺跡4号ブロック出土遺物実測図・拓影2(1:3、2:3、1:4)
- 図220 中島A遺跡5号ブロック実測図(1:30)及び出土遺物実測図(1:4、1:3、2:3、1:2)
- 図221 中島A遺跡K・L地区ブロック外出土遺物実測図・拓影1(1:4、1:3)
- 図222 中島A遺跡K・L地区ブロック外出土遺物実測図2(2:3)
- 図223 中島A遺跡K・L地区ブロック外出土遺物実測図3(2:3、1:4)
- 図224 中島A遺跡K・L地区ブロック外出土遺物実測図4(1:4、1:2)
- 図225 中島A遺跡K・L地区出土小剥離痕のある剥片実測図(2:3)
- 図226 中島A遺跡出土地区・層不明遺物実測図(2:3、1:4)
- 図227 縄文時代晩期末葉前後の土器分類図
- 図228 縄文時代晩期末葉前後の土器の消長
- 図229 中島A遺跡出土石鏃の法量
- 図230 中島A遺跡出土ピエス・エスキューの法量
- 図231 中島A遺跡出土打製石斧の法量
- 図232 中島A遺跡ブロック別石器組成図
- 図233 中島A遺跡ブロック別遺物出土量
- 図234 中島A遺跡K・L地区弥生時代の遺構配置図(1:400)
- 図235 中島A遺跡1号祭祀遺構実測図(1:30)及び出土遺物実測図・拓影(1:4、1:3)
- 図236 中島A遺跡2号祭祀遺構実測図(1:30)
- 図237 中島A遺跡K・L地区IVc層単独出土土器実測図(1:4)及び出土状況実測図(1:30)
- 図238 中島A遺跡K・L地区出土弥生時代遺物実測図(1:4、1:3、1:2)
- 図239 中島A遺跡K・L地区IVa・IVb層遺物分布図(1:400)
- 図240 中島A遺跡K・L地区大形加工材実測図(1:60)
- 図241 中島A遺跡K・L地区出土古墳時代以降の遺物実測図(1:4)

- 図242 中島A遺跡K・L地区出土木製品実測図1 (1:4) (3:4)
- 図243 中島A遺跡K・L地区出土木製品実測図2 (1:4) 図267 中島B遺跡2号ブロック群出土石器実測図4 (3:4)
- 図244 中島A遺跡K・L地区出土木製品(板)の法量 図268 中島B遺跡2号ブロック群出土石器実測図5 (2:3)
- 図245 中島A遺跡周辺の縄文時代晩期末～弥生時代中期初頭の遺跡分布図 (1:2,000) 図269 中島B遺跡2号ブロック群出土石器実測図6 (2:3)
- 図246 中島B遺跡発掘範囲及び地形図 (1:1,000) 図270 中島B遺跡2号ブロック群出土石器実測図7 (2:3)
- 図247 中島B遺跡土層図 (1:120) 図271 中島B遺跡2号ブロック群出土剥片長幅比グラフ
- 図248 中島B遺跡縄文時代草創期遺物分布及び遺構配置図 (1:200) 図272 中島B遺跡2号ブロック群出土石器実測図8 (2:3)
- 図249 中島B遺跡縄文時代草創期ブロック及び土壌配置図 (1:200) 図273 中島B遺跡2号ブロック群出土石器実測図9 (1:2)
- 図250 中島B遺跡1号ブロック群器種別分布図(左)・個別別資料分布図(右)及び31号・32号土壌実測図 (1:60) 図274 中島B遺跡2号ブロック群出土石器実測図10 (1:2)
- 図251 中島B遺跡1号ブロック群出土石器実測図1 (3:4) 図275 中島B遺跡2号ブロック群出土石器実測図11 (1:2)
- 図252 中島B遺跡1号ブロック群出土石器実測図2 (2:3) 図276 中島B遺跡2号ブロック群出土石器実測図12 (1:2)
- 図253 中島B遺跡1号ブロック群出土石器実測図3 (2:3) 図277 中島B遺跡2号ブロック群出土石器実測図13 (1:2)
- 図254 中島B遺跡1号ブロック群出土石器実測図4 (2:3) 図278 中島B遺跡2号ブロック群出土石器実測図14 (1:2)
- 図255 中島B遺跡2-A～2-C号ブロック器種別分布図 (1:60) 図279 中島B遺跡2号ブロック群出土石器実測図15 (1:2)
- 図256 中島B遺跡2-E・2-F号ブロック器種別分布図 (1:60) 図280 中島B遺跡2号ブロック群出土石器実測図16 (1:2)
- 図257 中島B遺跡2-D・2-G・2-H号ブロック器種別分布図 (1:60) 図281 中島B遺跡2号ブロック群出土石器実測図17 (1:2)
- 図258 中島B遺跡2-I～2-N号ブロック器種別分布図 (1:60) 図282 中島B遺跡2号ブロック群出土石器実測図18 (1:3)
- 図259 中島B遺跡2号ブロック群個別別資料分布及び接合資料No.9接合状況図 (1:75) 図283 中島B遺跡2号ブロック群出土石器実測図19 (1:3)
- 図260 中島B遺跡接合資料No.3及びNo.4接合状況図 (1:40) 図284 中島B遺跡2号ブロック群出土石器実測図20 (1:3)
- 図261 中島B遺跡接合資料No.5(上)及びNo.6(下)接合状況図 (1:40) 図285 中島B遺跡2号ブロック群周辺部出土土器拓影 (1:2)
- 図262 中島B遺跡接合資料No.7接合状況図(1:40) 図286 中島B遺跡3号ブロック器種別分布図 (1:60)
- 図263 中島B遺跡接合資料No.8接合状況図(1:40) 図287 中島B遺跡3号ブロック出土石器実測図1 (3:4)
- 図264 中島B遺跡2号ブロック群出土石器実測図1 (3:4) 図288 中島B遺跡3号ブロック出土石器実測図2 (3:4)
- 図265 中島B遺跡2号ブロック群出土石器実測図2 (3:4)
- 図266 中島B遺跡2号ブロック群出土石器実測図3 (3:4)

図289	中島B遺跡3号ブロック出土石器実測図3 (3:4)	図300	中島B遺跡FG・GI地区出土遺物実測図3 (1:4)
図290	中島B遺跡3号ブロック出土剥片長幅比グラフ	図301	中島B遺跡出土弥生時代以降の遺物実測図 (1:4、1:2)
図291	中島B遺跡3号ブロック出土土器拓影(1:2)	図302	柳海途遺跡トレンチ配置・発掘範囲及び地形図(1:1,500)
図292	植物珪酸体の分離・定量法	図303	柳海途遺跡土層図(1:120)
図293	中島B遺跡縄文時代前期以後の遺構配置図 (1:250)	図304	柳海途遺跡遺構配置図(1:400)
図294	中島B遺跡3号・25号土壙実測図(1:60) 及び25号土壙出土土器実測図(1:4)	図305	柳海途遺跡1号土壙実測図(1:60)及び出土遺物実測図・拓影(1:4、1:3)
図295	中島B遺跡G地区出土遺物実測図・拓影1 (1:3、1:4)	図306	柳海途遺跡遺構外出土遺物実測図・拓影1 (1:3、1:4、2:3)
図296	中島B遺跡G地区出土遺物実測図2(2:3)	図307	柳海途遺跡遺構外出土遺物実測図2(2:3)
図297	中島B遺跡G地区出土遺物実測図3(1:4)	図308	柳海途遺跡遺構外出土遺物実測図3(2:3、1:4)
図298	中島B遺跡FG・GI地区出土遺物拓影1 (1:3)	図309	柳海途遺跡1号溝址及び1号河川址断面図 (1:60)
図299	中島B遺跡FG・GI地区出土遺物実測図2 (2:3、1:4)	図310	柳海途遺跡遺構外出土遺物実測図4(1:4)

## 表 目 次

表1	中央自動車道長野線埋蔵文化財調査契約年度別一覧表	表21	中島A遺跡出土昆虫鞘翅一覧表
表2	財団法人長野県埋蔵文化財センター役員及び職員一覧表	表22	中島A遺跡P地区土壙一覧表
表3	発掘調査の経過一覧表	表23	縄文時代晩期末葉前後I-A群土器観察表
表4	岡谷地区層序表	表24	中島A遺跡縄文時代晩期末葉前後の土器組成表
表5	岡谷地区遺跡地名表	表25	中島A遺跡縄文時代晩期末葉前後の土器の時期別組成表
表6	大久保B遺跡土壙一覧表	表26	中島A遺跡石器組成表
表7	鉛同位体比測定値一覧表	表27	中島A遺跡石鏃の石質表
表8	蛍光X線分析結果	表28	中島A遺跡不安定な素材を用いた石鏃の比率
表9	X線回折分析結果	表29	中島A遺跡石鏃の欠損表
表10	西林A遺跡土壙一覧表	表30	中島A遺跡打製石斧の石質表
表11	大洞遺跡土壙一覧表	表31	中島A遺跡打製石斧の素材表
表12	大洞遺跡遺構外出土石器層位別出土量一覧表	表32	中島A遺跡打製石斧の加工表
表13	大洞遺跡石器出土量一覧表	表33	中島A遺跡打製石斧の側縁加工表
表14	膳棚B(白山)遺跡土壙一覧表	表34	中島A遺跡打製石斧の欠損表
表15	膳棚B遺跡土壙一覧表	表35	中島A遺跡打製石斧の使用痕表
表16	膳棚B遺跡石器出土量一覧表	表36	諏訪地方の主要遺跡一覧表
表17	岡谷断層関係 <sup>14</sup> C年代測定値一覧表	表37	中島B遺跡1号ブロック群器種別組成表
表18	中島A遺跡付近 <sup>14</sup> C年代測定値一覧表	表38	中島B遺跡1号ブロック群個体別資料組成表
表19	中島A遺跡出土樹種一覧表	表39	中島B遺跡2号ブロック群器種別組成表
表20	中島A遺跡出土種子一覧表	表40	中島B遺跡2号ブロック群個体別資料組成表



表41 中島B遺跡実測図掲載石器一覧表 1  
表42 中島B遺跡実測図掲載石器一覧表 2

表43 中島B遺跡実測図掲載石器一覧表 3  
表44 中島B遺跡植物珪酸体の形態別組成表

## 写真図版 (P L) 目次 (別冊)

P L 1	調査遺跡周辺	P L 38	大洞遺跡遺構外出土石器
P L 2	大久保B遺跡遠景・近景	P L 39	大洞遺跡遺構外出土石器
P L 3	大久保B遺跡1号墳墓	P L 40	大洞遺跡遺構外出土石器
P L 4	大久保B遺跡1号墳墓	P L 41	大洞遺跡土器の展開写真
P L 5	大久保B遺跡1号墳墓	P L 42	大洞遺跡遺構外出土石器
P L 6	大久保B遺跡1号墳墓	P L 43	大洞遺跡遺構外出土石器
P L 7	大久保B遺跡2号墳墓	P L 44	大洞遺跡遺構外出土石器
P L 8	大久保B遺跡2号墳墓	P L 45	大洞遺跡遺構外出土石器
P L 9	大久保B遺跡2号墳墓	P L 46	大洞遺跡遺構外出土石器
P L 10	大久保B遺跡2号墳墓	P L 47	大洞遺跡遺構外出土石器
P L 11	大久保B遺跡2号墳墓	P L 48	大洞遺跡遺構外出土石器
P L 12	大久保B遺跡2号墳墓、瑞雲双鸞八花鏡	P L 49	大洞遺跡遺構外出土石器
P L 13	下り林遺跡近景・全景	P L 50	大洞遺跡遺構外出土石器
P L 14	下り林遺跡縄文時代の土器	P L 51	大洞遺跡遺構外出土石器
P L 15	下り林遺跡縄文時代の土器	P L 52	大洞遺跡遺構外出土石器
P L 16	下り林遺跡縄文時代、弥生時代の土器	P L 53	大洞遺跡遺構外出土石器
P L 17	下り林遺跡縄文時代の石器	P L 54	大洞遺跡遺構外出土石器
P L 18	西林A遺跡第1地点近景、1号住居址、第2 地点近景	P L 55	大洞遺跡遺構外出土石器・石製品
P L 19	西林A遺跡遺構出土遺物	P L 56	膳棚A遺跡遠景・近景・出土遺物
P L 20	西林A遺跡縄文時代の土器	P L 57	膳棚B(白山)遺跡遠景・近景、1号住居址
P L 21	西林A遺跡縄文時代の土器	P L 58	膳棚B(白山)遺跡1号住居址、1号石組墓
P L 22	西林A遺跡縄文時代の土器	P L 59	膳棚B(白山)遺跡1号石組墓
P L 23	西林A遺跡縄文時代の石器	P L 60	膳棚B(白山)遺跡1号住居址出土遺物、縄 文時代の遺物
P L 24	西林A遺跡弥生時代の土器	P L 61	膳棚B遺跡遠景・近景
P L 25	大洞遺跡遠景・近景	P L 62	膳棚B遺跡1号住居址、土壙
P L 26	大洞遺跡発掘状況	P L 63	膳棚B遺跡1号集石址、1号河川址、水田址
P L 27	大洞遺跡1号住居址、2号住居址	P L 64	膳棚B遺跡1号住居址及び土壙出土遺物
P L 28	大洞遺跡3号住居址、土壙	P L 65	膳棚B遺跡集石址・ブロック等出土土器
P L 29	大洞遺跡集石炉、土壙	P L 66	膳棚B遺跡縄文時代早期末の土器
P L 30	大洞遺跡ブロック、1号石組墓	P L 67	膳棚B遺跡1号集石址及びブロック出土石器
P L 31	大洞遺跡1号住居址出土遺物	P L 68	膳棚B遺跡遺構外出土石器
P L 32	大洞遺跡2号住居址出土土器	P L 69	膳棚B遺跡遺構外出土石器、木筒
P L 33	大洞遺跡2号住居址及び3号住居址出土土器	P L 70	中島A遺跡遠景・近景
P L 34	大洞遺跡2号住居址及び3号住居址出土遺物	P L 71	中島A遺跡断層・層序
P L 35	大洞遺跡土壙・集石炉出土土器	P L 72	中島A遺跡全景
P L 36	大洞遺跡3号住居址及び土壙・集石炉出土石 器	P L 73	中島A遺跡K・L地区IV層中の材
P L 37	大洞遺跡ブロック出土遺物	P L 74	中島A遺跡材の加工痕、2・3号祭祀遺構等
		P L 75	中島A遺跡単独出土土器、1号祭祀遺構

- P L 76 中島A遺跡ブロック等  
 P L 77 中島A遺跡K・L地区全景  
 P L 78 中島A遺跡縄文時代早期～晩期の土器  
 P L 79 中島A遺跡縄文時代晩期末葉前後の土器  
 P L 80 中島A遺跡縄文時代晩期末葉前後の土器  
 P L 81 中島A遺跡縄文時代晩期末葉前後の土器  
 P L 82 中島A遺跡縄文時代晩期末葉前後の土器  
 P L 83 中島A遺跡2号ブロックの石器  
 P L 84 中島A遺跡縄文時代石器  
 P L 85 中島A遺跡打製石斧接合資料  
 P L 86 中島A遺跡縄文時代土製品・石製品、弥生時  
       代の遺物  
 P L 87 中島A遺跡木製品  
 P L 88 中島A遺跡木製品、種子  
 P L 89 中島B遺跡遠景・近景、土壌  
 P L 90 中島B遺跡2号ブロック群  
 P L 91 中島B遺跡全景  
 P L 92 中島B遺跡1号ブロック群、31号土壌等  
 P L 93 中島B遺跡1号ブロック群出土石器及び接合  
       資料  
 P L 94 中島B遺跡2号ブロック群石器  
 P L 95 中島B遺跡2号ブロック群石器  
 P L 96 中島B遺跡2号ブロック群接合資料  
 P L 97 中島B遺跡2号ブロック群接合資料  
 P L 98 中島B遺跡2号ブロック群接合資料及び剥片  
 P L 99 中島B遺跡2号ブロック群剥片  
 P L 100 中島B遺跡2号ブロック群剥片  
 P L 101 中島B遺跡3号ブロック遺物  
 P L 102 中島B遺跡3号ブロック遺物  
 P L 103 中島B遺跡隆起線文土器群  
 P L 104 中島B遺跡植物珪酸体の走査電顕写真1  
 P L 105 中島B遺跡植物珪酸体の走査電顕写真2  
 P L 106 柳海途遺跡遠景・近景、1号土壌及び出土遺  
       物

# 第1章 調査の経緯と方法

## 第1節 調査の契約

### 1. 発掘調査委託契約

高速自動車道用地内にある埋蔵文化財の発掘調査については「日本道路公団の建設事業等工事施行に伴う埋蔵文化財包蔵地の取り扱いに関する覚書」に準じて実施されるのが通例となっている。それによれば日本道路公団（以下公団という）は事業施行前に県教育委員会（以下「県教委」という）の意見を聴取の上、文化庁との間で保護協議することになっており、その結果記録保存と決定し発掘調査が必要になった場合、公団は県教委に委託して調査を実施することが決定されている。長野県の場合、県独自の発掘調査体制や機関がまだ設置されていないので、公団と県教委の委託契約後、あらためて（勸）長野県埋蔵文化財センター（以下「埋文センター」という）に県教委が再委託する方式がとられている。

中央自動車道長野線（以下「長野線」という）は昭和57年3月の起工式から岡谷市内で本格的工事が施行された。そこで県教委も昭和57年4月から埋文センターを発足させ、長野線の事業に対応することになった。この結果、公団→県教委→埋文センターという委託契約図式ができあがり以降の調査が実施されてきた。ここでは埋文センター初めての報告書となるので契約者及び計画等の書式を以下に掲げておく。

#### 発掘調査委託契約書

昭和57年4月1日

甲 長野県教育委員会

教育長 市村 勲

乙 財団法人長野県埋蔵文化財センター

理事長 市村 勲

長野県教育委員会教育長市村勲を委託者（以下「甲」という）とし、財団法人長野県埋蔵文化財センター理事長市村勲を受託者（以下「乙」という）として、次のとおり委託契約を締結する。

（委託業務）

第1条 委託する業務は次のとおりとする。

- (1) 委託内容 中央道長野線埋蔵文化財包蔵地発掘調査及び整理作業
- (2) 委託期間 昭和57年4月1日から  
昭和58年3月31日まで

（処理方法）

第2条 乙は別添の昭和57年度中央道長野線埋蔵文化財包蔵地発掘調査計画書により委託業務を処理しなければならない。

- 2 乙は前項の計画書に定めのない細部の事項については、甲の指示を受けるものとする。

(委託料)

第3条 委託料は金 円とする。

(契約保証金)

第4条 契約保証金は金 円とし、その納付は免除する。

(調査等)

第5条 甲は、この委託業務の処理状況について、随時に調査し、必要な報告を求めることができるとともに、業務の実施について必要な指示をすることができる。

(成果の報告)

第6条 乙は、第1条の委託期間内に委託業務の成果に関する報告書等を提出しなければならない。

(確認等)

第7条 甲は、乙から成果に関する報告書等の提出を受けた時は、確認したうえ、当該報告書の引渡しを受けるものとする。

2 乙は費用積算調書を作成し、委託期間満了後1箇月以内に甲に提出し、費用の精算をしなければならない。

(委託料の支払い)

第8条 乙は、報告書等を甲に引き渡したときには、甲に対して委託料を請求するものとする。

2 甲は、前項の適法な支払の請求があったときには、その日から1箇月以内に委託料を乙に支払うものとする。

(前金払)

第9条 甲は、前条の規定にかかわらず、乙から当該委託料に係る前金払の請求があり、その必要を認めるときは、前金払とするものとし、支払は 回(第1回 月 円、第2回 月 円、第3回 月 円、第4回 月 円)とする。

2 甲は、乙から前金払いの請求があったときは、その日から30日以内に委託料を乙に支払うものとする。

(業務の変更等)

第10条 甲は、この契約締結後の事情により、委託業務の内容の全部又は一部を変更することができる。この場合において、委託料又は委託期間を変更する必要があるときは、甲・乙協議して変更契約書を作成するものとする。

(購入物件の帰属)

第11条 乙がこの委託契約に基づき甲の費用をもって取得した購入物件等は、すべて甲に帰属するものとする。

(契約の解除等)

第12条 契約の解除その他この契約に定めのない事項については、長野県財務規則に定めるところによるものとする。

この契約を履行しなかったときは、乙は委託料の100分の10に相当する違約金を甲に支払わなければならない。

(秘密の保持)

第13条 乙は、委託業務の処理上知り得た秘密を他人にもらしてはならない。

(疑義の解決方法)

第14条 この契約について甲乙間に疑義のあるときは、甲・乙協議のうえ解決するものとする。

(管轄裁判所)

第15条 この契約について訴訟の生じたときは、甲の事務所の所在地を管轄する裁判所を第一審の裁判所とする。

この契約の成立を証するため、契約書2通を作成し、甲乙記名押印のうえ、各自その一通を保有するものとする。

昭和57年度中央自動車道長野線埋蔵文化財包蔵地発掘調査計画書

1 発掘調査遺跡

番号	遺跡名	現況	用地内面積	57年度調査対象面積	57年度調査面積	備考
1	西林A (岡谷市)	山林	4,770㎡	4,000㎡	4,000㎡	
2	柳海途 ( " )	水田	14,920㎡	500㎡	500㎡	市有地分
3	中島A ( " )	畑	7,450㎡	5,000㎡	5,000㎡	市有地分
4	中島B ( " )	水田	4,100㎡			市有地分
5	下り林 ( " )	山林	350㎡	350㎡	350㎡	工事用道路
	計		31,590㎡	9,850㎡	9,850㎡	

2 委託契約期間

昭和57年4月1日～昭和58年3月31日

3 財団法人長野県埋蔵文化財センター組織

理事長——副理事長——常務理事・理事・監事

(常務理事兼任)

事務局長 (三村忠幸) — 庶務部長 (丹羽長雄)

— 調査第一部長 (神村 透) — \* 調査研究員

— 調査第二部長 (樋口昇一)

\* 調査研究員 (小林至・百瀬長秀・土屋積・小柳義男・和田博秋

井口慶久・関賢司・百瀬久雄)

4 調査日程

発掘準備 昭和57年4月1日～昭和57年4月30日

発掘調査 昭和57年5月1日～昭和57年11月30日

整理作業 昭和57年12月1日～昭和58年3月31日

5 発掘調査行程表

遺跡名	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
西林A				←								
柳海途		←	→									
中島A		←				→						
中島B		←				→						
下り林			←	→								
									整 理 作 業			

6 発掘調査費 金 円 (予算書別紙)

7 その他

報告書は、各遺跡毎の調査が完了した翌年度に一括刊行するものとし、各年度毎の報告書は手書きの概報とする。

以上のように、年度当初県教委と埋文センターとの間で契約が取り交わされて事業が開始されたが、実際には用地買収の遅れや工事行程の変更、遺跡範囲の増減、遺物・遺構出土量の多寡等の諸事情により、発掘調査日程や予算に変更が生ずる場合が多く、年度途中における「契約変更」を通してその適正化を図ってきている。一方、本県においては冬期間現場作業が不可能なため、整理作業が年度後半の中心業務となる。その際、発掘調査の状況によっては整理期間の短縮・延長などもあり、予算化する場合発掘調査、整理作業を厳密に区分できない場合が多い。更に年次によっては、調査が2市町村以上にわたる場合もあり、市町村別に全予算を配分明示できないため、岡谷市分単独の契約事項を記載できないので、57年度以降は全体の契約要項を示し、その中での岡谷市分を注記するにとどめることとする。

年度	No.	遺 跡 名	現況	発掘調査面積㎡	合計 ㎡	契約年額 千円	備 考
昭和五七年度	1	岡谷市 西林 A	山林	4,000㎡	12,670㎡	99,558千円	市有地分 市有地分 市有地分 工事用道路 新発見
	2	〃 柳海途	水田	500㎡			
	3	〃 中島 A	畑	2,900㎡			
	4	〃 中島 B	〃	2,100㎡			
	5	〃 下り林	山林	350㎡			
	6	〃 大久保 B	〃	2,820㎡			
昭和五八年度	1	岡谷市 中島 A	畑	4,300㎡	27,800㎡	142,516千円	面積増加 〃
	2	〃 柳海途	畑	14,530㎡			
	3	〃 西林 A	山林	1,720㎡			
	4	〃 膳棚 B	水田	7,250㎡			
	5～7	塩尻市大原他 2 遺跡		1,380㎡			
昭和五九年度	1	岡谷市 大 洞	山林	2,910㎡	8,460㎡	316,426千円	面積増加
	2	〃 中島 A	畑	2,680㎡			
	3	〃 中島 B	〃	1,590㎡			
	4	〃 膳棚 B (白山)	山林	1,280㎡			
	5～14	塩尻市青木沢他 9 遺跡		59,004㎡			
	15～16	松本市神戸他 1 遺跡		630㎡			
昭和六十年	1～10	塩尻市竜神他 9 遺跡		91,470㎡	242,335㎡	985,586千円	
	11～19	松本市神戸他 8 遺跡		149,665㎡			
	20	豊科町上手木戸遺跡		1,200㎡			
昭和六一年度	1	塩尻市吉田向井遺跡		500㎡	126,840㎡	757,353千円	
	2～8	松本市下神他 6 遺跡		124,340㎡			
	9	豊科町上手木戸遺跡		2,000㎡			
		〈報告書作成〉				48,930㎡	
		岡谷市大久保 B 遺跡		2,820㎡			
		下り林 〃		350㎡			
		大 洞 〃		2,910㎡			
		西林 A 〃		5,720㎡			
		膳棚 B 〃	}	8,530㎡			
		膳棚 B (白山) 〃					
		中島 A 〃		9,880㎡			
		中島 B 〃		3,690㎡			
		柳海途 〃		15,030㎡			

表1 中央自動車道長野線埋蔵文化財調査契約年度別一覧表

以上のように岡谷市内での調査は8遺跡、発掘面積合計48,930㎡、発掘調査期間3年間を費し、その整理作業を含む報告書刊行までには5年間を要したことになる。

## 2. 契約対象遺跡と契約業務の経過

岡谷市内の発掘調査対象遺跡は西林A他7遺跡であるが、各年度とも当初計画に変更があり、その間の経過について記録すべき点もあるので、年度別にふれておきたい。

昭和57年度については、用地買収の未解決状態が年度当初より課題とされていたため、柳海途・中島A・中島Bの3遺跡については、用地内調査対象範囲のうち、岡谷市が先行取得した部分の調査に止まらざるをえなかった。また西林A遺跡も同じ理由で全面積を調査できず前記3遺跡同様昭和58年度へ継続調査となった。なお下り林遺跡については用地内でないが、工事用道路に含まれていたため県教委・公団の協議の結果調査することになった。

昭和57年度での大きな変更は大久保B遺跡の新発見による追加であろう。長野線用地内の大久保地籍内に遺物の散布があり、遺跡の可能性が強いとの情報に基づき、昭和57年7月20日(火)、県教育委員会による岡谷市教育委員会との確認調査が実施された。これには日本道路公団松本工事事務所及び当埋蔵文化財センターも立ち合った結果、遺跡台帳登録の「大久保遺跡」とは別個の縄文時代中期ころの遺跡として確認された。そこで早速関係各機関協議の上、県教委は8月30日付で公団へ契約変更の協議をし、11月1日に契約変更がなされた。その折、用地内面積は4,700㎡であったが遺物出土状況から約60%の2,820㎡が調査されることになり、調査期間も9月～11月発掘、12月～3月整理作業とすることになった。

昭和58年度では、昭和57年度の調査結果から用地内面積が増加した分があったが、用地買収が進まず全部が発掘できず昭和59年度へ引継ぐ遺跡もあり、当初契約にはなかった塩尻市3遺跡の発掘が追加され、昭和59年1月に契約変更がなされた。また、追加した塩尻市大原遺跡も用地買収や登記問題のため調査ができなかった。

岡谷市4遺跡中、昭和58年度で終了したのは面積増の柳海途遺跡と当初通りの膳棚B・西林A2遺跡であり、中島B遺跡は用地問題で年度内調査ができず、中島A遺跡ともども昭和59年度へ更に繰り延べせざるをえなかった。

昭和59年度になると岡谷地区の用地買収問題等が進展し、ようやく3年間にわたる岡谷市内の調査が終了することになった。大洞・中島A・中島B遺跡のうち、中島B遺跡のみ遺跡範囲が意外と拡大せず、用地内面積の減少から調査面積も少なくなった。この年における岡谷市分の契約で課題となったのは、膳棚B遺跡であった。前年度調査以来同一用地内に古墳らしい遺構が注目されていたので、県教委ほか関係各機関立ち合いのもと筑波大学岩崎卓也教授の現場調査が実施され、古墳とは判断できないが確認調査の必要が示され、1,280㎡の調査面積が追加変更契約の対象となり、一応膳棚B遺跡内ではあるが、立地や性格も異なるので「膳棚B(白山)遺跡」と仮称し、同一遺跡内での契約方式をとった。

また、塩尻トンネル岡谷側出入口付近は長原遺跡として周知されており、その一部が用地内にかかっていたが、遺跡周辺部にあたり面積も少なかったので、昭和59年9月13日県教委・公団・市教委・埋文センター4者による立ち合い調査を実施し、記録保存の必要なしとの結論となり調査遺跡から除外された。

## 第2節 調査体制

長野線にかかわる埋蔵文化財の保護については、既に昭和50年代当初より県当局による対策がその都度実施され、公団による各区間の路線発表に応じて、対象となる遺跡や面積の概要が報告されてきた。それによれば岡谷市～須坂市間に58遺跡があり、約70万㎡の面積が対象となるとされた当初の概要は、路線発表後の各種調査が進むにつれ、例えば全路線の約3分の1に当たる岡谷市～豊科町間約35km間でも、34遺跡、対象面積40万㎡という当初見積り以上の半分以上の数字となり、西宮線をはるかに越える事業量となることが確実視されてきた。

こうした事実をふまえ、県当局は西宮線当時の「長野県中央道遺跡調査会」を発展解消し新組織による対応を早くから計画し、昭和57年4月から「財団法人長野県埋蔵文化財センター」を発足させることになった。以下設立にいたる経過を簡単に紹介したい。

- 昭和45年ころ 西宮線建設に伴う埋蔵文化財調査に対し、各方面より埋文センター設立の要望が出はじめる。
- 〃 54年ころ 市町村教育長会議等の協議題に県による埋文センター設立問題が提出されはじめる。
  - 〃 55年10月 県教委が昭和56年度設置を目標に、予算要求等の準備をはじめめる。
  - 〃 56年2月 昭和56年度当初予算の知事査定で埋文センターの昭和56年度設置は見送られる。その理由として西宮線事業が同年度まで、また長野線にかかわる埋蔵文化財調査が昭和57年度以降であることなどがあげられた。
  - 〃 56年10月 昭和57年度からの長野線埋蔵文化財保護体制についての検討がはじまる。
  - 〃 〃 11月 県考古学会からの県立埋文センター設置要望署名が知事・教育長に提出される。
  - 〃 〃 11月 県教委で設置のための予算、組織等具体的検討はじまる。
  - 〃 〃 12月 県考古学会長から県立埋文センター設置の請願書、県議会に提出される。
  - 〃 57年2月 昭和57年度当初予算知事査定で財団法人による埋文センター設置決る。直ちに昭和57年度長野線関係につき高速道局・公団との調整に入る。

### ○理事会

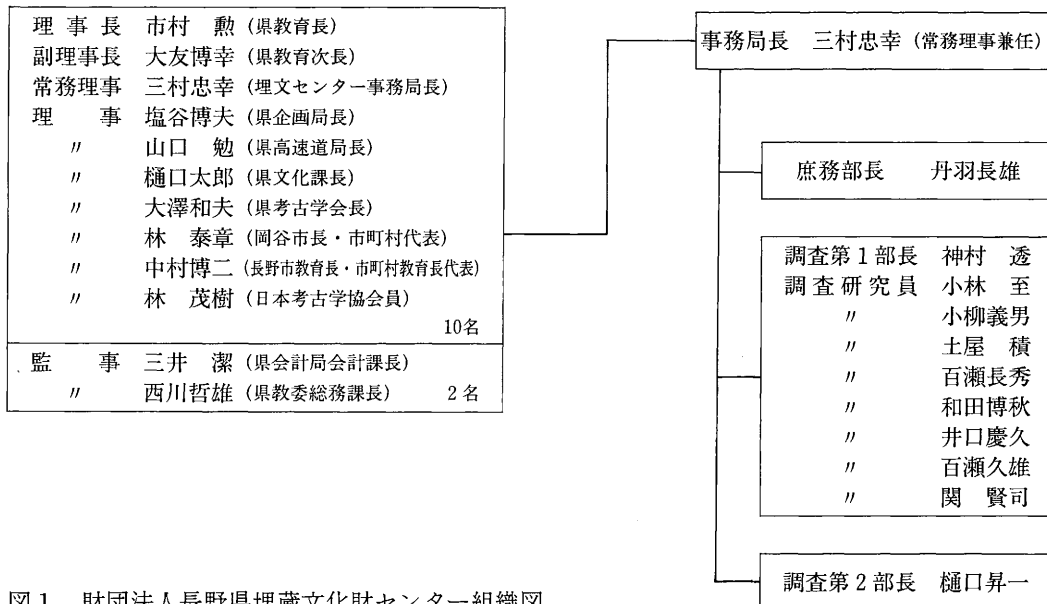


図1 財団法人長野県埋蔵文化財センター組織図



職名	昭和58年度	昭和59年度	昭和60年度	昭和61年度
理事長	市村 勲(県教育長)	市村 勲(県教育長)	村山 正(県教育長)	村山 正(県教育長)
副理事長	木鋪 巖(県教育次長)	酒井 盛夫(県教育次長)	河原田幸雄	高橋 弘典
常務理事	三村 忠幸(県教委参事 局付)	三村 忠幸	三村 忠幸	三村 忠幸
理事	前田 豊彦(県企画局長) 太田 勝己(県高速道局長) 牧内 哲夫(県教委文化課長) 大澤 和夫(県考古学会長) 林 泰章(岡谷市長・市町村代表) 中村 博二(長野市教育長・市町村教育長代表) 林 茂樹(考古学研究者)	前田 豊彦(県企画局長) 太田 勝己(県高速道局長) 牧内 哲夫(県教委文化課長12月辞任) 宮下 哲(県教委文化課長12月就任) 大澤 和夫(県考古学会長) 小野 光洪(塩尻市長・市町村代表) 中村 博二(長野市教育長2月就任) 奥村 秀雄(長野市教育長2月就任) 林 茂樹(考古学研究者)	池田宗兵衛(県企画局長) 小山 一郎(県高速道局長) 宮下 哲(県教委文化課長) 大澤 和夫(県考古学会長) 小野 光洪(塩尻市長) 奥村 秀雄(長野市教育長) 林 茂樹(考古学研究者)	池田宗兵衛(県企画局長) 小山 一郎(県高速道局長) 宮下 哲(県教委文化課長) 大沢 和夫(県考古学会長7月辞任) 森嶋 稔(県考古学会長7月就任) 和合 正治(松本市長) 奥村 秀雄(長野市教育長) 林 茂樹(考古学研究者)
	青木 了(県会計局会計課長) 西川 哲雄(県教委総務課長)	青木 了(県会計局会計課長12月辞任) 神野 久雄(県会計局会計課長12月就任) 福沢 正(県教委総務課長)	神野 久雄(県会計局会計課長) 萩原 秋夫(県教委総務課長)	関 四郎(県会計局会計課長) 杉田 貞夫(県教委総務課長)
事務局長	三村 忠幸(常務理事兼任) 山崎 昭三(58年10月着任)	山崎 昭三	山崎 昭三(60・7・4 転出) 西沢 宣利( " 着任)	西沢 宣利
総務部長			堀内 計人	堀内 計人
庶務部長	丹羽 長雄(58年10月転出) 堀内 計人(58年10月着任)	堀内 計人		畑 幹雄(60・10・1 付佐久事務所着任)
主任				藤森 幸枝
主事	熊谷由紀子	熊谷由紀子	六川 直利 笠井 浩 宮越ゆり枝(60・10・31退職)	六川 直利 笠井 浩
調査第1部長	神村 透	河西 清光	樋口 昇一	樋口 昇一
調査第2部長	河西 清光	春原 正毅	丸山敬一郎	丸山敬一郎
調査第3部長			春原 正毅	樋口 昇一(兼務)
調査研究員	小菅 敏男 小林 至 唐木 孝雄 小柳 義男 市沢 英利 百瀬 長秀 小松 宏昭 三上 徹也 原 明芳 井口 慶久 百瀬 久雄 関 賢司 田中正治郎 鈴木 道徳	小菅 敏男 小松 望 小林 至 遠山 芳彦 唐木 孝雄 小柳 義男 市沢 英利 小松 宏昭 青柳 英利 小平 和夫 小口 徹 金原 正 小林 俊一 三上 徹也 原 明芳 百瀬 久雄 関 賢司 井口 慶久 田中正治郎 春日 雅博 鈴木 道徳	小菅 敏男 遠山 芳彦 小松 宏昭 百瀬 長秀 青柳 英利 金原 正 三上 徹也 関 賢司 井口 慶久 市村 勝己 望月 映 春日 雅博 鈴木 道徳 齊藤 正善 関 全寿 中島 経夫 田川 幸生 中村 千尋 福島 厚利 松田 青樹 小林 上 西牧 尚人 小松 望 高野 博正 春日 文彦 唐木 孝雄 百瀬 新治 市沢 英利 岡沢 秀紀 北原 正治 小口 徹 小室 邦夫 小平 和夫 伊藤 隆之 小林 俊一 和田 文人 井上 城典 飯沼 潤 原 明芳 百瀬 久雄 石上 周蔵 田中正治郎 馬場 長光 平林 彰 市川 隆之 黒岩 龍也 中野 亮一 寺内 隆夫 伊藤 友久 上田 典男 野村 一寿 綿田 弘実 近藤 尚義 岡村 秀雄 河西 克造 寺島 俊郎 百瀬 忠幸 宇賀神誠司 大竹 憲昭	中村 千尋 福島 厚利 関 全寿 田川 幸生 松田 青樹 中島 経夫 西牧 尚人 小林 上 小松 望 高野 博正 春日 文彦 青沼 博之 唐木 孝雄 百瀬 新治 市沢 英利 白田 武正 岡沢 秀紀 北原 正治 小平 和夫 伊藤 隆之 小口 徹 井上 城典 原 明芳 和田 文人 小林 俊一 竹内 稔 百瀬 久雄 石上 周蔵 馬場 長光 寺島 俊郎 太田 典孝 近藤 尚義 黒岩 龍也 百瀬 長秀 青柳 英利 金原 正 三上 徹也 市村 勝己 新海 節生 豊田 伸一 春日 雅博 望月 映 綿田 弘実 齊藤 正善 市川 隆之 二木 明 中野 亮一 野村 一寿 中浜 徹 山上 秀樹 大竹 憲昭 西山 克己 平林 彰 寺内 隆夫 上田 典男 伊藤 友久 百瀬 忠幸 河西 克造 岡村 秀雄 宇賀神誠司
				百瀬 陽三 尾川 秀吉

表2 財団法人長野県埋蔵文化財センター役員及び職員一覧表

〃 〃 3月 上旬に昭和57年度分の遺跡調査面積がほぼ固まり、それに伴う埋文センターの人員配置計画が決る。財団法人の設立準備進む。下旬、大規模開発事業に対処する埋蔵文化財の保護体制の整備、調査及び研究、保護思想の普及等の適切な実施をねらいとした財団法人長野県埋蔵文化財センターが、主たる事務所を長野市長門町1097旧県立図書館跡において認可された。引続き第1回理事会により、昭和57年度事業計画、収支予算、従たる岡谷調査事務所の設置などが決った。

以上のような経過をたどり、4月1日には職員(県出向職員一行政職2名、教職員10名)の発令があり、4月8日には岡谷調査事務所の開所式を挙行し実質的なスタートがきられた。なお岡谷調査事務所は、調査遺跡に近く、好条件を備えた市中心部の「市労働会館」が市当局の配慮で借用できた。昭和58年度になると調査遺跡が塩尻市に及び、それ以降は松本平の調査が主要業務となるため、年度当初より事務所新設の計画が立案され、候補地選定に入った。その結果県有地である現在地にプレハブによる新事務所が4月完成し、発掘調査の終了した12月、全員が「松塩筑調査事務所」へ移転した。

発足当初埋文のセンターの組織及び構成を以下に挙げ、昭和58年度以降については一覧表としてまとめておきたい。

以上のような体制で現在にいたっている。体制上の年度別変化では、調査研究員が8名→14名→21名と昭和59年度まで増加しつつあったが、次の昭和60年度はまず役員で副理事長が常勤となり、調査部長も3名に増員、調査研究員は一挙に59名と倍増、調査員も2名加わるなど大幅な人員増が図られた。

なお、発掘調査に当っては、昭和57年度より調査研究員3名1班を原則とし調査を実施することとし、岡谷地区の場合は遺跡の規模、調査期間等の関係でほぼこの原則が守られてきたが、昭和60年度以降は前述したような遺跡規模の増大、遺跡内容の多様化などのため、10名以上で班編成せねばならぬ事態も生じてきた。班編成のあり方を含めて今後の研究課題であろう。



## 第4節 調査の方法

### 1. 発掘調査の方法

#### (1) 調査方針

当埋文センターの受託事業は、広範囲を継続的に調査することになることが予想されるので、一定の調査方針に従って、共通した方法をとる必要がある。岡谷地区の調査では、当埋文センターが発足直後という事情もあって明文化した方針を持たずに調査に臨んだが、実質的には共通方針に基づいて調査を進めた。その方針は当初より一貫していたわけではなく、状況に即して工夫し変更した。その詳細について、一般的に行われている方法に準ずる部分については、述べる余裕はないが、調査報告をまとめるに当たって必要な事項については以下に記述しておきたい。

#### (2) 遺跡名称と記号

遺跡名は長野県教育委員会作成の遺跡台帳に従う。また記録の便宜を図るため、遺跡を記号で表示する。遺跡記号はアルファベット(大文字)3文字で表記する。一番目は県内を9地区に分けた地区記号、2番目と3番目は遺跡名の頭文字等から取った略号である。旧諏訪郡全体をG地区としたため、岡谷地区の遺跡記号はすべてGで開始される。例えば大久保B遺跡はGOKとし、各種の記録や遺物の注記はこの記号を用いている。各々の遺跡記号は第3章各節で示す。

#### (3) トレンチ調査の方法と視点

調査遺跡は契約以前に試掘調査が行われていない。従って初めから面的調査を行うのではなく、トレンチ調査によって遺跡の性格をつかみ、面的調査の範囲を決定し、調査を進めることになる。

トレンチは地形に合わせて設定し、遺物包含層や遺跡の埋没状況を把握した。地層の分層は、層位学的区分を優先し、土壌学的区分を援用することとしたが、徹底を欠いた部分がある。昭和58年度以後は地質学専門の調査研究員が加わったため、分層はかなり明確になった。層序はトレンチ相互を比較し、同一堆積環境毎に層名称を与え、層の面的広がりや把握し、地形形成過程の復元も試みた。

#### (4) 面的調査

トレンチ調査の結果に基づき、引き続き面的調査を行った。表土剥ぎには重機を用いたが以後は人力による手作業とした。遺構や遺物ブロックの検出までは主としてジョレンを用い、精査には移植ゴテや両刃鎌を主として用いた。面的調査の開始とともにグリッドを設定し、記録や遺物取り上げの便を計った。面的調査は層別に実施し、遺構検出面ごとに微地形測量を行った。面的調査は可能な限り対象範囲を区分けせず、同時に全面に着手した。

#### (5) 遺構の調査

遺構や遺物ブロックの調査は一般的な方法に依っており、特に記すことはないが、竪穴住居址の床下の調査は十分とはいえない。遺構の名称は略号を用いた。記録や取り上げの便を計るのと、検出時に遺構の性格まで考慮した名称を与えるのには無理がある場合が予想されたため、記録や遺物の注記には略号を用いてある。岡谷地区で使用した略号は、SB(建物址、住居址)、SD(溝址)、SF(火床、炉址)、SH(配石址、集石址)、SK(土壇)、SX(その他、不明)である。

#### (6) 遺物の取り上げ

包含層出土遺物の多くは、グリッド別、層位別に取り上げた。遺構内遺物や遺物ブロック出土遺物は、出土地点の座標・層位・標高を記録して取り上げたが、必要に応じて図化、写真撮影も行った。取り上げ

記録は実測図に記入したが、昭和58年度からは取り上げ台帳を併用した。

#### (7) その他

必要に応じて専門家を招聘して指導を受けた。また指導結果に基づき、当初の調査計画を変更し、調査に遺漏なきを期した。発掘調査中は週一回調査速報を作成配布し、作業員の方の理解と認識向上に努めた。

## 2. 記録の方法

### (1) 測量

#### ① 原則と基準点

測量は国土座標のメッシュに従うことを原則とした。調査対象地域は、その第Ⅷ測量系に属する。座標の基準点は座標値の判明している遺跡内の1点とした。具体的には日本道路公団の工所用杭の1つを選んで基準点とし、複数の工所用杭の座標値から座標北を算出し、座標メッシュの方向に一致した基準線を設けた。膳棚B、中島A、中島B、柳海途の4遺跡は同一の基準点を用いた。各遺跡は、この基準点(NS0・EW0)からの座標で測量を行っている。

標高はやはり日本道路公団の工所用レベル、またはレベル値のある工所用杭を基準にした。

#### ② 大地区とグリッド設定

調査の便を図るため、基準線を軸に50m方眼の大地区を設定し、大地区内を2m方眼に区切ってグリッドとした。大地区名は遺跡の西北から東南に向かってA・B・C……と命名した。グリッドは大地区の西北隅を起点として、Y軸方向をA～Y、X軸方向を1～25とし、両者を組み合わせて名称とした。なお、膳棚B、中島A、中島B、柳海途の4遺跡全体を統一して大地区を設定した。

#### ③ 測量の方法

遺構の測量と遺物の地点計測は遣り方測量によった。水系は4mメッシュとした。地形測量は一部は遣り方測量に、他はトラバース測量によった。発掘域や土層図のポイントは、光波測距儀を用いて地点を計測し、後に作図した。以上の測量は、測量業者には一切委託していない。

### (2) 写真

撮影にはマミヤRB6×7を主に使用し、ニコンFM2を併用した。ともにモノクロネガとカラーライドを撮影してある。遺構や景観の撮影はすべて調査研究員が行った。

### (3) その他

発掘途中の所見は遺構カードに記入した。経過については調査日誌に記入した。

## 3. 整理の方法

### (1) 発掘記録の整理

発掘調査終了後の整理作業は、発掘記録の整理を最優先させた。実測図、カード類から遺構別に記録を集め直し、誤りを訂正し最終所見を加える作業は、年度内に終了させることにした。写真は、発掘調査中からネガフィルムはネガポジアルバムに、スライドはファイルに整理して、撮影状況等を記入した。

### (2) 遺物の整理と記録

遺物の整理は、調査研究員の指導下に作業員の手で実施した。注記は、遺跡記号、遺構略号、グリッド名、取り上げナンバー、層位を記入した。遺物の記録は調査研究員が行ったが、拓本や図化の一部は作業員によった。遺物は観察・分類の上、選択的に図化した。遺物の撮影は主として調査研究員が当たったが一部を木下平八郎氏に依頼した。カメラは、マミヤRB6×7を用いた。

### (3) 記録と遺物の保管

発掘記録は実測図と写真に集約し、規則的に配列して検索に備えた。遺物の記録も同様である。遺物は、長期的に収蔵可能な施設をもたないため、テンバコに仮収納した。金属製品や木製品は、一部を半永久保存処理し、他は応急の保存処理に留めてある。前者の一部は外部機関に委託し、他は当埋文センター独自に実施した。

## 4. 指導・助言等

調査に当たっては多くの方々から指導・助言等を賜わり、また鑑定や保存処理をお引受けいただいた。具体的には、各遺跡の地質学的所見、発掘調査方法、遺物の整理方法等の指導・助言、出土遺物や動植物遺体の鑑定と分析、大久保B遺跡出土鏡の保存処理などである。それらの内容の一部は本文中で報告したり、記名の原稿として掲載させていただいたが、すべてを詳細に報告するわけにもいかないので、失礼ながら、ここに御芳名だけ記し、感謝の意を表したい。

相田薫、会田進、青木繁夫、赤羽義洋、麻生優、安孫子昭二、池谷信之、石川日出志、石野博信、泉拓良、井上和人、今村啓爾、岩崎卓也、梅村弘、大参義一、岡村道雄、岡谷断層発掘調査研究グループ、織笠昭、学習院大学木越研究室、加藤稔、上条重利、亀井正道、鬼頭清明、木下平八郎、栗島義明、小池孝、国学院大学考古学研究室、小坂共栄、小島俊彰、小林三郎、小林達雄、小林比佐雄、近藤義郎、近藤錬三、斉藤幸恵、酒井潤一、佐々木洋治、下条信行、白石浩之、鈴木忠司、鈴木保彦、須藤隆司、砂田佳弘、瀬川裕市郎、高尾好之、高林重水、高見俊樹、田中琢、辻本崇夫、勅使河原彰、東京国立文化財研究所、東郷正美、東北歴史資料館、戸沢充則、鳥羽嘉彦、長崎元廣、中島豊志、中野政樹、奈良国立文化財研究所、西沢寿晃、林賢、林茂樹、松沢亜生、松下テレグインジャパン社、松下利定、馬淵久夫、光谷拓実、宮坂光昭、宮崎博、宮下健司、明治大学考古学博物館、柳沢和明、山形大学考古学研究会、山田晃弘。

## 5. 編集刊行の方法

### (1) 編集方針

本書を編集するに当たり以下の方針に基づくことにした。

- i 各遺跡の評価を下すまでを報告者の責任と考える。
- ii 遺跡、遺構、遺物の検出状況を重視した組み立て方とする。
- iii 岡谷地区（一部は塩尻地区も含め）全体が時期別に通観できるような分担体制とする。
- iv 遺物はできる限り分析して掲載し、煩雑な個別データの羅列を避ける。

### (2) 土器の記述

出土土器のうち、比較的まとまった資料については独自に分類し分析を試みた。具体的には、①縄文時代早期前葉～中葉の土器(押型文土器等)、②早期後半～前期初頭の土器(貝殻条痕文土器等)、③前期末～中期初頭の土器、④晩期末葉前後の土器、⑤弥生時代中期初頭の土器を対象とし、①②は第3章第2節で、③は第4節で、④⑤は第8節で検討し、それぞれで与えられた分類名称を用いて記述した。分類対象としなかった土器は、一般的な型式概念に従って記述した。

土器の分類は、岡谷市梨久保遺跡の分析方法〔三上徹也1986〕を参照し、おおむね準拠した。

各時期とも「群」・「類」・「種」という概念で分類した。「群」は各時期にみられる系統的なまとまりである。「類」は「群」の中にみられる時間的なまとまりである。「種」は「類」の中にみられるさらに小さなまとまりで、小さな時間差や、バリエーションであろうと思われる。

本書で検討対象とする土器は時間幅が大きく、研究史、研究状況、資料上の特性に差がある。担当者に

よって「群」「類」「種」の概念に微妙な差があり、さらに別の分類概念を加えた場合もあることを了解されたい。

(3) 石器、石片の記述

縄文時代の石器、石片は、原則として以下のような区分、配列に従って記述した。

- 1. 石鏃
  - 無茎鏃 — 凹基・平基・凸基
  - 有茎鏃
- 2. 石槍
- 3. 石錐
  - つまみを有する石錐
  - 棒状の石錐
- 4. 石匙
  - 横型
  - 縦型
- 5. スクレイパ
  - 片面加工
    - 刃部が直線状
    - 刃部が外湾状
    - 刃部が内湾状
  - 両面加工
- 6. ピエス・エスキュー
- 7. 小剥離痕のある剥片
- 8. 打製石斧
  - 短冊形
  - 撥形
  - 分銅形
- 9. 横刃形石器
- 10. 粗製大形石匙
- 11. 磨製石斧
  - 定角式
  - 乳棒状
  - 局部磨製
- 12. 礫器
  - 両刃
  - 片刃
- 13. 石錘
- 14. 磨石・凹石
  - 磨石
  - 凹石
  - 磨石+凹石
  - 特殊磨石
- 15. 敲石
- 16. 砥石
- 17. 石皿
- 18. その他の石器
- 19. 剥片・碎片
- 20. 石核
- 21. 原石

参考文献

三上徹也 1986 「土器の分類と編年対比」『梨久保遺跡』 岡谷市教育委員会

## 第2章 岡谷地区の概観

### 第1節 岡谷市の地質学的環境

#### 1. 地形と地質

##### (1) 概況

諏訪盆地はその西縁を走る糸魚川—静岡構造線（以下、糸静線と略す）と、盆地の東端を走る糸静線に平行な断層との間の地溝帯にできた構造的盆地である。

岡谷市の地形は、北部、西部及び南部の二ツ山山地、高ボッチ山地、塩嶺山地、川岸山地、湊山地の各山地と、横河川、塚間川の扇状地、湖岸沖積地、天竜川沿いの段丘地形等にわけられる。

二ツ山山地、高ボッチ山地は、三波川系の変成岩や蛇紋岩といった古期岩類や、新第三紀中新世の緑色凝灰岩層、緑色凝灰岩を貫く石英閃緑岩類及び、それらをおおう洪積世前期の塩嶺累層よりなる。開析が進み、深い谷筋がいくつも刻まれている。市街地を流れる横河川、塚間川、大川はこれらの山地を源としている。横河川沿いは、中央構造線の一部といわれる横河川断層が通っている。

川岸山地は、天竜川右岸と左岸では様相を異にする。右岸の山地は、粘板岩を主とする古生層及び、それをおおう塩嶺累層よりなり、特に古生層の分布域は開析が進んでいる。一方、左岸は、塩嶺累層よりなり、高原状のゆるやかな地形となっている。

湊山地は、塩嶺累層よりなるが、東縁を糸静線が走っているため、諏訪湖に沿って急な断層崖を形成している。

岡谷市街から長地地区に発達する扇状地は、横河川、塚間川、大川によって形成された複合扇状地である。これらは、ローム層の被覆状態や各地形間の高度差によって、古い方から、上の原、今井、長地、沖積の4つの面に区分される（図3）。

##### i. 上の原面

横河川沿いの標高850～900mに存在する。現河床面からの比高は約30mである。砂礫層の上に約3mの小坂田ローム層、波田ローム層をのせる。砂礫層は、粗粒砂を基質にし、こぶし大の亜角礫や亜円礫を主体とする。しばしば粗粒の砂、粘土層をはさむ。砂、粘土の各層は、20～25cm、礫層は安山岩を主体とし、緑色片岩、黒色片岩、蛇紋岩、緑色凝灰岩などを交える。小坂田ローム層は、上の原小学校裏のがけでよく観察され、そこでは礫まじりロームの上位に浮石質のPm-Iをのせる。Pm-Iに含まれる浮石はうす茶色の紡錘形をしており、数mmの大きさである。

##### ii. 今井面

横河川右岸と、長地の山際に発達する。標高は800～850m、現河床面からの比高は約10mである。砂礫層の上に約0.5～1mの波田ローム層をのせている。砂礫層は最大40cmの亜円礫を主体とし、基質は粗粒砂～シルトである。礫種は、横河川中流の複輝石安山岩（塩嶺累層）を主体とする。礫層の間には数10cmの厚さの粘土層をはさむ。波田ローム層は、長地中村の山際で観察される。かつ色を呈し、オレンジ色のスコリアを含んでいるのが特徴である。



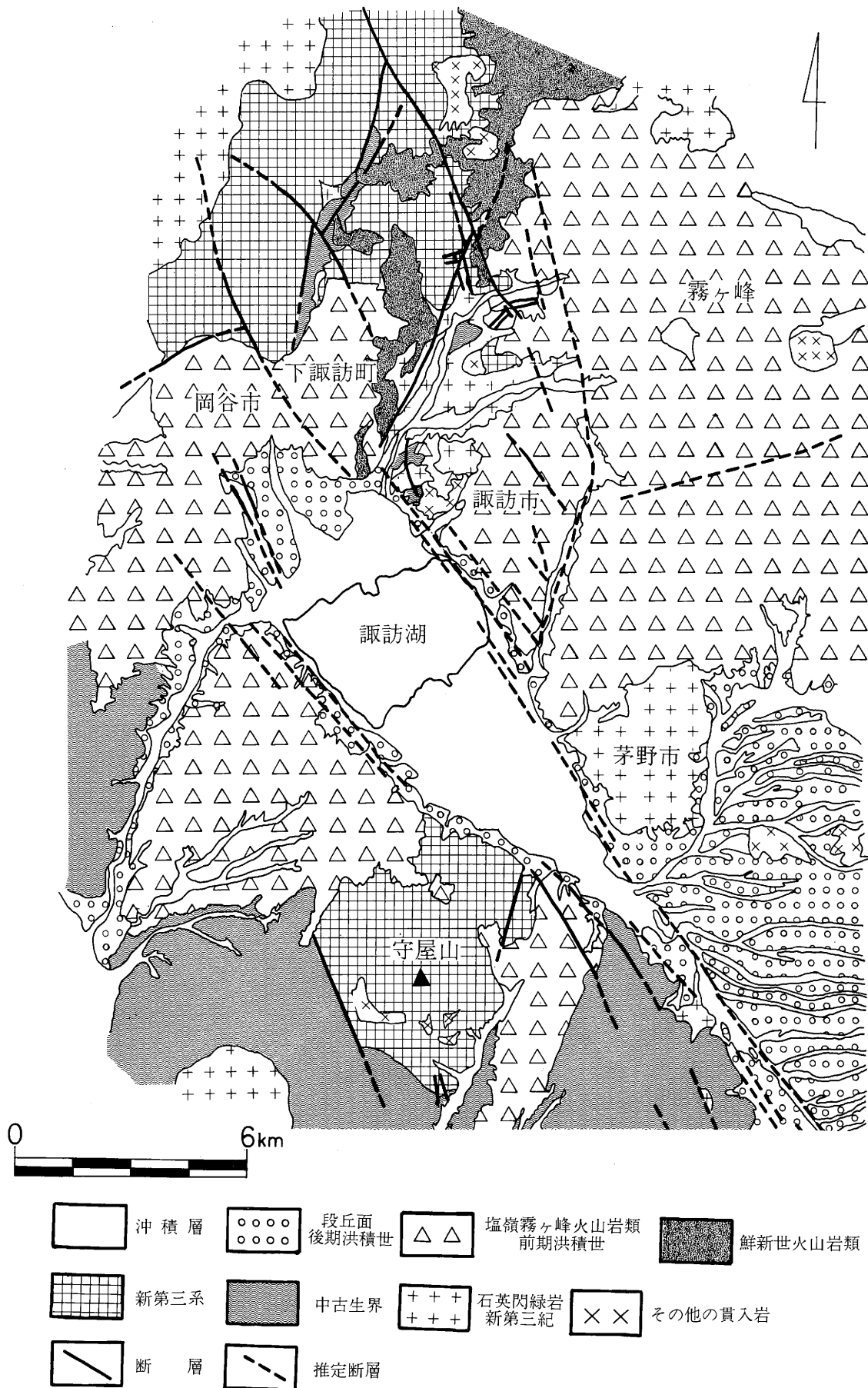
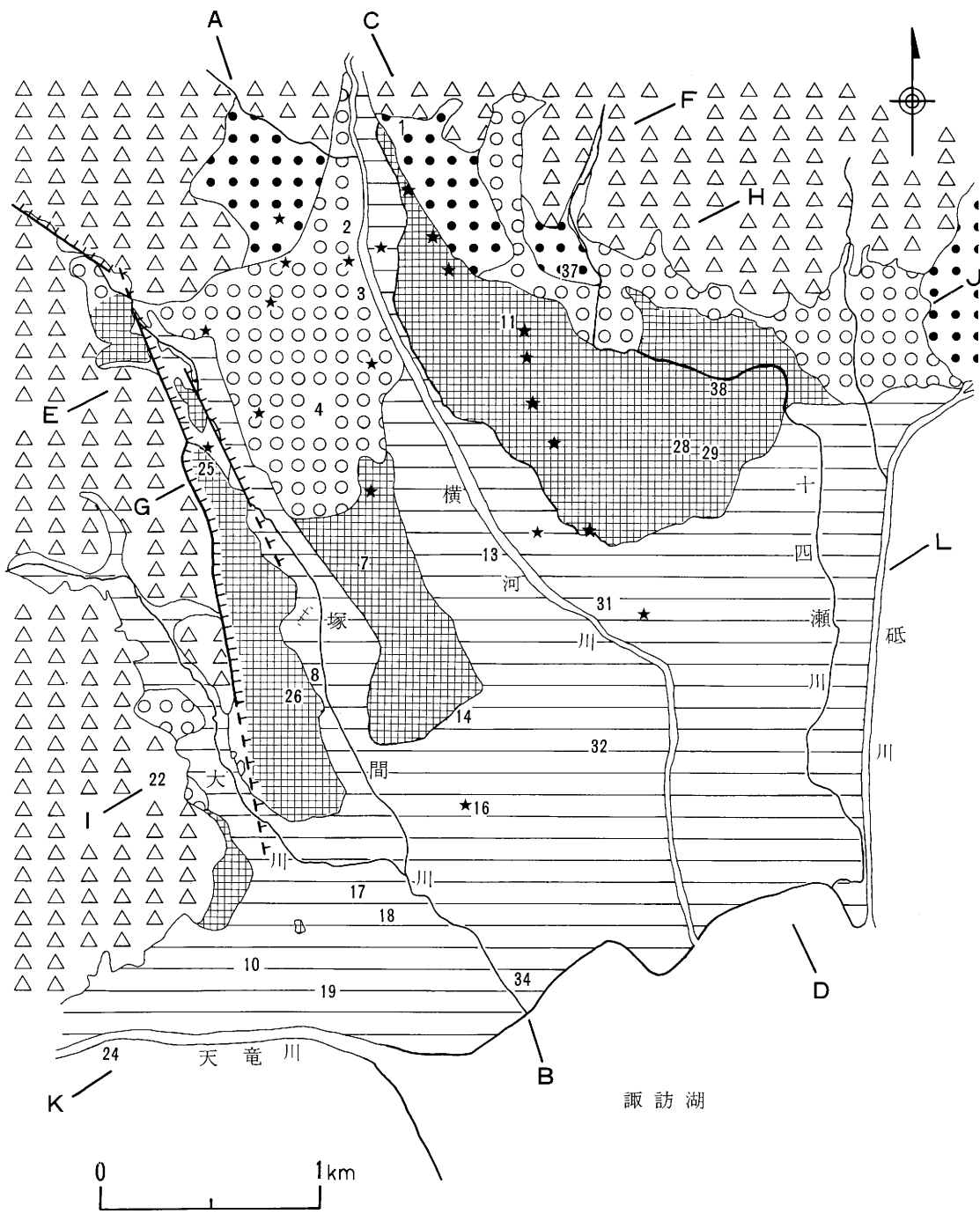


図2 諏訪盆地周辺の地質概略図 (1:150,000)



- 1 沖積面 2 長地面 3 今井面 4 上の原面
- 5 塩嶺累層 6 断層 7 推定断層 8 ★ 電気探査測定地点
- 数字：ボーリング位置

図3 岡谷地区地形区分図 (1 : 30,000)

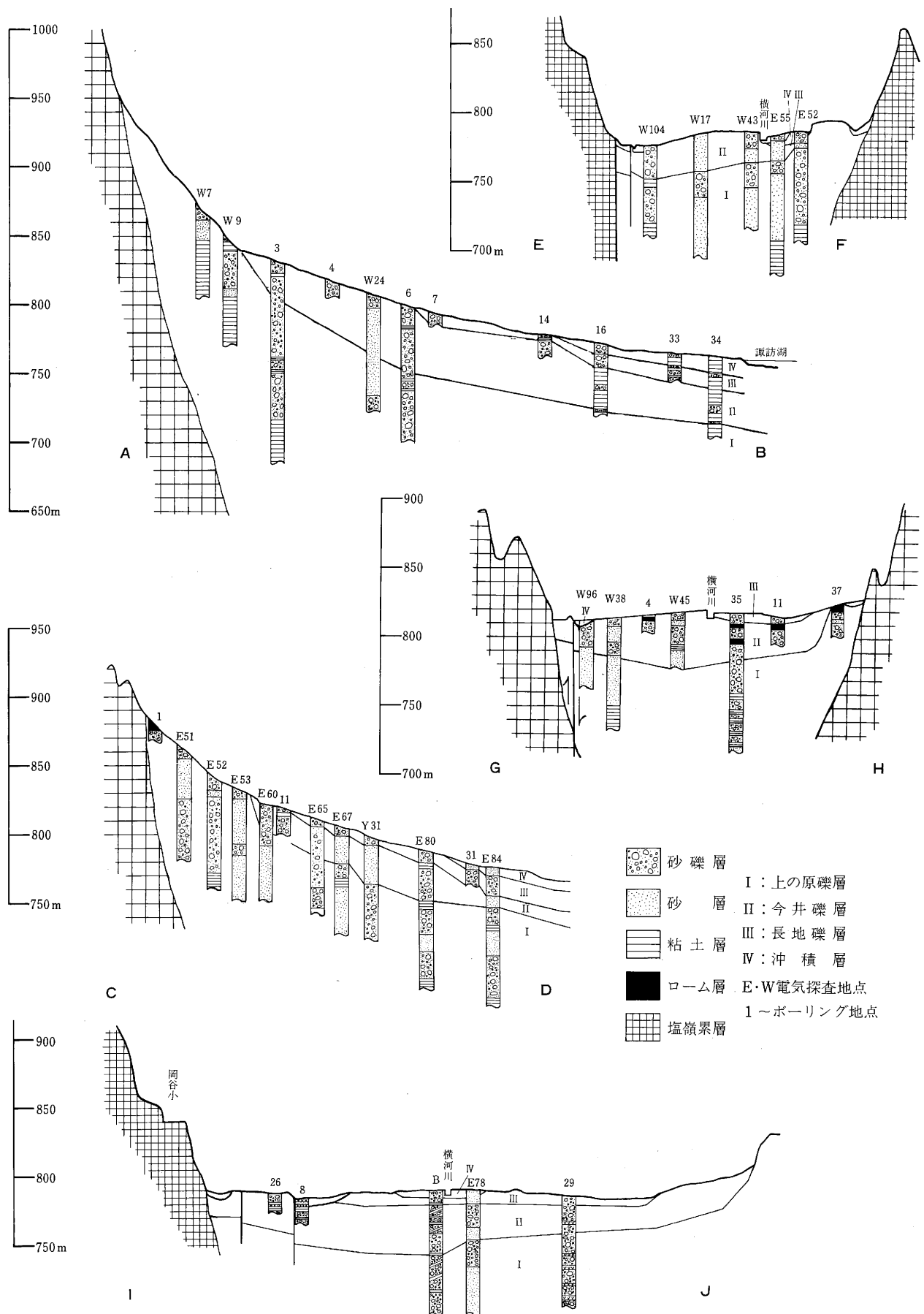


図4 岡谷地区地質断面図1

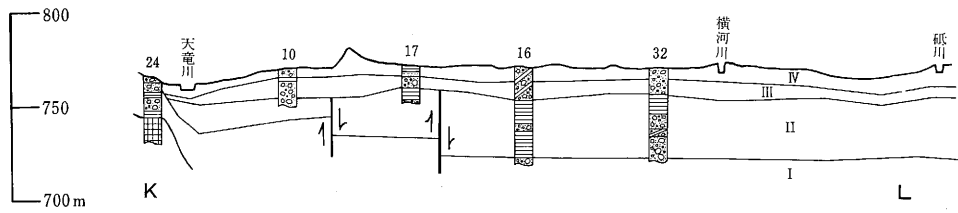


図5 岡谷地区地質断面図2

iii. 長地面

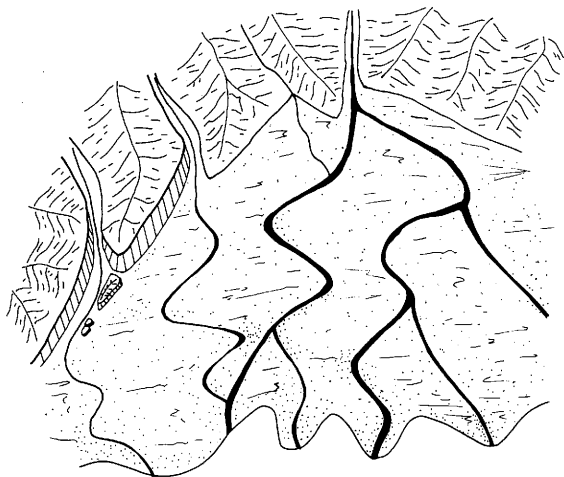
横河川兩岸と塚間川沿いの標高780~800mの部分に発達する。現河床との比高は約5mである。塚間川右岸の長地面は、塚間川沿いに小丘が直線状に並ぶこと、また西方の山地との境界が直線状であり、かつ山地との比高が20m以上あることから、糸静線の断層運動の結果生じたものと推定される。この面は、他の面と同じく砂礫層よりなり、ローム層をのせていない。しかし、塚間川上流の長地面相当層は、周囲の山地崩壊の堆積物よりなる。これは、粘土化した砂まじりのロームを基質とし、直径2mmからこぶし大にいたる不淘汰の安山岩礫を多く含んでいる。中島A遺跡付近の同層中の材の<sup>14</sup>C年代は、17170±270年B・Pを示した。

iv. 沖積面

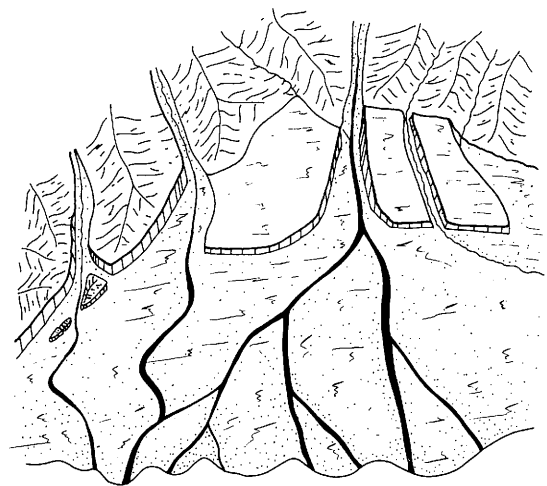
主として長地面南限から諏訪湖まで分布する。標高は760~780mである。地質断面線K-L以北では砂礫層を主体とし、時々シルトをはさむが、K-L以南では、シルト~粘土の割合が多くなり、諏訪湖の汀線付近は、約80%が腐植物を含む粘土層及び細砂で構成されている。横河川河口には三角州が発達している。

		地 層	地 形 面	ロ ー ム 層	諏訪教育会(1975)との対比
第 四 紀	沖積世	沖積層	沖積面		沖積面
		長地礫層	長地面		第III・IV段丘面
	洪後期	今井礫層	今井面	波田ローム	第II段丘面
		上の原礫層	上の原面	小坂田ローム	第I段丘面
				Pm-3 Pm-1	
	中期				
	前期	塩嶺累層			塩嶺累層

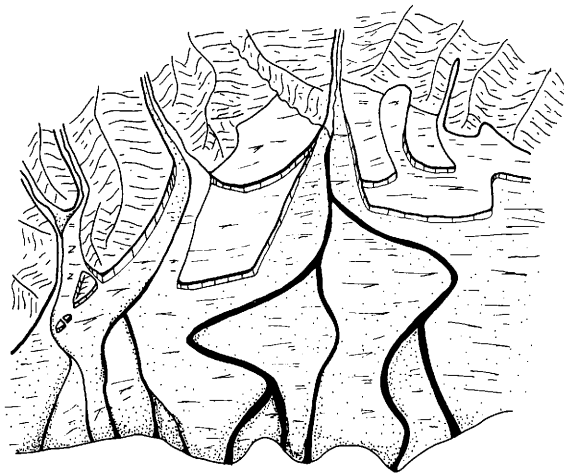
表4 岡谷地区層序表



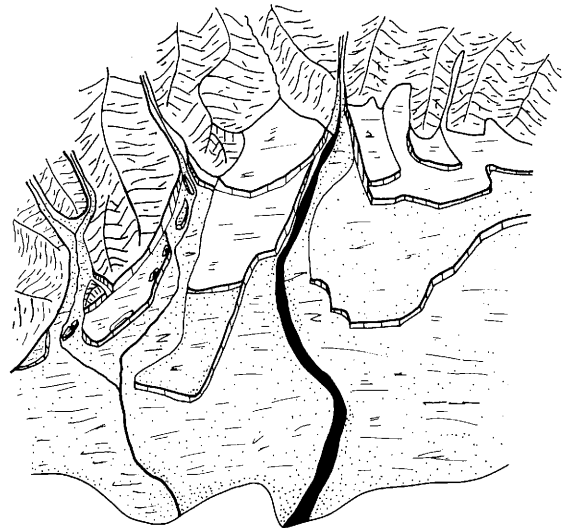
I : 上の原面



II : 今井面



III : 長地面



IV : 沖積面

図6 岡谷地区地形発達史概念図

(2) 断層と地形形成の関連について

岡谷市街地西部の長地面と塩嶺山地との境界と、長地面と沖積面との境界に断層地形がみられる。この断層はいわゆる糸静線の一部である。長地面と塩嶺山地との比高は約30m、境界はほぼ直線である。また大川沿いに、周囲よりも数m程度の小高い丘が3ヶ所、断層延長沿いにみられる。長地面と沖積面の境界の断層は境界がゆるくカーブしている部分もあるもののほぼ直線的であり、また両者の境界付近の長地面上に、断層が原因と思われる小丘が5つ直線的に配列することから推定される。この場合、両者の比高は3～5mである。この断層の北方への延長は、中島A遺跡で見いだされた断層にあたり、興味もたれるところである。

### (3) 地形形成史

以上述べてきたことから図6のような地形形成史が描かれる。

#### I. 約8万年前～3万年前

糸静線の活動による盆地の陥没と、横河川、塚間川、大川などによる扇状地(上の原面)の形成、中期火山灰(小坂田ローム)の降下。

#### II. 約3万年前～1.8万年前

横河川、塚間川などによる旧扇状地面の下刻と新しい扇状地(今井面)の形成、新期火山灰(波田ローム)の降下。

#### III. 約1.8万年前～1万年前

横河川、塚間川などによる下刻と新しい扇状地(長地面)の形成、西方の塩嶺山地の崩壊による長地面相当の丘陵の形成及び、断層運動による小丘群の形成。

#### IV. 約1万年前～現在

沖積地の形成

#### 参考文献

- 岡谷市 1973 『岡谷市史上巻』  
小林国夫 1960 「いわゆる“信州ローム”(信州ロームの研究 その1)」『地質学雑誌』67 日本地質学会  
社団法人 長野県建築士会松筑支部ほか 1982 『松本平地盤図』  
諏訪教育会 1975 『諏訪の自然史—地質編—』  
東郷正美ほか 1984 「糸静線活断層のトレンチ調査」『地震予知連会報』32号 地震予知連絡会  
松島信幸ほか 1972 「飯田市山本石子原の地質的調査」『昭和47年長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(飯田市内 その3)』 長野県教育委員会  
松田時彦・岡田篤正 1968 「活断層」『第四紀研究』7 日本第四紀学会  
村田貞蔵ほか 1971 『扇状地』 古今書院

## 第2節 岡谷地区の遺跡分布

岡谷市には、梨久保、樋沢、海戸、庄の畑など学史上著名な遺跡が多い。また、原始・古代史に関する研究、論攷の数も多く、とりわけ総括的な内容をもつものとして『諏訪史第一巻』〔鳥居龍蔵1924〕と『岡谷市史上巻』〔戸沢充則ほか1973〕とがあげられよう。前者は地域史の先駆的業績として、後者は現在の研究の集大成としての意義が大きい。こうした研究をふまえ、新たに発見された遺跡を加えた『岡谷市文化財地図』〔岡谷市教育委員会1978〕も遺跡の分布状況を概観するのに便利である。以下、今回（財）長野県埋蔵文化財センターで発掘を実施した遺跡が、岡谷地域の中でどのような位置を占めるのか、概要を記したい。なお、図7の中央自動車道長野線周辺の遺跡分布図は、前記『岡谷市文化財地図』をもとに作成したものである。

岡谷市の遺跡の分布状況をみると、天竜川流域の山麓、諏訪湖畔西岸の山麓及び台地、塩嶺山麓などに密集し、横河川をはじめとする扇状地上には意外に遺跡が少ない。中央自動車道のルートは、塩嶺山麓の密集地域の西端、山地にかかる地域を縦断している。

発掘調査を実施した10遺跡から検出された主要な遺構、遺物は、時間的に片寄りがあり、以下で述べる時期以外の遺構、遺物はわずしか確認できなかった。こうした状況は偶然ではなく、それぞれの時期の遺跡立地のあり方を反映しているものと思われる。

縄文時代草創期の遺跡は、これまでほとんど知られておらず、わずかに槍先形尖頭器や有茎尖頭器、拇指形搔器が、上垣外、長久保、梨久保(123)、榎垣外(134)の各遺跡から散発的に発見されているに過ぎなかったが、中島B遺跡(9)から初めて充実した資料が発見された。

縄文時代早期前半、押型文を特徴とする時期の遺跡は、樋沢・下り林各遺跡等山麓や山間地に立地するが、一方、岡谷丸山(74)、海戸(75)、上向(109)など諏訪湖岸や段丘上の遺跡からも発見例がある。

縄文時代早期末葉頃の遺跡は山麓地域で知られており、下り林(2)、間下丸山(83)、立正閣上(89)、上屋敷(120)、梨久保(123)、膳棚B(7)、岡谷丸山(74)、海戸(75)などの諸遺跡がある。

縄文時代前期末～中期初頭の遺跡は、山麓地域に多く知られ、小規模で他時期と重複せず、しかも独自の立地をとる例が多いことが知られている。図7に示した範囲の中だけ拾ってみても、岡屋(28)、月見ヶ丘(85)、ウツギ(90)、化木(91)、堤上(93)、市営球場南(94)、神明町(96)、間下丸山(83)、上屋敷(120)、梨久保(123)、清水田(125)、下り林(2)、西林A(3)、大洞(4)、膳棚B(白山)(6)の各遺跡がある。

縄文時代晩期末葉前後の遺跡は、山麓にも扇状地にも知られる。前者は西林A(3)や梨久保(123)遺跡で、後者は、経塚、新井南、土器免(142)、弥惣垣外(144)、庄の畑(145)、中島A(8)遺跡等である。

奈良～平安時代の墳墓や墓は、城日向、金山東遺跡(135)くらいしか知られてはいない。同時期の集落は片間町(133)、榎垣外(134)の各遺跡をはじめ数多く存在するが、墳墓との関係を理解するのに十分な資料はまだ得られていない。終末期といわれる古墳を参考にあげると、霊湊山古墳、大林古墳、日影古墳、地獄沢古墳などが諏訪湖西岸を中心に知られている。

こうした遺跡分布をふまえ、次章で調査遺跡の内容を示すことにする。

### 参考文献

- 岡谷市教育委員会 1978 『岡谷市文化財地図』  
戸沢充則ほか 1973 『岡谷市史』上巻 岡谷市  
鳥居龍蔵 1924 『諏訪史』第一巻

No.	遺跡名	先	縄	弥	古	奈・平	中	備考	No.	遺跡名	先	縄	弥	古	奈・平	中	備考
①	大久保B		○			○		No.71	97	間下堂山		○					
②	下り林		○			○		No.87	98	牛平		○			○		
③	西林A		○	○				No.95	99	今井十五社境内							石棒
④	大洞		○			○		No.159	102	深沢							
⑤	膳棚A							No.103	104	今井丸山古墳					○		直刀
⑥	膳棚B(白山)		○			○		No.103	105	唐松林古墳					○		
⑦	膳棚B		○					No.103	106	タワラコロビ古墳					○		
⑧	中島A		○	○				No.101	107	長者蔵古墳					○		
⑨	中島B		○					No.101	109	上向		○			○		
⑩	柳海途		○					No.100	120	上屋敷		○					
27	一ノ沢							打製石斧、黒曜石	123	梨久保		○	○	○		○	○
28	岡屋		○	○		○			124	火燈古墳					○		
29	宮ノ上		○						125	清水田							
30	熊野神社境内		○						131	豊太郎垣外							石鏃
31	荒神塚古墳				○			金銅環、管玉、勾玉、小玉 太刀、馬具、鉄鏃	132	権現堂		○					
38	橋原		○	○		○			133	片間町		○			○		
71	大久保					○		石庖丁	134	榎垣外		○	○	○		○	○
72	若宮古墳					○			135	金山東					○		
73	横道			○					140	清水池				○			
74	岡谷丸山		○	○		○			141	堀ノ内		○					
75	海戸		○	○	○	○			142	土器免				○			
76	清水権現			○					143	紺屋垣外		○	○				
77	杏林製薬工場内			○					144	弥惣垣外				○			
80	弁天島							石剣	145	庄ノ畑		○	○				
81	天王垣外			○				勾玉	152	出頭							
82	新屋敷長塚		○	○					153	出の洞		○					
83	間下丸山		○	○		○	○		154	禅海塚		○					
84	小部沢		○						155	郷田							○
85	月見ヶ丘		○						156	横道上							
89	立正閣上		○						157	間下権現沢							
90	ウツギ		○						158	長原							
91	化木		○						162	大曲		○					
92	間下山の神					○			163	間下化木		○					
93	堤上		○						164	出の洞		○	○				
94	市営球場南		○			○			173	花岡城址							○
96	神明町		○														

遺跡名は岡谷市文化財地図より引用 ①～⑩は調査遺跡。他のNoは岡谷市文化財地図の番号

表5 岡谷地区遺跡地名表





图7 岡谷地区  
 遺跡分布图  
 (1 : 10,000)



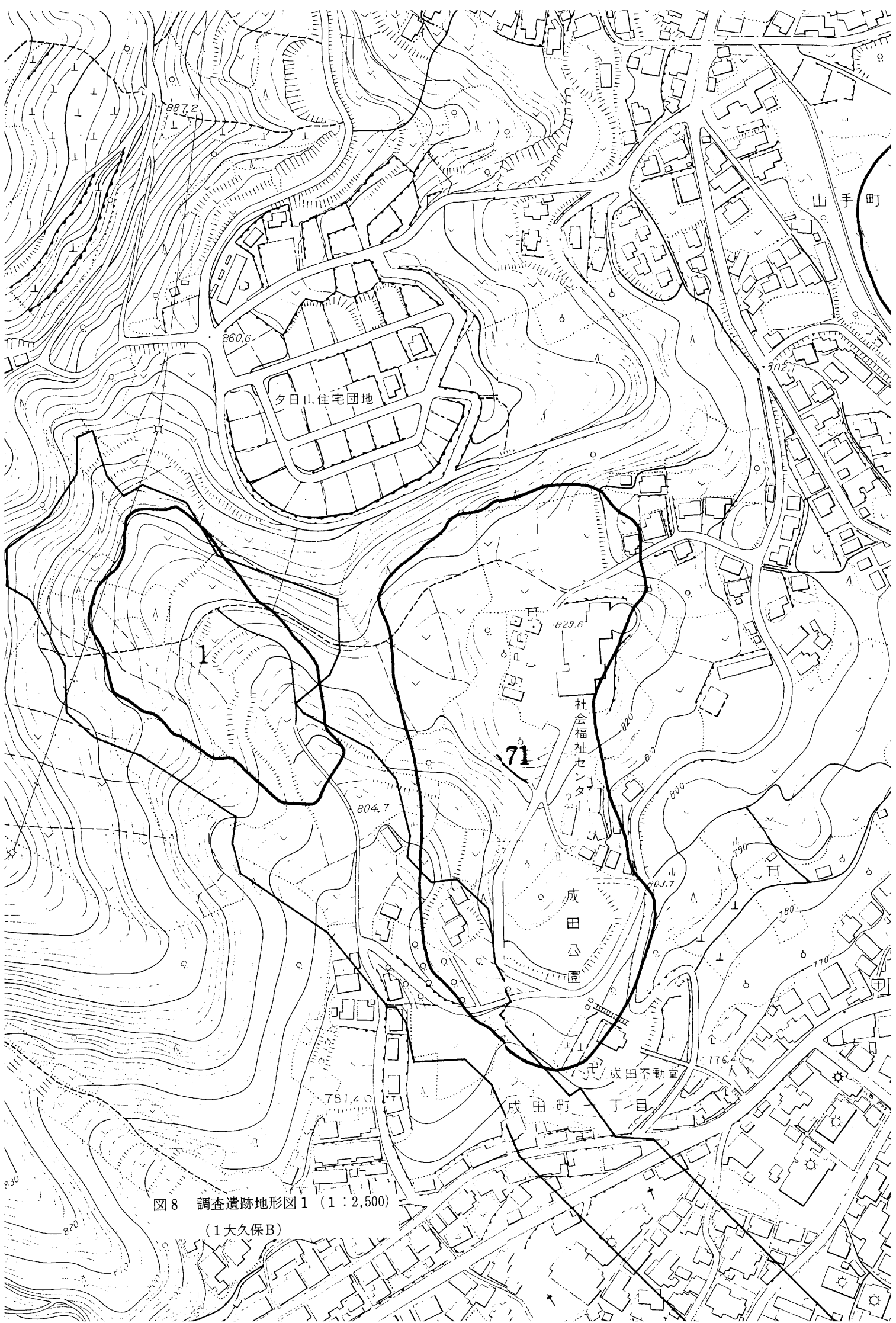


図8 調査遺跡地形図1 (1:2,500)

(1大久保B)

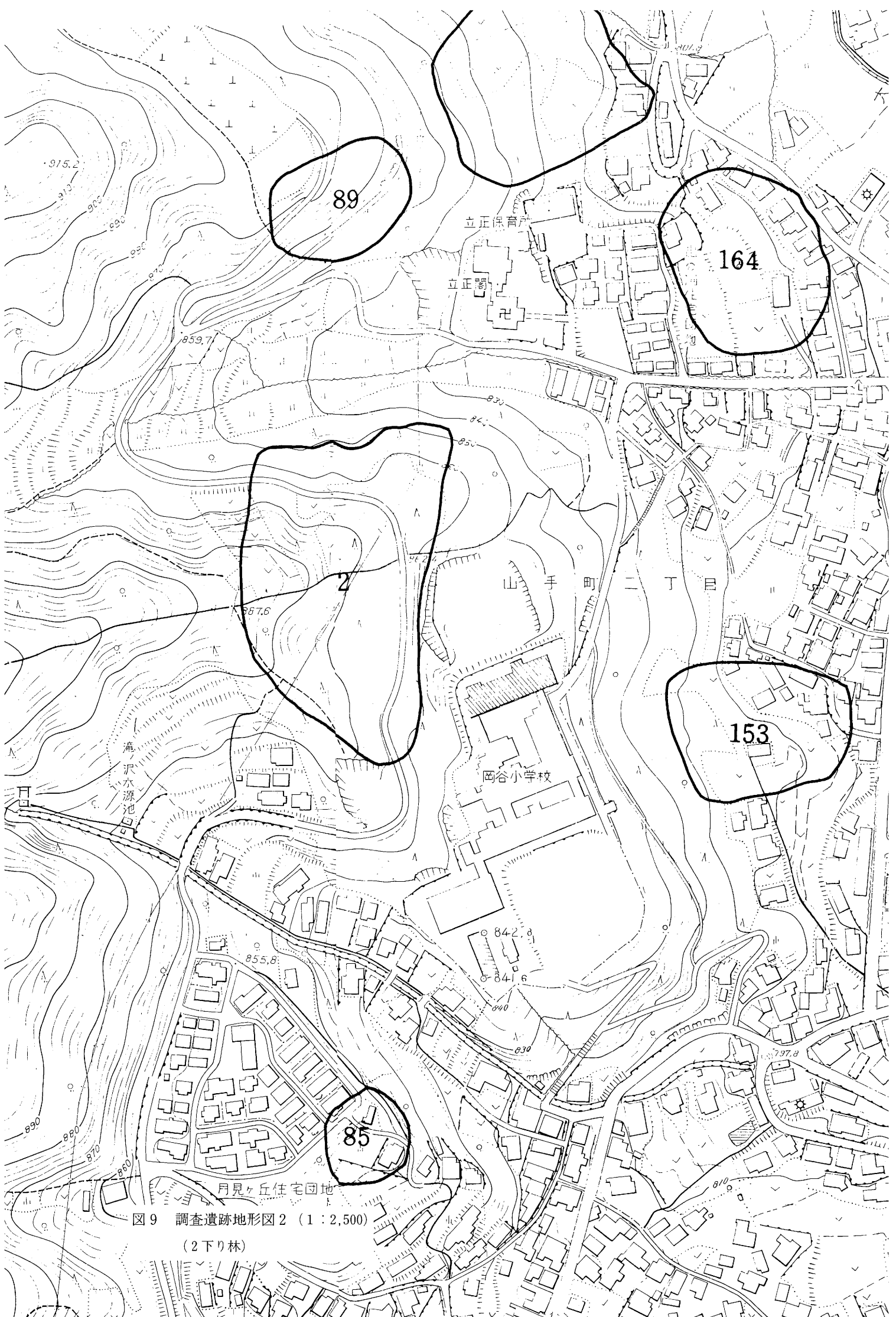


図9 調査遺跡地形図2 (1:2,500)

(2下り林)



図10 調査遺跡地形図3 (1 : 2,500)

(3 西林A、4 大洞)



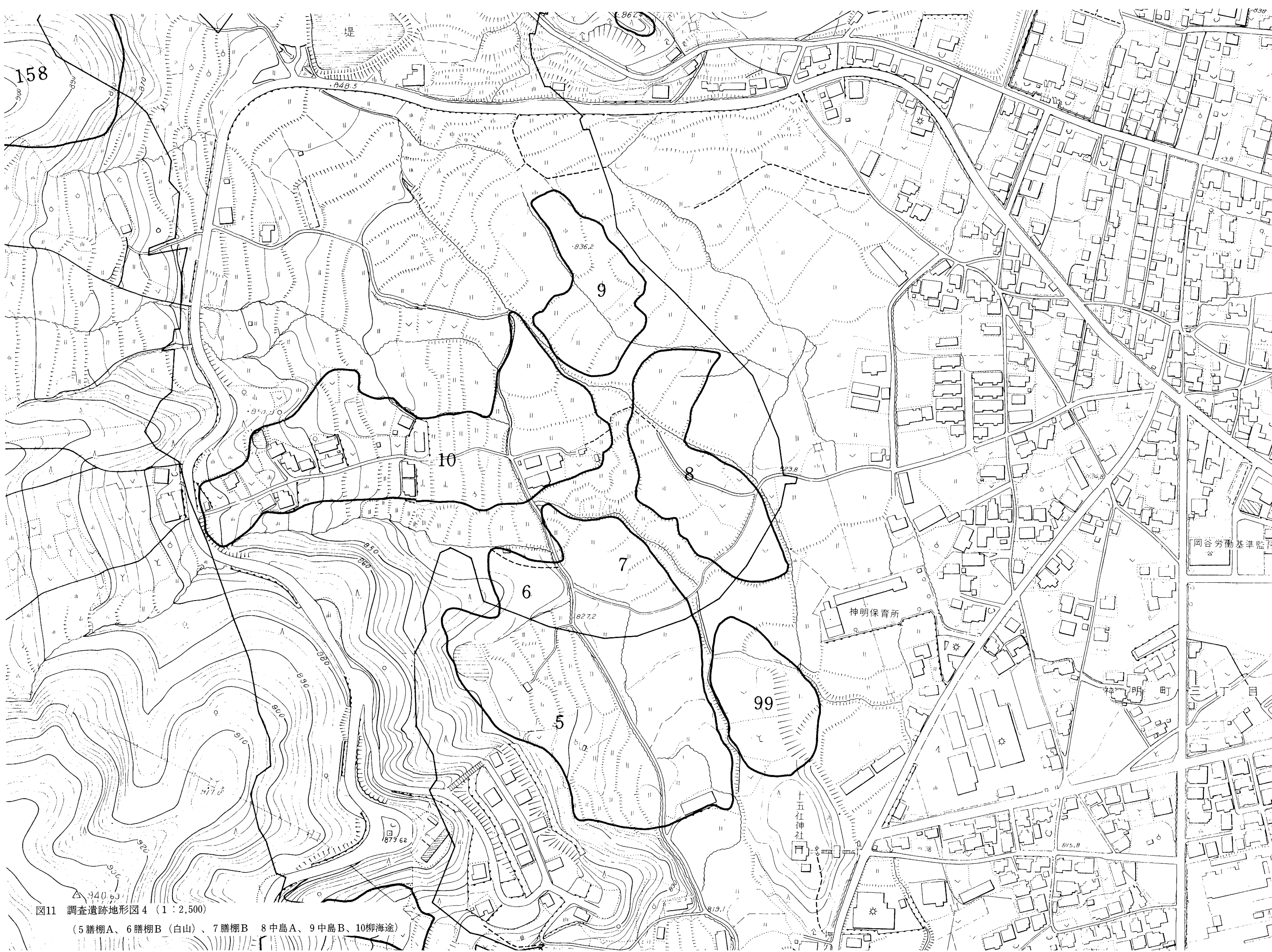


図11 調査遺跡地形図4 (1:2,500)

(5膳棚A、6膳棚B(白山)、7膳棚B 8中島A、9中島B、10柳海途)





## 第3章 調査遺跡

### 第1節 <sup>おおくぼ</sup>大久保B遺跡 (GOK)

#### 1. 遺跡の概観

岡谷市成田町一丁目にあり、遺跡の中心は4464番地及び4508番地付近で、岡谷市社会福祉センターの裏側にあたる。通称「ながのくぼ」と呼ばれることもあるらしい。遺跡付近は塩嶺山塊と沖積地の接点にあたるが、山塊から大規模な地すべりによって生じた尾根が張り出している。遺跡はこのような尾根の1つと塩嶺山塊東向き斜面とに挟まれた狭くて傾斜の急な谷の谷頭のわずかな緩斜面に立地する。明治以降、戦中～戦後にかけて開拓されて畑になったが、谷地形ということもあって侵食をうけており、旧地表面は失われているようだ。谷の右手(東側)の地滑り起源の尾根上には、縄文時代～弥生時代の遺跡とされる大久保遺跡が隣接する。この尾根にさえぎられて諏訪湖北岸の沖積地はわずかししか望めないが、湖面以遠の眺望は良い。また、谷中央の沢は直流して天竜川に流下するが、谷左手(西側)の山塊に隠れて天竜川下流方面は全く見えない。標高は835m前後で、天竜川との比高差は75m程である。

#### 2. 調査の概要 (図12)

本遺跡は周知の遺跡ではなかったが、遺物が採集されたため、県教育委員会の指導下に試掘調査を実施した。その結果、大久保B遺跡として、発掘調査を実施することになった。遺跡は谷頭付近を中心としており、4,700㎡が路線にかかった。調査域は遺跡の中心に当たり、主要部分は完掘できたと考えられる。発掘調査は昭和57年9月上旬から12月下旬まで行われ、調査員は主として3名が当たった。整理作業は昭和57年12月末より断続的に行われ、本報告に至った。この間昭和58年には諏訪考古学研究所主催の第1回諏訪地区遺跡調査研究発表会にて概要を公表し、『長野県史考古資料篇』にも内容を紹介した(和田博秋1983)。また、当センター刊行の『長野県埋蔵文化財ニュース』No.2・No.3や『長野県埋蔵文化財センター年報』1にも内容を掲載した。遺跡の調査方法は、試掘調査では、遺物散布域全域に2m四方のテストピット16ヶ所を設定し、堆積状況を見た。明瞭な遺物包含層はこれだけでは捉えられなかったが、旧地表と考えられる土壌化の進んだ層が安定して存在する範囲からは遺物が散漫ながらも出土したため、発掘調査の必要あり、と判断した。そしてその範囲4,700㎡のうち2,820㎡を調査することが認められた。遺跡からは縄文時代の遺物が主として採集されていたが、量が少ないので集落址の可能性は低いことが予想された。遺跡の性格と面的調査必要範囲を把握するためのトレンチ調査から着手した。遺跡は急傾斜の段々畑で、畑ごとに等高線に平行した28本のトレンチを設定した。その結果、いずれの畑も堆積状況は安定的だが明瞭な包含層はとらえられず、墳墓や土壇及び断層が発見された09・15・35トレンチ周辺のみ面的調査が必要と判断した。その面積は450㎡余りである。

発掘調査は遺跡の性格と、急斜面で通路もないという条件から、すべて人力による手作業で行った。墳墓と出土遺物のうち鏡及び人骨については、調査中から整理作業時にかけて専門家に指導・鑑定を依頼した。また、岡谷断層発掘調査研究グループから断層調査の希望があり、協力した。測量は遺構については

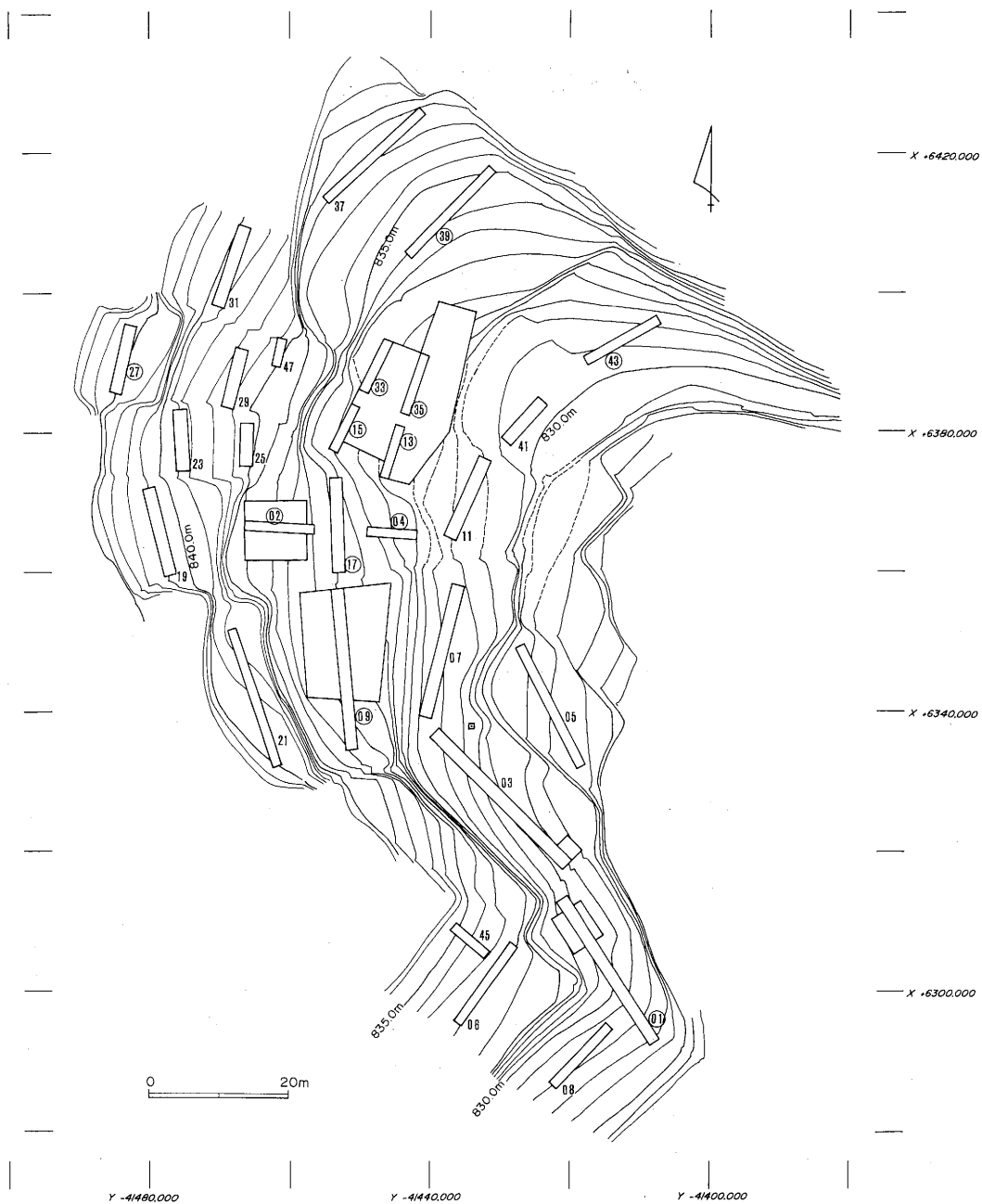


図12 大久保B遺跡発掘範囲及び地形図（1：1,000）

遣り方測量を、地形やトレンチ配置にはトラバース測量を用いた。測量基準点は中央道の下り線センター杭S T A 6 +60を使用し、複数のセンター杭の座標値から座標北を算定した。基準点の座標値は、第Ⅷ測量系のX = 6337.9015, Y = -41434.3074である。また、レベル原点は工事用水準点No.2を用いた。その標高は829.290mである。なお、鏡については東京国立文化財研究所に依頼して恒久的な保存処理を行った。

### 3. 調査の経過

#### 昭和57年

7月20日 試掘確認調査実施。2m四方のテストピットを16ヶ所設定し発掘調査。谷頭付近のやや傾斜の緩い畑に遺物包含層らしい層を発見、調査の必要性を報告。

9月2日 発掘調査開始。採集遺物や地形から縄文時代の一時的な生活地を予想。急傾斜のため、畑毎に短いトレンチを設定、遺構の存在が予想される場所を面的調査する方針をとる。

- |        |  |              |                                  |
|--------|--|--------------|----------------------------------|
| 9月14日  | 15トレンチで落ち込み発見、後に断層であることが判明。  | 12月27日       | 岡谷断層発掘調査研究グループ断層調査に来所。立ち合って協力する。 |
| 9月17日  | 09トレンチで土壌検出。   | <b>昭和58年</b> |                                  |
| 9月27日  | 35トレンチから石積みを検出。古墳の可能性を考えたが後に1号墳墓と判明する。                             | 1月24日        | 東京学芸大学中野政樹教授に鏡の鑑定をいただく。          |
| 10月13日 | 1号墳墓周辺を拡張し面的調査開始。  | 2月11日        | 第1回諏訪地区遺跡調査研究発表会にて遺跡の概要報告。       |
| 10月18日 | 1号墳墓に隣接して2号墳墓を検出。  | 3月31日        | 『長野県史考古資料篇中南信篇』に遺跡の概要を報告。        |
| 10月27日 | 09トレンチ周辺の面的調査と断層の面的追跡開始。   | 4月20日        | 東京国立文化財研究所に八花鏡の保存処理と材質分析を依頼。     |
| 11月2日  | 2号墳墓より瑞雲双鸞八花鏡を発見。鏡周辺より骨片多出。古墳時代以後の墳墓であることが確実になる。                   | <b>昭和59年</b> |                                  |
| 11月11日 | 明治大学小林三郎助教授来所。墳墓・鏡等について指導を受ける。                                     | 2月4日         | 整理作業再開。図版及び写真図版を年度内作成。           |
| 11月12日 | 1・2号墳墓、掘り方検出開始。  | <b>昭和61年</b> |                                  |
| 11月16日 | 墳墓周辺を拡張したが他の遺構は検出できず。  | 10月7日        | 原稿執筆。                            |
| 12月16日 | 墳墓の調査終了  |              |                                  |
| 12月25日 | 地形測量完了し発掘調査終了。引き続き整理作業開始。遺構図等記録の補訂と整備、遺物の水洗～実測までを年度内に終了させ、一時作業を中断。 |              |                                  |

## 4. 調査の結果

### (1) 層序と地形形成

基本的な層序は以下の通りである（図13）。

I層：黒色土で現耕土である。

II層：火山灰を母材とする黒色土で旧表土らしい。層中から奈良時代の墳墓の掘り方が切り込まれる。

III層：火山灰を母材とする暗褐色土である。縄文時代前期～晩期の遺物が散見される。

IV層：火山灰を母材とする暗褐色土で、小角礫を含む。縄文時代前期～晩期の遺物が散見され、下位からは土壌数基が検出される。最新の断層によってIV層以下が切られている。

V層：火山灰を母材とする腐植質土層とローム層の漸移層で、角礫を含む。遺物はないが、数基の土壌が上面から検出される。

VI層：ローム層で角礫を含む。波田ロームに対比できよう。

VII層：多量の角礫を含む赤褐色土層で、第三紀層である塩嶺累層またはその崩落物からなる層である。

断層はすべてこの層を切っている。

層序の基本は、塩嶺累層の基盤の上にその崩落物を含むローム層が乗り、ローム層の上位が土壌化して遺跡成立時の地表となったとしてよいだろう。土壌化したII～V層は谷底の沢筋では厚いが斜面では侵食や農耕で失われている場所もあった。またII～IV層は遺物が少なく、明瞭な包含層と言えない。谷底で発見された断層は調査の結果地震によるものではなく、原地形を保持したまま大規模に滑動するblock-gride型地すべりによるものであることが判明した〔東郷正美ほか1985〕。遺跡東側の大久保遺跡の立地する尾根はこの地すべりによって成立したが、断層は3回にわたって生じており、最新断層の上にIII層が乗っている。従って少なくとも奈良時代以前に現地形は成立していたはずである。

### (2) 遺構と遺物の概観（図14）

遺構にはIV層下位～V層上面で検出された縄文時代の土壌7基と、II層中から検出された奈良時代の墳墓2基がある。また遺構ではないが断層が残されている。土壌群は谷右手の東向き斜面に集中し、斜面に

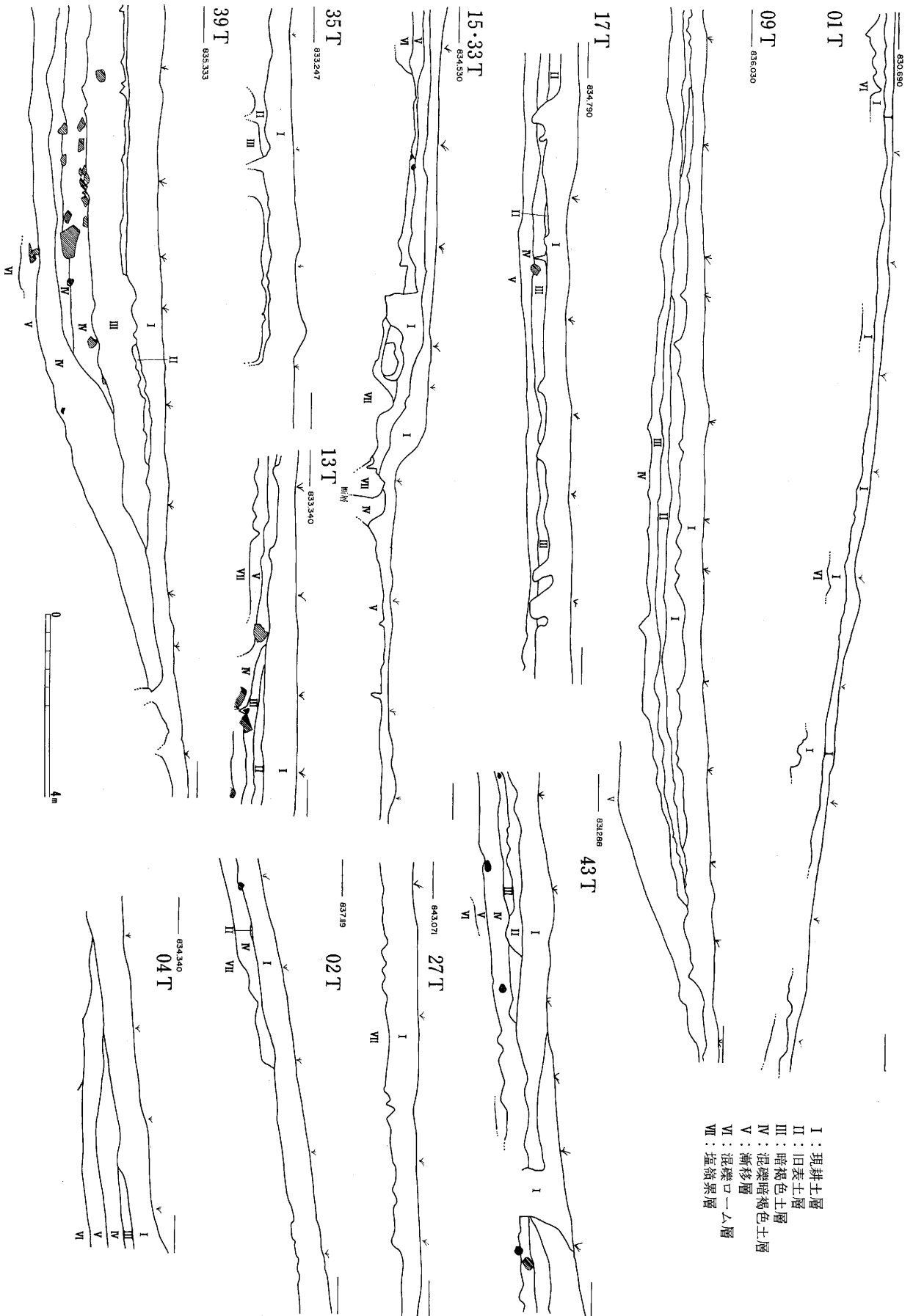


図13 大久保B遺跡土層図 (1 : 120)

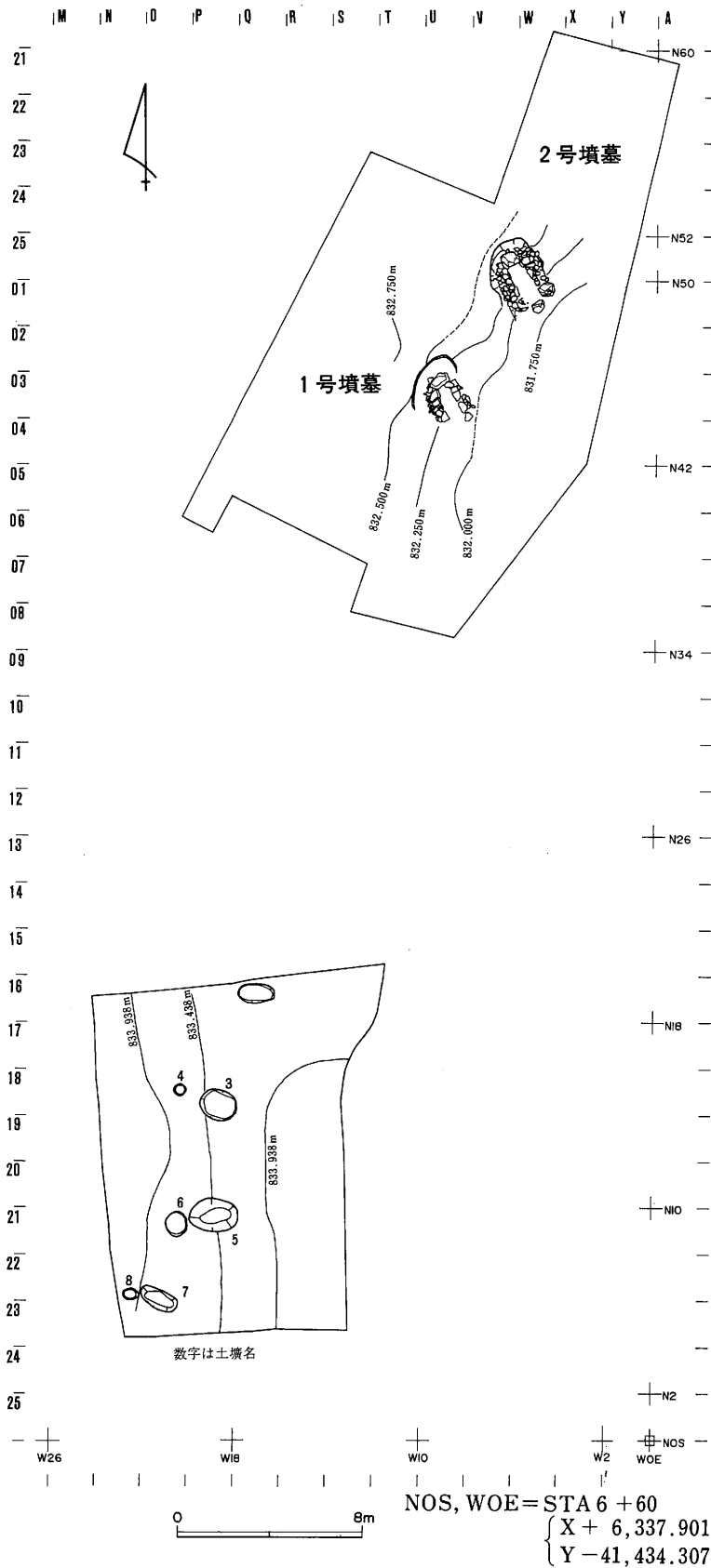


図14 大久保B遺跡遺構配置図 (1 : 600)

対して斜行気味に分布する。墳墓は発掘域中央の谷頭に近い谷底に2基並んでいる。両者の間隔は5m程度しかない。断層は谷筋に沿って西北～東南に走っているが、遺構と直接は切り合わない。遺物には縄文時代前～晩期の土器・石器・剥片等、弥生～古墳時代の土器、古代～近世の土器・陶器等がある。また、墳墓からは、瑞雲双鸞八花鏡1面と火葬人骨が発見されている。

(3) 縄文時代の

遺構と遺物

① 土壌 (図15、表6)

土壌はN10・W18付近に集中している。検出は7・8号土壌がIV層下位、他がV層上面である。土壌の埋土がIV層と区別しにくく、若干削りすぎている可能性を考えれば、いずれもがIV層下位の同一面から掘り込まれていたと思われる。楕円形プランで大形の深い土壌は底がVI層に達し、埋土にロームブロックが入る。伴出遺物は皆無だが、付近のIV層中から縄文時代前期後半の土器(1・5)が若干出土したことから、縄文時代に属するものと考えておく。土壌の性格は不明である。

② 遺構外遺物

(図16・17)

遺物はI～IV層から散見され、土器・石器・剥片・石核等がある。土器はいずれも破片で前期～晩期までであるが、個体数は少ない。前期では諸磯b～諸

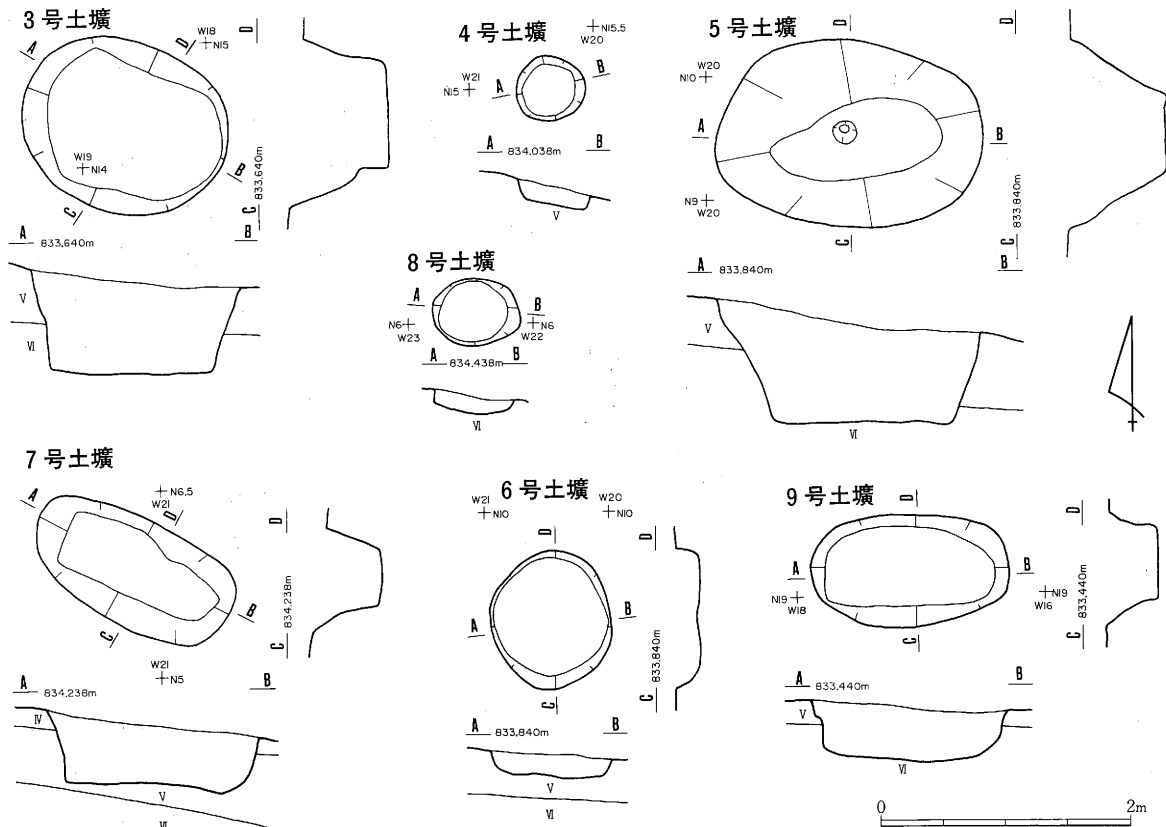


図15 大久保B遺跡土壌実測図 (1:60)

名称	平面形	規模 (長径×短径×深さ) (cm)	検出層位	埋土	備考
3号土壌	楕円形	168 × 136 × 72	V層上位	ロームブロック混入軟弱粘質黒色土	
4号土壌	円形	56 × 54 × 14	"	軟弱粘質黒色土	
5号土壌	楕円形	216 × 152 × 76	"	ロームブロック混入粘質黒色土	
6号土壌	楕円形	112 × 96 × 18	"	粘質黒色土	
7号土壌	楕円形	170 × 85 × 48	VI層下位	"	
8号土壌	楕円形	72 × 56 × 13	"	"	
9号土壌	楕円形	160 × 90 × 42	V層上位	ロームブロック混入粘質黒色土	

表6 大久保B遺跡土壌一覧表

磯c式土器(1~6)、前期末の土器(7~10)があり、中期では梨久保式土器(11~16)、中葉の土器(17~18)、加曾利EIV式土器(19~22)がある。後期は初頭の土器(23)、加曾利B式土器(24)があり、晩期では前葉の土器(25)と氷I式前後の土器(26~29)がある。石器には石鏃10点、石錐2点、スクレイパー1点、器種不明の石器6点、打製石斧56点、大形粗製石匙2点、磨製石斧2点、敲石1点、小剥離痕のある剥片等107点がある。遺構が土壌しかない割に、打製石斧と小剥離痕のある剥片の量が多い点及び打製石斧の大半が大きく破損している点に注目したい。

#### (4) 奈良時代の遺構と遺物

##### ① 墳墓

##### ア. 1号墳墓(図18)

本址はN45・W9付近に位置し、標高は832.0~832.5mである。

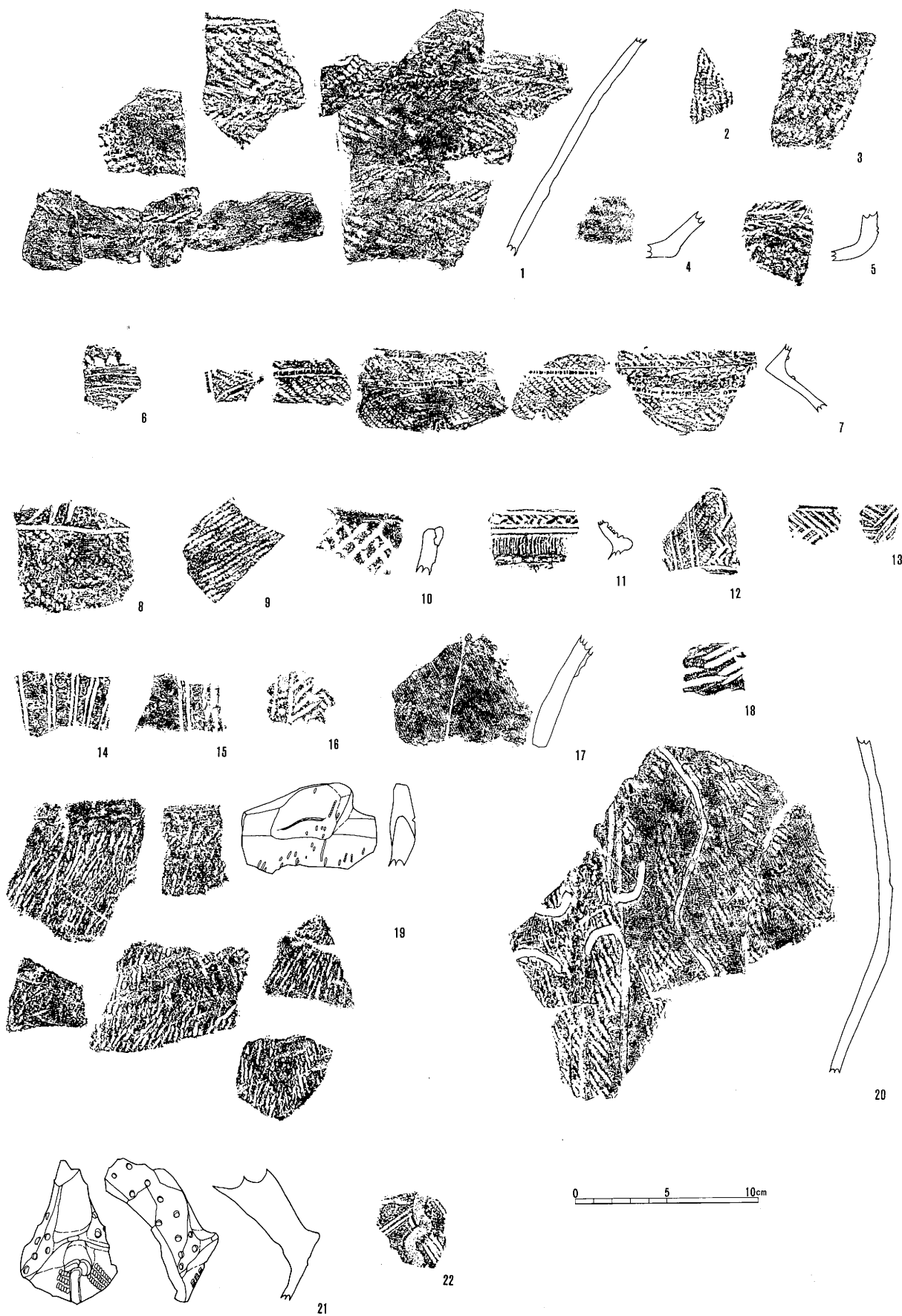


図16 大久保B遺跡遺構外出土遺物実測図・拓影1 (1:3)

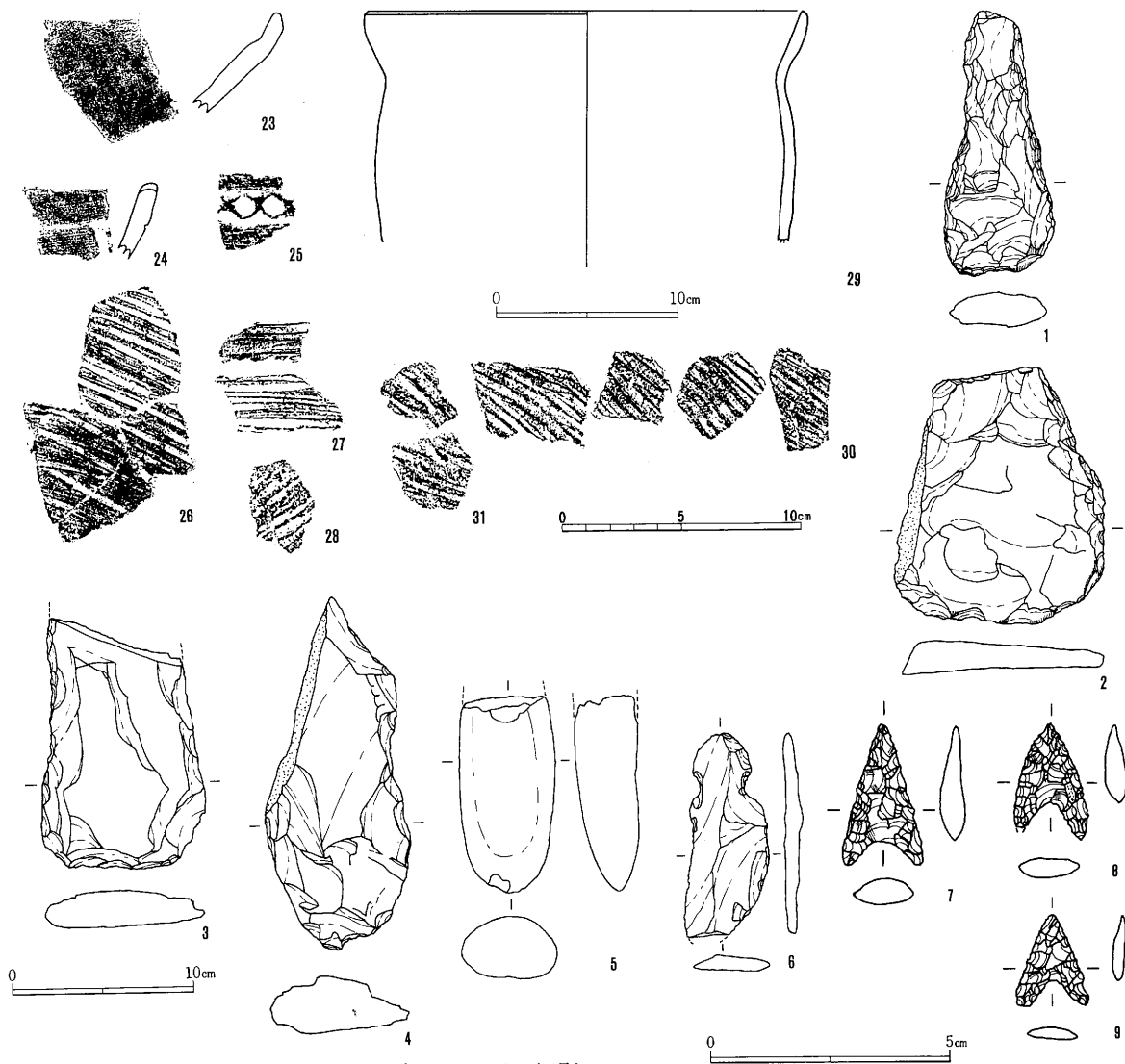


図17 大久保B遺跡遺構外出土遺物実測図・拓影2

(23~28,30,31 1 : 3、 29、1~6 1 : 4、 7~9 2 : 3)

本址の構造は掘り方と石室からなる。石室の一部はII層上面で検出されたが、掘り方はII層中から検出されており、II層中に構築された遺構としてよい。

掘り方は右側壁後方から奥壁後方にかけて確認でき、大きさは石室の主軸に沿って約3m、直交して1.5mである。掘り方は2段で、石室よりひとまわり大きな1段目と石室がはいる大きさの2段目からなる。1段目は最も深いところで0.2mあり、壁はほぼ垂直で底面は平坦である。2段目の底面はゆるい起伏を示す。掘り方をII層の黒色土で若干埋め戻した上に石室が構築される。

石室は床、奥壁、左右側壁、天井よりなり、主軸をN25°Wにとる。石室内法は全長1.93m、奥壁付近の幅0.45m、中央部幅0.6m、開口部幅0.6mで、奥壁から開口部に向かってわずかに広がる長方形である。側壁高は床上面より、奥壁前面で0.3m、最大0.5mある。石室を構成する礫は安山岩質の亜角礫で、遺跡内に同様の礫が散見される。開口部は南側である。

床は10~20cm程の礫をほぼ全面に敷いている。礫相互のすき間が大きく、石敷上面は平坦ではない。

奥壁は90×55×45cmの礫を用いており平らな面を石室内に向けている。

側壁は大略1段目が横手積み、2段目、3段目が小口積みされている。例外的な箇所をあげると、左側壁1段目の中央奥壁寄りでは10cm大の礫をつめて壁面としているほか、同じく開口部寄りでは左側壁中で



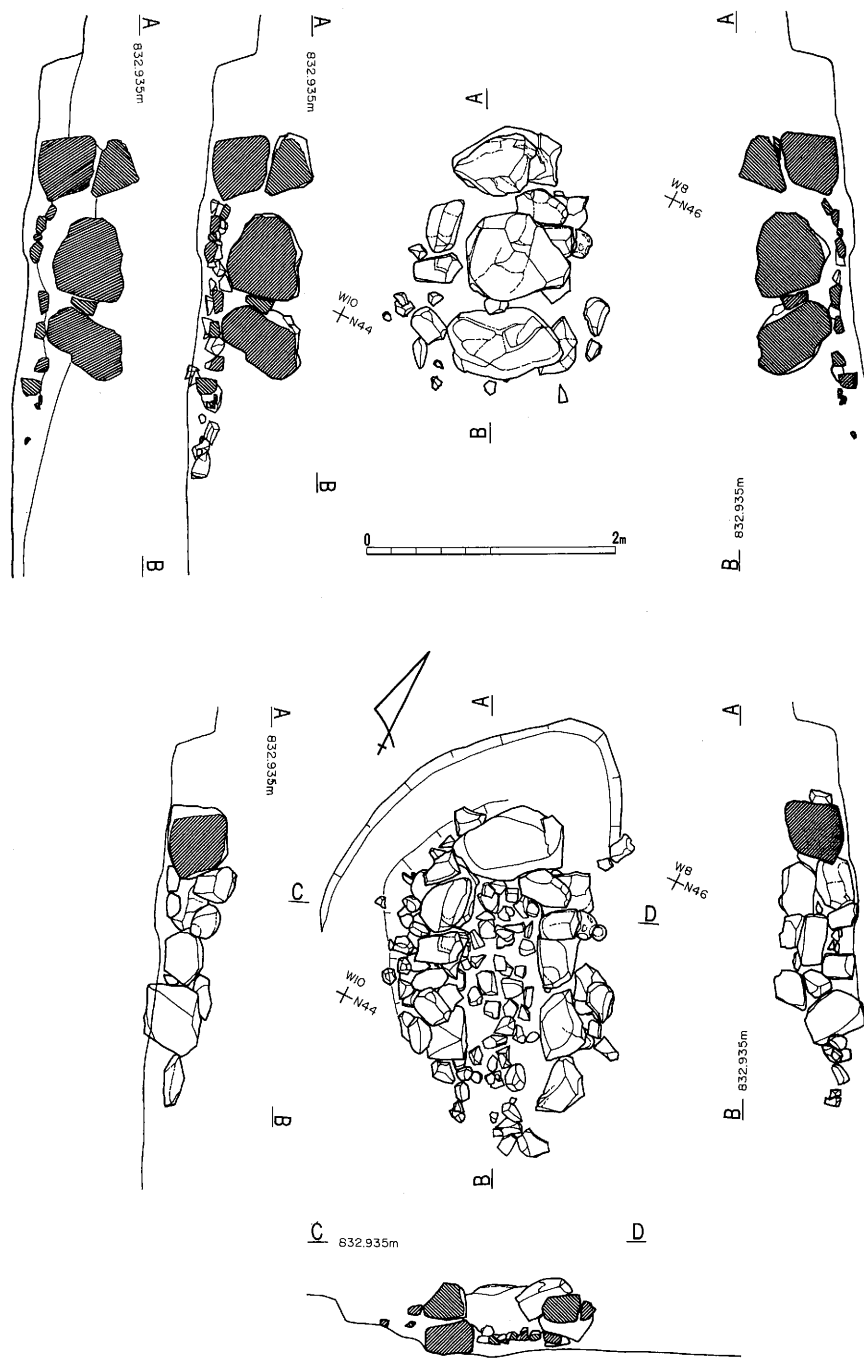


図18 大久保B遺跡1号墳墓実測図(1:60)

最も大きな磔を横手積みでなく立てて配しており、この磔は2段目まで達している。また奥壁前面では1段目の壁石が大きいので2段目が欠如する。右側壁では1段目の奥壁前面にある壁石は、床と同じ高さに置かれた20cm大の磔2個の上に設置され、小口面が壁面となるように工夫されている。左右両壁とも開口部の壁石は1段目に10~20cm大の磔や扁平な磔を用いているが、耕作による攪乱を受けている。左側壁3段目の奥壁より3番目の壁石は小口面が石室内に向いておらず、右側壁2段目の奥壁前面の壁石は石室内にせり出し小口面を下に向けているのでいずれも構築当初の位置より動いていると考えられる。

石室の裏込めは左側壁背後にのみある。右側壁、奥壁背後にも若干の磔が認められるものの、裏込めとしての機能を有するものではない。裏込めは10~20cmの磔を使用し、石室内壁より0.6m前後の厚さで込められている。磔と磔のすき間は大きく、II層の黒色土で埋められている。

天井は大きな磔3個からなる。1つは70×45×35cmで奥壁上にのり、他の2個より小さい。中央の天井石は70×80×60cmで左側壁からはずれて石室内に落ち込み床に接していた。開口部寄りの天井石もほぼ同大で右側壁側に寄り、天井面を開口部に向け、北に傾いて石室内に落ち込んで床に接していた。

閉塞石は攪乱を受けて失われていたが、開口部前面の床と同じ高さに5~20cm大の磔数個が残されていた。

遺物は奥壁寄りの床上7cmより微量の骨粉が出土したのみで、副葬品等はなかった。

石室内にはII層の黒色土が石室内に落ち込んだ天井石の間のすき間を埋めていた。

調査前には石室の存在を示す盛土は発見されていなかったが、掘り方の確認できたII層中より上に石室の石積みが出ているため、当初石室を覆う程度の盛土があったものと考えられる。

#### イ. 2号墳墓 (図19)

本址はN50・W6付近に位置し、標高は832.0~832.5mである。本址も1号墳墓同様掘り方と石室から成る。石室の一部はII層上面で検出され、掘り方はIII層上面で検出できたが、1号墳墓同様II層中に構築されていたものと考えている。

本址の調査に当たっては、石室内は当初より半割する方法をとり、掘り方の検出や開口部周辺の礫の性格をつかむためサブトレンチを設定した。

掘り方は石室開口部前方を除いて確認できたが、右側壁側はサブトレンチによって発見できた。大きさは3.0×2.2mである。掘り方の壁は左側壁と奥壁の後方で最も高くなっていて、傾斜はゆるく、若干の凹凸のみられる。底面は奥壁と床の下に当たる部分は平らに整地され、奥壁付近から開口部付近に向かってやや傾斜する。両側壁ののる部分でも平らであるが、1段目の壁石を固定するために所定の部分がやや掘り込まれているところがみられる。掘り方は黒褐色土で若干埋め戻されてから石室が構築される。

石室は床、奥壁、左右側壁からなり、主軸をN30°Wにとる。石室内法は全長1.93m、幅は奥壁で0.65m、中央部で0.8m、開口部で0.75mあり、南側の開口部に向かってやや開く長方形である。壁高は最もよく残っている奥壁で床上より0.47mを測る。石室を構成する礫は安山岩質の垂角礫である。

床には10~20cm大の礫が敷かれている。南半分では石敷面より下まで攪乱が及び当初の様子は不明であるが、1号墳墓では全面に敷かれていたので本址も同様であったと考えられる。左側壁奥の一角には石敷はないが、攪乱を受けた形跡がないので当初から敷かれていなかったと考えられる。奥壁から0.6m前方までの石敷は礫と礫のすき間が多く、かつ平坦ではないので敷き方が粗雑と言える。また石室中央右側壁寄りも礫が一部で重なったりして平らな床面をなしているとは言えず、礫と礫の間にすき間がみられる。これに対し石室中央やや左側壁寄りの鏡の置かれていた辺りの石敷は、径0.5mの範囲に10~20cmの礫をめぐらしてその中央に扁平な礫を載せ、ていねいな石敷となっている。

奥壁は80×60×60cmの礫を用いている。この礫の下には壁面寄りに10cm大の礫数個が置かれ、奥壁面が垂直となるように工夫されている。

側壁は左右とも開口部寄りに攪乱を受けているものの構築状況の観察は可能である。1段目は横手積み2段目以上は小口積みである。左側壁は開口部を除いて2段で、奥壁にかかって3段目が認められる。右側壁は1段目と2段目の一部が残っている。高さが奥壁に較べ10~20cm低いことと、開口部寄りでは明白に攪乱を受けていることから判断して、側壁はあと1~2段積まれていたものと思われる。両側壁とも1段目は奥壁から前方へほぼ均しい大きさの礫が3個用いられている。右側壁開口部には柱状の礫が立てられておりその根元には10cm程の礫が根石としてつめられている。左側壁の対応する位置の壁石は抜き去られているが、その跡には右側壁同様の10~20cmの礫が残されていた。左右側壁とも対称的な構造をとっていたことは明らかである。なお、側壁の本来の高さはこの柱状の壁石で示されるものとする。

石室の裏込めは奥壁と右側壁開口部に立つ壁石付近を除いてあり、石室内壁から外へ0.7~0.8mの幅で、20~30cm大の礫が積まれている。裏込めの礫は側壁面の石積みに対応するように2段に密に積まれている。

天井は残されておらず、石室内はII層の黒色土で埋まっており、開口部以外は攪乱の形跡はなかった。右側壁~開口部前方には大小の垂角礫が残されていたが、サブトレンチによっていずれもI層中にあることが判明した。しかし60×50×40cm程の大きな礫がいくつか含まれており天井石や閉塞石が移動させられ

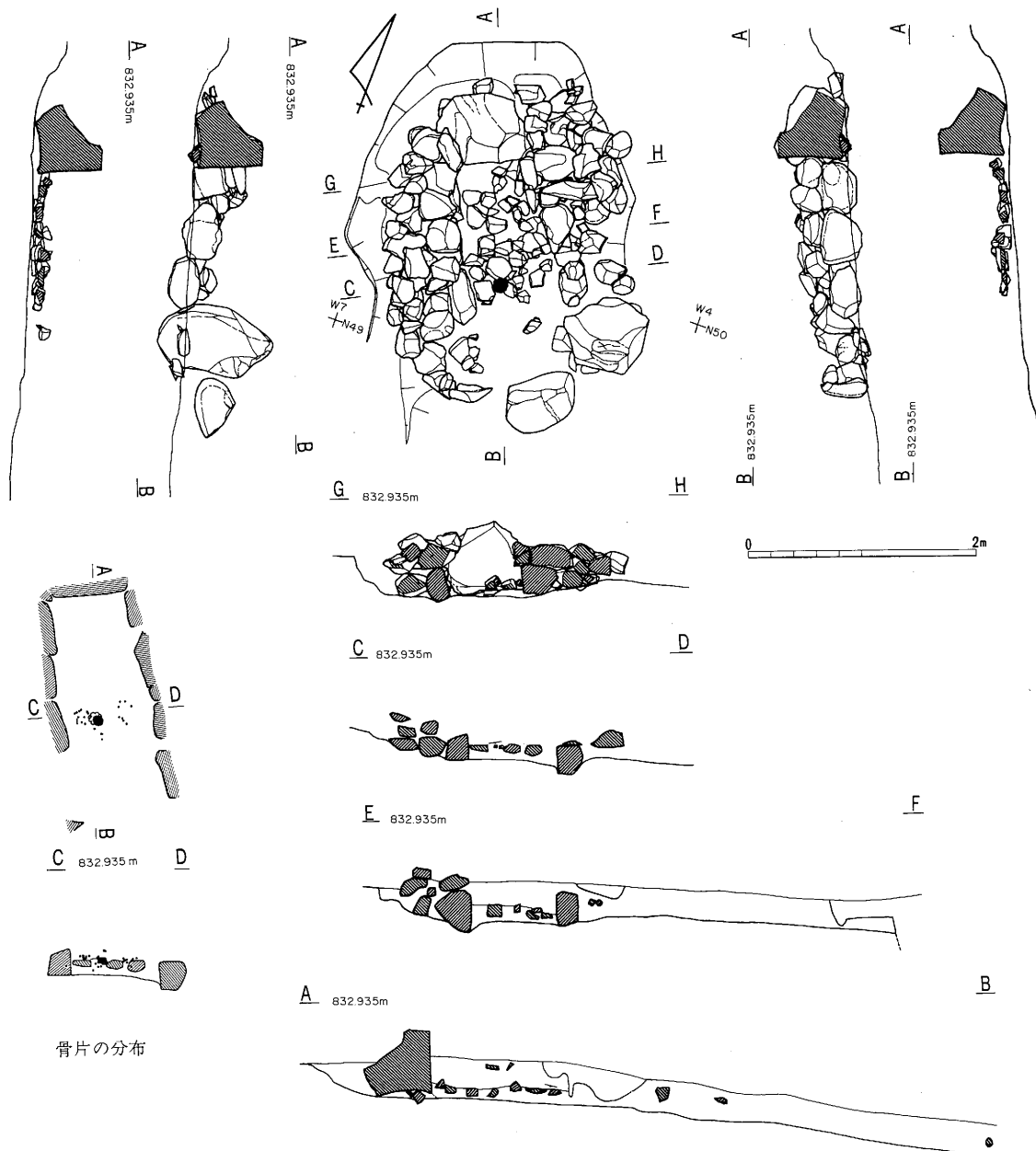


図19 大久保B遺跡2号墳墓実測図（1：60）

た可能性がある。

遺物は石室床面上から瑞雲双鸞八花鏡と火葬骨が出土した。鏡は石室中央左側壁寄りの丁寧な石敷の床面上に鏡面を上にして出土し、火葬骨は鏡の東側に鏡を包み込むようにして出土した。火葬骨の分布は鏡の周囲30cmの範囲と鏡の上下10cm以内に限られ、鏡の下の方が多かった。火葬骨は鏡に付着していたもの以外は骨粉となっていた。

石室内は攪乱を受けておらず火葬骨及び鏡は埋葬当時のものと考えられる。

調査前には石室の存在を示す盛土はなかったものの、1号墳墓の調査結果からみて、2号墳墓も当初石室を覆う程度の盛土があったと考えられる。

#### ウ. 墳墓のあり方

2基の墳墓は石室の主軸を同じくし、近接して築造されていることから密接な関係にあったものと考えられる。しかし石室構築の細部には相違がみられる。2号墳墓の石室は規格的で左右対称である。側壁は

横穴式石室の築造技術を受けついで1段目を横手積み、2段目を小口積みにし、用いた礫も大きさを揃え、裏込めも十分行なっている。開口部側壁の柱状の壁石は袖石の退化形態であろうか。1号墳墓ではこれらの規格性が大幅に後退し、粗雑なつくりと化している。両者は若干の時間差をもって構築されたと思われる。2号墳墓が先行すると考えられる。

両者の石室は構造、規模とも横穴式石室に近似しており、側壁の積み方等、築造技術も横穴式石室のそれを受け継いでいる。盛土の存在も推定できる。

2号墳墓の火葬骨は骨のみで木炭等は含まず、茶毗に付した後収骨され運ばれてきたものである。茶毗に付された場所は遺跡内では発見されていないので埋葬地とは離れた場所にあったと考えられる。また骨蔵器は残存していないので、腐敗しやすい容器を用いたと考えられる。例えば袋や木製の容器が考えられる。火葬骨に包まれるようにして出土した鏡は、その出土状況から火葬骨と一緒に骨蔵器に収納されていたものと考えられる。1号墳墓についても同様の容器が考えられる。追葬の痕跡ははっきりしない。

2基の墳墓は石室の形態、後述する鏡の位置づけ等から、奈良時代に構築されたと考えられる。両者の他に遺構がないことからこの2基の墳墓のために小さな谷の全空間が墓域として利用されたと言える。

## ② 出土遺物

### ア. 瑞雲双鸞八花鏡 (図20)

本鏡は外縁八花形の形取り、及び内区、外区の文様構成から「瑞雲双鸞八花鏡」と呼ばれ、唐様式の鏡背文様をもつことから唐式鏡とされているものである。素円鈕の蒲鉾式彫側高縁で「へ」字圏をなし、鏡面はやや凸面である。内区の文様は鈕の左右に首に綬をつなぐ鸞を相対させ、鈕上に瑞雲、鈕下に蔓草を踏み穀穂をくわえた小鳥を置く。瑞雲は上下2種の文様からなり、上に長さの異なる4条の筋を水平に重ね、下には2個の相対する飛雲を置く。外区には飛雲と草花が交互に配される。鏡面径12.0cm、重さ267g (註1)である。

本鏡はその左半分の文様があまり、かつ鏡胎がもろく腐食も進んでいる。それに対し右半分の文様は鮮明で、鸞の羽の筋や瑞雲の4条の筋あるいは小鳥が踏む蔓草が識別できる。さらに外区の飛雲や草花の形も明瞭である。ただ鑄出された文様はその肉質に丸味をもち、明瞭な稜をなすことはない。

瑞雲双鸞八花鏡の同種文様鏡は全国で11面知られており、外区がなく内区文様のみの円鏡である京都府周山廃寺出土例を加えると12面となる(中野政樹1973a 奈良国立文化財研究所1981)。本鏡は白銅質で舶載唐鏡とされる宮崎県本庄古墳群出土以外の同種文様鏡と文様表出や文様形態が酷似する(註2)。しかしこれらの中では文様表出は良好で、径は最大である。ここで本鏡と本庄古墳群出土鏡とを比較してみよう。文様表出技法は本鏡の方が全体的にあまく踏返し鑄造されたものと考えられる(註3)。本鏡の文様形態は、瑞雲の4筋の雲の最大幅が下の2対の飛雲の幅に近く、瑞雲と双鸞との位置も近い。また外区の第3・5花

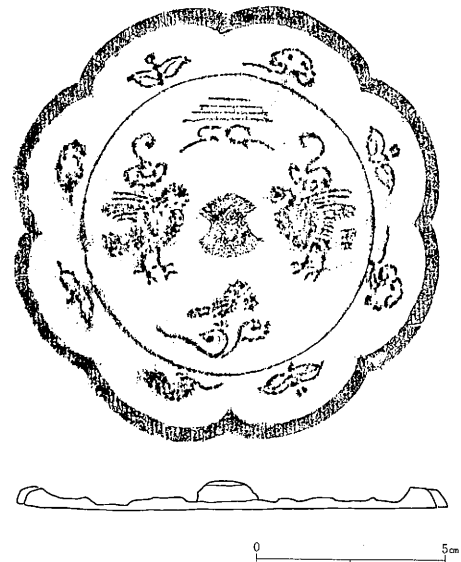


図20 大久保B遺跡瑞雲双鸞八花鏡拓影  
(1:2)

(註1) 東京国立文化財研究所に保存処理を依頼する前に計測。

(註2) 鏡の観察は下記の文献の写真図版を使用した。

本庄古墳群出土鏡・靈安寺出土鏡(2面)・神門神社伝世鏡(3面)・香取神宮伝世鏡については(中野1973a)。坂田寺出土鏡については(奈良国立文化財研究所1981)及び実見。湯船口古墳出土鏡については(東京帝室博物館1937・中野1973a)。

(註3) 中野政樹氏御教示(1983, 1, 24)。

弁(註1)の飛雲の尾の長さを見ると横軸及び縦軸(註2)との関係では第3花卉の飛雲の尾は横軸より上に出て、第5花卉の飛雲の尾は縦軸に達しようとしている。これに対し本庄古墳群出土鏡は瑞雲の4筋の雲が2対の飛雲の幅より短く、瑞雲と双鸞は離れて位置し、外区第3花卉の飛雲の尾は横軸より出ない。これは中国出土の唐鏡とよく似た特徴である(註3)[梁上椿1945、陝西省文物管理委員会1979]。なお本庄古墳群出土鏡の第5花卉の飛雲は不明瞭であるが、唐鏡ではその尾は縦軸に完全に届いていない。

ところで本鏡のような唐式鏡は、唐鏡の様式が完成し、盛行する時期(高宗の後半~則天武後の頃)より後の所産とされ、7世紀末から8世紀に入った頃以後使用ないし製造されるようになったと考えられている[中野1973a]。また和鏡が日本で創作され唐式鏡が用いられなくなったのは平安時代の初め頃とされている[中野1973a]ので唐式鏡の使用された年代は奈良時代を中心とした時期に限られてくる。踏み返し鑄造をくり返すたびに鏡の径は小さくなることを考えれば、唐鏡の12.2~12.6cm、本庄古墳群出土鏡の12.3cmに比べ、本鏡の12.0cm、本鏡に次ぐ大きさの靈安寺出土鏡の11.9cmは、1段階新しい踏み返し鑄造の結果であることが考えられる。だとすれば唐鏡が日本に輸入され、すぐ本鏡が鑄造されたのではなく、少し時間が経過してから踏み返し鑄造された可能性が高い。本鏡の鑄造時期を明確にし得ないが、少なくとも奈良時代の早い時期にさかのぼるものとは考えられない。

#### イ. 瑞雲双鸞八花鏡の鉛同位体比

東京国立文化財研究所 馬淵久夫

##### (ア) はじめに

鉛同位体比法は青銅器の原料産地を推定するための手法として、近年クローズアップされて来た(馬淵久夫・富永健編1981, 1986)。

鉛は質量の異なる4種の同位体 $^{204}\text{Pb}$ ,  $^{206}\text{Pb}$ ,  $^{207}\text{Pb}$ ,  $^{208}\text{Pb}$ の混合物であり、その混合比(同位体比)は鉛鉱床の性格によって異なるので、産地の指標になり得る。筆者は弥生時代から歴史時代初頭に至るまでの日本出土の青銅器にこの手法を応用し、各時代の青銅原料に関する知見を得ている(馬淵・平尾1982a, 1982b, 1982c, 1983, 馬淵・江本ほか1983)。

今回、長野県岡谷市大久保B遺跡出土の瑞雲双鸞八花鏡を測定したのでその概要を報告する。

##### (イ) 実験法

本法は殆ど非破壊法と言って差し支えない。出土青銅器に必ず生じている鏽を微量(約1ミリグラム)採取すれば良く、外観をそこなうことはない。漢式鏡や唐式鏡は常に数パーセントの鉛を含んでおり、鏽にもそれに近い鉛が含まれているので、1ミリグラムの鏽には数十マイクログラムの鉛が存在する。鏽試料の化学分離によって得られた鉛のうち約1マイクログラムを取って、東京国立文化財研究所に設置されている日本電子社製表面電離型質量分析計で鉛同位体比を測定した。

##### (ウ) 結果

各試料の測定値は表7のようになった。

(註1) 外区は縁の八花形により8つの花卉に区切られるので、右上より時計廻りに第1~8花卉と呼称する。

(註2) 第2、3花卉間にある縁の内側への張り出しと第6、7花卉間の張り出しを結んだ線を横軸、第1、8花卉間と第4、5花卉間の張り出しを結ぶ線を縦軸とする。縁の外側の抉り込みを結んで軸線を設定できるが、鏡の鑄造後、湯口に当たるところは削られ整形されるので、当初予定した形とはならない場合がある。つまり湯船口古墳出土鏡と神門神社伝世鏡の1面は外縁の右の部分が削りすぎて幅狭くなっているという指摘(中野1973a)がある。そこで内側へ張り出した稜は当初予定していた通りであるため、それを使って軸線を設定した。

(註3) 鏡の観察は下記の文献の写真図版を使用した。

新郷付近出土鏡・洛陽出土鏡については[梁上椿1945]。西安付近出土鏡については[陝西省文物管理委員会1979]。

No.	資料名	$^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$	$^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$	文献
1	瑞雲双鸞八花鏡	18.424	0.8475	2.0910	
2	和銅開珎	18.404	0.8475	2.0918	未発表
3	万年通宝	18.394	0.8473	2.0904	[馬淵・平尾ほか1982c]
4	神功開宝	18.403	0.8473	2.0908	[ " ]
5	富寿神宝	18.402	0.8469	2.0905	[ " ]
6	乾元大宝	18.389	0.8479	2.0899	[ " ]
7	桜郷鉞山 方鉛鉞	18.440	0.8467	2.0907	[馬淵・平尾ほか1982a]
測定誤差 (1σ)		±0.010	±0.0003	±0.0007	

表7 鉛同位体比測定値一覧表

(±) 考察

鉛同位体比の測定値から鉛の産地を推定するためには、産地の分かった鉛鉞石と時代別の考古遺物の測定値を基準にしなければならない。筆者が確立したタイプ別の鉛同位体比の分布範囲を図21に示す。以下、この図の概略を説明する。

まず、Aの範囲は、弥生時代に将来された前漢鏡が占める位置で、華北の鉛である。Bは後漢・三国時代の舶載鏡の占める範囲で、華中または華南の鉛。古墳出土の青銅鏡の大部分はここにはいる。Cは日本産の鉛鉞石。Dは多鈕細文鏡・細形銅利器のような弥生時代に将来された朝鮮系遺物が位置するラインである。弥生時代から古墳時代中期までの出土遺物はA、B、Dの何れかに属し、Cに入るものはないことが今までの測定で分かっている。

さて大久保B遺跡出土の瑞雲双鸞八花鏡を図にプロットすると、Cすなわち日本産鉛の範囲に入る。図

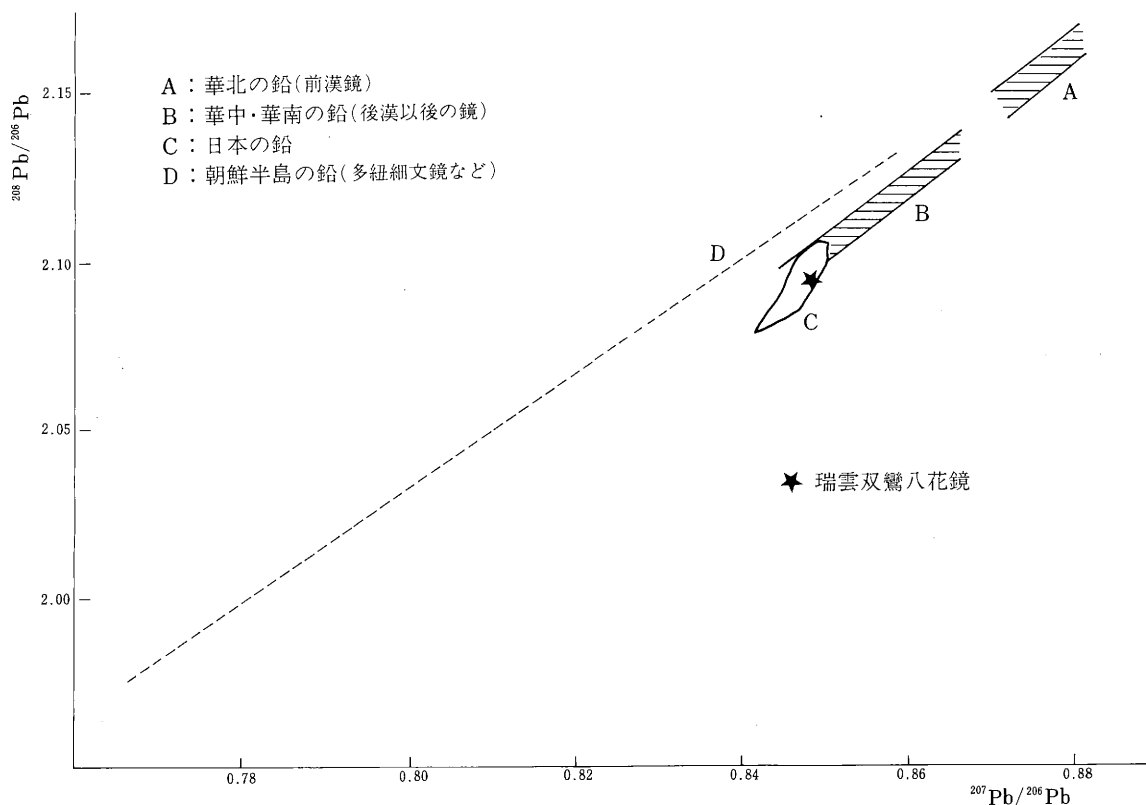


図21 大久保B遺跡瑞雲双鸞八花鏡の鉛同位体比

には使わない<sup>206</sup>Pb/<sup>204</sup>Pbも日本産鉛の範囲に入る。このような鉛は漢式鏡(仿製も含む)には含まれず、奈良時代以降に現れることが従来の分析で分かっている。参考までに、筆者が測定した皇朝十二銭の鉛同位体比を表に示した。

表の数値を細かくみると、No.1～6の6資料の全てが誤差の範囲で一致していることがわかる(この場合、99.5%信頼限界の2σをとる)。つまり、すべて日本の中の1つの鉱山の原料を使っていることを物語っている。筆者は近代に開発された日本の鉱山から約70試料を採取して測定したが、奈良時代・平安時代のこのような鉛同位体比と完全に一致したものは見出されていない。最も近い値を示すのは、山口県桜郷鉱山である(表のNo.7)。(昭和61年12月3日)

ウ. 瑞雲双鸞八花鏡の保存処理

東京国立文化財研究所 青木繁夫

(ア) はじめに

長野県岡谷市大久保B遺跡出土瑞雲双鸞八花鏡の保存処理については、(財)長野県埋蔵文化財センターの依頼により、数年来保存処理実験を繰り返して来た銅腐食生成物の安定化処理のケーススタディーとして実施したものである。

保存処理に先だて、材質調査のため蛍光X線分析、原料産地推定のための鉛同位体分析、腐食生成物調査のためのX線回折分析を行った。

これらの分析は、保存処理の際に遺物が持っている情報を可能な限り引出すために行うもので、保存処理行為の重要な仕事になっている。とくに腐食生成物の分析調査は遺物の病状を適格に判断し、処理方針を決定するうえでとくに必要とするものである。

(イ) 保存状態

処理前重量265g、破損がなく全体に保存状態は良いが、鏡面、背面を被っている緑青が粉状に剝落する(PL12-2.3)。

(ウ) 分析

⑦ 材質

素材の材質を知るために蛍光X線分析を行った。非破壊的方法によったため分析対象元素は、重金属元素領域に限られる。鏡背の錆層の薄いところ三カ所を選んで測定を行った。

八花鏡から測定された元素は、表-8に示す通りである。この結果から、この遺物は銅を主成分とし、不純物程度の錫や鉛を含んでいる。

⑧ 腐食生成物

鏡面、背表面に付着している緑青色の錆を少量採取し、X線回折分析を行った。結果は表-9の通りである。幸いブロンズ病の原因である塩基性塩化銅は検出されなかった。しかし酸化第一銅中にはときとして点々と塩基性塩化銅が含まれることがある。この分析では金属の内部まで調査することは不可能なので酸化第一銅中の塩基性塩化銅を検出することは出来ない。したがって酸化第一銅中に塩基性塩化銅が存

検出元素	スペクトル強度
銅	++++ 強
錫	± 微
鉛	± 微

表8 蛍光X線分析結果

検出鉱物	スペクトル強度	
	鏡面 錆	鏡背 錆
酸化第一銅	+++ 強	+++ 強
塩基性炭酸銅	++ 強	++ 強
α-石英	+ 弱	

表9 X線回折分析結果

在するものとして腐食生成物の安定化処理を行う必要がある。

(エ) 保存処理

幸いにしてブロンズ病の原因である塩基性塩化銅は検出されなかったが、検出された酸化第一銅は、水や塩化物が存在する環境下ではそれらとすぐ反応をおこし、塩化第一銅やブロンズ病である塩基性塩化銅を形成するため、脱塩処理と錆の安定化処理を行うことにした。

錆の安定化処理は、現在までのところ最も効果の大きいベンゾトリアゾール法にて実施することにした。

㊦ クリーニング

表面に付着している土は、エチルアルコールの中で刷毛でブラッシングして除いた。鏡背表面に付着している錆は、竹ペラや針を用い、顕微鏡下で除去した。

㊧ 脱塩処理

蒸留水中に脱塩を行い、硝酸銀法にて塩素量のチェックをした。

㊨ 錆の安定化処理

ベンゾトリアゾールの3%エチルアルコール溶液を減圧含浸し、更にそのまま30日間浸漬した。

㊩ 効果の判定

ベンゾトリアゾール処理の終わった鏡を高湿度下に1週間置き処理効果を判定した。いままでの実験では、ベンゾトリアゾール処理の効果がないものは2日程でブロンズ病の特徴である明るく白っぽい粉状の緑青が発生するが、今回1週間放置してもなんら変化がみとめられなかったのでベンゾトリアゾール処理が有効であると判定した。

㊪ 強化処理

八花鏡を強化するためにベンゾトリアゾールを3%含有したアクリル樹脂(インクラック)を30mmHgに減圧して含浸させた。

(オ) 終りに

以上のべたような方法で材質調査と保存処理がなされた(PL12-4.5)。このようにして錆の安定化処理がなされたとはいえ、相対湿度が高いところに保存すれば、錆が発生する危険性が大きい。今後は結露しないように相対湿度40%以下の湿度の低いところで保存管理することが望ましい。

(昭和61年12月3日)

エ. 2号墳墓出土人骨

信州大学 西沢寿晃

出土人骨は極小の破片で約50片、400g程度である。いずれも骨の表面に細かな亀裂を生じ、長管骨の骨体部分等には捻転性の変形がみられる。破碎された骨の断面は鋭角的で、横折、縦割状の細片として残されている。色調は灰白色のものが大部分で、一部に青みを帯びたものや、黒色で炭素の付着するものもみられる。これらの性状は池田次郎が火葬骨の変化についてまとめた種々の傾向に合致する〔前園実知雄・池田次郎ほか1981〕。すなわち臨界温度700°~800℃として、それ以上を完全焼骨とするが、残存する骨の変化はこの火力の相違によるものと考えられている。それに従えば、本例はほぼ完全焼骨とされるもので、一部に不完全焼骨が混在することになる。茶毗に付された1体の人骨とみなした場合、身体の部位により火熱の受け方の差異が生じたといえよう。

識別できた骨の部位は以下の通りである。形質的な特徴はまったく不明であるが、ほぼ全身の各部位にわたって遺存するとみることができる。

頭蓋骨の小破片 3片(うち1片の縁辺に離脱した人字縫合の一部が残る。)



肋骨骨体の小破片	上腕骨骨体の一部（長さ約5.5cm）
寛骨耳状面の一部	大腿骨骨体の一部（長さ約5.0cm）
脛骨骨体の小破片	舟状骨 1個
中足骨の近位関節部分	1片

（昭和57年12月14日）

#### （5）平安時代以降の遺物

平安時代以降の遺物はⅠ・Ⅱ層から散漫に出土した。

出土遺物には、平安時代の須恵器片、中世の天目茶碗片、中～近世の内耳土器片と土師器片、近世以降の陶器片などがわずかずつある。

### 5. 成果と課題

奈良・平安時代の墓には、土葬墓、火葬墓等があるが、墓と断定できる資料は火葬墓が主体である。以下、主として火葬墓を念頭におきながら大久保B遺跡の1号墳墓、2号墳墓及び大洞遺跡と白山遺跡の石組墓が長野県内における該期の墓の中でどのような位置付けが与えられるのか検討したい。

4基の墓は背後に山を負い、南面する斜面の中腹に位置し、東西を尾根で囲まれていて前面に流水もしくは谷を挟んで山（尾根）に対してのり。ただ白山遺跡の場合、東を画す尾根がない。このような占地のあり方は、奈良時代の貴族階級間に盛行した風水思想に基づく墳墓の占地そのものであるという（註1）。

次に埋葬施設についてみると大久保B遺跡の2基はともに小規模ながら横穴式石室の系譜に連なる石室をもち、大洞・白山遺跡でも小規模ながら掘り方と石室状の石組みをもつ。

埋葬方法はいずれも火葬と思われ、大久保B遺跡2号墳墓の鏡1点以外は副葬品をもち、骨蔵器には土器等は用いていない。このような特徴から奈良時代の有力階層の墓であることが考えられる。

さて県内の奈良・平安時代の墓を立地の上でみると、丘陵斜面に立地するものと、集落の営まれた扇状地や段丘上、あるいは沖積地の微高地上に立地するものに分けることができる。丘陵斜面に立地するものは南面する斜面、北面する斜面と様々であるが南面するものが多く、風水思想の影響が看取できる。こうした立地は奈良・平安時代を通して認められる。また、墓の多くは単独で存在し、諏訪市神宮寺遺跡のように1ヶ所に数基の骨蔵器がまとめて置かれた例はまれである。

次に集落周辺に立地する墓は、集落内もしくは集落に近接した場所に存在する。集落内の墓は数基以上集まることはなく、住居に切られた墓もあることから、墓域は意識されていなかったと考えられる。一方集落に近接して墓域が形成されている場合、墓は数基以上つくられていて、長期にわたり墓域として意識されていたものと考えられる。このような立地の墓が出現してくるのは岡谷市金山東遺跡（藤森栄一1930）のように平安時代に入ってからである。

奈良時代の墓は風水思想を実現する占地をしたが、平安時代になると立地をかえて集落の内外にも設けられるようになり、丘陵斜面に立地するものは明瞭な風水思想を示す占地をとらなくなる。

次に墓の構造をみると、石室を構築するものと掘り方のみのものに分けられる。石室構造を有する墓は大久保B、大洞、白山遺跡の4基以外に県内に類例はない。なお静岡県には石室構造を有する火葬墓として藤枝市南新屋古墳群萩ヶ谷支群（藤枝市教育委員会1980）や同市内瀬戸火葬墓群（藤枝市教育委員会1981）に類例が知られる。そこでは小規模な横穴式石室や竪穴式石室が築造され、大久保B遺跡などと同様に骨

（註1） 風水思想については斎藤忠氏の所説（斎藤忠1935）に従った。

蔵器は残存していない。小規模な横穴式石室は無袖形で羨道部の退化した横穴式石室最末期の形態に近似している。また小規模な竪穴状石室はほぼ方形で、床石と側壁をもつ。両者とも奈良時代の所産とされ、一部併存した可能性も考えられている。

一方、掘り方のみの墓には、簡単な石組をもつもの、木炭敷きのもの、それらが組み合ったものもみられるが、そうした例はわずかにすぎない。これらの墓の大部分は、土師器や須恵器、灰釉陶器の骨蔵器を収納しており、その骨蔵器や副葬品から時代の判明するものはすべて平安時代の所産である。また簡単な石組や木炭敷きをする墓では、更埴市平田2号火葬墓〔更埴市教育委員会1983〕や同市五輪堂南地区2号火葬墓〔更埴市教育委員会1982〕のように土師器や灰釉陶器のような副葬品を多くもつ例がよく認められる。

このように石室構造をもつ墓は奈良時代に限られ、平安時代には認められない。それに対して掘り方を掘って骨蔵器などを収納するものは平安時代に入ってから営まれるようになったと言える。

葬法では、火葬が特徴的で、奈良時代の墓の多くは火葬骨を埋納しているが、平安時代に入ると土葬例が少なからず存在する。

以上、立地や構造の上で長野県の奈良・平安時代の墓制をみると、石室構造をもつ火葬を主体とした墓が丘陵斜面中腹に位置し、一定の墓域をもつもの(A)と、掘り方に骨蔵器や木棺を埋納し、時には簡単な石組や木炭敷きを伴う墓が集落と離れた丘陵斜面や集落内に単独で営まれるもの(B)、掘り方のみの墓が集落外に墓域をもち、集合して営まれるもの(C)、に分けられる。(A)は奈良時代、(B)・(C)は平安時代に属する。

大久保B、大洞、白山各遺跡の墓はその立地や埋葬施設の特徴から(A)に属す。(A)には石室形態から横穴式石室と小竪穴状石室の二者があり、前者では盛土の存在が考えられ、墳墓の存在を顕示したものと考えられる。大久保B遺跡の墳墓は小規模ながら横穴式石室をもち、古墳時代の横穴式石室の伝統を受け継いでいると考えられるが、火葬という新しい葬法も取り入れている。被葬者には、古墳時代以来の伝統をもちつつも、律令制下の新しい葬法を取り入れることができた人々、つまり在地首長層であったことが想定できる。それは八花鏡を所持していたことからもうかがえる。2基の墳墓は2号墳墓→1号墳墓の順に構築されたと考えられる。小竪穴状石室を構築した大洞、白山遺跡の被葬者も、一定の墓域をもつことから地域の有力者であったことが考えられる。両者の石室構築の状況を見ると白山遺跡の方が積み方が整っていないこと、明確な床石をもたないことからより簡略化されている。大洞遺跡の墓が先行し、白山遺跡の墓が後続すると考える。また大久保B遺跡の墳墓と大洞、白山遺跡の墓は併行するか、古墳時代の伝統を残す大久保B遺跡の墳墓が最初に構築された可能性が高い。終末期の古墳との関係は検討しきれなかったが、諏訪地方は比較的資料に恵まれた地域であり、いずれ論じたいと思う。

## 6. 小結

大久保B遺跡からは、縄文時代の土壌群と遺物、奈良時代の墳墓2基と火葬骨及び副葬品の鏡が発見された。縄文時代については、地形的にみて土壌群は集落の一部とは考えられないものの、遺跡の性格を特定するのは困難であった。

奈良時代の墳墓2基は該期にはこの谷が墓域であったことを示す。短期間、特定階層もしくは特定家系に墓域として独占されたものの、それ以後は近世まで利用されることなく過ぎたものとみられる。

さて、2基の墳墓は奈良時代の墓制を知る重要な資料となった。諏訪地方は終末期とみられる古墳がある程度知られ、研究成果もあがっているが、それ以降の墓制を統括するような研究は生まれていない。年代の推定ができる本遺跡の墳墓は古墳時代末～奈良・平安時代の墓制を知る上で意義が大きい。また、被葬者の社会的位置づけが推定でき地域の社会構造の研究上も重要な意義をもつとみられる。

近年の発掘調査により、特に松本盆地で古墳時代末～平安時代の墓制に関する資料が蓄積されつつある。

それらを総合する時、東国の一地方が律令体制に組み込まれてゆく過程の一端が墓制の面からも示されることになるだろう。

#### 参考文献

- 更埴市教育委員会 1982 『五輪堂遺跡II』  
更埴市教育委員会 1983 『横沢遺跡群I』  
斎藤 忠 1935 「上代に於ける墳墓地の選定」 『歴史地理』65-6  
遮那藤麻呂 1968 「信濃における古代火葬墳墓のあり方」(1)(2) 『伊那』16-6, 7 伊那史学会  
" 1984 「日本各地の墳墓—中部・北陸」 『仏教考古学講座』第7巻 雄山閣  
陝西省文物管理委員会 1979 『陝西省出土銅鏡』  
帝室博物館 1937 『天平地宝』  
東郷正美・今泉俊文・澤祥・松田時彦 1985 「長野県岡谷市大久保遺跡にあらわれた断層露頭」 『活断層研究』1 活断層研究会  
中野政樹 1973 a 「奈良時代における出土・伝世唐式鏡の基礎資料および同范鏡の分布とその鑄造技術」 『東京国立博物館紀要』第8号 東京国立博物館  
" 1973 b 『和鏡』美術選集第7巻 フジアート出版  
中村竜夫 1969 「諏訪市神宮寺仲畑の蔵骨器群」 『長野県考古学会誌』7号 長野県考古学会  
奈良国立文化財研究所 1981 「坂田寺第3次の調査」 『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』11  
藤森栄一 1930 「降平永宝を伴出せる蔵骨器」 『考古学』1-2 東京考古学会  
藤枝市教育委員会 1980 『日本住宅公団藤枝地区埋蔵文化財発掘調査報告書』II  
" 1981 『 " " " III  
前園実知雄・池田次郎ほか 1981 『奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告 第43冊 大安麻呂墓』 奈良県教育委員会  
馬淵久夫・富永健編 1981 「考古学のための化学10章」 東京大学出版会  
馬淵久夫・平尾良光 1982 a 「鉛同位体比による漢式鏡の研究」 『MUSEUM』370号 東京国立博物館  
馬淵久夫・平尾良光 1982 b 「鉛同位体比からみた銅鐸の原料」 『考古学雑誌』68巻1号 日本考古学会  
馬淵久夫・平尾良光ほか 1982 c 「古代東アジア銅貨の鉛同位体比」 『考古学と自然科学』15号 日本文化財科学会  
馬淵久夫・平尾良光 1983 「鉛同位体比による漢式鏡の研究(2)」 『MUSEUM』382号 東京国立博物館  
馬淵久夫・江本義理ほか 1983 「鉛同位体比による太安萬侶墓誌銅板及び武蔵国分寺付近出土銅造仏の原料産地推定」 『古文化財の科学』28号  
馬淵久夫・富永健編 1986 「統考古学のための科学10章」 東京大学出版会  
梁 上椿 1945 『巖窟蔵鏡』第3集  
和田博秋 1983 「大久保B遺跡」 『長野県史 考古資料篇 主要遺跡(中南信)』 長野県史刊行会

## 第2節 くだばやし 下り林遺跡 (GKB)

### 1. 遺跡の概観

岡谷市山手町二丁目1番地に所在する。遺跡は諏訪湖盆の西北に位置する塩嶺山塊の開析された一つの舌状尾根の上であり、尾根の頂上から斜面にかけて、南北約100m、東西約70mの範囲にわたる。現状は森林であり、林道がつくられている。諏訪湖面との比高差約120m、岡谷市街地との比高差100mで、眼下に諏訪湖盆が一望できる。

下り林遺跡は大正時代末期すでに鳥居龍蔵氏により、『諏訪史』第一巻の中で遺物の採集が報告されている〔鳥居龍蔵1924〕。石鏃の採集が報告されたのみであったが、本遺跡が初めて研究の舞台に登場した記載として注意しておきたい。

当遺跡が今日、その価値が知られるに至ったいきさつについては戸沢充則氏の論稿〔戸沢充則1973〕に詳しいが、戦時下の昭和18年、小学生が空襲に備えて掘った防空壕より土器片が出土したことを契機とする点は、当時の時代性を反映する出来事として興味深い。

昭和23年から24年にかけて、戸沢充則氏を中心とする当時の高校生らによって継続的に行われた発掘によって、下り林遺跡は、「戦後長野県で最初に発見され、組織的に調査された縄文時代早期の遺跡」〔戸沢1973〕との位置づけが行われることになる。さらに、昭和25年〔戸沢1950〕、同26年〔戸沢ほか1951〕と相い次いで調査報告がなされ、遺跡の重要性は大方の知るところとなった。とりわけ、当時関東を中心とする学界で盛んになされていた日本最古の土器をめぐる縄文早期文化の研究、わけても撚糸文系土器の編年研究に関連して廻転押捺文(押型文)系土器のあり方が注目された。先の昭和26年の調査報告において戸沢氏も「諏訪地方はもとより、この地方において発掘状況・検出関係の明らかな最初の例としての意義を記念

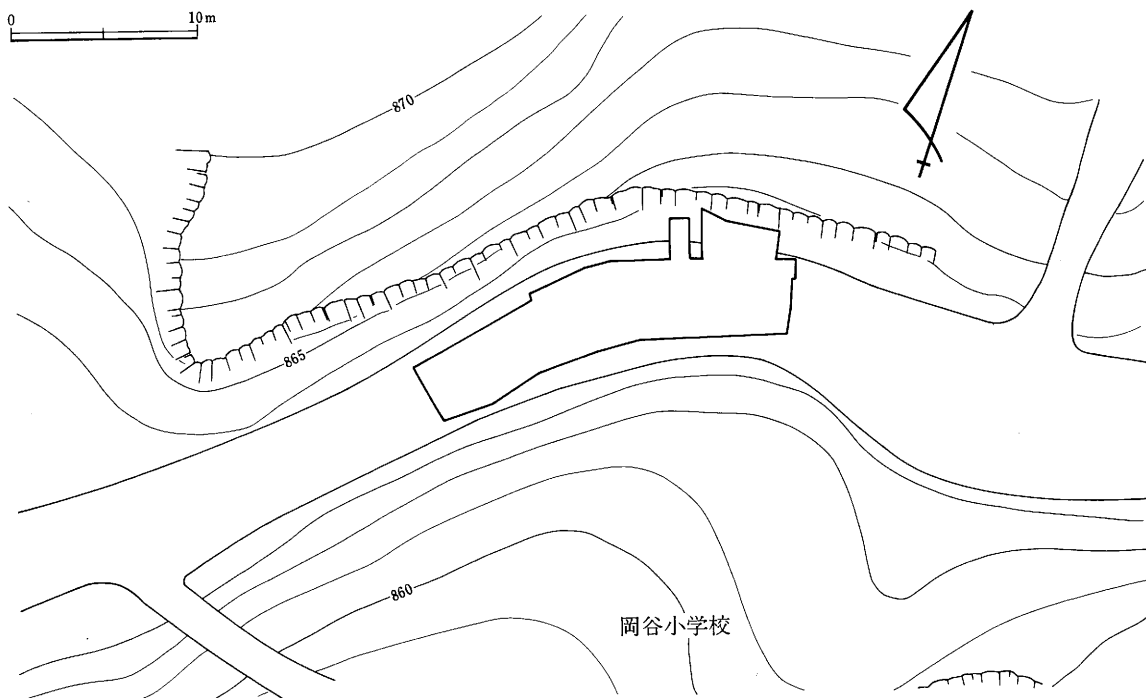


図22 下り林遺跡発掘範囲及び地形図 (1:400)

したい。」として取り上げ、それを「押型文としても相当古い相をもつ」と位置づけた上で、関東地方の撚糸文系土器との文様上の比較を試みている。この土器群は、後年藤森栄一氏により、「下り林1式と仮称し編年学的調査の進行に備えられ」た(八幡一郎1954)。押型文土器研究の側から見れば、これ以後この時期の遺跡が相次いで調査され、幾多の成果が生み出されたわけで、その契機をなした遺跡として重要であろう。そして、これによる押型文系土器研究の進展は、その後押型文系土器が撚糸文系土器群に対して独自の位置づけを与えられるための基礎となったことも見過ごしえぬ点であろう。

その後、本遺跡に対し調査・研究のメスが直接入れられることはなかったが、昭和43年『岡谷市史』編纂に伴う資料収集のための試掘調査が実施され、縄文時代早期後半期の遺物が検出されている。長崎元廣氏の詳報(長崎元廣1984)によれば、遺跡中央付近に行われたこの調査によって、Y地点と仮称された地区より茅山式の“完形土器”2点のほか多数の土器片・黒曜石片が同一層位から出土しており、同氏はそれら土器群の中にみられる“関東的な要素”と“土着的な要素”を抽出した上で、中部地方の土着的な要素を色濃くもっている『これら一群の土器を茅山下層式並行としての「下り林」と仮称することを提案』(長崎1984)している。この「茅山下層式並行一下り林式」の設定については『茅山式』の地域性を追求するための足がかり』となる作業概念としては一定の有効性は認められるものの、氏自らが指摘しているとおり、資料的な制約が大きい現在、それが“型式”として一人歩きすることに対しては危惧の念を抱かざるを得ない。とりわけ、昭和29年に藤森氏により押型文系土器に対して設定された「下り林I式」に対するその後の評価なしに、時間的にも型式的にも全く異なる土器に「下り林式」なる名称を与えることは、今後の土器研究に混乱を招く要因ともなりうるのではないだろうか。

## 2. 調査の概要

今回の調査地点は遺跡の中心と考えられる尾根の上ではなく、岡谷小学校裏手の急斜面であった。中央自動車道長野線建設にあたって工事用道路に利用される現存林道の拡張工事に伴う調査のため、対象面積は350㎡とわずかである。発掘調査は昭和57年12月上旬に現存林道のカットされた面を調査したが、遺物や遺構はなかった。翌昭和58年7月工事用道路改修工事の折、昨年度調査地点より南側から遺物が多出したので日本道路公団と協議し、立合い調査を実施した。調査は7月中旬～8月中旬に行われ、調査員は主として3名が当たった。整理作業は同年12月から継続的に行い、本報告に至った。この間当センター刊行の『長野県埋蔵文化財センター年報』1に概要を報告した。

昭和57年度の調査は既にカットされている斜面を精査した。昭和58年の立合い調査では、調査区域北側に幅1mのトレンチを東西に設定し、堆積状況の観察を行った結果、明瞭な包含層を3層とらえた。また、旧地形が急な斜面であることが確認でき、遺構の存在の可能性が少ないと考えられた。そこでグリッドを設定し、層位を重視して遺物を取り上げることとした。なお、急斜面と狭い面積のため、林道設営の際の盛土を重機で除去し、それより下部を人力により層位ごとに掘り下げた。調査中には戸沢充則氏より指導を受けた。

測量は遣り方測量を用いた。測量の基準点は、中央道工事用道路クイ7を使用し、複数の工事用基準杭の座標値から座標北を算出した。基準点の座標値は第VIII測量系の $X=7048.466$ 、 $Y=-41217.45$ である。またレベル原点は工事用クイ7の標高を用い863.908mである。グリッドの設定は地形にあわすため、基準点クイ7を基点として軸を座標北から20°西へずらした。

### 3. 調査の経過

#### 昭和57年

- 12月3日 現道路でカットされた斜面を調査。遺物なし。
- 12月4日 土層図を作図して終了。

#### 昭和58年

- 7月11日 林道脇にトレンチを設定し調査。縄文時代早期～中期の遺物が多数出土。
- 7月19日 層位を確認検討し、工事用道路部分の調査範囲を決める。
- 7月30日 工事用道路部分の調査開始。
- 8月2日 重機により林道盛り土の除去、II～III層の掘り下げ。ところどころに攪乱がはいることを確認。

- 8月3日 IV層の掘り下げ。戸沢充則氏の指導を受ける。
- 8月4日 V層の掘り下げ。遺物が多量に出土。
- 8月9日 土壌及び焼土址を調査。北側部分を拡張。
- 8月10日 北側拡張部分に平安時代住居址を検出調査。
- 8月11日 VI層上面まで掘り下げ終了。確認のためVII層を掘り下げるが遺物はなく、調査終了。

#### 昭和58年～61年

報告書作成のための整理作業。

### 4. 調査の結果

#### (1) 層序と地形形成 (図23)

基本的層序は以下の通りである。

盛土：林道建設のために盛られた土。

I層：黒色土（腐植土）で林道建設以前の表土。

II層：火山灰を母材とする暗褐色土。

III層：火山灰を母材とする黒褐色土で、平安時代の遺物包含層。

IV層：火山灰を母材とする極暗褐色土で、弥生時代中期初頭の遺物包含層。

V層：火山灰を母材とする暗色土で、縄文時代早期から中期にかけての遺物包含層。

VI層：火山灰を母材とする褐色土で、ローム層との漸移層である。縄文時代早期の遺物をわずかに含む。

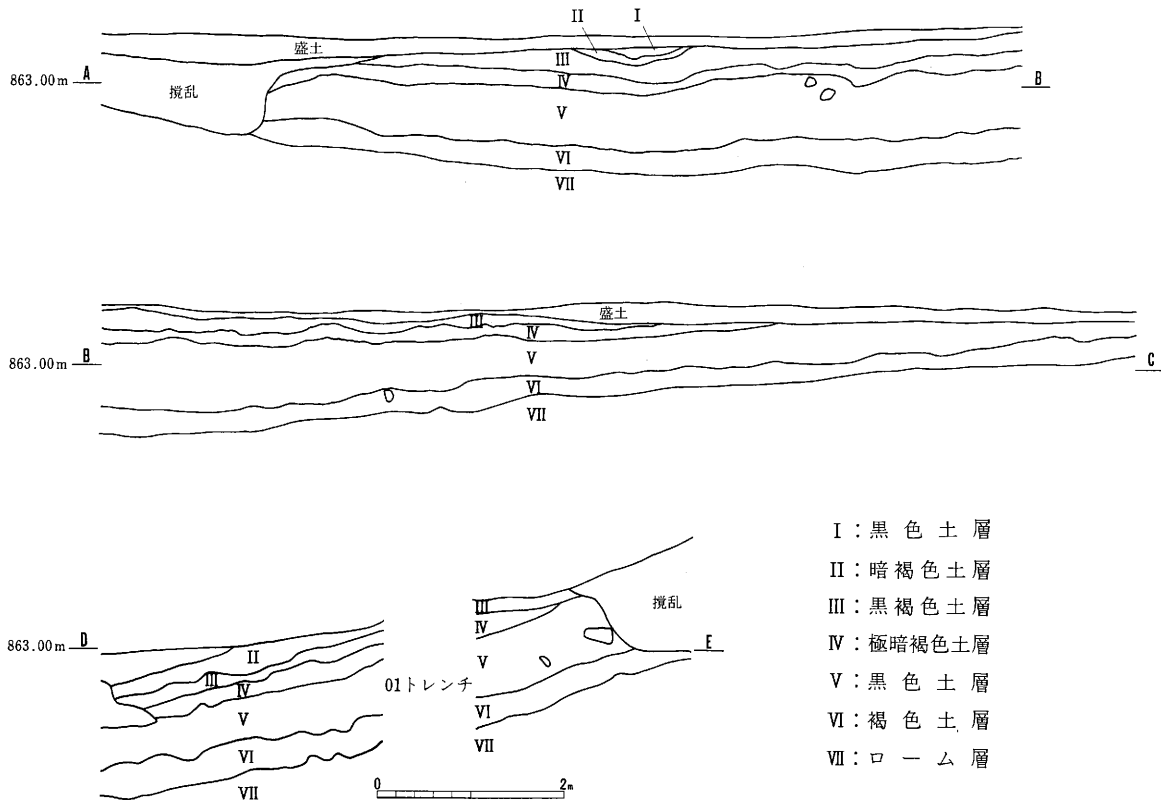


図23 下り林遺跡土層図 (1 : 80)

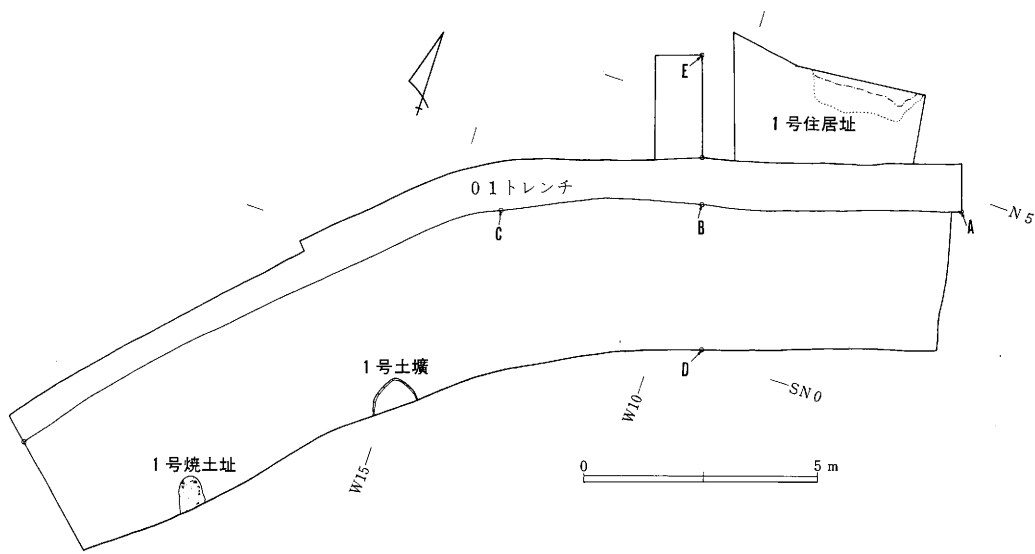


図24 下り林遺跡遺構配置図 (1:160)

VII層：角礫を多く含むローム層（再堆積ローム）。

層序の基本は、塩嶺累層の基盤の上に崩落物を含むローム層がのり、その上位が土壌化して遺跡成立時の地表となったと思われる。林道建設の工事の際に上面は削平されているが、発掘域中央部の一番深い部分のみI～VII層の堆積がみられる。また、各層とも一様に南北方向に強い傾斜をもつ。

(2) 遺構と遺物の概観 (図24)

遺構は急な斜面という制約からか少なく、III層中に平安時代の住居址1軒と、V層中から掘り込まれた縄文時代の土壙1基、同じく焼土址1基である。

遺物には縄文時代草創期、早期前半、早期末葉から前期初頭、前期末葉から中期前半、弥生時代中期初頭、平安時代の土器、石器がある。

(3) 縄文時代の遺構と遺物

① 遺構と遺物の出土状況

ア. 1号土壙 (図25)

一部用地外にかかるため、平面プランは不明。検出面からの深さ30cmを測る。検出はV層下位で、VII層まで掘り込まれている。覆土はV層を基本としてロームブロックが混入している。遺物はなく時期決定はできないが、掘り込まれた層位から縄文時代に属するものと思われる。

イ. 1号焼土址 (図25)

南側は用地外にかかるため全体の広がりにはわからないが、20～30cmの厚さで炭と焼土が堆積している。V層中で検出されたが掘り方はみつからず、周囲も火を

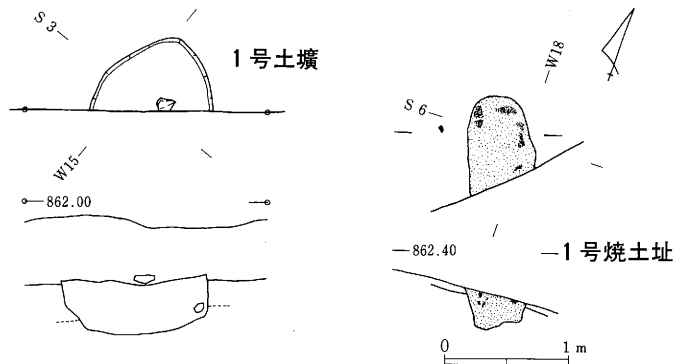


図25 下り林遺跡1号土壙・1号焼土址実測図 (1:60)

うけた痕跡はみられない。焼土と炭が捨てられた状況である。遺物はなく、層位から縄文時代に属すると思われる。

#### ウ. 遺構外の遺物

遺物のほとんどは、遺構外の出土である。層別に出土傾向をみると、IV層からV層上部にかけて前期末から中期前半の遺物が集中しており、V層の下部では早期前半と末葉の遺物が混在して発見された。VI層からは草創期から早期前半の遺物が出土し、有溝砥石も発見されている。調査範囲が狭いため、層毎の遺物の分布等については、特に傾向を指摘できない。

### ② 遺物

#### ア. 草創期の土器 (図26)

押圧縄文土器(1)と回転縄文土器(2)(註1)が1片ずつ出土した。1は器壁が7~8mm、胎土に多量の石英を含み、焼成は堅緻で、色調は灰褐色を呈す。ゆるやかな段をもつことが特徴で、器面には、縄文施文前に横方向に条痕が施されている。その後、段の部分に間隔をあけて2列の押圧縄文が横位に施される。そのうちの1列は、段の端に施文されている。これは、RL原体の先端を使ったことが、圧痕部の2~3節の様子から推測できる。段の下は原体の先端による圧痕と接するようにRL原体を横位に回転施文している。器壁の厚さ、胎土等に問題があるが、段をもつことや、施文方法等から室谷下層式土器に比定される可能性が高い。2は、表裏に縄文が施文がされている。器壁は4mm前後と薄く、胎土には、少量の石英、スコリア、雲母等の小粒子を含む。焼成は不良でもろいが、器面はざらつかない。色調は赤褐色を呈する。表はRL原体を縦位に、裏はRLの同じ原体を横位に施文している。

#### イ. 縄文時代早期前半の土器 (図26・27)

##### (ア) 土器の分類について

早期前半の土器は、次の3つの群に区分できた。1群押型土器97片、2群縄文施文の土器(註2)2片、3群無文土器1片である。三者は胎土が共通し、さらに1群と2群は施文原体こそ異なるが文様構成が共通する。この時期は、他に撚糸施文の土器、沈線施文の土器が共伴する例(註3)があるが、本遺跡からは出土していない。2群、3群は少量で細分することはできないが、1群には、既知の諸型式である立野式、樋沢式、細久保式が含まれるので、細分し検討を行う。1群の分類は、既知の3型式に準拠しつつ時間的まとまりを「類」とし、「類」の中で若干の時間差や地域差とみられるまとまりを「種」とする。しかし「類」についてはいくつかの問題を含む。第1は立野式の時間的位置付けが未確定であること、第2は樋沢式の内容が未確定なこと、第3は細久保式として一括された内容の整理についてである。いずれも分類の根幹に関わる問題であるが、本項では次のような分類を行う。第1類は立野式土器で、立野遺跡第5層出土土器(松島透1957)を指標と考える。立野式を第1類と仮定したのは、栃原岩陰遺跡で下層=格子目文主体で器壁の厚い立野式、上層=帯状施文の樋沢式という知見が得られ(西沢寿晃1982)、福沢遺跡でも下層=密接施文の立野式、上層=帯状施文の樋沢式が出土して(小林康男ほか1985)、層位的には、立野式→樋沢式の変遷が認められつつあるからである(註4)。第2類は樋沢式で、樋沢遺跡第1類押型土器(戸沢充則1955)

(註1) 縄文時代早期前半の第2群とした土器と、器壁の厚さ、胎土、文様構成等の区別が可能だが、焼成の不良などところに問題が残る。ここでは、草創期の土器として扱ったが、この種の土器は草創期のみ限定して存在するのではないとする宮下健司の意見(神奈川考古同人会1983)は傾聴すべきだろう。

(註2) 縄文が施文される土器について、草創期では、回転縄文土器、多縄文土器といった用語が使用されるのに対し、早期では、適切な表現が見あたらないので、縄文施文の土器として扱いたい。

(註3) 住居址内で伴出した例として、鍋久保遺跡(森嶋稔1976)、金塚遺跡(福島邦男1982)等があり、早期の土器は、各々の型式細分、編年の位置を明確にすると同時に、これらをセット関係でとらえて地域性を描出する作業が必要である。

(註4) 但し、文様構成では、樋沢式の特徴である異方向の帯状施文の系譜が、立野式のどこにたどれるのか問題が残る。



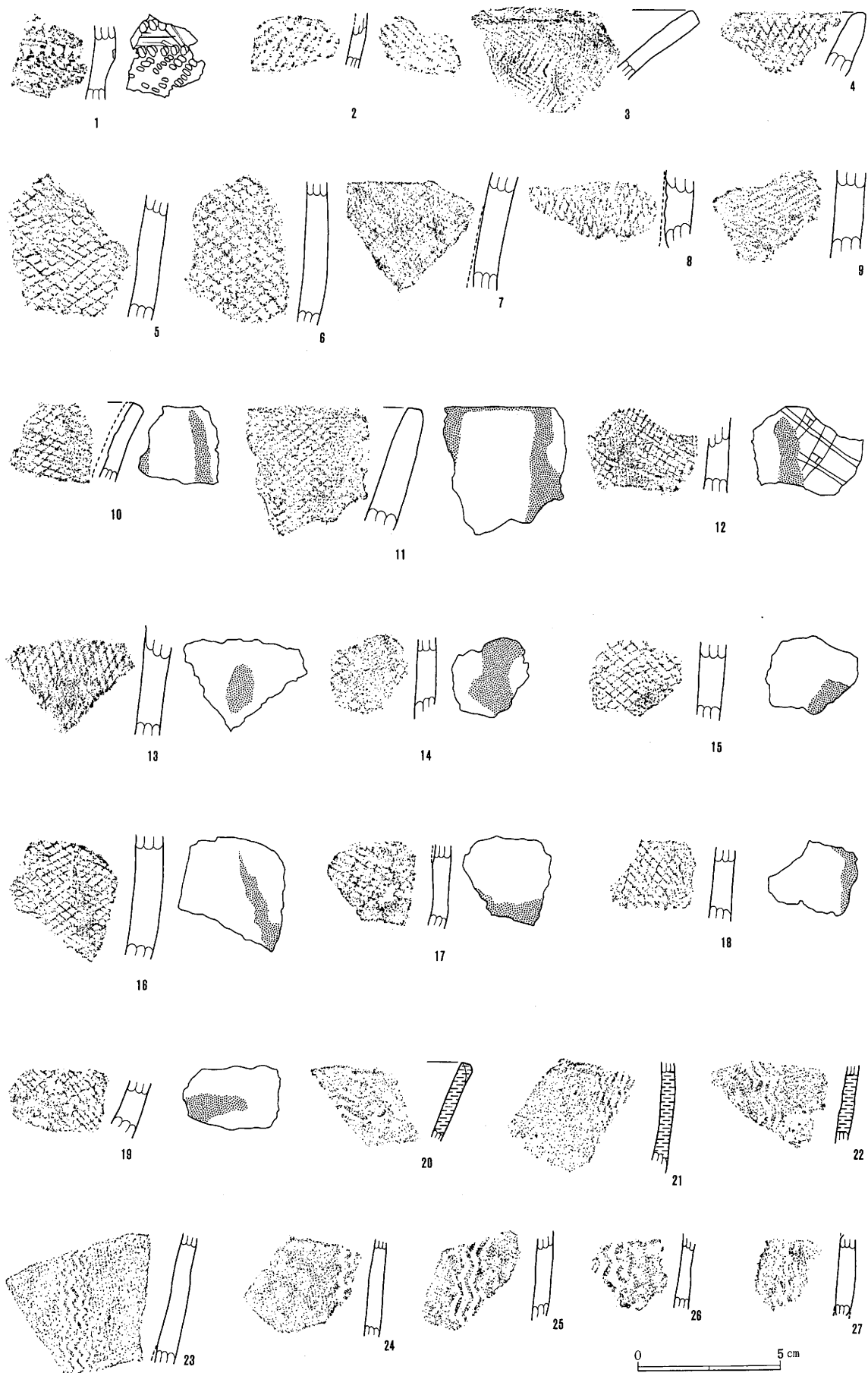


图26 下り林遺跡遺構外出土遺物拓影1 (1:2)

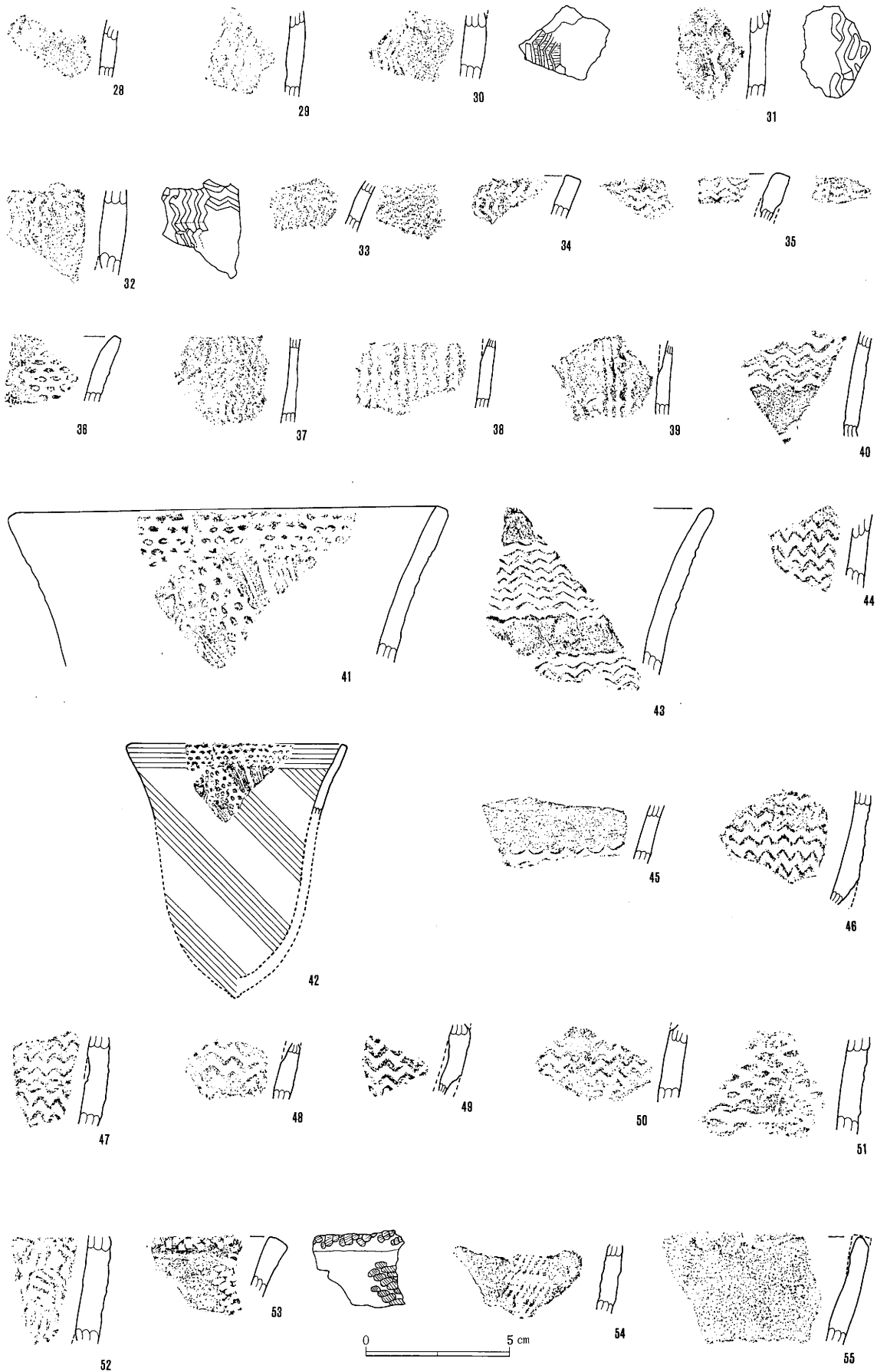


図27 下り林遺跡遺構外出土遺物実測図・拓影2 (1:2)

を指標と考える。そのうちでも胎土に黒鉛を混入するものは、分布域が限定されており〔大野政雄・佐藤達夫1967〕、「種」の1つとして理解した。第3類は細久保式で、細久保遺跡第1類a群・b群、第2類a群・b群、第3類の土器〔松沢1957〕を指標と考える。樋沢式と細久保式の前後関係は、樋沢遺跡報告中の、Dトレンチにおける層位的な所見〔戸沢1955〕から、樋沢式→細久保式の順と理解した。樋沢式の横位帯状施文の土器でも条数が多く長い原体を使用するものは、無文部を残す指向が薄れてきていると考えられる。原体幅以上に間隔をあけない土器は胎土中の混入物、厚さ等も加味した上で、細久保式に入れた。

(イ) 第1群 押型文土器

第1類 立野式土器

A種 全面密接施文されるもの(図26、3～9)

3～9は、器壁が6～9mmと全体に厚く、胎土には石英が多く混入される傾向がある。他には、長石、スコリア、輝石等を含んでいる。文様は山形文と格子目文のみで、すべて口縁部から底部にかけて、縦位密接施文されると思われる。3は、立野式の山形文として知られる。原体に線的な陰刻を施し、陰の部分が狭く陽の部分が広がるタイプである。原体は5～6条2単位で、直径5mm、長さ25mm、原体端は山形に沿ってV字状に切り落とされている。口唇部はていねいに面取りしていた。5は格子目文様の反復が縦に認められ、さらに土器片の中央部分で縦位に重複していることが、右上から左下へ下がる陰刻の線と左上から右下へ下がる陰刻の線が微妙にずれていることから理解できた。ここでは格子目文の原体端は加工されていないものが多い。6も5と同様な視点からの観察により縦位に重複していることがわかったが、文様の反復はとらえられなかった。

B種 全面施文された後、部分的に磨り消されているもの(図26、10～19)

10～19は、土器の断面の右に磨り消し部分をスクリーンで示した。これらの土器の器壁は、A種と同様に9mm前後と厚く、胎土には石英が多く混入され、さらに長石、輝石、スコリア等も含まれていた。文様は縦位密接に施文されていると思われる。原体が復元できたのは12で、長さ4mm前後で4条だが直径は不明である。磨り消し部分を見ると、11は格子目文をはさみこむように口唇部に沿って横位に、以下縦位に磨り消される。12は縦位に磨り消され、その右側に、格子目文様の反復と、A種の5、6の様な陰刻線の反復が認められた。17は横位に磨り消されたと思われる。この部分と文様施文部とは微妙な段を持っており、無文部を意識した施文の可能性もある。19も横位に磨り消されている。B種とA種は文様、器厚、混入物、文様構成において共通し、磨り消しの有無のみ相違する。この差は1類のバリエーションではなく若干の時間差と考えたい。全面施文の伝統の強い中で、磨り消して無文部を作るという胎動があることは、樋沢式の異方向の帯状施文の系譜をたどるうえで大きな指標となる可能性がある(註1)。B種の類例は江名古ひじ山遺跡〔赤木清1937〕、樋沢遺跡〔戸沢1955〕、向山遺跡〔友野良一ほか1982〕、三ツ木遺跡〔林茂樹1984〕等に見られる。磨り消される文様の多くは格子目文様であることも注意すべきだろう。

第2類 樋沢式土器

A種 胎土に黒鉛を含有し帯状施文されるもの(図26、20～22)

11片出土し文様の明確な3片を示した。20～22は、器厚が3～4mmと薄い。胎土には黒鉛の他に、長石、石英、輝石、スコリア等の小粒子を少量含む。20、22は、断面を見ると器表と器肉とで色調が異なり、化粧粘土が施されている。原体は、器面の摩耗が著しく、明確に復元できないが、20は、3条で直径15mm前後、21が4条、22が3条と思われる。

(註1) 立野式中に磨り消しという胎動があり、これが樋沢式との間を埋める可能性があるかと仮定しても、磨り消しの方向性および使用される文様規則性について問題が残った。今後検討していきたい。

B種 帯状施文されるもの(図26、23~27、図27、28~33)

23~33は器壁がA種よりやや厚く4~6mmで、胎土には、石英、長石、スコリア等の小粒子が混入する。23の原体は3条2単位、直径3.5mm、長さ11mmで、原体端を山形に沿ってV字状に切り落としている。さらに原体を陰刻する前に円柱状に整形したときの縦の削り痕が23、28、30に見られた。24は2単位で直径4mm、25は3条2単位、直径6mm、長さ12mmであった。31のみ原体に螺旋状に陰刻していると思われる。32、33のみ異方向の帯状施文の部分が見られた。

C種 その他(図27、34~39)

34~39は、全体の文様構成をとらえるにはやや困難があるが、胎土等から2類の範疇に入るだろう。38、39は、同一原体を使用していると思われる。原体は横刻で2条の直線状の陰刻を施し、その両側から1条と2条のゆるやかな山形文が陰刻される。原体端は山形に沿ってV字状に切断される。5条2単位、直径6mm、長さ21mmで、縦位に密接施文される。類例は、栃原岩陰遺跡〔西沢1982〕に見られる。

### 第3類 細久保式土器

A種 口縁部に横位施文、以下斜位に施文され無文部に沈線が施されるもの(図27、41、42)

41は、42で示した模式図のような文様構成をとると思われる。口径は15.2cmで小型の土器である。器壁は5mm前後、胎土に石英、長石、輝石、白い軽石を含むが、軽石の小粒子が特徴的である。原体は、4条で長さ20mmと思われる。沈線という要素が加わるが、樋沢式の異方向の帯状施文に近いと考えられる。

B種 横位に帯状施文されるもの(図27、40、43~45)

先記した横位に帯状施文される土器の中で、原体が長く原体幅以下の無文部を残すものである。40、43~45の器壁は5~7mmでやや厚く、胎土には、白い軽石の小粒子が多く混入されている。45のみ多量の金雲母が混入し、焼成、器面の調整が良好で他と異なる。原体は43が7条2単位で、直径4mm、長さ25mm、40が2単位、直径4mmである。

C種 横位に密接施文されるもの(図27、46~51)

小片で文様構成が明確でないものもあるが、B種に入らないものも含めた。46~51の胎土は、A種、B種と同様な混入物が見られ、白い軽石の小粒子が特徴的である。47、51は拓影の中央部分で明確に重複が認められる。46は明確でないが5条2単位の原体であろう。胎土は6~8mmで、A、B種よりもやや厚い。

D種 その他(図27、52)

52は山形状で、縦位に施文され重複しているため複雑な文様に見える。胎土はA、B、C種と同様な混入物が見られ、白い軽石の粒子が目立つ。

(v) 第2群 縄文施文の土器(図27、53、54)

53、54とも縦位に帯状施文される。53はLRの原体を口縁部横位、以下縦位に施文している。器面の表には横位の調整が施文前に施され、裏には、ゆるやかな指圧痕のようなものが残る。器壁は5~6mmで、胎土中には長石の含有が目立っている。54はRLの原体を縦位に施文し、途中でおきかえて施文しているように見られる。器壁は6mmで、胎土中には、少量の石英、スコリア等が混入されていた。

(vi) 第3群 無文土器(図27、55)

55は、口唇部に貼り付け、後に整形したであろうことが、口唇部内外面の両側の粘土のはがれた痕からわかる。表面にはゆるやかな凹凸があるものの、丁寧に調整されている。器壁は5~6mmで、胎土中には、細かい金雲母、輝石を多量に含み、長石、石英も多く混入されている。

ウ 早期後半~末葉、前期初頭の土器(図28~30)

(vii) 土器分類について

当該期の土器の分類、分析にあたり、同時報告される数遺跡の出土土器をふまえた統一的な理解が可能

となるように注意した。そのため、報告書全体に共通する土器分類の大前提とは若干異なる部分が生じたことをまずことわっておきたい。

第1に「群」別であるが、前記したように、該期の土器群がまだ編年的・系統的に充分整理し尽くされていないものはいえぬものを少なからず含むことから、型式あるいは系統に相当する「群」に分類することは避け、大きく、“早期後半～末葉・前期初頭の土器群”として捉え、貝殻条痕文系土器群およびそれに併行、後続するものとして理解した。よって、ここでは各土器が生起する系統性については一旦棄却し、より下位の概念である「類」および「種」の分類の中で考えることにした。「類」別の段階では、大きな時間的単位を当て、先に「一群」として捉えた土器群全体を時間的序列の中に置いた。類別の単位としては、従来より既知の型式、あるいは型式としての認定が困難であっても文様およびその構成からひとつのまとまりとして認められるものを基本とした。しかし、例外的に類別の不可能なものを一括して「類」として扱う場合もある。続く「種」の認定に際しては、「類」の中のバリエーションを考えた。「類」の段階では把握できない、より小さな時間的単位として置き換えられる事例を含んでいる。

#### (イ) 土器の解説

##### 第1類土器 (図28、56～63)

早期後半、貝殻条痕文系土器の中でも古い段階に位置づけられる野島式に比定されるものである。文様要素の相違により、A、Bの2種に細分した。出土数は10片ほどを数えるのみである。

A種 (56～59) 口縁波頂部より垂下した文様帯を縦位に区画する隆起線をもつもの

56は斜位の沈線文が密に施される。57～59も同様な波状の口縁部破片。58には太沈線による幾何学状の区画がなされる。総じて器厚5～6mmとやや薄手のつくりのものが多く、また、胎土中の繊維の混入も少なく硬質なものが多い。ていねいな器面調整が行われているが、浅い条痕をとどめているものが多い。

B種 (60～63) 隆起線をもたないもの

60は波状の口縁部破片。太沈線による曲線的区画内に同様な短沈線が充填される。63は平行する多条の沈線により幾何学状の文様が構成される。本種もA種同様、薄手で繊維が少なく硬質なつくりのものがすべてである。

##### 第2類土器 (図28、64～84)

早期後半、貝殻条痕文系土器のうち、第1類野島式土器に後続する鶉ガ島台式に相当するものを本群とし、若干後出的なものも含めた。文様および文様構成から、A～D種に細分した。30片余りとややまとまって出土している。

A種 (64～70) 太沈線による幾何学的な区画文の内に、同様の太沈線を充填するもの

64は波状をなす口縁部破片。波頂部より細隆起線がのび、それとぶつかる太沈線の端部に押圧を加える。65は同様の胴部破片。66～68は沈線端部などに斜方向からの刺突文が施される。64・65がやや薄手のほかは、8～10mmと厚手のつくりである。器面には裏面を中心に調整時の擦痕をとどめている。65、67は内面に条痕を残すが、外面は条痕の上にナデ調整を加えてある。

B種 (71～73) 細沈線による幾何学的な区画文の内に、太沈線を充填するもの

71・72は口唇部に竹管状工具による斜めのキザミをもつ口縁部破片。平縁と思われるが、小破片のため判然としない。器面に条痕をとどめるものはみられない。器厚は8～10mmをはかるものが多い。

C種 (74～76) 細隆起線によって幾何学的な区画が構成されるもの

図示した3片がすべてである。細隆起線上の要所には斜方向からの刺突が加えられ、区画内には押引沈線を充填している。76の隆起線上には竹管状の円形刺突文がみられる。74は条痕、75は調整時の擦痕をそ

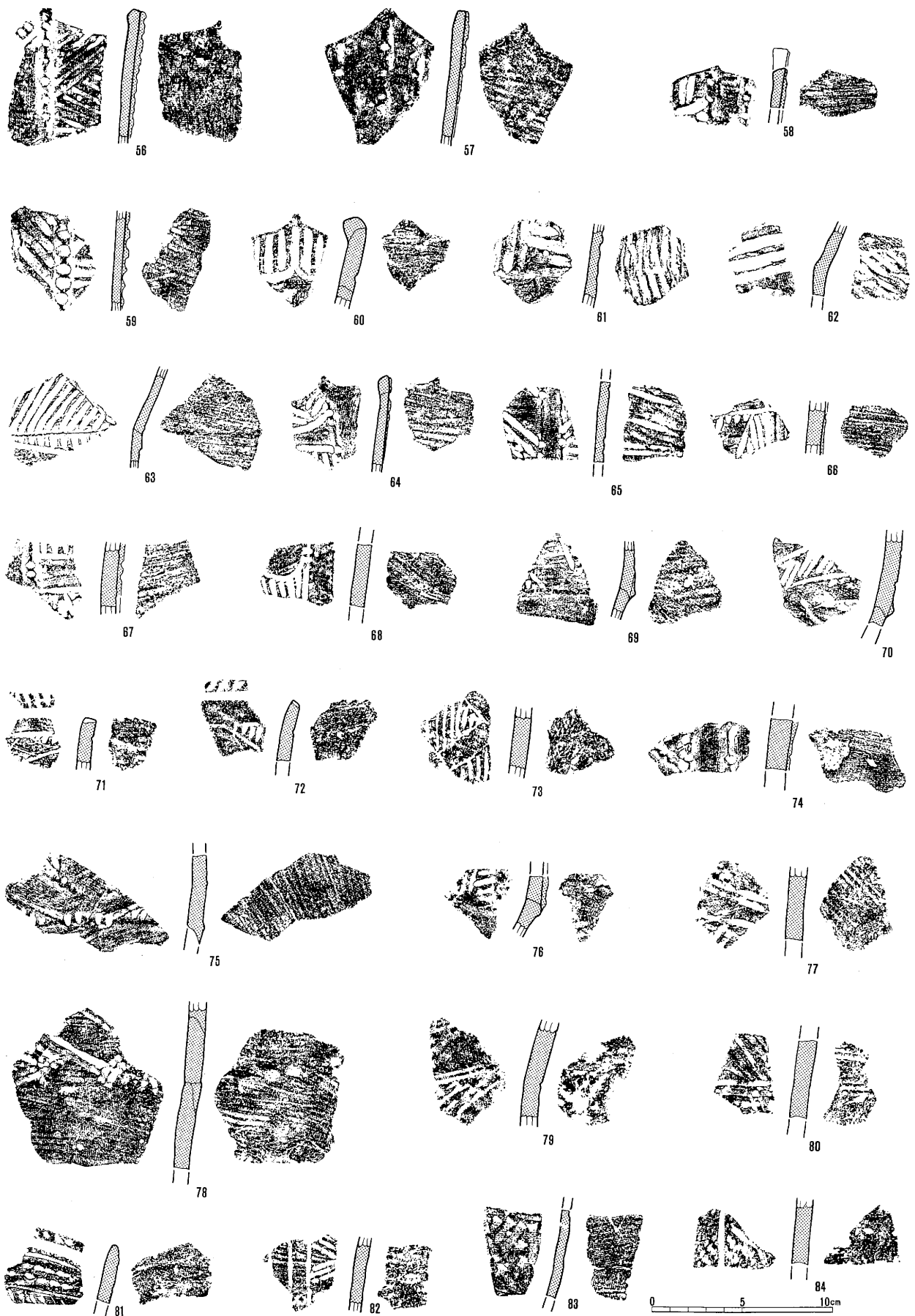


图28 下り林遺跡遺構外出土遺物拓影3 (1:3)

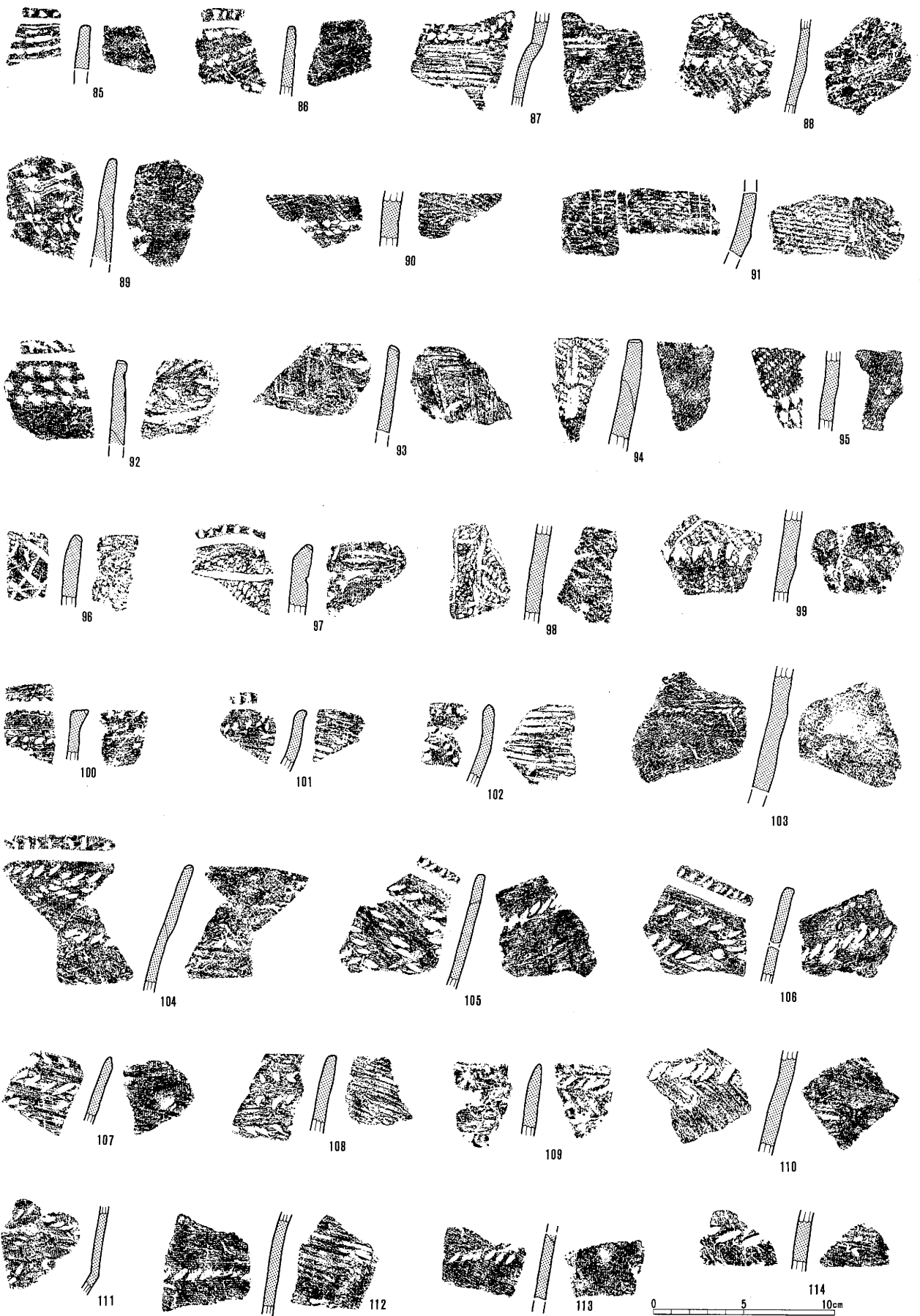


图29 下り林遺跡遺構外出土遺物拓影4 (1:3)

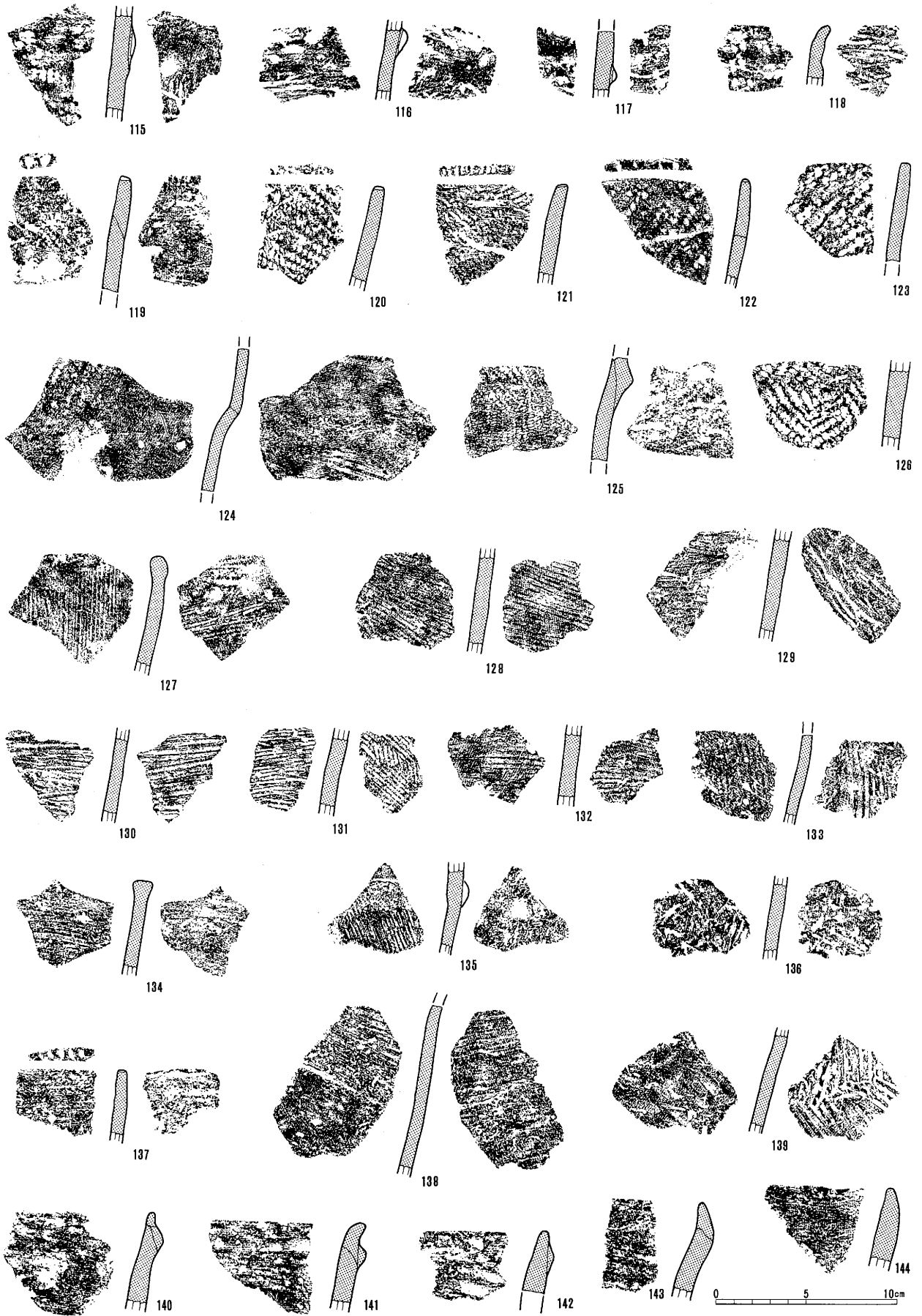


图30 下り林遺跡遺構外出土遺物拓影5 (1:3)



れぞれとどめている。74は繊維が多くやや粗い胎土である。

D種(77~84) 種々の沈線によるくずれた幾何学的区画をもち、区画内に押引沈線や刺突を充填させているもの、あるいは、区画のみで充填文のみられないものを一括した。

77~83には沈線区画内に押引沈線が、84には斜方向からの刺突文がそれぞれ充填される。78は断面「く」字状をなし、文様帯を上下に区画する段を有する。84は原体RLの縄文を地文とする。器面にナデ調整を加えるものが多く、条痕をとどめるものは77、78などごくわずかに限られる。概して胎土への繊維の混入が顕著で、79のように裏面が「虫くい」状を示す例も存在する。

### 第3類土器(図29、85~99)

早期後半、貝殻条痕文系茅山下層式に相当すると考えられるもので、30片程が出土している。

A種(85~95) 押引状刺突や連続刺突文によって文様が描かれるもの

85、86は口縁部破片。85は押引状の刺突文、86は斜方向からの刺突文をそれぞれ連続させる。ともに口唇面に刺突やキザミが行われる。87、88は「く」字状にくびれる段上部に山形を基本とする文様が連続刺突文により描かれる。工具は禾本科植物の茎と思われる。89~91は2列の刺突が施されるもので、うち91は条痕を地文として縦位の刺突間に鋸歯状に配した絡条体圧痕文を加えている。94、95はそれぞれ、原体RL、LRの縄文を地文とする。全体に胎土への繊維の混入はやや多く、また、器面に条痕をとどめるものが多い。

B種(96~99) 主として沈線によって文様が描かれるもの

96は格子目状の沈線が施される口縁部破片で口唇前面にキザミをもつ。97~99は原体RLの縄文を地文とし、沈線文が施される。99はくびれ部に斜方向からの刺突文がめぐらされる。胎土中に含む繊維の量がやや多い点はA種と共通するが、器面に条痕をとどめるものが皆無である点で趣きを異にする。

### 第4類土器(図29、100~103)

米粒状ないしそれに類する連続刺突文により、山形状を基本とする文様が構成されるもの。貝殻条痕文系、茅山下層式の新しい段階に位置づけられよう。

図示したものを含めて8片出土しているが、すべて小破片に限られるため全体の構成については不明な点を残す。口縁が角頭状をなし内外面端部に刺突文をめぐらすもの(100)や、口縁円頭状をなしキザミを加えるもの(101)がある。連続刺突文は重層してなされた浅い「なぞり」間の微隆起した頂部に沿って行われる。器厚6mm程と薄手のつくりで、内面に貝殻による明瞭な条痕を残すものが多い。胎土に含まれる繊維の量は概して多く、その他粗い砂粒や白色粒子なども多く含む。

### 第5類土器(図29、104~114)

「連続爪形文」により波状ないし横位の文様が施されるもので、東海地方に主要な分布をもつ粕畑式の特徴を示す。貝殻条痕文系、茅山上層式の段階に位置づけられる。14片出土している。

104、108、109は平縁、105~107は波状の口縁部破片。104は弱い「段」状のくびれ部に爪形文がめぐり、その上部には重層する山形状の文様が施される。文様構成において第4類土器との共通性が看取される。104~107にはおおむね波状に爪形文が施され、105、106は裏面にも1列の爪形文が波状にめぐり、口唇部には、へら状工具による鋭いキザミを加えている。106の口縁下には補修孔があげられる。111は多段の文様構成をもつようであるが判然としない。112、113など胴部破片は横位に爪形文がめぐり、文様はすべて大きな爪形状の連続刺突によって構成され、第4類土器にみられた「なぞり」は全くみられない。胎土中の繊維量は少なく、全体として硬くしまっている。器面に明瞭な条痕をとどめるものはやや少ない。明褐色を呈す110は、外面に鋭い擦痕をとどめ、胎土も他とは異質で搬入品かと思われる。1片のみの出土である。

## 第6類土器 (図30、115～118)

いわゆる絡条体圧痕文が施されるものである。

A種 (115～118) 裏面に条痕をとどめ、胎土に多量の繊維を含むもので、「イモ虫」状の太く丸みのある絡条体圧痕文が施されたもの。横位、斜位の文様構成をもつ。隆帯の有無により細分される。

A-1種 隆帯が施される。隆帯は丸くつぶれた形状をなす。

a. 絡条体圧痕文に撚糸文が併用されるもの。

本遺跡からは出土していない。

b. 絡条体圧痕文に条痕文が併用されるもの。

116、117が相当する。丸くつぶれた隆帯を横走させ、その上面に斜めに絡条体圧痕文を施す。隆帯下と裏面には貝殻によると思われる条痕を横位、斜位にとどめる。胎土に繊維、白色粒子などを多く含み、裏面は部分的に「虫くい」状を呈す。焼成は脆い。

c. 撚糸文や条痕文をとまなわないもの。

本遺跡からは出土していない。

d. a～cへの分類ができないもの。

115は斜位の絡条体圧痕文が加えられた扁平な隆帯の下に、横位の絡条体圧痕文を数条めぐらせる。胎土への繊維、白色粒子の混入が多く、裏面には貝殻によるであろう条痕をとどめる。

A-2種 隆帯が施されないもの。但し、部位によって1種に含まれるべきものも一括されている。

a. 絡条体圧痕文に撚糸文が併用されるもの。

本遺跡からは出土していない。

b. 絡条体圧痕文に条痕文が併用されるもの。

本遺跡からは出土していない。

c. 撚糸文や条痕文をとまなわないもの。

本遺跡からは出土していない。

d. a～cへの分類ができないものを一括する。

118が本種に含まれる。平縁らしき口縁部破片で、口縁下に横位の絡条体圧痕文を数条施す。口縁先端は細まりやや外反する。裏面に横走する貝殻条痕を残す。

B種 裏面に条痕をもたず、ナデ調整されるもの。

施される絡条体圧痕は幅が狭く細長い。胎土への繊維の混入はA種に比べ少なく、文様は横位から山形状・「メ」字状と複雑な構成をもつ。

B-1種 隆帯が施される。隆帯は厚く明瞭で押しつぶされていない。

膳棚B遺跡から出土している (図155-1・2など)。

B-2種 隆帯が施されない。

膳棚B遺跡から出土している (図155-4など)。

C種 B種同様裏面に条痕をもたず、よりていねいな器面調整が行われるもの。

施される絡条体圧痕は、細く短いもので、繊細である。文様構成は横位と縦位の組み合わせのみで、山形状など斜方向のモチーフをもたない一群。胎土中に含まれる繊維の量は、B種に比べ少ない傾向を示す。

膳棚B遺跡から出土している (図160-22など)。

### 第7類土器 (図30、119~126)

縄文のみ施文されているものを一括した。時間的に限定しえないが、胎土、焼成等の特徴から、その多くは第2類土器の一部と第3類土器に伴う粗製の土器と考えられる。但し、126など後出的な要素をもつ土器も存在する。

図示したものを含めて9片のみと少ない。119~123はすべて平縁の口縁部破片。123を除き、竹管状工具(119~121)やへら状工具(122)により、口唇面にキザミを加える。124、125は「段」をもつ破片で、前者は段上部のみ、後者は全面に縄文を施文している。縄文原体は119~121、125、126がRL、他がLRである。119、123、124、126は裏面に貝殻条痕をとどめる。胎土への繊維の混入は多く、石英粗粒を多く含むもの(121)や、白色粒子を含むもの(126)などもある。

### 第8類土器

撚糸文のみ施文されているものを一括した。

膳棚B遺跡から出土している(図163-48・49)。

### 第9類土器 (図30、127~139)

条痕のみをとどめるものを一括して本類とした。

#### A種 (127~139) 貝殻によると思われるもの

本遺跡出土品はA種に限られている。口縁部破片が3片のみと少ないことから、その多くは他土器群の胴部破片と考えられる。表裏両面に条痕をもつもの(127~133)、表面のみとどめるもの(134~136)、裏面のみとどめるもの(137~139)が存在する。胎土中に含まれる繊維はやや多い傾向を示すが、必ずしも一定しない。

#### B種 いわゆる絡条体条痕と思われるもの

膳棚B遺跡から出土している(図160-25~29など)。

### 第10類土器 (図30、140~144)

無文土器を一括した。

無文の破片はまとめて出土しているが、口縁部破片は図示した5片と少ない。すべて平縁と考えられる。先細りする口縁下に突帯状の隆帯をめぐらすもの(140~142)と、尖頭状をなして内湾ぎみに立ち上がるもの(143、144)とに分けられる。10~13mmと厚手のつくりであり、繊維を多く含む。140、141、143は胎土中に金雲母や石英を多く含み、142、144は白色粒子を多く含む。後者はやや軟質である。

### 第11類土器

東海系の薄手土器を一括した。数型式を含み時間差をもつことから本来はより細分すべきであるが、量的に少なく、また、型式分類可能な個体も限られていることから便宜的にまとめて考えた。

膳棚B遺跡から出土している(図162-37~40など)。

#### エ. 前期中葉~中期中葉の土器 (図31~33)

図31は前期の土器で中葉のものを若干含むが末葉の土器が大半を占める。

145、146は諸磯b式で浮線文上に斜位の刻みがある。

147、155は諸磯c式で、いずれも地文は沈線文の集合によって構成される。147にはさらに特有のボタン状貼付文が付く。

156~199が前期末の一群である。大洞遺跡で試みた分類に従うと、I群、II群に相当する。157~180はI群1種で、器形と文様の相関性が非常に強い。口縁部である157~165は、その口唇に粘土紐を貼るもの(157~161)と一条の沈線文の入る(164)二者があり、口唇以下は三角印刻文や、円形の刺突列点文で埋められる。胴部は重層する平行沈線文によって構成され、さらにそれは爪形の結節文によって装飾されるも

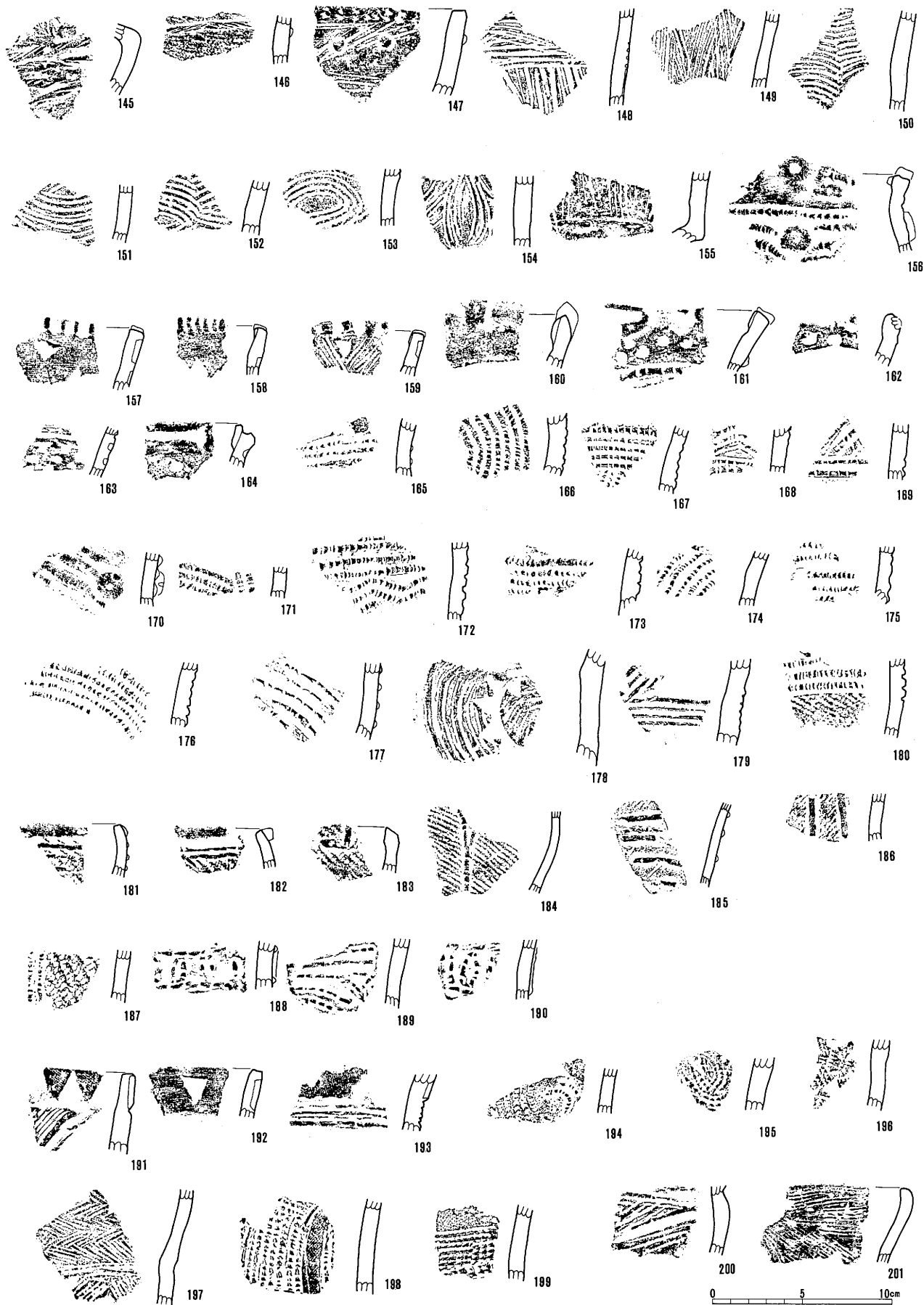


图31 下り林遺跡遺構外出土遺物拓影6 (1:3)

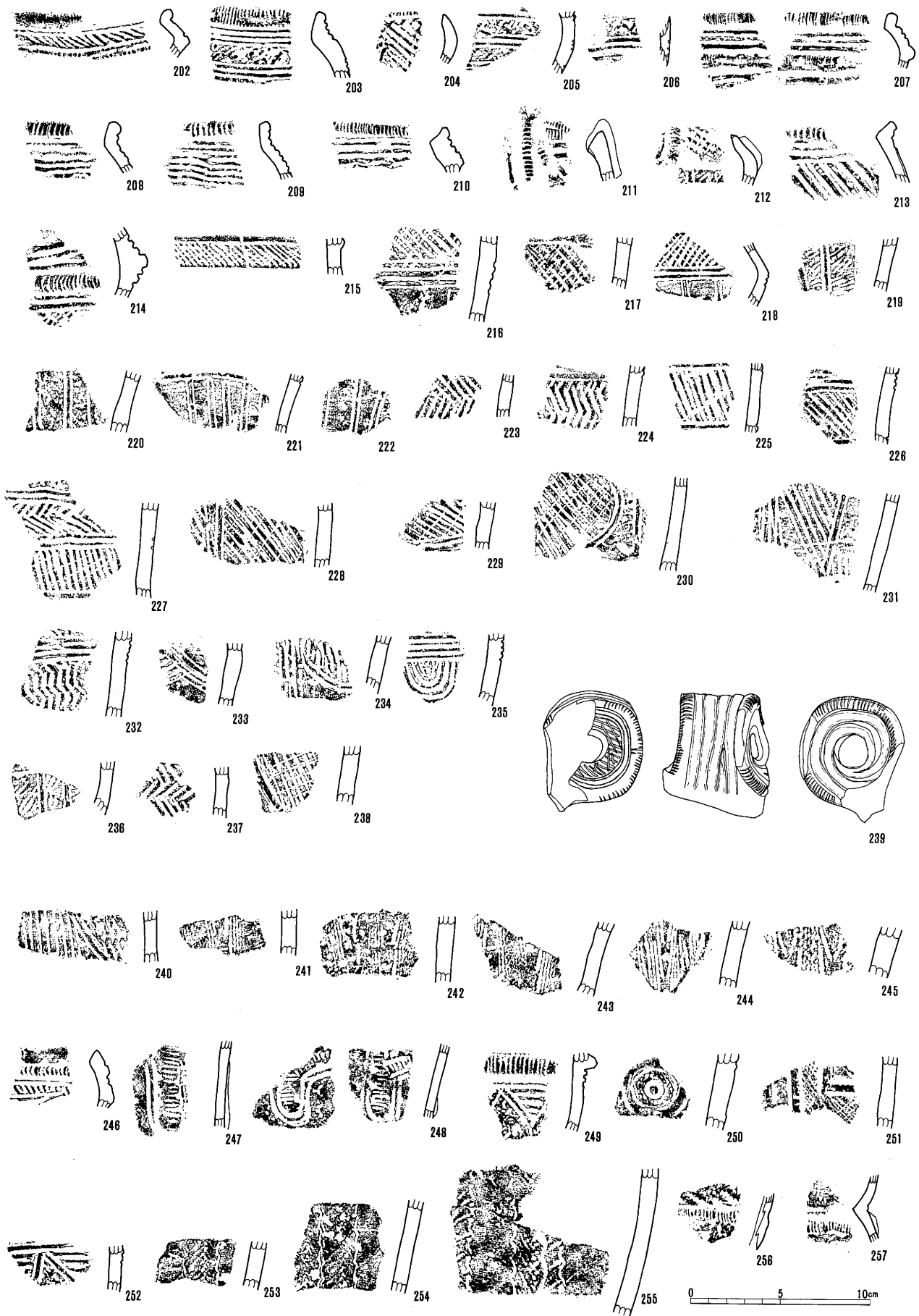


图32 下り林遺跡遺構外出土遺物実測図・拓影7 (1:3)

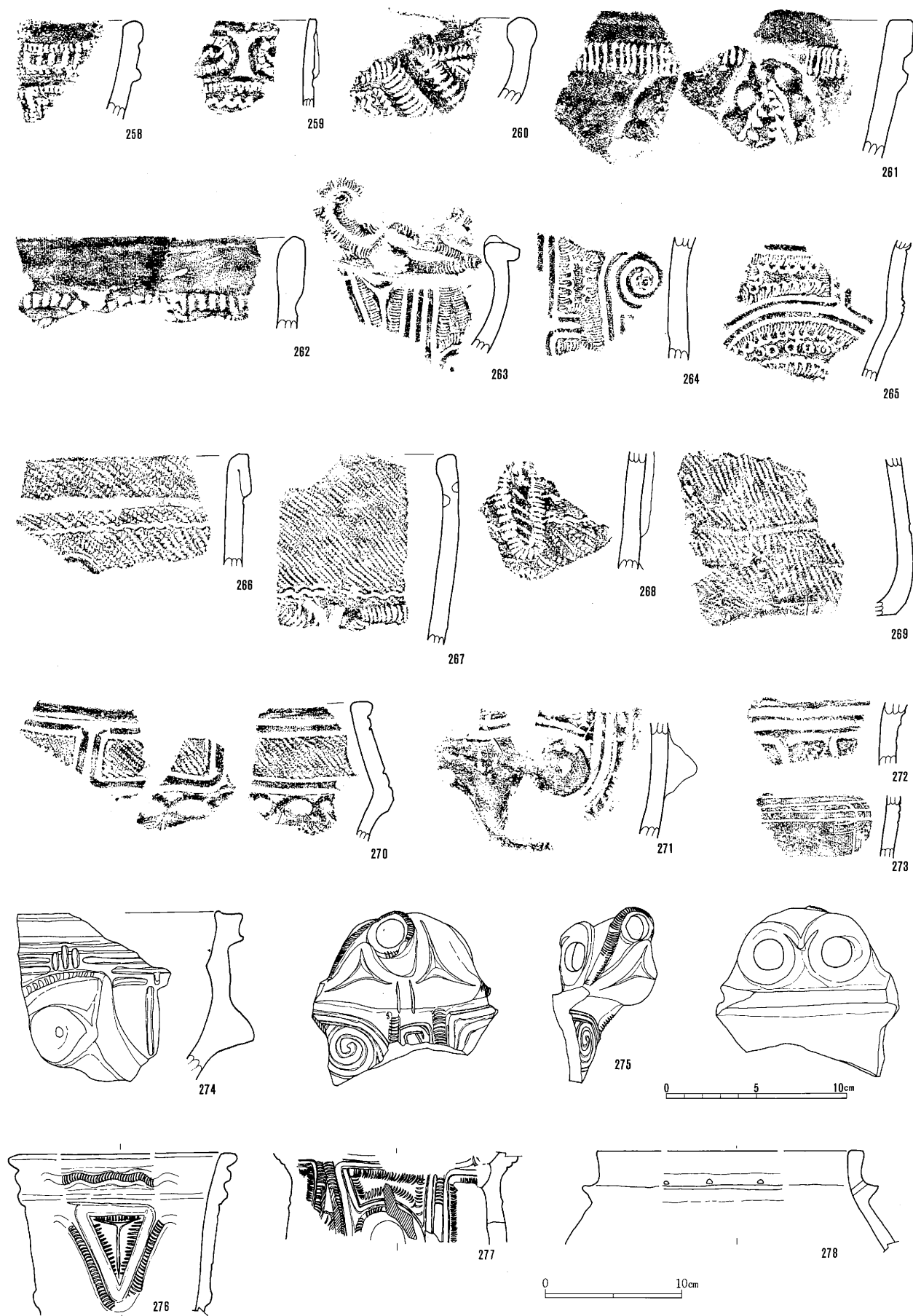


图33 下り林遺跡遺構外出土遺物実測図・拓影 8 (258~275 1:3、276~278 1:4)

の(170~176)、ヘラ切りによるもの(166、169)、無飾のもの(178、179)と3通りのあり方を示す。181~190は5種である。地文に縄文を持ち、細い粘土紐や(181~183)、結節状浮線文の貼付がなされる。156も爪形の連続施文があり、該期のものである。以上は、十三菩提式ないしは踊り場式とよばれる型式に対比される。191~199は鍋屋町系の土器である。口縁部(191~193)または胴部における三角印刻文、胴部の重層する結節隆帯文や結節沈線文がその特徴を示す。

図32は、中期初頭の一群である。沈線文が文様の主体となっている土器が多い。202~213は口縁部で、口唇部文様にもバラエティーがある。ほとんどの場合は爪形の連続文であるが(202、207~213)、203は縄の圧痕が行われ、装飾効果としては前者と同様の役割を果たす。口唇部下は、202と203では格子目文がある。これも202では斜沈線文+斜隆帯文であるが、203は斜隆帯文+斜隆帯文で共にこの種の中では比較的古い様相ではないかと思われる。その他には、山形波状文(208、209)や斜沈線(213)等がある。口縁部下には縦位の平行線文がある。これにも地文に縄文をもつもの(219、220)ともたないもの(221、222)の2種がある。239は口縁部に付けられた把手である。この期としては比較的大形の部類であろう。223~240が胴部資料で、いずれも沈線文により、格子状、山形波状、弧状等に構成される。241~245は木目状撚糸文で、前記した土器の胴下半に付く文様の一要素であることが知られている。246~255はまた別の一群で、大洞遺跡のIV群2種にあたる。246~248には短沈線文があり、249、252はV字状モチーフである。253~255は胴下半のモチーフとしては一般的な結節縄文のある縦位帯状の縄文である。256、257の2点は外来系の土器と思われる。堅固で緻密な胎土と焼成、薄い器壁、地文の縄文とその上に施される幅広の爪形施文といった諸要素から、関西の船元式土器であることが考えられる。

図33は中期中葉の土器である。中でも258、259は角押文が多用されるより古い一群で猪沢式に相当する。260~262は爪形施文がなされる。263、264は縦位区画がとられ、その内側はやはり爪形文が密に入る。このモチーフは265にも共通する。266~269は縄文施文を文様の基調としている。276の深鉢形土器は主文様として波状文をもち、やはり爪形文が多用される。275は口縁部につく把手で、一般的にはその形状から「ミミズク把手」と呼ばれる。278は有孔鏝付土器、277は台付土器である。以上は藤内I式に比定される土器である。この他に該期のもので271、274は焼町土器であろう。器壁は比較的厚く、雲母を多く含む胎土、赤色の焼成、モチーフが特徴的といえる。また、273は薄い器壁、灰色を呈する堅い焼成、半截竹管状工具による沈線文等に特色のある平出第III類A土器である。

#### オ. 石器 (図34~38)

出土石器の総数は、定形的な石器279点、小剥離痕のある剥片278点で、剥片・石核・原石は3,500点以上となる。時期の特定が困難なため、一括して報告する。

石鏝は133点(1~39)で、有茎石鏝は確認できない。無茎石鏝92点は、凹基82点、平基10点に区分できる。凹基石鏝にはえぐりが深く鋏形鏝と呼べるものが2点(1)、両面または片面を研磨するもの2点(6、7)が含まれる。完形品は64点で、チャート製3点(5)、頁岩製2点(39)以外は黒曜石製である。

石錐は9点で(40~45)、つまみを有する石錐5点(43~45)、つまみのない棒状の石錐2点(40、41)に分けられる。前者のうち4点までは錐部が長めにつくり出される(43、44)。また42ほか1点は細長い剥片を素材とし、つまみのない石錐との中間的形態を示す。44はチャート製、他は黒曜石製である。

石匙は3点あり、横形(51)、縦形(50)各1点と、つまみ部分1点である。50、51の刃部は両面加工である。50はチャート製、他は黒曜石製である。スクレイパーは3点あり(46~48)、いずれも両面加工である。46がチャート製、他が黒曜石製で、46はつまみ状の突出部を残す剥片を用いている。ピエス・エスキューは68点あり(54~66)、チャート製の碎片1点以外は黒曜石製である。小剥離痕のある剥片278点(67~89)はすべて黒曜石製である。

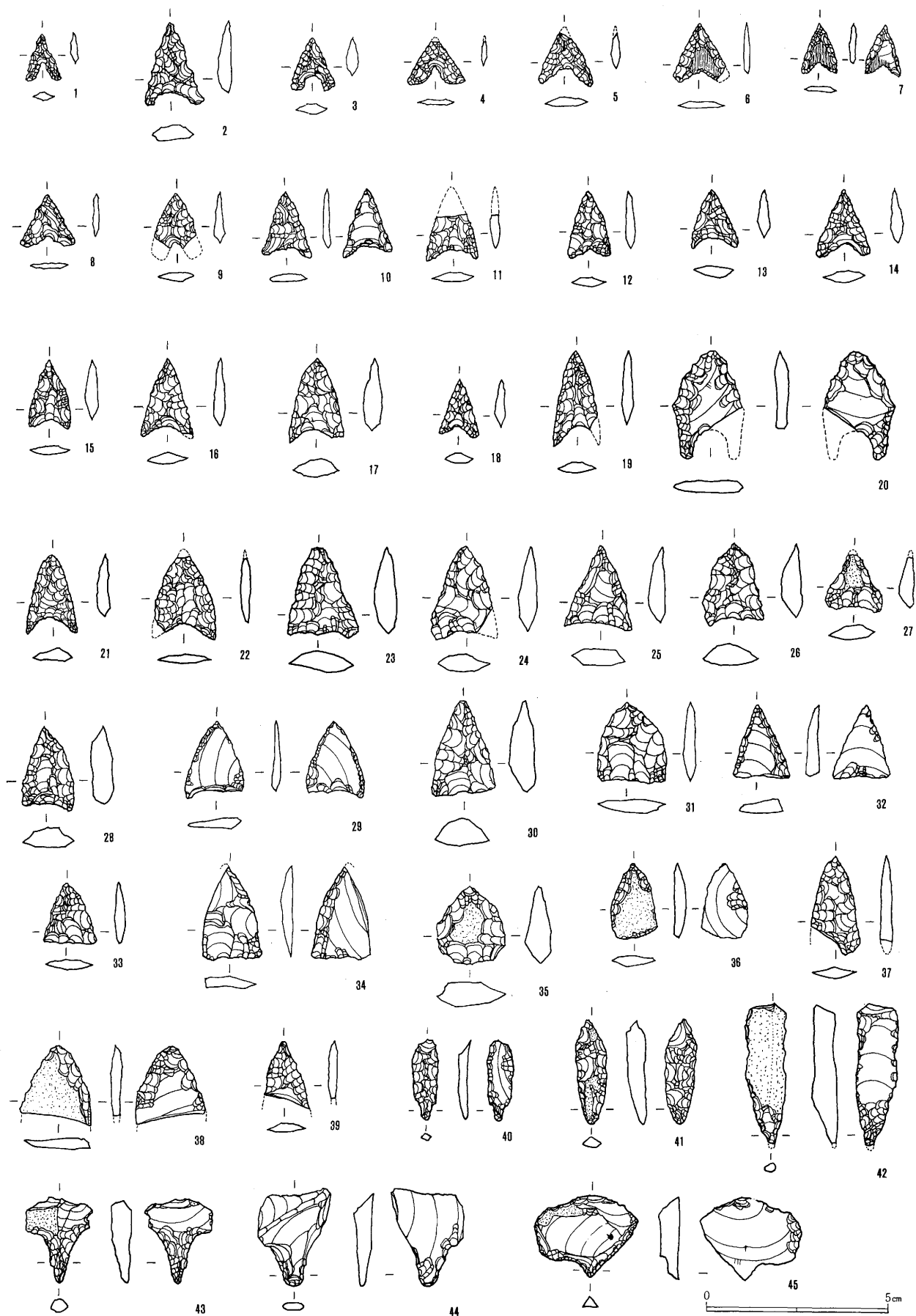


图34 下り林遺跡遺構外出土遺物実測図9 (2:3)



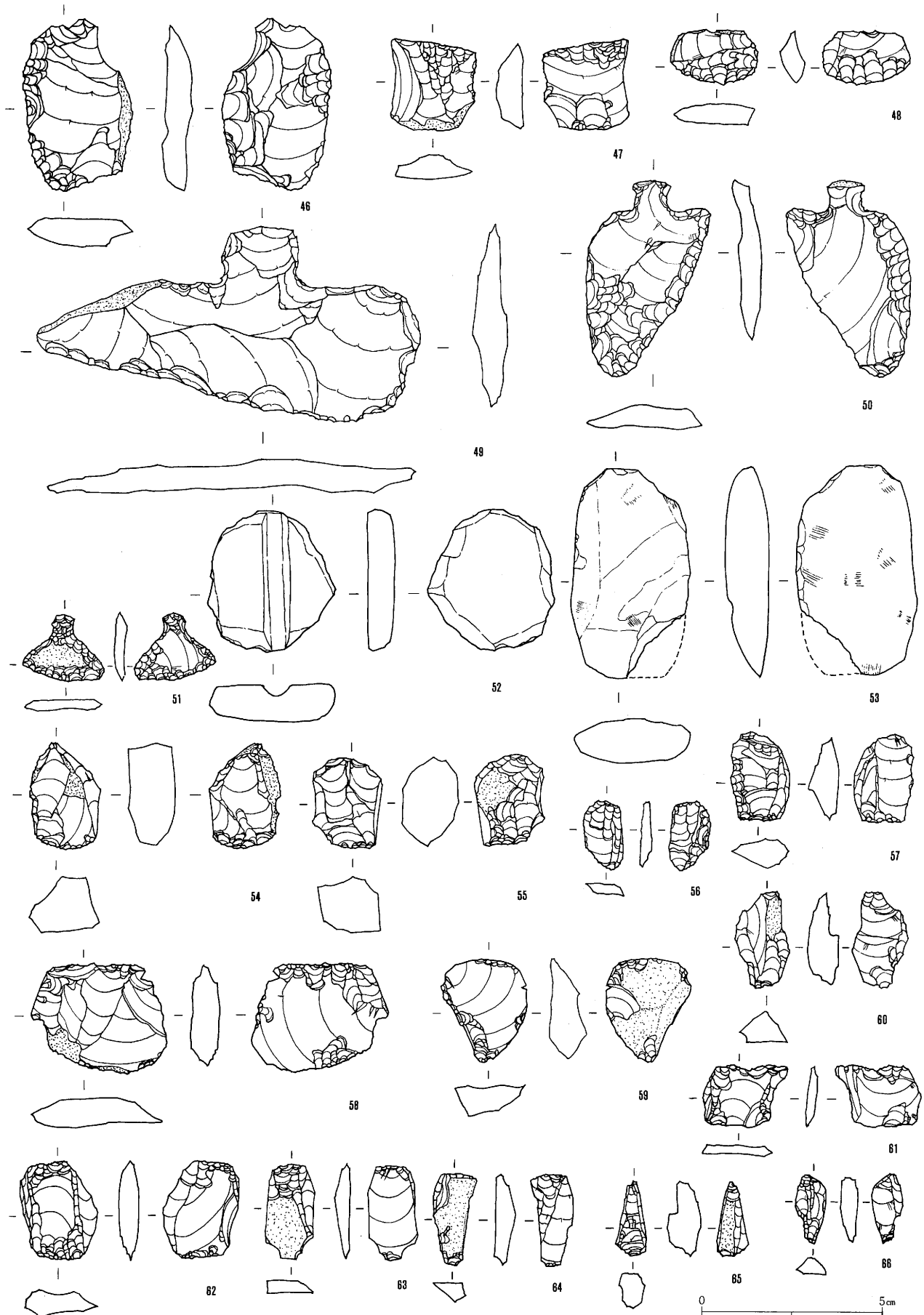


图35 下り林遺跡遺構外出土遺物実測图10 (2:3)

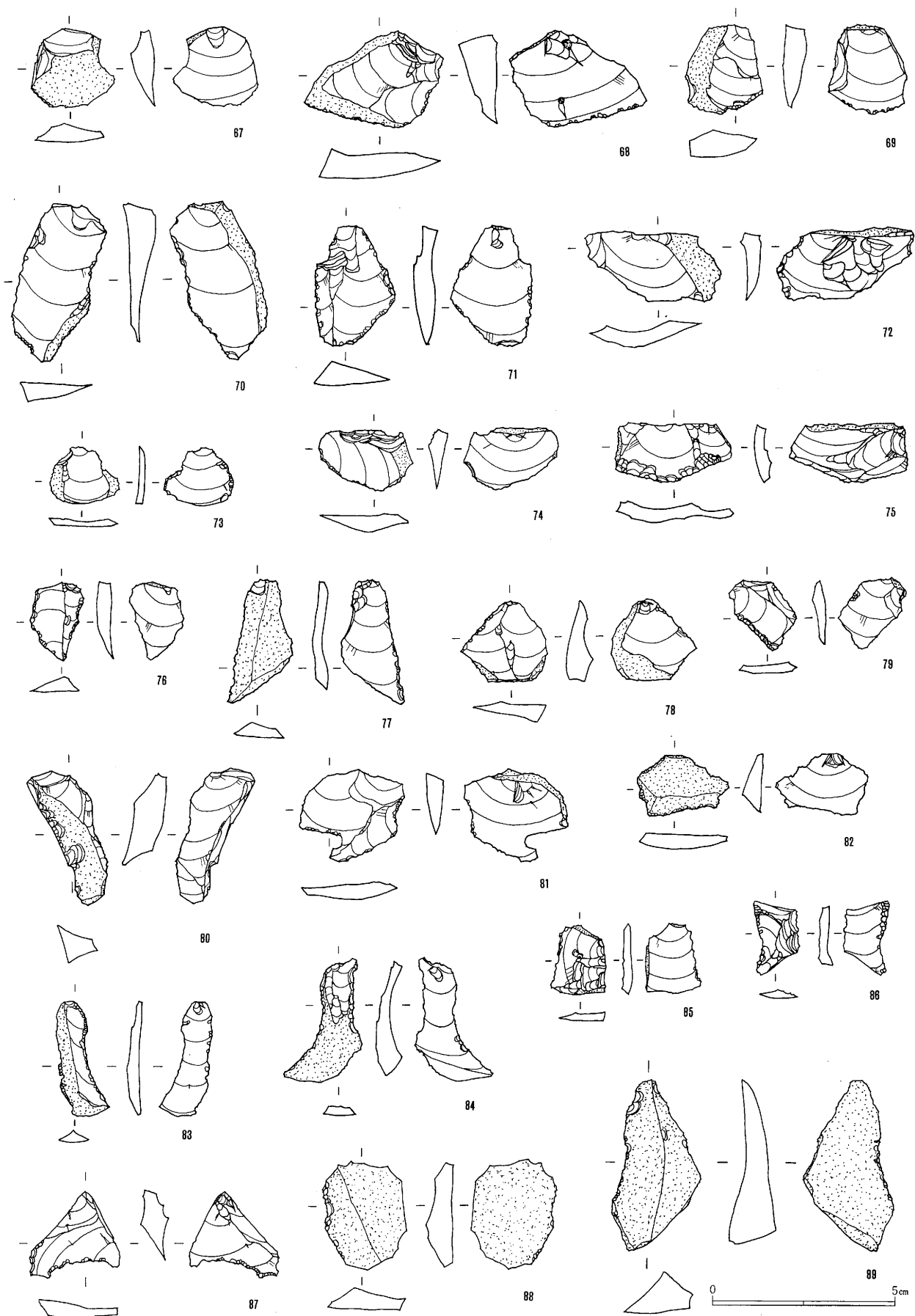


图36 下り林遺跡遺構外出土遺物実測图11 (2 : 3)

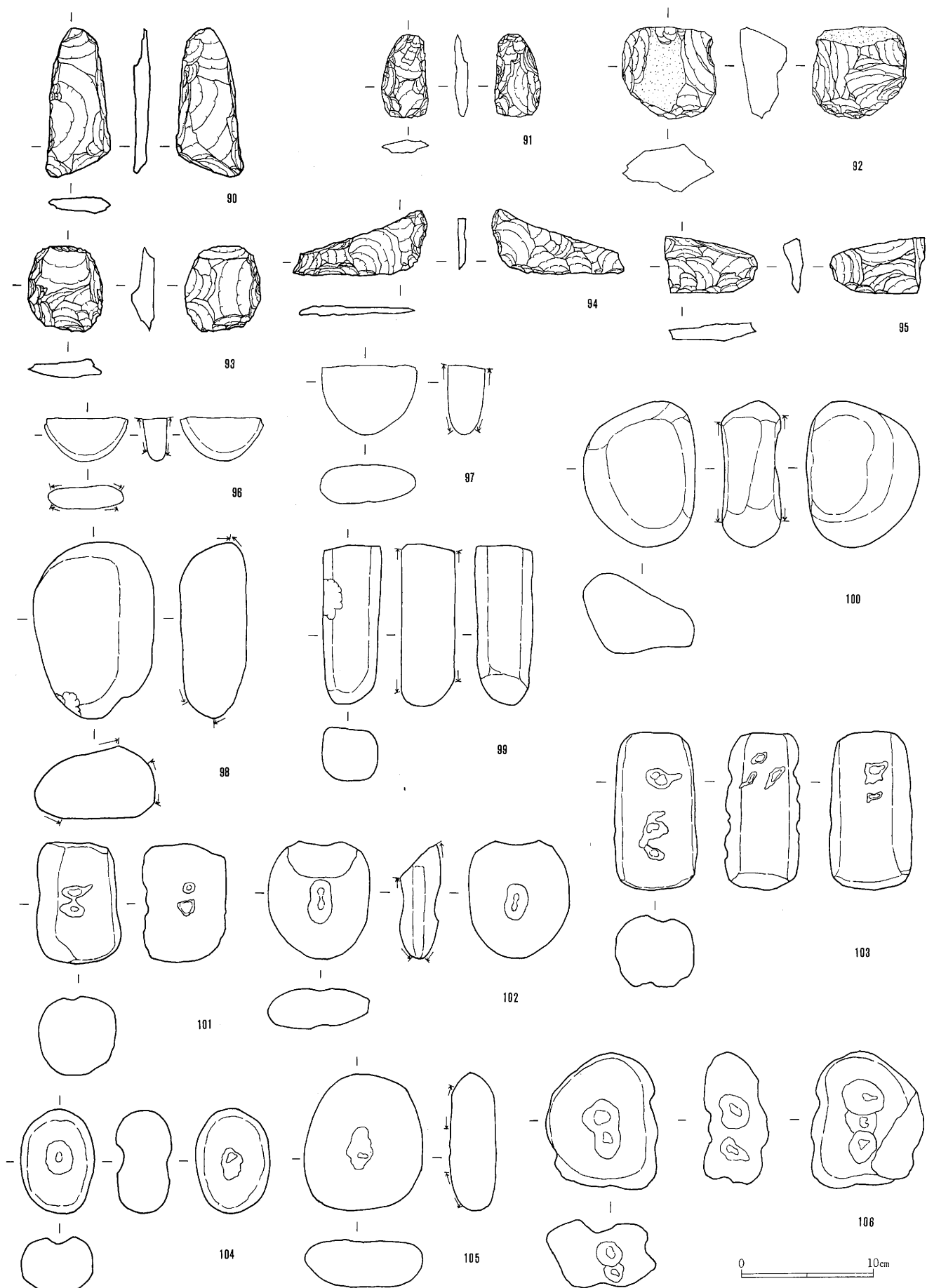


図37 下り林遺跡遺構外出土遺物実測図12 (1 : 4)

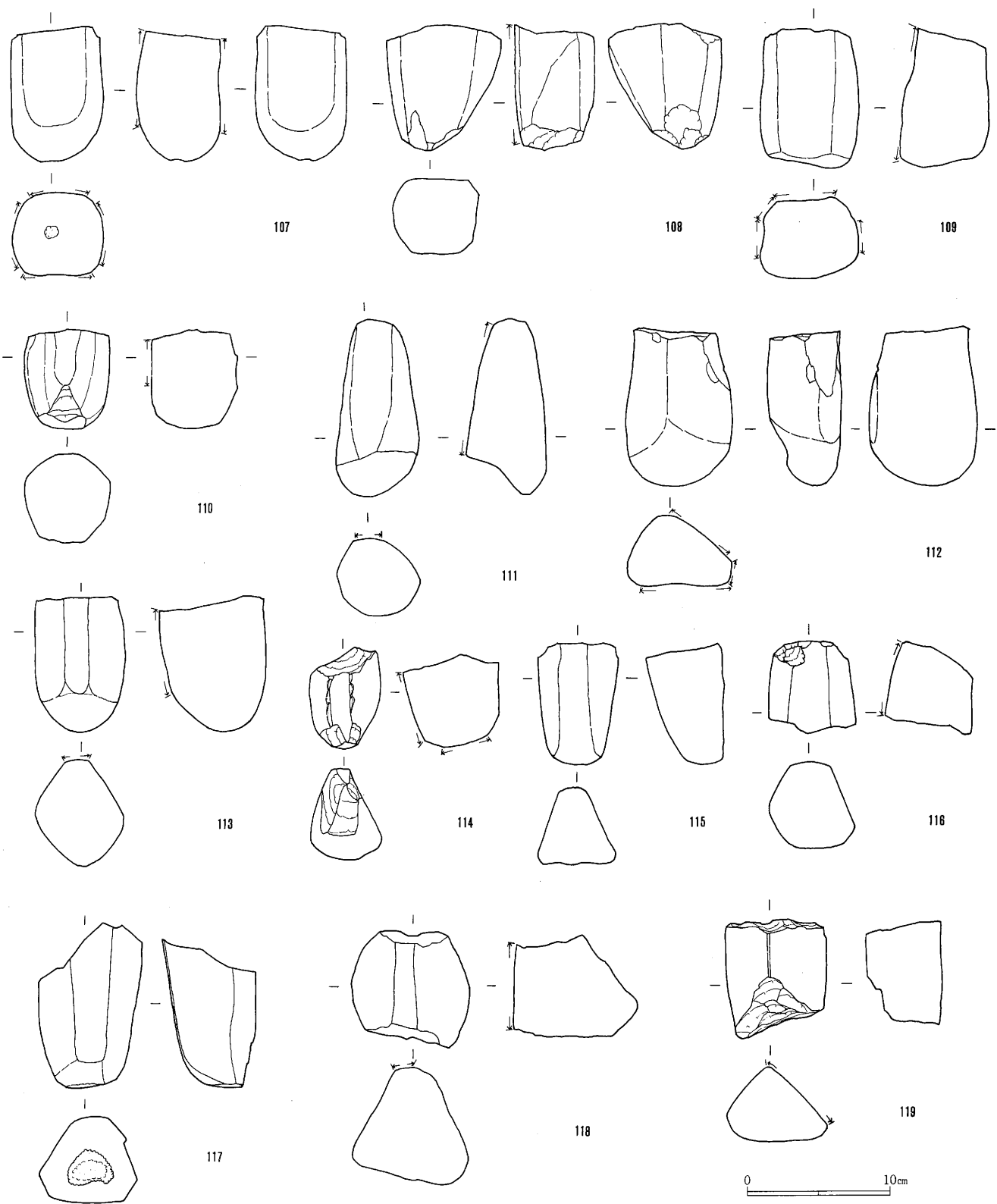


図38 下り林遺跡遺構外出土遺物実測図13 (1:4)

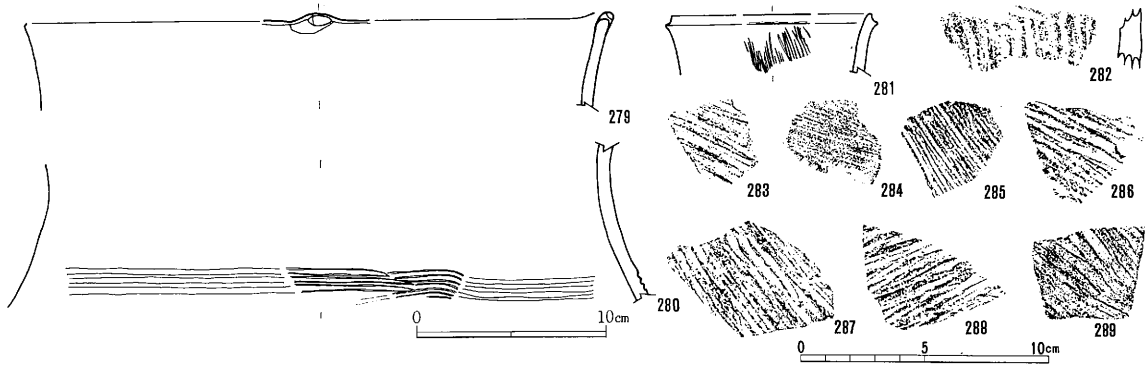


図39 下り林遺跡遺構外出土遺物実測図・拓影14 (279~281 1 : 4、282~289 1 : 3)

打製石斧は16点ある(90~93)が、分銅形は存在しないようだ。頁岩製が多く、ほとんどが欠損品である。横刃形石器は2点(94、95)、粗製大形石匙は1点(49)で、やはり頁岩製である。磨製石斧は3点あり、小形の定角式2点(53)、乳棒状1点である。前者は蛇紋岩、後者は緑色片岩製である。

磨石・凹石は40点ある。磨石が9点(96~98、100)、凹石が6点(101、103、104、106)、両者の兼用が2点(102、105)、特殊磨石が22点(99、107~119)である。特殊磨石はすべて欠損しており、形態はつかみきれない。砂岩製・安山岩製がほぼ半々で他の石材は用いない。断面三角形(112~119)または四角形(99、107~111)の円礫を素材としている。機能面は敲打痕が残され、顕著な磨耗はあまりみられない。

砥石は2点ある。偏平で大形の破片1点と有溝砥石1点(52)である。52は軽石製で13.4gある。軟らかくもろい石質のため欠損部の判断が難しいが、大きな欠損はないようだ。

黒曜石・チャート等の原石は29点(389g)、石核は141点(1499g)、剥片は3,300点余(4342g以上)あり、頁岩や片岩の剥片も数十点ある。ちなみに石器類の総重量は、石鏃121.7g、石錐13.2g、石匙・スクレイパー84.7g、ピエス・エスキュー201.8g、小剥離痕のある剥片639.2gである。

#### (4) 弥生時代中期初頭の遺物(図39)

出土した土器は第8節で述べる中島A遺跡の弥生時代中期初頭の土器に近似している。その分類に従うと、282を除き他はI群に属し、いずれも甕Cと思われる。282はII群の小破片である。

#### (5) 平安時代の遺構と遺物

##### ① 1号住居址(図40)

調査区南端に検出された。すでに上面は林道工事で削平されており、床面部分の調査となった。住居址の範囲は貼り床の部分でしか確認できず、東西2.5m、南北0.8mの狭い範囲であったが、更に発掘区域外に広がると思われる。調査区北壁で土層との関係を見ると、III層中より掘り込みがみられ、V層まで掘り込まれている。覆土は2層に分けることができ、上層(IIIa層)はIII層の土にローム粒を含み、下層(IIIb層)はIII層の土に多量の焼土粒、炭を含む。床面はIII層の土にローム粒がまざった土を厚さ5cm前後貼って堅くたたきしめている。また、床面上には限られた範囲で、厚さ10cm程度の焼土と炭の堆積が見られる。

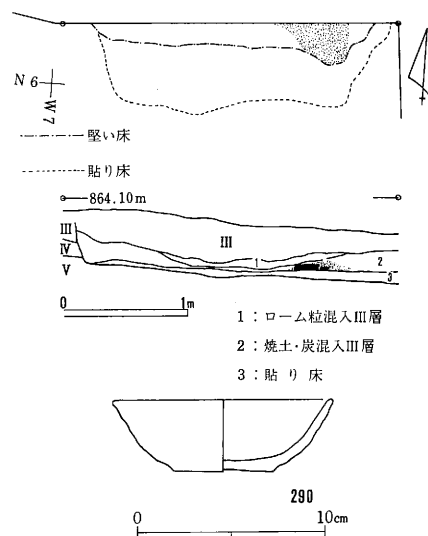


図40 下り林遺跡1号住居址実測図(1 : 60)

・出土遺物実測図(1 : 4)

出土遺物は少なく、図示できるものは土師器の杯1点のみで

ある(290)。杯はロクロ調整で糸切痕が残されており、平安時代後半のものと思われる。このほか、土師器の小形甕の破片が出土している。

## ② 遺構外遺物(図40)

図示できるものはなく、灰釉陶器の椀、ロクロ調整の土師器の杯、須恵器の甕の破片がIII層中より少量出土している。

## 5. 小結

下り林遺跡は前述のように縄文時代早期から前期初頭の遺物が注目されていた遺跡である。今回の調査でも、この時期を含め縄文時代から平安時代にかけての多数の遺物が発見された。各時代ごとに整理すると、縄文時代は調査した部分が尾根の末端の急斜面であるためか、遺構は認められなかった。生活の中心地は従来いわれているように尾根の上の平坦な部分と思われる。そのため今回出土した遺物は居住域よりの廃棄または流出物と考えることができる。遺物についてみると、わずかではあるが草創期の土器が発見され、本遺跡の上限がさかのぼることとなった。また、押型文土器をみると、新しい知見として全面施文をした中に帯状の磨消部分をもつ一群が存在していることが確認された。今後、立野式と樋沢式の関係を考える上で問題となろう。早期後半から前期初頭の土器は、従来あまり内容のはっきりしなかった下り林遺跡の該期の土器の研究に、新しい資料を加えることができたと思われる。前期末から中期前半の遺物も多数出土し、集落の存在が予想される。

このように、長期間にわたる生活の痕跡が残される下り林遺跡であるが、著名な割には、いずれの時期をとっても資料が豊かであるとは言いきれない。小規模な調査の限界なのだろう。本格的な学術調査を待たなければ、その真価を知ることはできそうにない。

## 参考文献

- 赤木 清 1937 「押型文に於ける磨消手法について」『ひだびと』5-9  
大野政雄・佐藤達夫 1967 「岐阜県沢遺跡予報」『考古学雑誌』53-2 日本考古学会  
小沢由香里 1986 「早期末～前期初頭土器の分類と検討」『梨久保遺跡』岡谷市教育委員会  
神奈川考古同人会1938 「シンポジウム 縄文時代早期末・前期初頭の諸問題」『神奈川考古』第17号  
小林康男・百瀬忠幸ほか 1985 『堂の前・福沢・青木沢遺跡』塩尻市教育委員会  
関野哲夫 1980 「鵜ヶ島台式土器細分への覚書」『古代操叢』早稲田大学出版会  
戸沢充則 1950 「岡谷市下り林遺跡の早期縄文式土器」『信濃』2-7 信濃史学会  
戸沢充則 1951 「岡谷市下り林遺跡調査報告」『信濃考古学』8  
戸沢充則 1955 「樋沢押型文遺跡」『石器時代』2 石器時代文化研究会  
戸沢充則 1973 「原始・古代の岡谷」『岡谷市史』上巻 岡谷市  
友野良一ほか 1982 「向山遺跡」『宮田村史 原始編』 宮田村  
鳥居龍蔵 1924 『諏訪史』第一巻  
長崎元廣 1984 「長野県岡谷市下り林遺跡の早期縄文土器」『長野県考古学会誌』48 長野県考古学会  
西沢寿晃 1982 「枋原岩陰遺跡」『長野県史考古資料編全1巻(2)主要遺跡(北・東信)』 長野県史刊行会  
野口行雄ほか 1983 「新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書III-No.14遺跡」 千葉県埋蔵文化財センター  
林 茂樹 1984 「三つ木遺跡の押型文土器と捺糸文土器」『中部高地の考古学III』 長野県考古学会  
藤森栄一 1984 「読書ノート『諏訪史』攻撃への抗議」『藤森栄一全集 第15巻 考古学・考古学者』学生社  
松沢亜生 1957 「細久保遺跡の押型文土器」『石器時代』4 石器時代文化研究会  
松島 透 1957 「長野県立野遺跡の押型文土器」『石器時代』4 石器時代文化研究会  
森嶋 稔 1976 「長野県更級郡大岡村鍋久保遺跡の調査」『長野県考古学会誌』23・24 長野県考古学会  
守矢昌文ほか 1986 『高風呂遺跡』 茅野市教育委員会  
八幡一郎 1954 「縄文式文化遺跡調査の大勢」『日本考古学年報』2 日本考古学協会編

### 第3節 にしはれ 西林A遺跡 (GNB)

#### 1. 遺跡の概観

西林A遺跡は岡谷市神明町一丁目1996番地に所在する。南東150mには岡谷市営球場がある。付近一帯は塩嶺山地よりのびた東斜面の浸食平坦面にあたり、海拔870m前後である(図41)。諏訪湖との比高差は110mほどで、一帯は山林である。西林A遺跡を含む一帯は、『岡谷市史』では「西林遺跡」として紹介されており、「(市営)球場の工事中かなり多数の黒曜石片が散布していた」ことを記している(註1)。今回の調査にあたり対象地が「西林遺跡」の範囲外にもおよんだため「西林A遺跡」と呼称することにした。

遺跡は南方にのびた尾根の南西斜面中腹を第1地点、尾根をははさんで東斜面の緩傾斜部を第2地点とした。第1地点は背後を尾根にかこまれた南西にひらけた斜面で、その前面は小さな沢によって浸食され切立っている。第2地点は、ゆるやかな東向き斜面であるが、小さな凹地状で、南に諏訪盆地を一望することができる。

#### 2. 調査の概要

第1地点は、昭和57年10月初旬から12月中旬にかけて、4,000㎡を対象として調査を行った。調査員は主として2名があたった。第2地点は、昭和58年9月初旬から10月中旬にかけて、1,720㎡を対象に調査を行った。主として調査員3名があたった。整理作業は昭和57年12月より断続的に行われ、本報告に至った。この間当センター刊行の『長野県埋蔵文化財センター年報』1に概要を報告した。

調査方法は次のようである。第1地点は層序の確認と遺跡の全体像を把握するため、全面にトレンチを設定した。遺物の出土は散漫であり、全体的に緩傾斜面のため包含層の一部が浸食されて流出していることがわかった。わずかに04および09トレンチにおいて遺物が集中しており、土壌の一部が検出できた。トレンチ調査の結果から調査区北側の山腹にも遺物の分布が予想され、13・16トレンチを設定したところ、13トレンチにおいて住居址を検出した。以上の結果より09トレンチ北部一帯と13・16トレンチの部分を拡張調査した。調査にあたっては人力による手作業で層位ごとの掘り下げを行った。

測量については遣り方測量を用いた。測量の基準点は周囲の日本道路公団基準杭より算出し、座標値は第Ⅷ測量系の $X=8280$ 、 $Y=-41180$ を基準とした。またレベル原点は日本道路公団基準杭STA25+40の標高値を使用し、868.627mであった。グリッドは $X=8280$ 、 $Y=-41180$ を基準として座標北に軸をあわせて設定した。

第2地点は、前年度に調査した地点と近接しており、層位も大きな変化がないと考え、全面にグリッドを設定し、手作業で層位ごとに掘り下げを行った。調査区北側斜面にはほとんど遺物の出土がみられなかったが、確認のため東西にトレンチをいれた。そのトレンチ内でも遺物の出土がみられなかったため、北側への調査区の拡張は行わなかった。

測量については遣り方測量を用いた。測量の基準点は日本道路公団基準杭(県道0+60、R9.0 第Ⅷ測量系 $X=8305.284$ 、 $Y=-41196.926$ )を用い、周辺の公団の基準杭より座標北を算出した。またレベル原点は日本道路公団基準杭BラインSTA27+0(879.686m)より算出し、水系レベルを867.500mとした。

---

(註1) 岡谷市考古美術館には市営球場造成時に出土した石皿が寄贈されている(会田進氏教示)。

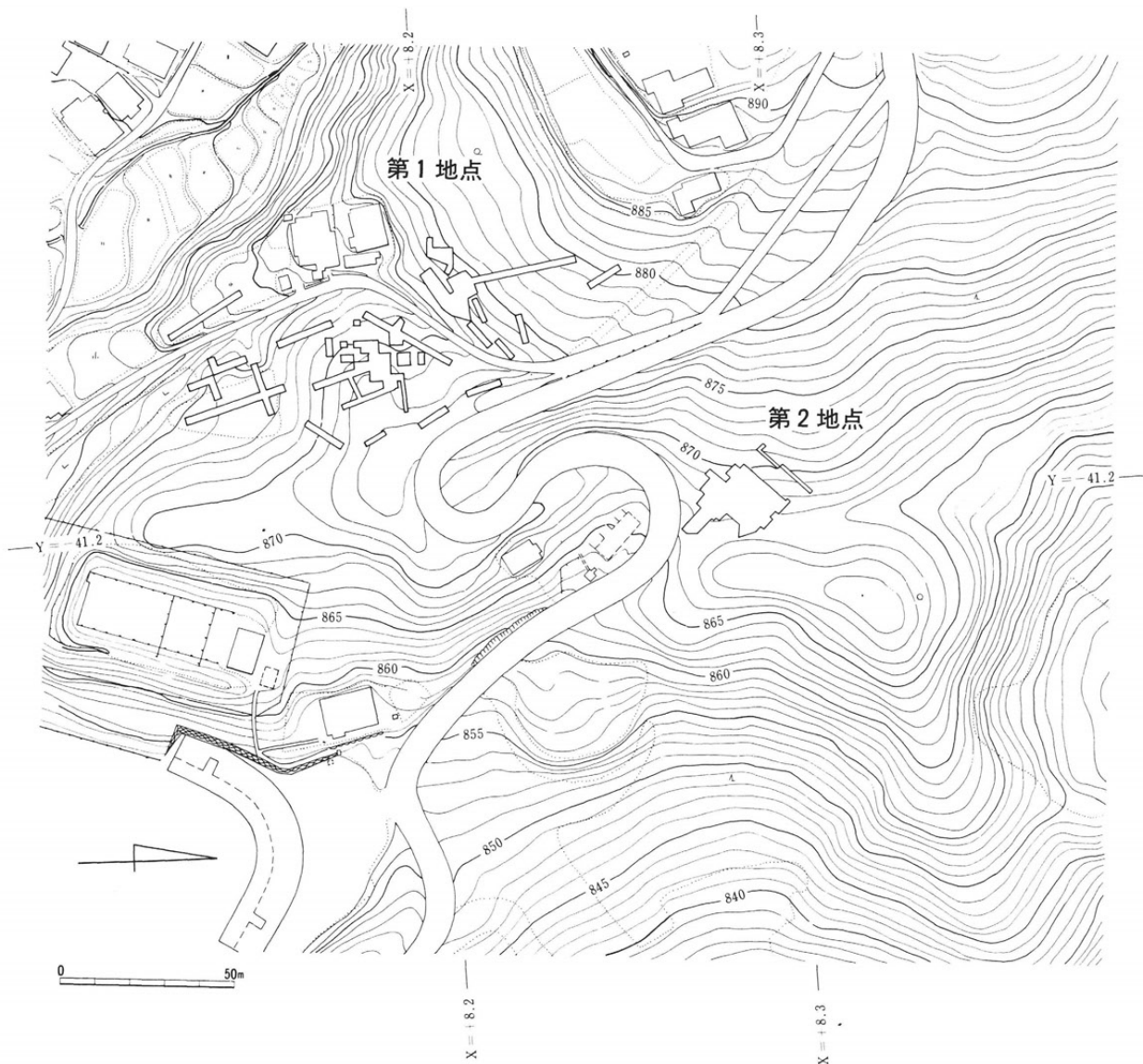


図41 西林A遺跡発掘範囲及び地形図（1：2,000）

### 3. 調査の経過

#### 昭和57年

- 9月29日 縄文時代の集落の可能性を考え、遺跡の性格を捉えるためのトレンチ調査を、第1地点中央の沢の南側から開始。同時に「塚」が1基存在していたため、その調査にも着手。
- 10月5日 「塚」は表土層の上に盛土しており、最近の構築物と判断。
- 10月18日 沢の北側のトレンチ調査開始。
- 10月26日 沢北側08トレンチ（C地区）から落ち込み発見。周囲を拡張する。後に1号住居址と判明したが、埋土が地山と差がなく、確認は難航。
- 11月15日 沢南側04トレンチと09トレンチ周辺（E地区）は遺物多出。面的調査に切りかえる。
- 11月25日 E地区で縄文時代前期末の土壌群検出。
- 11月26日 林賢氏（岡谷市）来訪。「塚」は戦争中に発電機格納用に築いたことを証言。

- 12月10日 第1地点の発掘調査終了。
- 12月13日 整理作業開始。遺構図版は年度内に完成。遺物の実測・拓本の終了をめざすが未了。





昭和58年

- 4月25日 1号住居址周辺のトレンチ調査。遺構はなささうで1日で終了。
- 9月6日 第2地点の調査開始。第1地点の結果から、集落遺跡であることを予想し、当初から面的調査実施。
- 9月9日 III層中より弥生時代中期初頭の土器片がまとまって出土、遺構の検出に重点をおく。
- 9月19日 III層下位で1号炉址検出。周辺に弥生時代中期初頭の遺物が集中、全地点計測して取り上げ。他に遺構は確認できずIV層の調査にはいる。
- 9月29日 台風により水没、遺物が流出。

- 10月4日 V層上面で土壌を7基確認。縄文時代前期末から中期初頭の遺物が出土する。
- 10月7日 V層の調査開始。遺物が少量出土する。
- 10月12日 V層中より、新たに土壌2基検出、調査。
- 10月14日 VI層を調査するが遺物は全くない。
- 10月17日 発掘調査完了。
- 12月15日 整理作業開始。遺構図版作成まで年度内終了。

昭和60年

- 4月1日 整理作業。遺物図版作成まで年度内終了。

昭和61年

- 12月20日 本文執筆完了。

### 4. 調査の結果

#### (1) 層序と地形形成 (図42)

基本的層序は以下の通りである。

I層：黒色土（腐植土）で現表土である。

II層：黄褐色砂質土で、VI層のくずれと考えられる。

III層：火山灰を母材とする黒色土で、第2地点では、弥生時代中期初頭の遺物が出土する。

IV層：火山灰を母材とする茶褐色土で、第2地点では上位で弥生時代中期初頭の遺物が出土する。

V層：火山灰を母材とする黒褐色土で、第1、第2地点とも縄文時代前期後半から縄文時代中期初頭の遺物が出土する。

VI層：礫まじりの黄色粘質土（再堆積ローム）である。

層序の基本は、塩嶺累層の基盤の上に崩落物を含むローム層がのり、その上位が土壌化して遺跡成立時の地表となったと思われる。発掘区は南にのびた尾根の両側であり、尾根の斜面ではII～V層が浸食を受け流出している部分もみられ、一様ではない。

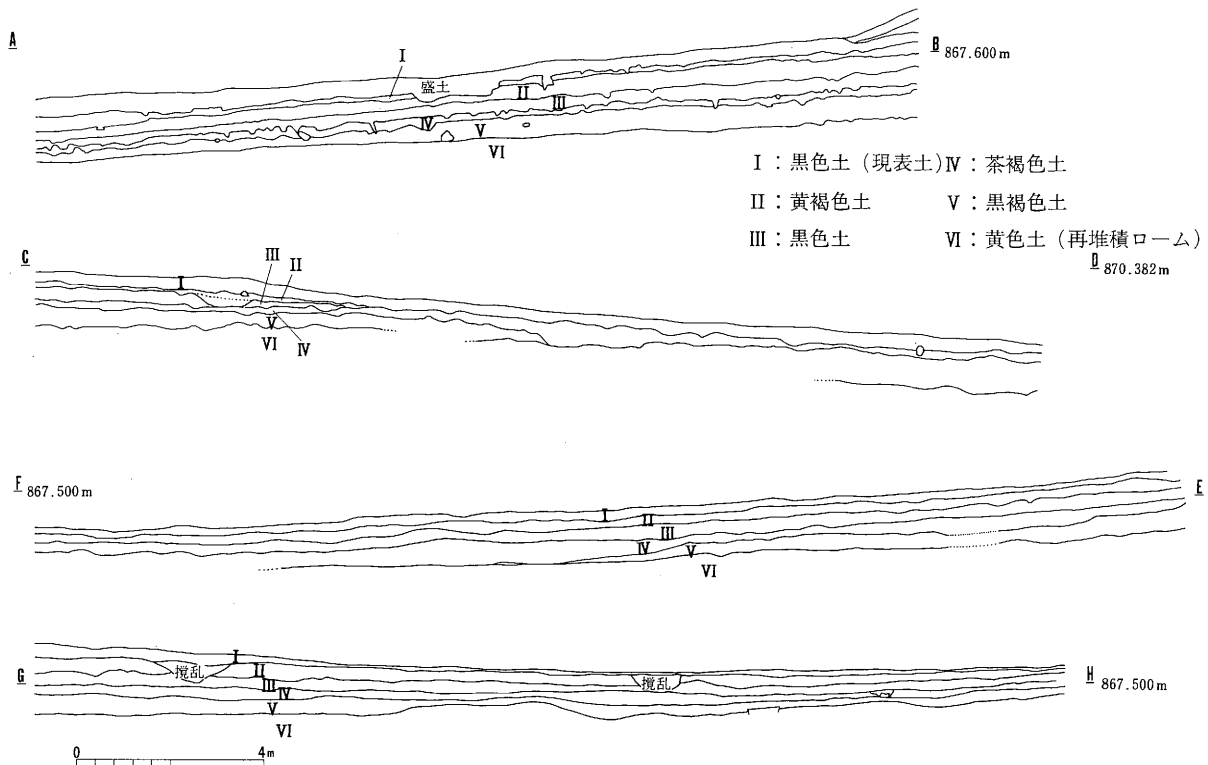


図42 西林A遺跡土層図 (1:160)

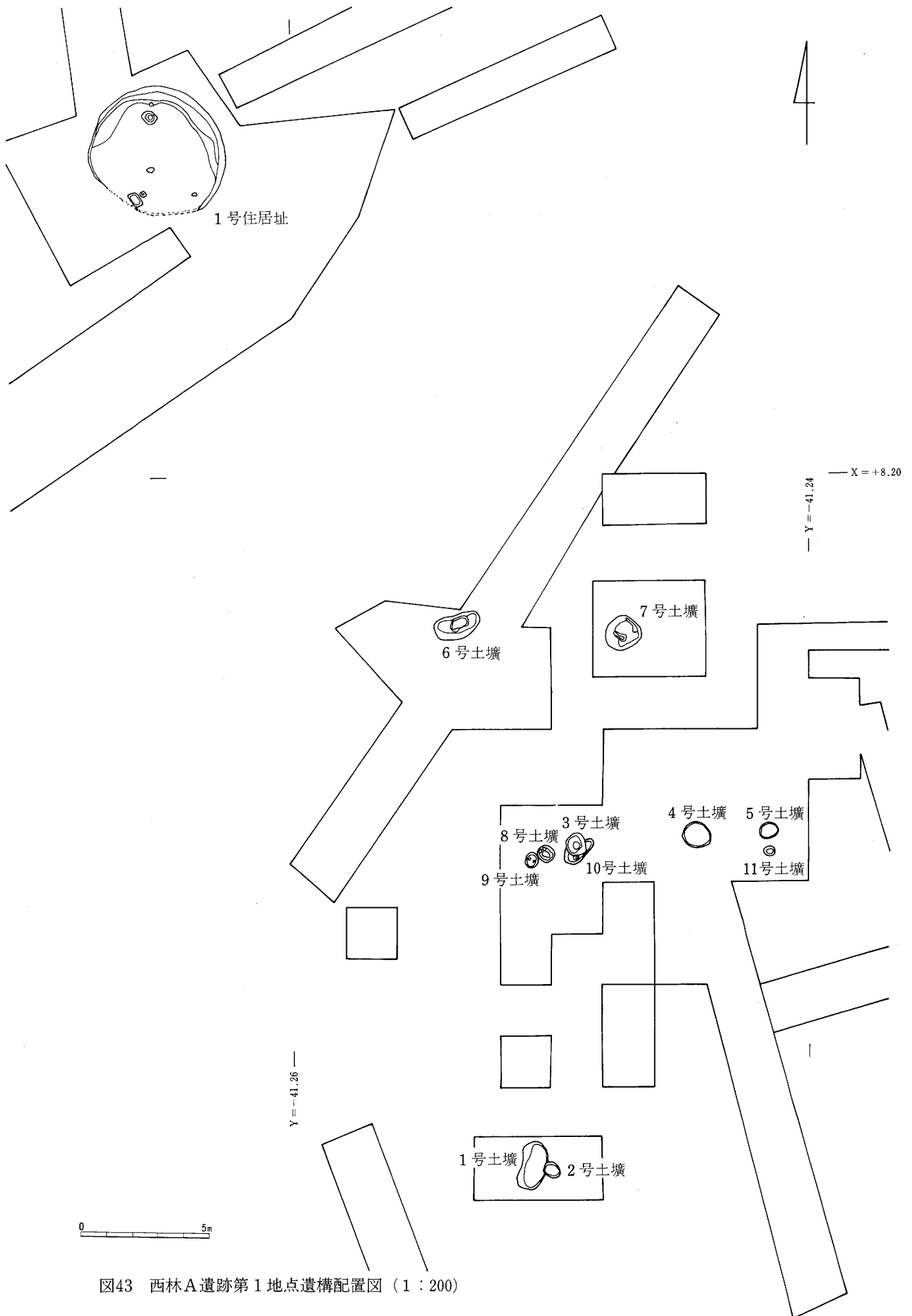


图43 西林A遺跡第1地点遺構配置図 (1:200)

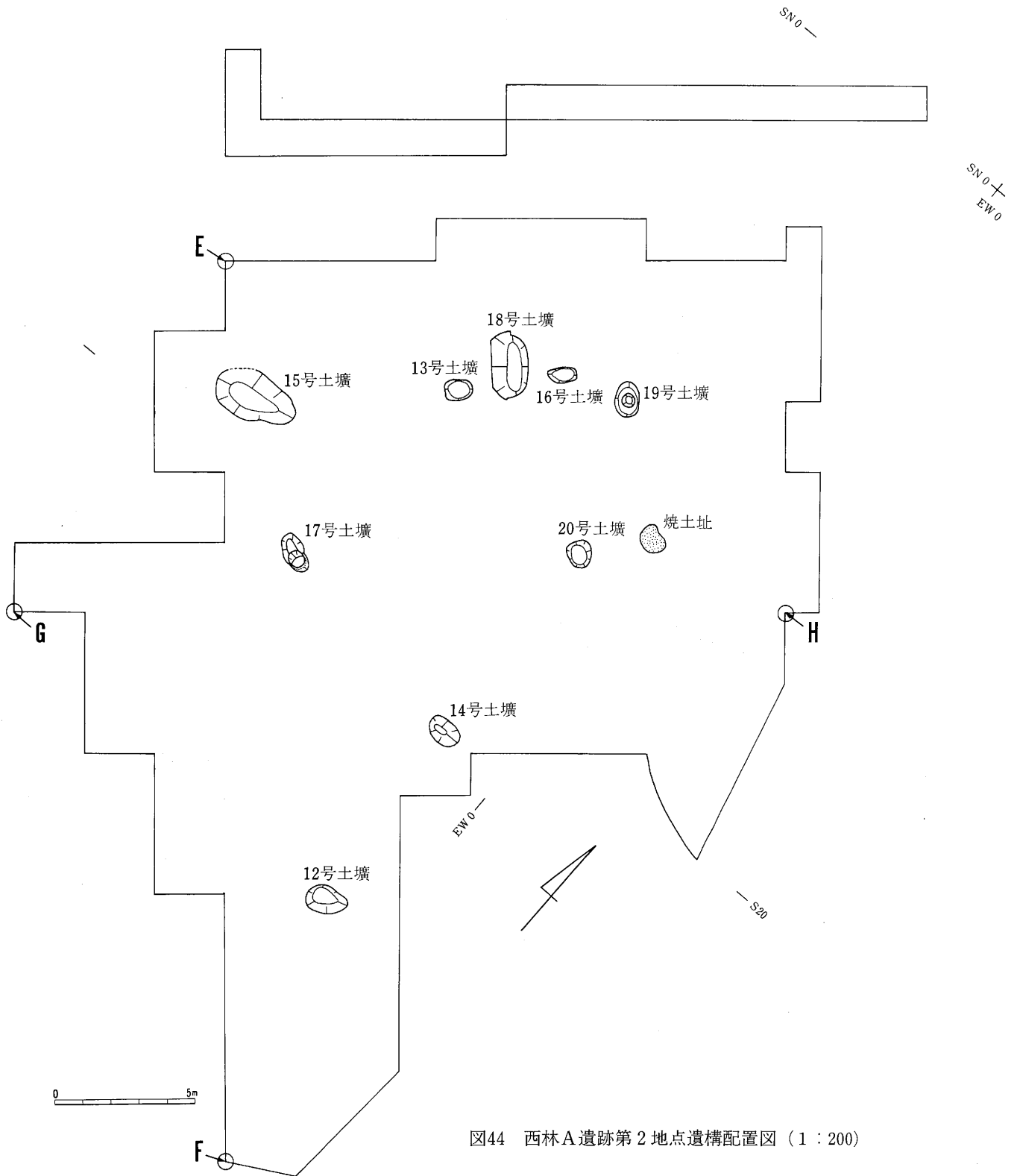


図44 西林A遺跡第2地点遺構配置図（1：200）

(2) 遺構と遺物の概観（図43・44）

第1地点の遺構は、縄文時代前期後半の住居址1軒、土壇11基を検出調査した。遺物は縄文時代早期押型文土器、縄文時代前期後半から中期初頭の土器と石器が出土した。第2地点の遺構は、縄文時代前期末から中期初頭の土壇9基、弥生時代中期初頭の炉址1基を調査した。遺物は縄文時代前期末から中期初頭の土器と石器、縄文時代後期初頭の土器、弥生時代中期初頭の土器と石器が出土した。

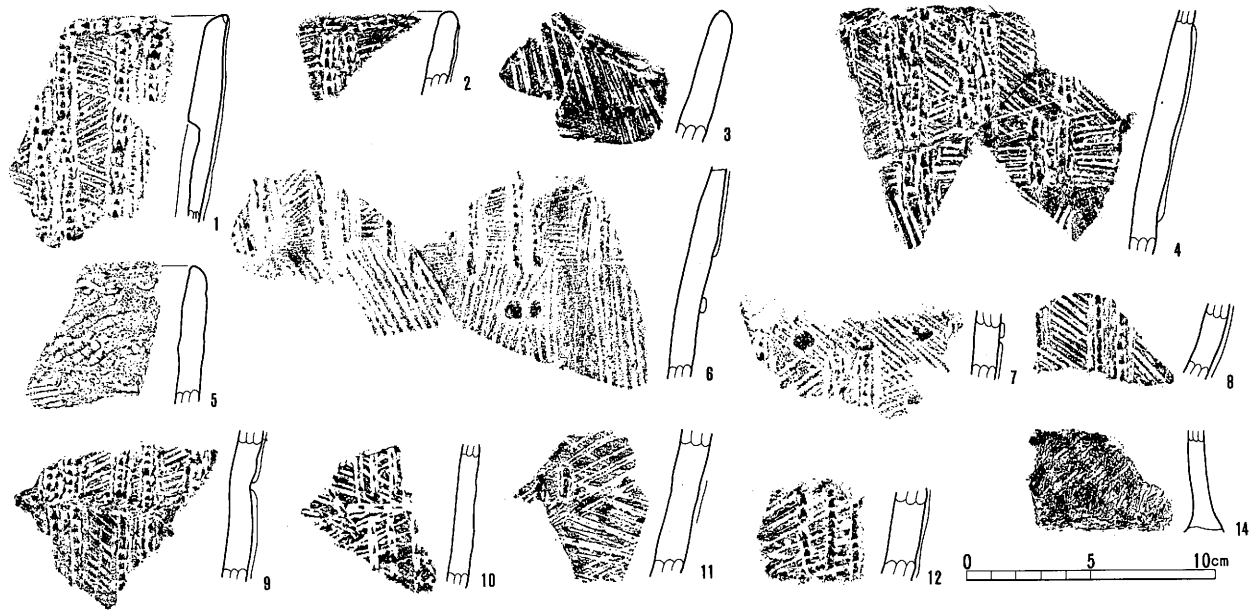
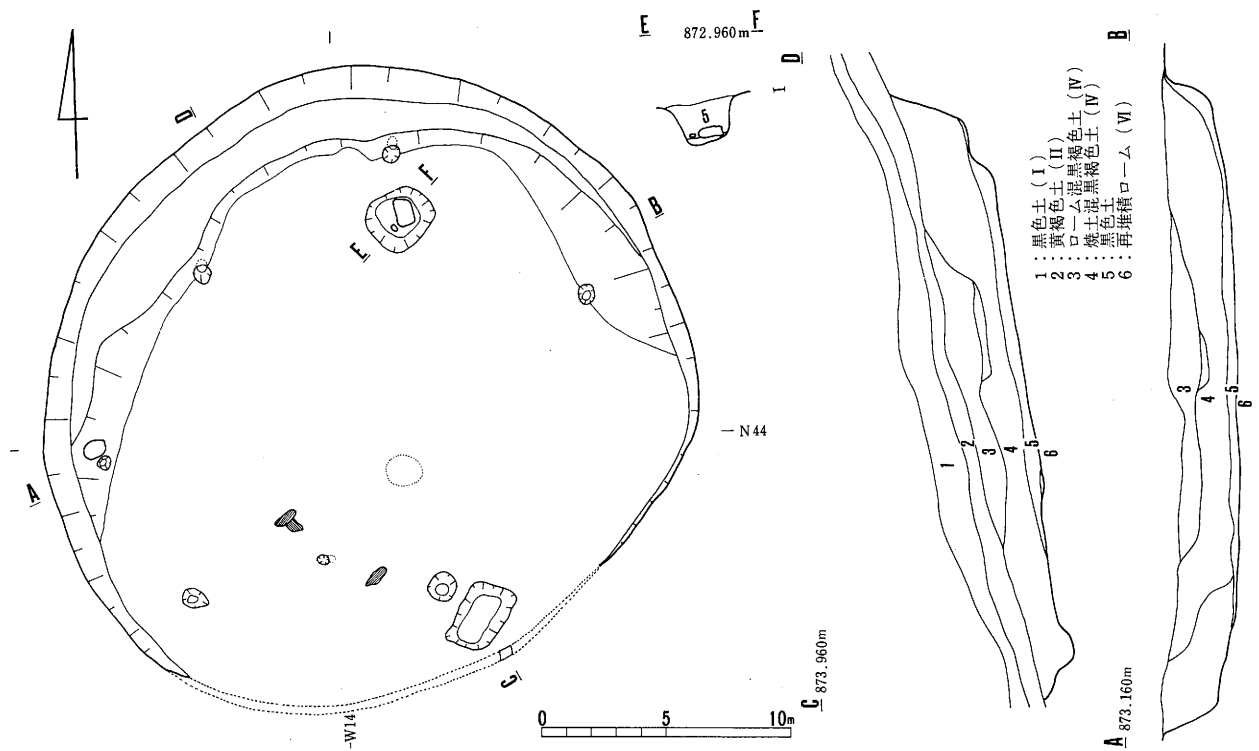


図45 西林A遺跡1号住居址実測図(1:60)・出土土器拓影(1:3)

### (3) 縄文時代の遺構と遺物

#### ① 1号住居址(図45・46)

N44・W14付近を中心とし16トレンチ南端に位置する。中央に十字に土層観察用のあぜを残して調査した。住居址は南向きの傾斜面に構築されているため、南壁の検出は難しく、最終的に南辺は確認できなかった。プランはほぼ円形(4.8m×5.3m)であると思われる。検出はVI層上面で、VI層を掘り込んでつくられている。埋土は5層に分けることができ、地形の傾斜にそって堆積している。土質はV層の土を基本としており、ロームブロックや焼土粒の含有の差によって分層した。壁は北側部分で80cmを測り垂直にちか

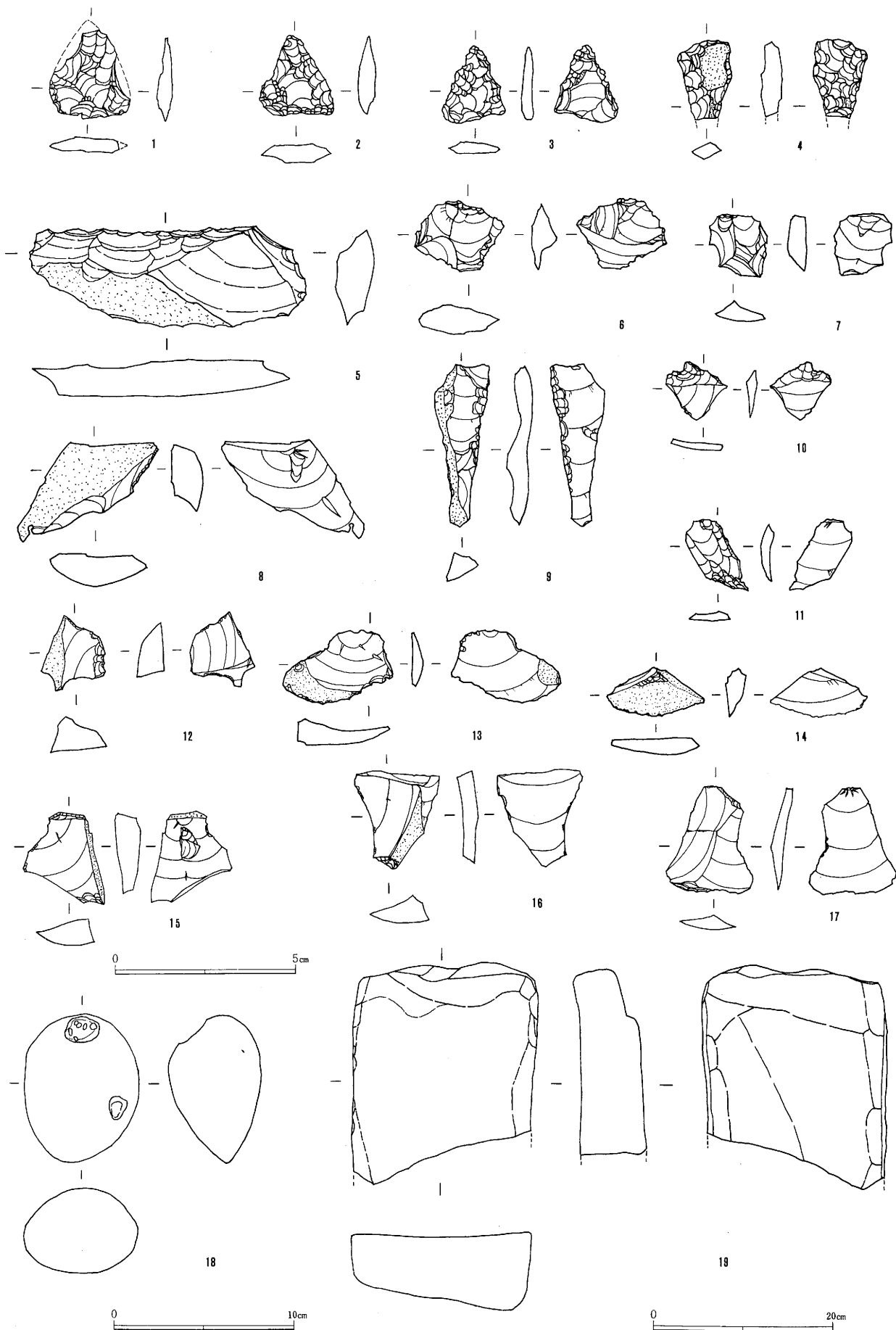


图46 西林A遗址1号住居址出土石器实测图（1~17 2:3、18 1:3、19 1:6）

くたちあがり、南側部分では明瞭なたちあがりを確認できなかった。炉の周辺及び北側部分は堅くたたきしめられた床が検出できたが、南側部分にははっきりした床が検出できなかった。北側部分では壁沿いに30cmほどの幅で床面が10cmほど高くなっている部分が半周する。地床炉が中央やや南寄りにあり、焼土は25×30cm程度の範囲に広がり、厚い部分で5cmを測る。ピットは9基検出できたが、P<sub>1</sub>とP<sub>9</sub>は規模も大きく南北の端につくられている。P<sub>2</sub>～P<sub>8</sub>は規模は小さいがP<sub>1</sub>とP<sub>9</sub>の間に1.8m間隔で配置されている。床面には炭化材が存在し一部に炭化物の広がりもみられたが、焼失住居と断定するには十分なものではなかった。この炭化材は学習院大学木越研究室で放射性炭素年代測定の結果B・P 5040±140という数字を得ている (Gak-10893)。

遺物は埋土内よりまばらに出土しており、特別な傾向は指摘できない。

遺物には土器および石器がある。土器は縄文時代前期末のものがほとんどである。1～12は棒状隆帯の結節浮線文やボタン状突起をもち、また地文には櫛歯状工具による羽状構成の沈線の特徴とする諸磯c式がほとんどである。石器は石鏃(1～3)、つまみのある石錐(4)、横刃形石器(5)、小剥離痕のある剥片(6～17)、敲石(18)、砥石(19)がある。5が緑色凝灰岩、18、19が砂岩、他は黒曜石製である。

## ② 土壌 (図47・48、表10)

土壌は第1地点で1号～11号土壌、第2地点で12号～20号土壌が検出された。以下一覧表を掲げておく。ほとんどが検出層位よりみて縄文時代後期後半から中期にかけてのものと思われる。遺物は14号土壌より黒曜石製の石核2点が出土し、5号土壌から諸磯b式土器(13)が出土している。土壌の形態や分布には規則性がみられない。

名称	平面形	規模(長径×短径×深さ)	検出層位	埋土	備考
1号土壌	楕円形	192 × 94 × 21	V層上位	茶褐色粘質土(VI層)	2号土壌に切られる。土器片1点
2号土壌	円形	68 × 60 × 23	IV層下位	黒色土(III層)	1号土壌を切る。
3号土壌	円形	90 × 84 × 41 (47)	IV層上位	黒色土(III層)	10号土壌を切る。炭化物少量
4号土壌	円形	112 × 102 × 28 (39)	V層上位	黒褐色土(V層)	黒曜石フレイク1点
5号土壌	楕円形	77 × 64 × 40	IV層下位	黒褐色土(V層)	諸磯b式土器(13)
6号土壌	楕円形	180 × 92 × 37 (52)	V層下位	黒褐色土(V層)	炭化物少量 スクレイパー1点(20)
7号土壌	円形	140 × 126 × 51 (63)	V層下位	黒褐色土(V層)	
8号土壌	円形	66 × 64 × 24 (31)	IV層上位	黒色土(III層)	炭化物微量
9号土壌	円形	52 × 45 × 20 (31)	IV層上位	黒色土(III層)	〃
10号土壌	楕円形	168 × 88 × 38 (69)	V層上位	茶褐色土(VI層)	炭化物少量
11号土壌	円形	45 × 40 × 63	V層下位	黒褐色土(V層)	
12号土壌	楕円形	117 × 82 × 16	IV層上位	黒色土(III層)	土器片1点
13号土壌	楕円形	78 × 60 × 39	V層上位	黒色土(III層)	人頭大の石
14号土壌	楕円形	86 × 44 × 32	IV層上位	黒色土(III層)	黒曜石石核(PL19-3)
15号土壌	楕円形	242 × 138 × 14	V層上位	茶褐色土(VI層)	焼土粒 炭化物少量
16号土壌	楕円形	100 × 67 × 33	IV層下位	黒色土(III層)	
17号土壌	楕円形	115 × 61 × 18 (47)	VI層上位	黒褐色土(V層)	内部に円形の小ピット(44×43×25)
18号土壌	楕円形	103 × 185 × 17	VI層上位	茶褐色土(VI層)	土器片3点、黒曜石片2点
19号土壌	楕円形	99 × 70 × 28	IV層上位	黒色土(III層)	内部に円形の小ピット(40×38×11)
20号土壌	円形	79 × 65 × 15	V層上位	黒褐色土(V層)	

表10 西林A遺跡土壌一覧表

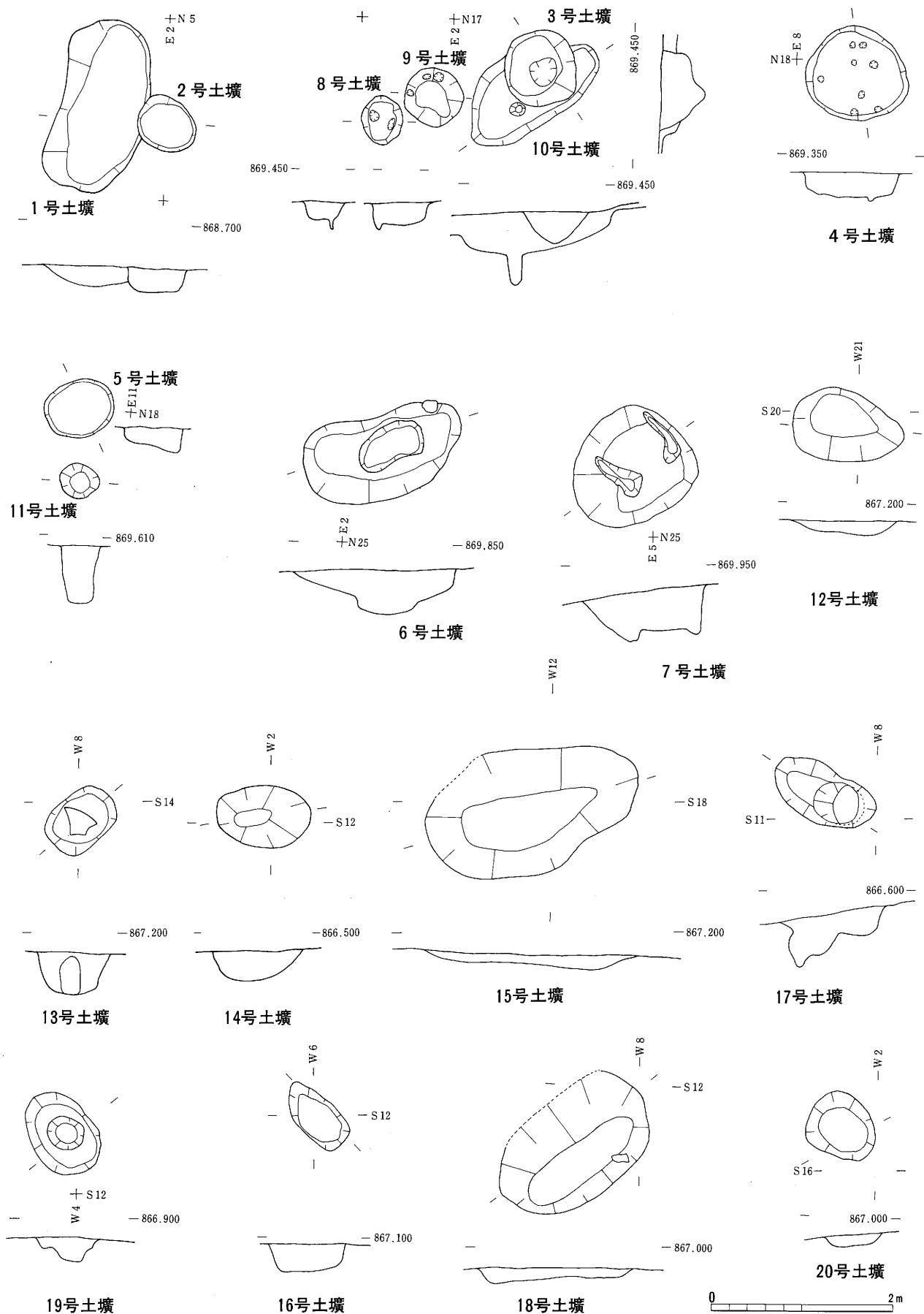


图47 西林A遗址土坑实测图 (1:60)

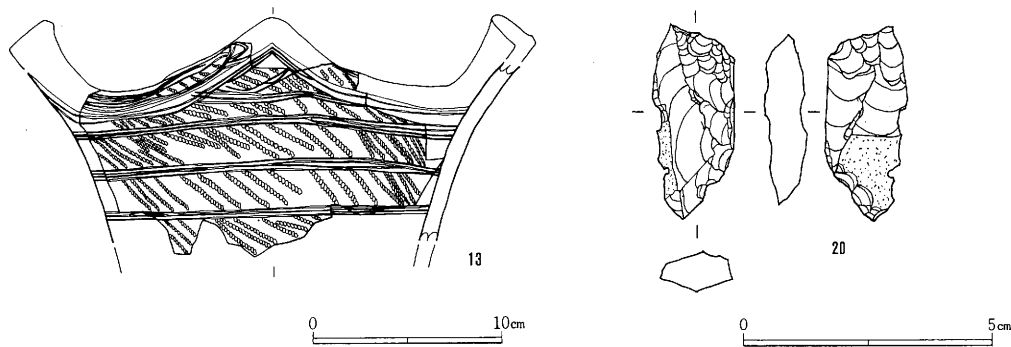


図48 西林A遺跡土壌出土遺物実測図 (13 5号土壌 1 : 4、20 6号土壌 2 : 3)

③ 遺構外の遺物

ア. 土器 (図49~52)

遺構外における遺物の出土状況は散漫で、特に注意すべき出土状況や分布を呈するわけでもなかった。時期的には前期中葉を中心とするものがほとんどで、他には、早期押型文土器、前期後葉~終末、そして後期初頭の土器が少量出土したにすぎない。これは遺構の時期と一致したあり方と考えることができる。時代を追って説明したい。

15~19は早期押型文土器である。すべて楕円押型文で、横方向の回転施文がなされる。

20~51は本遺跡の主体を成すもので、諸磯b式に比定される。基本的な施文方法や文様モチーフは、地文に縄文が施された上に、半截竹管状工具による2条ないしは3条の浅い平行沈線文が等間隔に横位に施文される。中にはそれが向かい合う半円弧状 (26、43) になるものや、2本の沈線間に斜めのギザギザが充填されるもの (33、47)、同じく竹管状工具による連続施文のなされるもの (46) がある。また、地文の縄文がないもの (41、44、45、47) もあるが、20のように口縁付近には縄文があってもその下半部にはない例もあるので、1片の土器から同一個体の全面に縄文がなかったということは必ずしもいえそうにない。縄文ということであれば、49、51は羽状縄文である。50は結節縄文であり、両者ともに時期は若干新しいものと思われる。この時期の土器は器形も特異である。口縁部は極端に大きく外反し、その上端で「く」の字状に内折する。その折れも比較的短いもの (20~22、24) と長いもの (26、27) の2通りが知られる。これらの口縁部は波状を呈するものが多いようである。図示した20については、波状になるようにも見えるが、はっきりしない。なお、先に記した等間隔に配される横位平行沈線文は、口縁部から底部に至るまで単純にくり返された文様パターンであることが、底部資料である48により知ることができる。

52~56はそれに続く諸磯c式に比定されるであろう一群である。52は口縁部破片であり、地文に羽状沈線文が施されて、その上に爪形の連続施文のなされた2本を1組とした縦位の隆帯文及びボタン状の貼付がなされた典型的なものである。53~56はいずれも胴部破片で、半截竹管状工具により向かい合う半弧状 (53)、羽状 (54、56) 等のモチーフが施される。

57~91は、前期末に位置付けられる一群である。晴ヶ峰式ないし十三菩提式と呼ばれるものと、北陸の鍋屋町系といわれるもので、大洞遺跡の分類では第I群および第II群に相当する。その中で57~85は、第



図49 西林A遺跡遺構外出土縄文時代土器拓影1 (1 : 3)



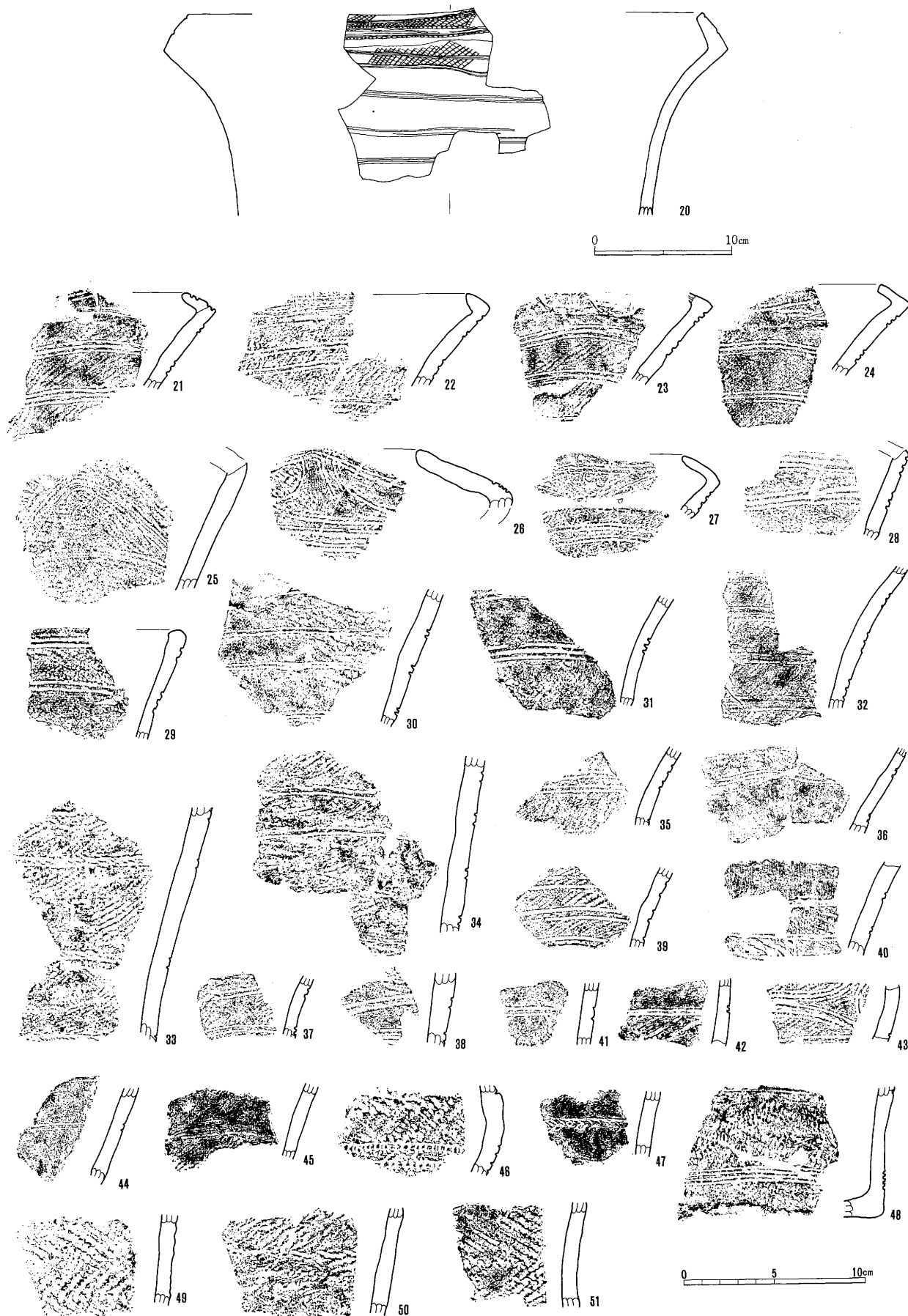


图50 西林A遺跡遺構外出土繩文時代土器実測図・拓影2 (20 1 : 4、21~25 1 : 3)

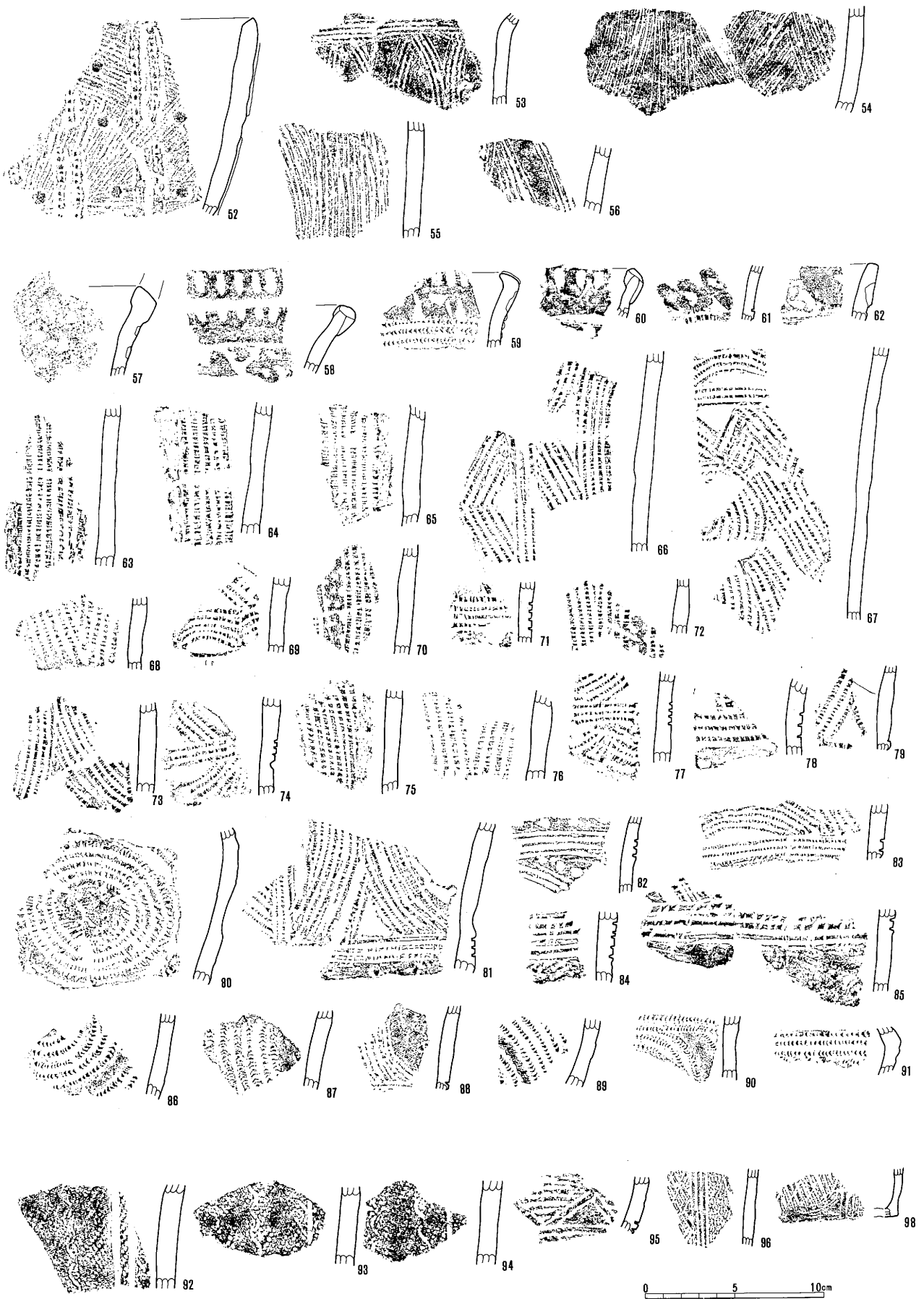


图51 西林A遺跡遺構外出土繩文時代土器拓影3 (1:3)

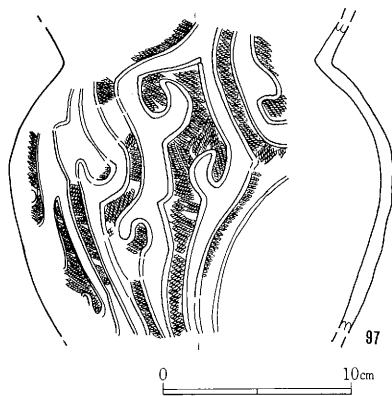


図52 西林A遺跡遺構外出土

縄文時代土器実測図4 (1:4)

92~96は中期初頭の資料である。同じく大洞遺跡の分類で第III群とした梨久保式に相当する。92~94は地文に結節を伴う縄文が縦位に施文され、特に92は胴部の分割が縦位の懸垂文によって行われる。95、96は半截竹管状工具による沈線文によって文様が描出されるものである。

縄文時代後期初頭の土器が第2地点より1点出土した。97は深鉢形土器で口縁部を欠く。器壁が薄く胴部内面の稜がはっきりしている。胴部の文様帯は1帯でモチーフを沈線で割り付け、縄文、沈線文の順に描き、内外面とも研磨される。称名寺式土器で、諏訪市大安寺遺跡出土の土器と類似している〔藤森栄一1956〕。

#### イ. 石器 (図53~57)

出土石器の総数は定形的な石器138点、小剥離痕のある剥片163点、剥片、石核、原石は700点以上となる。以下分類に従ってその概略を示す。

石鏃は25点で、有茎石鏃7点(24、58~63)、無茎石鏃13点(21~23、53~57)、不明5点である。有茎石鏃のうち6点は第2地点から出土しているので、後述する弥生時代中期初頭の土器と共伴する可能性がある。石質はチャート1点を除きすべて黒曜石である。また13点は完形品で、欠損品中には小破損品が含まれており完形品の割合は高い。石錐は12点ある。内訳はつまみを有する石錐5点(25、26)、棒状の石錐6点(65~67)であるが後者は第2地点に多く、一部は弥生時代中期初頭の土器に共伴する可能性をもつ。つまみを有する石錐のうち、錐部をていねいにつくり出している2点(25)は、つまみ部にも加工がなされているが、剥片の尖った部分をわずかに加工しただけの3点(26)はつまみ部も未加工である。つまみのない石錐には横断面が扁平な例1点(66)が含まれている。石質はすべて黒曜石製で、欠損品は1点に留まる。スクレイパーは4点ある。内訳は片面加工2点(68、69)、両面加工1点(70)である。欠損品は1点のみで、完形品は形態が一律でない。石質はすべて黒曜石である。ピエス・エスキーユは46点(28~38、71~81)ある。すべて黒曜石製で、形状、大きさともばらつきがある。小剥離痕のある剥片は163点(27、39、82~102)あり、やはりすべて黒曜石製である。

打製石斧は30点(40~44、103~111、114、115)ある。分銅形はなく、短冊形、撥形ばかりで、接合資料2点を含む。横刃形石器は6点(45、46、112、113、117、118)ある。この両者は凝灰角礫岩と緑色片岩製が主となる。磨製石斧は2点(119、120)でいずれも定角式である。石質は蛇紋岩である。凹石・磨石は5点(47、48、121、122)、敲石は2点(49、50)、砥石は1点(51)ある。石皿は4点(52、123、124)で、完形品1点(52)を含む。凹みの著しい石皿2点、板状の石皿2点(123、124)にわけられる。

黒曜石を主とした原石21点(549.6g)、石核37点(1032.1g)、剥片655点(1312.2g)のほか、チップ類も多い。また打製石斧、横刃形石器と同質の剥片は100点近くある。ちなみに石器類の総重量は、石鏃25.9g、

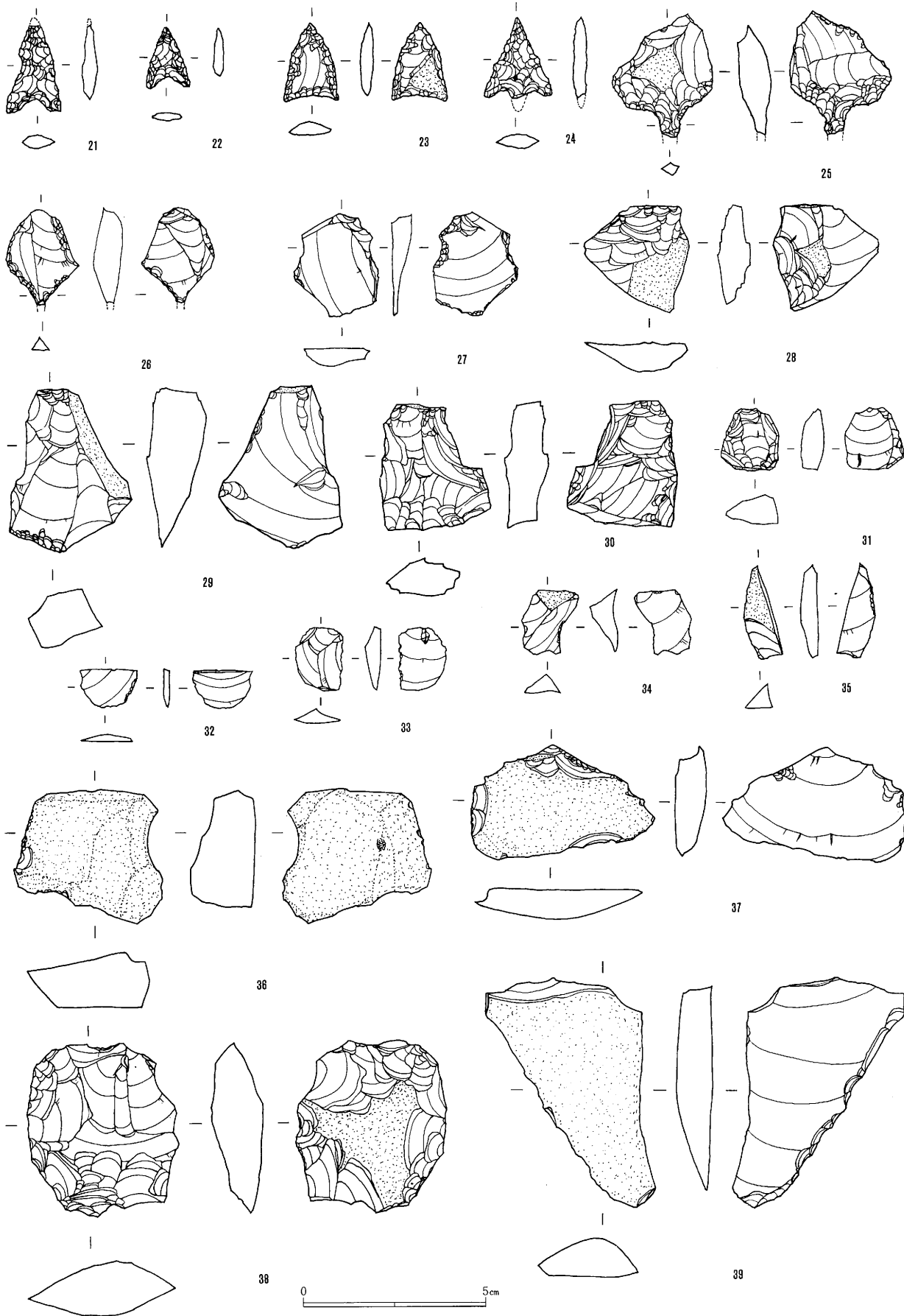


图53 西林A遺跡第1地点出土縄文時代石器実測図1 (2:3)

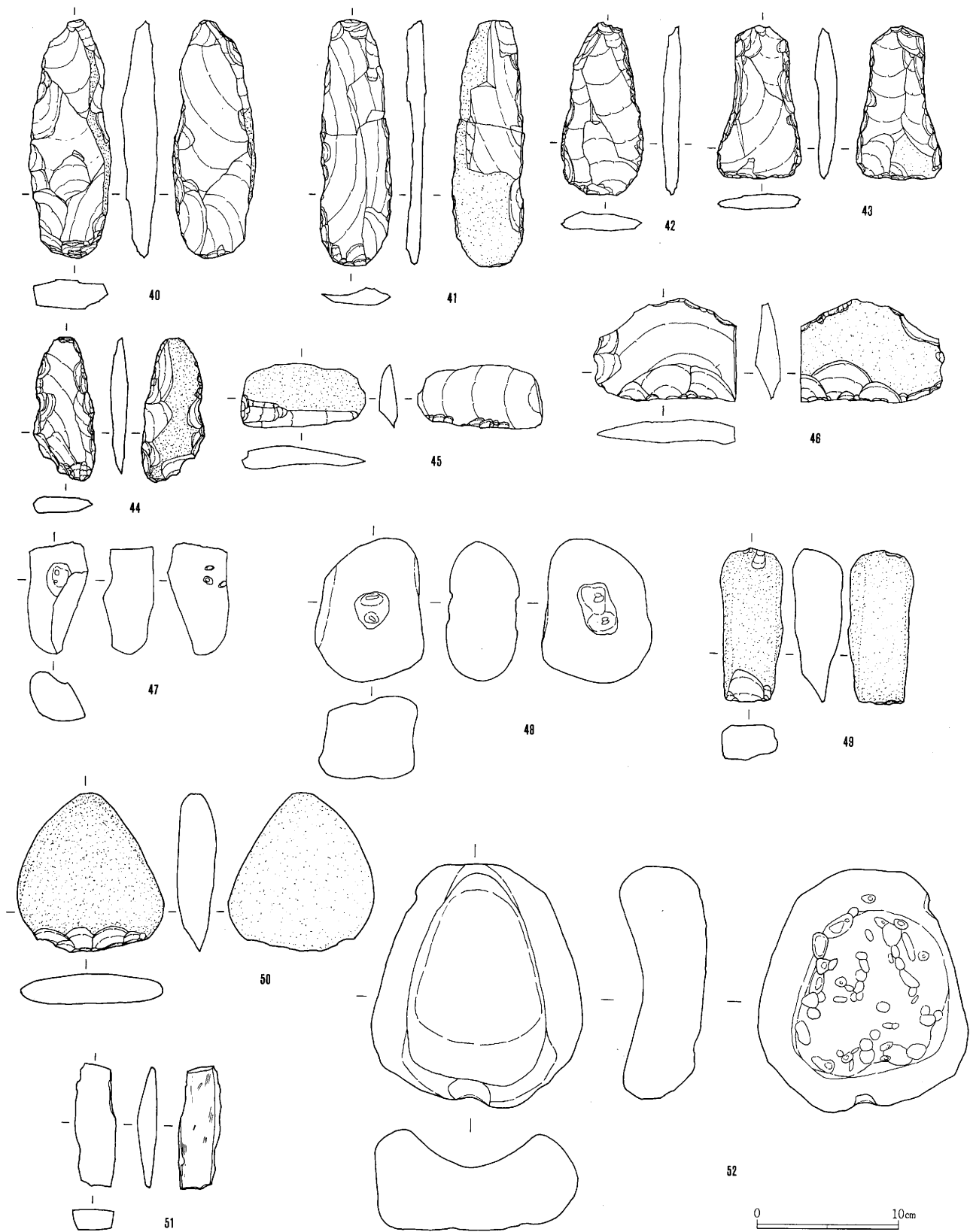


图54 西林A遺跡第1地点出土縄文時代石器実測図2 (1:4)

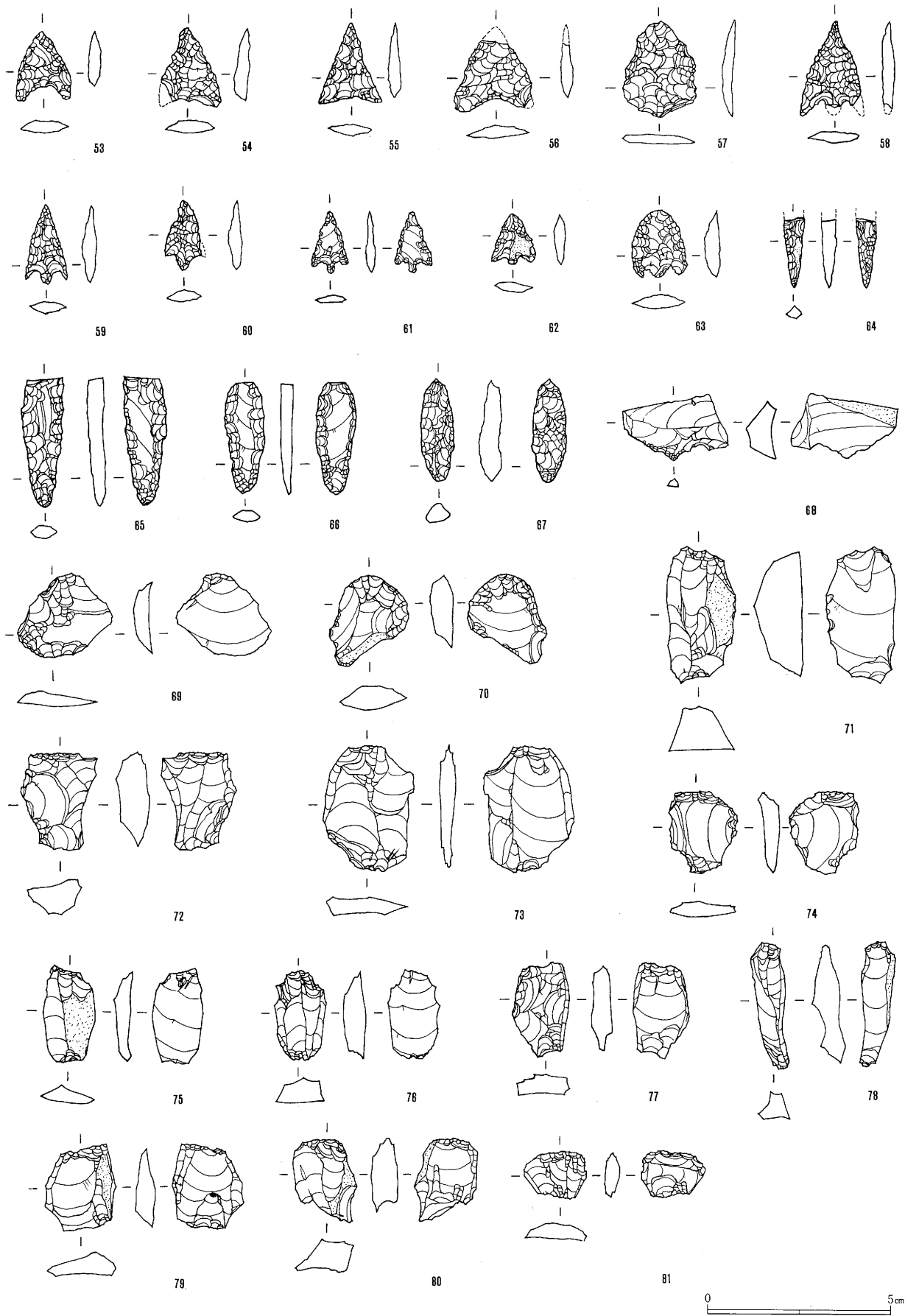


图55 西林A遺跡第2地点出土繩文時代石器実測図1 (2:3)

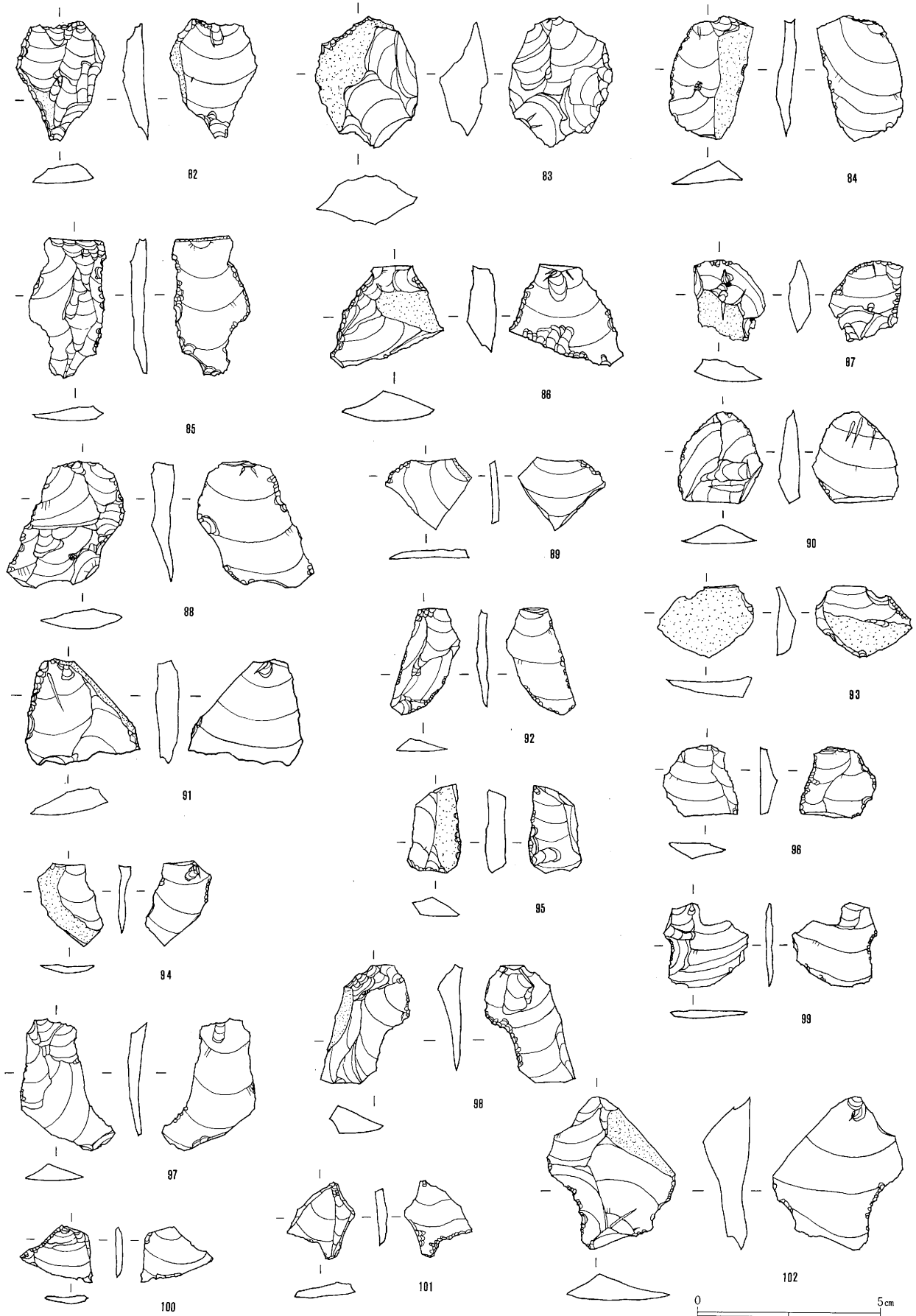


图56 西林A遺跡第2地点出土縄文時代石器実測図2 (2:3)



图57 西林A遺跡第2地点出土縄文時代石器実測図3 (1:4)



石錐29.7g、スクレイパー96.6g、  
ピエス・エスキューユ341.4g、小剥  
離痕のある剥片485.2gである。

(4) 弥生時代中期初頭の  
遺構と遺物

① 1号炉址 (図58)

III層下面において検出された。  
規模は80cm×60cmで不整円形をし  
ている。掘り方はなく、地面が火  
熱を受けて焼土化しており、その  
厚さは10cm程度で、IV層上面にま  
で達している。人頭大の石が焼土  
の分布している端にあり、火をう  
けたらしく割れている。周囲に床  
面と思われるような堅い面は検出  
できなかったが炉址を中心とした  
生活空間が考えられる。

遺物は炉址の中からは出土して  
いないが、周辺から弥生時代中期  
初頭の土器片および、打製石斧や  
その加工に伴う破片が、集中して  
出土している (図58)。

② 遺構外の遺物  
(図59・60)

土器と石器が若干ある。

土器は第8節で述べる中島A遺  
跡の弥生時代中期初頭の土器に近  
似しており、その分類に即して説  
明する (分類記号はP340を参照され  
たい)。

大きく在地的土器とみてよきそ  
うなのでI群とするが、胎土にあ  
る程度の差があり、完全に在地的

なIA群、長石・石英の多いIB群、雲母の目立つIC群に区分する。時間的にはひとまとまりで、条痕文土器の4期区分 (市沢英利1985) に比定すればII～III期に相当する。

IA群には壺、甕、浅鉢がある。壺は広口壺で、浮線文系土器、条痕文系土器のいずれからも直接的な系譜のたどれないC種のみである。120は体部上半に渦文に似た曲線モチーフをヘラで描く。123は口唇部と貼付突帯上に連続指圧痕をもつ。甕には4つの種がある。102は縄文時代晩期末葉前後のI群土器の甕B3・B4に近似し、103～108は同じく甕C1・C2に近似する。両者は明らかに浮線文系である。109は全

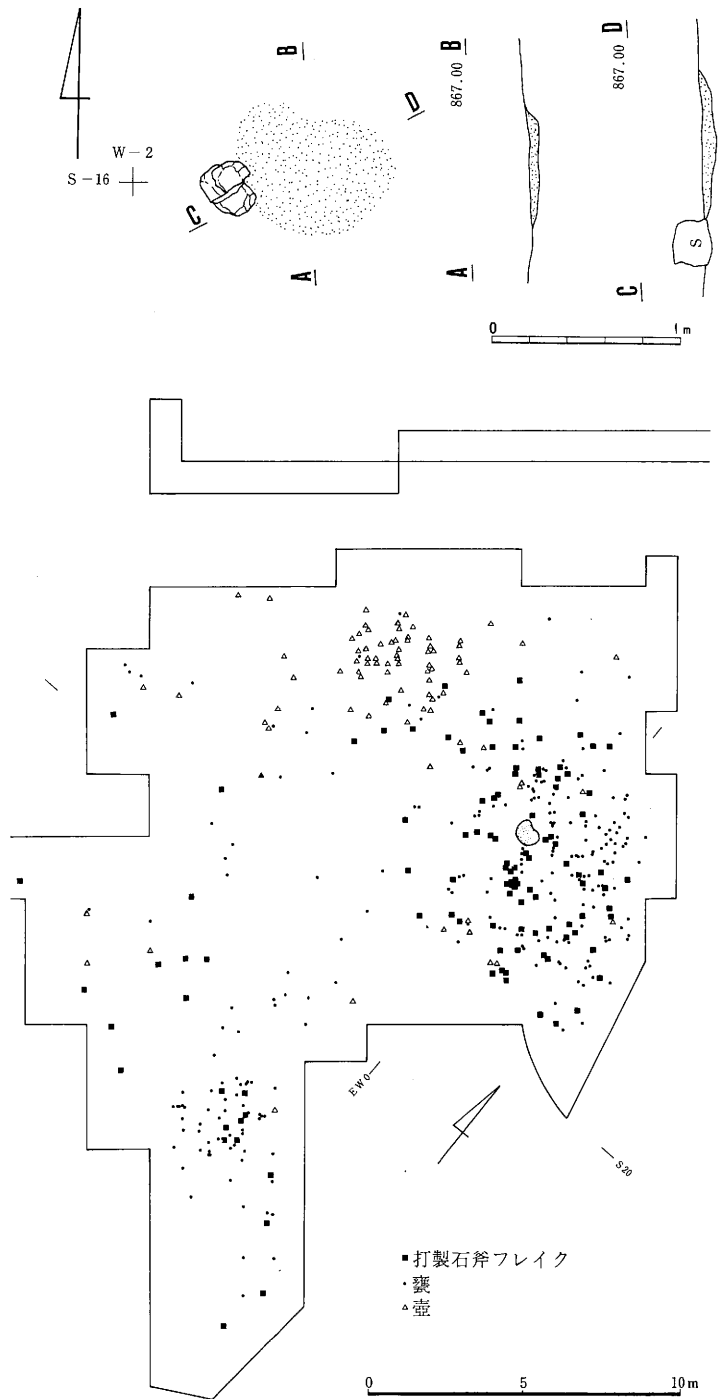


図58 西林A遺跡1号炉址実測図 (1:40)

及び西林A遺跡弥生時代遺物分布図 (1:240)

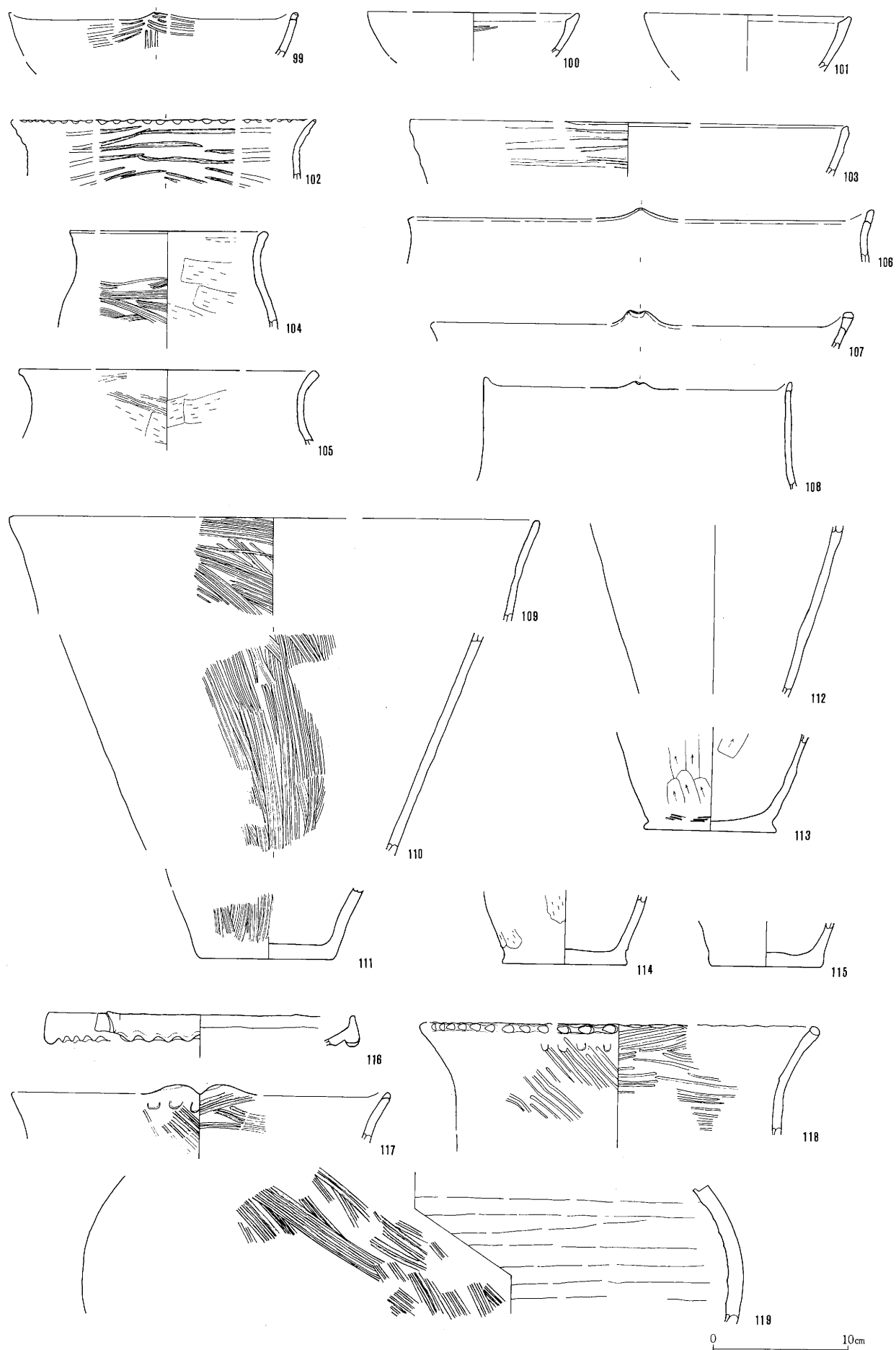


图59 西林A遺跡第2地点出土弥生時代遺物実測图1 (1:4)

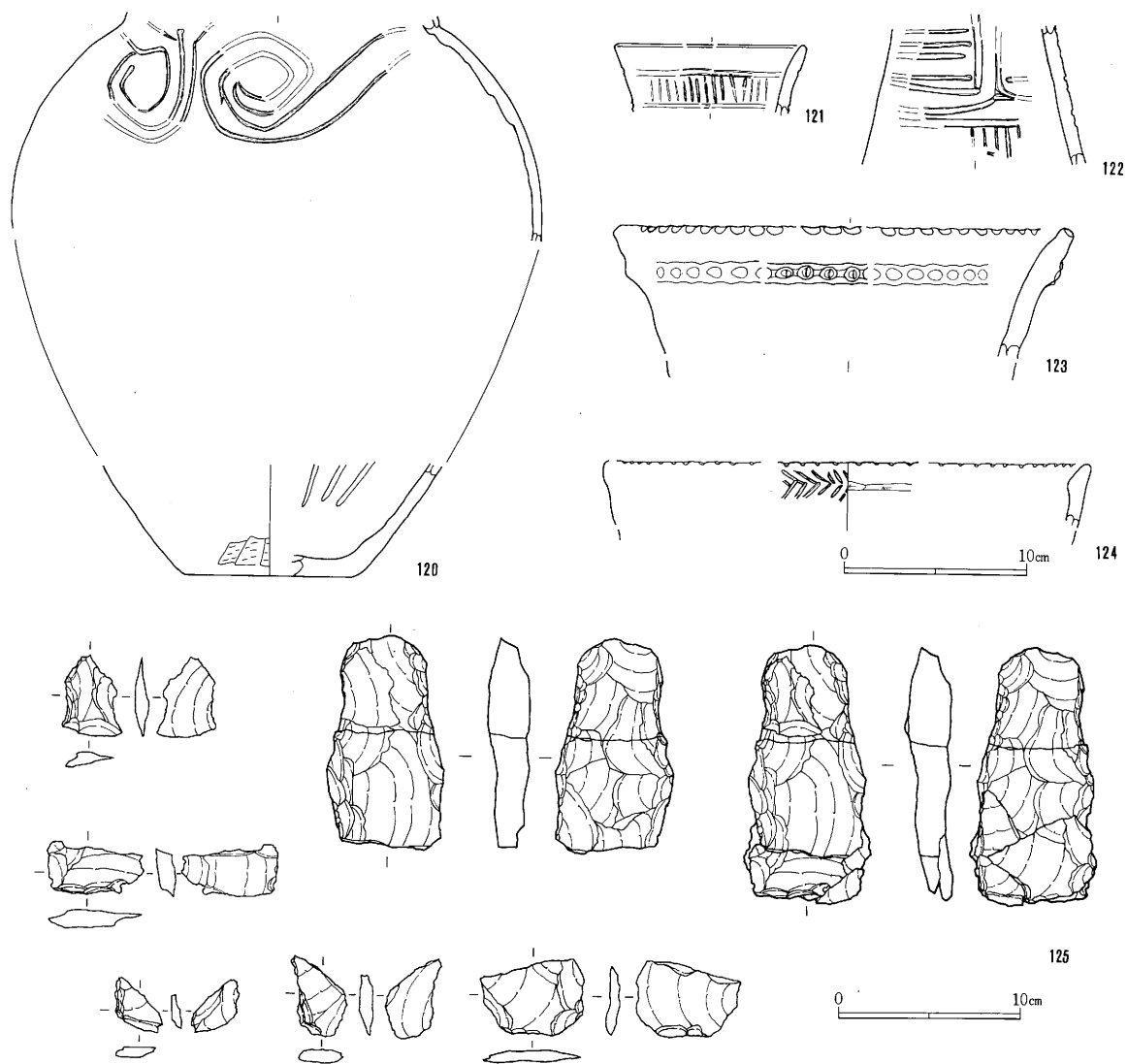


図60 西林A遺跡第2地点出土弥生時代遺物実測図2 (1:4)

面に横位の条痕をもち、117、118は粗大な条痕を内外両面に加え、口唇部と口縁部外面に連続指圧痕を施す。両者は条痕文系とみられる。浅鉢には二者がある。99は沈線文をもつがモチーフは不明で、100、101は無文である。ともに浮線文土器の系譜をひくが、施文や口縁部形態は浮線文土器の浅鉢とは明らかに異なる。

I B群は壺のみで、広口壺と細頸壺がある。広口壺(116)は受口口縁をなし、受口部外面に突帯を貼付し連続指圧痕を加えており、条痕文系土器の強い影響が認められ、B種としてよい。細頸壺(117、118)は沈線文をもち、A種としてよい。

I C群は甕(124)のみである。口縁部内面を肥厚して口端にへラ圧痕を加え、口縁部には縄文と羽状沈線文をもつ。在地の浮線文土器から直接的な系譜はたどれないが、広義の浮線文系土器群から派生してくるのだろう。

以上の土器群は県内各地に類例が散見されており、岡谷市梨久保遺跡の資料とよく似た様相を示す。まとまった資料の発見が待たれる。

石器では、打製石斧1点(125)と同一母岩のチップ数点は出土状況からみて弥生時代に属すると判断した。打製石斧は緑色片岩製で基部近くの両側縁部が潰されて軽くえぐられている。チップの一部は打製石

斧に接合しており、加工または再加工がなされたのだろう。第2地点出土の有茎石鏃とつまみのない棒状の石錐も、弥生時代の可能性がある。

## 5. 小結

発掘調査の結果、縄文時代前期末の住居址1軒とほぼ同時期の土壙が20基、弥生時代中期初頭の炉址を1基確認できた。こうした遺跡立地および住居址2～3軒と多くの土壙から成る構成は、縄文時代前期末特有なあり方を示しており、これについては第4節で述べられている。弥生時代中期初頭の遺構としては炉址が確認されたのみである。しかしこれを中心として遺物が濃密に分布しており、住居址の可能性も考えられる。この時代の遺構や遺跡の立地などは不明な点が多いが、本遺跡の資料は、山地にも生活が営まれた例として貴重なものと思われる。

---

### 参考文献

- 市沢英利 1985 「遺跡の動向 長野」「終末期の様相 長野」『<条痕文系土器>をめぐる諸問題』 愛知考古学談話会  
藤森栄一 1956 「各地域の縄文式土器 中部」『日本考古学講座』3 河出書房

## 第4節 おおほら 大洞遺跡 (G O B)

### 1. 遺跡の概観

岡谷市2075番地一帯に所在する。塩嶺山地山麓部に位置し、南東300mほどの所に岡谷市立神明小学校がある。遺跡は西に塩嶺山地を背負うが、東方は開け、岡谷市街地、諏訪湖、八ヶ岳山地が望まれる。北、南側はそれぞれ尾根によって区切られる。

一帯は大きく開析された谷状の地形を呈する。北向斜面・谷底部・南向斜面からなる地形面によって構成され、北向斜面基部には湧水を集めて流れる小さな沢がある。中央自動車道長野線は南北方向に谷状の地形を横断する。土地利用状況を見ると、北向斜面、南向斜面はかつて畑地として利用されていた痕跡を留めるが、現状は荒地、山林となっており、谷底部は水田、畑地である。付近には南側の尾根を越えて西林A遺跡、北側の尾根の東方に膳棚A遺跡が立地している。

### 2. 調査の概要

谷底部のゆるやかな傾斜面から縄文土器や黒曜石の小破片が表面採集でき、以前に住居址らしいものも見られたという地元の方の話もあったので、この谷底部を中心に縄文時代の小集落が存在するのではないかと予想し調査に入った。調査対象面積は2,910㎡で、遺跡の概要を知るためのトレンチ調査に入ったのが昭和59年4月下旬で、その後連続して調査を行い、終了したのは同年9月中旬であった。調査研究員は主として3名が当たり、その間地元の方々には発掘作業の協力をいただいた。

トレンチは、図61に示すように北向斜面、谷底部、南向斜面に長短はあるが計24本を設定した。トレンチ設定には遺跡全体の土層状況、遺構・遺物のあり方とその広がり把握できるように配慮し、地形に平行・直交する方向にほぼ2m幅で配置した。その結果、北向斜面の各トレンチは基盤層まで30~50cmとそう厚くなく、遺物も皆無であった。谷底部中央は表土直下基盤層が高まりをもち、南北へ傾斜していて、中央以南からの遺物出土は皆無に等しかった。谷底西端部の01、02トレンチでは湧水が多く、谷底部南端には現在も小さな沢があるが、その下はやはり河原状の土層を呈し、沢筋であったと思われる。谷底部北側は溝状地形をなして深く落ち込み、更に南向斜面も基盤層まで深く、両者とも遺物の出土量が多かった。そこで、南向斜面から谷底部北半分を中心に、一帯を拡張して面的調査を行うことにした。拡張に際しては、耕土、表土を重機を用いて剥ぎ、その下は基盤層まで手掘りで行った。

測量は、S T A 29+20(X=8546.0804, Y=-41253.2327)を基点にS T A 28+80(X=8506.2329, Y=-41249.7492)を視準して座標北を割り出し基準線とした。これと基点を通る直交線とから大地区(A~L地区)を設定し、大地区を2mのグリッドに区画した。遺物の取り上げはグリッド毎に行ったが、IV a層以下は遺物の出土量が多く、より原位置資料に近づくようグリッドを1m区画に細分し、遺物の取り上げを行った。遺構の測量は総て遣り方測量を用い、発掘範囲等は光波測距儀を併用した。標高は水準点からの水準測量を行って、基点の標高856.757mを出した。

整理は発掘終了後1ヶ月間行い、その後、昭和59年12月初旬より継続的に行った。この間、昭和59年12月に『長野県埋蔵文化財ニュース』No11、昭和60年3月に『長野県埋蔵文化財センター年報』1に調査概要を報告した(註1)。また、同年2月には第3回諏訪地区遺跡調査研究発表会でスライドを交えて遺跡の

(註1)『長野県埋蔵文化財ニュース』、『長野県埋蔵文化財センター年報』とは、遺構の呼び方、その数が本報告と異っているが、本報告が、最終的な呼び方であり、数である。



図61 大洞遺跡発掘範囲・トレンチ配置及び地形図 (1:1,000)

概要を発表した。更に、昭和60年3月22、23日には「縄文時代前期末から中期初頭の土器群の様相」と題して、金沢美術工芸大学小島俊彰氏、東京大学今村啓爾氏、奈良大学泉拓良氏を講師に招き、従来の土器型式の見直しからその問題点を洗い出し、これを基に各土器型式の併行関係とその交流を柱に据えた研究会を行い、遺跡・資料の理解に努めた。以後、昭和61年8月から本格的なまとめを行い本報告に至った。

### 3. 調査の経過

#### 昭和59年

- |       |   |       |  |
|-------|---|-------|--|
| 4月25日 | 発掘調査開始。01、02トレンチから発掘に入る。  | 8月10日 | 溝状地形西半分もほぼ掘り終える。南向斜面ではIV b層中から土壌、ブロックが検出されてくる。                                       |
| 5月1日  | 03トレンチ東部、06トレンチ北部のIV層から縄文時代前期末～中期初頭の土器片が多く出土する。   | 8月13日 | 南向斜面北端は遺物の出土状況から更に拡張する必要のあることがわかり、重機でIV a層上面まで下げる。                                   |
| 5月9日  | 10トレンチ中央南寄り、炭と集石を伴う落ち込みを発見。1号集石炉とする。  | 8月20日 | 南向斜面の調査に集中する。IV b層からの遺物出土は多いが住居址は発見できず、あせり気味となる。一方南向斜面も東西から中央に向けて傾斜をもつ地形であることが判明する。  |
| 5月15日 | 06北トレンチ、09トレンチを調査。I、III層からの遺物が多い。下層に遺構の存在を予想しIV層上部で止め面的調査とする。   | 8月28日 | 南向斜面上部から一括土器群が出土する。2号住居址上面出土の遺物となるものである。また、IV b層も東西端は掘り上がってVI層が露呈する。                 |
| 5月22日 | 南向斜面、谷底部中央北側の拡張のため重機によって耕土・表土剥ぎを開始する。   | 8月29日 | 当初土壌と考えた遺構は、一括土器の出土、床面、焼土の検出により1号住居址とする。   |
| 6月4日  | III層からの本格的なグリッド調査に入る。   | 8月31日 | 南向斜面上部の一括土器群を取り上げ精査すると、円形状に落ち込みが認められ2号住居址とする。また、この南には焼土があり、その周囲からは遺物も多く、遺構の存在を予想させる。 |
| 6月11日 | III層がほぼ掘り上がる。III層からは前期末から中期初頭の土器片が多く出土し、晩期土器片・平安時代須恵器片も含まれているが、遺構は発見できなかった。IV層は1m区画グリッドで遺物取り上げを行うようにして、本格的に調査に入る。 | 9月13日 | 2号住居址南の焼土を掘り下げると石皿が出土し、また床面が明瞭に認められることから3号住居址とする。時間がなく忙しい調査となる。                      |
| 6月14日 | 南向斜面中央部に以前から頭を出していた集石は、1号石組墓と判明、図化等の記録に入る。  | 9月18日 | 写真撮影、機材の撤収を行って、発掘作業を終了する。  |
| 6月15日 | 1号ブロックを検出する。  | 3月22日 | 23日にかけて「縄文時代前期末から中期初頭の土器群の様相」と題して研究会を行う。   |
| 6月20日 | IV層の掘り下げを行う。遺物は南向斜面及びその基部に非常に多いが、ここでも遺構は発見できない。急斜面のため排土に苦勞する。   | 昭和60年 | 土器の復元が完了する。遺物の実測、遺構図版の作成を行う。   |
| 6月21日 | IV層は厚く、色調差からIV a層、IV b層と分けることにする。   | 昭和61年 | 8月から報告書作成に向けて本格的なまとめに入る。   |
| 6月28日 | 1号ブロックの精査。IV b層に入って土器破片が大きくなったので、遺構の発見に全力を注ぐ。   |       |  |
| 7月3日  | C、G地区の調査を先に完了させるとの要請を受け、両地区の調査に集中しIV b層を下げる。溝状地形がはっきりしてくる。  |       |  |
| 7月16日 | 1号集石炉の精査に入る。  |       |  |
| 7月31日 | 溝状地形西半分と南向斜面の調査に主力を移す。南向斜面の遺物は多いが、西端へ行くと極端に少なくなる。   |       |  |

### 4. 調査の結果

#### (1) 層序と地形

トレンチ調査によって観察された各トレンチの土層は図62に示す通りである。各トレンチの交点等を参考に、トレンチ間の土層を比較、検討し、基本土層を図63のようにとらえた。各層の状況、遺構・遺物との関係は図に示した通りで、IV a、IV b層が遺物を含む主なる層である。IV a、IV b層は当初細分化しなかったが、上半分は暗褐色味、下半分は黒褐色味を帯びる色調差があることから、IV a、IV b層と区分した。

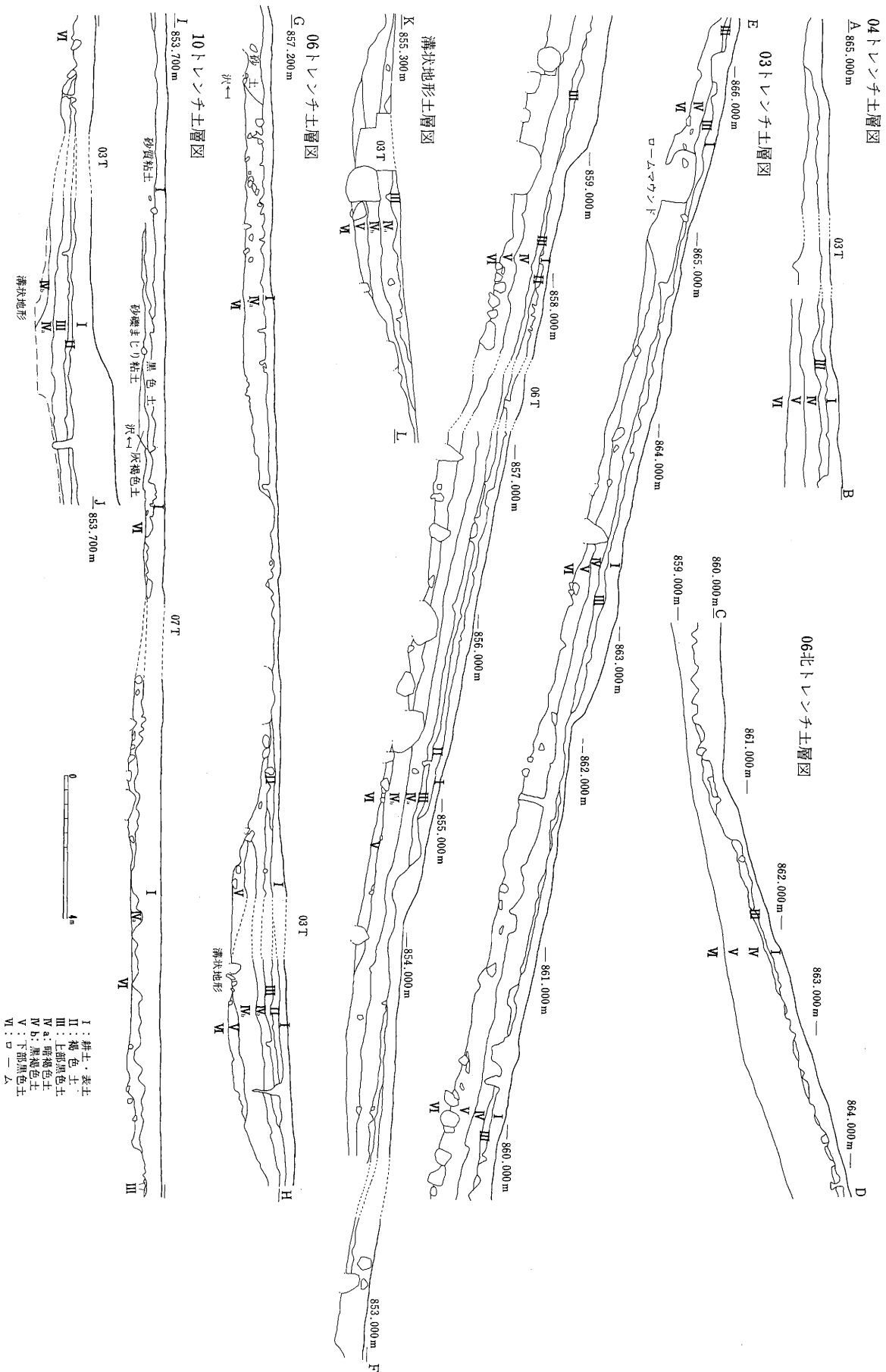


図62 大洞遺跡土層図 (1:160)



土層名	土の状態	分布	遺構・遺物との関係
I 耕土・表土	谷底部は水田・畑耕土、斜面は山林表土。	全面。	縄文時代～平安時代の土器片、石器が出土。
II 褐色土	明黄褐色を呈し、耕作が一部及んだ、乾きやすく、締まりのない土。	溝状地形の東側に分布。	出土遺物はほとんどなし。
III 上部 黒色土	黒色を呈する細かい粒子の土で、その母材は火山灰である。	溝状地形中央部と南向斜面に分布。	縄文時代早期～晩期の土器片、石器、平安時代の土器片を包含する。
IVa 暗褐色土	暗褐色を呈し、III層と同様の土質である。わずかに礫を含み、ブロック状に赤褐色の色調を示す。	調査区ほぼ全域に分布、南向斜面・溝状地形で厚い。	上面で1号石組墓検出。縄文時代早期～晩期土器片や石器を多量に包含する。
IVb 黒褐色土	黒褐色を呈する土で、小指頭大から拳大の礫を、IVa層より多く含む。	IVa層とほぼ同じ、溝状地形南にはわずかに分布。	本層中にブロック、焼土があり、土壇の一部と集石炉が検出される。早期～中期初頭の土器片や石器を多量に包含する。
V 下部 黒色土	黒褐色を呈するが、IVb層より黒の色調が強い。拳大から人頭大の礫を多量に含む。	溝状地形、南向斜面に分布。	押型文土器片と黒曜石片をわずかに包含する。
VI ローム	黄褐色を呈し、拳大礫を含む部分、含まない部分があり、再堆積のもので、塩嶺累層へと続く。	基盤としてとらえた層である。	上面で、住居址、土壇の一部を検出、遺物なし。

図63 大洞遺跡土層模式図

本遺跡の地形形成過程を主に土壌との関係から考えてみた。冒頭で述べた通り遺跡は北向斜面、谷底部、南向斜面から成り、谷底部は中央に高みをもって南北に傾斜し、南端は沢筋になることがトレンチ調査で確認された。谷底頂部には湧水があり、その水は現在も谷底部南端を流れていることから、水の供給が長期間続いたものと考えられる。谷底部北側から南向斜面にかけては黒色土と褐色土が繰り返し堆積しており、その母材は風化礫を含む二次堆積の火山灰である。土壌の黒色化は腐植酸含有によるものである〔加藤芳朗1964〕ことから、各層には植物繁茂があったといえる。谷底部北側から南向斜面は急傾斜地であり、背後の山地からゆっくりとした土砂の供給があるものの、表面は常に植物が繁茂しながら現在に至ってきたため、前述の基本土層になったと考えられ、急斜面でありながら比較的安定度の高い地であったととらえられる。

一方、黒色土、褐色土の繰り返しは本遺跡のみならず、下り林、西林A遺跡といった同様の立地環境の遺跡でも見られている。この生成要因は気候変動、植生変動に関係すると思われる、今後研究対象としていく必要がある。

## (2) 遺構と遺物の概観 (図64、65)

遺構は縄文時代の住居址3軒、土壇13基、集石炉5基、ブロック7カ所を検出した。時期的には早期・前期末から中期初頭・晩期のものを含むが、大半が前期末から中期初頭である。集石炉は掘り方をもち、内部に焼礫・炭・焼土等が入る例を指す。ブロックは従来の「黒曜石集中」または「黒曜石デポ」と呼ばれている黒曜石原石が集中したものと、黒曜石小剥片が小範囲に集中する両者を含んでいる。

前期末から中期初頭の遺構は、南向斜面にその大半が立地し、斜面の上下に住居址が位置し、その間に

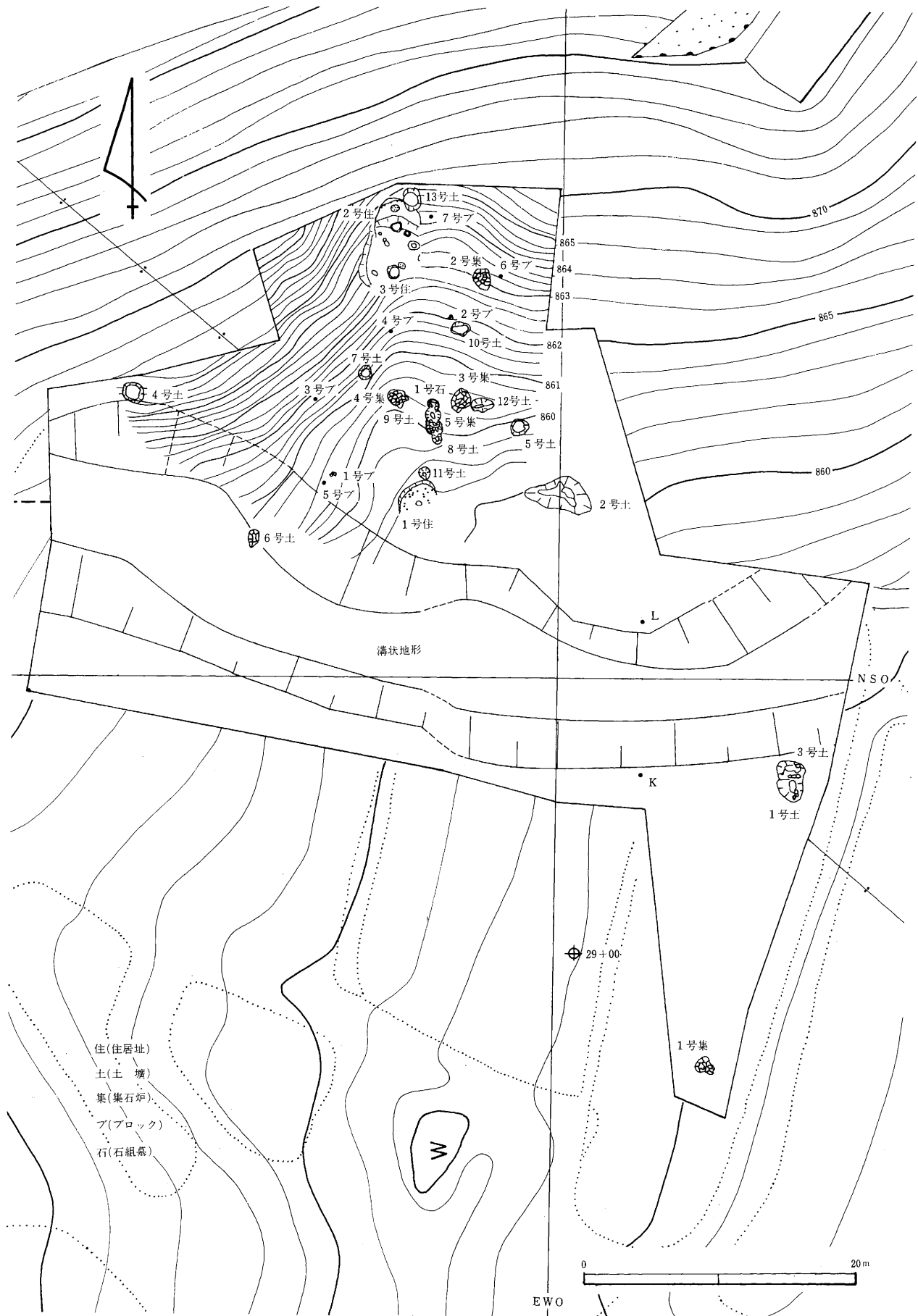


図64 大洞遺跡遺構配置図 (1 : 400)

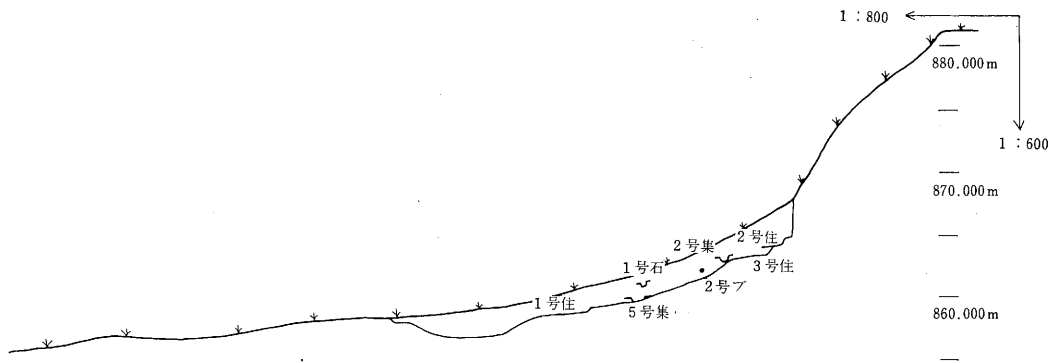


図65 大洞遺跡遺構の垂直分布図

土壇・集石炉・ブロックが存在する配置となっている。このほか平安時代の石組墓1基が発見されている。

遺物は、縄文時代草創期から晩期までの遺物と平安時代の須恵器がある。草創期は有茎尖頭器が1点だけである。土器は早期の押型文土器、前期の諸磯b式・同c式土器、中期後半・後期前半・晩期末葉の土器が各少量出土しているが、大半を占めるものは前期末から中期初頭の土器群である。これらを、第I群から第IV群土器に分類し、第I群土器が晴ヶ峰式、第II群が鍋屋町系、第III群が北白川下層III式、第IV群が梨久保式土器とする。更に土器に伴って多量の石器が出土し、その大半が土器同様前期末から中期初頭に比定できよう。これらの石器群も細分できるものである。

(3) 縄文時代の遺構と遺物

① 遺構と遺物の出土状況

ア 住居址

(ア) 1号住居址 (図66、67)

N12・W10一帯に位置する。VI層上面で半円型の黑色土の落ち込みが見られ、当初規模が小さいことから土壇と考えたが、掘り下げると一括土器が出土し、床面が水平で焼土が認められたことから1号住居址

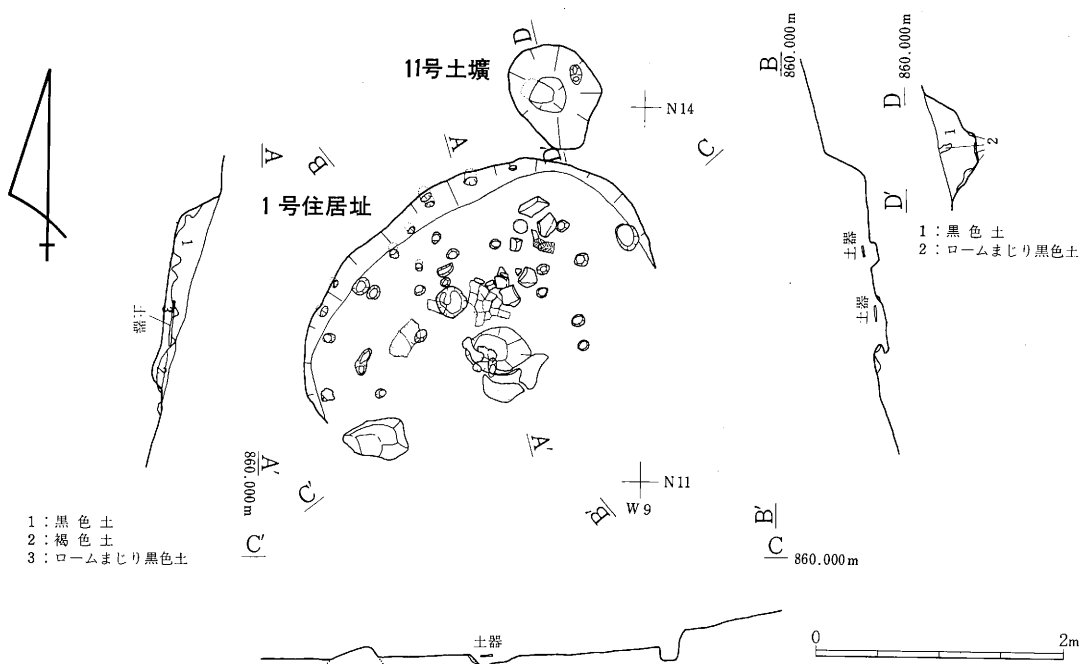


図66 大洞遺跡1号住居址・11号土壇実測図 (1:60)

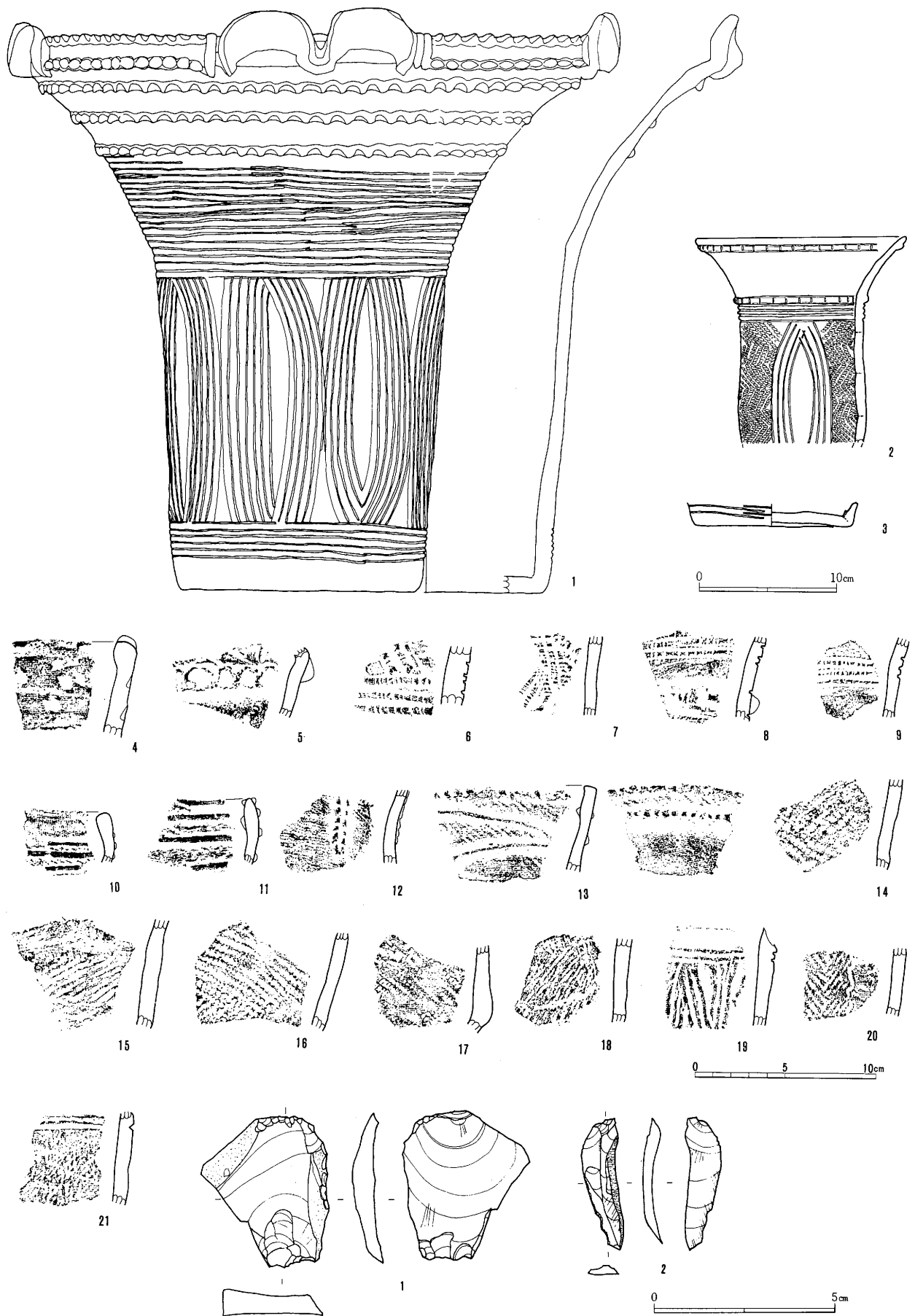


图67 大洞遗址1号住居址出土遗物实测图·拓影（1~3 1:4、4~21 1:3、1、2 2:3）

とした。一帯は南向斜面が緩傾斜となる地点で、覆土はIV b層に由来すると思われる黒色土である。南東壁を欠くが平面形は隅丸形状を呈し、確認規模は3.0×1.8mで、炉を中央とすれば3.0×3.0m程の規模となる。壁は北東、北西、南西部で検出され、北東、南西壁は途中で終る。北西壁は明瞭に残り、壁高25cmを計る。南東壁は傾斜のため不明である。床面は特に固められた状況はない。炉は中央部にあり、40×50cmほどの楕円形の地床炉で、その深さは5cm前後である。焼土・炭があり、その周りにも焼土が認められた。床面や北西壁に径7～12cmで、深さ5～15cmほどの小ピットが明瞭に検出されたが、これらのピットが上屋を支えた柱穴かどうかは不明である。

遺物は1、2の土器が2ヶ所に分かれた状態で、炉の北側の床面より5～7cm上で出土した。また覆土中からも小破片や黒曜石片が散在して出土し、これらを一括して本址出土遺物と扱った。この中で1、2は本址より北方グリッドで出土した土器片と接合している。本址の時期は出土土器から前期末に比定できる。

出土土器には1～21の完形土器及び破片がある。1は完形、2は底部を欠くが、共に第I群土器である。3～12は第I群、13は第III群、14～18は縄文施文の土器、19～21は第IV群土器である。出土土器では、1がピエス・エスキュー1類、2は小剥離痕のある剥片1類である。この他に黒曜石の原石・石核・剥片類が計104個出土している。

#### (イ) 2号住居址 (図68～70)

N32・W12一帯に位置し、3号住居址の上面に構築され、13号土壙を切る。IV b層下部を調査中、1.1×1.6m程の範囲から一括土器数個体が出土した。この時点で住居址の存在が予想されたが、明確な平面プランはとらえられなかった。一括土器群の記録を行って取り上げ、周辺を掘り下げたところ、北側に円形状の黒色土の落ち込みが見られ、この時点で2号住居址とした。覆土はIV b層に由来する黒褐色土、暗褐色土である。

平面形は残存壁部の状況から、径3.5mほどの円形と考えられる。壁は北側で明瞭に残り、壁高35cmを計る。傾斜地のため東西壁の南半分と南壁は残存しない。床は北半分がVI層中にあり、南半分は3号住居址覆土上面にあるが、共に軟弱で固められた状況ではない。床面も南に傾斜しており、本来はもう少し上であったかもしれない。北壁下に径10～20cm、深さ4～7cmのピットが4個(P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>)あり、その他のものは確認できていない。P<sub>5</sub>は径50cm、深さ11cmの大きなピットである。中には木炭片が少なからずあったが、焼土はなく炉とはいいがたい。また、P<sub>5</sub>の南には床に密着して大きな炭化材があった。

遺物の出土状況は図69に示すとおりである。一括土器群は床面より30～40cm上にあり、その周囲には炭・焼土が見られた。この炭の一部を<sup>14</sup>C年代測定した結果、4450±150 (I-13.828)の値を得ている。こうした出土状況は住居址が埋没した後の凹地へ遺物を廃棄したことを示している。一方、床面からは口縁を欠くほぼ完形の土器(29)が、また覆土中からも土器片・黒曜石片がわずかに出土している。以上の遺物を総べて本址出土遺物と扱った。本址の時期は出土土器から中期初頭といえる。

出土土器をみると22～28、30～32は一括土器群ないし覆土中出土の土器で、32は第I群であるが、他は第IV群である。一括土器群(22～28)はほぼ完形及び半完形で、本址より南方グリッド出土遺物とも接合している。29は第IV群である。出土土器の3は両脚を欠く石鏃で、4は小剥離痕のある剥片1類である。この他に、黒曜石の原石、石核、剥片が計41個出土している。

#### (ウ) 3号住居址 (図68、69、71～73)

N30・W12付近に位置し、2号住居址の下部から検出された。IV b層を調査中この一帯からは遺物や焼土、炭化材、拳大から人頭大の礫が多く出土し、焼土址として注意してきた。先行トレンチを入れたところ焼土は1.0×2.0mの範囲に7～8cmの厚みをもって黒色土層と互層をなしていたが、その性格を明確に

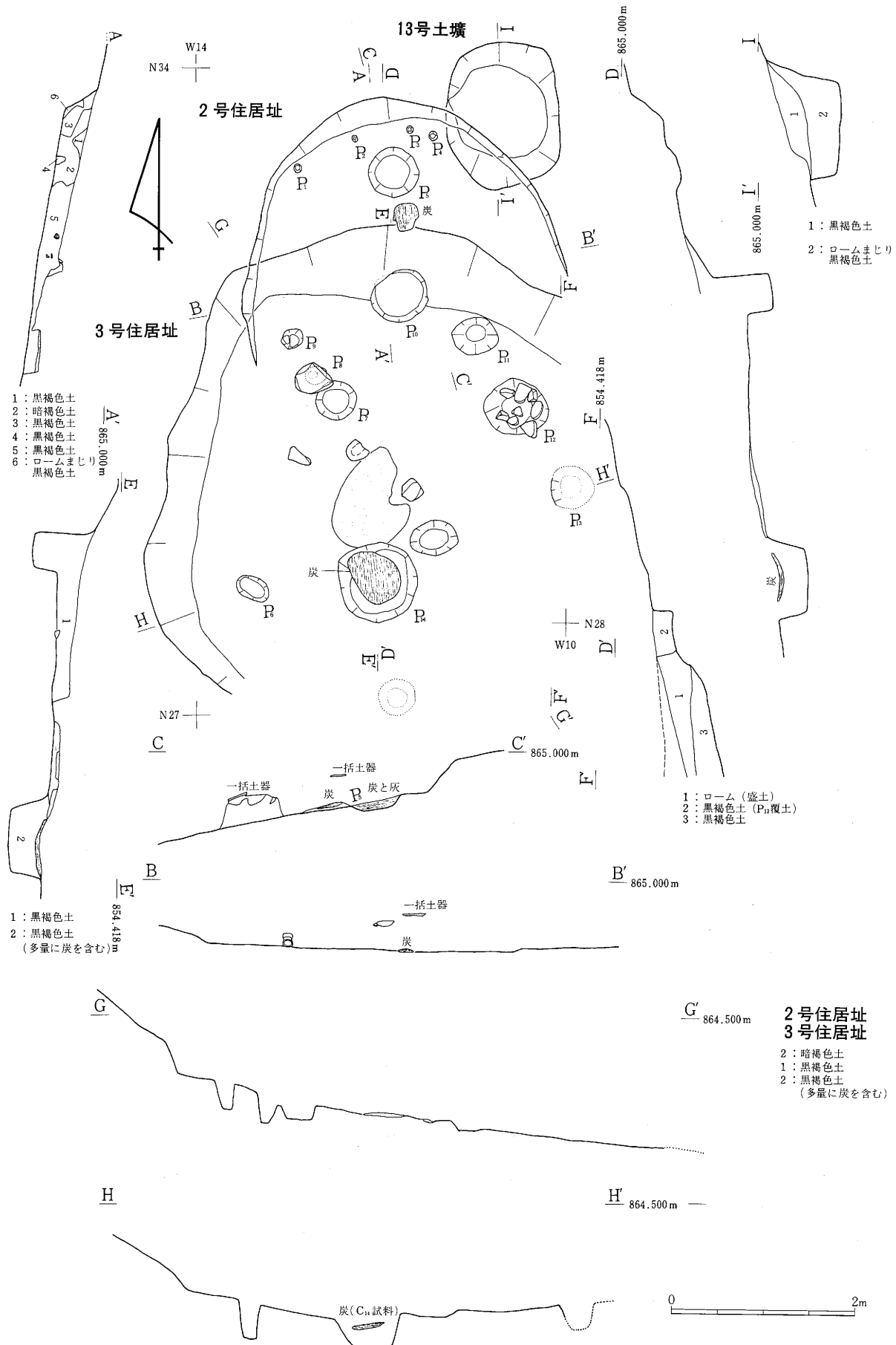


図68 大洞遺跡2号・3号住居址、13号土壙実測図(1:60)

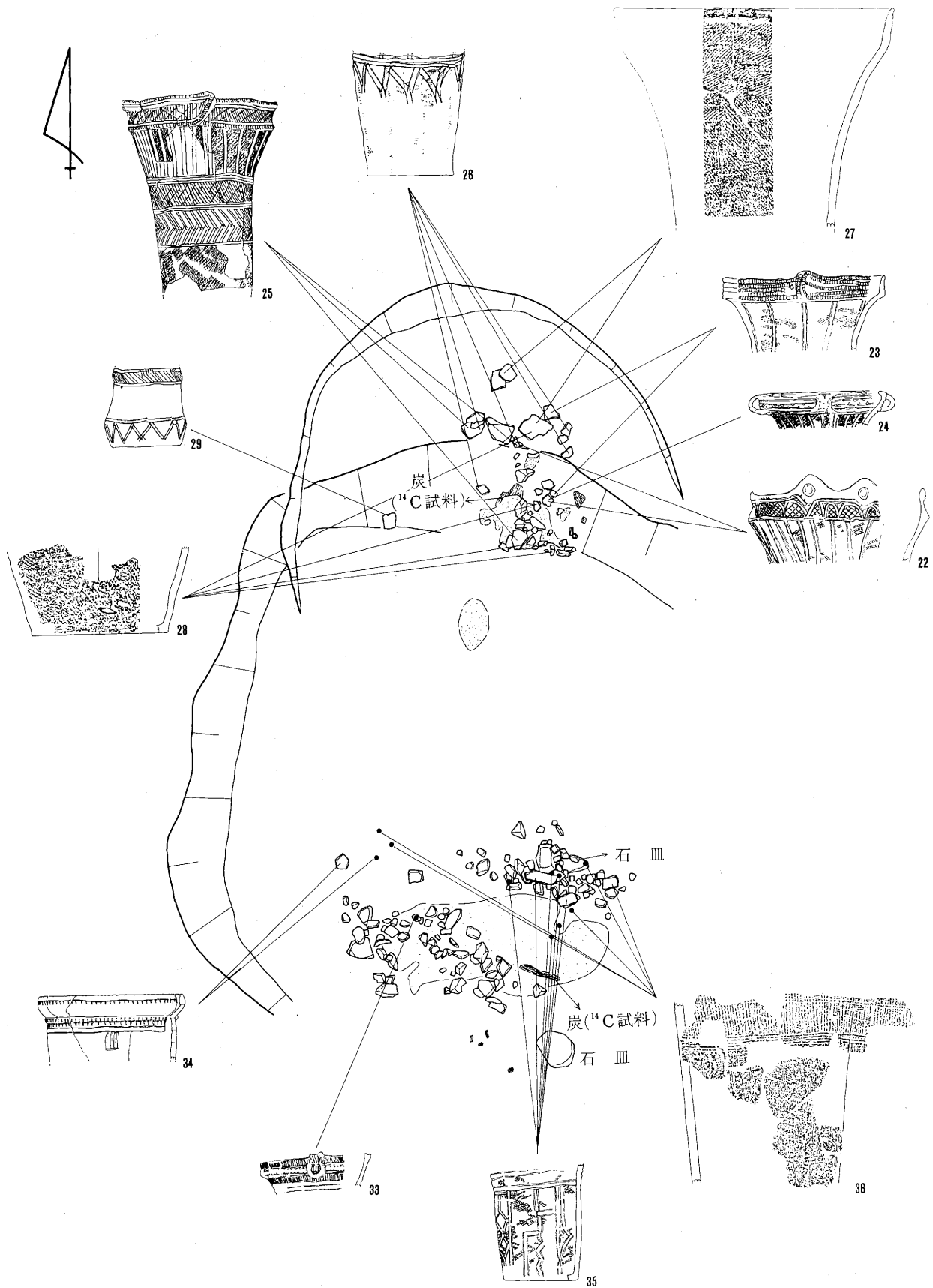


图69 大洞遺跡 2号・3号住居址土器出土狀況図

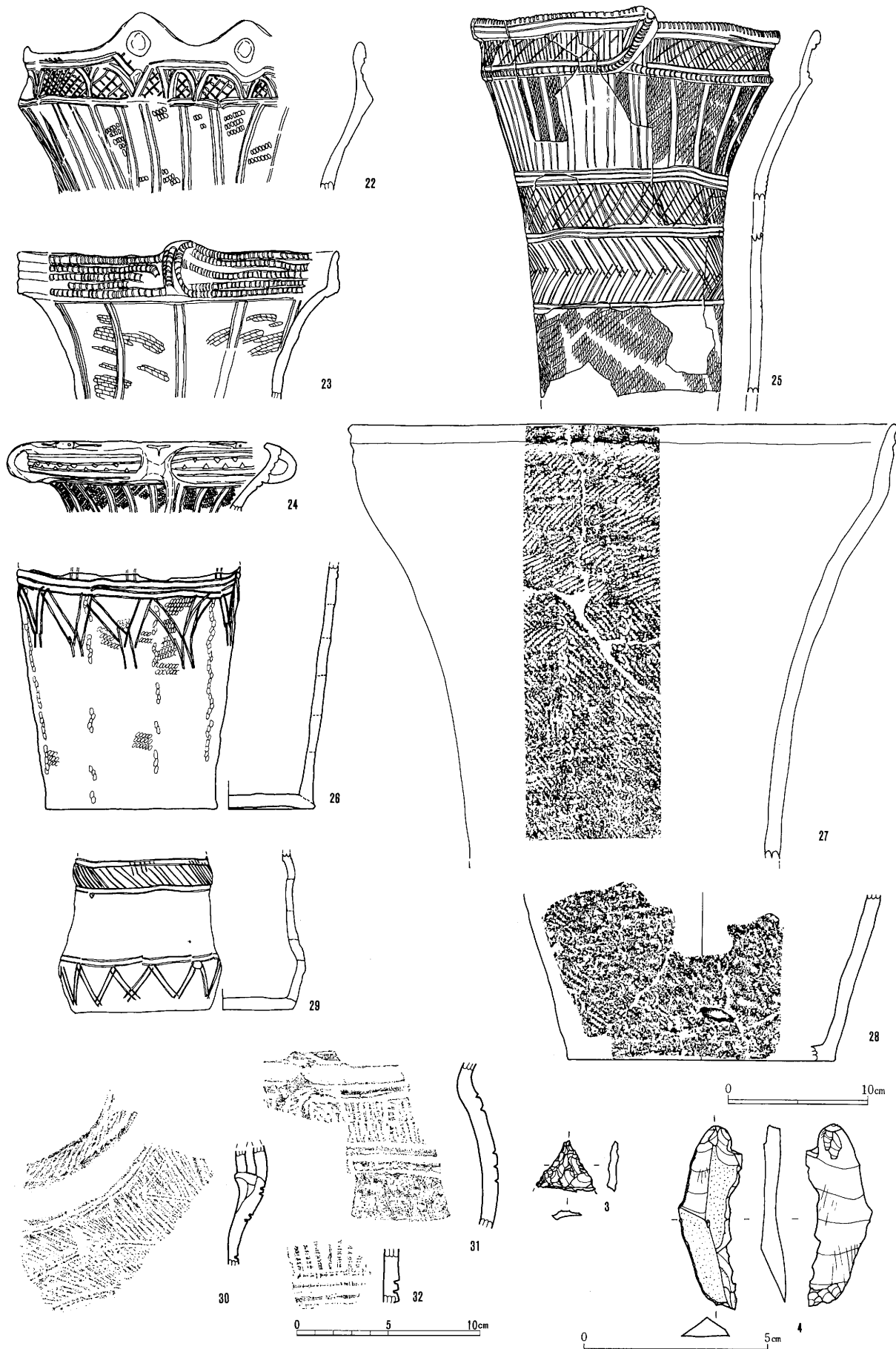


图70 大洞遗址2号住居址出土遗物实测图·拓影 (22~29 1:4、30~32 1:3、3、4 2:3)



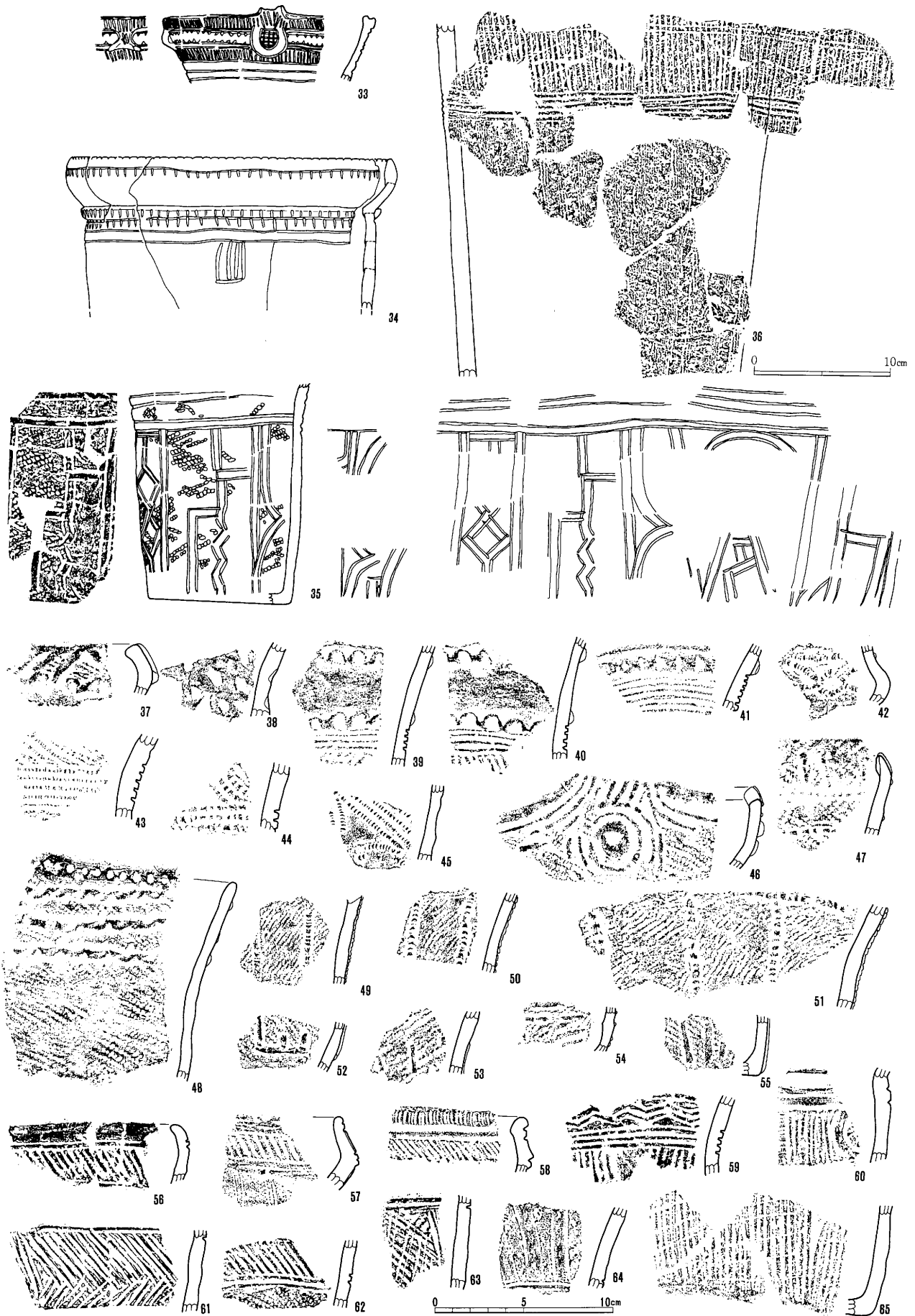


图71 大洞遗迹3号住居址出土遗物实测图·拓影1 (33~36 1:4、37~65 1:3)



图72 大洞遺跡3号住居址出土遺物実測図・拓影2 (66~70 1:3、5~33 2:3)

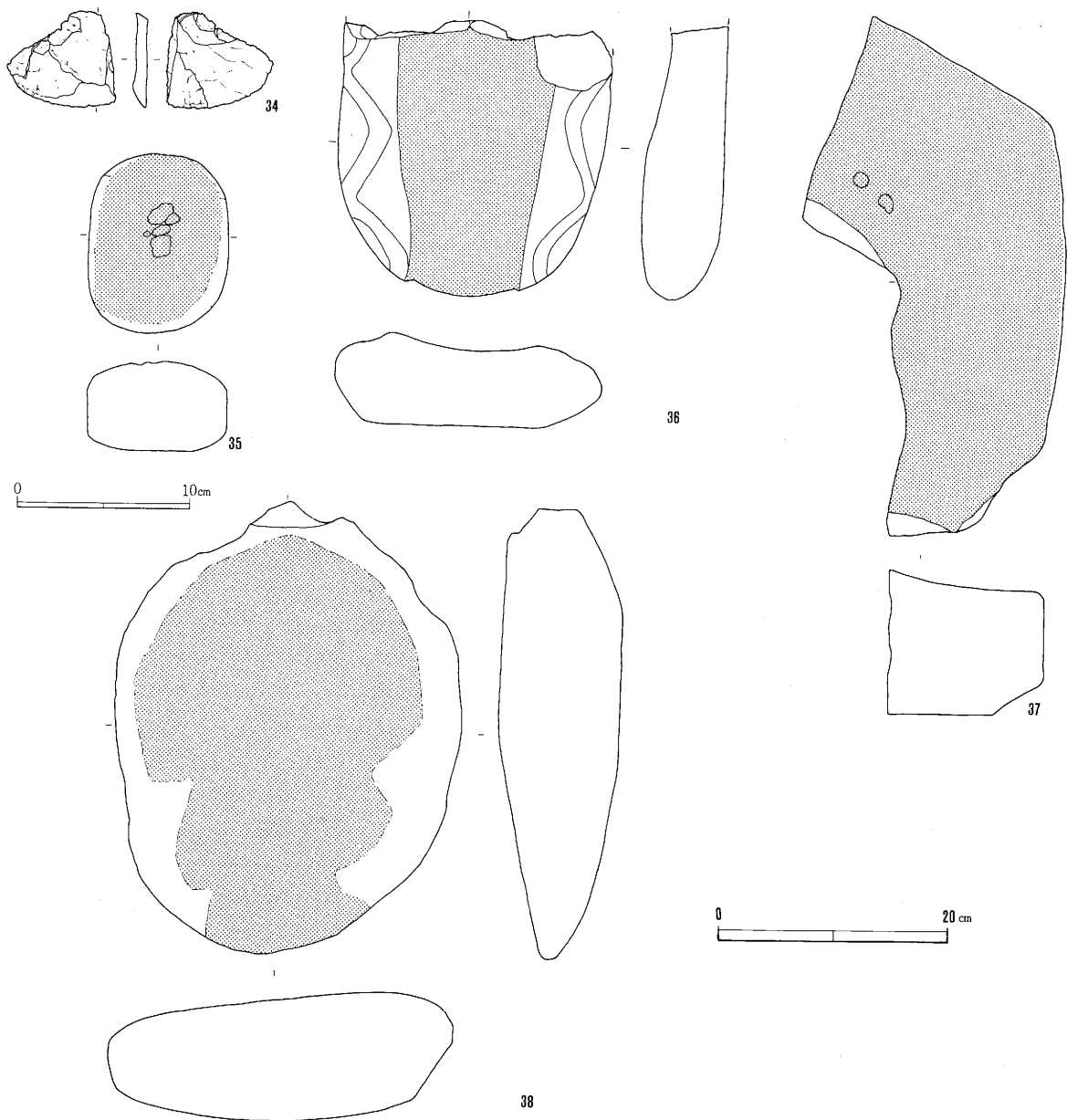


図73 大洞遺跡3号住居址出土遺物実測図3 (34、35 1 : 4、36~38 1 : 6)

はできなかつた。続いて全面を掘り下げたところ、石皿が出土し、一部床面らしい叩きの面があらわれたので、3号住居址と認定した。覆土は黒褐色土である。

本址は前述した焼土に手間取り、床面近くでの認定となったため、東、南端部分を破壊してしまった。北壁、西壁が確認されており、それから考えると平面形は隅丸形状で、その規模は4.3×5.1m以上となる。壁はいずれも緩傾斜である。南東方向に傾斜する斜面の北西部のVI層を掘り下げ、このVI層を南東部に盛土して床面を構築している。この盛土はV層に対比できる黒褐色土の上に30~40cmほどの厚みでしっかりと盛られているので、本址はV層堆積後に構築されたことが確認できる。盛土の広がり住居址認定前に一部は確認できており、それから推定すれば、本址は5.5~6.0mほどの規模になりそうである。ピットはP<sub>6</sub>~P<sub>14</sub>が確認されており、いずれも大形でしっかりしたものである。このうち、P<sub>6</sub>、P<sub>9</sub>、P<sub>11</sub>、P<sub>13</sub>が柱穴に関わると考えられ、南側でもピットを確認しており、これも柱穴といえそうである。炉は中央南寄りであり、約50×40cmの楕円形で深さ11cmほどの地床炉である。この西には上面に炭が多く見られる大

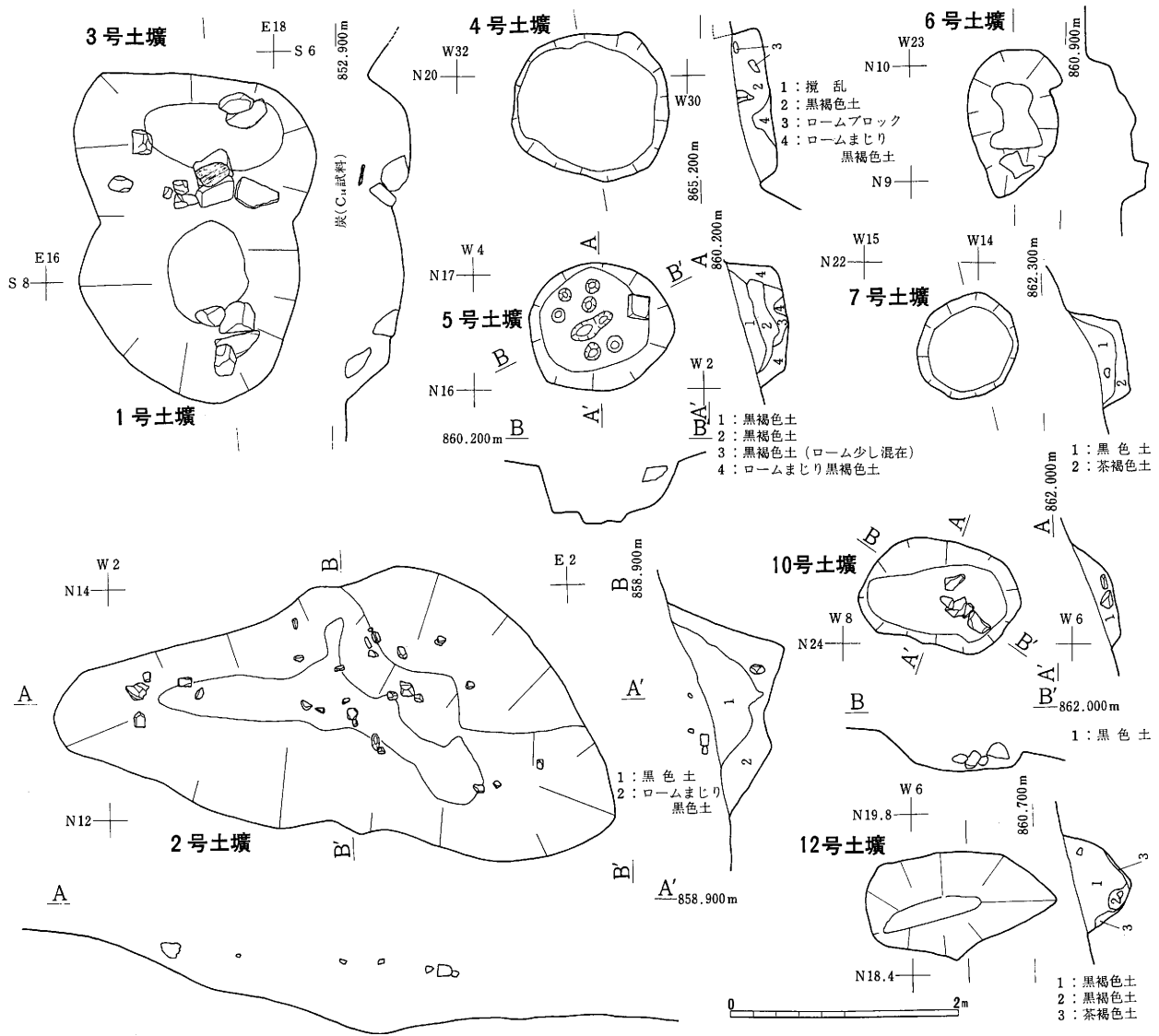


図74 大洞遺跡土壙実測図1 (1:60)

名称	平面形・	規模(長径×短径×深さ)cm	検出層位	埋土	備考
1号土壙	円形	190 × 200 × 50	VI層上面	小指大の礫を含む黒褐色土	3号土壙を切る
2号土壙	不整三角形	500 × 240 × 85	"	黒色土、ローム混じり黒色土	風倒木跡の可能性有
3号土壙	楕円形	210 × (140) × 40	"	小礫を含む褐色土	1号土壙に切られる
4号土壙	円形	140 × 130 × 30	"	黒褐色土・ローム混り、黒色土	
5号土壙	円形	125 × 110 × 50	"	小礫と炭を含む黒褐色土	
6号土壙	楕円形	120 × 80 × 20	IVb層下位	黒褐色土	
7号土壙	円形	90 × 90 × 30	"	小礫を含む黒褐色土	
8号土壙	(楕円形)	80 × ? × 45	"	黒褐色土	5号集石炉に切られる
9号土壙	(円形)	115 × ? × 75	"	黒褐色土	"
10号土壙	楕円形	140 × 90 × 20	VI層上面	ローム混じりの黒褐色土	埋土は粘性で黒色味が強い
11号土壙	楕円形	90 × 65 × 30	IVb層下位	黒色土	
12号土壙	楕円形	165 × 90 × 50	"	炭混じり黒褐色土	
13号土壙	楕円形	155 × 120 × 70	VI層上面	ローム混じり黒褐色土	2号住居址に切られる

表11 大洞遺跡土壙一覧表

形ピット (P<sub>14</sub>) があり、炭化したクルミもみられた。この中の炭を<sup>14</sup>C年代測定した結果5250±110 (I-13.829)の値を得ている。また炉の西側には厚さ5cmほどの焼土が存在した。P<sub>12</sub>には幼児頭大から拳大の石が放射状に敷かれたようにあったが、その性格は不明である。

前述した焼土址一帯から出土した遺物 (33~36、56~65) も本址覆土中出土として扱っている。その出土状況は図69に示すとおりである。また焼土址内より出土した木炭を<sup>14</sup>C年代測定した結果、4870±110 (I-13.830) の値を得ている。一方、焼土址下の覆土中からの遺物出土量は少なく、土器は破片ばかりである (37~55)。本址の時期決定はむずかしいが、伴出土器のあり方から前期末としてよいであろう。

出土土器をみると33~36は第IV群、37~55は第I群、56~65は第IV群、66~70は縄文施文の土器である。

出土石器は、石鏃12点、石錐3点、スクレイパー3点、ピエス・エスキュー3点、小剥離痕のある剥片6点、横刃形石器1点、磨石・凹石1点、石皿3点と豊富であるが、前述した通り焼土址一帯出土のものも含まれている。5~15は石鏃で、5は凹基2類、6~8は同3類、9、10は凸基1類で他は欠損品である。17~19は石錐で、17はつまみを有するものの4類、18は棒状2類、19は刃部先端のみの欠損品である。20~22はスクレイパーで、20は片面加工で刃部外湾状、21、22は同加工で直線状のものである。23~25はピエス・エスキューで、23は2類、24は3類、25は碎片である。26~28はその他の石器である。29~33は小剥離痕のある剥片で、29、30、32は1類、31、33は2類である。34は横刃形石器、35は磨石・凹石で、36~38は石皿である。36は凹みをもち、沈線による波状の文様をもつ。この他、黒曜石原石、石核、剥片が計295個出土している。

#### イ 土壙 (図74~76)

調査した土壙は13基で、個々の状況は表11の通りである。

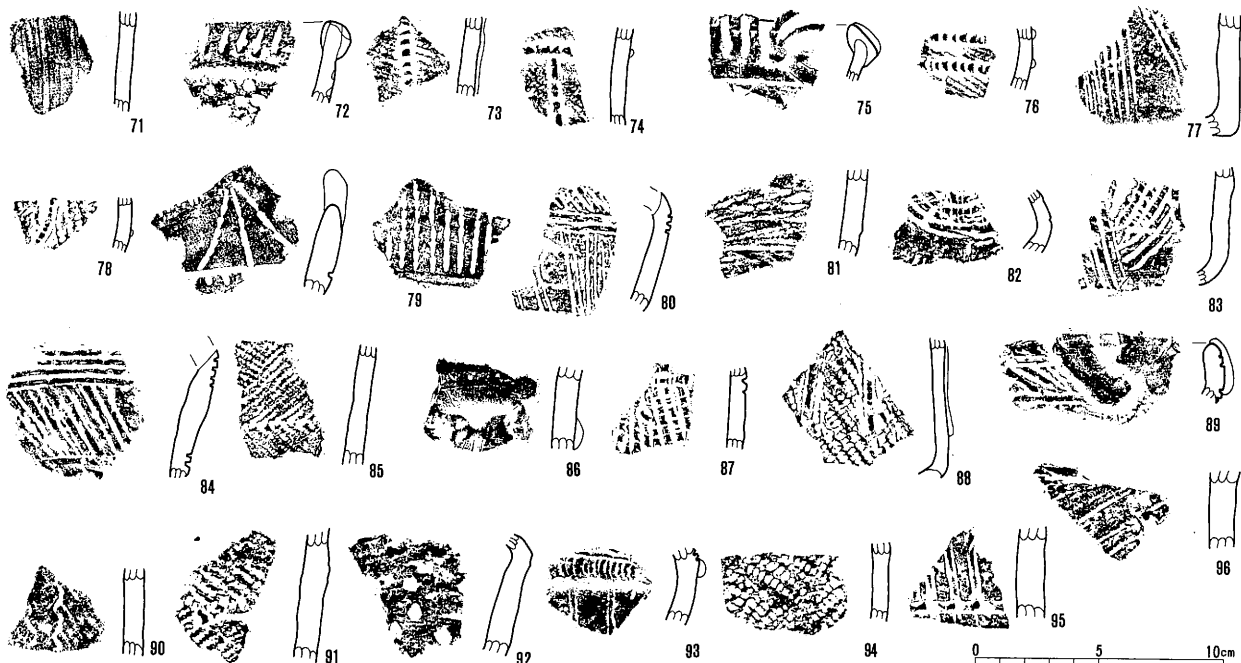


図75 大洞遺跡土壙出土遺物拓影1 (1:3)

- 1号土壙 (71)、2号土壙 (72~74)、3号土壙 (75~77)、4号土壙 (78)  
 5号土壙 (79)、6号土壙 (80,81)、7号土壙 (82,83)、8号土壙 (84,85)  
 9号土壙 (86~89)、11号土壙 (90,91)、12号土壙 (92~94)、13号土壙 (95,96)

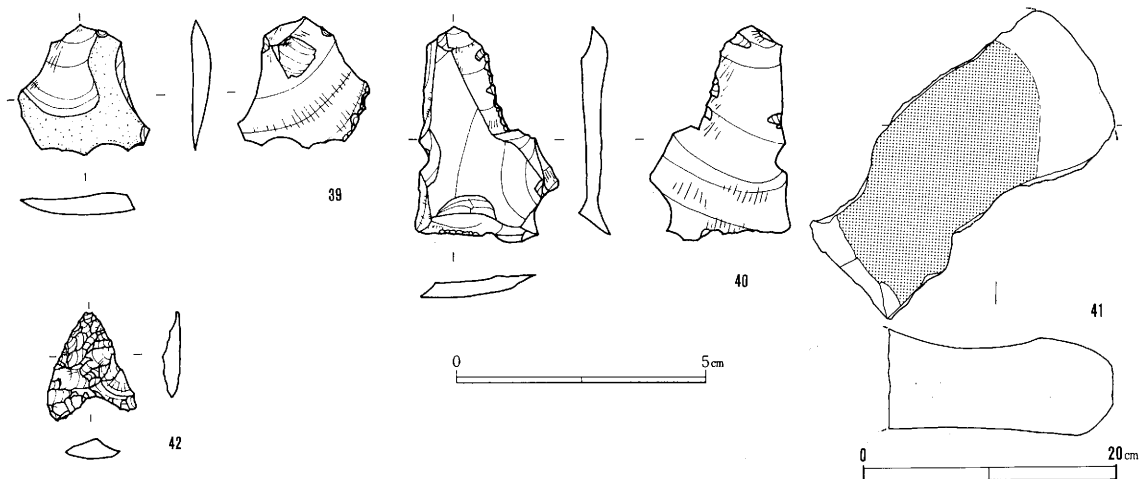


図76 大洞遺跡土壙出土遺物実測図2 (39、40、42 2 : 3、41 1 : 6)

5号土壙 (39)、8号土壙 (40)、9号土壙 (41)、13号土壙 (42)

#### ウ 集石炉

##### (ア) 1号集石炉 (図77)

S28・E11の谷底部東端に位置し、10トレンチ発掘時にIV層中で検出した。掘り方は、径1mほどの円形、深さは35cmで摺り鉢状を呈す。この底面に接するように拳大から人頭大の石を放射状に敷石しており、底面との間には炭まじりの黒色土がある。底面の石は炭が付着して黒くなっていた。この上に、やはり炭まじりの黒色土があり、その上面に集石があった。集石には拳大のものが主に用いられ、いずれも割れたり、赤色化していたりして、焼けた状況を示している。集石の西側は、検出時に一部抜き取ってしまい状況は不明だが、東側は、掘り方より外側に散在しており、拡散したものと思われる。検出面及び、覆土中から炭化材が出土している他には遺物はなく、時期は不明である。なお、内部からは焼土は検出されていない。

##### (イ) 2号集石炉 (図77)

N28・W6付近、2・3号住居址の東に位置する。IVb層下部で円形状の集石を検出し、礫に焼けた状況が認められたことから2号集石炉とした。掘り方は、1.5~1.3mの円形状で、深さは45cmほどである。この中の1.3×1.1mほどの範囲に集石があり、集石上面の中央部はわずかに凹んでいた。集石を半割すると拳大から幼児頭大の石がぎっしりと底部まであり、これらの礫はいずれも焼けて割れていたり、赤色化していた。礫は総べて安山岩で総数442個を数え、集石間には黒褐色土が入る。底部には敷石が見られ、平石を丸底状にきちんと敷きつめてあり、掘り方底部に接している。敷石も焼けており、北側のものには炭が付着していた。また、壁面には焼土塊、炭化材がはりついた状況で多量に見られ、内部で火を燃やしたであろうと判断される。

これらの集石間から土器片・黒曜石片が出土しているが、時期決定できるものはない。壁面の炭の<sup>14</sup>C年代測定結果は4430±110 (I-13.836)であった。

##### (ウ) 3号集石炉 (図77、79)

N19・W7一帯、南向斜面中央部に位置する。IVb層下部で、一括土器とともに円形の集石を検出した。礫はいずれも焼けており、外側に掘り方が認められたことから3号集石炉とした。掘り方は、径約1.2mの円形で深さ50cmほどである。中間部より急傾斜になり底に至る。掘り方内には集石が円形状にあり、礫が底部までぎっしりとつまっていた。これらの礫はいずれも焼けて赤色化していたり、割れたりしており、

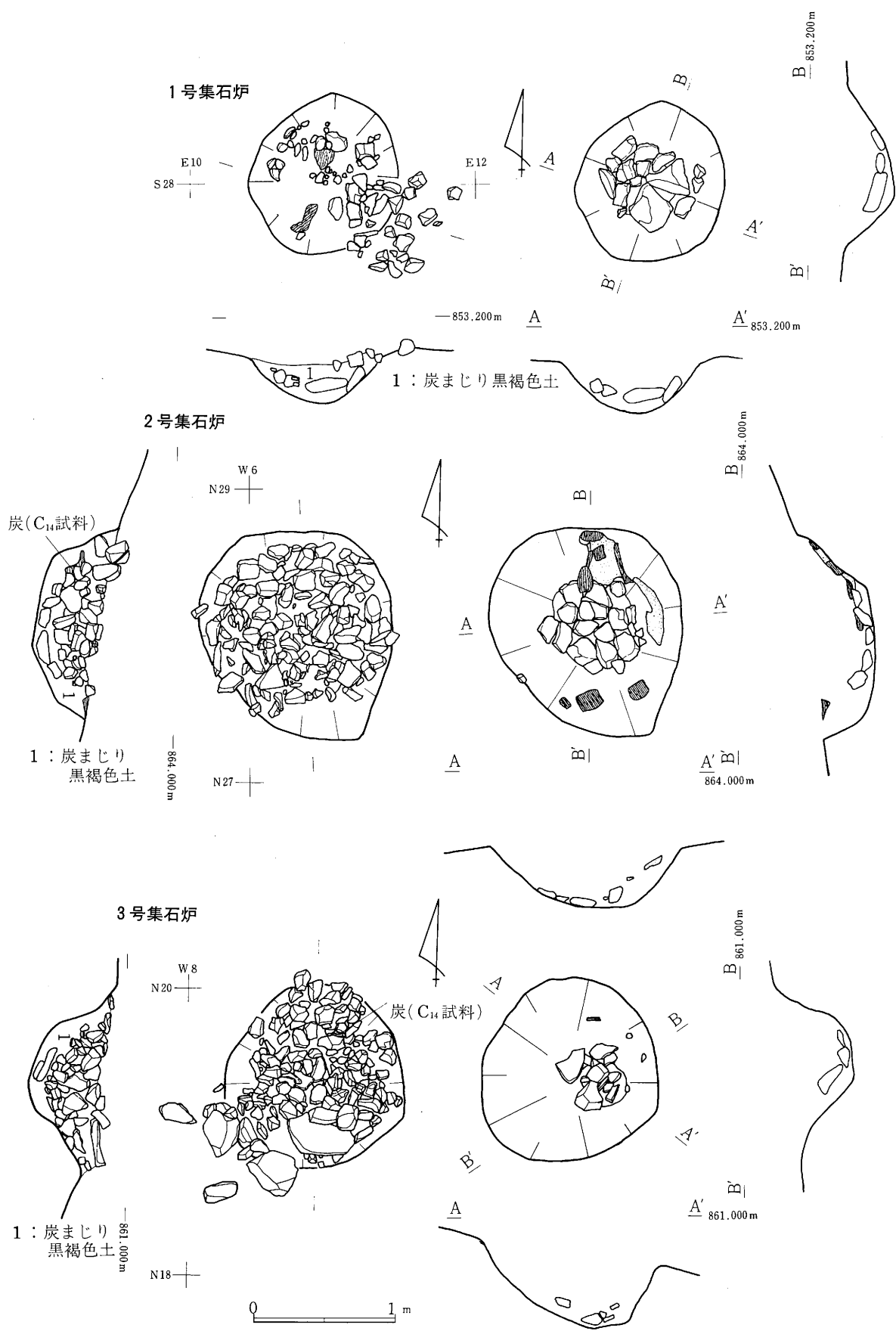


図77 大洞遺跡集石炉実測図1 (1:40)

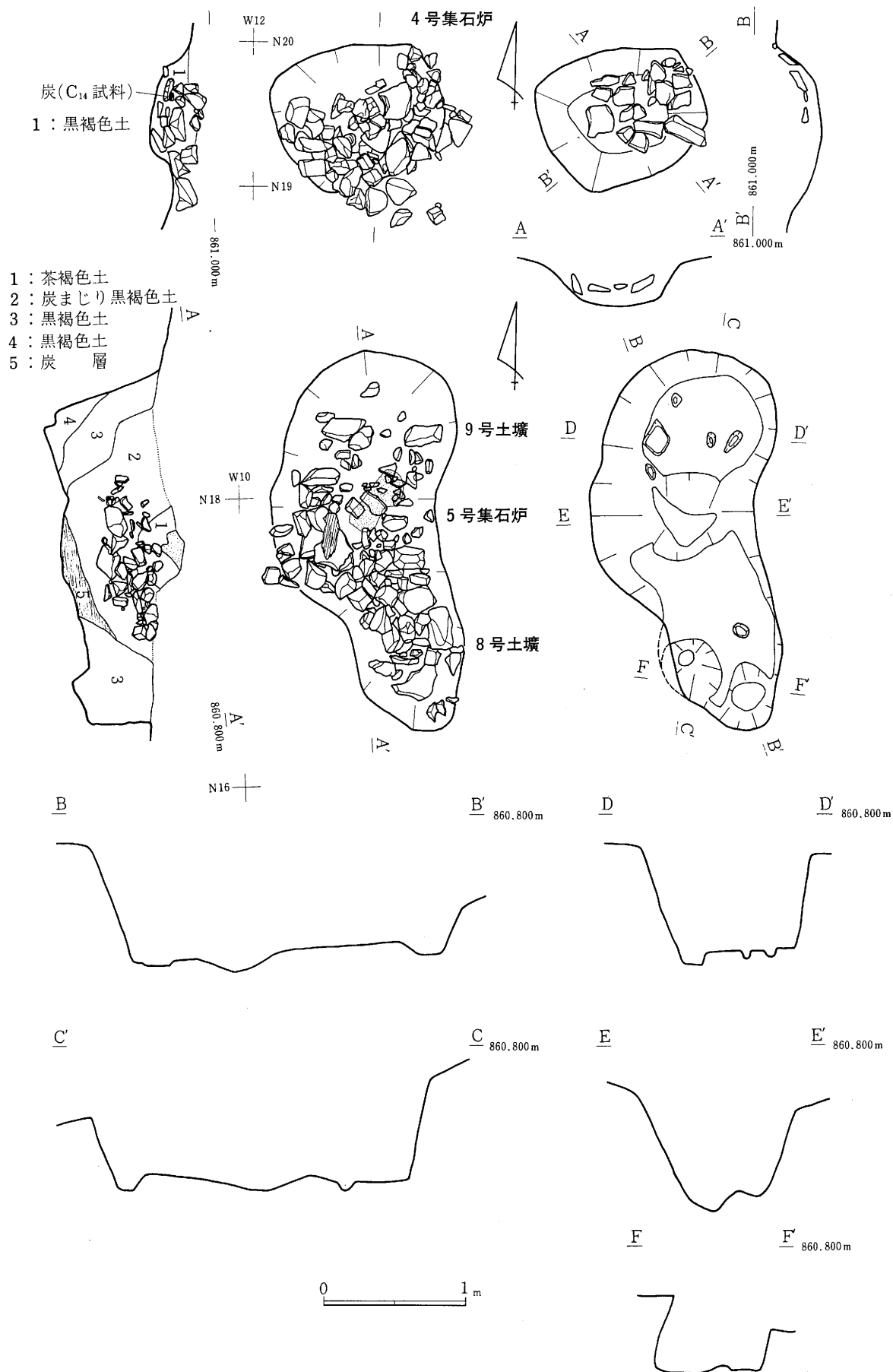


図78 大洞遺跡集石炉及び土坑実測図2 (1:40)



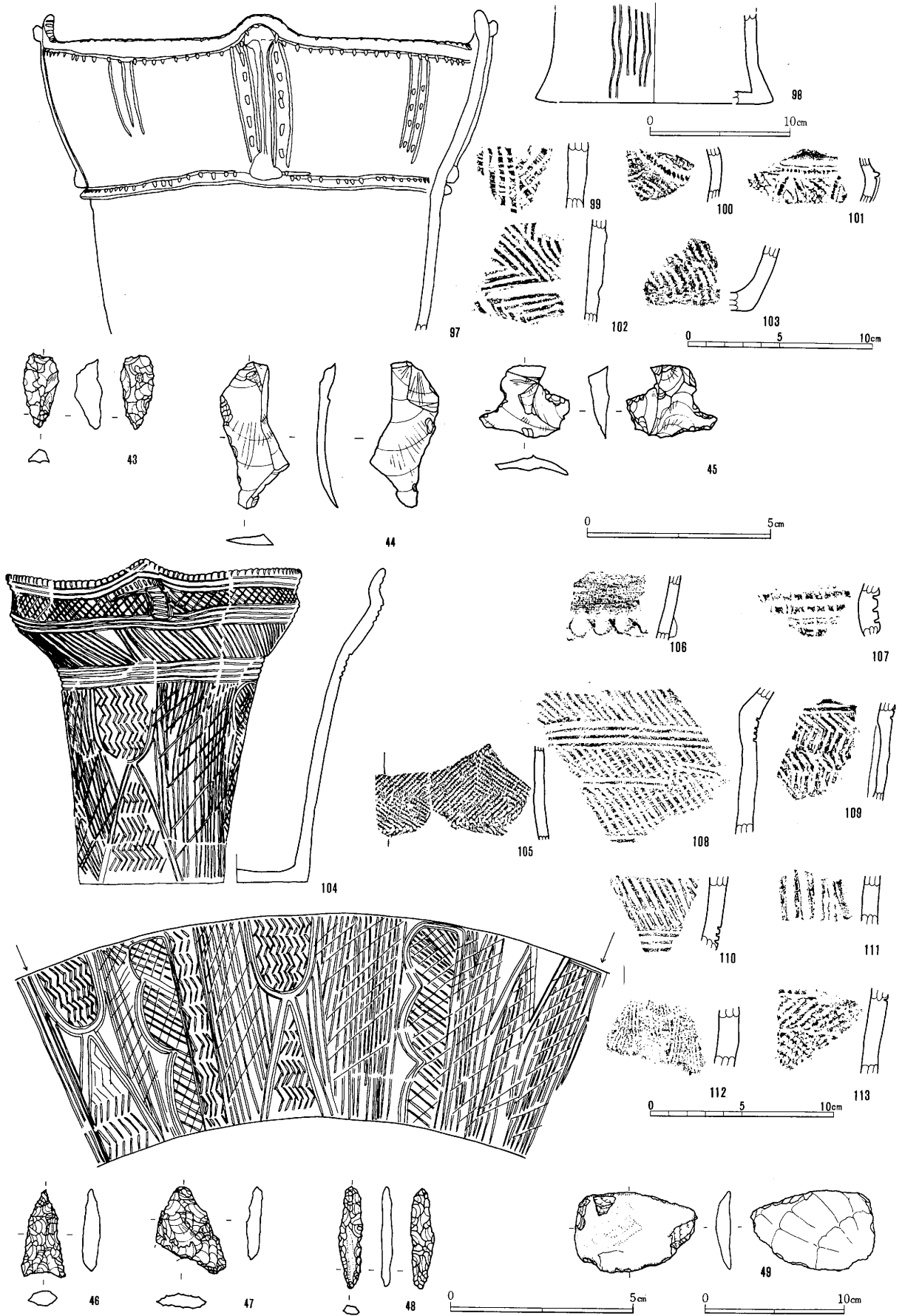


图79 大洞遺跡3号(97~103、43~45)及び5号集石炉(104~113、46~49)出土遺物実測図・拓影(97、98、104、105、49 1 : 4、99~103、106~113 1 : 3、43~45、46~48 2 : 3)

中でも底近くと、東側のものがよく焼けていた。礫は総数564個、いずれも安山岩で、拳大から幼児頭大のものが多かったが、南側上面にはこれより大きなものが数個みられた。底部は中心よりやや東にずれていて、掘り方底面に接して敷石があり、敷石はいずれも焼けていた。北壁面には多くの木炭と焼土があり、東壁面でも多くの焼土が見られたことから、内部で火を燃やしたと判断される。北壁の木炭を<sup>14</sup>C年代測定したところ4410±100 (I-13.827) の値であった。遺物は集石上面で一括土器(97)が出土し、集石間からも土器片・石器が出土している。

出土遺物のうち土器は、第I群の99、100、第III群の101、第IV群の97、98、102、103があり、石器では、43が石錐で棒状3類、44、45が小剥離痕のある剥片1類である。

(エ) 4号集石炉(図78)

N20・W11付近にあり、3号集石炉の西4mほどの所に位置する。IVb層下位で集石がみられ、礫も焼けていることから4号集石炉とした。掘り方は約1.2×0.9mの長方形で、深さは20cmである。集石は掘り方に対して南に寄り、北側にはなかった。これらの礫はいずれも安山岩で、焼けて赤色化していたり、割れていたり、もろくなっていたりした。拳大から幼児頭大の礫を使用しており、総数156個である。底は東壁にかけて敷石がなされていた。焼土はなく、北寄り底面の石の上で炭が出土している。この炭の<sup>14</sup>C年代測定結果は8880±350 (I-13.838) で、土器・石器は皆無であった。

(オ) 5号集石炉(図78、79)

N18・W9付近、3・4号集石炉中央南に位置する。IVb層下部で焼土が見られ、続いてVI層上面まで掘り下げると落ち込みがみられ、南北に長く礫も散在した。そこで、半割した所中央部に集石・焼土・炭が見られ、南北は黒色土が落ち込んでいることから、集石炉が土壇2基を切っていると判断し、5号集石炉とした。掘り方の推定径は1.2mの円形で、80cmの深さがある。集石は上面では南北に広がっているが、中央部に集中する。集石下は土まじりの炭が厚く堆積していた。この炭を<sup>14</sup>C年代測定した所、5130±105 (I-13.839) の値であった。遺物は9号土壇との切り合い部分上面から完形一括土器(109)が出土し、本址のものと考えた。その他、土器片・石器が集石間から出土している。

出土遺物のうち土器は第I群の106、107と第IV群の104、105、108～113が出土している。104は竹管文で飾られた完形品である。石器は、46、47が石鏃で46は凹基3類、47は片脚を欠く。48は石錐で棒状4類である。

エ ブロック

(ア) 1号ブロック(図80、83)

IVb層中、N15・W16付近で巨礫の北側に黒曜石原石が集中して出土し、1号ブロックとした。更にその脇に焼土があったが、両者の関係については明らかではない。原石は、まず8個が積み重なって出土し、2個は巨礫の上に載っていた。全部で12個である。掘り方の有無は不明である。51はごく一部に打ち欠きの痕跡が認められるが、他には加工痕跡が認められない。最大のものが97.7g、最小のものが29.6gで総重量688.8gである。

(イ) 2号ブロック(図80、83、84)

IVb層中、N25・W8付近で、大きな黒曜石原石が数個かたまって出土し、2号ブロックとした。一帯には人頭大からそれ以上の礫があり、これらに囲まれるようにしてブロックは存在した。原石は積み上げられた状況にあり、掘り方の有無は不明である。原石は7個あり、最大のものは790g、最小のものは305g、総重量は2740gで、大きなものばかり集められていた。いずれも加工痕跡は認められない。

(ウ) 3号ブロック(図81、84)

N19・W17付近のIVb層中で確認した。1号ブロックの北6mほどに位置する。南北約1mの範囲で、

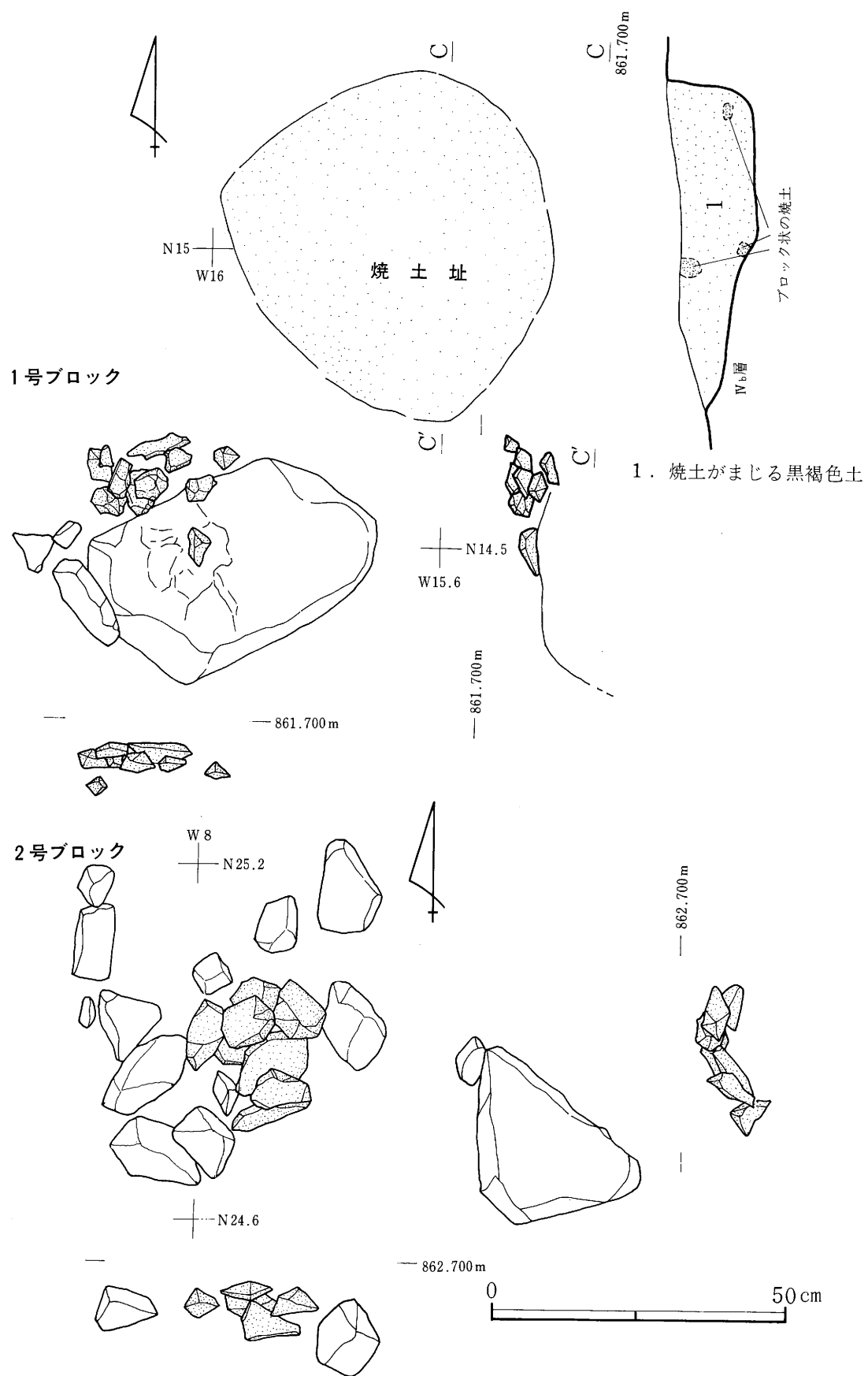
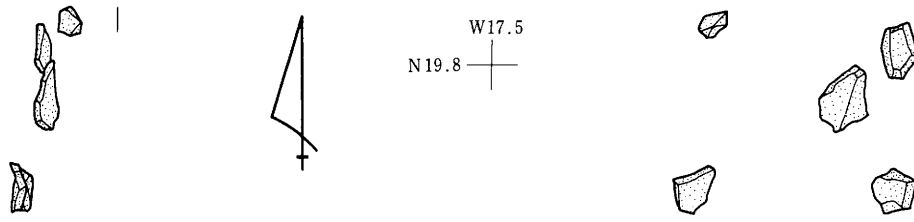
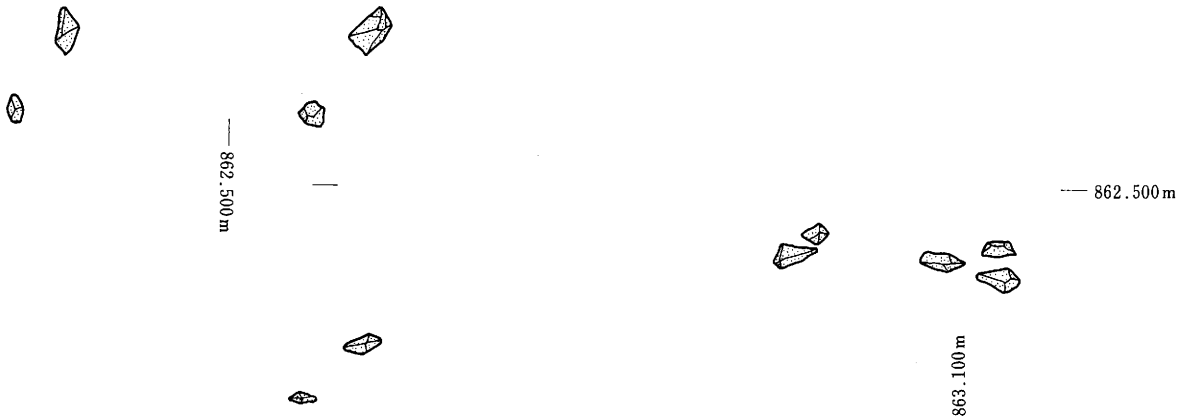


図80 大洞遺跡ブロック及び焼土址実測図1 (1:10)

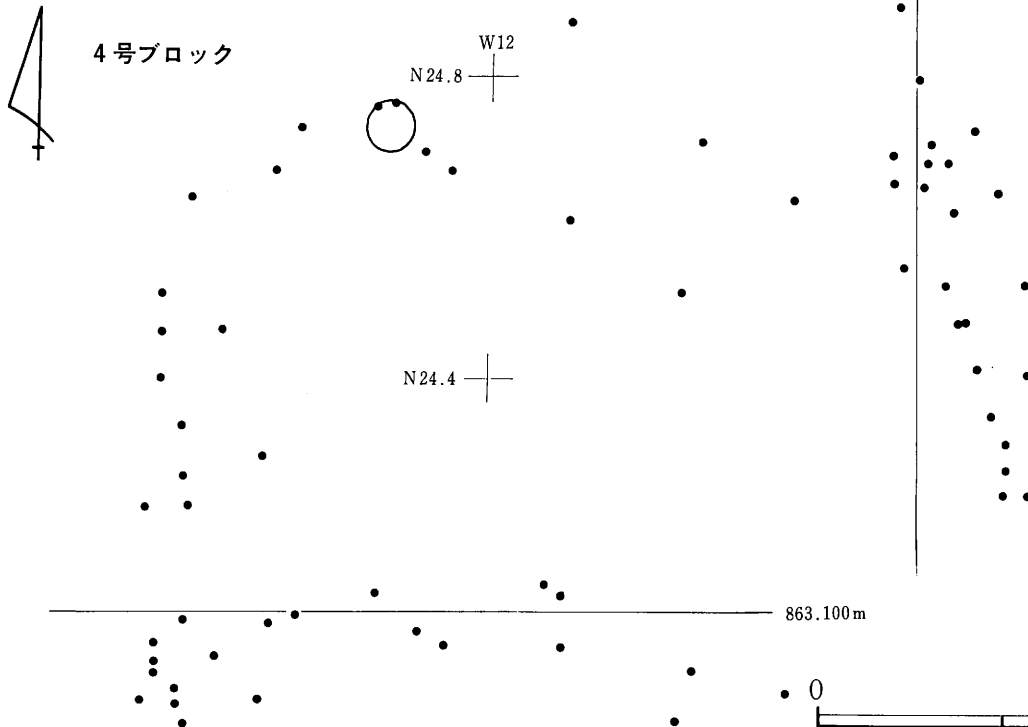
3号ブロック



N19.3



4号ブロック



863.100 m



図81 大洞遺跡ブロック実測図2 (1:10)

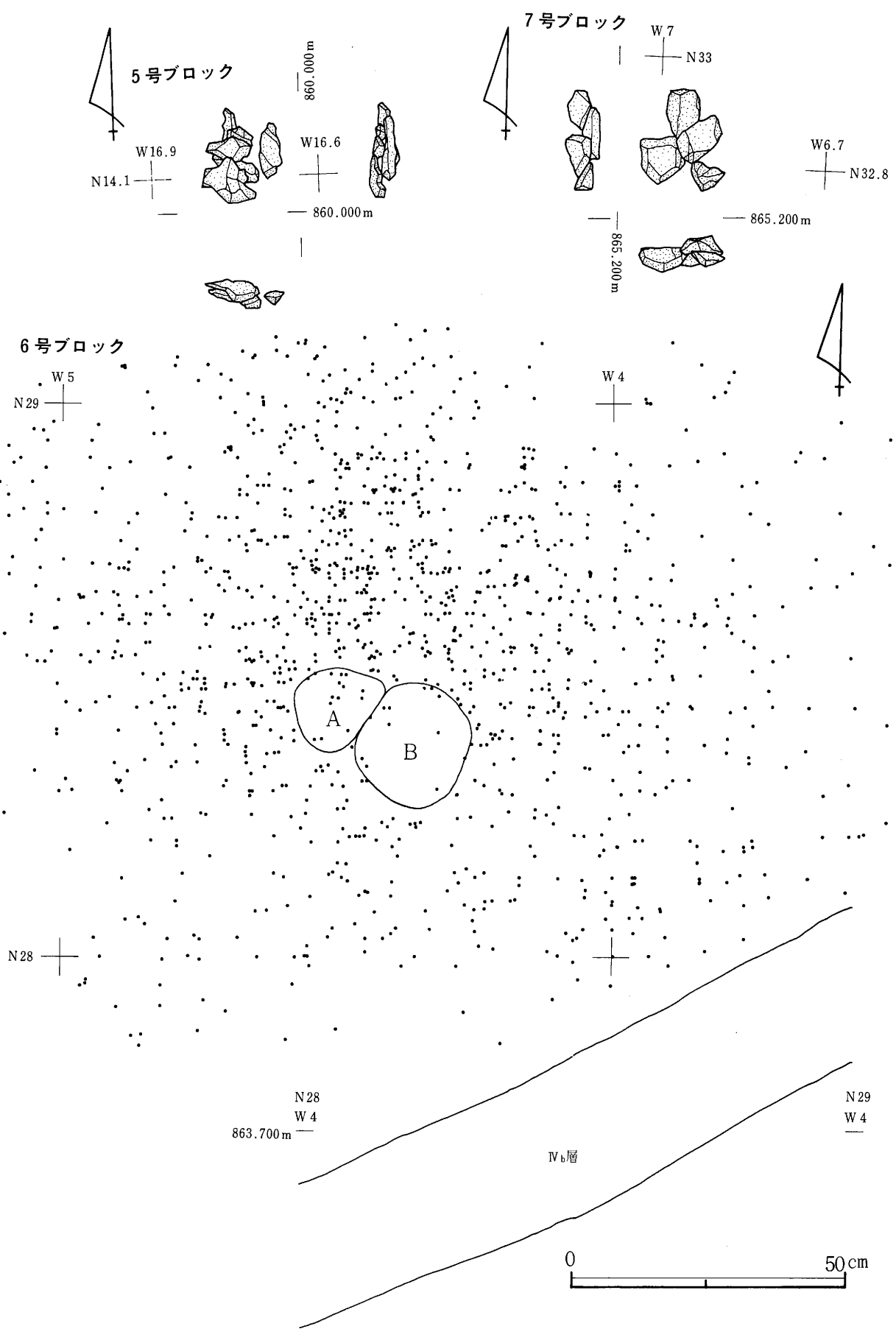


図82 大洞遺跡ブロック実測図3 (1:10)

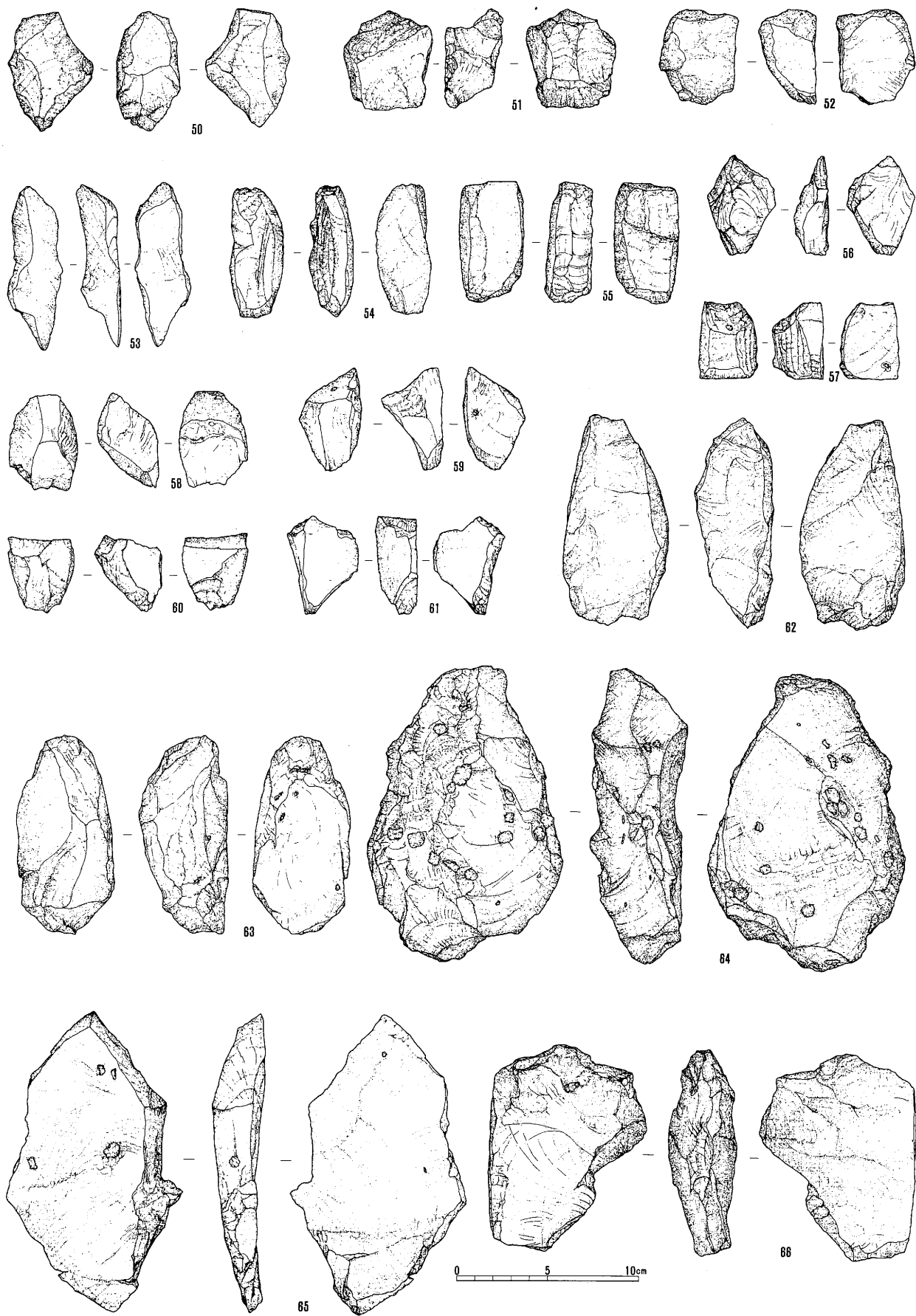


図83 大洞遺跡1号(50~61)及び2号(62~66)ブロック出土黒曜石実測図(1:3)

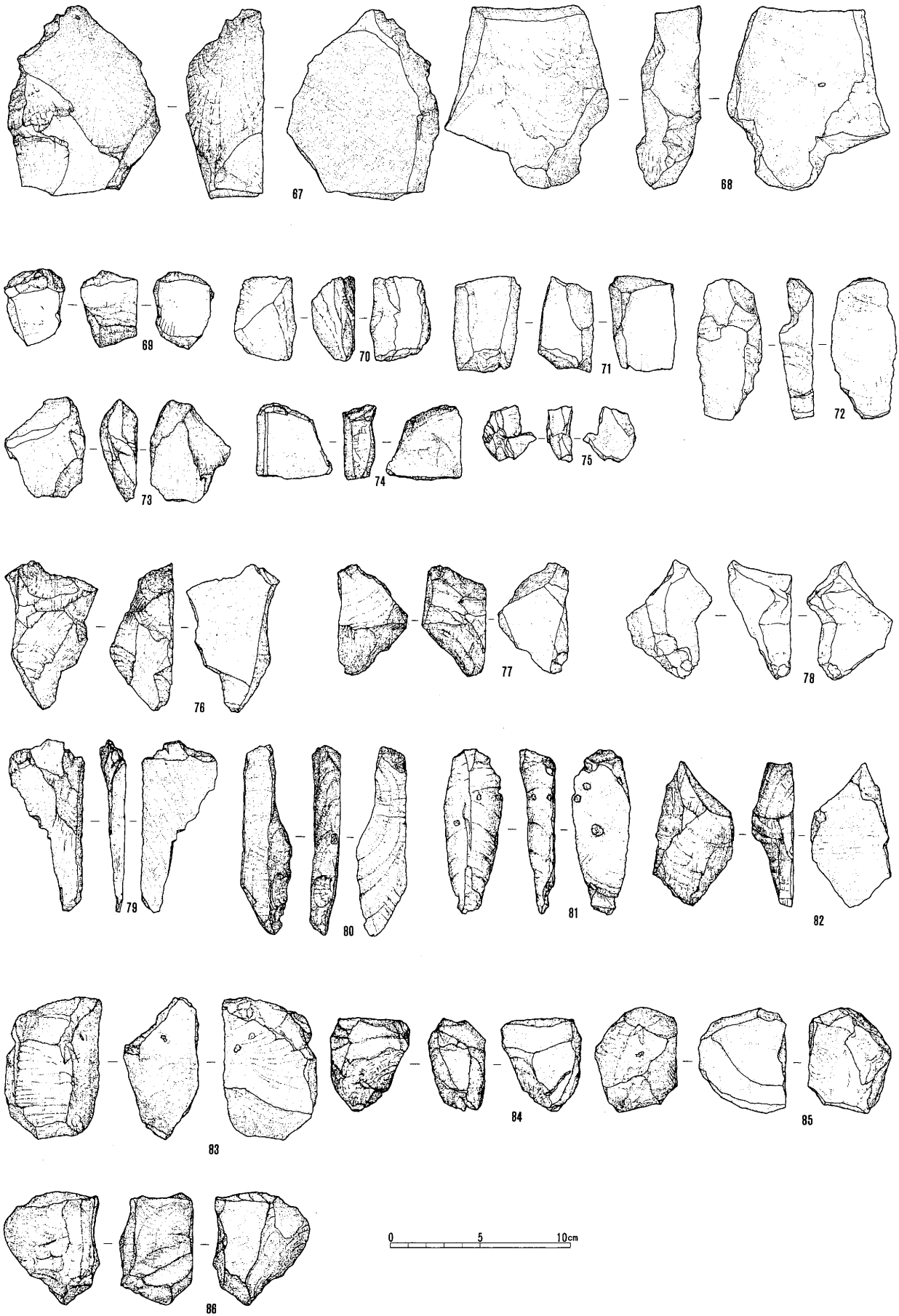


図84 大洞遺跡2号(67,68)・3号(69~75)・5号(76~82)及び7号(83~86)ブロック出土黒曜石実測図(1:3)

北に5個、南に2個の黒曜石原石が平面的にまとまり、70cmの間隔をもって存在する。1・2号ブロックとは様相を異にするが、斜面のために積み上げられたものが動いたと考え3号ブロックとした。原石は7個で最大のものは77.7g、最小のものは9.2g、総重量は310.8gである。加工痕跡は認められない。

(己) 4号ブロック (図81)

IV b層中、N25・W12付近で、2～7mmほどの黒曜石小剥片が径7cm弱の範囲に集中して出土した。自然なあり方とは思えず、周囲に同様な状況はないか精査した。その結果、これより南側を中心に小剥片、及びやや大きめの剥片が20cmほどの厚さの中に点在していることが確認できたことから、1.1×0.7mほどの範囲を小剥片が集中して分布する地点と認識し、4号ブロックとした。水洗選別も含めて採集した黒曜石小剥片数は295個で、通称チップとよんでいるものが大半である。

(オ) 5号ブロック (図82、84)

N14・W17付近でIV b層から黒曜石原石がかたまって出土し、5号ブロックとした。1号ブロックの1mほど南西に位置する。積み重なっていたが、掘り方の有無は不明である。原石は全部で7個あり、最大のものが94.7g、最小のものが34.0g、総重量は437.6gである。加工痕跡はいずれにも認められない。

(カ) 6号ブロック (図82)

N28・W5付近にあって、2号集石炉に接し、同一面のIV b層下部で検出した。4号ブロックと同様な黒曜石小剥片が図82のA・B部を中心に多く出土し、他地区に比べてその出土量が際立っていたため、小剥片の位置を図化しながら掘り下げた。その結果、A・Bを中心にして1mほどの範囲に集中し、その周りでは徐々に減じていく状況がうかがえたので6号ブロックとした。25～30cmの垂直幅をもって出土している。A・B部はそれぞれ1500cm<sup>2</sup>ほどの土を水洗選別し、全体では2136個の小剥片が確認された。大半がチップとよんでいるものである。

(キ) 7号ブロック (図82、84)

N33・W7の南向斜面最上部にあり、IV b層下部で検出した。2・3号住居址の東3mほどの所に位置する。4個の黒曜石原石が積み重ねられていた。最大のものは170g、最小のものは82.9g 総重量は550.9gである。いずれにも加工痕跡は認められない。

オ 焼土址 (図80)

南向斜面のIV b層を掘り下げ中、焼土と思われる赤褐色の土を随所で確認した。特に12号土壙一帯の斜面では多くみられた。当初色調も強く、ブロック状にあり、大小もあってその性格を確定しえなかった。その上、塩嶺累層の風化礫であろうとの指摘もあり、図化記録等を行わなかった。しかし、昭和60年度調査の同様な立地環境にある塩尻市竜神平遺跡においても類似した状況が認められ、焼土址として把握することが妥当と思われた。分布や内容を具体的にはほとんど述べられないが、1号ブロックの北側焼土のみ記録を示すことができる。50×50cmの円形で、15cm弱の厚さに焼土が見られ、この中に、真っ赤なブロック状の焼土塊も入っていた。比較的規模の大きな焼土であるが、その性格は記録が十分でないので不明と言わざるを得ない。

カ 遺構外遺物

(ア) 土器

⑦ 出土状況 (図85～87)

南向斜面とその基部の溝状地形部分には、前述したように耕土下のIII～V層が厚く、各層から完形土器をはじめとして、大小の土器片が多量に出土している。これらは早期～晩期までを含み、I～IV a層からは押型文土器から平安時代までが、IV b・V層からは押型文から中期初頭までの土器片が出土するという具合に、各層で必ずしも明瞭な時期別の出土をしていない。この状況は、斜面上に位置する本遺跡の立地



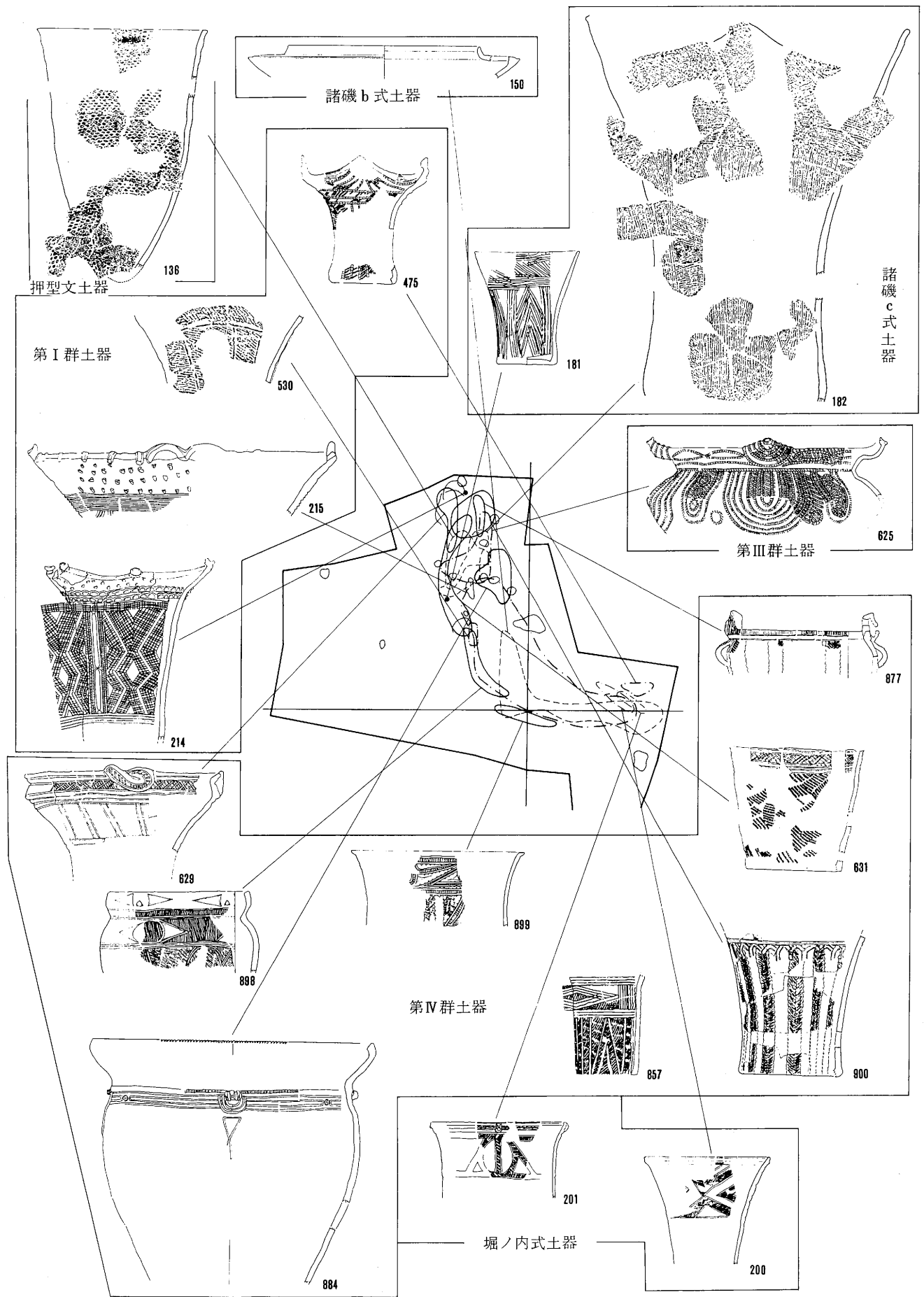


図85 大洞遺跡遺構外出土土器個体別出土状況図

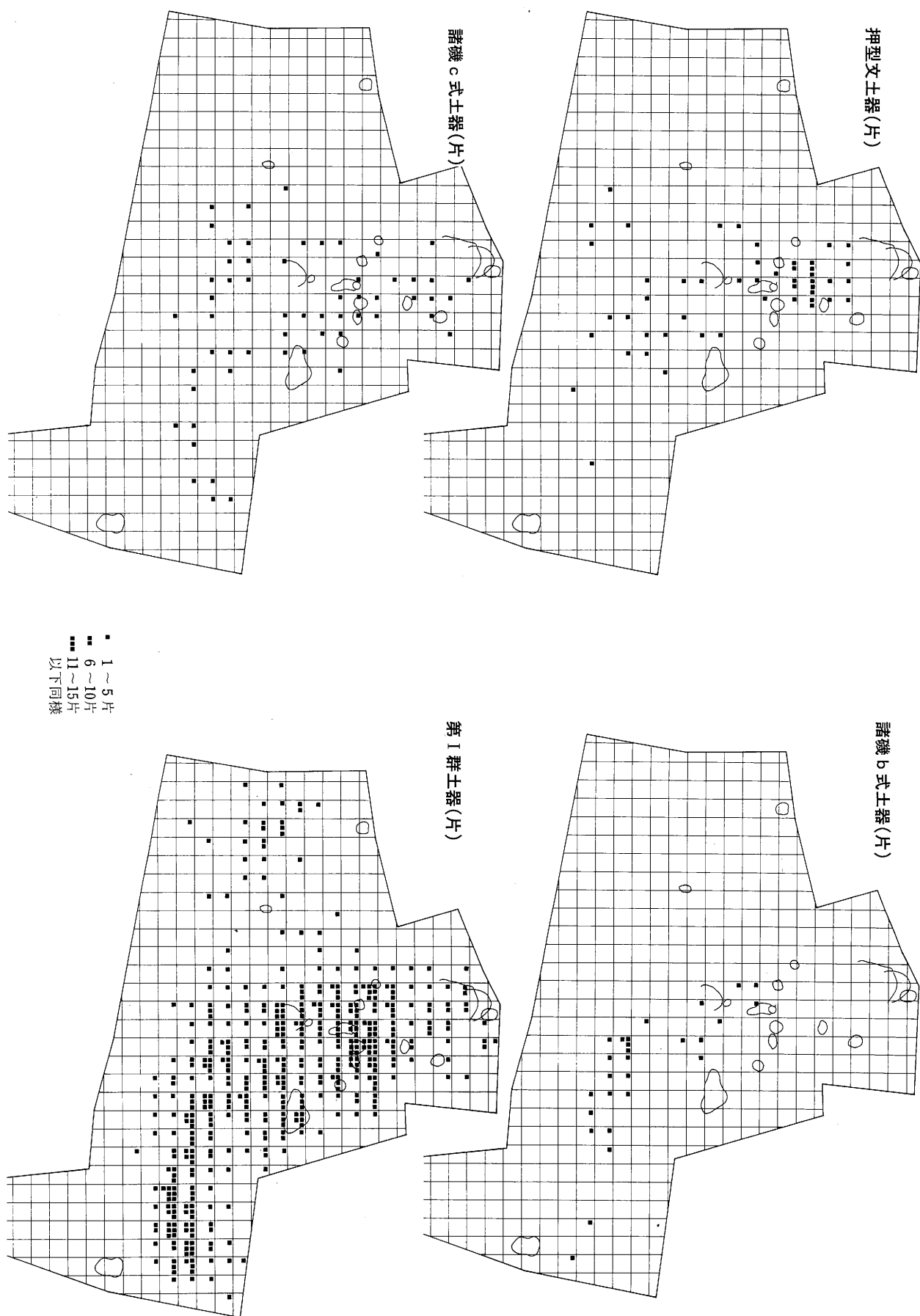
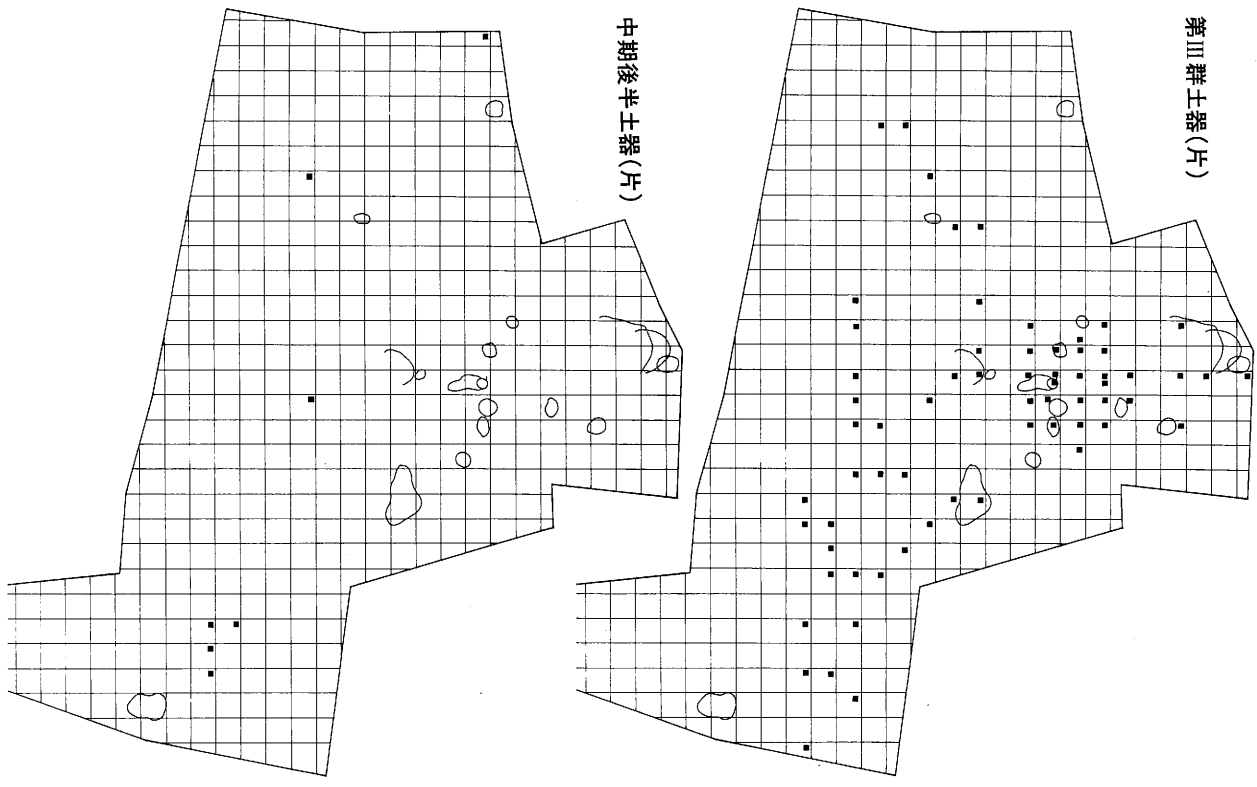


図86 大洞遺跡遺構外出土土器時期別出土状況図1



■ 1 ~ 5片  
 ■ 6 ~ 10片  
 ■ 11 ~ 15片  
 ■ 以下同様

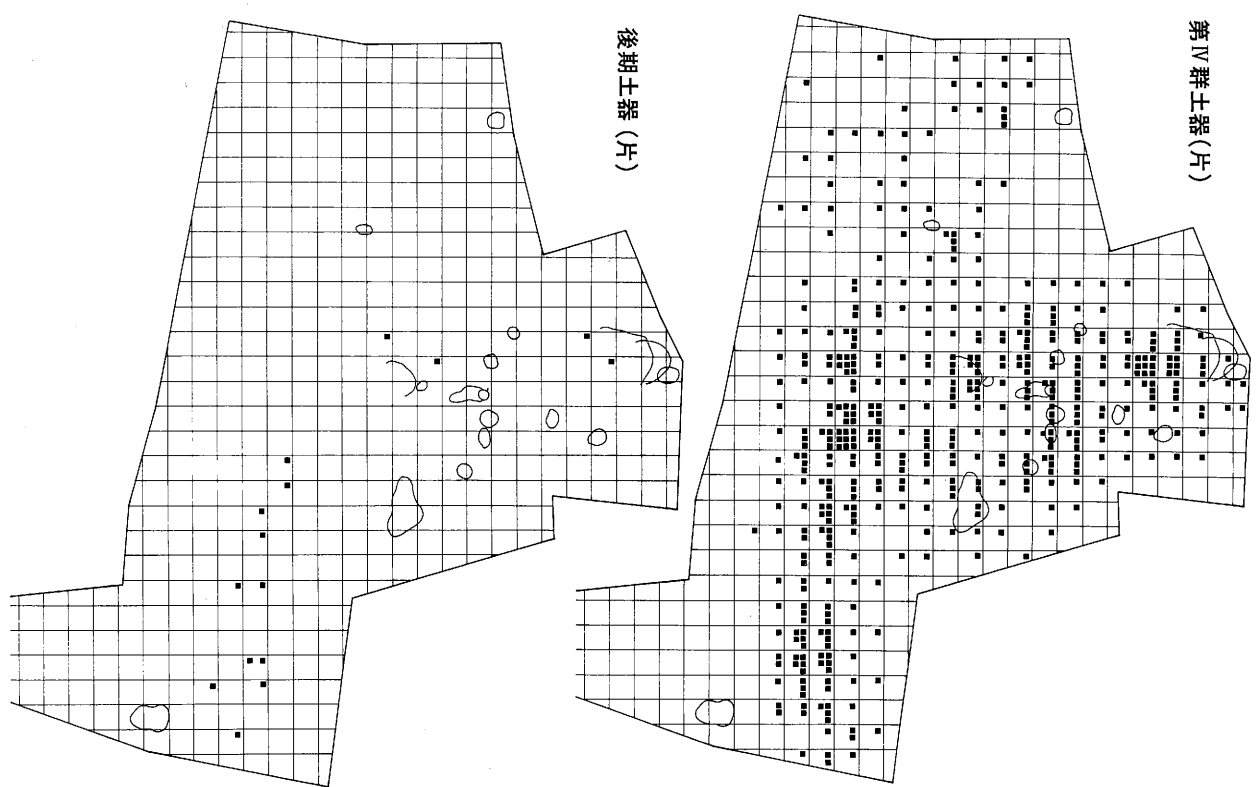


図87 大洞遺跡遺構外出土土器時期別出土状況図2

と不可分の関係にあらう。接合関係でも、大きく離れて、また層位を超えて接合しているので分類別の土器群で平面的まとまりをみることにし、平面分布図(図85~図87)を作成した。その全体的傾向は、南向斜面とその右下(南東方向)に多く分布する状況が伺える。これは後述する石器の分布状況とも同一傾向にあり、すべてがそうであったとは限らぬが、地形の状況からみて、南向斜面にあったものが、南東方向に斜面に沿って転落したと考えられる。以下、各分類毎にその平面分布状況を概観する。

押型文土器は、南向斜面から南東部にかけて分布する。復元土器の分布範囲(図85)から見て、南向斜面中央部の該期に属する10号土壙付近一帯がその中心と考えられる。

諸磯b式土器は、押型文土器の中心部よりやや南、溝状地形にかけて分布する。復元された浅鉢土器の分布もほぼ同様で、押型文土器よりやや南に分布の中心があると考えられる。

諸磯c式土器は、南向斜面から南東部にかけて点在する。復元土器の分布は、押型文土器分布の中心部にほぼ重なり、中心部はこの付近と考えられる。ただし、181はほぼ完形品で南向斜面中央部(図85)から一括出土している。

第I群土器は、上記の三者に対して量も多く、ほぼ全域から出土している。その中で、南向斜面中央部から南東部にかけて集中が見られる。復元土器の分布は、南向斜面及び東端部にあるが、この期の遺構分布状況からして、南向斜面にその中心が求められよう。なお、214は北側斜面上部から一括出土している。

第II群土器は量は少ないが、南向斜面中央部に集中する。また第III群土器は、ほぼ全面に点在するが復元土器は南向斜面中央部に分布しており、ここに中心が求められよう。これら外来系とされる土器の分布の中心も第I群土器と同様に南向斜面といえる。

第IV群土器はI群土器と同様量も多く、全域から出土している。やはり南向斜面から南東部にかけて集中傾向を示す。復元土器の分布も同様で、南向斜面に中心が求められよう。中期後半・後期土器は多くが溝状地形に分布し、晩期土器片は溝状地形東端から主に出土している。

#### ④ 出土土器(図88~91)

先述した通り、本遺跡出土の縄文時代遺物はその時代幅が長く、早期押型文土器から、晩期条痕文土器にまで至る。その中では前期末~中期初頭のものゝ圧倒的に多く、他は少量である。中心となる前期末~中期初頭の土器については次項にて詳しく触れるため、本項ではその他について時期別に触れておく。

押型文土器は、器壁が厚く、文様はすべて楕円文である。文様構成は、細久保2類b群、<sup>がくま</sup>学間類型のように横位密接施文される土器である。中には、不規則に施文されているようなものも見られるが明確でない。これらの土器と様相が極めて近似している遺跡に先に挙げた学間遺跡がある。ここで注意されることは、学間遺跡では、山形文が存在するが、ここでは楕円文のみで、横位に密接施文されるといった様相であろう。編年的には、樋沢式の特徴である縦方向の施文が姿を消して横位に限定されていることや、138の土器に見られるように口縁部が大きくひらいて高山寺式的な器形になること等から、細久保式でも後出的な時期にあたると考えられる。個々の破片を見ていくと、115~118は、若干の無文部を残しており122~126の楕円文は他と比較すると小粒で整っている。文様の重複は119~124にみられ、いずれも横位に重複する。134・135は、底部に近い破片で、やや斜位に施文され、137の底部にみられる施文方法をとっていると思われる。胎土は、長石・石英・スコリア・白い軽石を含み、白い軽石が、小粒子で全体に混入されていることが特徴的である。136は、口径約26cm、器高38.5cmで8条4単位で長さ4.3cm、太さ1.1cmの原体を口縁部より、底部の順に横位に施文し、底部付近では、斜位にやや不規則に施文する。口縁部などに若干原体の重複が大きい部分も見られるが、基本的には横位に、原体幅を保って密接に施文される細久保2類b群土器の典型的なものである。胎土には、他の土器片よりも、やや大粒の長石が多く混入され、さらに白い軽石も小粒子で全体に混入される。138は、口径19.4cmで大きく外反し、口唇部に貼り付けをしてふくらみを

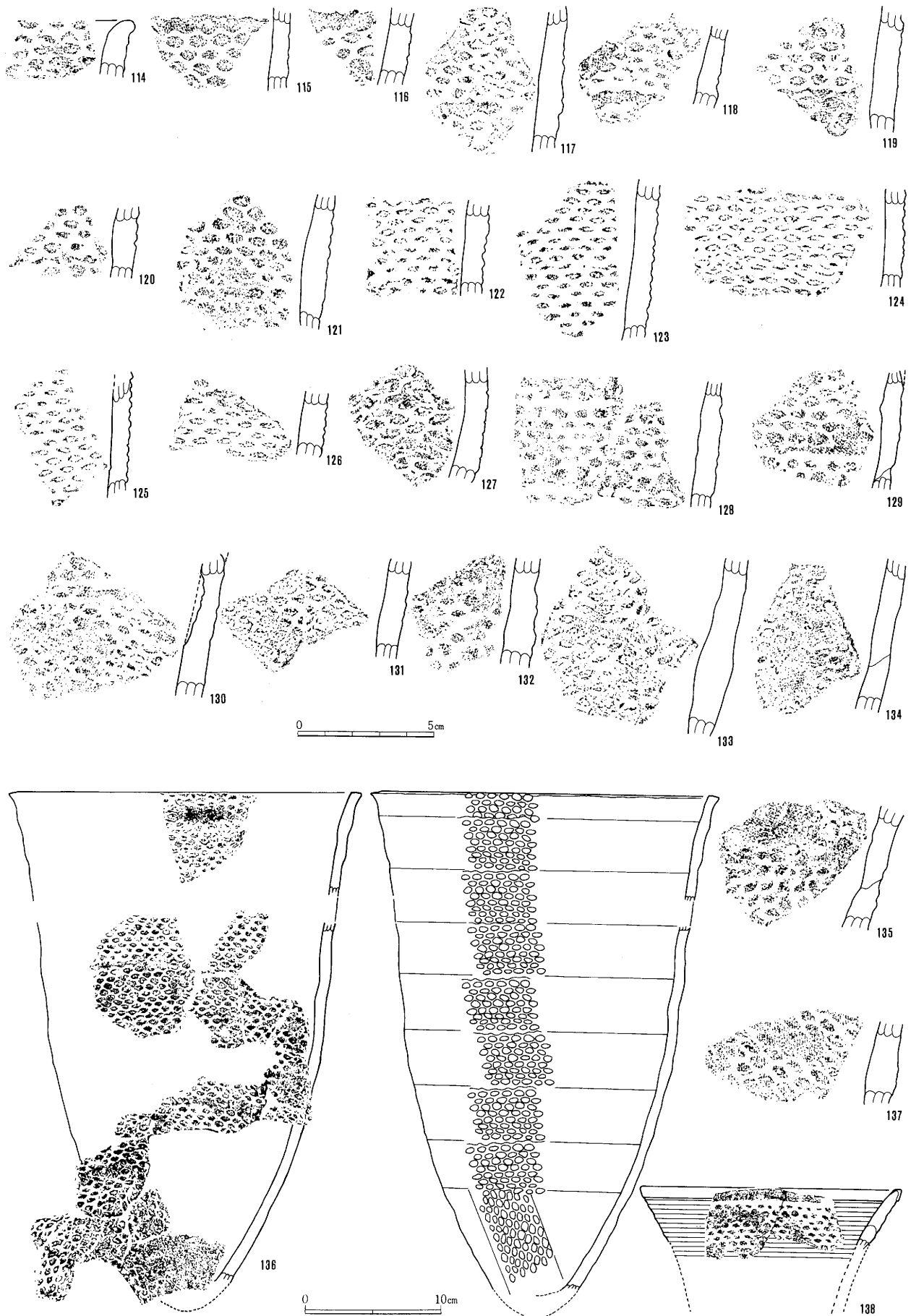


图88 大洞遗址遗构外出土押型文土器实测图·拓影 (114~135, 137 1 : 2、136, 138 1 : 4)

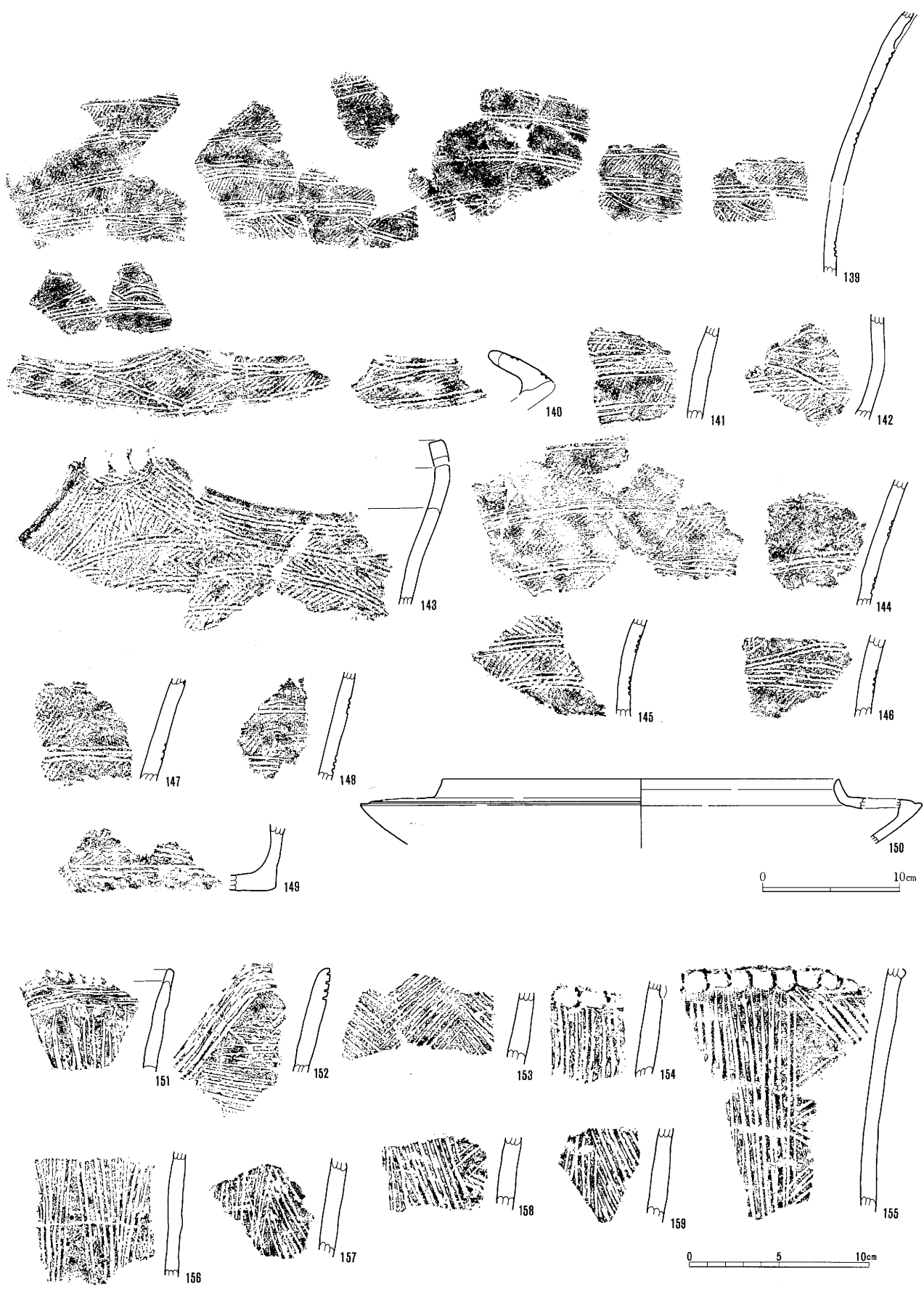


図89 大洞遺跡遺構外出土諸磯b式及び諸磯c式土器実測図・拓影1 (139~149, 151~155 1:3、 150 1:4)

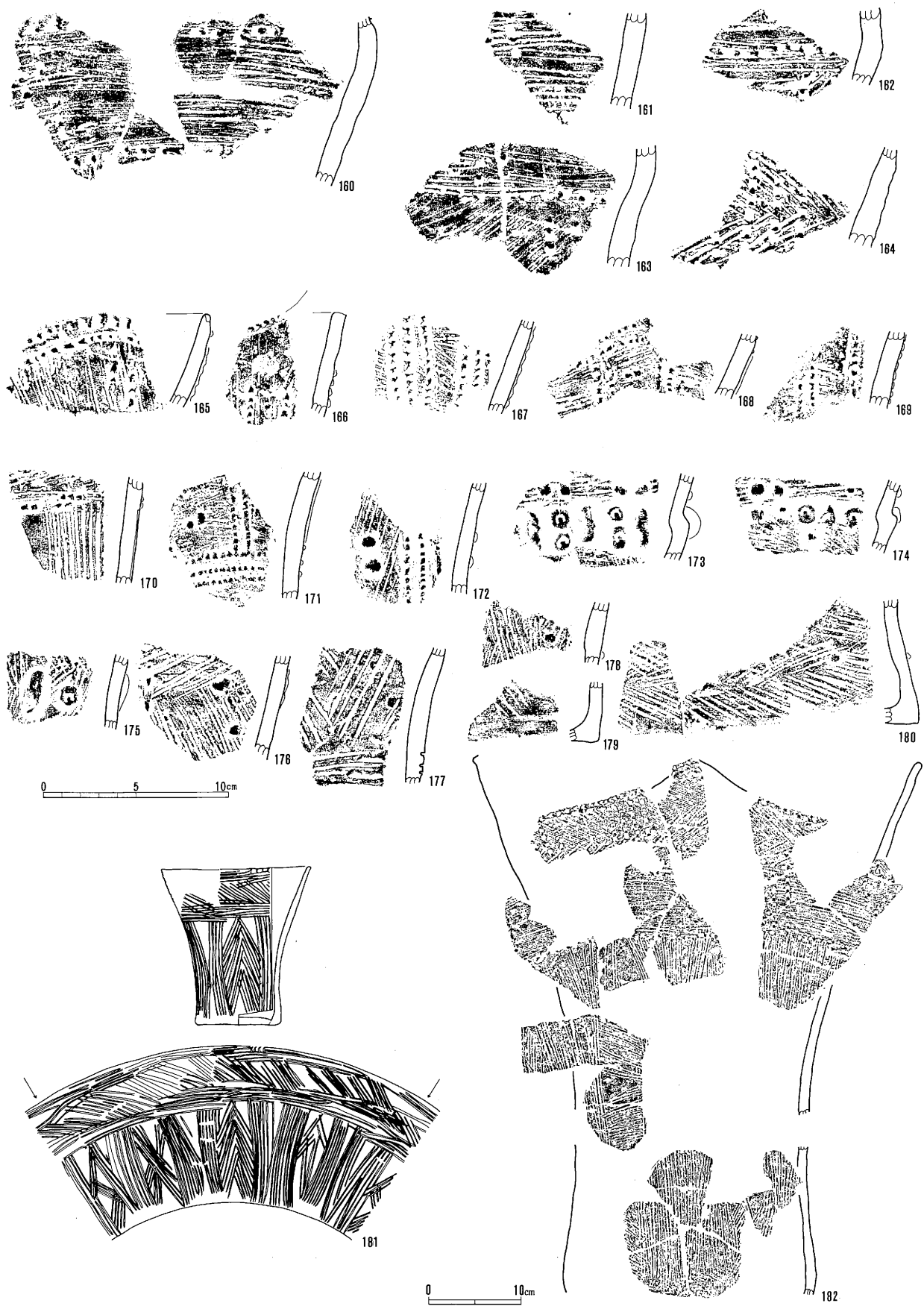


图90 大洞遺跡遺構外出土諸磯c式土器実測図・拓影2 (160~180 1:3、181,182 1:6)

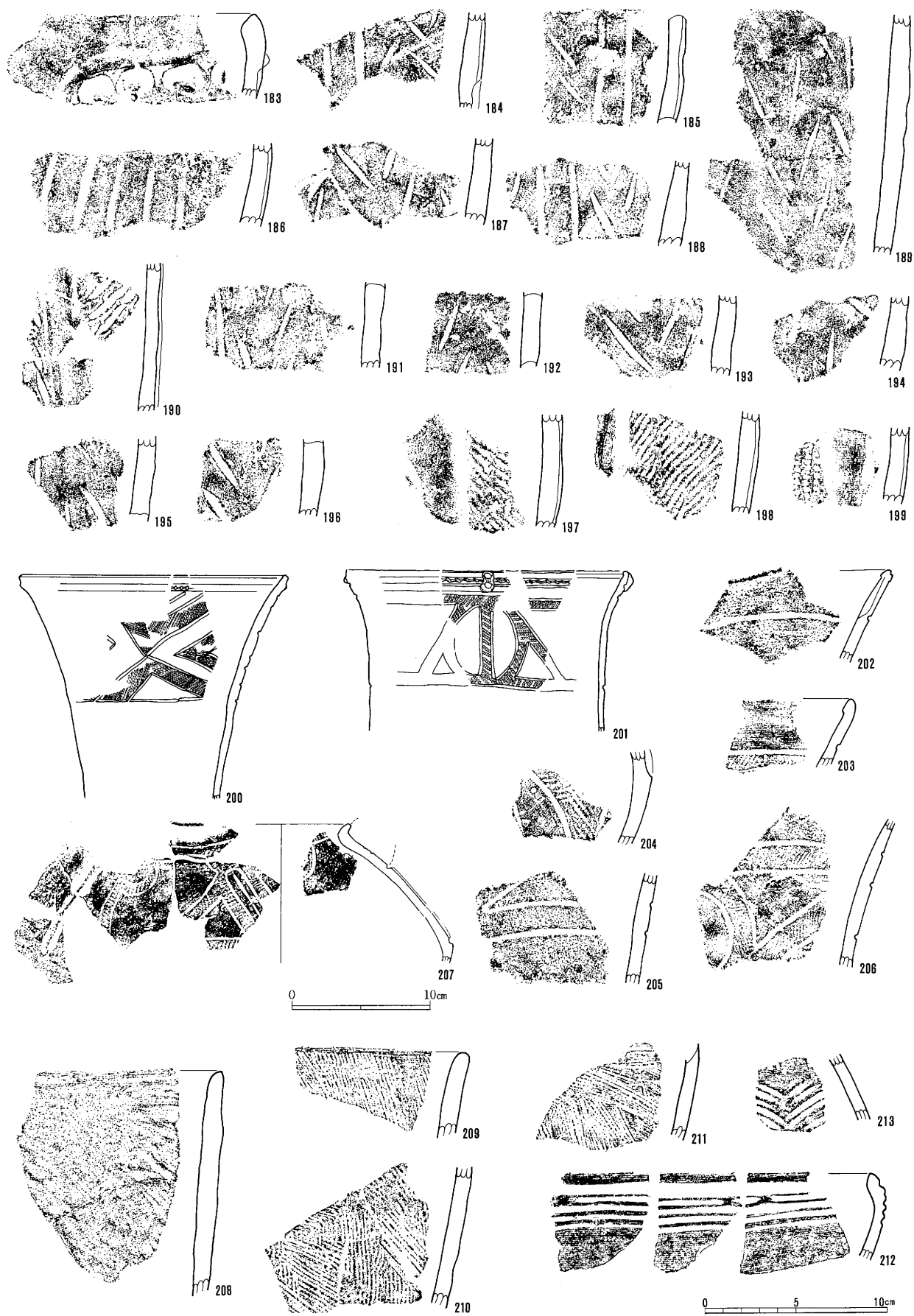


図91 大洞遺跡遺構外出土縄文時代中期後半～晚期土器実測図・拓影  
 (183~199, 202~206, 208~213 1 : 3、200, 201, 207 1 : 4)



もたせている。その下に、ふくらみに沿うように、7条以上で4単位の原体(長さ3cm以上、太さ9.5mm)を横位に施文している。胎土には他と同様な混入物を含み、白く粒子の細かい軽石が特徴的に見られた。ここで個別に取り上げない破片の胎土も前述の混入物を含み、やはり白い軽石の小粒子が目立っていた。

139~150は前期中葉、諸磯b式土器である。地文に縄文が施され、その上に2~3本を1組とする竹管状工具による横方向の沈線文が等間隔に配されることを特徴とする。この時期の土器は、器形も特異なものが多い。140は口縁部が「く」字状に大きく内折し、かつ波状となる。また、150は特殊浅鉢形土器である。

151と182は諸磯c式土器で、一律に地文に沈線文による横位、縦位ないしは羽状の集合沈線文をもつ。154と155は胴部と口縁部の境に指頭状圧痕による区画をもつ。160~164は縦および横方向に結節沈線文を伴う。これに対し165~172は結節隆帯文をもつ一群である。171~180には、ほぼ2個一對のボタン状突起があり、173~175にはさらに貝殻状突起を伴うし、ボタン状突起の上には、竹管状工具による刺突がなされる。完形土器181は沈線文のみによって飾られた土器であるが、その構成は興味深い。一見粗雑で不規則に描かれているようではあるが、そこには一定の構図が存在する。文様帯は大きく口縁部と胴部に分かれる。口縁部は横羽状構成で、胴部は斜位の構成となる。胴部はその構成を模式図にすると図132ようになる。まず全体は縦位に8分割される。そのうち交互に現れるbは上部がV字状の空間になるように描かれ、共通する。そして、aは鋸歯状、cはX字状、dは縦羽状に描かれるというように、文様構成は意図されたものとなっているのである。このことは、182にも共通すると思われる。一部しか残存せず、全体については知り得ないが、少なくとも残存部において、口縁部羽状、胴部に鋸歯状および羽状となる文様構成が確認される。

183~199は中期後半の資料である。胴部における「ハ」字状構成を示す沈線文は大きく、また乱れ気味であり、いずれも曾利式終末期のものであろう。これに対し、197~199の3点は地文に縄文が施され、縦に2本の沈線文で画された無文帯が存するもので、加曾利E式土器に比定されよう。

200~206は後期前半の土器である。207を除いてはすべて深鉢形で、薄い器壁とていねいな磨きが特徴となる。207は大型の注口土器であろう。胴中央部に最大径をもち、そろばん玉状の器形を呈すると思われる。また口縁部付近には把手が付いていたと推察される剥落痕が認められる。いずれも直線的な磨消縄文があり、堀ノ内式の後半に比定される。

208~212は晩期土器の一部で、深鉢形と浅鉢形がある。209~211には細密条痕が不規則に施される。212は楕円形モチーフが浮線文で表現される。他は沈線文が横走し、非常に丁寧な整形がなされる。いずれも氷式土器の特徴を示しているといえよう。

213は縦位羽状沈線文によって構成される、恐らくは壺形土器である。こうした資料は極端に少なく、時期決定に迷う点もあるが、弥生時代中期前半の庄の畑式土器に極めて近い段階の土器であると考えておきたい。

#### (イ) 石器

##### ㊦ 出土状況(図92、93)

各層から出土した石器は、表12に示した通りである。II層は、溝状地形東側の狭い範囲に薄く分布する層であり、遺物包含量も少ない。V層は、溝状地形底部、南向斜面にある程度の厚みをもって分布しているが、遺物は押型文土器と石器がごく少量出土したのみである。I・III・IVa・IVb層からは、それぞれ石器が出土している。中でもIVa層・IVb層からは、全体の70~80%が出土しており、IVa・IVb層が主たる包含層といえ、更にIVb層からの出土量が圧倒的に多い。

平面分布は、図92と図93に示した通りである。石鏃、石錐、スクレイパー、ピエス・エスキーユ、小剥

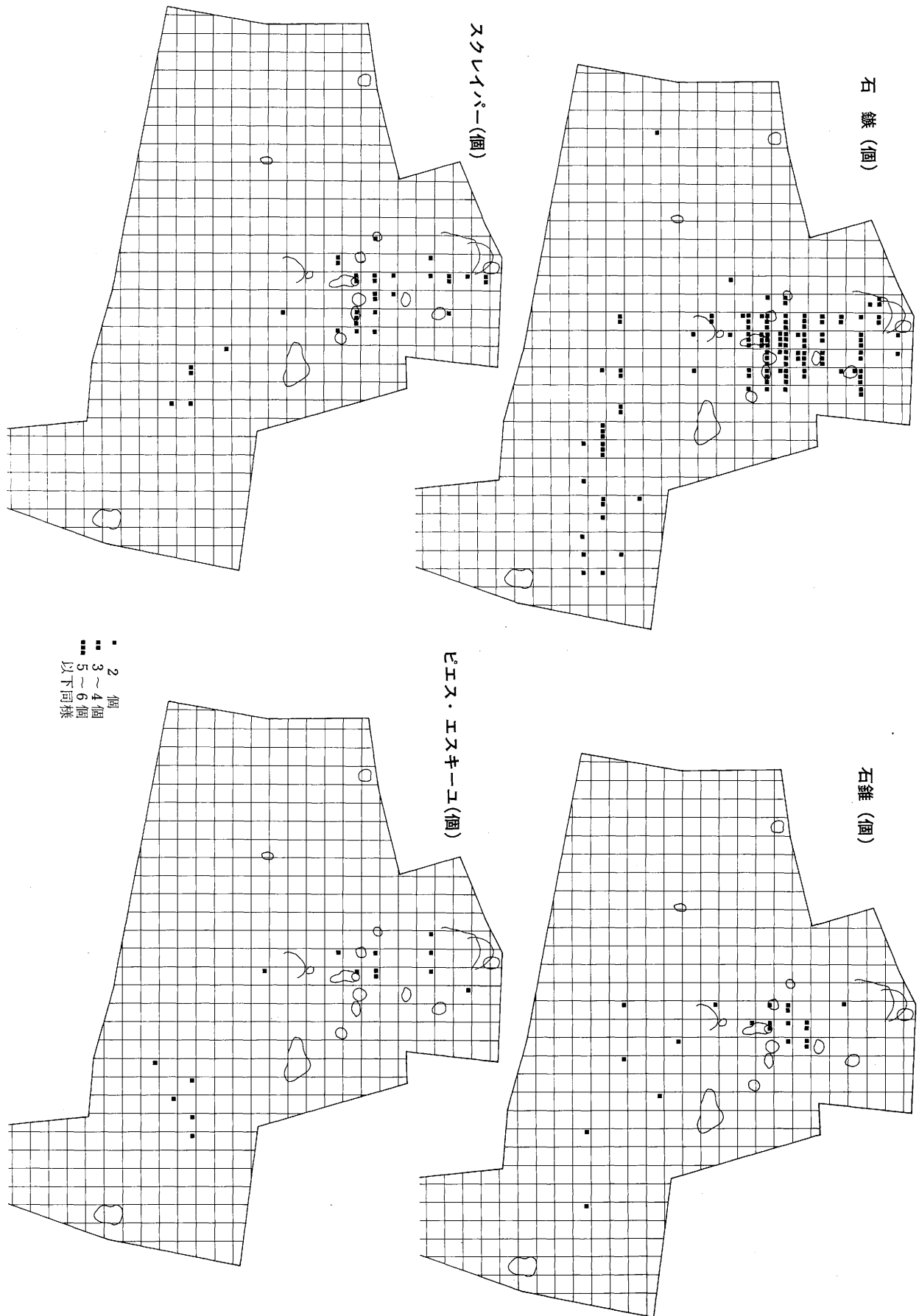


図92 大洞遺跡遺構外出土石器分布図1



図93 大洞遺跡遺構外出土石器分布図2

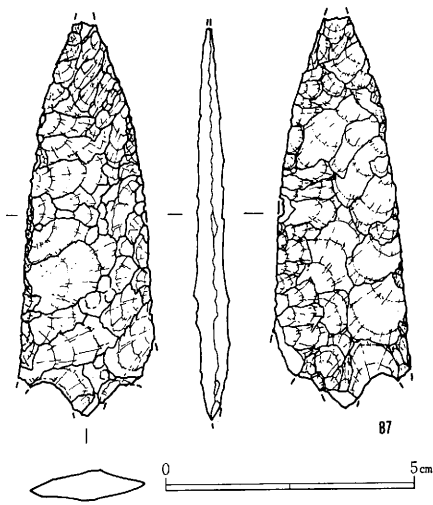


図94 大洞遺跡遺構外出土石器実測図 1

離痕のある剥片、打製石斧、横刃形石器は各層から出土しているものを2mグリッド毎に合計して図化してあるが、前述した通り、その出土量から見てIV a・IV b層の出土状況としても大過ない。またグリッドから1個出土等少量の場合は省略してある。

石鏃から黒曜石石核・剥片までの出土状況を見ると類似性が認められる。すなわち、南向斜面の中央部土壌・集石炉の分布する10m四方ほどの一帯に集中が見られ、ここより右下(南東方向)に帯状に分布している状況がうかがわれる。各器種の個々の状況をみると、石鏃、石錐、スクレイパー、ピエス・エスキーユ、小剥離痕のある剥片、黒曜石石核・剥片はほぼ前述した状況と同じであるが、打製石斧・横刃形石器は南向斜面中央部での集中にやや乏しく、黒曜石原石は右下よ

りも左下(南西方向)への分布が顕著である。図示しなかった(2:3)出土量の少ない石匙、磨製石斧、磨石・凹石、敲石、石皿、その他の石器は散在して出土しており、特に集中傾向はない。

④ 出土石器 (図94~107)

87は有茎尖頭器である。溝状地形東端の最深部V層中から単独で出土した。安山岩製で、先端部と左右のかえり部先端、中茎先端を欠く。縦長で基部が深く抉られており、押圧剥離による平行する調整剥離が両面にみられる。

88~193は無茎石鏃で、88・90・92~94・116・119・127・137は凹基1類、89・91・95~100・103・104・106~110・112~115・117・118・120・122・124~126・128~130・134~136・138~140・142・143は凹基2類、101・102・105・111・121・123・131~133・141・144~165は凹基3類、166~173は平基、174~176・178・183~189・192は凸基1類、177・179~182・190・191は凸基2類、193は凸基3類であり、194・195は有茎石鏃である。196~227は石錐で、うち196~208はつまみを有するもの、209~224は棒状である。それぞれは刃部の調整によって分けられ、196~198・209~211は1類、199・200・212・213は3類、201~206・214~224は4類である。225・226・227は刃部の破片で、それぞれ、1類・2類・3類である。228~231は石匙である。232~257はスクレイパーとしたもので、234~237は刃部片面加工で直線状、238~245は同加工で外湾状、246は内湾状のものである。247~250は刃部両面加工で直線状、251~256は同加工で外湾状、257は内湾状のものである。258~266は両面加工であるが、どの器種に入るか不明で、その他の石器としたものである。267~290はピエス・エスキーユで267~277が1類、278・279が2類、280~286が3類、287~290

層位	石鏃	石錐	石匙	スクレイパー	ピエス・エスキーユ	小剥離痕のある剥片	打製石斧	横刃形石器	磨製石斧	磨石凹石	敲石	石皿	その他の石器	剥片(g)	石核(g)	原石(g)
I	46	12	0	3	8	51	7	4	0	0	1	1	2	2,149.2	1,501.7	231.7
II	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	45.1	45.5	0
III	35	8	1	1	6	25	5	1	0	0	0	0	3	2,266.4	939.7	255.8
IV a	70	16	0	9	28	87	25	6	3	2	1	0	6	6,195.4	4,429.8	2,343.3
IV b	213	41	3	24	43	261	35	8	4	11	1	2	11	17,243.6	10,898.8	6,443.4
V	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	90.0	9.7	0

表12 大洞遺跡遺構外出土石器層位別出土量一覧表

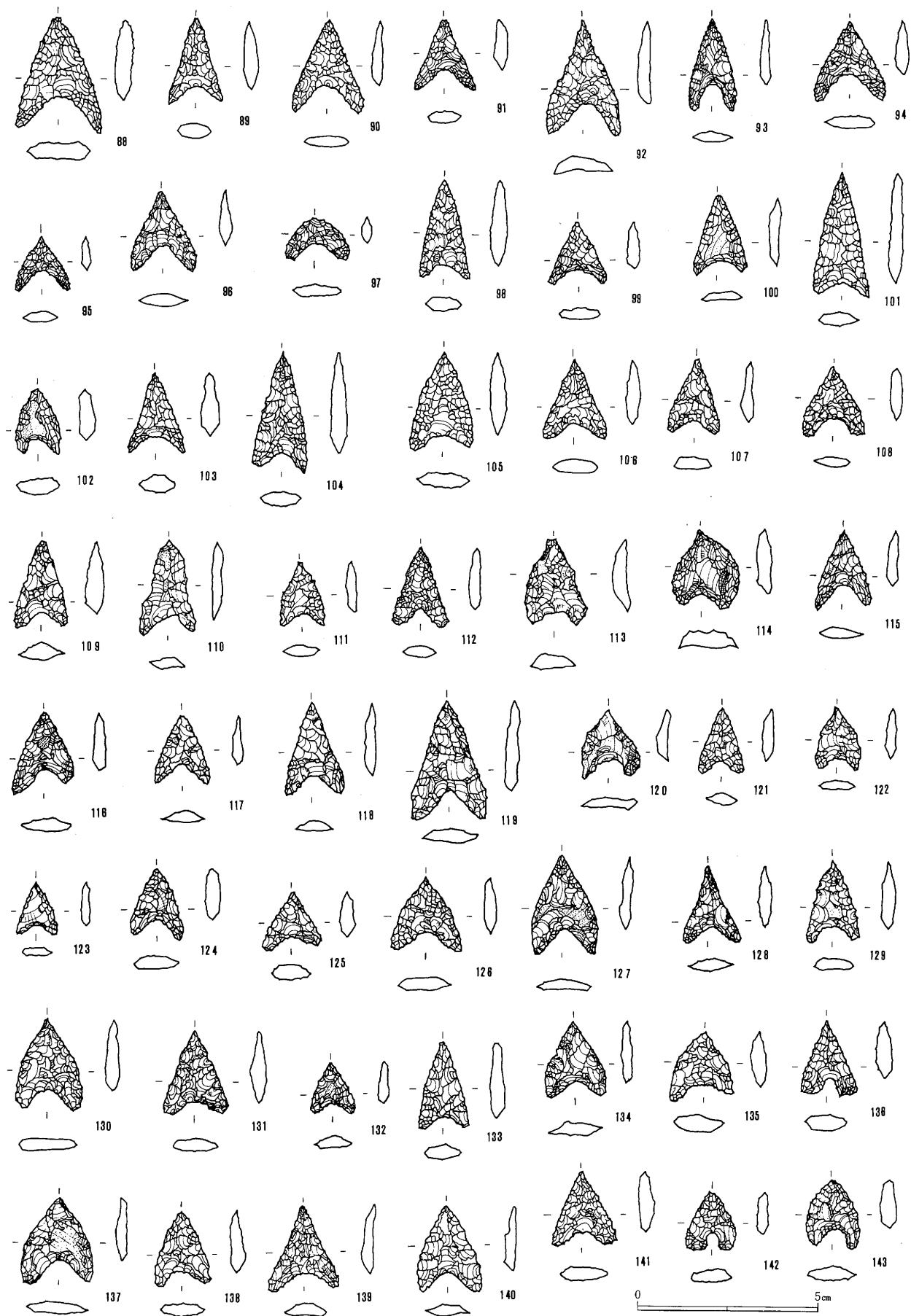


图95 大洞遗迹遺構外出土石器実測図2 (2:3)

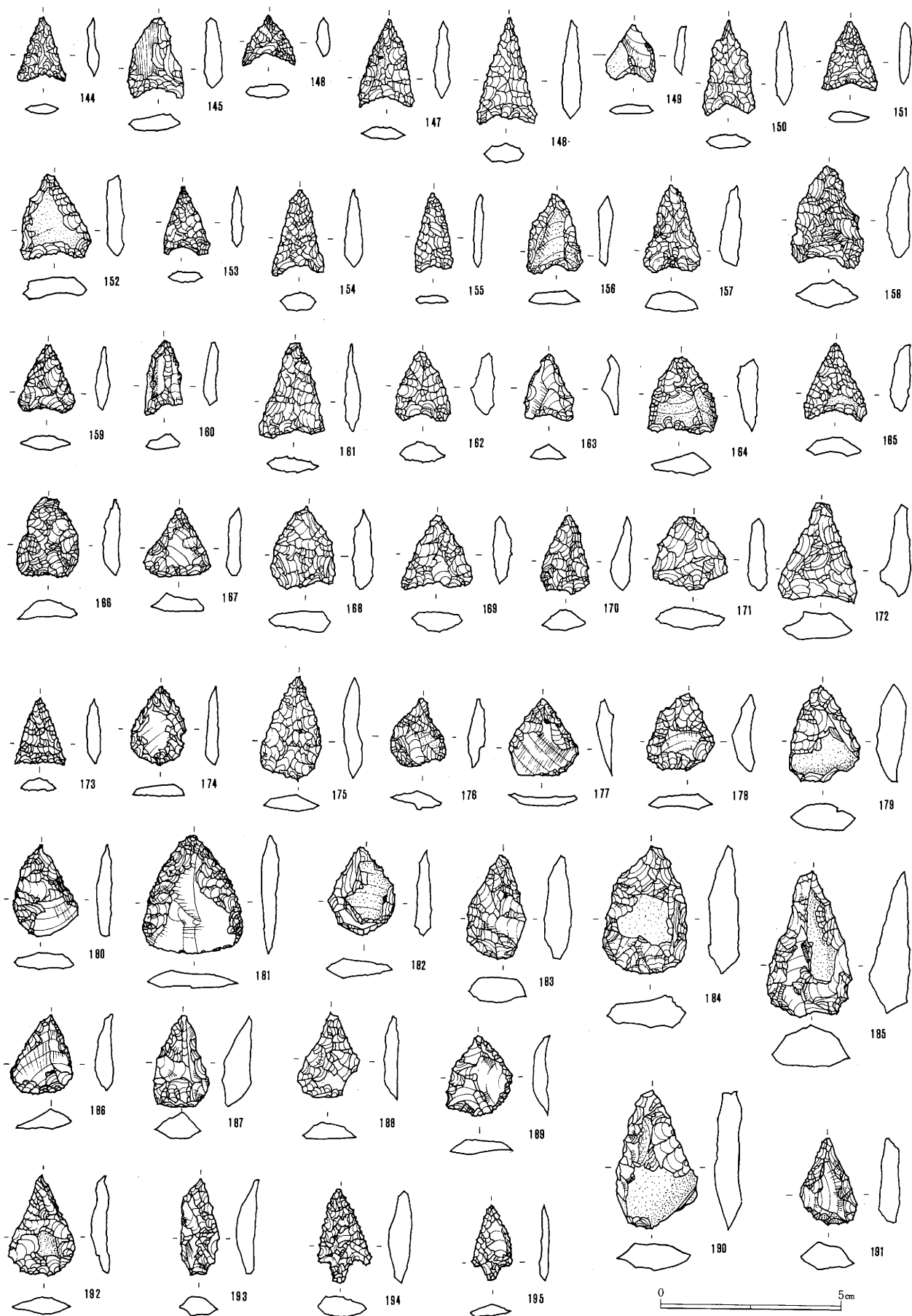


图96 大洞遗迹遺構外出土石器実測图3 (2:3)

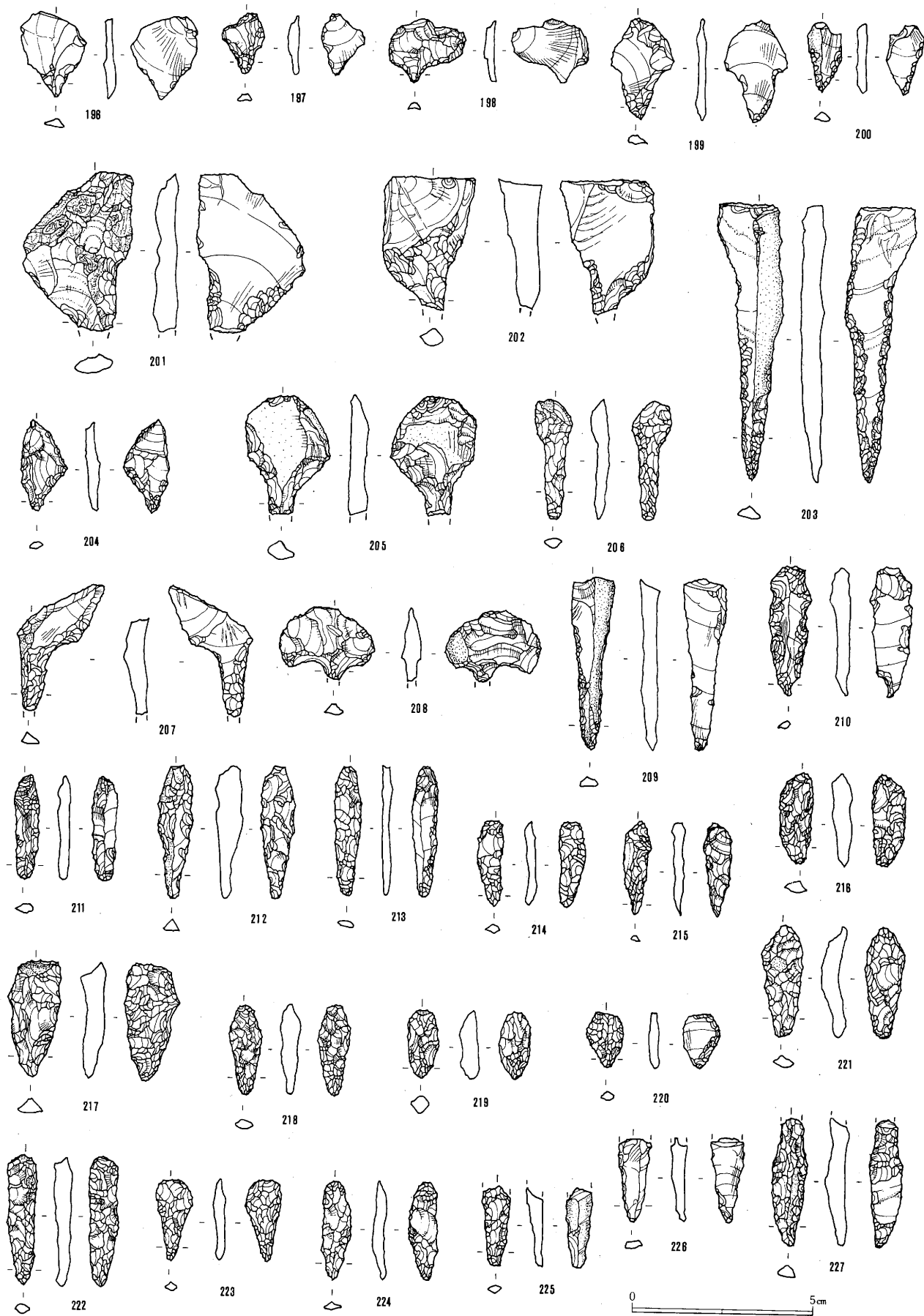


图97 大洞遗迹遺構外出土石器実測图4 (2:3)

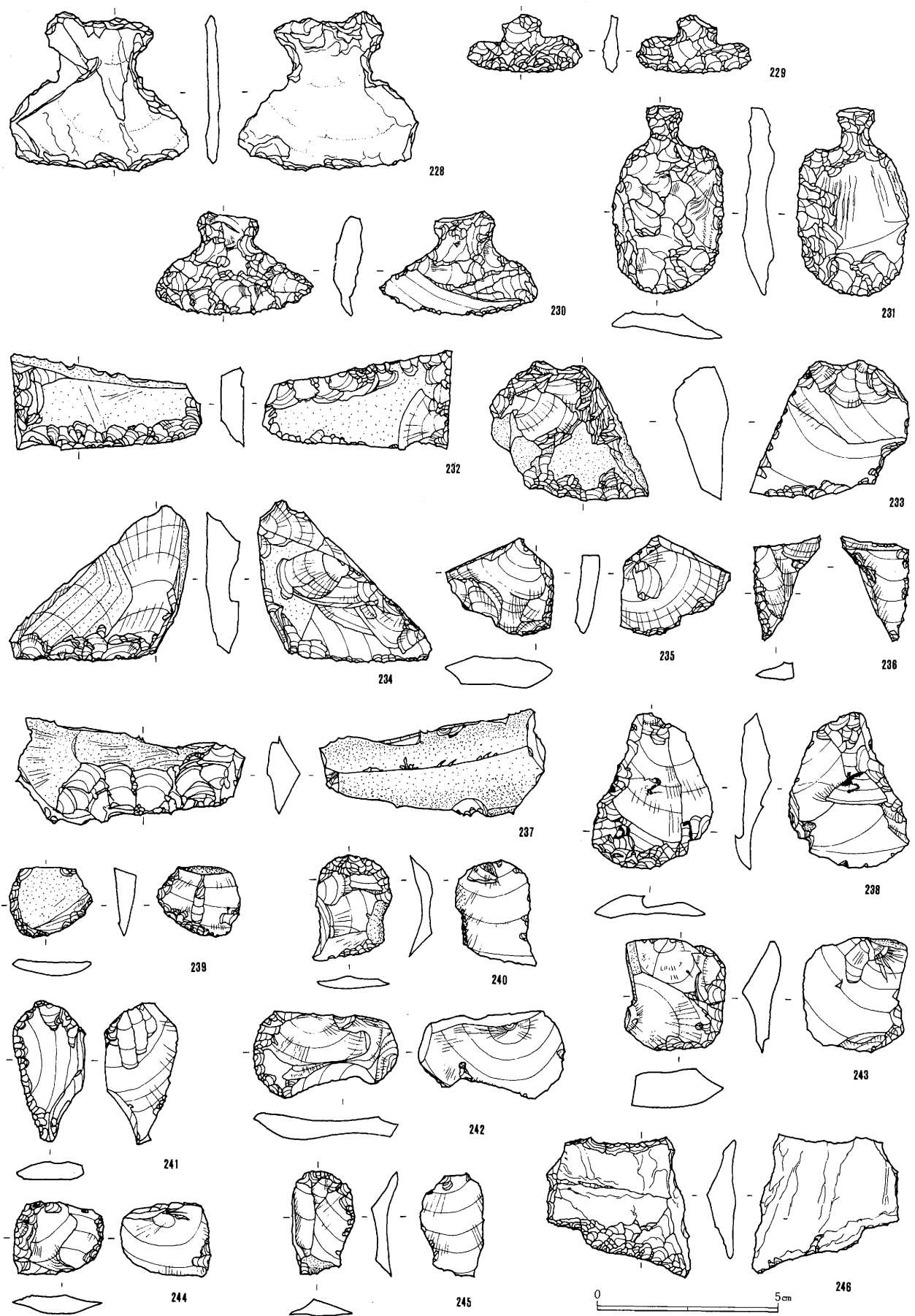


图98 大洞遗址遗构外出土石器实测图5 (2:3)



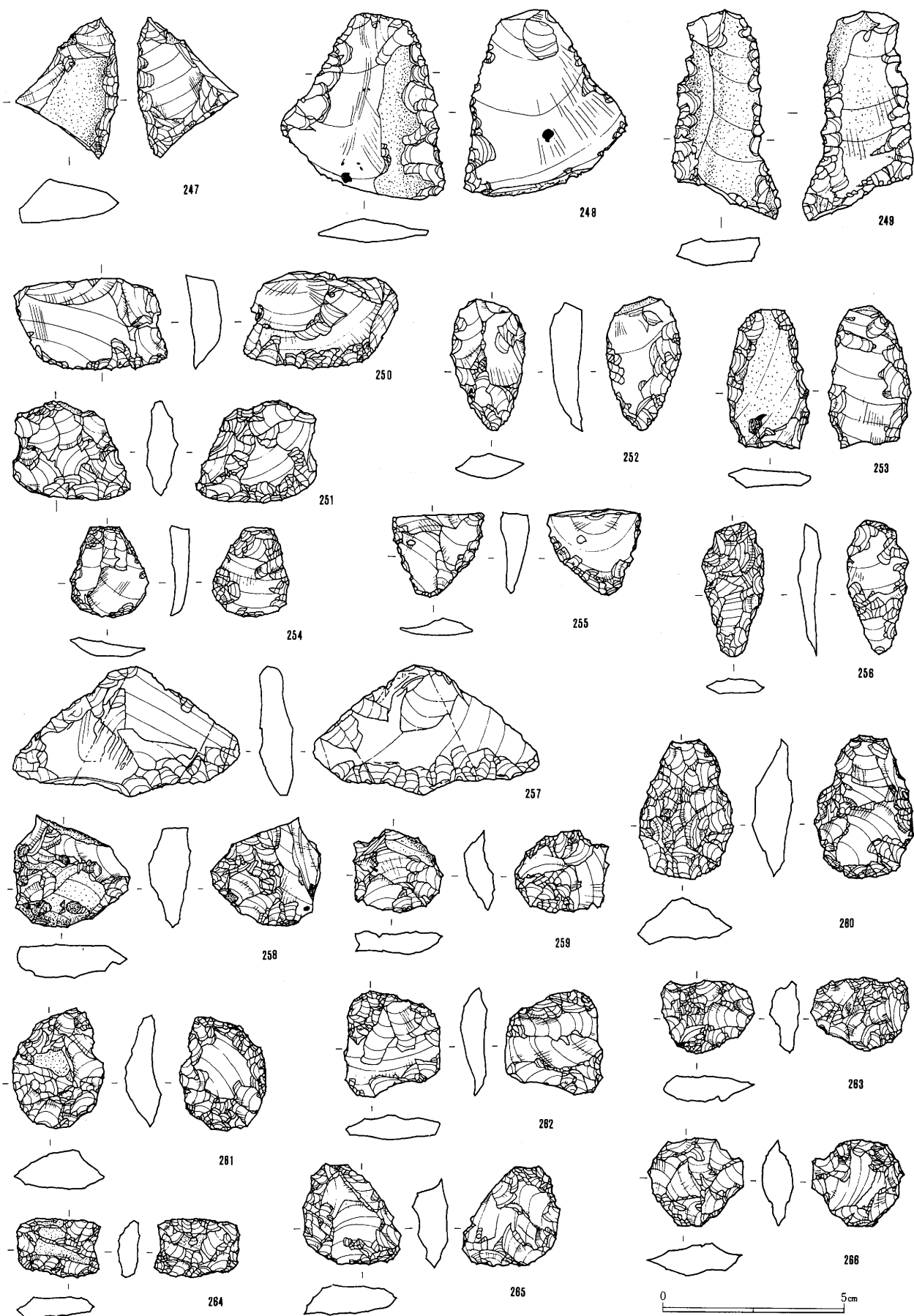


图99 大洞遗迹遺構外出土石器実測図6 (2:3)

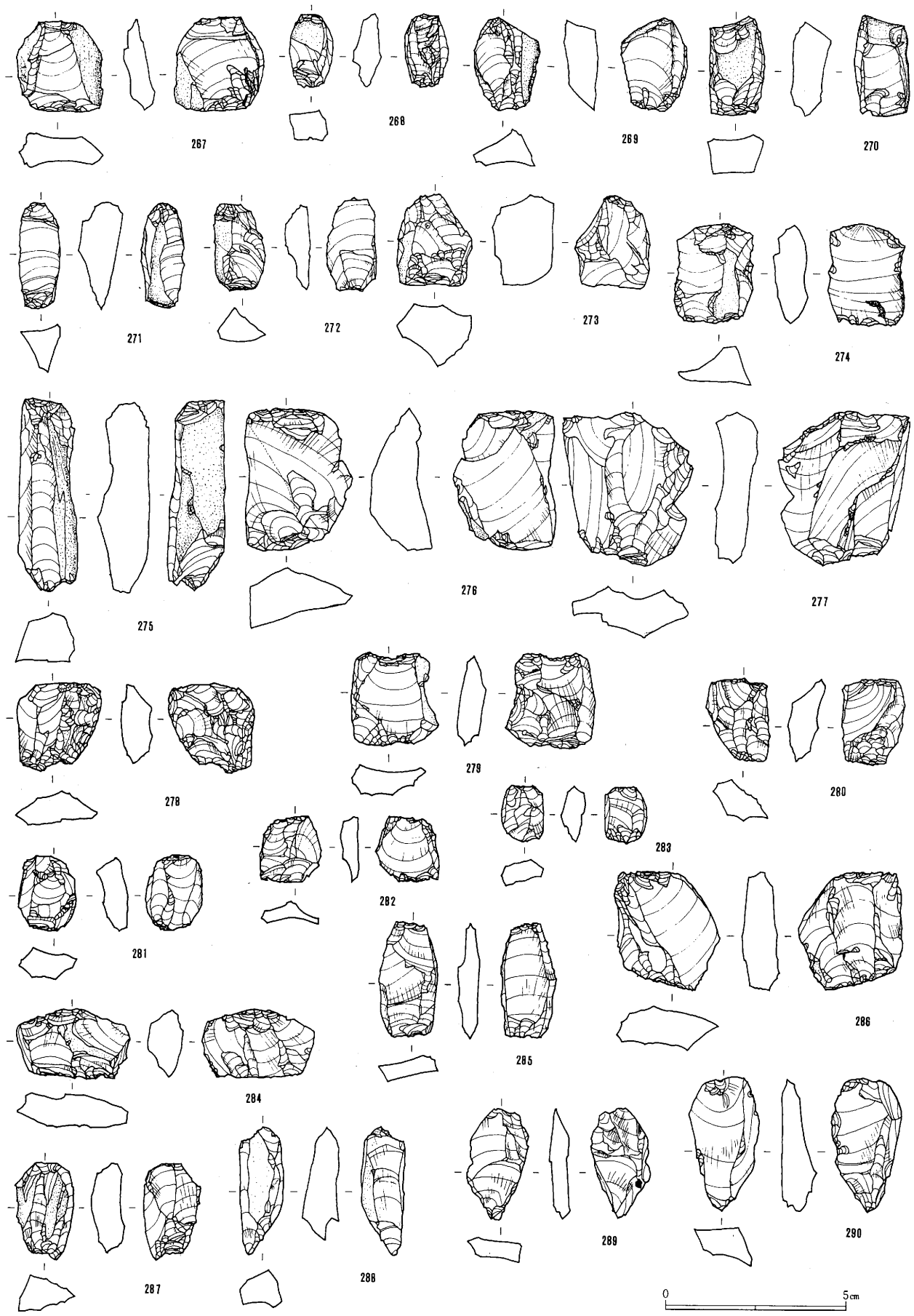


图100 大洞遗迹遺構外出土石器実測図7 (2:3)

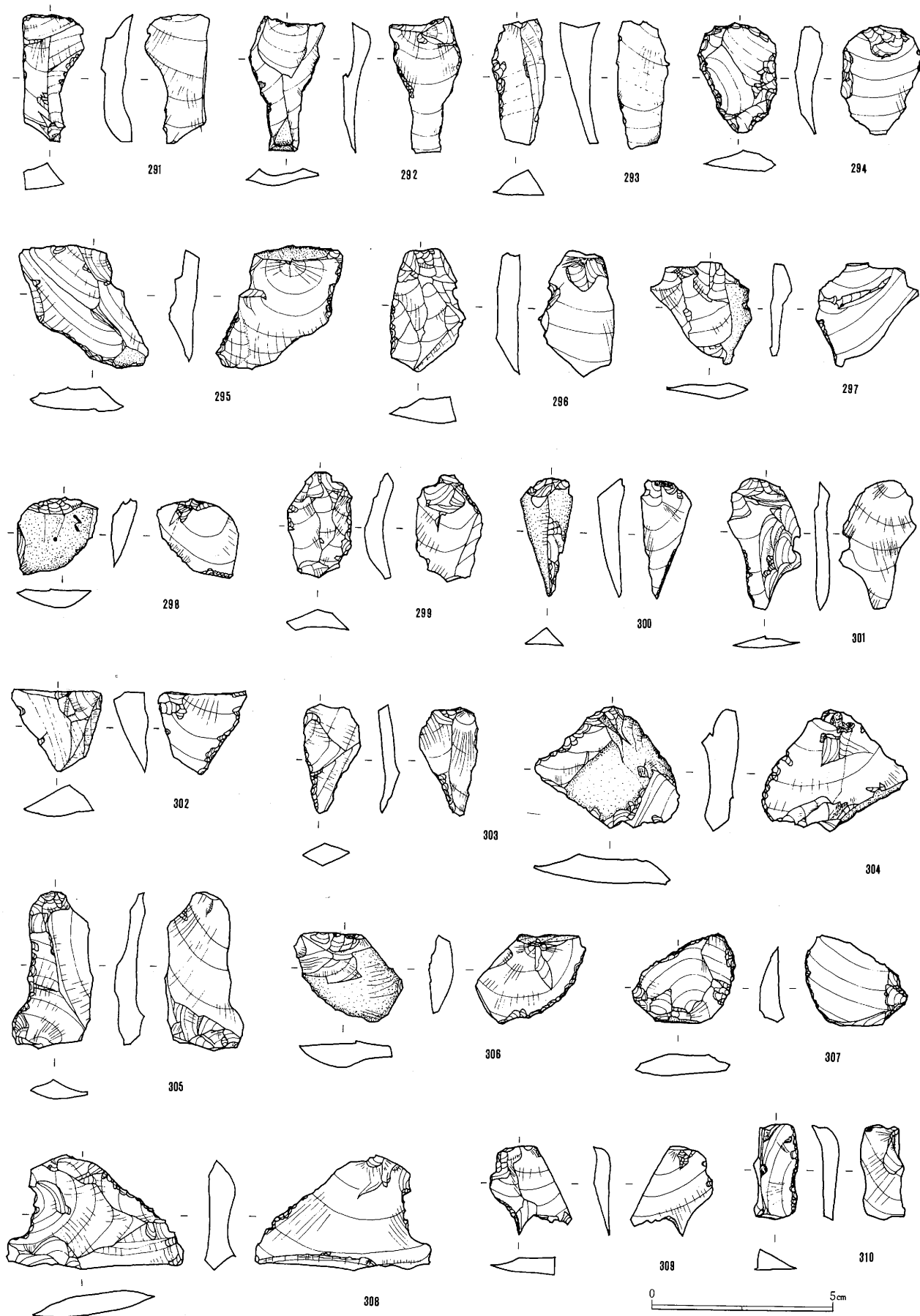


图101 大洞遗迹遺構外出土石器実測图8 (2:3)

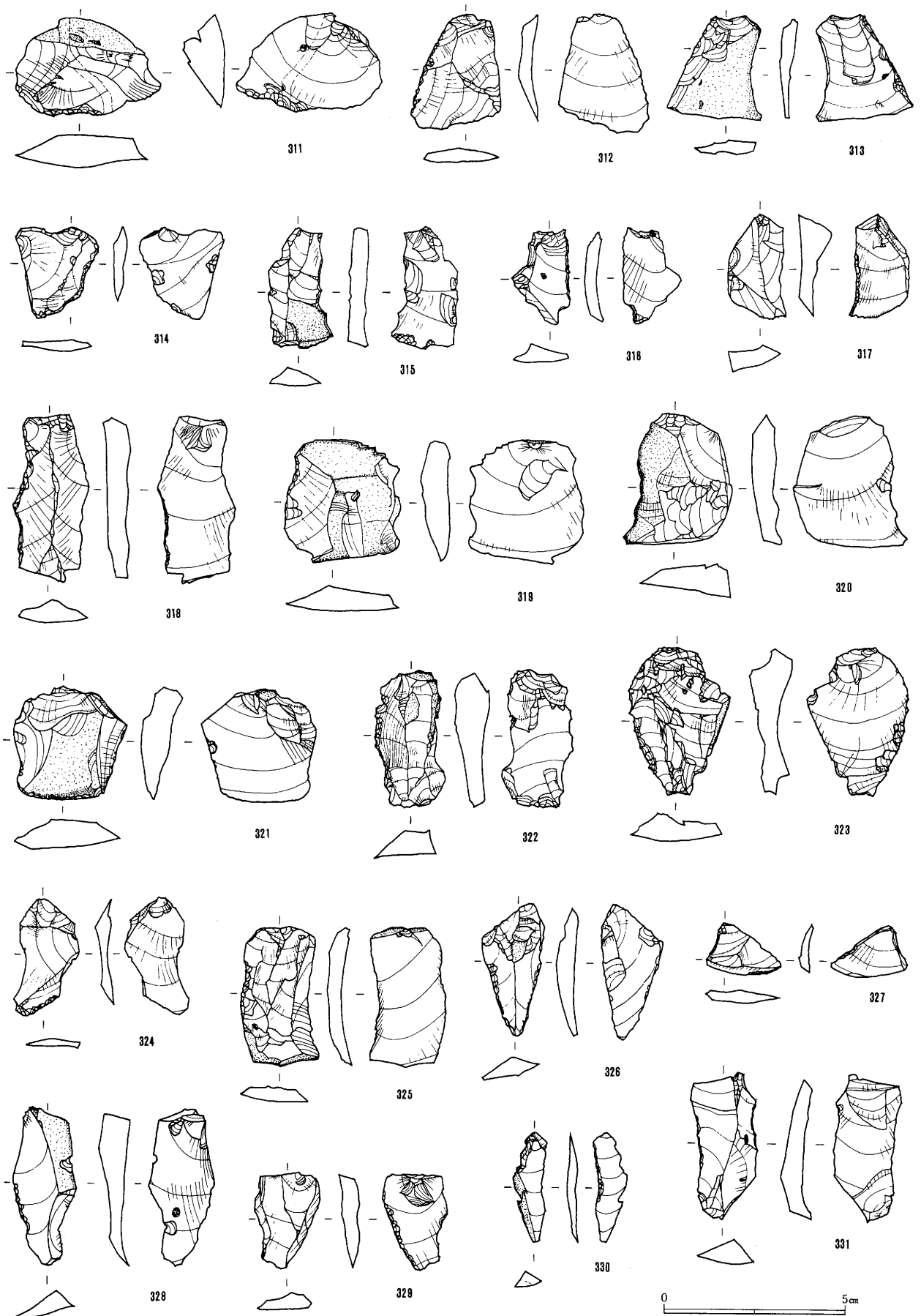


图102 大洞遗址遗构外出土石器实测图9 (2:3)

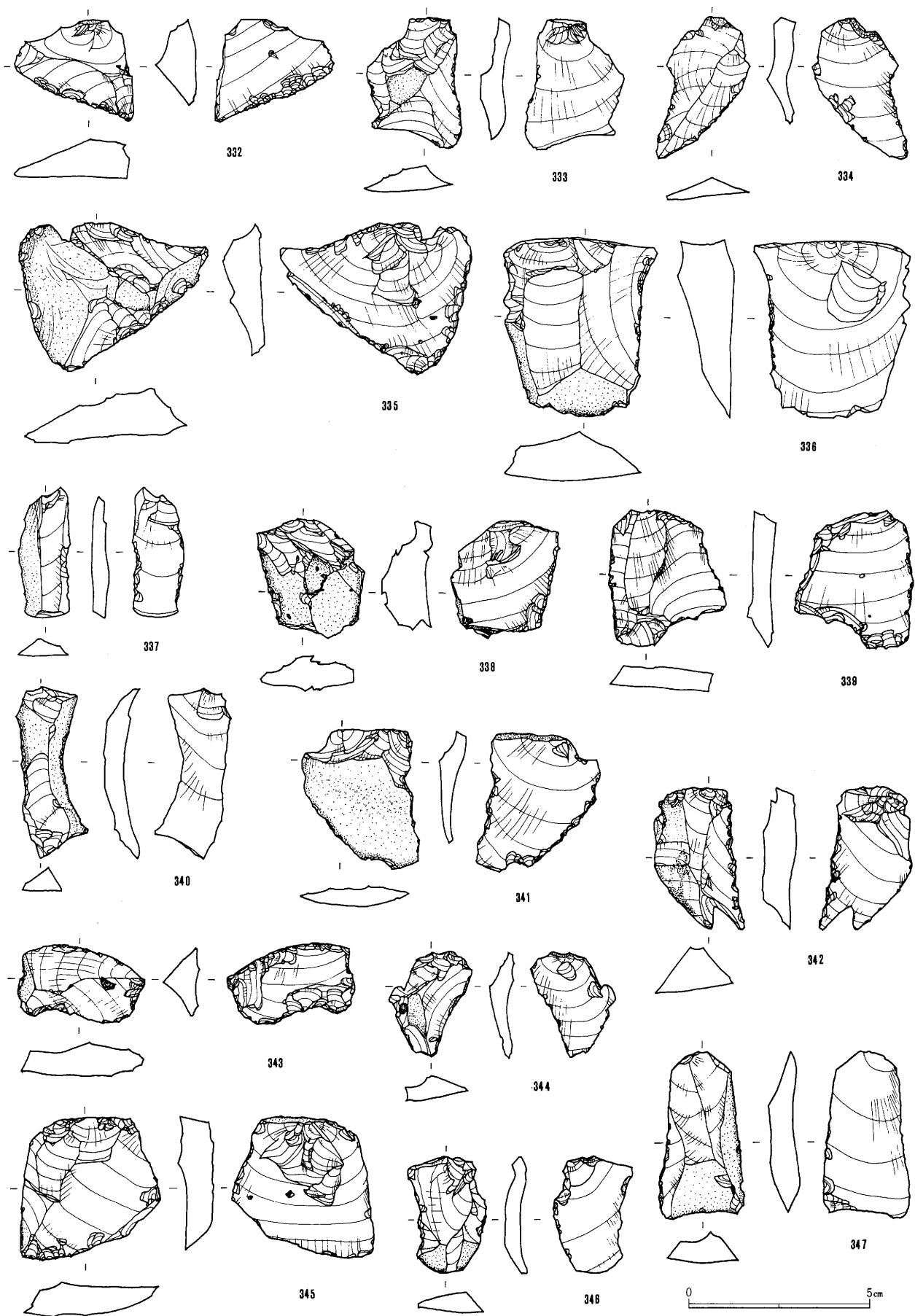


图103 大洞遗址遗构外出土石器实测图10 (2 : 3)

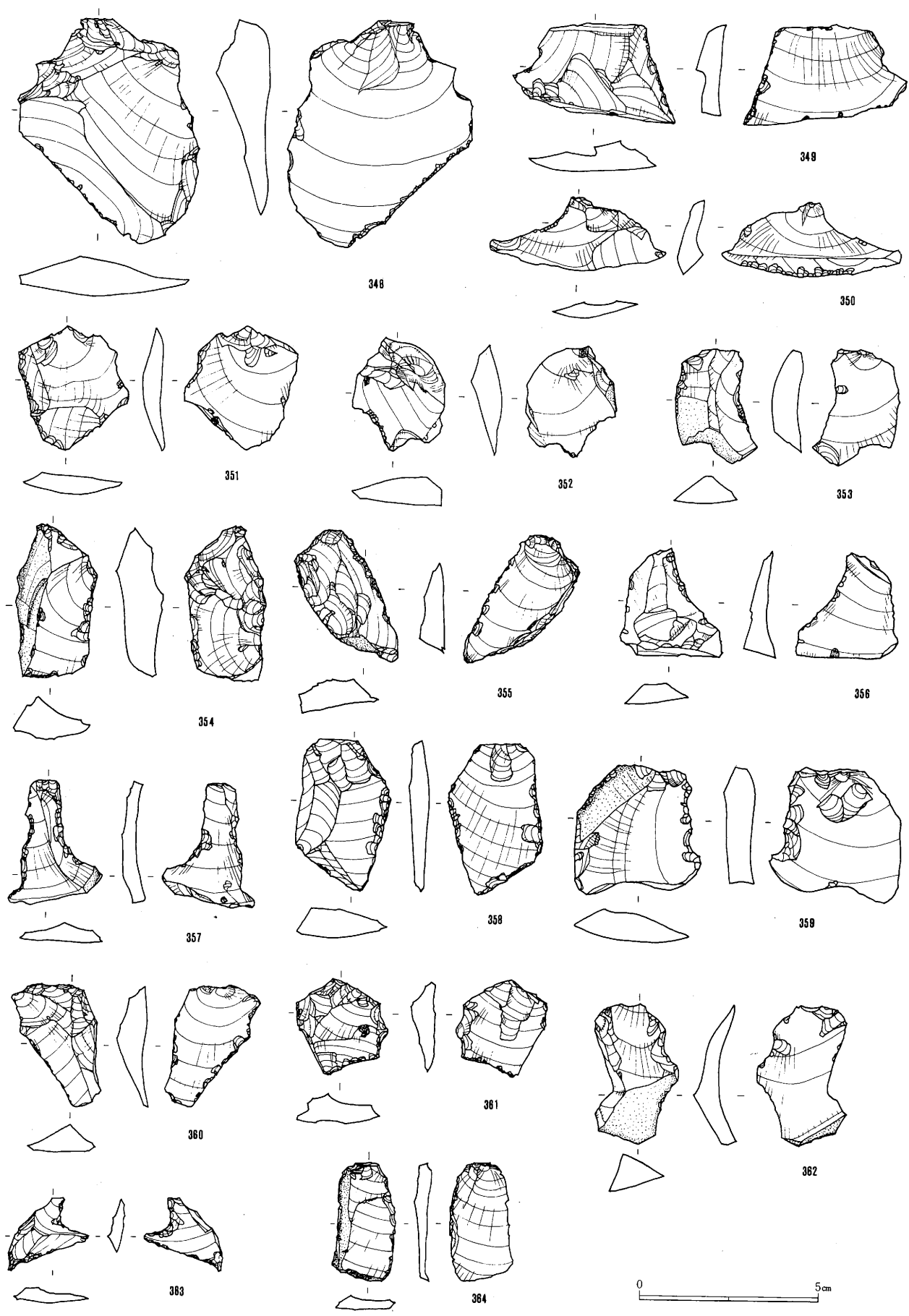


图104 大洞遺跡遺構外出土石器実測图11 (2 : 3)

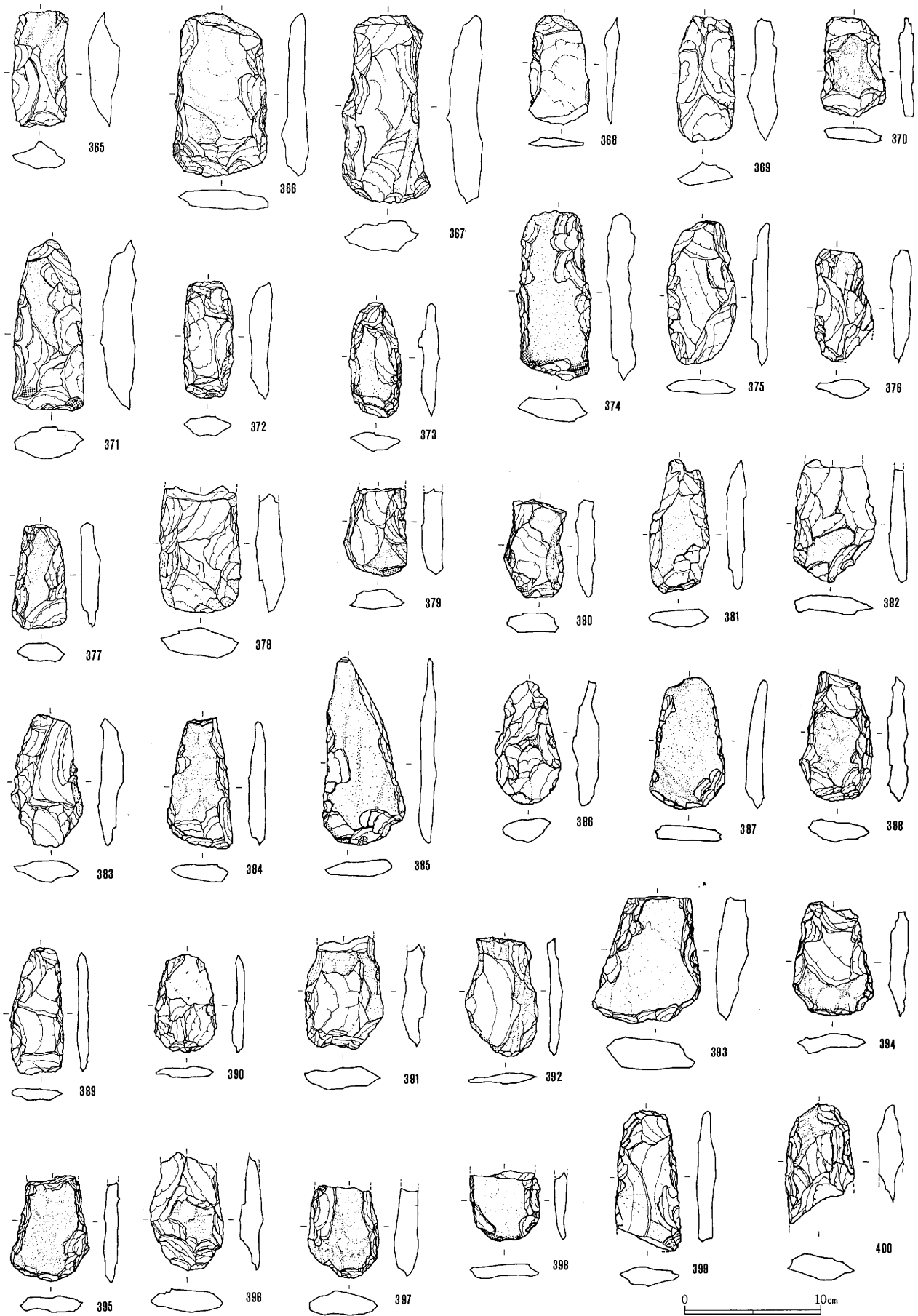


图105 大洞遗迹遺構外出土石器実測图12 (1 : 4)

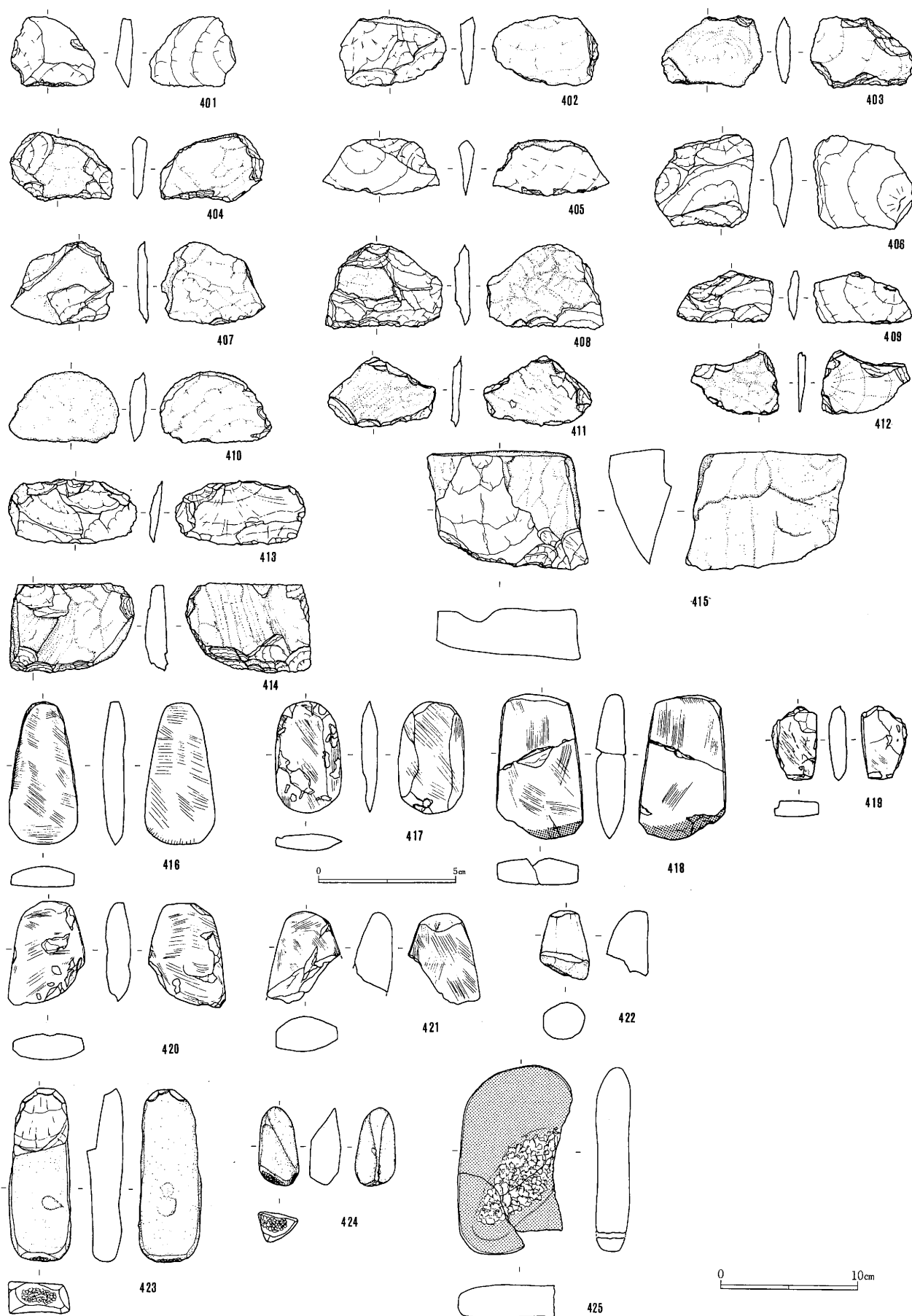


图106 大洞遗址遺構外出土石器实测图13 (401~415, 418~425 1 : 4、416, 417 1 : 2)



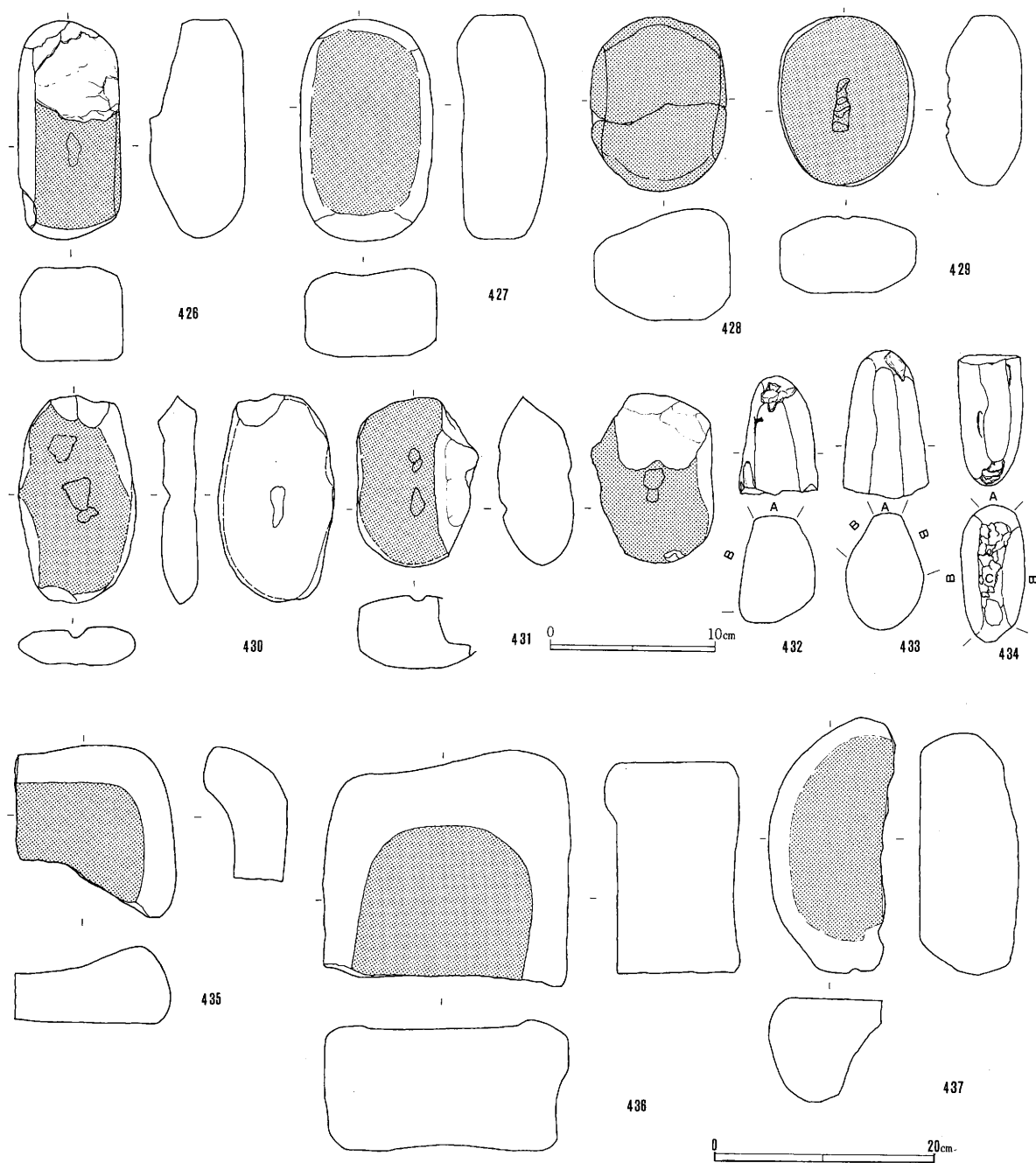


図107 大洞遺跡遺構外出土石器実測図14 (426~434 1 : 4、 435~437 1 : 6)

図94~図107の遺構外出土石器の層位別出土状況は次の通りである。

I層—104、126、128、141、149、171~173、187、195、196、212、252、257、267、291~293、332、365~368、401、402、424、436

III層—90、98、106、107、111、129、130、132、150、151、157、166、174、175、198、200、201、226、228、246、259、263、266、278、294~296、333、378、379、383、391、403

IV a層—89、91、92、99、108~110、112、113、131、144、153、158、161、167、176、177、194、199、202、207、210、211、214~217、227、235、238、239、243、251、258、261、262、265、268、269、275、280、282、288、290、297~300、326、334~337、369~372、380、385、386、392、393、397、398、404~407、414、416、418、422、425、431、432

IV b層—88、93～97、100～103、105、114～125、127、133～140、142、143、145～148、152、154～156、159、160、162～165、168～170、178～186、188～193、197、203～206、208、209、213、218～225、229～234、236、237、240～242、244、245、247～250、253～256、260、264、270～274、276、277、279、281、284～287、289、301～325、327～331、338～364、373～377、381、382、384、387～390、394～396、399、400、408～413、415、417、419～421、423、426～430、433～435、437

は碎片である。291～364は小剥離痕のある剥片で、291～331は1類、332～364は2類である。

365～400は打製石斧で、365～377は短冊形の完形品、378～382はその破損品、383～390は撥形の完形品、391～397はその破損品で、398～400は形状不明である。401～415は横刃形石器、416～422は磨製石斧で、422が乳棒状、他は定角式である。423～425は敲石で、425は台石として用いられたと思われる。426～434は磨石・凹石で、426～428は磨石、429～431は磨石と凹石併用のもの、432～434は特殊磨石である。435～437は石皿である。以上の中で、接合関係にあるものは418が3 m程離れて、425が4 mほどはなれて、428が14 mほど離れて接合している。

(ウ) 石製品、土製品 (図108)

438は南向斜面中央部IV b層中から出土し、蛇紋岩製で剣形をなし、中央に鎬状の稜がある。両側縁には刃部の作り出しはなく、片端に両側から穿孔された穴があり、「石製垂れ飾り」とした。両面ともよく研磨調整されている。

439は南向斜面中央南端IV a層中から出土した。長方形をなし、周りはずかずに研磨され、両極に抉りを持つ土器片錘である。

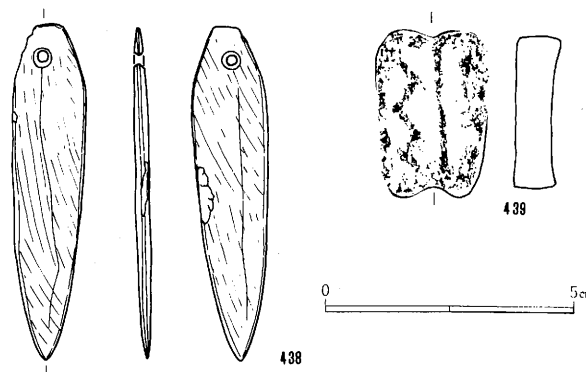


図108 大洞遺跡遺構外出土石製品  
及び土製品実測図・拓影 (2 : 3)

② 遺構及び遺物の様相と分類

ア 遺構群の様相

前述してきたように、調査の結果、住居址3軒、土壇13基、集石炉5基、ブロック7ヶ所、焼土址の各遺構が発見された。各遺構の類似点と相異点について述べたい。

〔住居址〕

3軒の住居址はいずれも斜面上に立地し、2、3号は切り合って斜面中腹に、1号は20mほど離れて斜面下位に位置する。3号は上面に焼土があり、出土遺物にも混在が見られるが、床面近くのもの1号と同じ時期であり、また2号に切られていることから、1号と同時期ととらえられる。

1号と3号を比較すると、平面形はどちらも隅丸方形状を呈するが、規模が大きく違う。3号は1号の4～5倍の床面積を持つ。炉はどちらも地床炉であり明確でない。柱穴、床面構築の様相は大きく異っていて、1号には柱穴とされる大形ピットはなく、床面及び壁面に小ピットが多数存在するが、3号は掘り方のしっかりしたピットが配列よく穿たれている。床面構築では、1号は素掘りしたその面を床面としているが、3号の場合は30～40cmの盛土をして床面の構築をしている。3号の方がより急斜面に位置するためとも思われるが、しっかりした床構築という点からは大きな違いがある。柱穴・床面のこうした違いは、当然上屋構造及び耐久年数の違いとしてあらわれると考えられ、3号は1号に比べてよりしっかり建てられた家とすることができよう。1号と3号は出土土器からみて同時期であり、立地等からも同時併存

の可能性が高い中で、こうした違いのある点は注意される。

一方、一時期新しい2号は、3号の上に構築され、1号とほぼ同じ構造を示す。そして同様な斜面にもかかわらず、3号のような床構築はない。

#### 〔土壌〕

13基発見されたが、2号は風倒木跡の可能性が高い。確実に土壌と考えられる12基の位置関係をみると、1、3、4、6号が斜面下、溝状地形に沿ってあり、5、7、8、9、10、11、12号が1号住居址と2・3号住居址との間にあり、13号が2号住居址と切り合っている。覆土中の遺物等からみると、10号が押型文土器期、13号が諸磯c式土器期、4、7号が第I群土器期、5、6、8、9、11、12が第IV群土器期、1号が晩期に比定できそうである。3号については出土土器が上面であるため確定できない。各土壌から機能・用途を類推できるような状況は認められていない。

#### 〔集石炉〕

5基発見されたが、うち1号は谷底部東端に位置し、他は南向斜面の1号住居址と2・3号住居址との間に逆L字状に配置する。いずれも掘り方をもって集石があり、内部には焼土もしくは炭が入っている。この中で、1、2、3、4号は底に敷石を持つ。また2、3、4号は底までぎっしりと石が入るが、1、5号は間層が入る。焼土・炭の入り方では2、3、5号は両者をもち、1、4号は炭だけである。5基の集石炉の時期は、3、5号が出土土器から第IV群土器期ととらえられるが、両者の<sup>14</sup>C年代測定結果は700年ほどのへだたりがある。ただ5号は8、9号土壌と切り合っており、当初からわかりにくい遺構であったため、出土土器の帰属が確実とはいえない面もある。1、2、4号は出土遺物が皆無に等しく時期の限定はできないが、<sup>14</sup>C年代測定結果からは、4号が早期に、2号が3号と同時期といえそうである。実際2号と3号はその規模・構造が類似しており、同時期の可能性が高い。

#### 〔ブロック〕

本遺跡でのブロックとは黒曜石の集中するもので、7ヶ所確認した。いずれもIVb層中にあり、1号住居址と2・3号住居址との間の土壌・集石炉の西側に弧状に分布する。1、2、5、7号は黒曜石原石が積み重ねられた形状で、3号は同原石が1m範囲にちらばり、4、6号は小剥片が集中する例である。いずれも屋外にあって、掘り方は確認できていない。また、時期的な帰属もむずかしいが、出土層位から、前期末から中期初頭と考えられよう。

以上の状況から時期別の遺構数を概観すると、早期押型文土器期に土壌1基・(集石炉1基)、前期諸磯c式土器期に土壌1基、前期末第I群土器期に住居址2軒・土壌2基(集石炉1基、ブロック)、中期初頭第IV群土器期に住居址1軒・土壌6基・集石炉2+(1)基・(ブロック)、晩期に土壌1基となり、前期末から中期初頭にかけてのみ遺構が多く存在する。

こうした変遷の中でその配置関係をみると、早期から中期初頭までは南向斜面をその中心として各遺構が存在し、晩期には東端にわずかに存在しているだけという状況にある。また、前期末～中期初頭になると、遺構数の増加と相俟って、南向斜面全体に広がっている。

#### イ 縄文時代前期末～中期初頭土器の分類と検討

##### (ア) 分類の基準

本遺跡は先に述べたように発見された遺構や多くの土器とその型式から、少なくとも長期的に営まれた大きな集落ではなく、ごく短期間のうちに営まれた小さな集落であることに間違いはない。その短期間というのが、縄文時代前期末～中期初頭のしかもその前半期を指すのであるが、遺跡の規模に比し、その出土資料の数はおびただしい。型式名でいうなら、前期末の晴ヶ峰式、十三菩提式に比定される一群や、中期初頭の梨久保式に相当する一群であり、さらに外来系といわれる土器の多いことも本遺跡の特徴といえる。

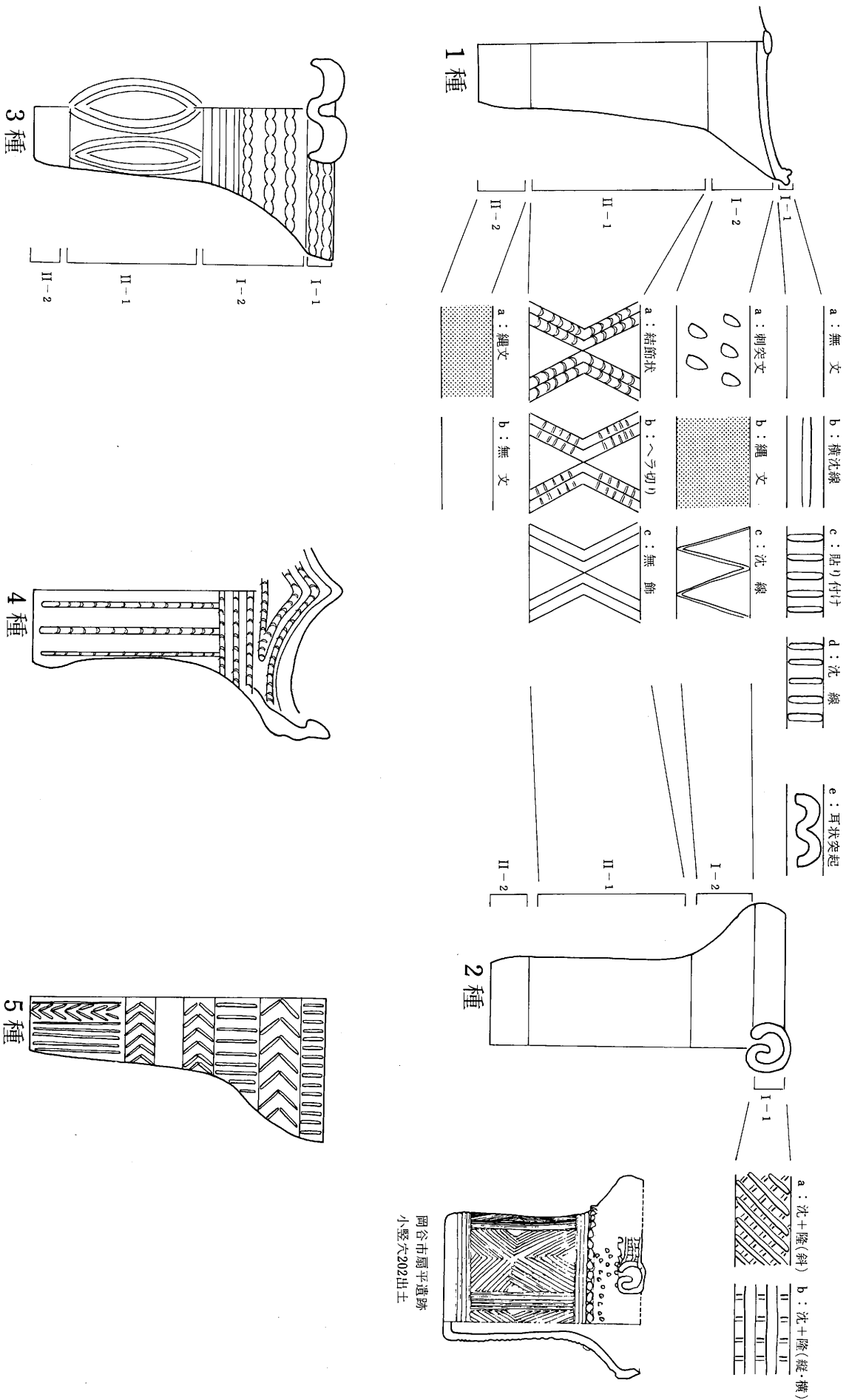
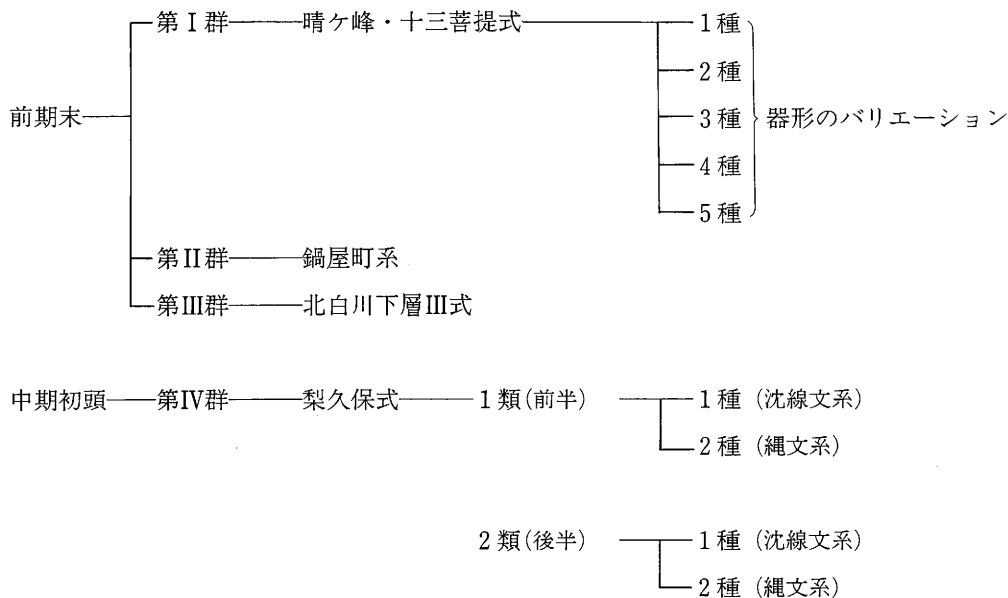


図109 縄文時代前期末～中期中頭第I群土器模式図

それは北陸の鍋屋町系、関西の北白川下層Ⅲ式を主体とするように、該期の標識的な土器群が一通り揃うという、土器研究上においても貴重な資料が提供されたのである。

さて、今その分類をするに当っては、本報告書の分類基準を前提として、遺構内外の資料を含め次のように整理した。まず、全体を大きく4群に分けた。Ⅰ群、Ⅱ群、Ⅲ群を前期末、Ⅳ群を中期初頭の土器とする。第Ⅰ群はいわゆる在地系の晴ヶ峰、十三菩提式土器を充てた。該期内での時期差については現在積極的に推すべき根拠がないため、細分はしない。しかし、その中の器形のバリエーションは豊富で、しかもそれが文様モチーフと緊密な関係に基づいて製作されていると思われたため、器形のバラエティーを種として認定し、5種に分けた。第Ⅱ群を、鍋屋町系土器、第Ⅲ群を北白川下層Ⅲ式土器としてくくった。中期初頭の土器の主体は梨久保式で第Ⅳ群とした。該期土器は大きくは前半と後半に分かれるため、その時期別を1類、2類とする。豊富な1類に対し、2類は極端に少ない。また、梨久保式土器には沈線文を主たる文様構成要素とする沈線文系土器(従来踊場式といわれていたもの)と、縄文を主たる文様構成要素とする縄文系土器という大きく2つの器種が、それぞれの系統をもって存在しているものとする(三上徹也1986)。従って、その各々を各類の中で種として認定した。

以上を要約すると、次のように整理できる。



この分類基準に従い、以下その内容について記述してゆきたい。

(イ) 第Ⅰ群土器 (図111~119)

諏訪盆地を中心とする中部地方では晴ヶ峰式土器〔戸沢充則・宮坂昭久1951〕とされ、関東地方では十三菩提式土器といわれる土器であるが、現在、必ずしもその型式内容が固まっているとはいえず、また両者の関係はあいまいである。近くでは岡谷市扇平遺跡に最もまとまった資料があり、その内容も具体的にようになってきている。〔会田進1974〕。本遺跡の資料はさらにその内容を充実させるものと考え、詳細に分類してみたい。

文様要素として、粘土紐の貼付文、刺突文、結節爪形文、縄文、半截竹管による半隆起線文等によって構成される該期土器は、そうした文様要素の組み合わせや施文部位が一定の器形や文様帯と非常に緊密な相関関係をもつことがわかった。その器形とは、主に深鉢形土器であるが、図109の模式図に示した通りである。従って種として分けた5種の器形に沿って説明したい。

1種 (図109)

器形は214の完形土器等からも分かるように、口頸部から上半はラッパ状に大きく外反し、口唇部が内側

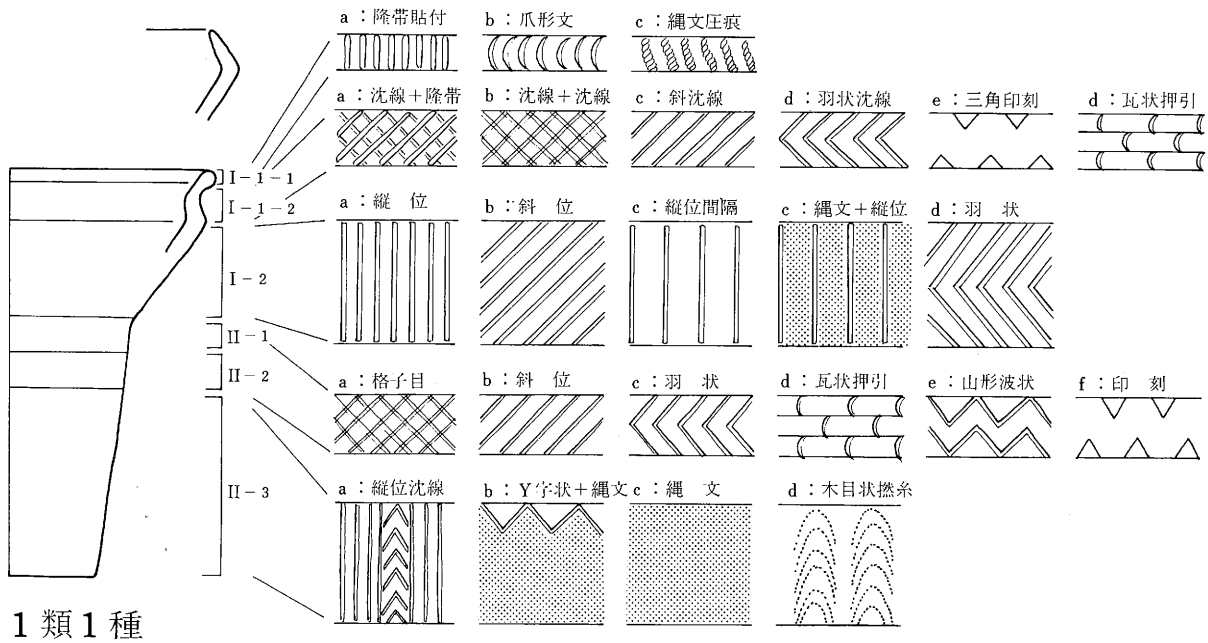


図110 縄文時代前期末～中期初頭第IV群土器模式図

に「く」字状に折れる口縁部形態をとり、口頸部以下の胴部は比較的直線的に底部に至るものである。この文様帯は頸部上半の口縁部である第I文様帯と、頸部以下胴部の第II文様帯に分けることができ、さらに第I文様帯は口唇部のI-1分帯とそれ以下のI-2分帯に、また、第II文様帯も文様帯区画位置により、II-1・II-2分帯にそれぞれ2分される。その各文様帯に施されるモチーフには一定の規範があり、それは以下の通りである。

〈第I文様帯〉

- ・ I-1分帯—— 大きく4つのパターンがある。aは無文で量的には多くない(216～225)。bは口縁に平行に一条の沈線文が走るがこれも決して多くない(214・226・227)。cは口縁に対し直交に棒状の短隆帯が貼付されるものである(233～252)。これに対しdはその棒状貼付のなされた部分が沈線によって表現されており(253～264)、cとdとは文様効果としては相似た様相を示すものの、ネガとポジが全く逆転した関係と捉えることができる。施文パターンとしては、このcとdがその大多数を占める。

以上が本文様帯における文様パターンであるが、この他に、以上の文様にかかわらず口縁部に「耳状の突起」がほぼ4単位の構成をもって配されることも特徴の1つとしてあげることができる(215・227～229)。

- ・ I-2分帯—— 3つのパターンが知られる。aは刺突列点文が雨だれの如く施されており、本文様帯ではこのパターンがほとんどといえる(214～280)。この刺突文は先端が楕円形ないし円形に作られた棒状工具によるもので、さらにその空間に三角印刻形のモチーフが組み込まれる場合もある(230～232・266・279・280)。bは縄文が施文されるのみで、ほとんどが単節のRLかLRと決まっている(281～292)。cは沈線文によるV字状のモチーフをもつものであるがその数は非常に少ない(293～296)。

この他に、ごく少量であるが、このI-2分帯自体のない例もある(297～299)。

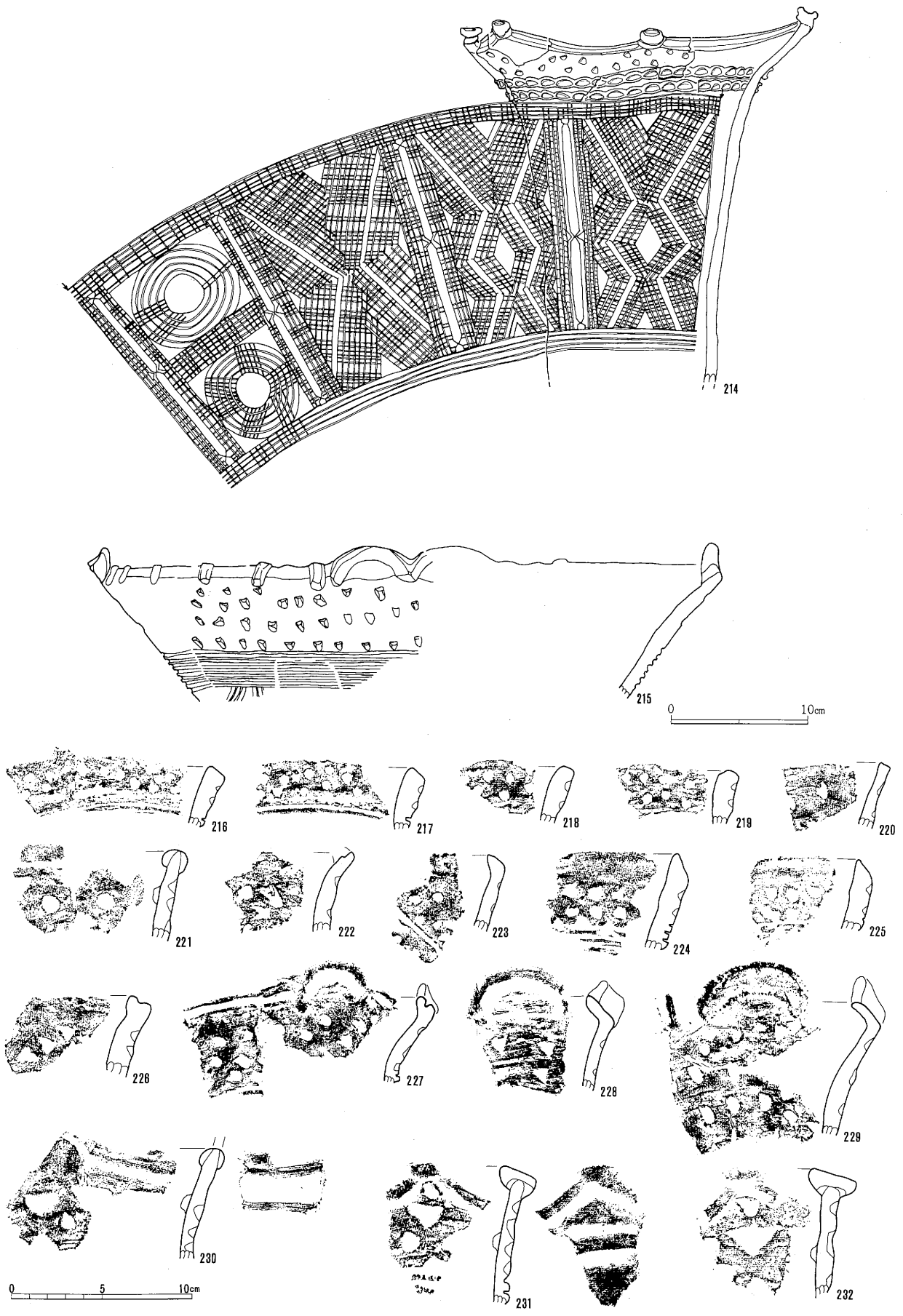


图111 大洞遺跡縄文時代前期末～中期初頭第I群土器実測図・拓影1 (214,215 1:4、216~232 1:3)



图112 大洞遺跡繩文時代前期末~中期初頭第I群土器拓影2 (1:3)



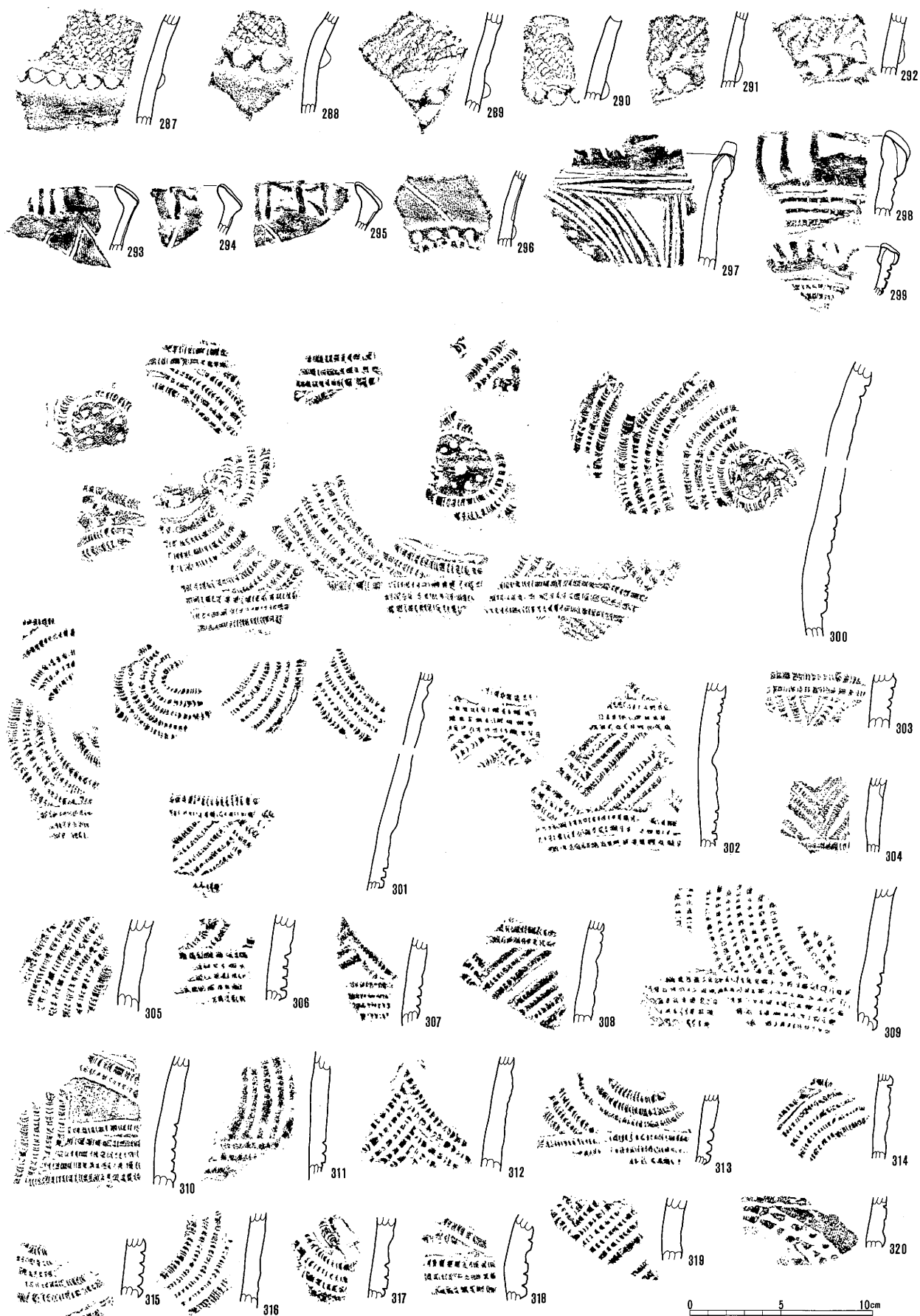


图113 大洞遺跡繩文時代前期末~中期初頭第I群土器拓影3 (1:3)

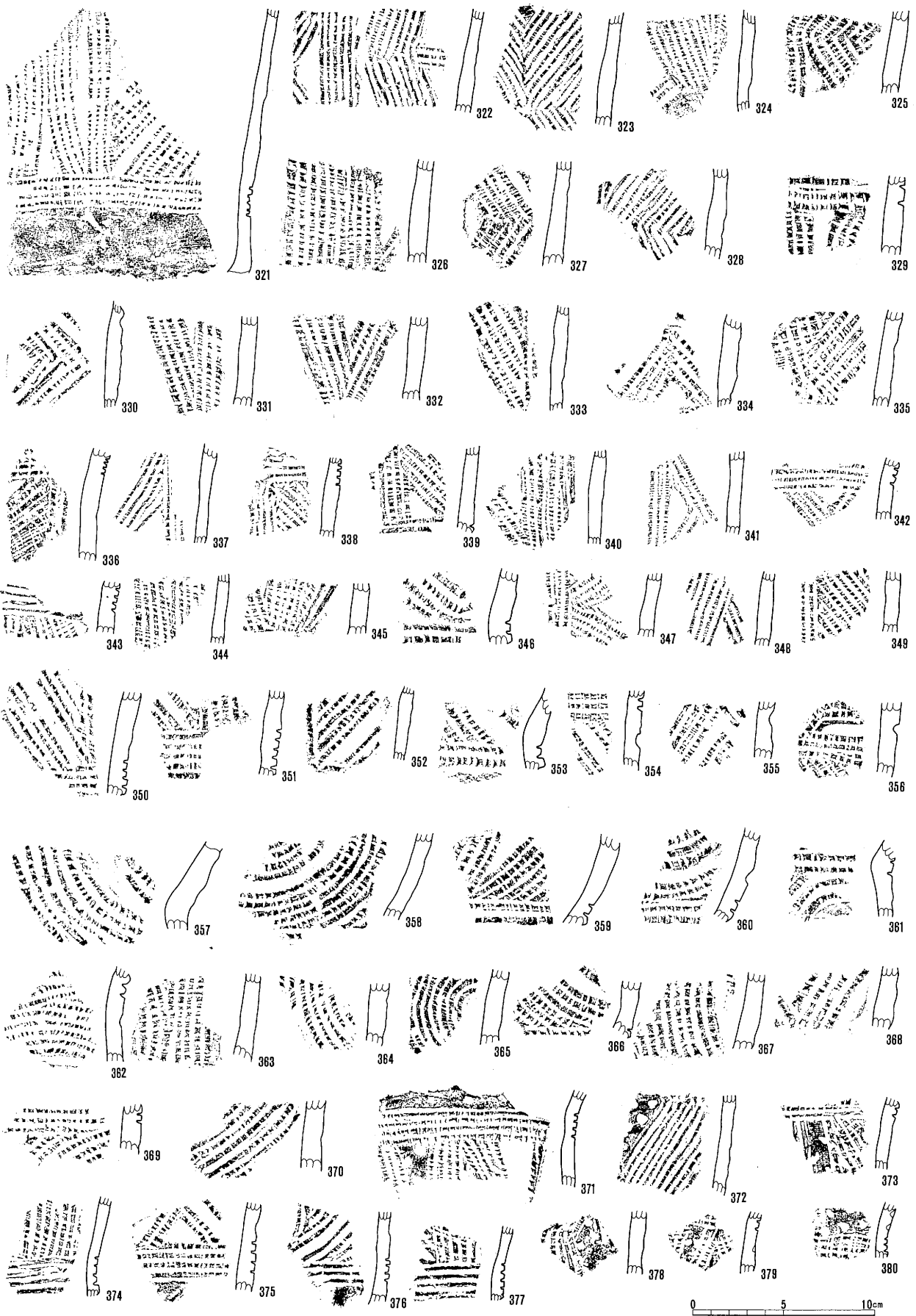


圖114 大洞遺跡繩文時代前期末~中期初頭第I群土器拓影4 (1:3)

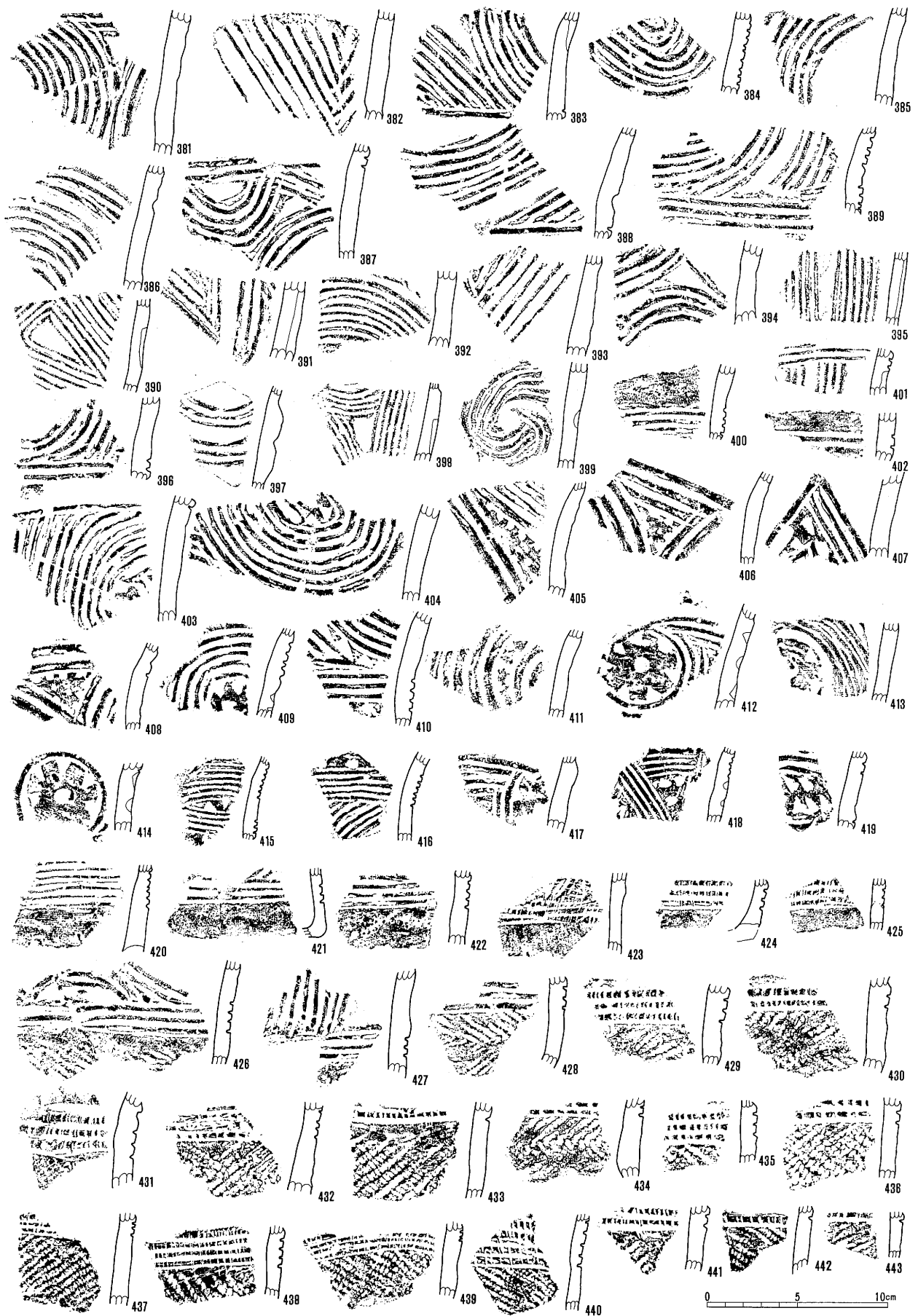


圖115 大洞遺跡繩文時代前期末~中期中頭第I群土器拓影5 (1:3)

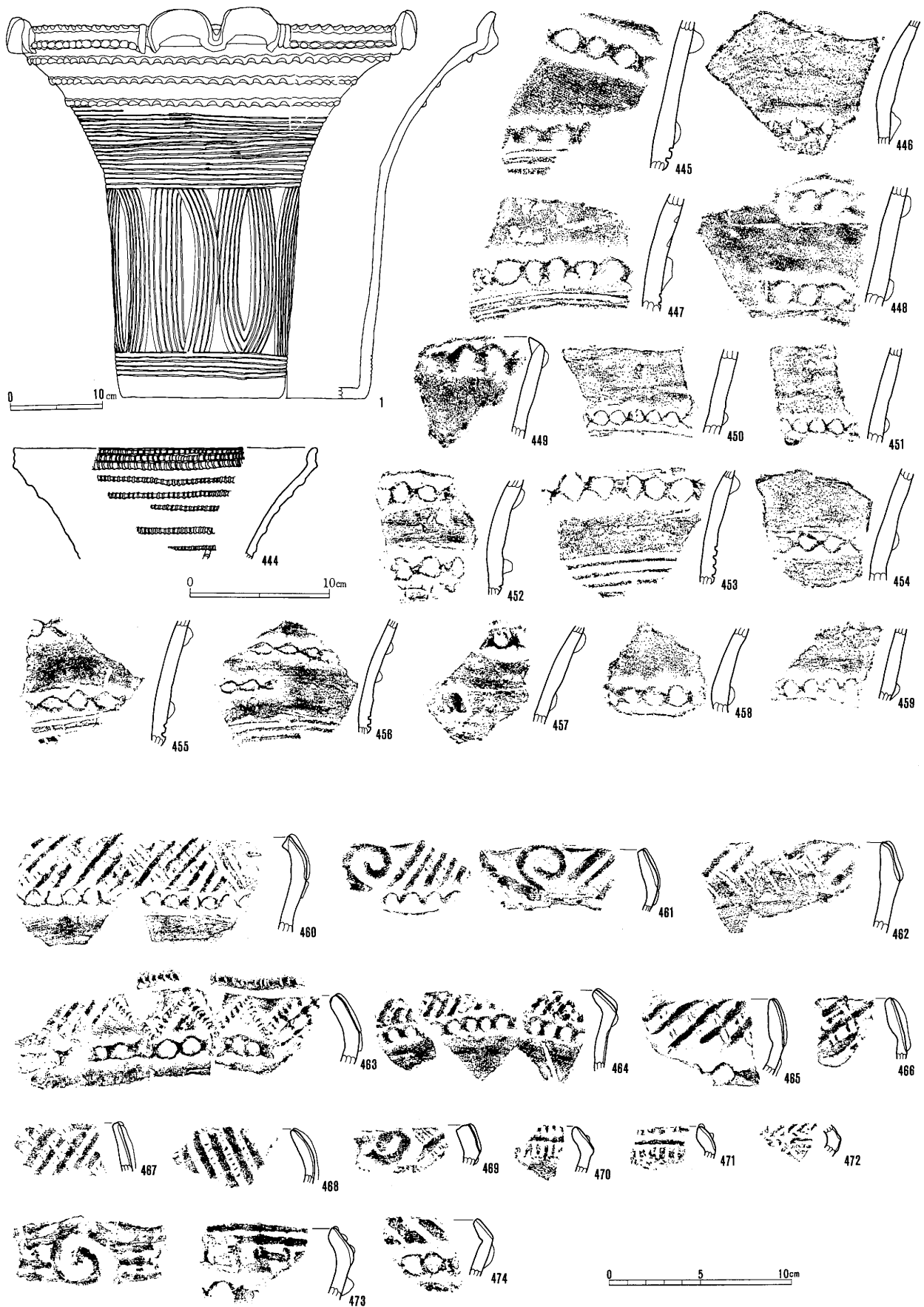


图116 大洞遺跡縄文時代前期末～中期初頭第I群土器実測図・拓影6

(1 1 : 6、444 1 : 4、445~474 1 : 3)

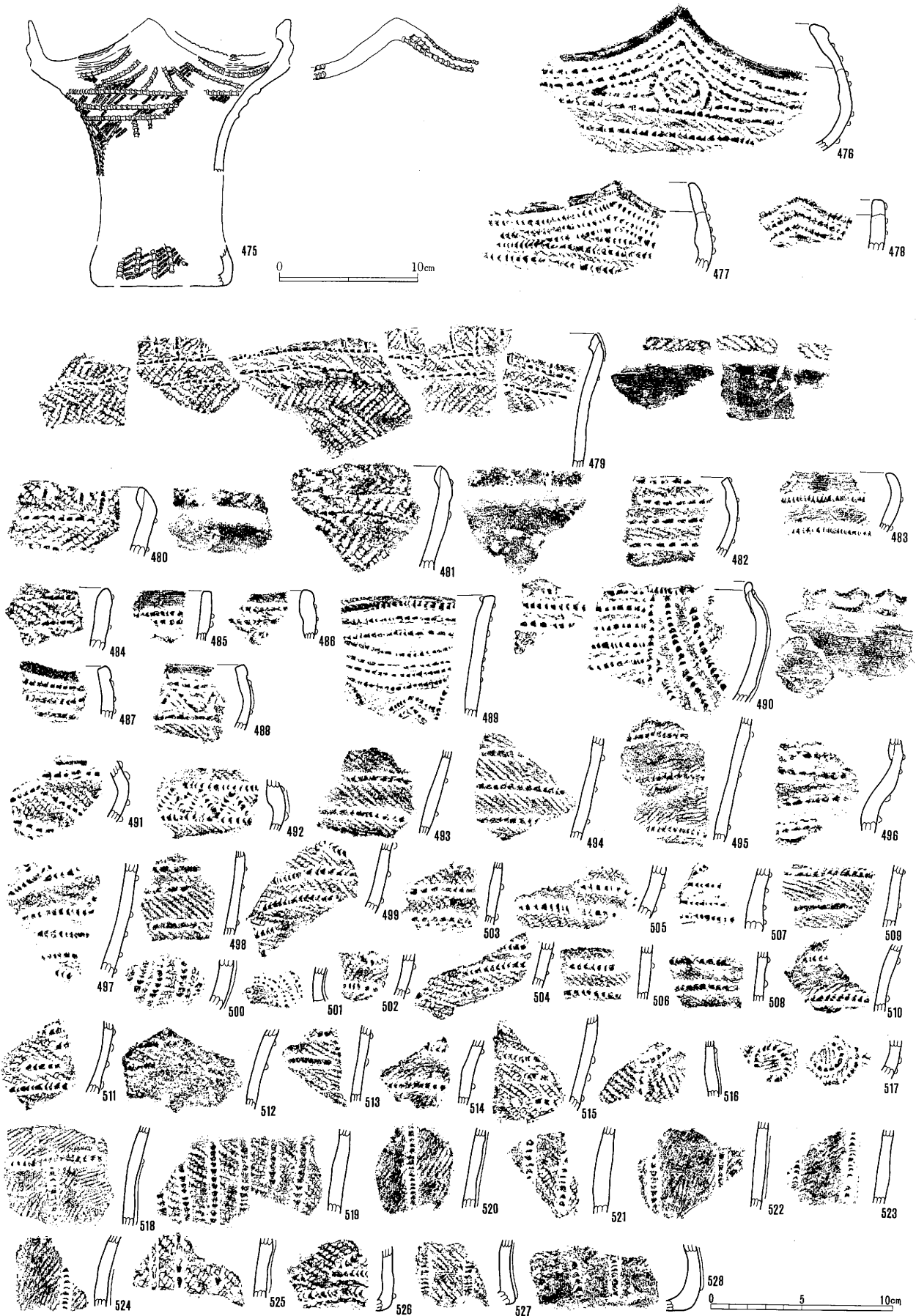
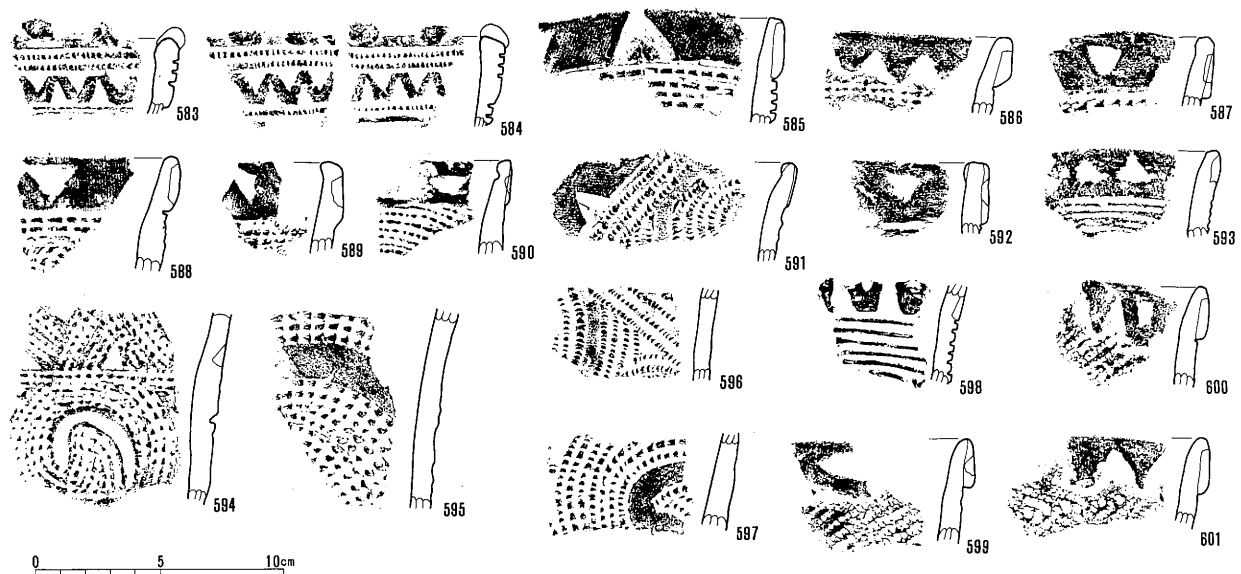
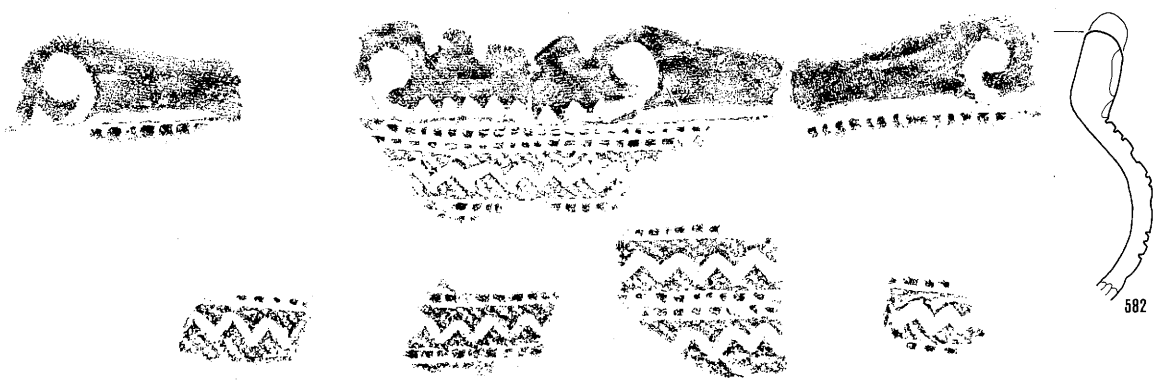
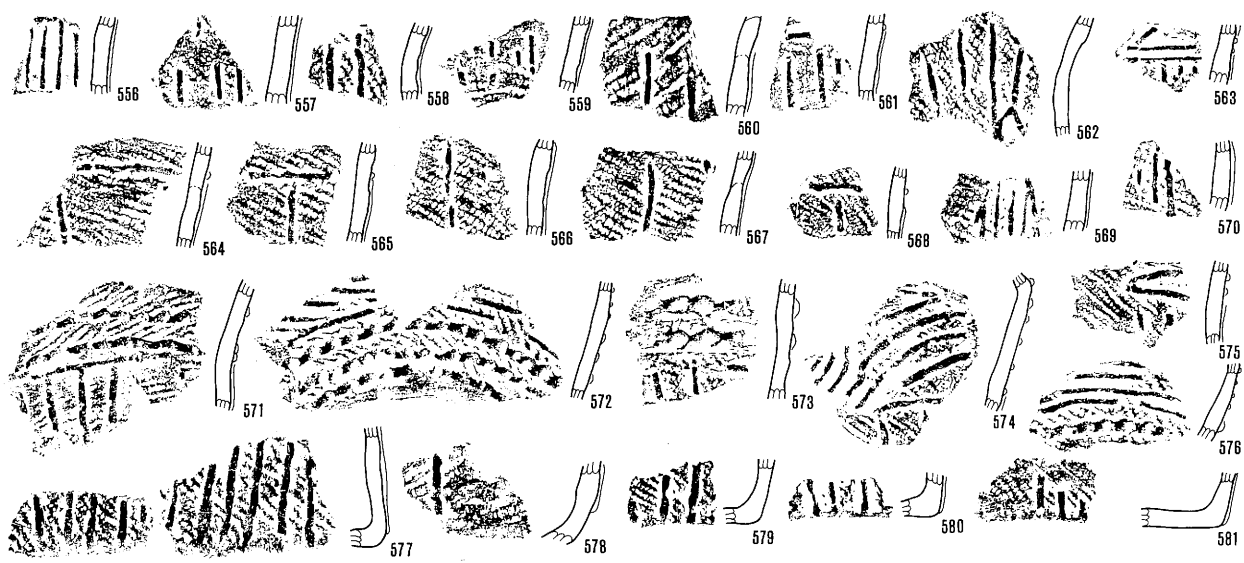


图117 大洞遺跡繩文時代前期末~中期初頭第I群土器実測図・拓影7 (475 1:4、476~528 1:3)



图118 大洞遺跡繩文時代前期末~中期初頭第I群土器実測図・拓影8 (529,530 1:4、531~555 1:3)



0 5 10cm

图119 大洞遺跡繩文時代前期末~中期初頭第I群・第II群土器拓影9 (1:3)

## 〈第II文様帯〉

- ・II—1分帯—— 本種の中で最も広い文様帯である。従って文様構成がバラエティーに富む。今回は文様表出技法によって3つのパターンを設定したが、まず文様構成について若干触れておきたい。その文様はいずれも、幅5mmの重層する平行沈線文により縦に等分割された器面に整然と描かれる。モチーフは214の完形土器から模式的に示すと図132の構成となる。大きくは直線と曲線によって表わされる。2段の円形となるもの、Vと逆Vが接合したもの、さらにそれが2段に構成されるもので、他の資料においても、大体は以上のようなパターンを示すことが知られる。さて、ここで分類の基準としたのが、こうしたモチーフに対する装飾文様の表現技法である。3つの場合がある。aは爪状工具による連続押引文である(300~320)。bはそれがヘラ切りによって行われ(321~380)、cは何も他の装飾が加わらないものである(381~419)。割的にはa、bが多く、中でもbの方が若干多い。また、a~cを通して、太い凹線文や、空白部にはI—2分帯のaとした刺突列点文や三角印刻文の入る場合も多い。
- ・II—2分帯—— 底部の文様帯で、a…縄文となるか(426~443)、b…無文であるか(420~425)のいずれかである。

以上が本種についての概観であるが、本群の中では本種の占める割合が最も高いことも付け加えておきたい。

### 2種(図109)

本種に属する完形の資料は残念ながら本遺跡中に見いだすことができなかった。しかし、その文様等から本種に最も近い資料が、岡谷市扇平遺跡小竪穴202号から出土した土器にあたると思われ、こうした例を参考に考えてみたい。

器形は、口頸部を境に大きく外反し、口縁上端で「く」字状に内折する。口頸部以下、胴部は直線的に底部に至る。文様帯も、この頸部を境にその上半の第I文様帯と下半の第II文様帯に区分することができ、さらに前者は屈折部分のI—1分帯とI—2分帯に、後者もII—1分帯、II—2分帯にそれぞれ2分される。前記した1種と器形上最も異なる点は、I—1分帯が広いことと、第II文様帯がやや短くなっている点、および平縁がその大半を占める点である。ただし、以下に述べる文様という点については類似点が多く、第I文様帯I—1分帯の文様の相異が両者の最大の違いとなる。

## 〈第I文様帯〉

- ・I—1分帯—— 2つのパターンにまとめられる。aは、まず斜位の沈線文が施された上に、それに直交する形で、粘土紐による貼付がなされる例である(460~469)。これに対してbは、口縁に対し直交、すなわち、縦位に沈線文が描かれ、その上に1条ないしは2条の粘土紐が横方向に貼付されるものである(470~473)。また、4単位に渦巻文のもたれたことも一般的な様相であったと推測される。

ここにみられるモチーフは、1種にはなかった本種独自のモチーフとして注目しなければならない。

さて、以下の文様帯の文様については、確かに本種のものだとする資料の提示は困難である。それは扇平遺跡の前記資料から想定されるように、先の1種土器とほとんど変わらない様相を呈していたと考えられるからである。逆に、1種の中には本種に属する資料が含まれている可能性があるということにもなる。従ってここでは、1種、2種の別を、口縁部形態I—1分帯の文様の違いとして理解しておくことにした



い。

### 3種 (図109)

1に示した完形土器に代表される。器形という点でいうと、2種に類似するが、口縁部の外反が広くかつきつく作られ、また、胴部も長くスマートである。文様帯のとり方は全く同じであるが、特に第I文様帯の文様が大きく異なる。I—1分帯には指頭状圧痕を伴う隆帯文が2条前後横走する。そして、ほぼ4単位に「耳状の突起」が配される。これは1種と共通する。I—2分帯も同じで、指頭状圧痕のある横走隆帯が等間隔に配される(444~459)。第II文様帯については、1の資料から、木の葉文的なモチーフが横に連続するものが考えられるが、1種と同様のモチーフのあったことも想定される。しかし、その装飾に関しては、爪形や、へら切りの施される例は少なく、素文のままであったものが大半ではなかったかと考えられる。いずれにしろ、本種はその器形と指頭状圧痕を伴う隆帯文によって個性的な一群とまとめることができる。

### 4種 (図109)

本種と次の5種は、1~3種との器形上の相違もさることながら、器面全面に地文として縄文が施されるという点において決定的に異なる。本種と5種はその点では共通するが、器形が異なるものである。

本種の形状は475に代表されるように、基本的に4単位の波状口縁になるものをまとめた。口縁部は外反し、頸部以下底部にかけては胴部は内反り気味に湾曲し、底部が若干張り出すものである。文様帯は頸部より上の第I文様帯と下の第II文様帯に分かれる。文様は、いずれも細い粘土紐を貼付することのみによって表現される。そしてその際、粘土紐上にさらに爪形文の連続施文をするもの(結節状浮線文)と、素文との2通りがある。

さて、その第I文様帯であるが、口縁の波頂部を中心として、三角形ないしは波状に幾条かの粘土紐が貼付される。爪形文を伴う例が475~478で、素文の例が547~555である。なお、口唇部内側にも幅1~2cmに縄文が施され、粘土紐の貼付されるものもある(547)。

第II文様帯は、ほとんど等間隔に垂下する粘土紐が貼付される。やはり爪形文を伴う例が491~528で、素文の例が530・556~581である。

### 5種 (図109)

資料的には少ない。529が唯一その形状を知り得る資料である。器形は頸部上半が湾曲しながら外反し、頸部以下は、底部に向かって比較的ストレートに集約する。文様帯はやはりこの頸部を境として、第I、第II文様帯とに分かれるが、さらにこの文様帯内が横に幾段かに細かく分帯されることを特徴とする。その第I文様帯については、1番上位の文様帯には、口縁に直交する形に縦位の粘土紐が貼付されることが一般的であったと思われる(531~536)。それ以下の各細分帯には、やはり縦位の貼付文、または羽状の貼付文ないし、山形波状の貼付文がある(537~546)。また、第II文様帯では、同じく羽状貼付文や縦位ないし、山形波状の貼付文がつけられていたらしいが、特に底部に近い最も広い文様帯では、器面を縦に分割するように何単位かの区画帯が入る。

さて、こうした本種に含まれる一群は、先にも記した様に決して多くはない。しかし、次の中期初頭の土器であるIV群との関係を知るうえで、極めて貴重な資料となり得ると考えたため、あえて本種を設定した次第である。

以上、本群の分類について述べてきた。本群中における時間的な差はほとんど検討しなかったが、その違いのある可能性がないわけではない。例えば、1種I—1分帯のc…貼り付け、d…沈線という違いは、同一の視覚的効果をあげながら、dの方がより簡単な作りとすることができる。また、II—1分帯の文様表現にしても、a…爪形の連続施文よりも、b…へら切り施文の方がはるかに簡便であるし、cは無文な

ので言うに及ばない。これらは「手抜き方向性」を考えると十分その変遷過程が推測できるのであるが、他の要素で目立って異なる部分もなく、また、それを積極的に推す根拠をもたない。同一時間内において、いわゆる粗製土器、精製土器の別があるように、簡単に作られた土器、丁寧に作られた土器の別があったことも可能性として予想される。従って、時間別の論拠の少ない現在は、とりあえず本種として一括したものは、同一時期内のバラエティーとして捉えておくことが無難ではないかと考えるのである。

(ウ) 第II群土器 (図119)

鍋屋町系といわれる土器(山口明1980)を一括した。口縁部では幅2cm程の肥厚帯をもつもの(585~593)、と、もたないものがあり、肥厚帯のあるものは、その部分に三角刻印文が施される。また、肥厚帯のないものも口縁直下に鋸歯状のベルトが横に巡り、同じ効果を出す(583~584)。胴部のモチーフは渦巻状に構成されるものがほとんどで、その表出方法に3通り程のバラエティーがある。結節浮線文によるもの(583~587・591・596)、結節沈線文によるもの(588~590・594・595・597)、櫛歯状工具による単なる沈線文によって表現される(592・593・598)三者である。この他に縄文が施文されるだけの粗製土器的な例もある(600~601)。

以上の他に上記の群別の当てはめにくかった一点の資料があり、それについて説明しておきたい。582がそれで、口縁部のみであるが、その下半は大きく膨らみ、上端では外反気味に立ち上がる。その立ち上がりの部分は厚く、また部分的に突起をもって作られる。ここは基本的には無文であるが、その突起部分に渦巻き沈線文が入る。口縁部下半は、横に3段程に区画され、その区画はいずれも地文に縄文が施され、その上に波状沈線文が描かれる。こうした特徴をもつ一群は少ないが、あるいは第I群土器の変形として、そこに含まれる可能性があることを示唆するにとどめておきたい。

(エ) 第III群土器 (図120)

第I群、第II群に比べその量は微々たるものであるが、625のように器形のわかる土器があり、量が少ないといえども、その性格を考え合わせると重要な位置を占めるといえる。

胎土は精選され良好で、径1mmほどの小石を多く混入させるものと、前者より小石が少なく等質の粘土でとろける感じのする(616、617)二者があり、前者が多い。色調は黄白色から黒褐色を呈し、器壁は薄くよく焼きしまっている。

器形のわかる例は625だけで、口縁から胴部にかけて四角形につくられる特徴をもち、口縁部には4つの突起があり、口縁は丸味をもって立ち上がる。胴部はそろばん玉状をなし、頸部のしまるキャリパー形の深鉢である。同様の器形の中には、口唇部が強く屈曲するもの(626、627)もある。これとは別に、602、605~609のような口縁部が斜めに立ち上がる例がある。これらは共通して口縁部内面に縄文帯及び浮線文をもっており、器形の違いを反映していると考えられる。また底部(624)は側縁に凹みをもつものもある。

文様は、いずれも地文がRLの縄文で、羽状縄文はない。地文の上には結節浮線文が施されるものが多く、中には粘土紐のみのもの(602、607、608)もある。結節浮線文は断面三角形状(619、620)と、かまぼこ状(604、618、625、626、627)になるものがあり、いずれも粘土紐より細い工具によって細かく刻まれ、両端の粘土が盛り上ったりする。613はΣ状加工の半截竹管による施文と思われ、他は逆C字状加工の半截竹管施文であろう。粘土紐のみのものは両側から撫でられて断面三角形状になる。こうした結節浮線文・粘土紐により、胴部は625等にあるように、重層するU字状や、その中を円形に配して飾られ、口縁外面はレンズ状に、突起部は重層する同心円状に飾られるようである。また、605、607、608は口唇部に2条の結節浮線文が密接して施文され、口唇部が断面四角形に仕上げられており、606、609は口唇部がへら状工具によって刻まれ、口唇部が肥厚する。前者は口縁部内側に幅0.6~0.8cmの縄文帯があり、さらにその下に結節浮線文をもつものもある。後者は肥厚部に縄文がめぐる。また602は、口縁部が肥厚し内側に縄文帯が

あり、更にその上を粘土紐で飾っている。

内面調整をみると、口縁部内面及び底部に爪形痕跡を残す数例(603、625～628)があるが、これらも胴部内面は他と同様、平滑に仕上げられている。

以上、第Ⅲ群土器に見られる諸特徴を記した。これらの土器群は胎土、色調等が、圧倒的量を占める第Ⅰ群、第Ⅳ群土器と明らかに違い、今までに言われてきたように在地のものでなく、搬入土器そのものとしてとらえることができる。それが、どこで製作されたかは不明だが、北白川小倉町遺跡出土の特殊突帯文土器〔梅原末治1935〕と類似し、今後比較検討していきたい点である。また、これらの土器群は、形式的に細分される可能性が指摘されている(註1)が、本遺跡の出土状況等からは不明である。時期的には第Ⅰ、Ⅱ群土器と共伴すると考えている。

#### (オ) 第Ⅳ群土器(図110、121～127)

基本的には半截竹管状工具による沈線文で描かれた幾何学的文様を構成する土器と、縄文や細線文等を主文様要素とする土器とのセットにより中期初頭土器は組成されているものと思われ〔三上1986〕、それを本群としてまとめた。前者はその特徴から沈線文系と略称でき、藤森栄一氏による踊場遺跡のB類土器はこれにあたる〔藤森栄一1934〕。一方、後者は縄文系といえる特徴をもち、梨久保遺跡における梨久保式土器設定時の主流を占めたものであった〔戸沢・宮坂1951〕。本稿では、前者を1種、後者を2種とした。また、両者は時間差を内包しており時間差について、前半を1類、後半を2類とした。以下、1類1種、1類2種、2類1種、2類2種の順で説明したい。

#### 1類

##### 1種

器形は、口頸部を境に口縁部が外反し、その上端で「く」字状に内側に折れる。さらにもう1度、小さく外に折れ曲がることも多い。頸部以下胴部は底部に向かって比較的ストレートに集約する。文様帯はやはりこの頸部を境に、その上半の第Ⅰ文様帯と下半の第Ⅱ文様帯に2分される。第Ⅰ文様帯はその上端のⅠ—1分帯とⅠ—2分帯に2分でき、Ⅰ—1分帯はさらに外反する部分のⅠ—1—1とⅠ—1—2に細分できる。第Ⅱ文様帯は横帯区画がほぼ3段と多段に行われるものと、細分の行われぬ二者が存在するが、記述の便宜上多段であるものを対象とし、単帯のものはⅡ—3分帯の中に入れて記すことにした。

#### 〈第Ⅰ文様帯〉

- ・Ⅰ—1—1分帯——この狭い文様帯にも3種類のモチーフが知られる。aは極めて細い粘土紐を口縁に直交する形で縦に施す(633・637・638)。bは半截竹管状工具による爪形文が連続的に施されるもので(652～667)、これが量的には最も多い。cは口唇部の外から内にかけて、縄紐が縦に連続して押圧される一群で(632・635・642～648)、節は非常に細かい。1本1本圧痕されたのか、あるいはコイル状に巻かれて施されたか不明であるが、後述するように本種のⅡ—3分帯には木目状擦糸文の施される場合もあり、これと同一の原体によって施された可能性も考えられる。なお、本文様帯が欠落する例も若干ある(649～651)。
- ・Ⅰ—1—2分帯——似た様な文様でありながらもそのバリエーションは多い。aは斜位の沈線文とそれに直交する隆線文により格子目状のモチーフとなるものである(629・632～636)。前記したⅠ群2種中にも同じモチーフが存在するが、それよりもはるかに線の細いことで両者は明確に区別される。bはaと同様のモチーフであるが、aにあった隆

(註1) 泉拓良氏より60年3月の研究会において、「北白川下層Ⅲ式」「大歳山式」の両者があると指摘された。

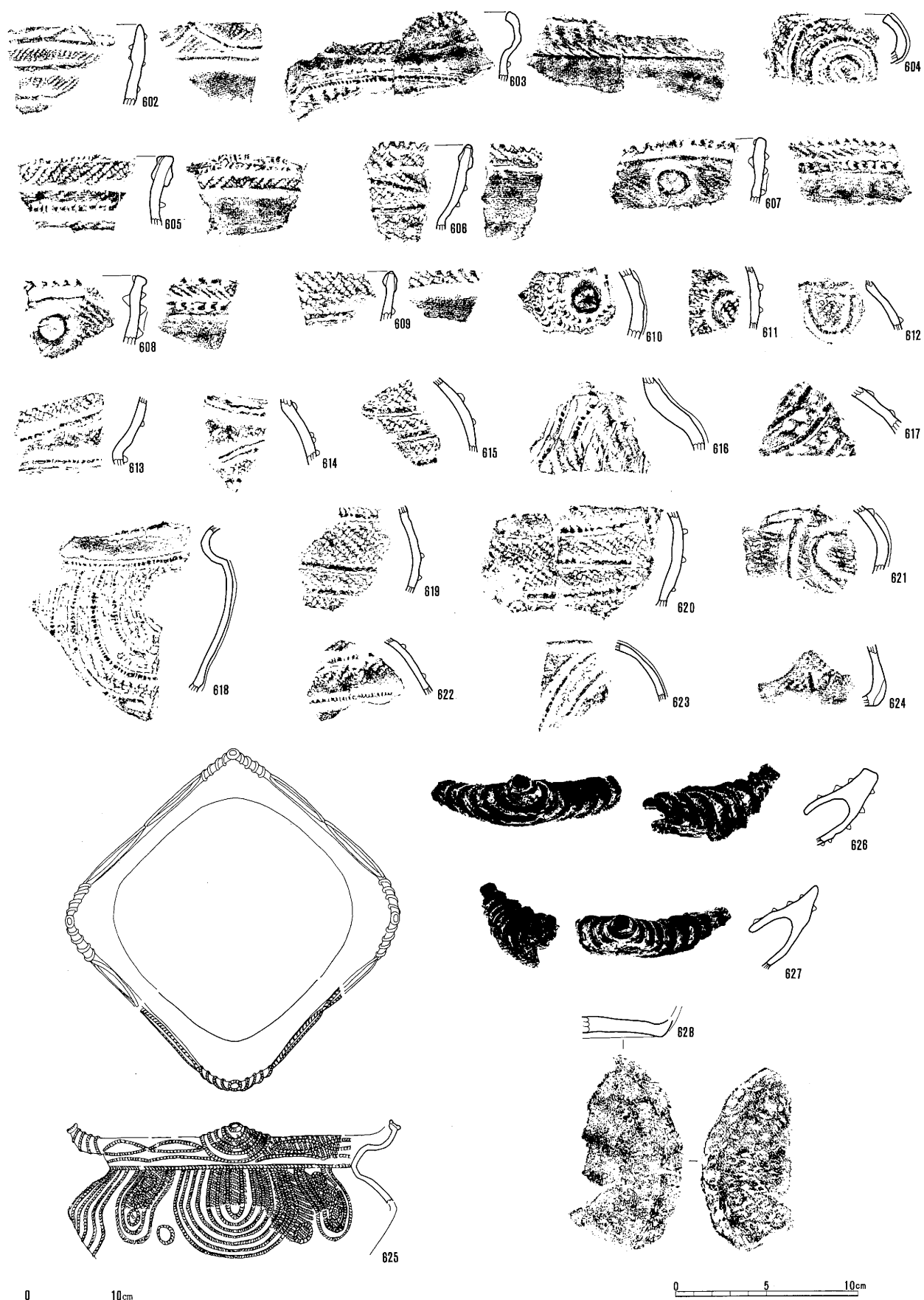


图120 大洞遺跡繩文時代前期末~中期初頭第Ⅲ群土器実測図・拓影

(625 1 : 6、602~624、626~628 1 : 3)

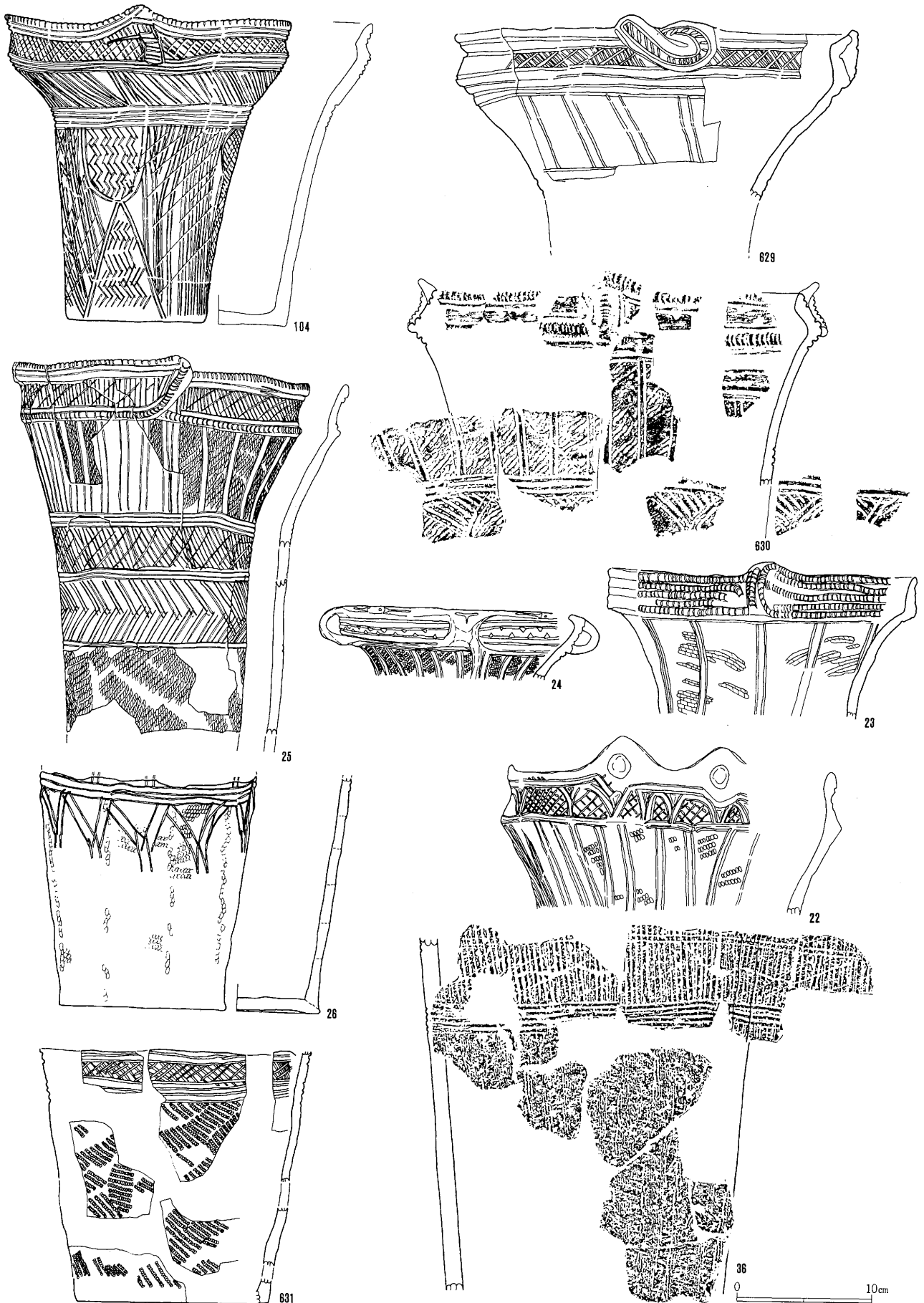


图121 大洞遺跡繩文時代前期末~中期初頭第IV群土器実測図1 (1:4)



圖122 大洞遺跡繩文時代前期末~中期初頭第IV群土器拓影2 (1:3)

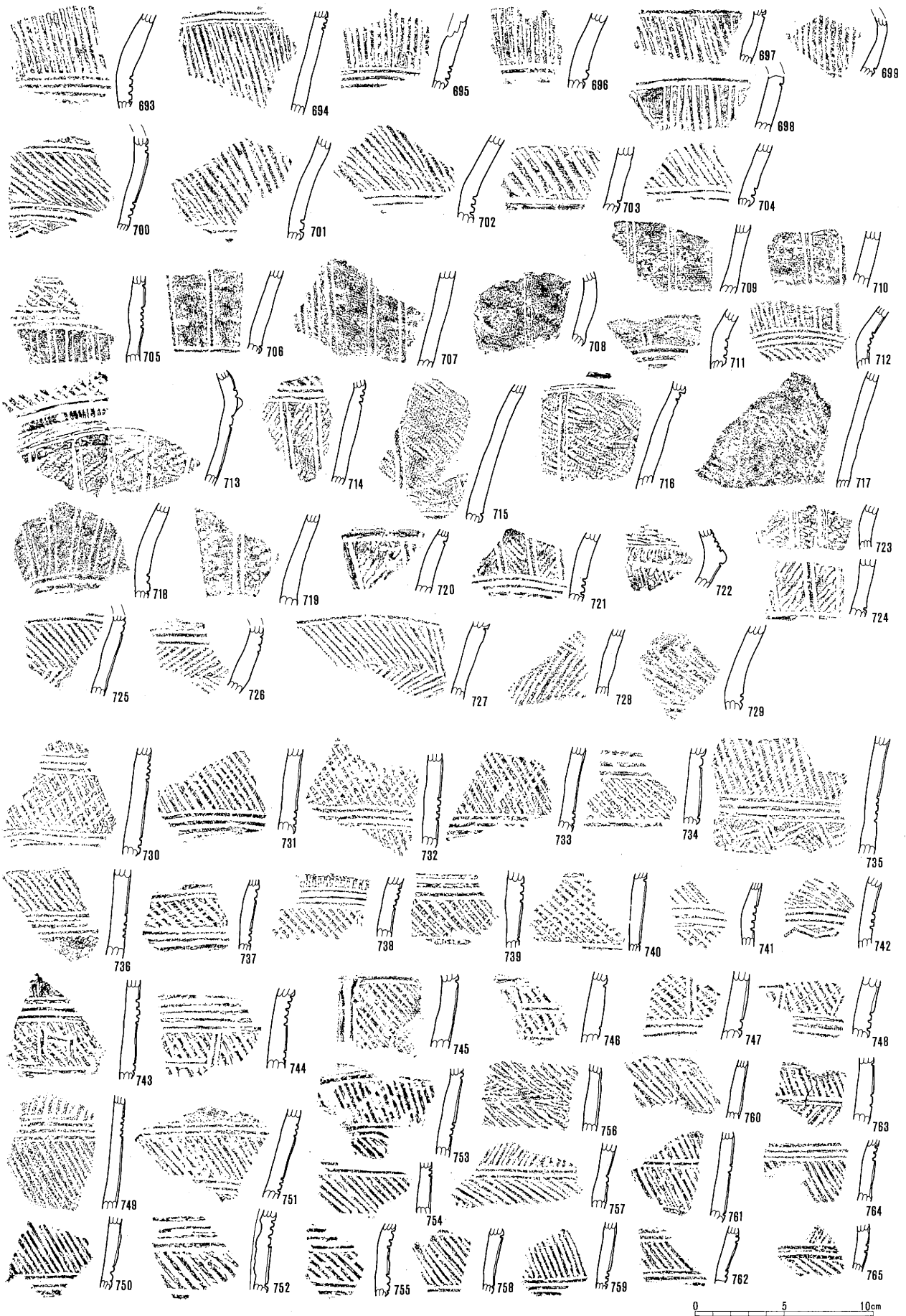


图123 大洞遺跡繩文時代前期末~中期初頭第IV群土器拓影3 (1:3)

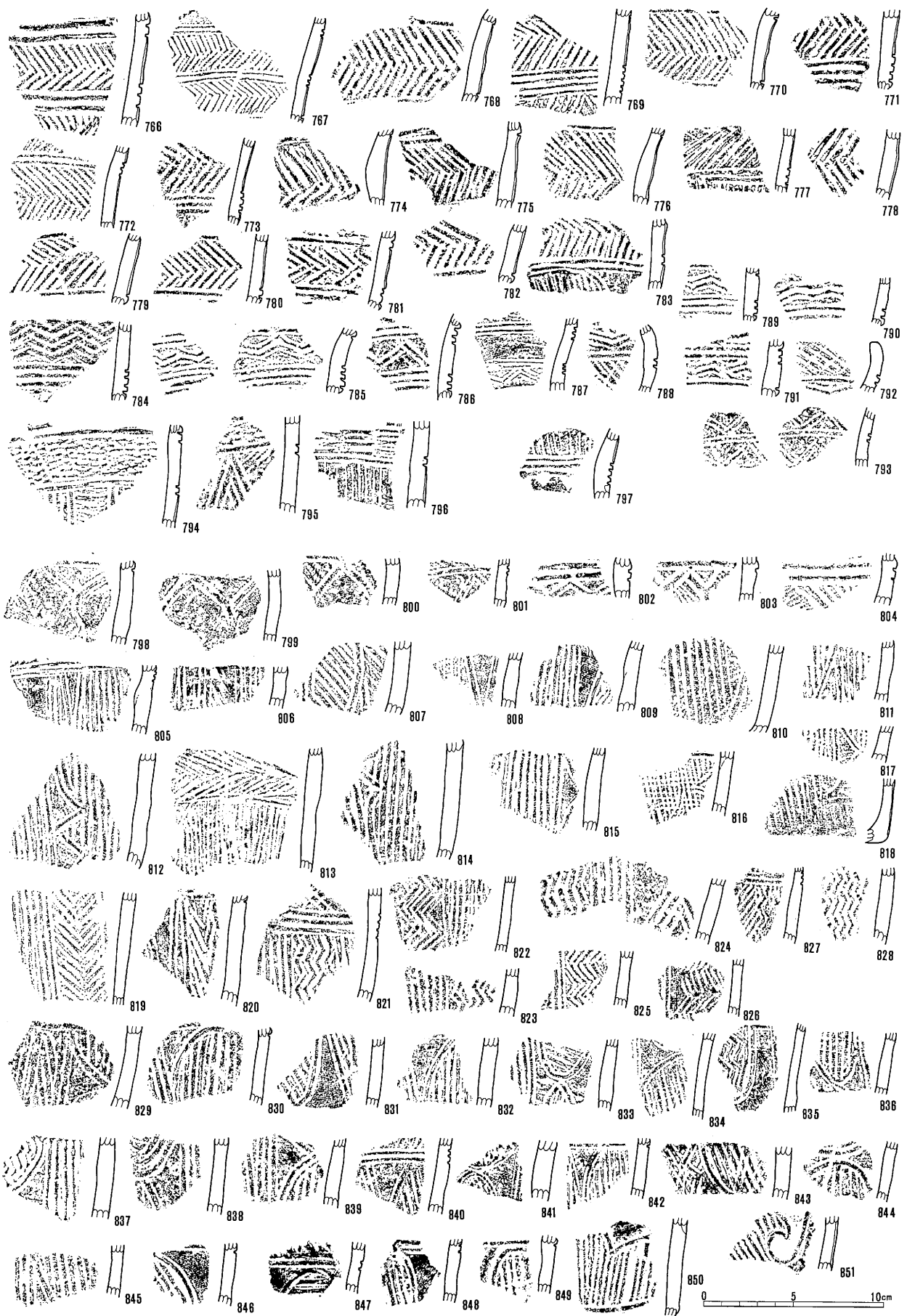


图124 大洞遺跡繩文時代前期末~中期初頭第IV群土器拓影4 (1:3)



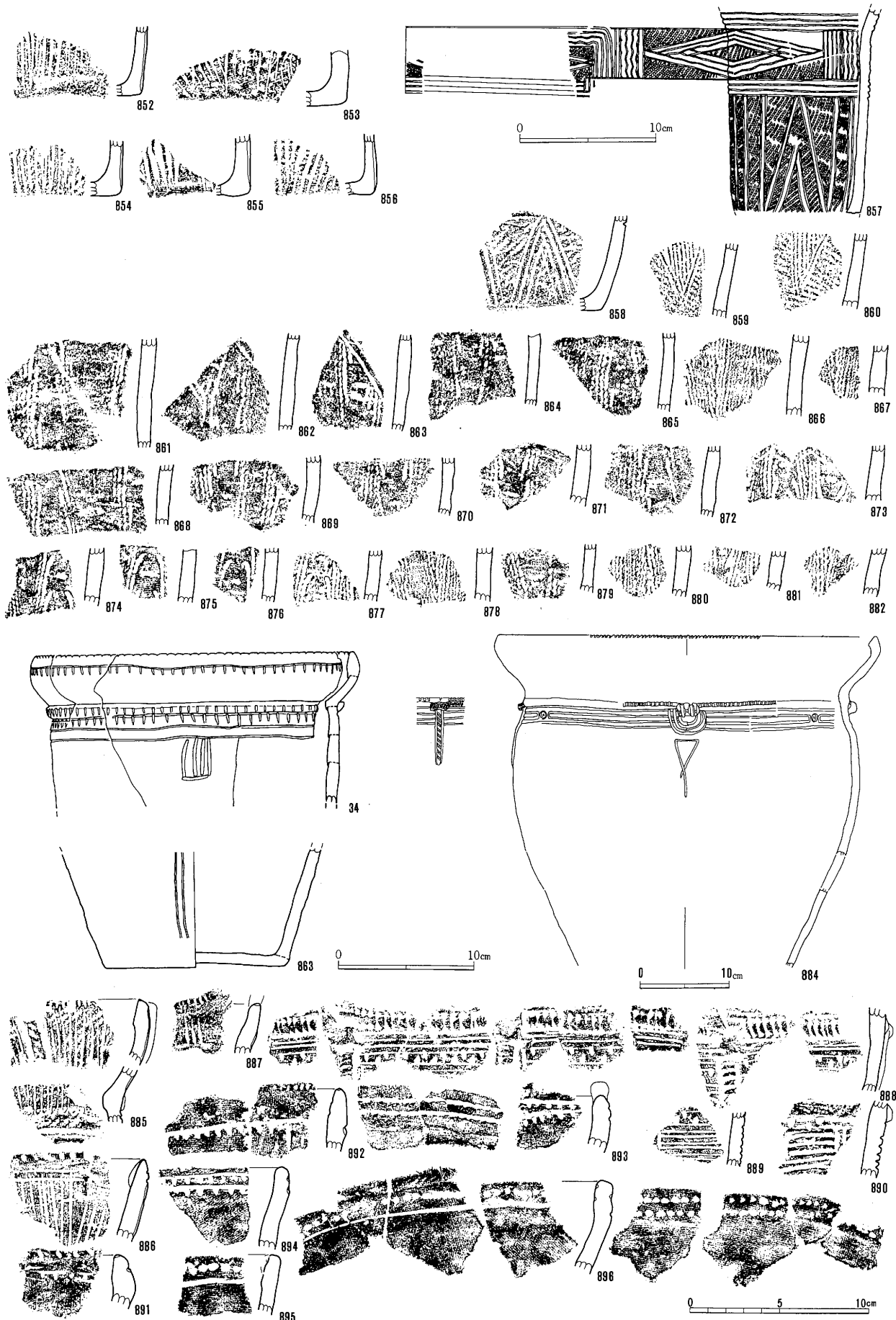


图125 大洞遺跡縄文時代前期末~中期初頭第IV群土器実測図・拓影5

(34, 857, 863 1 : 4、884 1 : 6、852~856, 858~882, 885~896 1 : 3)

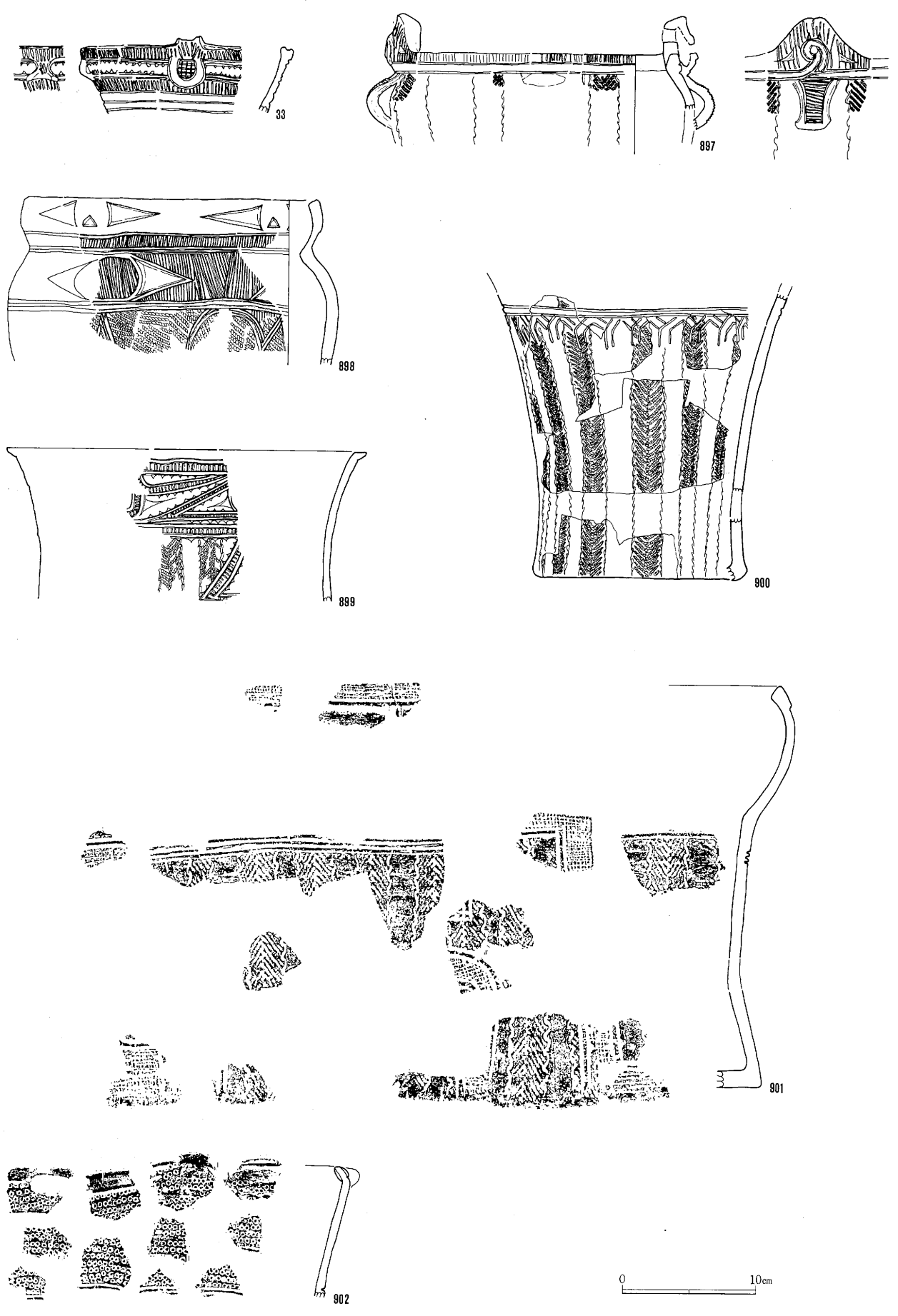


图126 大洞遺跡繩文時代前期末~中期初頭第IV群土器実測図・拓影6 (1:4)

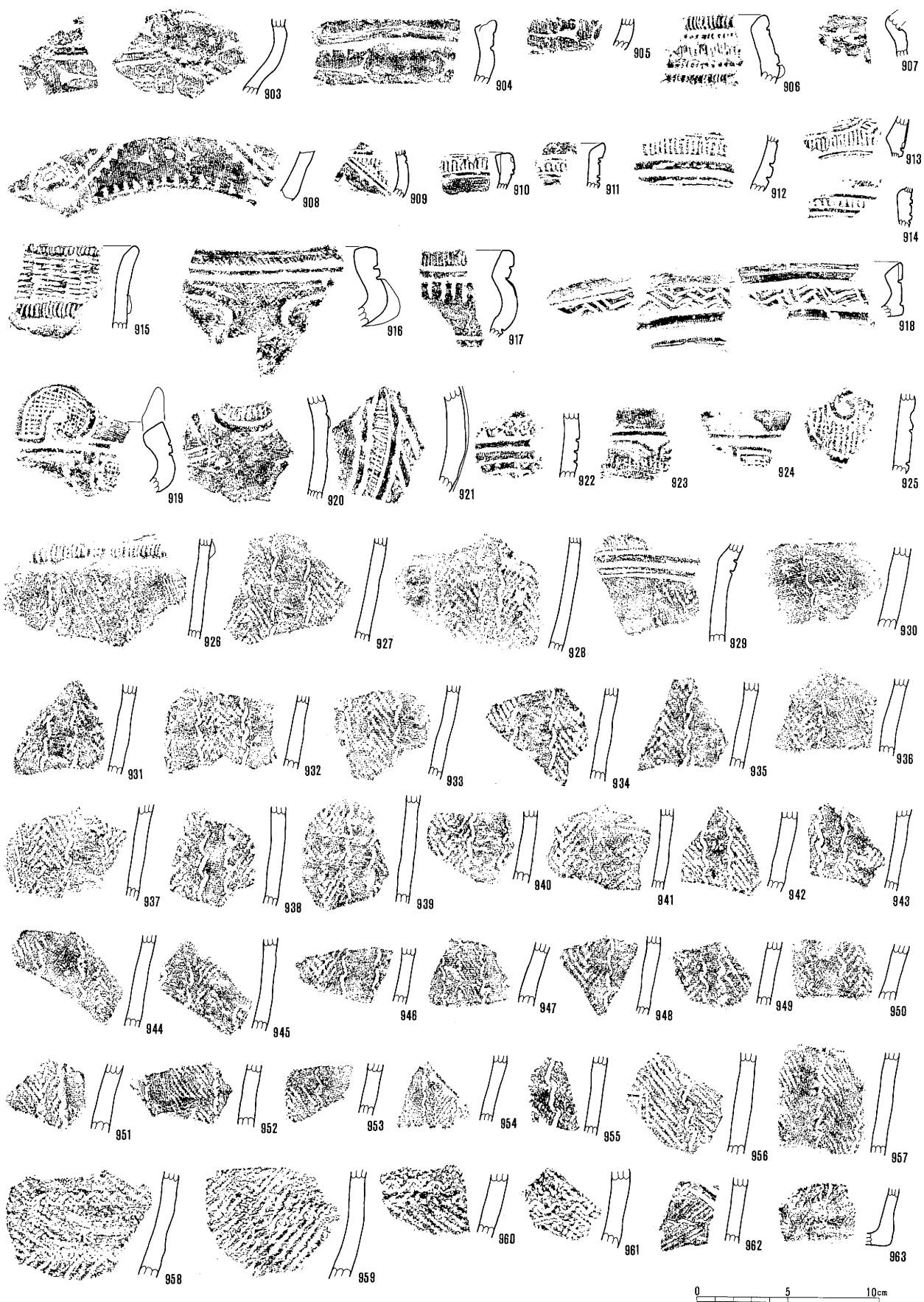


図127 大洞遺跡縄文時代前期末～中期初頭第IV群土器拓影7 (1:3)

線文はbでは沈線によって表わされる。すなわちいずれも直交する沈線による表現であり(25・104・639~651)、これが量的には最も多い。cは直交する一方が省略され、単に斜行する沈線文(652~658)、dは羽状構成(673~681)である。eは上下に三角印刻文が等間隔に並ぶもの(24・630)、fは爪形文が何条かに連続的に押し引かれ(23・659~667)、瓦状押し引き文とも呼ばれる。e、f例は極めて稀有な例である。

- ・ I—2分帯—— aは縦位の沈線文が密に施され(693~699)、bはそれが斜位になるもの(104・700~704)である。cは同じく縦位の沈線であるが、沈線間の間隔が広いものをさす(629・705~712)。さらにdは、cの構成を示す地文に縄文が施文される点で区別される(22~25・630・713~724)。eは羽状構成をとるものである(725~729)。

以上が第I文様帯の文様パターンであるが、先述したように模式図上段に示した口縁部形態をとる例がある(670~682)。これはモチーフも上記のものとは若干趣を異にする。こうした一群は山口明氏によっても注意され(山口1978)、より古く位置付けられることが予測されている。ただ胴下半部の様子について知る資料がなく、ここではとりあえず、本種の一亜種として捉えておきたい。

本種土器の口縁部には、通常一単位の突起が付されたようである。その形状にも幾つかのパラエティーがある。683~692はその主だったものである。

#### <第II文様帯>

- ・ II—1、II—2分帯—— 1分帯、2分帯ではモチーフが共通し、また同じ個体の中で同一モチーフが上下2段にくり返される場合も多いため、ここでは記述をくり返さない。

aは沈線による斜格子目文(631・730~748)、bは斜線文(749~765)、cは羽状構成となるもの(766~783)である。以上、a~cの施される割合が最も高い。dは瓦状押し引き文(794~796)、eは山形波状文(784~793)で、fは上下三角印刻文が等間隔に配列されるもの(797)である。前三者に比べ、d~fは非常に稀な存在といえる。

- ・ II—3分帯—— 主に4つのパターンが認められる。aは半截竹管状工具による縦位の沈線文を基調とし、そこに模式図に示したような縦位羽状沈線文が入ったり(819・820)、または、図132の完形土器104の展開図からも分かるように、図中のaとした半円弧文と逆V字文の組み合わせだったモチーフ(829~849)、bのようなB字状モチーフ(812・814~818)、cにある縦位山形波状モチーフ(821~828)、dの山形状削り取りモチーフ等が、その文様帯中に入り、構成される。これらのモチーフはまた、第I群1種のII—1分帯にあったものに類似し、その変形した形と捉えることができることをつけ加えておきたい。次に図110のうち、bは全面縄文を基調とする上端に、半截竹管状工具によって描かれた「V」字状文が連続して施されるものである(26・798~804)。cはbの「V」字文がなく、単に縄文のみの施文による事例である(25・631~857)。dは木目状燃糸文で(36・861~882)、古くから北陸との関係を知る事例として注意されていた。

以上が本種の内容であるが、やはり若干の時間差が存在する可能性もないわけではない。例えば、I—1—1分帯におけるa…細隆帯貼付→b…爪形の連続施文、または、I—1—2分帯のa…斜位沈線+斜位隆帯→b…斜位沈線+斜位沈線という変化の推定であるが、今の資料の中でそれを分離してもさほど意味をなさないと思われたため、一群中に一括してまとめることにした。

## 2種

901に代表される器形が一般的と考える。口縁部は大きく膨らんでおり、胴部中央は内反り気味で、底部が大きく張り出すというものである。口縁部文様帯の文様要素には多くのバラエティーがある。その1つが細線文で、これは地文的な使われ方をする場合が多い(903~907)。たいていの場合、そこには三角列点文や(33・904・906)、三叉文(905)、それが玉抱き三叉文となるもの(903・904・908)が一緒に行われる。この他に短沈線文(33・910~914)や、瓦状押引文(915)があり、三叉文や三角列点文が先の様な地文を伴わずに独立して施される場合(897・908・909)もある。この他、少数例として、山形波状文(918)。またはごく少数例であるが、円形竹管文が刺突される。口縁部の文様バラエティーに比べ、胴部は極めて単純である。結節状の羽状縄文が帯状に施されるものがほとんどで、その縄文の両端も結節状となり、無文部と明瞭に区画される。この文様帯の上端に「Y」字の連続モチーフが竹管状工具によって描かれる場合もある(900)。

## 2類

1類に比べてその量は非常に少ない。特に2種はほとんど認められない。

### 1種

沈線文のみによって構成される一群である。34・884は口縁部が無文で、885~887はそこに縦位の沈線文をもつ。胴部も無文である部分が多く、その上端にわずかな幅で横走沈線が入ったり、そこに交互刺突文が施される場合(888~890)がせいぜいである。891~896は鉢形の土器と思われる。表側には1条ないし、2条の刺突が施され、896は裏面にも同じ施文が認められる。

### 2種

帯状に施された縄文の無文部がなくなり、全面施文されるのが本種の特徴である(952~957)。結節縄文は残る。

## ウ 石器群の様相(図128~130)

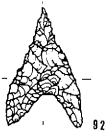
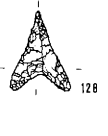

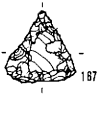


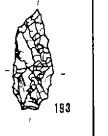

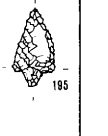








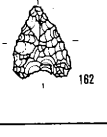
石器群の器種の大別は第I章第4節に述べてある。これに従った本遺跡総出土量は表13の通りである。本項ではこの大別を基に本遺跡出土の石器群の様相を述べるとともに、細別可能なものについては細別することにする。

### (ア) 石鏃

**石質と素材：**380点もの石鏃のうち、3点のチャート製の外は総て黒曜石製である。両面調整がしっかりと施されているものの素材は不明だが、8・120・145・149等は調整が粗いため剥片素材であることが推察できる。その中で184・185・190は製品よりやや大きめの黒曜石原石を素材としている。素材の法量を製品から類推すると凹基鏃では長さ0.8cm未満、幅1.0cm未満、厚さ0.2cm未満のものはなく、また平基・凸基鏃では長さ1.8cm未満、幅1.3cm未満、厚さ0.3cm未満のものはない。すなわち、平基・凸基鏃は凹基鏃より大きな素材を用いて製作されている(グラフ3~8)。

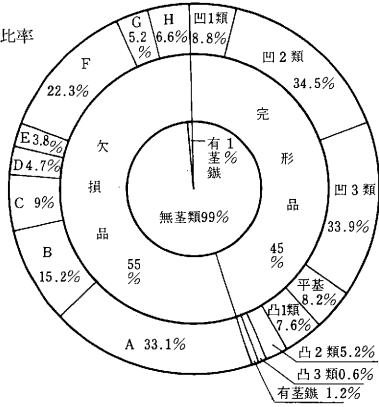
	石鏃	石錐	石匙	スクレイパー	ビエスキュー	小剥離痕のある剥片	打製石斧	横刃形石器	磨製石斧	磨石凹石	磨石	敲石	石皿	その他の石器	剥片(g)	石核(g)	原石(g)
遺構内	16	5	0	3	5	12	0	2	0	1	0	4	3	1,247.2	696.8	5,815.8	
遺構外	364	77	4	37	86	425	72	19	7	12	3	3	22	27,989.7	17,825.2	9,274.2	
合計総個数	380	82	4	40	91	437	72	21	7	13	3	7	25	0	1,342	392	
" 総重量(g)	394.9	149.7	26.7	223.5	318.9	1800	—	—	—	—	—	—	43.2	29,236.9	18,522.0	15,090.0	

表13 大洞遺跡石器出土量一覧表

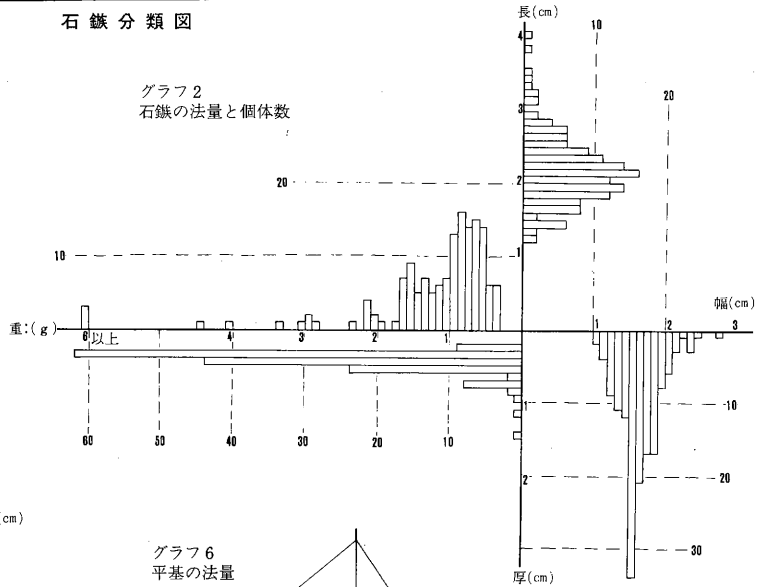
無茎鏃							有茎鏃	
凹基			平基	凸基				
1類	2類	3類		1類	2類	3類		
								
								
								

石鏃分類図

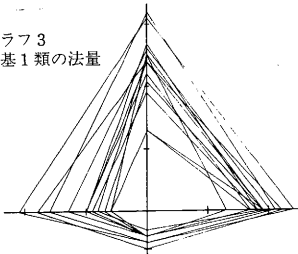
グラフ1  
石鏃の分類別比率  
欠損状況等



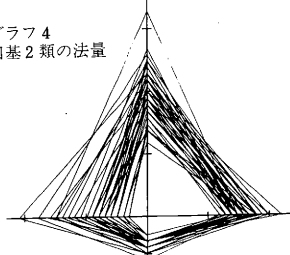
グラフ2  
石鏃の法量と個体数



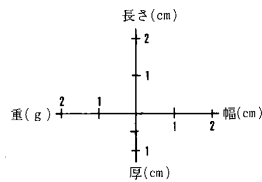
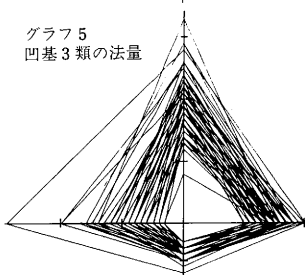
グラフ3  
凹基1類の法量



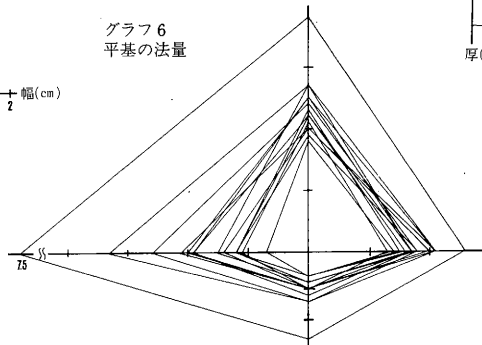
グラフ4  
凹基2類の法量



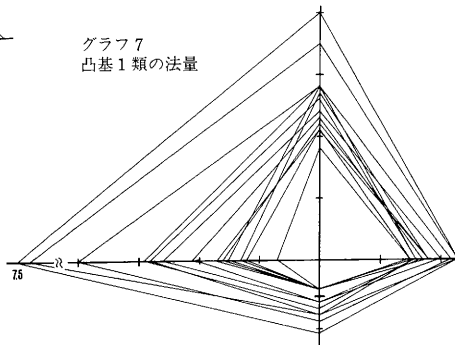
グラフ5  
凹基3類の法量



グラフ6  
平基の法量



グラフ7  
凸基1類の法量



グラフ8  
凸基2類の法量

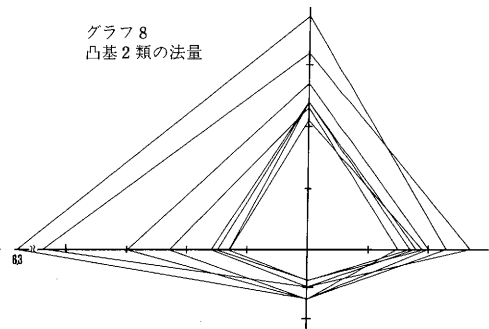


図128 大洞遺跡石鏃様相図

**分類：**有茎鏃と無茎鏃、さらに無茎鏃は凹基・平基・凸基に分けられるが、ほとんどが無茎鏃である。この中で凹基、凸基鏃を細別した。凹基鏃は、抉りの深さによって3つに分け(図128)、1類は抉りが深く、その幅が0.7～0.9cm、2類は中間の深さで0.4～0.6cm、3類は浅く0.1～0.3cmのものである。凸基鏃は基部の調整状況によって分け、1類は基部が円状に調整される、2類は基部が調整されない、3類は基部が凸状に調整されるものである。完形品のそれぞれの比率はグラフに示してある。有茎鏃は数が少なく一括した。

**形状：**完形品を観察対象とした。基部の形状をみると凹基鏃は前述の1～3類に分けられるが、更に逆刺の部分が鋭かったり、鈍かったり、丸かったりする。主観的要素が多くなってしまいが鋭いもの(88、103等)は少なく、鈍いもの(96、106、154等)、丸いもの(97、143、162等)が80%ほどをしめる。また、136、142は「鋏形鏃」で、他に5点ある。平基鏃では両端を丸く仕上げるもの(167)と、角状に仕上げる(173)ものがあり、凸基鏃は先の3つの分類のような基部である。有茎鏃も、抉りの入るもの(194)、平らなもの(195)がある。側縁形状は、内湾・直線状・外湾の三者があり、直線状と外湾のものがほとんどである。先端形状は、三角状をなし、その角度に大小がある。また、114、129、153のように乳首状に作り出されているものも少なからず認められる。

**調整：**両面全面加工がほとんどであるが、素材面を半分程度調整したもの(100、102、180、181等)、半分以下の調整や、素材の縁辺を調整しただけのもの(120、145、149、152、164、182、186等)がある。半分以下の例は凹基鏃3類、凸基鏃に多く見られる。また、凸基鏃の調整は比較的粗い剝離によって作られたり基部調整のないもの(180、181、184、185、190等)があり、未製品の可能性を指摘できるが、一応製品としてとらえた。

**欠損状況：**A・片脚部を欠く、B・片脚部のみ、C・両脚部を欠く、D・両脚部と先端部を欠く、E・片脚部と先端部を欠く、F・先端部を欠く、G・先端部のみ、H・不明のものに分けられ、その割合はグラフ1の通りである。この中で、AとB、CとF等は接合の可能性が高いと考えられ、試みたが、接合していない。

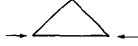



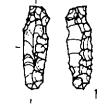


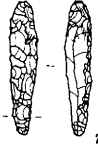
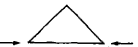
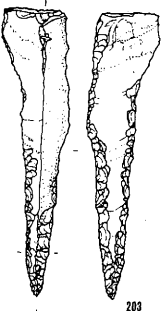


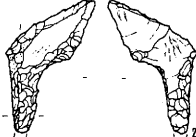
#### (イ) 石錐

**石質と素材：**82点もの石錐のうち2点が凝灰岩・チャート製で、他は総べて黒曜石製である。素材は断面三角形で0.3cm以上の厚みを持ち、曲りのない縦長剝片を用いている。これは、素材の一角を残して製品としているものが多いことから、比較的斉一性の強い素材選定といえる。

**形状：**つまみを有するものと棒状のものに大別され、前者はつまみ部が調整されるもの(205、206等)とそうでないもの(202、203等)がある。棒状も細身のもの(209、213等)とずんぐりしたもの(217、219等)があり、長さも大小がある。刃部断面形は、三角形(203、212等)、四角形(205、219等)、楕円形(213、218等)がある。

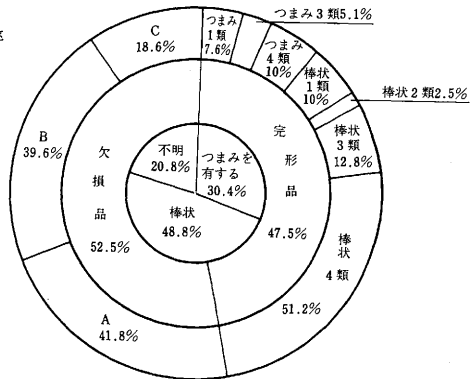
**調整：**刃部の調整状況で5つに分けられる。図129に示すように1類は素材同一面に2方向の調整を加える、2類は同二面に2方向から加える、3類は同二面に3方向から加える、4類は同三面に4方向から加える、5類は同三面に6方向から加えるもので、この5つを分類基準とした。その結果、2・5類は合わせて4例で、4類が過半数以上となっている。

**欠損状況：**欠損状況を見ると、A一刃部先端のみ、B一刃部先端を欠く、C一頭部と刃部先端を欠くものに分けられ、その比率はグラフ9に示してある。

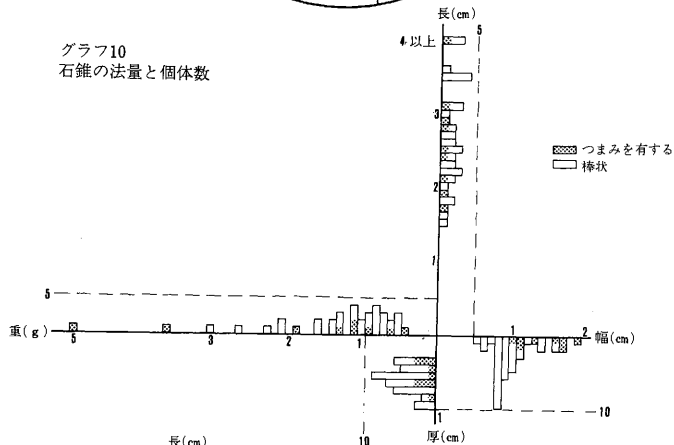
	つまみを有する	棒状
1類 	 198	 210
2類 		 18
3類 	 200	 213
4類 	 203	 222
5類 	 207	

石錐分類図

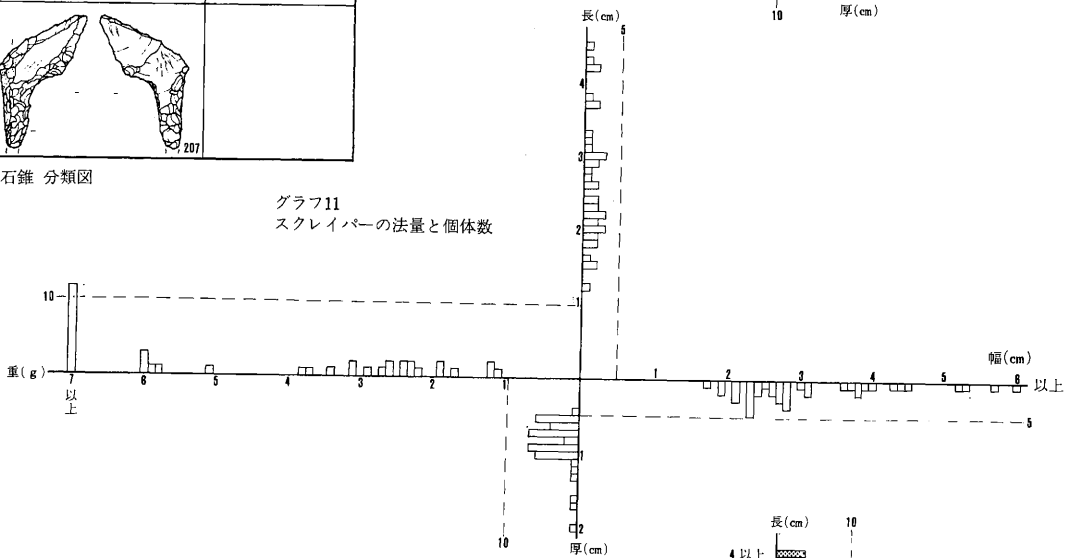
グラフ9  
石錐分類別比率  
欠損状況



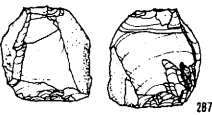
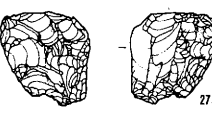
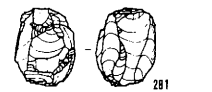
グラフ10  
石錐の法量と個体数



グラフ11  
スクレイパーの法量と個体数



ピエス・エスキュー分類図

1類	 287
2類	 278
3類	 281

グラフ12  
ピエス・エスキューの法量と個体数

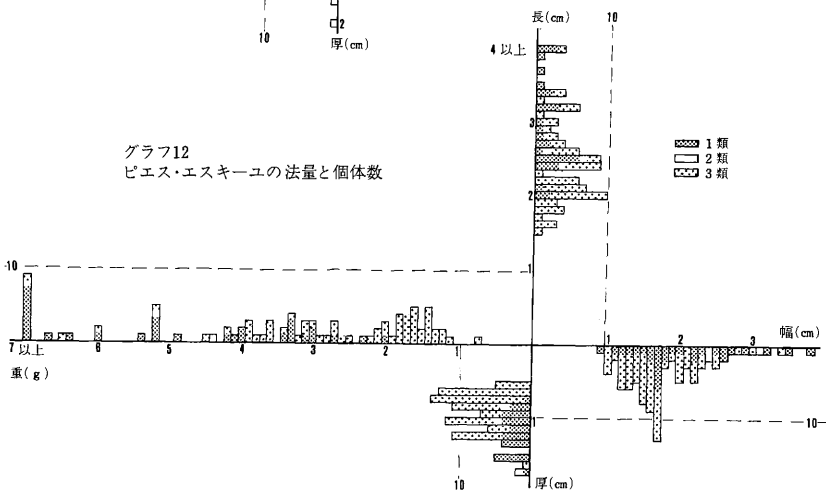


図129 大洞遺跡石錐、スクレイパー、ピエス・エスキュー様相図



(ウ) 石匙

石匙は4点と少なく、228が凝灰岩製の他は黒曜石製である。いずれも剥片を用い、228～230は刃部に対して反対側に、231は横につまみが作り出されている。228は素材剥離面を生かし、縁辺をわずかに調整し、刃部も粗い作り出しである。229～231は両面加工であるが、230・231は片面に主要剥離面を大きく残している。

(エ) スクレイパー

**石質と素材：**スクレイパーの認識に当っては、石匙と同様の刃部調整をもつものとし、40点を摘出した。うち2点がチャート製で、他は黒曜石製である。大小不定形の剥片を素材としているが、232・237は製品よりやや大きめの黒曜石原石を用いている。

**形状：**基本的には、素材の形状を大きく変えることがなく、不定形でグラフ11の通り法量にも幅がある。刃部形状も3種類あり、内湾状は2点と少ない。

**調整：**素材のある部分を、直線状、外湾状、内湾状の刃部に作り出すが、片面加工と両面加工の二者があり、前者が $\frac{2}{3}$ ほどを占めている。刃部調整においても232・234・248のように剥離の大きさが一定しないものと、241・242・255のようにほぼ一定した剥離の大きさに調整されるものがある。

(オ) ピエス・エスキーユ

**石質と素材：**91点あり総べて黒曜石製である。素材については、全面に剥離痕が認められるため確定できない。しかし、275は柱状の原石を利用している。

**分類：**図129のように1～3類と碎片に分類した(註1)。1類は2個1対の刃部を有し、素材の面を大きく残すもの、2類は1類を90度回転し、1・3類の両側縁を刃部としたもの。したがって2類の初期のもの4個2対の刃部を有す。3類は2個1対の刃部を有するが、側縁と平行し刃部2縁辺からの剥離面によって全面がおおわれたもの。刃部が片方だけ残るものを碎片とした。それぞれの割合は1類から順に32%、3%、41%、23%となり2類が少ない。

**形状：**平面形で定形化はしていないが、四角形状(267、274、279等)や紡錘形状(268、271、281等)がある。法量はグラフ12に示すように幅があり、その中で1類は大きく、3類は小さいものが多い傾向にある。

(カ) 小剥離痕のある剥片

**石質と素材：**437個摘出した。1個がチャート製で他は総べて黒曜石製である。素材はその名の通り剥片で、グラフ13に示す通り法量の幅は大きい。しかし、個体数から見ると長さ・幅・厚さでは、それぞれにピークをもつ分布である。

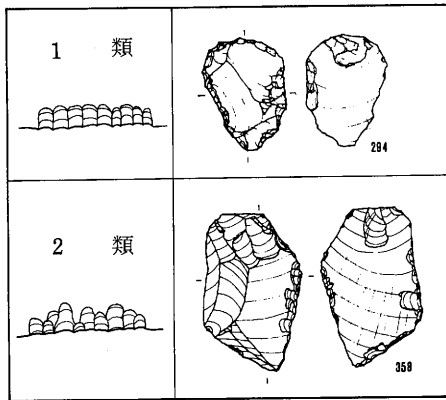
**分類：**図に示すように2つに分けた。1類は小剥離痕の大きさがほぼ一定し、それが連続するもので、断面形状が台形をなし規則的であることから、リタッチの痕跡と考えられるもの、2類は小剥離痕の大きさが一定せず、しかも不連続にあり、全体としてある幅に見られるものである。前者が246個、後者が191個でほぼ同数である。

**形状：**平面形は不定形で、規則性は認められない。小剥離痕部分は刃部ととらえられ、片面剥離痕(293、306、312、329、340、350、352等)と両面剥離痕(332、339、355、358等)があり、後者は1類にはない。刃部形状も直線状(294、321、336、348等)、外湾状(306、312、335、358等)、内湾状(305、320、333、357等)、挟入状(363)があり、その長さは一定ではない。また、これらの刃部が何箇所かに認められるもの(291、318、334、353等)がある。

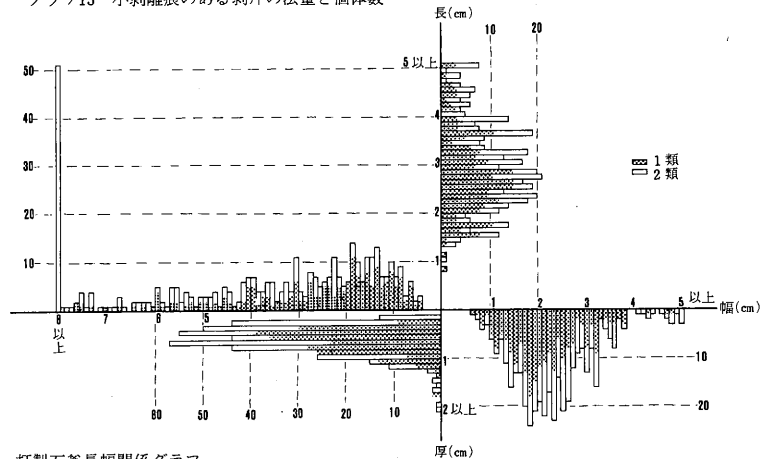
---

(註1) 分類に当っては、聖山遺跡〔芹沢長介1979〕の分類をそのまま当てはめた。

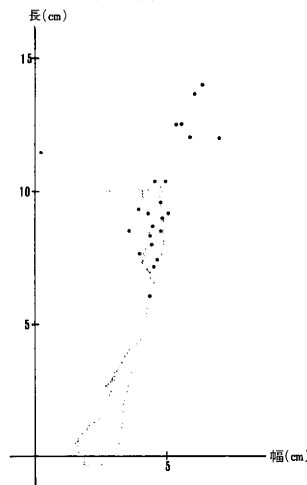
小剥離痕のある剥片 分類図



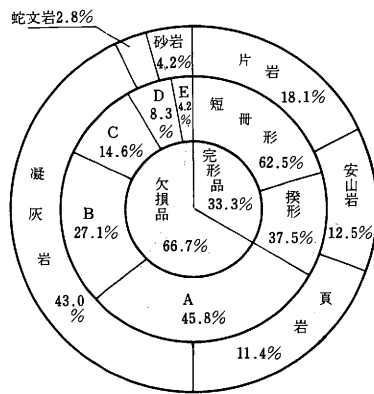
グラフ13 小剥離痕のある剥片の法量と個体数



グラフ15 打製石斧長幅関係グラフ



グラフ14 打製石斧石質、欠損状況等



グラフ16 横刃形石器長幅関係グラフ

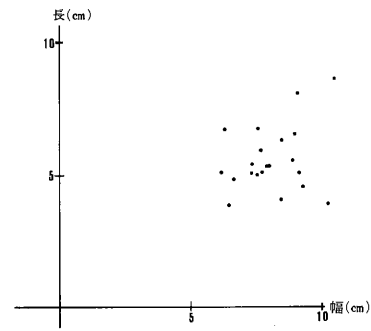


図130 大洞遺跡小剥離痕のある剥片・打製石斧・横刃形石器様相図

(キ) 打製石斧

**石質と素材：**石質とその割合はグラフ14に示す通りである。素材はいずれも剥片であるが、片面が自然面、もう片面に剥離面をもつもの(365、374、385、393等)と両面共に剥離面をもつもの(366、368、384、388等)がある。

**形状：**短冊形と撥形がある。両者の区分は必ずしも明確ではないが、一応刃部が基部より明瞭に大きい例を撥形とした。それぞれの割合はグラフに示す通りである。長幅比(グラフ15)を見ると、2：1の付近に相関関係があり、大きいものと小さいものに分かれるが、資料数が少なく、これが本来の姿かは断定できない。ただ、撥形に小振りのものが多い。

**調整：**短冊形・撥形とも基本的には素材面を生かし、縁辺を調整することによって成形されている。すなわち、大きい剥離面は素材剥片形成時のもので、縁辺の小剥離痕が調整時のものである。

**使用痕・欠損：**肉眼観察によれば8点に磨耗痕が認められ、これを使用痕と考えた。いずれも刃部先端部に認められる。欠損状況は、A—刃部のみ、B—頭部のみ、C—刃部・頭部を欠く、D—片側縁のみ、E—その他(表面のみ等)があり、グラフ14に示す割合である。

(ク) 横刃形石器

石質は打製石斧と同様の状況である。素材も同様であるが、横長剥片を用いている場合(413)がある。中には411のように、薄く節理面で割れた原石を用いるものもある。長幅比はグラフ16の通りであり2：3付近に相関関係がある。厚みにおいて打製石斧より一般的に薄い傾向にある。調整はほとんどなく、素材

そのままを生かし、刃部に小剥離痕が見られる程度である。

(㉑) 磨製石斧

1点が輝緑凝灰岩(422)の他は、蛇紋岩製である。前者は乳棒状で、後者は定角式と石質を使いわけているようである。定角式は大小二者あり、刃部より基部が小さい平面形をなす。研磨調整が行われているが、研磨以前の調整剥離痕の深いものは残っている。418は刃部先端に研磨とは異なるざらついた部分があり、使用痕と考えた。また、420は刃部が大きく欠損したものを再加工している。

(㉒) 磨石・凹石

いずれも安山岩製である。手頃な円礫を使用した430の他は、いずれも丸味を持つ直方体的形状をなし、両面磨耗痕跡がある。凹みのある例では、数個の凹みが連続するもの(35、429)と、そうでないもの(430)がある。特殊磨石は3点あり安山岩製である(註1)。

(㉓) 敲石

安山岩製(423、425)と砂岩製(424)がある。円礫素材の頂部に敲打痕があるもの(423、424)と、425のように中央部は台石として用いられ、周辺に磨耗痕をもつものの二者がある。

(㉔) 石皿

6点あり、いずれも安山岩製で、円礫をそのまま用いている。凹みをもつもの(36、41、435、436)とまたないもの(37、437)があり、後二者は概して大きい。38は磨耗面が凸状で砥石ともいえるが、石皿と考えた。また、36は波状に刻まれた文様を側縁にもつ。

(㉕) その他の石器

両面剥離調整されているが、どの分類にも入らない一群を一括した。いずれも黒曜石製で点数は多くなく、いずれかの器種の未製品とも考えられる。

(㉖) 剥片・石核

黒曜石がほとんどを占める。剥片には大小があり、その数は夥しい。石核はネガティブな面を持つ黒曜石を一括し大小1342個を数えたが、中には剥片の可能性のあるものもある。剥片・石核については、観察を充分に行っておらず、今後の課題である。

(㉗) 原石

自然風化面で構成される黒曜石・チャートを原石として摘出した。その数は392個を数え、2点のチャートの他は総べて黒曜石である。大は拳大から小は親指大まであり、小卵大前後が多い。塊状、扁平状、柱状のものがあり、また脈が無数に入るもの、夾雑物を含むもの等いろいろである。ほとんどが「ズリ石」状であるが、中には角が丸くなった転石状のものが2点ある。

(4) 平安時代の遺構と遺物

① 1号石組墓(図131)

N18・W10付近の南向斜面中央部に位置し、III層下部で人頭大の礫が円形に並んで出土した。続いて一帯を掘り下げていった所、IVa層上面で円形の石組みの中に底石と考えられる敷石がみられ、このことから石組墓とした。規模は70×70cmの円形をなす。円形に並ぶ石は図131に示すようにいずれも長軸を立てて置かれ、側壁をなしている。特に東・西・北側の壁石は底石より下にしっかりと埋められているが、南側の側壁は丸味のある小さな石が2個、埋められることなく置かれた状況にあった。底石は平らな石が2個

(註1) A面は幅0.5～3cmの円弧状にやや張り出す磨面、B面はA面以外の磨面、C面は敲石にみられる敲打部(八木光則1976)とする。

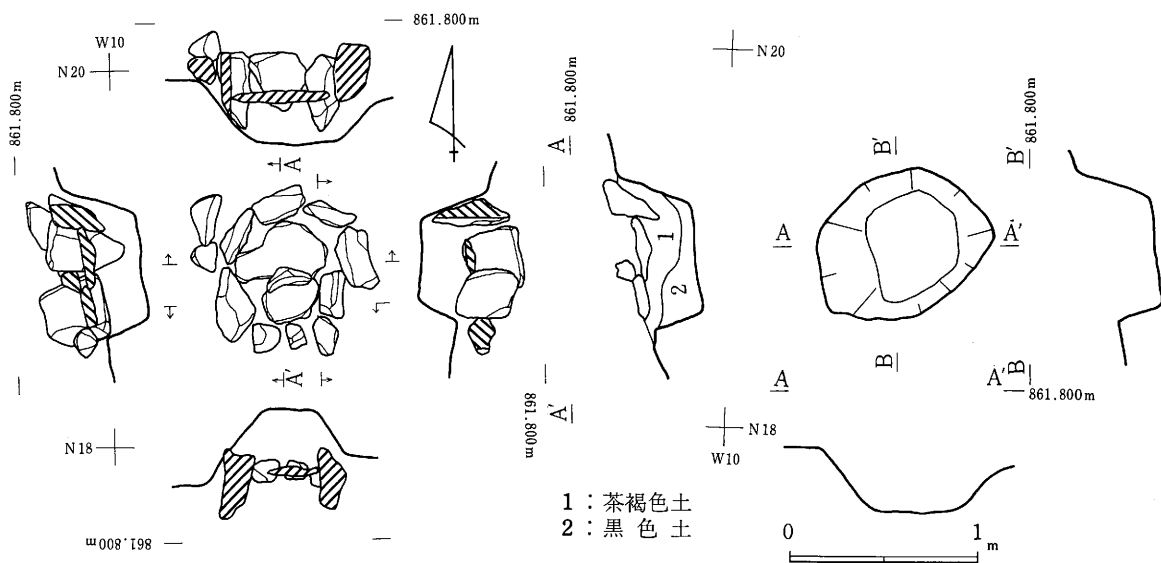
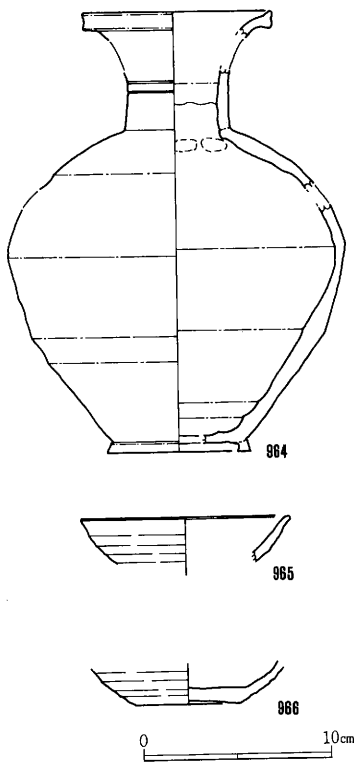


図131 大洞遺跡1号石組墓実測図(1:40)

及び周辺出土遺物実測図(1:4)



置かれることによって、底面のほぼ全面をカバーしている。その上に柱状の石が置かれていたが、底石とは無関係と思われる。しかし、その性格は不明である。天井石はなく、石室構造を示していたかどうかは不明である。掘り方は、IV a層上面での検出のためわかりにくかったが、石組とほぼ同じ大きさで、30cmほどの深さに掘られ、茶褐色土・黒色土が覆土として入っていた。

以上から石組墓の構築方法を復元すると、まず円形状に掘り方を掘り、ある程度それを埋めてから側壁に当る石を立てて埋め、側壁内を更に若干埋めてから底石を置いたものと考えられる。石組墓内からの出土遺物はなく、時期決定はできないが、南側一帯から須恵器が出土しており、平安時代のものと考えた。

#### ② 遺物(図131)

平安時代の遺物は、1号石組墓の南側と南東方向の斜面、層的にはI~IV a層上面で散漫に出土している。964は須恵器の長頸瓶でその残存率は1/4程度である。石組墓南2mほどの間から比較的多くの破片が出土しており、石組墓と関連ある遺物と考えられる。なお、この長頸瓶の製作地は猿投窯であり、井ヶ谷78窯式と考えられる(註1)。965・966は須恵器杯の破片で、南東斜面から出土しており、石組墓との関係は不明である。

### 5. 成果と課題 ~縄文時代前期末から中期初頭の遺物と集落をめぐって~

#### (1) 前期末葉~中期初頭土器の編年

「縄文前期末の編年は、諸磯c式-鍋屋町式(併行)-十三菩提式となるのであって、関東地方の編年では鍋屋町式に対応する時期が空白になっていた」(今村啓爾1974)。「諸磯c式以降、いわゆる十三菩提式土器

(註1) 檜崎彰一氏の御教示による。

に至るまでに、少なくとも2段階位を想定している。その各段階に鍋屋町Ⅰb式とⅡa・b・c式が対応してくるものとする(山口1980)。

現在、中部地方から関東地方の縄文時代前期末葉における土器の編年的研究は、このようにまとめられるのであろうか。少なくとも、それに対する大きな反論は生まれていない。こうした説は諸磯c式土器はその後の変遷が追いつけないということ、しかし、そこに鍋屋町系土器を介在させると中期初頭土器へのつながりが良くなるであろうという2点の考えから生まれた説である。しかし、果たして前期末葉土器の流れは、外来系土器の多大な影響を考えなければならないのか、在地で作られた諸磯c式土器は、それ以後どのように変遷したのか、あるいは外来の勢いの中に消えたのか、この点について大きな疑問が残る。大洞遺跡の資料はこの答えを導くヒントをもつと考えた。この編年観の問題は単に土器編年の問題のみに止まらない。すなわち上記の様な考えに依るか、またはこのような編年観に訂正が認められるかという問題は、大洞遺跡の営まれた時間幅を含めて、遺跡の性格や評価にも関わってくることにとなり、重要な課題である。従って、前期末葉土器の編年についてここに若干の考察を加え、合わせて大洞遺跡の営まれた主なる時期について考えることにしたい。

その諸磯c式土器であるが、文様の一つ一つの要素や、表出技法については詳細に観察されているが、文様の構図、構成といった面での追求についてはまだまだ知られていない面が多くある。同じことはそれ以後の前期末葉土器群についてもいえる。今村氏にしても山口氏にしても、その扱う資料が土器全体をうかがうにはあまりに少なかったり、破片であったりすることからも明らかである。本報告書における土器の前項での分類は、本遺跡のもつ豊富な資料により、1個の土器の全体が復元ないしは想定できるように工夫したつもりである。従って、ここでの分析は土器全体の文様構成の変遷ということの主なる視点において考え、付随的に文様要素について検討するという順で記述したい。

#### ① 前期末葉土器の文様構成

##### ア 諸磯c式土器の文様構成

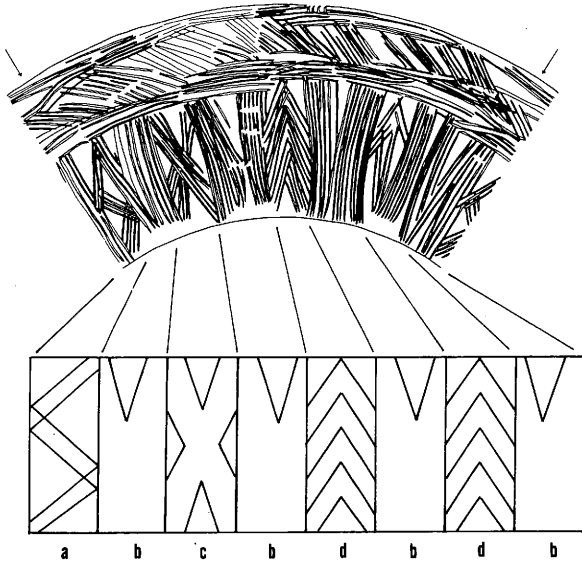
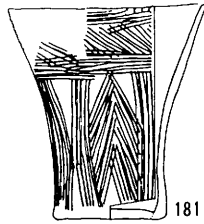
本遺跡出土の完形土器181について詳細に観察してみたい。まずその文様帯は大きく口縁部と胴部の2つに区分できる。その文様については沈線文とその集合によって構成されていることは、この期の多くの土器とかわらない。その口縁部の文様は斜位ないしは羽状という、比較的単純な構成がとられる。注目すべきはその胴部の文様構成である。それを模式図にして分かり易くしてみた(図132)。胴部は縦に8分割される。その各々の分割内にはa・b・c・dという4種の文様構成のパターンがあり、bは交互に4回くり返され、dは2回施される。このaは鋸歯状モチーフ、bはV字状に空白を残すモチーフ、cはX字状のモチーフ、dは縦羽状のモチーフと各々を表現できよう。一見雑然とした感じを与える諸磯c式土器の胴部モチーフも、このように規則的な文様の施され方を知ることができる。そして、こうした文様パターンは、該期に広く一般的なモチーフであったことが、他の多くの類例からも知られる。図133伊那市山の根遺跡例、岡谷市岡屋遺跡例、茅野市下島遺跡例は一面的な実測図ではあるが、X字状、縦羽状等の文様構成が、胴部を縦位に分割させた上で施されていることを示す例である。

この他にもう1種、縦位のレンズ状モチーフが横に連続する構成を示す資料がある。栃木県東光台遺跡・岐阜県峰一合遺跡例がそれで、このモチーフも、以後のつながりを知る上で重要な1つの文様構成パターンとなっている。

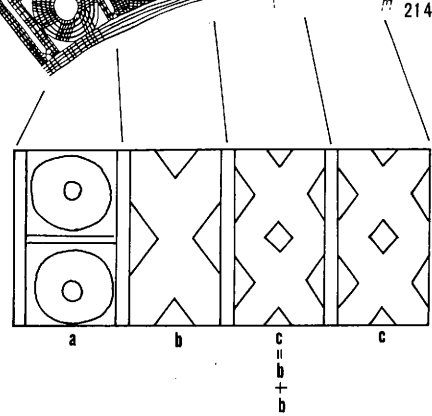
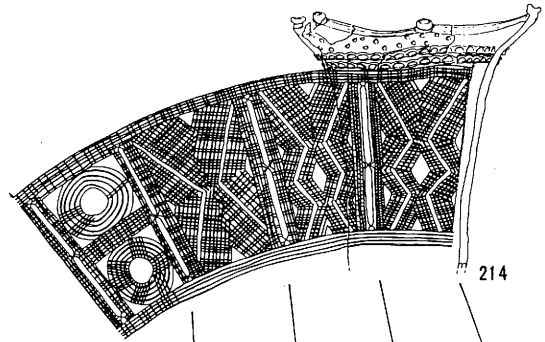
##### イ 前期末葉 第Ⅰ群1種・2種土器の文様構成

第Ⅰ群1種については本遺跡の214が良好な資料である。波状となる口縁、その口縁部文様帯には円形刺突文が施される。そして胴部はやはり縦に分割される。同じように模式図に示し、そのモチーフについて観察してみた。aは円文が2段に並ぶ、bは先の諸磯c式のcと同じくX字状となり、cはそのbが2段

諸磯 C 式



晴ヶ峰式



梨久保式

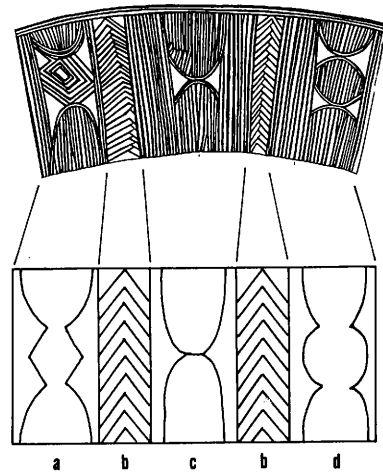
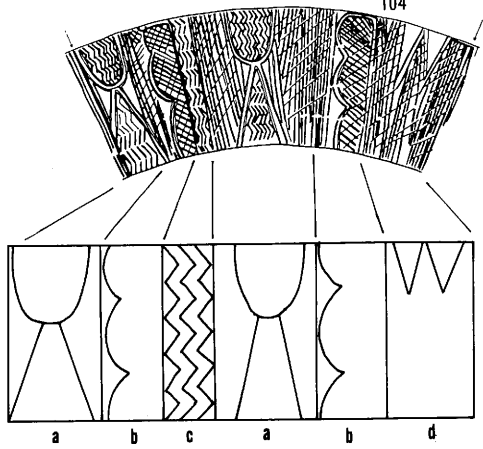
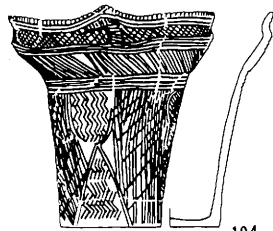
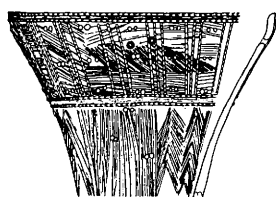


図132 縄文時代前期末～中期初頭の土器の文様構成模式図

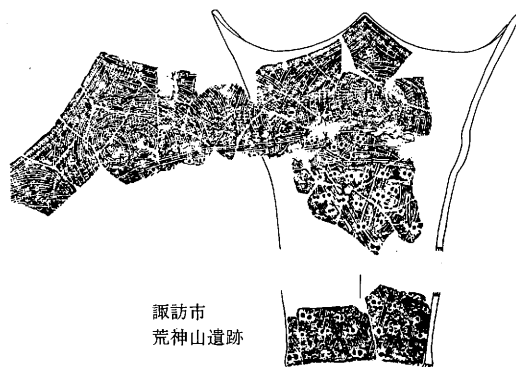
諸磯c式土器のバラエティー



岡谷市  
後田原遺跡



伊那市  
山の根遺跡、2号土壙

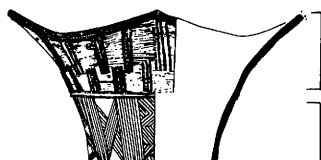


諏訪市  
荒神山遺跡

前期末葉土器の変遷

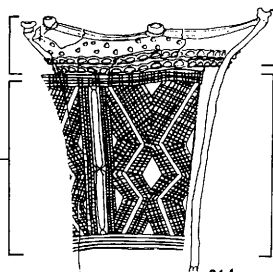
a. 文様構成

諸磯C式



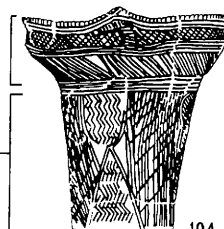
岡谷市 岡屋遺跡

晴ヶ峰式



214

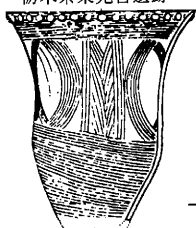
梨久保式



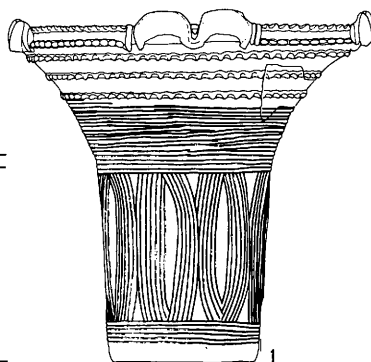
104



栃木県東光台遺跡

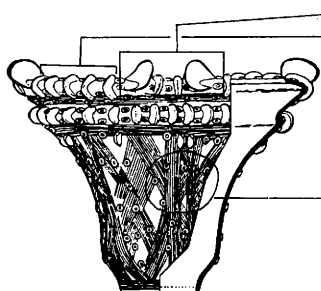


岐阜県峰一合遺跡



1

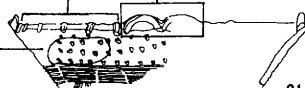
b. 文様要素



茅野市下島遺跡



1



215

図133 縄文時代前期末葉土器の変遷

構成となるものである。この土器のモチーフには、諸磯c式にあったdやeこそみられないものの、基本的にはそこにあったモチーフを踏襲しているのである。

第I群2種については1がその代表である。胴部の文様構成は縦位のレンズ状モチーフが横に連続する構成で、こうしたパターンも諸磯c式土器の中にあつた。

#### ウ 中期初頭 第IV群1種土器の文様構成

本遺跡出土の104と、駒ヶ根市羽場下遺跡第2号住居址から出土した2点についてみてみたい。この時期になると器形は口頸部上の口縁部は大きく外反し、口縁部が「く」字状に内折する形状を示し、その口縁部文様帯には、主には半截竹管状工具による平行沈線文の入ることは先項でも述べた通りである。さて、その胴部文様であるが、やはり模式図に示してみた。本遺跡の104は、6区画に縦位分割される。そのaは、先の第I群1種のb、すなわちX字状モチーフの変形と捉えることができる。bはやはり第I群1種のcの左側半分と同様のモチーフである。cは縦位波状モチーフとなる。そして、fはV字状に空白を残すモチーフで、これは諸磯c式のbとしたものと同じといえる。羽場下遺跡の資料も、やはり縦に5分割される。そのaとdはほぼ同一の形状と考えることができ、これは第I群1種のcとほぼ同形である。cは資料104のaと同じで、X字状モチーフの流れをくむものであろう。そしてbは縦位羽状モチーフであり、諸磯c式のdと同じである。

以上3時期の土器について、その文様構成について検討してみた。その結果、次のような見通しを得ることができた。

① この三者は、口縁部形態とその文様要素について異なる。

② 胴部形態についてはほぼ共通し、文様は縦に分割された中に施される。その分割内のモチーフは各時期で別々ではなく、同じモチーフがそのまま踏襲されたり、連続的に変化したモチーフとなっている、という2点である。これは、①については、そこが変化し易い、つまりモデルチェンジが敏感に反映した一面と捉え、②は前時期の伝統を連続的に受けついで、いわば保守的な一面と考えることができる。とすると、図133のように諸磯c式土器から、中期初頭梨久保式までは極めて連続的に、しかも、それほど時間をかけずに進行した結果であると考えられると同時に、このことは在地の土器の根強い継続性を物語るに他なく、そこに外来系土器の影響をはさまずとも、前期末葉土器の編年が組み立てられるのではないかという、2つの大きな見通しをもつことができるのである。

このことを文様要素という点からも追認したい。

#### ② 前期末葉土器の文様要素

諸磯c式土器では、沈線文の地文上に結節状浮線文が施されることは一般的に知られている。その結節状浮線文は、棒状である場合の他、それが重層して密に施される場合も多い(図133岡谷市後田原遺跡例)。さて、ここで問題となるのが次の時期である。山口氏、今村氏共に鍋屋町I式：結節隆帯→同II式：結節沈線、という流れを想定している。そうした変化を「手ぬきの方向性」として考えられているようであるが、該期の土器にそうした理解が果たして通用するのであろうか。こうした違いを時間差と認定できるか否かが、前期末葉土器の編年を考える上での1つのポイントとなろう。この隆帯か沈線かの違いは、時間差ではなく、同一時間内でのバラエティーであると考えたい。諸磯c式土器には、結節隆帯と結節沈線が同一個体中にて確実に同居しているものもあり、まずその出発段階において、その後に示唆的な事象が存在する。そして次の時期、すなわち前期末葉は、そうした文様表出技法のバラエティーが増大する時期であったのではなかろうか。つまり、結節隆帯、ソーメン状隆帯、爪形連続施文、平行沈線へのヘラ切り、素文の半隆起線文といったバラエティーであり、そうした多くの文様表出技法により、諸磯c式土器から受け継がれた文様モチーフが描き出されたと理解したい。そうでなければ、例えばソーメン状貼付文をその特



徴とする十三菩提式を鍋屋町式の後の前期の最終末に位置付ける山口氏の考えは、逆に鍋屋町II式の結節沈線文が再び隆帯文になることの説明が不自然になる。また、今村氏も諸磯c式以後の前期末の段階を4時期に細分するが、果たしてそれが時間差なのか疑問である。今村氏の細分は「諸磯c式末期から、十三菩提式への文様の変遷はスムーズに辿ることができなかった。しかし、両者の間に鍋屋町式近似の型式の存在を想定すれば、文様の変遷がかなりスムーズに辿れることはきわめて重要である。」(今村1974)という理由にあった。しかし逆に今、ここで呈示した文様の変遷が認められるならば、鍋屋町式土器を含めた何段階もの過程を経ずとも、前期末の編年は成立することが納得できるのではないだろうか。

ここにあと2~3の諸磯c式から前期末葉土器にかけての連続性を裏付けると思われる資料を挙げておきたい。

まず、図133下島遺跡の諸磯c式土器に注目したい。この土器の口縁部には貝殻状突起といわれる大きな突起が2個一対でほぼ4単位に配され、その貝殻状突起間の口唇部には短隆帯文が縦に等間隔に貼付される。また、ボタン状突起の上にある円形の刺突文にも注意したい。そもそもこうした特徴をもつ土器を、今村氏(今村1982)や山口氏(山口1984)は、諸磯c式の古式とするが、その点にも疑問を抱く。これらの土器も、次の型式に直接的につながる重要な要素を多分に備えていると考えられるからである。つまりその貝殻状突起は第I群1・2種土器の口縁部に多くみられた4単位に配される「耳状突起」の原形であろうし、口唇部の短隆帯文は、やはり第I群1種の口唇部に短隆帯文が縦に貼付されている資料の多いこと(図111-215、図112-233~252)を先項で説明した。そして、ボタン状突起上に施される円形刺突文は、ボタン状突起の貼付が省略されることにより、円形刺突文として第I群1種土器の口縁部文様帯で盛行するのである。こうしてみると、諸磯c式土器から第I群とした土器への移行は、文様要素の細かな点においても極めてスムーズに変化していると理解できるのではないだろうか。

### ③ まとめと今後の展望

文様構成・文様要素といった点から、諸磯c式土器以後、前期末葉土器、さらには梨久保式土器にかけての土器型式の内容と系統性について検討してみた。ここで得られた結論としては、諸磯c式土器以後の編年は、前期末葉土器、梨久保式土器として単純に編年することで、今は何ら矛盾はないということである。従来の、外来系土器を介させた編年観は、在地の土器の変遷を明らかにするという、研究の一過程が省かれている点に基本的な問題が内在したと思われるが、それは当然資料の量的な問題にも支配されていた。しかし、本遺跡の資料を含めて改めて該期の土器を見直すと、諸磯c式土器は地域で独自の変遷をとげていたことが明らかで、さらに中期初頭土器との間には、今村氏や山口氏の言うような3~4段階もの時間の設定は認め難く、ほぼ一型式分で埋められるのではないかと考えたのである。それが本報告書において第I群としてまとめた土器群であり、これを前期末葉土器の土器セットと理解したい。今回は地文に縄文をもつ土器群、つまり第I群4種・5種については言及しえなかったが、特に5種の529の資料は、文様やその構成といった面で次の梨久保式(踊場式)土器と全く同一といえる内容をもっていることは注目される。山口氏は、氏のいう集合沈線文系土器、すなわち踊場系の土器を諸磯c式に系統のある土器だとする(山口1978)が、諸磯c式とこの集合沈線文系土器の間にまだ何段階かをおく氏は、この説明と矛盾する。要するに、第I群とした土器をすべて同型式内のバラエティーとして捉えておけば、諸磯c式からの接続も、中期初頭土器への移行も極めてスムーズであったといえるのである。

それでは、鍋屋町式土器についての実態はどうだったのであろう。鍋屋町系ないしは鍋屋町式そのものと思われる土器は確かに本遺跡内にもわずかに存在した。第II群としたものがそれで、それらは勿論結節隆帯等において第I群土器と共通する部分はあるが、また明らかに区別もされるのである。このことは在地の土器つまり第I群土器と時間的には併行し、多少の交わりをもちつつも在地土器の根強い中で、ごく

一部分に存在していたにすぎない土器として本遺跡の事例をもって理解しておきたい。

終わりに、この第Ⅰ群土器の型式名について触れておきたい。関東地方でいうならば、十三菩提式になるのであろうし、中部地方では晴ヶ峰式をはじめとした多くの型式名称がある。その中でも本遺跡の資料は、晴ヶ峰遺跡のそれに酷似することは特筆される。晴ヶ峰式土器は1951年に戸沢充則氏によって提唱された型式で、その時点において、A類・B類という2つのタイプに分類されている。この分類は本遺跡の第Ⅰ群1・2・3種と4・5種にそれぞれ対応することも明白で、特にこのA類は十三菩提中にはないものとして注目されてよい。その晴ヶ峰式設定にあたって、特に重要と思われるポイントについて若干抜き出し、その妥当性について述べておきたい。

○晴ヶ峰式土器も明瞭に二つの異なった様式（A類・B類—著者註）の摘出を許すが、それが必ずしも年代的相違を示すとはいえない。むしろこの二様式の土器の有機的な結合を正確に吟味してこそ晴ヶ峰式土器のもつクロノロジカルな意義も見出すことができるのであろう。

○A類土器（著者註）の文様の様相に極めて下島式—諸磯C式的なものを残し、かつ他遺跡における併出関係もそれを暗示するものがあり、結論的に言うなら下島式から踊場式、梨久保式に至る中間の一型式ではないかと推測する。

まとめとして以下の5点を列挙する。

- ①晴ヶ峰式土器はその文様の個性からA・Bの二類に分類される。
- ②A類土器は晴ヶ峰式土器として最も個性的な一群で、文様に極めて下島式的様相を残している。
- ③B類土器は従来十三菩提式と呼ばれた一群であるが、関東地方の十三菩提式の性格が不明瞭な今日、特に注意すべき一群である。
- ④A類とB類の関係は晴ヶ峰式における二者の関係である。
- ⑤晴ヶ峰式の編年位置は、下島式に次ぎ踊場・梨久保式に先行する。

十三菩提式土器を明確に認識した上で、それとは異なるA類の存在と、その意義の指摘。それは本考察において諸磯C式から連続的に変化したと説明した第Ⅰ群1・2種土器の考えと同じである。このように前期末葉におけるA類土器の意義は重要で、十三菩提式とされていたB類土器とセットとなって該期の土器組成をなすとした設定、そして時間的には諸磯C式に後続し、梨久保式に先行すると考えられた点は大洞遺跡での所見でも矛盾のないものと確認できる。よって、ここに改めてこうした一群の土器に対して「晴ヶ峰式土器」として再認識することができる（註1）。補足になるが晴ヶ峰式におけるこの二者の関係は、北陸地方における福浦上層式・朝日下層式の二者に共通するのではなかろうか。北陸地方では、それを相前後する時間差として編年的に定着しているようであるが、あるいは同一型式内における二者の関係として再検討される余地があるのではないかと、本遺跡の資料を整理し編年を考えた上で感ずる。地域を隔てていることでもあり、早計にはいえないが、該期の土器研究には両地域の関係を知ることは不可欠で、今後の大きな課題として提示しておきたい。

このように、本大洞遺跡は土器型式でいうなら縄文時代前期諸磯C式から、中期初頭梨久保式にかけての過渡的な時期にあたる晴ヶ峰式期という比較的短期間のうちに最も活発な動きをもった時期を迎えた遺跡として評価し、理解しておきたい。

## (2) 石器群をめぐって

前項までに本遺跡出土石器群全体の出土状況及び各器種の様相を述べてきた。本項では、石器群の中で

---

〔註1〕 こうした編年観は扇平遺跡での成果とも一致しているといえる〔会田1974〕。

縄文時代前期末から中期初頭の石器群を抽出し、その器種組成・製作技術・各器種内の様相について考えたい。

① 前期末から中期初頭の石器群の抽出

縄文時代の石器群の中で、その特徴から時期限定できる石器もあるが、大半のものは土器群のように時期限定できる状況ではない。それは、これらの石器群が悠久たる縄文時代の流れの中で、そう大規模に変化することなく存在してきたという重要な側面であると共に、土器研究ほど石器研究が深化されていないことも要因であろう。そうした中で、最近各器種の分類、時間的変容・分布等について論考がなされ(加藤晋平編1983)、縄文時代石器の研究は深化されつつあるが、現状での石器群の時期限定においては、出土状況と伴出土器との関連で行うことが最良といえる。

本遺跡出土の石器群は、出土土器からみて縄文時代早期・前期・前期末から中期初頭・中期・後期・晩期のものが含まれていると考えることができる。土器の中で、圧倒的多数を占めるのは前期末から中期初頭の土器群で、他時期はごく少量である。状況から判断して伴出石器群の大半も、同時期と大枠でとらえて問題ないと考えたい。

ここで、今一步時期が限定できないか考えてみたい。石器群の出土状況をみると、遺構出土と遺構外出土のものがある。この中で、前期末から中期初頭の遺構出土のものは該期の石器群とすることができよう。次に、遺構外出土の石器群は、表に示したように各層から出土している。この中でI~IV a層出土土器は、前期末から中期初頭が絶対的多数であるが、早期・前期・中期・後期・晩期・平安時代のものもあり、混在幅が大きく、時期の限定はできない。IV b層は同様に前期末から中期初頭のもので大半で、これに早期・前期が混在するが、その幅は狭くなる。V層は早期押型文土器がわずかに出土し、石器もわずかである。こういった状況と該当遺構の検出状況を考え合わせると、IV b層出土石器群は前期末から中期初頭のものとして捉えられる。ただ、前述したように早期及び前期の土器も出土しており、これらの時期の石器群も混在していることは確かである。しかし、出土土器量は、前期末から中期初頭のものに比べて数%であること、また、押型文土器に伴出例が多いとされる「鋳形鏃」も213点の石鏃中の6点だけであることを考えると、その混在度はごく少量とみてさしつかえなからう。

以上、本遺跡における縄文時代前期末から中期初頭の石器群は、該当遺構出土資料とIV b層出土例が相当すると判断できる。

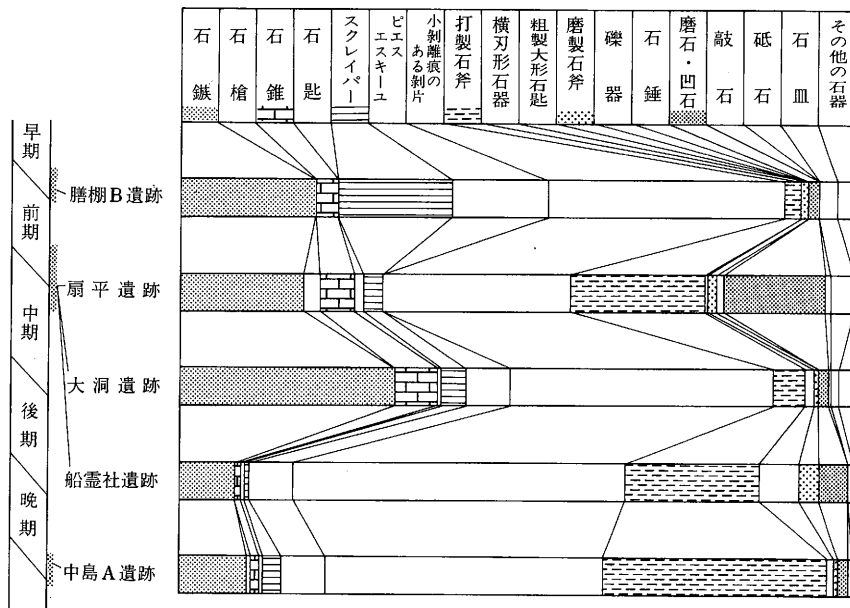


図134 石器組成の比較

## ② 器種組成 (図134)

IV b層及び該当遺構出土の石器群の各器種は、機能・用途を反映していると考えることができ、器種組成から遺跡の生産基盤の類推も可能となる。そこで、本遺跡での該期石器群の器種組成を概観し、同時期の扇平・船霊社遺跡及び早期末葉の膳棚B遺跡・晩期末葉前後の中島A遺跡の組成と比較しながら、本遺跡での生産基盤の類推を行ってみたい。

本遺跡の前期末から中期初頭の石器群の器種組成は、図134に示す通りである。石鏃・小剥離痕のある剥片といった黒曜石製の石器が9割ほどになり、中でも石鏃・小剥離痕のある剥片が大半を占める。一方、打製石斧・石皿等の割合は低い。この傾向を扇平・船霊社遺跡と比較してみた。扇平遺跡は本遺跡よりやや古い様相を示し、船霊社遺跡は新しい様相を示す遺跡であるが、前期末から中期初頭として括ることができる。この両遺跡の器種組成が、本遺跡と大きく異なる点は打製石斧の割合が高く、石鏃の割合が低いことである。また、本遺跡が山麓の谷間に立地する遺跡であるのに、扇平・船霊社遺跡は山麓扇状地上に立地するという立地環境に大きな違いがあり、後二者は本遺跡より大きな集落を構成していた。更に時期差のある遺跡と比較してみた。早期末葉の膳棚B遺跡、晩期末葉前後の中島A遺跡の状況を図134に示したが、膳棚B遺跡は本遺跡よりスクレイパー、ピエス・エスキューが多いものの、全体としては本遺跡と類似傾向にあり、中島A遺跡は打製石斧が多く扇平・船霊社遺跡と同様の傾向を示している。

こうしてみると、本遺跡と膳棚B遺跡、扇平・船霊社遺跡と中島A遺跡が、器種組成について類似し、前者は石鏃・スクレイパーといった石器が高い割合を示す遺跡、後者が打製石斧等の割合が高い遺跡ということになる。石鏃・スクレイパーが多い事実は、狩猟及びその解体処理具が多いということであり、狩猟にその生産基盤の重きを置いているといえよう。一方、打製石斧が多いことは、土掘り具的機能をもつ道具が多いということになり、植物質食料獲得に重きを置いていると考えられる。たとえば、中島A遺跡の時期は、農業生産を基調とする弥生時代への直前であることから、打製石斧の多さは植物質食料獲得と相関関係にあると考えられるし、扇平・船霊社遺跡共に製粉具の一部と考えられる磨石・凹石が、本遺跡より多いことからもうなづけよう。すなわち、本遺跡及び膳棚B遺跡は狩猟に重きを置く遺跡といえ、扇平・船霊社遺跡及び中島A遺跡は植物質食料獲得に重きを置く遺跡といえよう。とすると、前期末から中期初頭においては、生産基盤の重きを狩猟におく本遺跡例と植物質食料獲得に重きをおく扇平・船霊社遺跡例の両者があり、それぞれに立地を異にしていると共に、後者の方が大きな集落を構成しているという状況が浮かび上がってくる。これについては後述したい。

しかし、ここにも問題はある。1つは石器が何故遺跡から出土するかという点である。たとえば石鏃は集落内で作られても、その使用は狩猟場である。いいかえれば、集落外で使用されるから集落内には遺存しにくいと考えられ、集落内から多量の石鏃が出土したとしても、即狩猟的要素の高い集落とは言い切れない。出土した石鏃が破損品ないし未製品だけなら不要になって捨てたともいえるが、完形品が何故出土するのだろうか。本遺跡でも石鏃の出土品の45%は完形品であり、その出土状況にも規則性はなく、今後の課題といえる。もう一点は石器の用途の問題である。前述してきた点も、機能別用途は仮説に基づいており、これが崩れれば全て崩れることになる。用途については、使用痕観察等から推定する他ない。本遺跡でも肉眼で一部観察したが、打製石斧・磨製石斧等にわずかに見られた程度で、他器種では不明であり、今後の課題として残っている。

すなわち、どういう機能・用途を持った石器がどうしてここにあるかが明らかにされた上で把握された石器組成からその遺跡の生産基盤が規定できるはずだと考えられる。

## ③ 製作技術

縄文時代の石器製作技術の研究は乏しいが、近年剥片剥離の技法の解明〔山田昌久1985〕等序々に進めら

れてきている。本遺跡においても、多量の原石・剥片、そして製品が出土していることから当初製作技術について考えようとした。しかし、力量不足からその責を果たせないでいる。ただ、いくつか気付いた点を書き記しておきたい。

1つは剥片剥離における素材の獲得についてである。本遺跡出土の石鏃・石錐をみた時、その剥片素材には大きな違いがある。石鏃の素材は薄く偏平でそれなりの平坦面をもった剥片が、一方石錐においては縦長である程度の厚みをもった、断面三角形の剥片が用いられるケースが多い。この両者の違いは、剥片剥離を行う際にすでに意図的に行っているのではなからうか。とすれば、石鏃用の剥片剥離、石錐用の剥片剥離という具合に、それぞれに違いは出て来ないものだろうか。当然他の石器についても同様である。このような観点に立って結果がどうかは不明であるが、出土している石核・剥片の再点検を行なう必要があるし、石核・剥片研究を推し進める必要がある。一方、打製石斧の素材獲得についてはどうであろうか。出土している打製石斧を観察すると前述したように、円礫自然面と剥離面で構成されるものと、両面とも剥離面で構成されるものがある。この違いは、一個の円礫原石をその表面から内部まで素材としていることを示している。打製石斧が多量に出土する伊那谷南部では、円礫自然面と剥離面で構成される打製石斧・横刃形石器が多く、円礫原石の内部までの利用は少ない。こうした違いは石質の違いか、石材の豊富さの違いか考える必要がある。

このように製作技術の問題については、出土した石核・剥片の観察を抜きにしては語れず、器種別に独自の技術があるかどうかを見極めていく方向が必要であるし、地域の風土に立脚した製作技術の問題にも焦点をあてる必要がある。そうした中で、技術の違いをもちながら同様の器種を作り出しているとしたら、そこにおける石器は異なった意義をもつことになる。

#### ④ 各器種内の組成

本報告書の縄文時代石器の器種分けは、第I章4節に記した通りであるが、同一器種の中に形態の違いとか調整の違いによって分類できるものがある。本遺跡においては、石鏃、石錐、ピエス・エスキーユ、小剥離痕のある剥片について、前述の観点によって細分した。さて、こうした分類はどういう意義をもつのであろうか。

石鏃の場合を取り上げてみると、中茎の有無によって大きく無茎鏃・有茎鏃に分けた。有茎鏃の出現はこの地方では後期以降という観点から時期を論ずる上で有効である。次に無茎鏃は、その基部形態から凹基・平基・凸基に分けた。この三者については、前述したように本遺跡では、凹基と平基、凸基鏃ではその法量に違いがあった。後二者には未製品も含まれるのではないかという危惧も残るが、法量の違う石鏃を意図していたとすれば、今後の検証を必要とするものの、単なる基部形態の相違ではないといえよう。更に凹基鏃・凸基鏃をそれぞれ3つに細分した。凹基鏃はその抉りの深さの違いによって分けたが、この分け方はどのような意味をもつであろうか。1・2・3類は抉りの深さが違うだけで、それぞれの法量・側縁形状・先端形状には類似性をもっており、一見形状の違いだけの意味を持つように思われた。そこで早期末葉の膳棚B遺跡出土の凹基鏃と比較してみると、膳棚B遺跡の凹基鏃完形品は、1類：2類：3類で0：1：1を示し、本遺跡凹基鏃完形品では1：4：4の値を示した。膳棚B遺跡では凹基2類・3類だけで1類は皆無だが、本遺跡では2類と3類が同数で、量はそう多くないが更に1類が存在している。単純に両遺跡を比較すると、凹基鏃は前期末から中期初頭になると抉りが深くなり、更に抉りの度合を異にするものが混在するようになるという状況を見出すことができる。ちなみに他遺跡はどうかというと、東久留米市向山遺跡は早期末葉の大きな集落址であるが、出土した石鏃は本分類に照らすと2・3類が主体を占めるといい、船霊社遺跡出土の石鏃は、約1：2：1になっており、膳棚B遺跡と本遺跡の対比と同様の傾向が認められる。一方凸基鏃を3つに分けたことについては、膳棚B遺跡にもあるが、量が少な

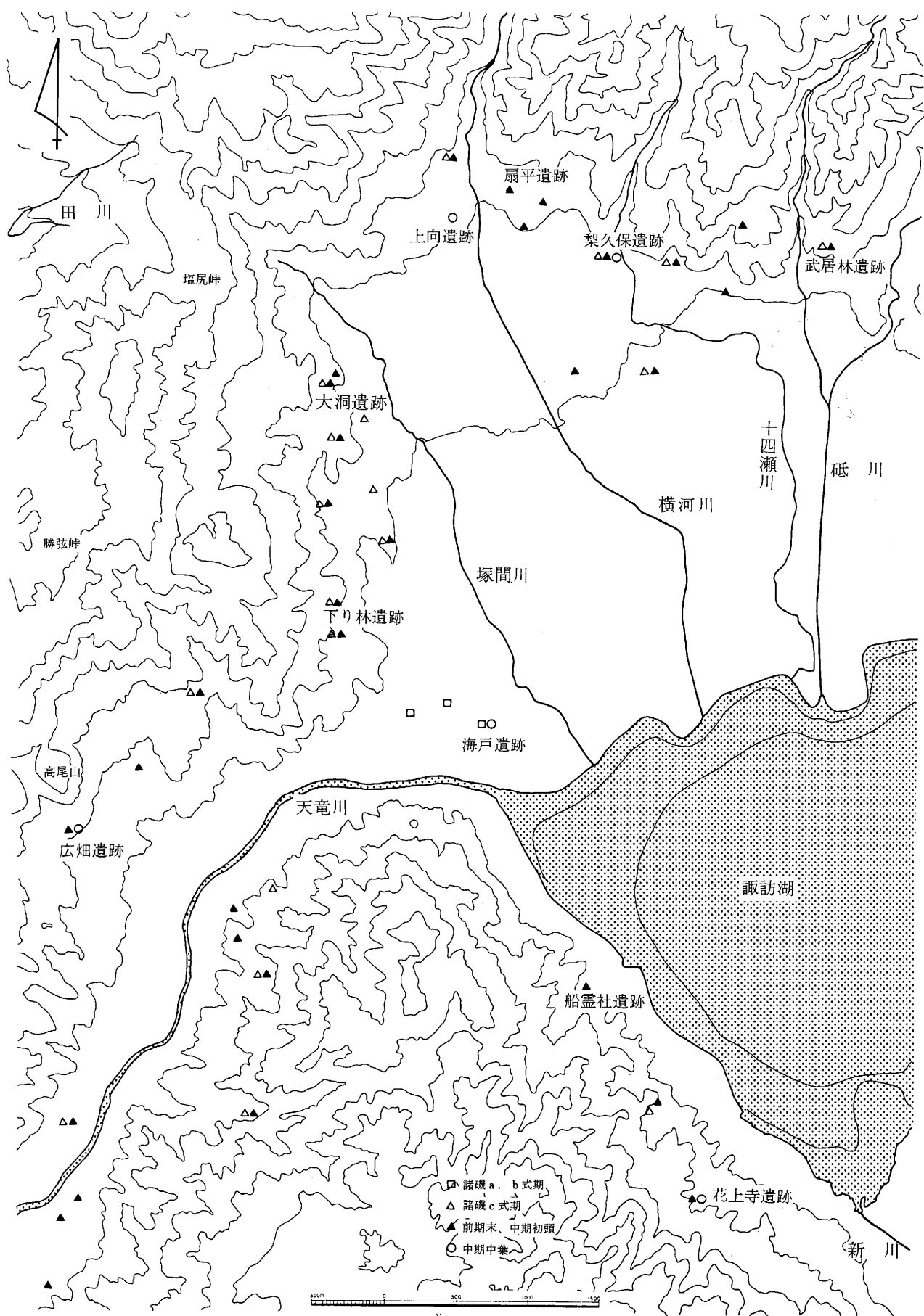


図135 岡谷市内の諸磯 a 式から中期中葉の遺跡分布図 (1 : 40,000)

く比較の対象にはならず、意味あるものかどうか不明である。しかし、本遺跡の凸基鏃としたものも3種類の違いがあるという様相を示す上では有効であると考えらる。

今後、本遺跡で行った分類や「鍬形鏃」といった分類がどういう意味をもち、何に有効なのかということ各遺跡の資料から類推・検証し、それに基づいて、縄文時代の石器の型式を考える必要がある。そうすることによって、本稿の冒頭で述べた、石器の時期限定・縄文時代石器群の変遷過程がより明確にとらえられると考える。一方、本遺跡では、石錐、ピエス・エスキューについても分類しているが、これらについても今後同様の観点で見たいこうと考えている。現状は分類したという状況である。

### (3) 集落とその性格

本遺跡の性格を考える上で、遺跡の広がり調査範囲についてふれておく。今回の調査で、北向斜面・谷底部の中央には遺構はなく、遺物の出土もわずかであった。また、谷底部西端は湧水地帯で、東端にわずかに遺構が見られただけで、遺跡の中心は南向斜面であった。南向斜面も中腹まで調査し、遺跡のほぼ全体を調査できたと考える。その結果前述したように、前期末第I群土器期には住居址2軒、土壙2基、(集石炉1基、ブロック)が、中期初頭第IV群土器期には住居址1軒、土壙6基、集石炉2+(1)基、(ブロック)が遺構群として存在した。両者は数の上では若干の違いはあるが、同じ種類の遺構群によって構成され、住居址と土壙・集石炉・ブロックとは場所を異にし、それぞれはまとまることから、その連続性がうかがえる。一方、該期に比定される土器群は、前項で詳述している通り、前期末第I群土器から中期初頭第IV群土器へとスムーズに型式変化しているととらえられた。すなわち、本遺跡の該期遺構群は土器2型式に

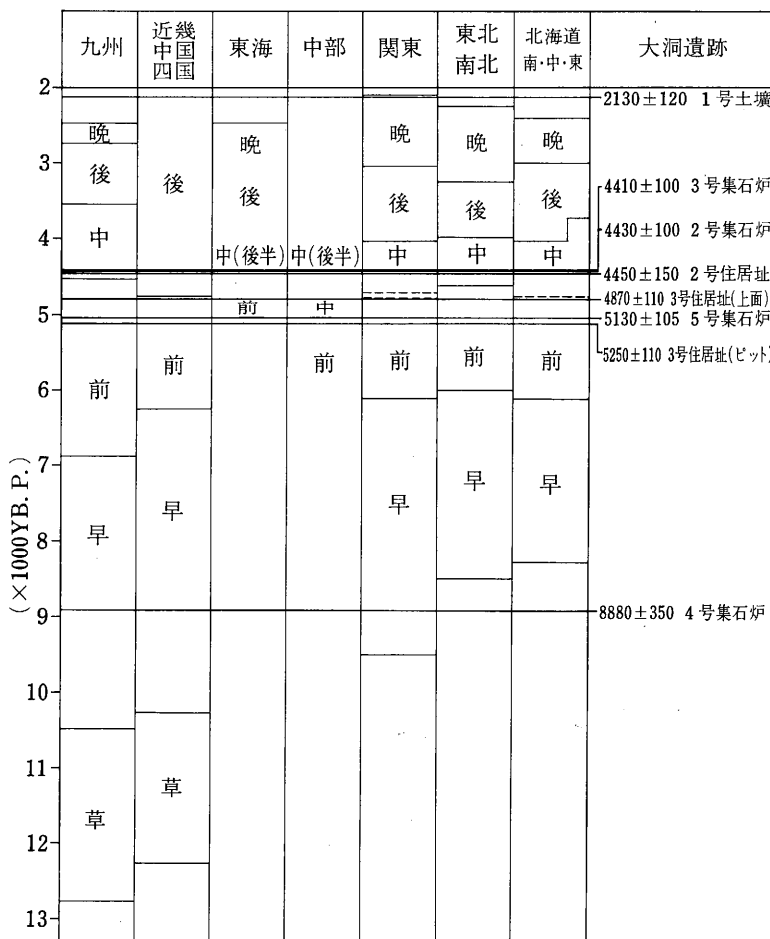


図136 14C年代測定値の対比

(地域別14C年代編年は〔キーン・C・T、武藤康弘1982〕より作成)

わたって連続的に営まれ、住居址数は少ないが機能・用途を異にする遺構群によって構成された、小規模集落の一つとしてとらえられよう。

今、14C年代測定結果をもとに本集落の継続時間幅を前期末3号住居址の5250±110と中期初頭2号住居址の4450±150から割り出してみると、およそ700～800年くらいとなる。この時間幅は集落のあり方からみてやや長すぎるように思う。全国の14C年代測定結果の集成〔キーン・C・T、武藤康弘1982〕を中部地方にあてはめてみても(図136)、前期末の年代はほぼ同じであるが、中期初頭の年代は中期後半の初めの年代に相当している。ここで14C年代測定について、云々する用意はないが、こうしたデータの積み重ねを行いながら、

実年代の割り出し及び土器型式との対比を今後行っていく必要があろう。その点で、本遺跡のデータは試料の位置・出土状況は明確であり、今後に役立てられる例となろう。

次に、集落内の遺構の配置状況と遺物の出土状況との関係から集落内の場の利用について考えてみたい。遺物の出土状況は前述したが、土器・石器共に南向斜面中央部に分布の中心がある。一方、遺物分布の中心地である南向斜面中央部は土壙・集石炉・ブロックが分布する地でもある。この両者の重なりは偶然のものであろうか。それぞれの遺構がもつ機能・用途を考えてみると、集石炉は、いろいろな解釈があるが調理用とする説が有力である。本遺跡の集石炉も炭や焼土を伴っており、明らかに火を使っていて調理用と考えたい。土壙は、多くの機能・用途が考えられ特定はむずかしい。本遺跡の土壙においてもその機能・用途を確定できる状況は発見できていないが、住居の間の墓地とは考えられず、貯蔵用と考えたらどうであろうか。ブロックは、原石集中と小剥片集中があり、この状況と原石・石核・剥片・更に製品である石器群が集中していることを考え合わせると石器製作の場が想定できよう。以上から、確定はできない面を多々含むが、土壙・集石炉・ブロックが集まり、遺物が集中する南向斜面中央部は、調理場であったり、石器製作の場であったり、貯蔵を行ったりという日常生活を行う場ととらえられ、集落共有の場として機能していたであろうと考えられる。それは、各住居址に明瞭な炉址が存在していないことから裏付けられよう。このように、本集落は居住の場としての住居と日常生活の作業空間をもっていた小規模な集落ととらえられ、その生活面はブロック・集石炉のあり方からIVb層中にあったといえる。

一方、本集落を支えた生産基盤はというと、石器群の組成の項で述べたが、狩猟具である石鏃の多いことから狩猟に重きを置く集落の可能性をとらえた。これを裏付ける知見はないが、おそらくその立地環境からみて可能性は高いといえる。しかも、集落を構成する遺構のあり方からそれなりに自立的であった集落であろうと予想される。

本集落は狩猟に重きをおき、自立的な生活を行っていた小集落ととらえるだけで十分であろうか。この点について、黒曜石の原石がブロック出土のものを含めて非常に多いことが気にかかる。同時期の他遺跡と比較・検討してないので、どの程度かは不明であるが、多いことには間違いない。近年黒曜石貯蔵例を集成された長崎元廣氏は、貯蔵例は中期になって集中してあらわれ、「中期集落では自己消費にとどまらず、近隣集落や遠方集落に黒曜石原石、黒曜石製品を供給していたものとする。黒曜石貯蔵例のあり方の多くはそうした交易の一面をも意味している」(長崎元廣1984)ととらえられている。ここに、黒曜石原石及び黒曜石製品の交易という観点が浮び上がってくる。本集落は、黒曜石貯蔵例が集中しはじめる時期に明瞭な姿をもって出現した集落で、黒曜石総出土量も60kgを超す。そして、原石や石鏃といった製品が多量にある。2軒ほどの小集落内での自己消費とは考えられず、そこに交易との関わりを考えたい。また、立地が諏訪盆地と松本平を結ぶ峠の麓に位置することから、その可能性はなおさら高く、第III群土器にみられる搬入土器そのものの存在からもその可能性はうかがわれる。このように、本集落は交易の一中継地ないしは供給源としての性格も合わせもっていると考えられるのである。

この地方では、本遺跡のような小集落は、従来より「高地性小規模集落」と称し、狩猟の民の遺跡として性格づけられ、しかも、この期に前時期の遺跡と立地及び場所を異にして飛躍的に増大することが注目されてきた(戸沢1953, 1974)。岡谷市内のこの期の遺跡分布は図135に示したが、本遺跡もかねてから注目されてきた塩嶺山麓のこうした遺跡の一つとして加えることができる。しかも、交易に関わりがあろうという性格が加味された点は重要であり、今後大切に考えていきたい。

もう一点、本遺跡のような小規模集落と共に、扇平・梨久保・船霊社遺跡といった大きな集落も確認されてきており、すでに縄文中期初頭の遺跡のあり方の二つのパターン(戸沢1974)として注目されてきている。この両者の違いは石器の器種組成の項で生産基盤の違いととらえたが、集落規模と生産基盤の関係は



今後も検討したい課題である。さらに、大小二種類の集落が何の関わりもなく存在したとは考えられない。特に本集落の性格の一つに挙げた交易という視点からは両者が関わっていて当然であると考えられる。しかし、その関わりの内容の復元はまだ手がついていない現状であろう。おそらく、長地山麓・塩嶺山麓に立地する該期の大小遺跡群が、互いに有機的関連をもち、互いに役割を分担しながら、該期の社会を構成していただろうと考えられる。そうした遺跡の一つに本遺跡があり、また本報告書所収の下り林・西林A・膳棚B（白山）遺跡があるといえる。そして、この有機的関連・役割分担の内容が明確にされることによって、後続する中期中葉文化の隆盛の要因をより具体性をもって論ずることができよう。そのためにも、集落の規模の大小にかかわらず、一つ一つの集落の性格を明らかにしていくことを、今後の研究の方向性の一つとしてとらえたい。

## 6. 小結

本遺跡は、塩嶺山地の山麓部に立地する遺跡である。その立地環境は北向斜面・谷底部・南向斜面に分けられ、当初は谷底部の緩傾斜地を中心に集落址が存在すると予想した。しかし、実際には、南向斜面が本遺跡の中心でここから縄文時代早期から晩期、平安時代の遺構・遺物が発見された。

密接施文された楕円文をもつ土器群という単一様相の縄文時代早期押型文期には、土壌を伴う小規模な生活址、たとえばキャンプサイトのな地であったと思われる。次は前期諸磯b式期に生活痕跡が見られるが、出土土器量からして早期と同様の性格であったと考えられ、また次の諸磯c式期も同様であったろう。本遺跡の最盛期は次の晴ヶ峰式期から梨久保式期の前期末から中期初頭である。この時期の性格については既に詳述したが、狩猟に重きをおく自立的な集落であり、かつ交易の中継地・供給源としての性格を合わせもつ集落として存在したであろうことが類推された。しかし、次の時期には突如として集落は消え、中期後半、後期前半、晩期後半に、わずかに人の足跡が残されているにすぎない。そしてさらに空白期間をおいた平安時代になって墓域としてまた利用されている。これ以後については不明であるが、近年この一帯は水田・畑・山林として活用されていた。そして、現状は中央自動車道長野線通過地となり、古代人の足跡は消え去ると共に、旧来の地形も大きく変形されたのである。

### 参考文献

- 会田進 1970 「長野県南安曇郡奈川村学間遺跡発掘調査報告」 『信濃』22-2 信濃史学会  
 " 1974 「扇平遺跡の土器について」 『扇平遺跡』 岡谷市教育委員会  
 今村啓爾 1974 「登計原遺跡の縄文前期末の土器と十三菩提式土器細分の試み」 『とけっばら遺跡』 登計原遺跡調査会  
 " 1982 「諸磯式土器」 『縄文文化の研究3（縄文土器1）』 雄山閣  
 梅原末治 1935 「京都北白川小倉町石器時代遺跡調査報告」 京都府史名天調査報告16  
 片岡肇 1979 「押型土器」 『縄文文化の研究3（縄文土器1）』 雄山閣  
 加藤晋平編 1983 『縄文文化の研究7（道具と技術）』 雄山閣  
 加藤芳朗 1964 「腐植にとむ土壌（「黒ボク」土壌）の生成に関する問題点」 『第四紀研究』3-4 日本第四紀学会  
 キーリC. T、武藤康弘 1982 「縄文時代の年代」 『縄文文化の研究1（縄文人とその環境）』 雄山閣  
 芹沢長介編 1979 『聖山』  
 戸沢充則・宮坂昭久 1951 「宮川村晴ヶ峰発見の土器」 『諏訪考古学7』  
 戸沢充則 1953 「諏訪湖周辺の中期初頭縄文式遺跡」 『信濃』5-5 信濃史学会  
 " 1974 『岡谷市史一上巻』 岡谷市  
 長崎元廣 1984 「縄文の黒曜石貯蔵例と交易」 『中部高地の考古学III』 長野県考古学会  
 松沢亜生 1957 「細久保遺跡の押型土器」 『石器時代』4 石器時代文化研究会  
 三上徹也 1986 「縄文時代中期初頭土器の分類と検討」 『梨久保遺跡』 岡谷市教育委員会

- 八木光則 1976 「いわゆる『特殊磨石』について」 『信濃』28-4 信濃史学会
- 山口 明 1978 「縄文時代中期初頭土器群の分類と編年」 『駿台史学』43 駿台史学会
- 〃 1980 「縄文時代前期末葉鍋屋町系土器群の動態」 『長野県考古学会誌』39 長野県考古学会
- 〃 1984 「中部地方における前期末葉土器と鍋屋町式土器」 『長野県考古学会誌』48 長野県考古学会
- 山崎丈ほか 1976 『向山遺跡』東久留米市教育委員会
- 山田昌久 1985 「縄文時代における石器研究序説」 『日本原史』 吉川弘文館

## 第5節 <sup>ぜんたな</sup>膳棚A遺跡 (G Z T)

### 1. 遺跡の概観

岡谷市1340～1342番地付近に所在する。

塩嶺山塊末端から南向きに張り出した小さな尾根の、東向き斜面に立地する。尾根の急斜面が沖積地に接して傾斜をやや緩めるあたりである。尾根の頂部は神明台タウンとして宅地化されている。尾根をはさんだ西側は大洞遺跡である。一帯は水田とりんご畑であり、今回の調査はりんご畑であった。

### 2. 調査の概要

本遺跡は中央自動車道長野線にかかる県営住宅の代替宅地に供されるため、県からの委託を受けて調査を行うことになった。遺物採集量もわずかで、地形も急斜面のため、300㎡を対象とした確認調査を行い、その上で対策をとることとした。確認調査は昭和57年7月に行い、調査員は主として3名があたった。確認調査の結果、これ以上の調査は不要と判断されたため、引き続いて整理事業に入った。原稿執筆以外の作業は年度内に終了した。

調査はトレンチ調査のみで、トレンチは地形に対して縦横に、11本設定し、すべて手作業で発掘した。測量はトレンチ配置と土層図のみのため、測量基準点からの距離と方向の計測で十分と判断した。測量基準点は、岡谷インターチェンジ関連遺跡の共通基準点である工事用杭、BSTA 0 +37.00から振り出して独自に設定した。座標値はX = 8664.1687、Y = -41139.4966である。レベル原点は工事用水準点から引いて設定した。

### 3. 調査の経過

#### 昭和57年

- 7月14日 包含層を捉えるため全域にトレンチ11本を設定して調査開始。礫が多く、遺物はほとんどなし。  
7月15日 用地買収の問題から一時中断するが、解決。  
7月23日 表土層以外に遺物なし。土層図作図をもって調査終了。

7月24日 整理事業開始。図版作成を年度内に完了させる。

#### 昭和61年

3月31日 年報1の刊行に合わせて原稿執筆。

### 4. 調査の結果 (図137・138)

遺物は表土層以外からは全く出土せず、包含層はない。層序を示すと以下の通りである。

I層：表土層で腐植土。縄文時代中期～後期土器片、土師器片等をわずかに含む。

II層：軟らかい黒色土層で、やはり腐植土。

III層：堅くしまった黄褐色土層で、ローム質と礫を含む。

III層の下に恐らくは塩嶺累層から崩落した礫主体の層があるとみられ、巨大な礫が地表にも頭を出していた。III層は北西部の沢の押し出しまたは尾根からの転落によって形成され、I・II層は土壌化作用の結果成立したと思われる。

遺物はP L 56-3に示したものがすべてで縄文時代の土器・黒曜石片・近世の陶器がある。

以上のような結果から、この地点は生活の場としては好適ではなかったと思われ、表土層の遺物も尾根上等から流れきたのだろう。



図137 膳棚A遺跡発掘範囲及び地形図 (1:1,000)

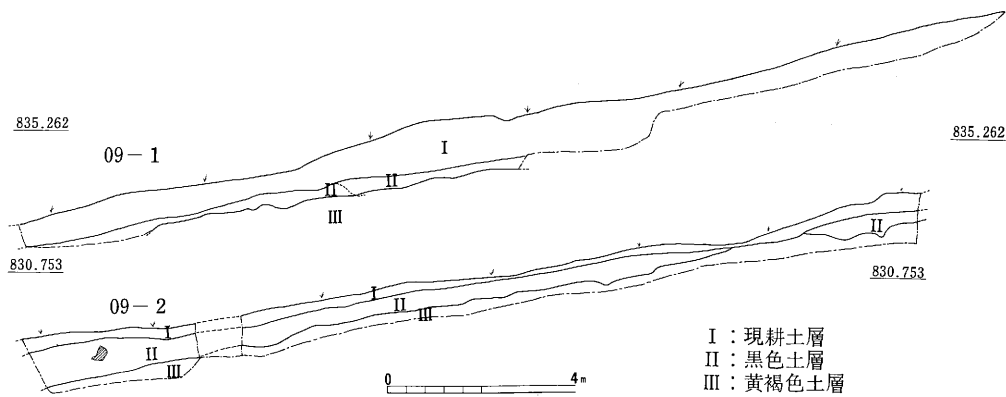


図138 膳棚A遺跡土層図 (1:160)

## 第6節 <sup>ぜんたな</sup>膳棚B <sup>はくさん</sup>(白山)遺跡 (GHS)

### 1. 遺跡の概観

岡谷市1415番地を中心に所在する。塚間川の形成した扇状地の扇頂に近い扇央の北西端に、塩嶺山地より東側へ張り出したやせ尾根があり、遺跡はこのやせ尾根上に立地する。地理的には、神明町十五社神社の北西約300mにあたり、尾根上の小丘には秋葉社がまつられていた。この尾根は、比較的大形の古墳を想定させる程の規模で、発掘当初はその可能性さえ考えられたが、後の調査により、東西に走る複数の断層による残丘の1つであることが判明した。

この尾根は、平坦地との比高差が15m以上ある急峻なもので、前記した秋葉社がまつられていた他は、ほとんど森林で、畑地等の利用には適した環境とはいえない。しかし、それだけに眺望は良く、南東方向に諏訪湖を中央におく諏訪盆地が一望でき、遠く八ヶ岳、富士山も眼中に納まる。しかし遺跡の裏手にあたる西側には塩嶺の山々が迫っている。

本遺跡に隣接する遺跡は多い。北東に柳海途、中島A・B、膳棚Bの各遺跡が、南西側には大洞遺跡が点在し、遺跡の密集した一帯となっている。

### 2. 調査の概要

本遺跡は、古くからそれとして注意されていたようであるが、先にも述べた様に森林の中でもあり、ほとんどその性格や実態については知られていなかった。当初は調査対象外とされていたが、尾根の形状が古墳の墳丘に似ていることから調査対象とすべきだとする意見が出され、昭和59年になって、筑波大学岩崎卓也教授等の指導を受けて発掘調査を実施することになった。すなわち、昭和59年7月30日、岩崎教授と諏訪考古学研究所宮坂光昭氏による現地指導では、前方後円墳である可能性は低い、自然丘陵を利用した古墳である可能性は十分に考えられるということ、もしそうならば竪穴式石室を持っていることが考えられ十分なグリッド調査とトレンチ調査が最低限必要であるということが指示されたので、急拠本調査をすることになった。また、その折には、黒曜石片も採集され、集落遺跡としての性格もあり得ることを改めて確認することができた。

以上の状況をふまえ、本調査においては丘陵頂部を中心とした発掘区を設定し、調査面積は1,280m<sup>2</sup>で中島A・B遺跡の調査終了に合わせ、その調査に当たっていた3名の調査員が引き続き、本遺跡を担当し、昭和59年8月20日より調査を開始した。調査に際しては、急峻な斜面で作業に危険が伴ったために慎重が期され、また抜根、排土処理に時間が費やされ、面積の割には調査日数を要し、現地でのすべての調査が終了したのは同年10月9日であった。整理作業は同年12月からいったん開始され、昭和60年度には残余の整理も完了し本報告の刊行に至った。この間、当センター刊行の『長野県埋蔵文化財センター年報』1に調査の概要について報告した。

調査は前述の指導に基づき、丘陵の長軸方向、すなわち東西方向に1本のトレンチを、それと直交する形で南北方向に3本のトレンチを設定した。しかし、石室等は確認されず、古墳時代の遺物はなく、層位的にも古墳を築いた形跡はなかった。一方、住居址状の落ち込みや、縄文時代の土器片が丘陵西側に発見され、遺物はそこを中心に南側斜面に広がるのではないかと見られた。従って、以後、集落遺跡を対象とした平面的な調査に切りかえた。測量はすべて座標に合わせた杭を用いた割り付けによる。発掘域や土層図のポイントは光波測距儀で計測し、座標値に換算して作図した。測量基準点は、日本道路

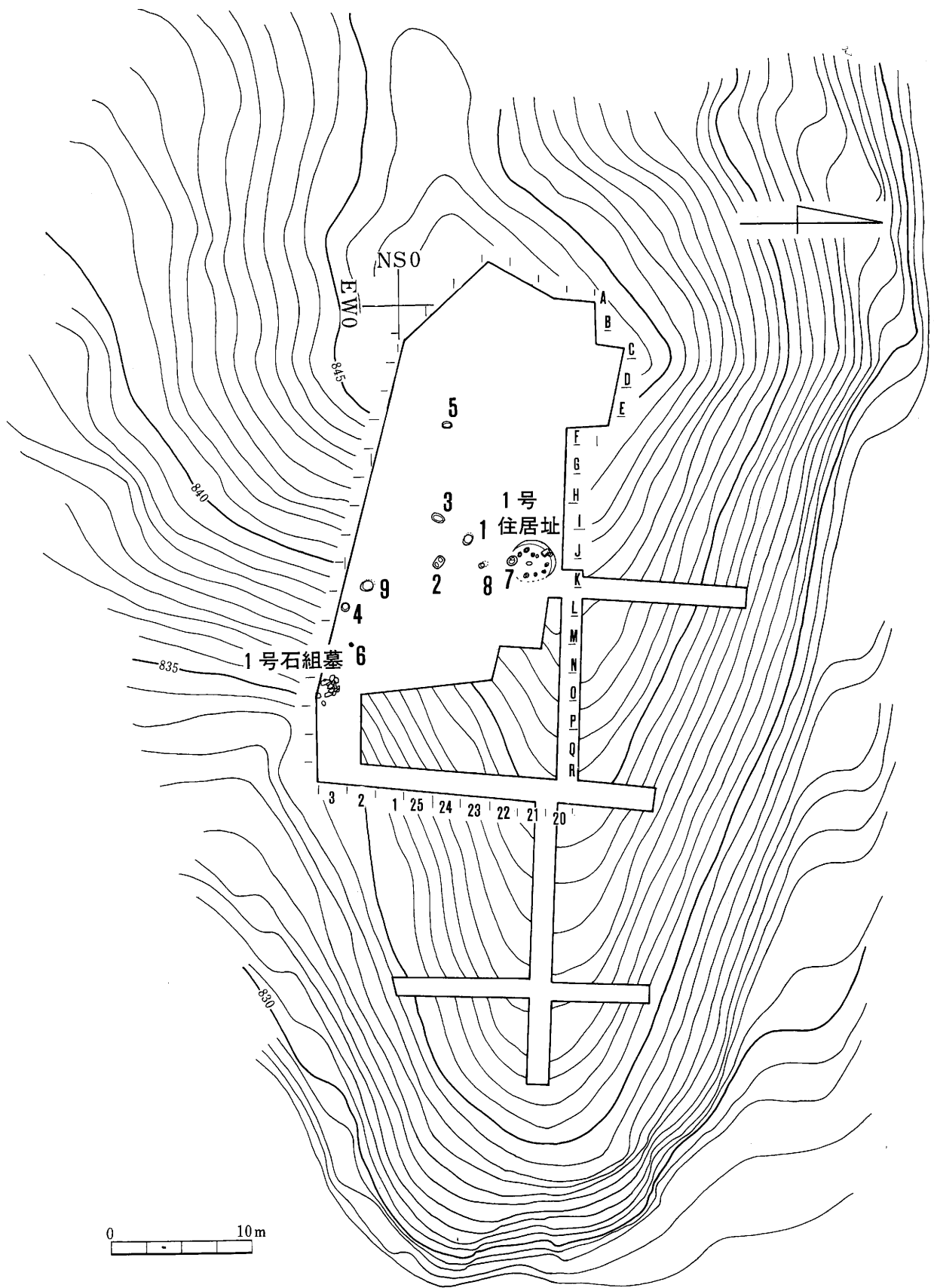


図139 膳棚B (白山) 遺跡発掘範囲・遺構配置及び地形図 (1 : 400)

公団の工事中センター杭、T24-14を用い、座標北は複数の工事中杭の座標値から換算した。基準点の座標値はX=8795.080、Y=-41197.024である。標高は同じく工事中センター杭BS TA 0+87.0(X=8934.0457、Y=-41060.9474)のレベル値を基準にした。その値は827.773mである。

### 3. 調査の経過

#### 昭和59年

- 7月30日 岩崎卓也氏、宮坂光昭氏、現地指導(岡谷市教育委員会立ち合い)。
- 8月20日 発掘調査開始。丘陵頂部に尾根筋に沿う東西方向に、市松状のトレンチをいれる。その東側半分ではすでに地山であるローム層が部分的に露出しており、西側に期待がかかる。
- 8月23日 南北方向に直交するトレンチを3本設定し、調査に入る。最も西側に設定したトレンチに落ち込みを確認。
- 8月29日 頂上部、秋葉社付近にトレンチを入れ、配石を検出。南側斜面の拉張に入り、土壌検出。
- 9月5日 排土に苦慮し、排土用の「トヨ」を設営。幾分かの効率化を計る。
- 9月10日 南側斜面の最南に、石組み遺構を発見。後に石組み墓であることが判明。
- 9月13日 表土剥ぎを一通り終了し、遺構の検出にかかる。最初に確認された落ち込みは住居址であり、1号住居址として調査に着手。石組み墓にも着手する。
- 10月1日 頂上部、祠礎石の実測調査に着手。
- 10月8日 実測作業を残し調査終了。現場の撤収作業を行い、作業員の作業を終了する。



- 10月9日 実測作業を完了し、すべての現地調査を終了する。
- 11月1日 整理作業開始。年度内に遺物整理、図面整理を終了。
- #### 昭和60年
- 4月1日 岡谷市内報告書作成の一環として、本遺跡分も図面類の整稿に着手し、年度内にほぼ完了。
- #### 昭和61年
- 12月22日 原稿執筆完了。

### 4. 調査の結果

#### (1) 層序と地形形成 (図140)

前述した通り、本遺跡の立地する尾根は東西に走る断層によってできた残丘であり、塚間川の扇状地向かって東西に細長く突出する。その尾根の断面形は極端にいうならば正三角形状で、頂部には平坦面はほとんどなく、傾斜は急峻である。従って堆積層は上に薄く、下に厚い。これは、その地形の特性からも納得されることで、尾根頂部及び北側斜面では、I層腐植層の下はすぐに地山であるローム層になってしまう。南西斜面のみ比較的ゆるやかな傾斜をもち、地山とI層との間に5枚の層序が確認された。後述する遺物の動きもそうであるが、土壌は丘陵頂部から斜面を転落し、東西斜面の凹みにふきだまりの堆積していったものと考えられる。

その基本層序は以下の通りである。

I層：表土層。

II層：直径1.5～3cmの風化礫をまばらに含む暗褐色砂質土層。

III層：粒子の非常に細かい黒色土層。粘性がややあり、若干の炭化粒子を含む。

IV層：粒子は細かくやや粘性がある。上部には上位層の黒色土を塊状に含み、漸移的である。

V層：スコリア粒子を多量に含み、粘性、しまりが非常に強い。明褐色を呈す。

VI層：スコリア粒子を多量に含むという点でVI層と同じであるが、黒色の色調を呈す。

VII層：地山、古期ローム層。塩嶺累層から崩落し、風化した凝灰角礫岩を含む。





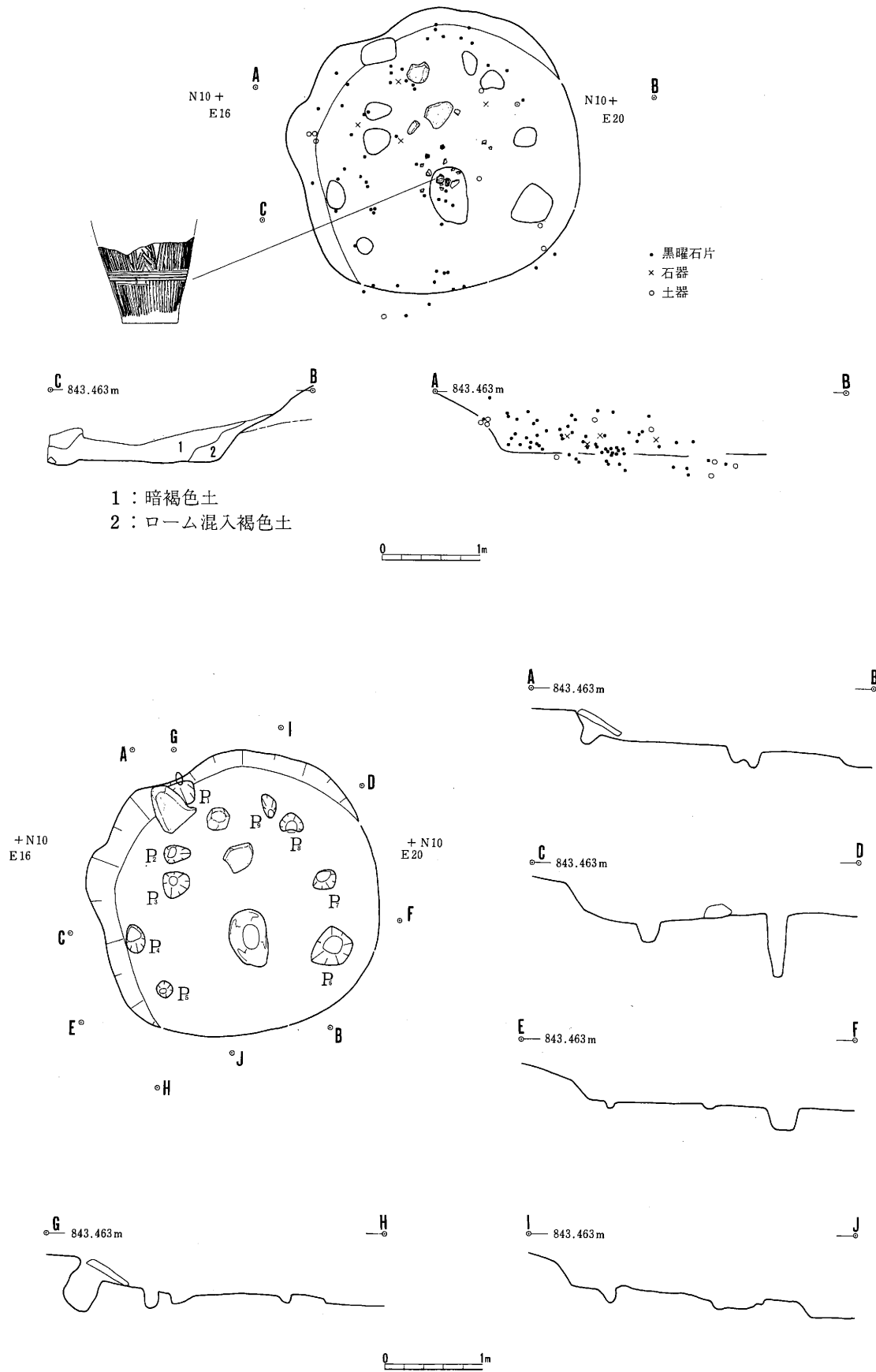


图141 膳棚B(白山)遺跡1号住居址実測図(1:60)

遺物はI層からIV層にかけて包含される。しかし、層の成立年代の特定は困難である。また、遺構の多くはVII層上面にて検出された。

(2) 遺構、遺物の概観 (図139)

遺構の存在が疑わしいほどの地形を呈する尾根であるが、小数ながらも縄文時代を中心とする生活の痕跡を示す遺構が検出された。

縄文時代では中期初頭の住居址1軒、土壇9基がある。また、奈良時代または平安時代と思われる石組み墓1基が、南側斜面にあり、丘陵頂部には、秋葉社の近世の祠の礎石が確認された。

遺物は、縄文時代早期条痕文系土器が比較的多かったほかは、縄文時代中期、晩期の土器及び縄文時代の石器、石片が発見されている。

(3) 縄文時代の遺構と遺物

① 遺構と遺物出土状況

ア. 住居址

(ア) 1号住居址 (図141・142)

本遺跡で発見された唯一の住居址である。尾根の南斜面頂部近く、標高838~838.5m付近に位置し、径3m弱のほぼ円形を呈する小形のものである。ローム層中に掘り込まれ、床面の水平を保つよう構築されているため、その地形からして壁は斜面頂部側(北東から南西にかけて)で高く、底部側では確認できなかった。柱穴、ピットは合わせて9ヶ所確認でき、その規模、深さからP<sub>4</sub>、P<sub>7</sub>、P<sub>8</sub>が主柱穴と考えられる。なお、P<sub>1</sub>は住居中央に向かって斜方向に穿たれており、あるいは住居構造上必要とされたもう1本の柱穴となり得ていた可能性もある。床は全体的に堅くたたきしめられており、中央やや南側に炉をもつ。この炉は炉石が抜去された跡が観察されている。焼土は厚くはないが炉の南半に集中していた。この他に、住居址内の内部施設として、輝石安山岩製の二等辺三角形を呈する板状の石が、北西壁際に立てかけられた状態で検出された。その形状や検出状況からして、住居奥壁に立てられた立石と考えられる。立石を伴う住居址としては、おそらく最古の部類に属すると思われる、立石祭祀の初源的な形態を考える上で、貴重な

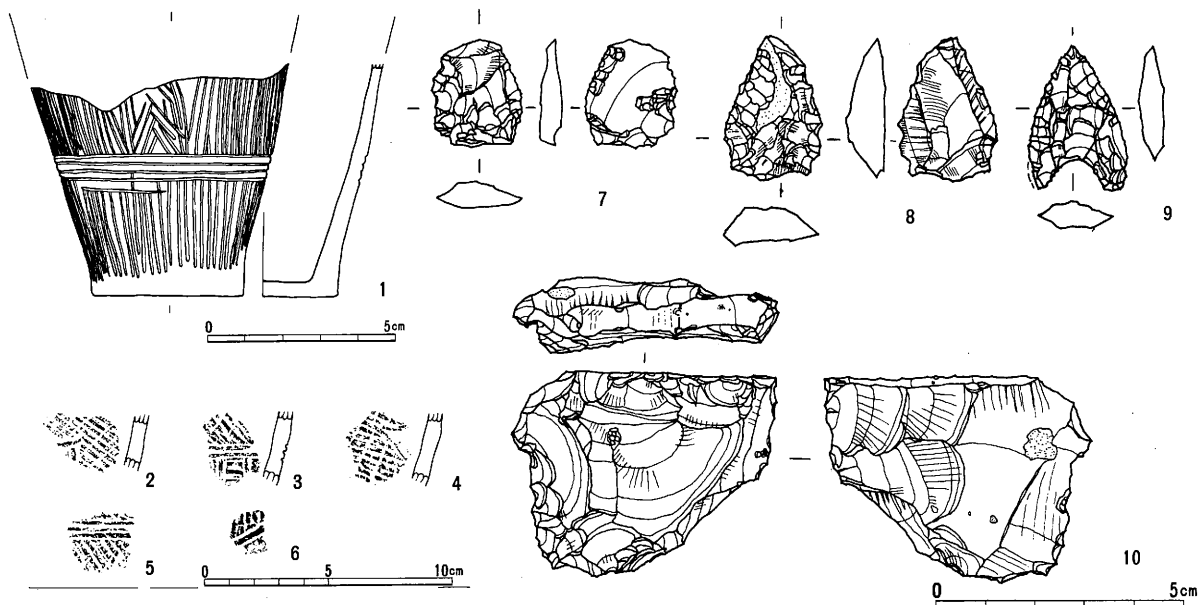


図142 膳棚B(白山)遺跡1号住居址出土遺物実測図・拓影(1 1:4、2~6 1:3、7~10 2:3)

資料といえよう。

遺物は決して多くない。黒曜石片をはじめとして採集した遺物を網羅しても図142に示したもので全部である。その分布は、炉を中心として散在している。

土器では、胴下半部の図142-1が炉床にほぼ密着した状態で出土した。2～6もその付近から出土したが、いずれも半截竹管状工具による平行沈線文の集合によって構成されるもので、中期初頭梨久保式土器である。住居もこの時期のものであろう。

石器も4点出土した。図142-7・8は石鏃の未完成品であろうか。9は石鏃、10は石核である。いずれも黒曜石が用いられている。

イ. 土壙 (図143)

土壙は全部で9基発見された。住居址から南斜面に南東方向に並ぶかの如く存在する。地形的にいうと、等高線が東西方向から南北方向に変わる変換点、いわば凹部となるあたりに集中するようである。

土壙の規模や形状については表14に示した通りである。いずれも楕円形ないし円形プランで、長、短径とも1mには欠け、深さでは0.5m前後のものが多い。出土遺物は全くなく、時期は決し難いが、付近の遺物からして縄文時代早期末かまたは中期前半のものであろうと考える。用途等を推察する上で示唆的な資料の得られたものはなく、一括して一般的な使い方としての土壙としておきたい。

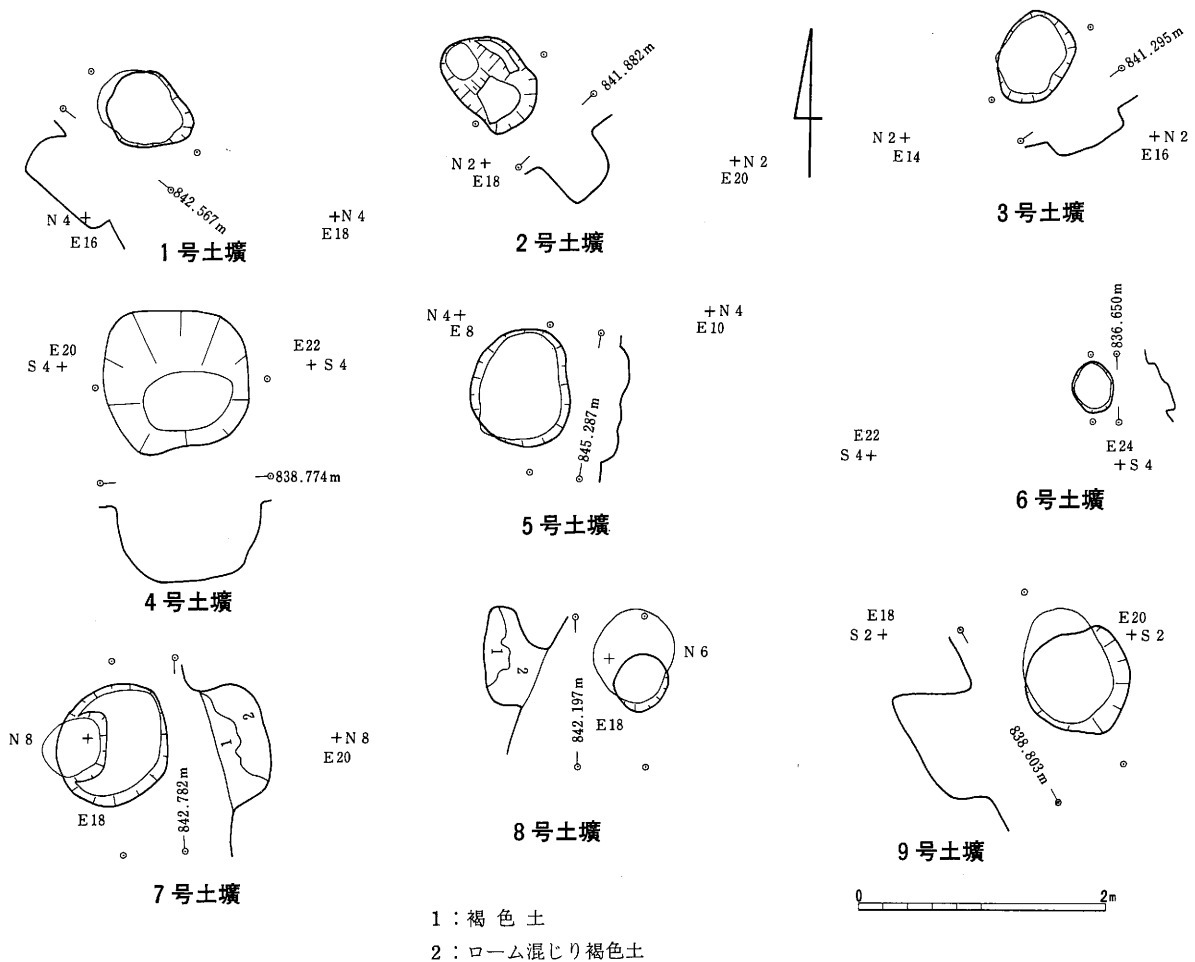


図143 膳棚B (白山) 遺跡土壙実測図 (1:60)

名称	平面形	規模(長径×短径×深さ)(cm)	検出層位	埋土	備考
1号土壙	楕円形	70 × 60 × 45	II層	しまりのない暗褐色土	
2号土壙	楕円形	84 × 60 × 44	II層	しまりのない暗褐色土	
3号土壙	楕円形	78 × 56 × 22	II層	しまりのない暗褐色土	
4号土壙	円形	130 × 110 × 60	II層	黒褐色土	
5号土壙	楕円形	94 × 80 × 12	VII層	II層に近い褐色土	
6号土壙	楕円形	40 × 34 × 12	VII層	黒褐色土	
7号土壙	円形	100 × 90 × 44	VII層	I. 褐色土、II. 黄褐色土	
8号土壙	円形	50 × 46 × 50	VII層	図示	
9号土壙	円形	90 × 84 × 66	VII層	黒褐色土	

表14 膳棚B(白山)遺跡土壙一覧表

#### ウ. 遺構外出土遺物(図144)

遺構外から出土した遺物の量は必ずしも多くはなく、その分布にも偏りがみられた。それは、地形コンターの変換点に集まる傾向をみせ、先の土壙の配置に一致する(図144上)。また、その中でも特に標高の高い地点よりも低い地点の方が、分布の密度が高いが、この傾向は土層の堆積状況とも一致する。これらの遺物の中から、3個体の土器の接合関係、ないしは同一個体の選別を図化したものが図144下である。実線が接合例、波線は接合はしないものの同一個体と認定できる例である。3点の土器は、いずれも地形・層序の傾斜と同一の方向に破片がちらばっており、急峻な斜面を上方から下方へ移動しているものとみられる。こうした事象から本尾根の続く西側ないしは南西側に生活の本拠地が存在していることが予想される。また、早期終末の遺物が、遺構に伴わずに少なからず出土しており、生活地から切り離された遺物が移動した結果と考えることができるだろう。

#### ② 出土遺物

##### ア. 土器(図145・146)

本遺跡出土土器は、時期的には大きく3つのグループにまとめることができる。縄文時代早期条痕文系土器群、中期初頭土器群、晩期の浮線文系土器群である。

図145、1～32が早期の一群で、さらに細かく分類することができる。この時期の土器が多く出土した下り林遺跡での分類をそのまま用いることにしたい(P58～P65参照)。30～32は貝殻背圧痕文をもち、田戸上層式に対比できると思われる。28は口唇部に刻みをもち、沈線文によって文様が構成される。胎土、焼成も良好で堅く、1類B種に属し、野島式でも古い様相を示す。1～8、14、16～27は、多量の繊維を含み、器壁も厚い。文様は主として沈線ないしは凹線で描かれることを特徴とし、3類B種とされた茅山下層式に相当する。この他に9～11はやはり繊維を含み、縄文の施文がなされるが、これらも恐らくこの茅山下層式の一群に含めてよいものと思われる。12・13・15・29は、29に代表されるように、絡条体圧痕文系土器である。本資料の粗大な原体、押しつぶされた隆帯、表裏の条痕等からみて絡条体圧痕文系土器の中でも比較的古い様相を示し、6類A種としたものである。また、この一群の胎土中には白色粒子を含むことが特徴とされているが、本資料にもそれが確認されている。

33～68は中期土器である。ほとんど縄文か、無文で、その細かな時期決定は困難である。かろうじて、58は縄文を地文とする上に半截竹管文による平行線文があり、また58は結節縄文を伴う縦位帯状の縄文があり、いずれも中期初頭梨久保式の特徴といえる。

図146は晩期の土器である。細密条痕をもち、いずれも堅緻な焼成を呈す。氷式の中でも後半に位置付くものであろう。

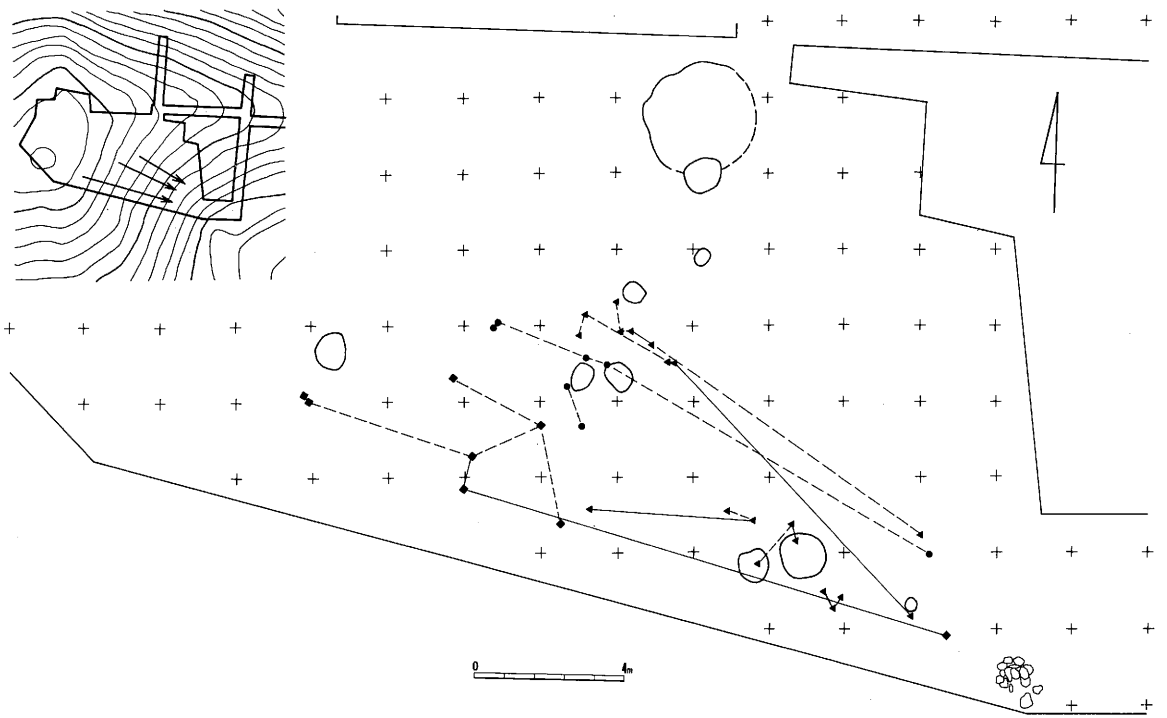
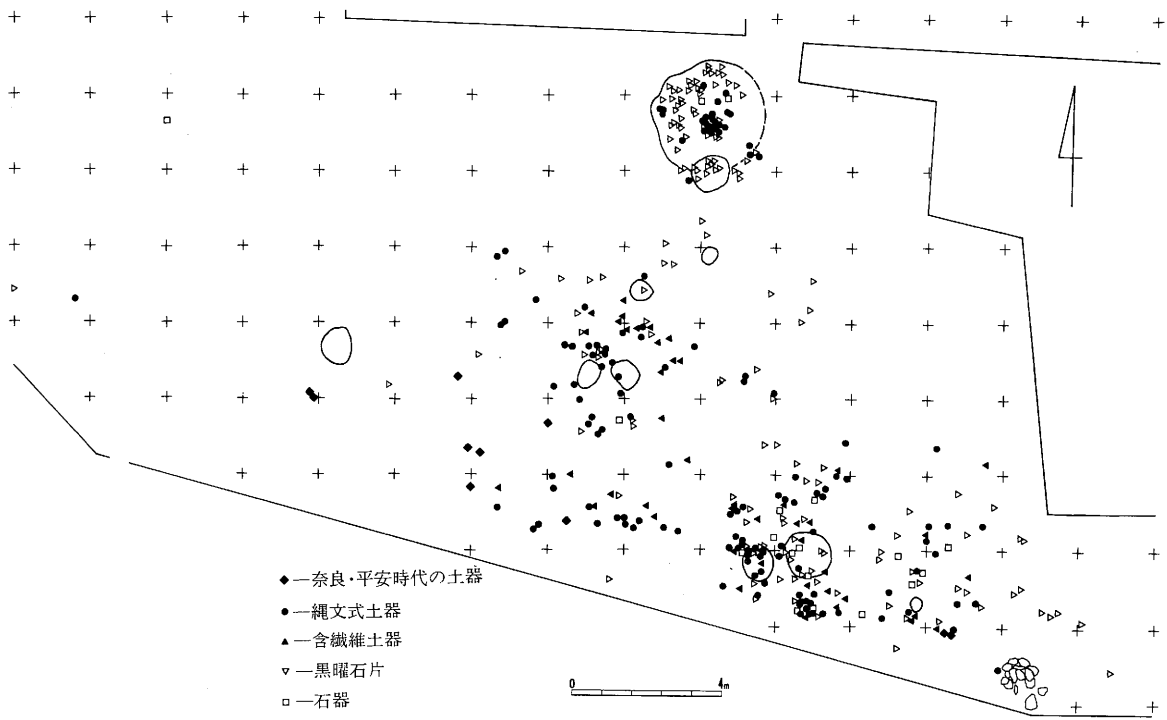


図144 膳棚B (白山) 遺跡遺物分布図 (上)・接合図 (下) (1:200)

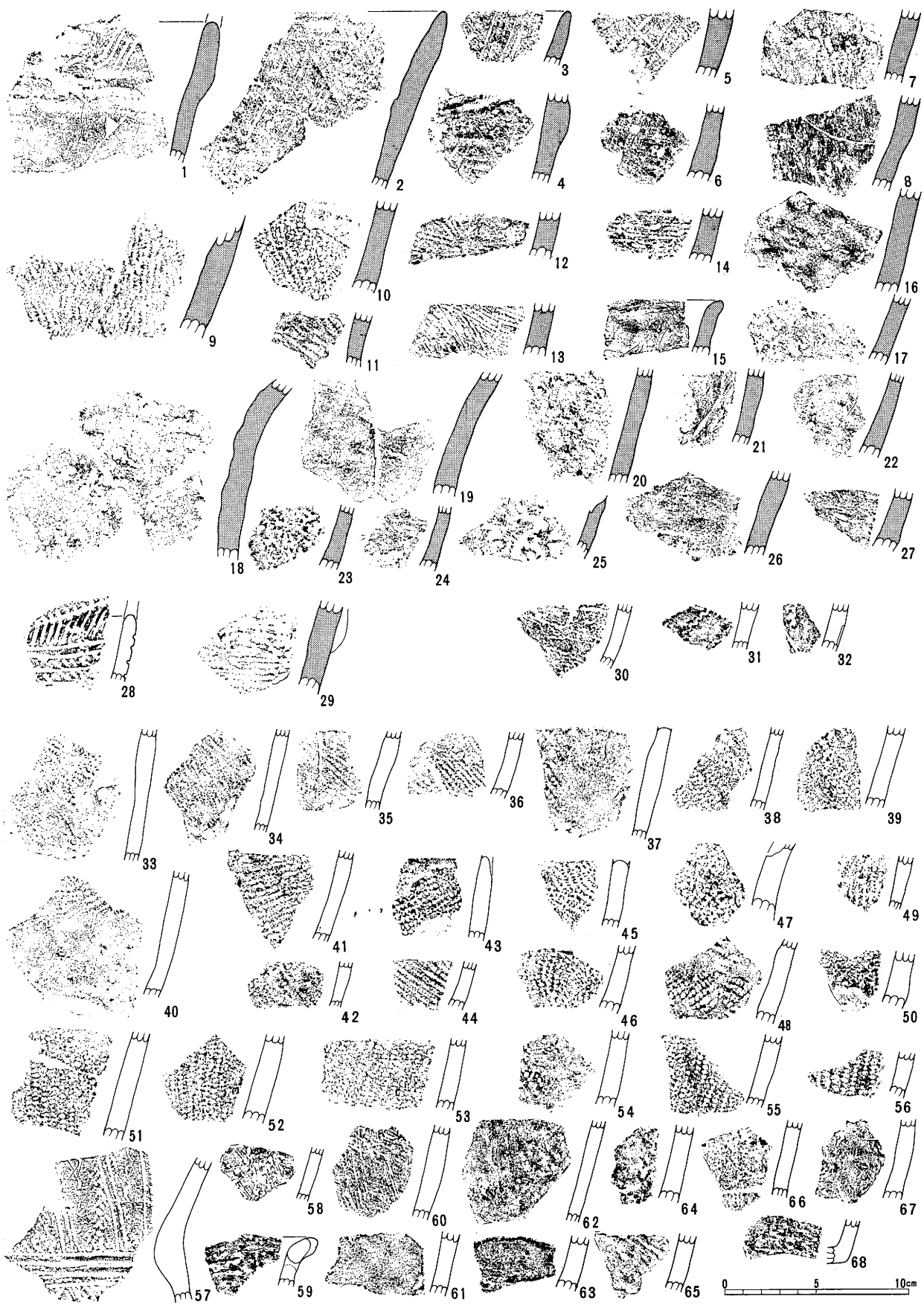


图145 膳棚B (白山) 遺跡遺構外出土遺物拓影 1 (1 : 3)

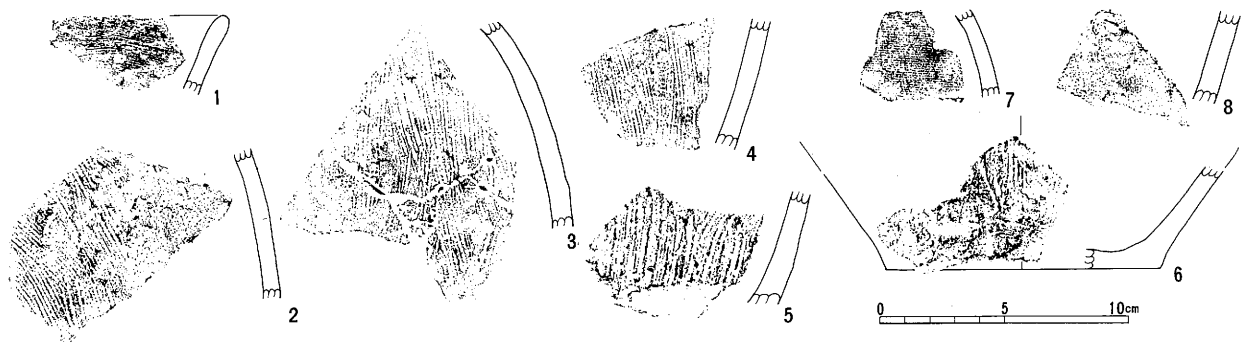


図146 膳棚B（白山）遺跡遺構外出土遺物拓影2（1：3）

イ、石器（図147）

石器の点数も多くはなく、図147にすべてを示した。1は石槍の頭部である。2～5は石鏃で、2は基部を欠損するが、3～5の基部はいずれも抉りが浅く、似た形を示す。6～12は、側縁部に小剥離痕の認められた石片である。以上はすべて黒曜石による。13～17は打製石斧でいずれも欠損している。

13・14・17は安山岩、15は凝灰岩、16は片岩製である。18～20は安山岩製の磨石である。18は平らな一面が、19は欠損しているが現存の中では側面に示した一面が、20はほぼ全面がそれぞれ磨かれている。

ウ、土製品（図147）

21に示した1点の土器片錘がある。縄文施文が認められ、恐らく縄文中期土器を利用したものであろう。

(4) 奈良、平安時代の遺構と遺物

① 1号石組み墓（図148）

本址が構築されている場所は、東及び、南西へ張り出した2つの尾根にはさまれた谷部の中腹にあたる。尾根の南斜面は急傾斜だが中腹でいったん緩斜面が形成される。本址はこの小平坦面北側の3×2mほどの窪地状の部分に構築されている。南方には諏訪湖を臨むことができる。その位置はS5・E28付近で、標高は836.7mある。

本址の構造は掘り方と石室からなる。石室の検出は表土（I層）の中位で、掘り方の検出は表土下の黄褐色土（II層）である。石組み開口部付近は尾根斜面に続いていくため、遺存状態はよくない。また、石組み開口部の南にみえる2枚の平石は褐色土（I層）の上ののっており、原位置を保ってはいない。盛土は全くみられなかった。また、本址の周囲には他に遺構はみられなかった。

掘り方は斜面の山側を谷側より多く掘り込んで平らな面を作っている。そこへ奥壁、側壁のうち大き目の石を置いた後、褐色土を入れながら他の石を置き、床面を整え、最後に中央の床石3個を配置している。

石室は天井石、奥壁、側壁、床石より成り、南側に開口部を作っている。奥壁、側壁には裏込めはなく、掘り方を石の大きさと形に応じて掘りくぼめることにより、壁上端のレベルをそろえている。石室の内法は縦65cm、横35cm、高さ26cmで、主軸方向はN7°Eである。

天井石は4枚あり、そのうち3枚は長軸方向を石室主軸方向と平行に、他の1枚は直行する方向に置いており、いずれも片側が石室内に落ち込んでいる。また、石室開口部上に天井石はなかった。奥壁は2個の石を用い、平らな面を石室内壁としている。側壁は西側に3個、東側に2個あり、奥壁同様平らな面を石室内壁としている。奥壁と東側の側壁には隙間がみられるが、これは土圧や木の根等により動いたためとみられる。床面には4個の石が配置されている。1個は奥壁に接して置かれた平石で、他の3個は石室中央部に置かれた山形の石である。3個の石は長辺の端部を接して置かれている。周囲には他に石はなく、



图147 膳棚B（白山）遺跡遺構外出土遺物実測図3（1~12 2：3、13~21 1：4）



床から石を抜いた跡もないため、これらの石は床石というよりはその直上から出土した骨片を安置するための施設であったと考えたい。

石室に用いられている石はいずれも風化が進んで角がとれた亜円礫で、表面には鉄分の沈着が強くみられ、明黄褐色～暗赤褐色を呈している。本遺跡近辺にはこのような石はみられず、本遺跡北方約400mにある塚間川から搬入したものと思われる。

天井石、奥壁、側壁、床石の4つの部分にはその目的に合った形の石を選んでいる。天井石は長さ32～36cmの亜円礫で、平らな面を広くもつ平石であり、奥壁はやはり亜円礫であるが、厚さ18cm～21cmと天井石よりも厚みがあり、壁となる平坦面をもっている。側壁は開口部両側の石が石組み墓を構成する石の中では最も大きく、長さ35cm(西)と42cm(東)である。奥壁と同様平坦面を広くもつ。この2つの石は他の側壁よりも大きく、平坦面も広いことから、この位置へ置く石として選ぶ際には特に注意されたと思われる。床石は長さ14～17cmの小ぶりな石を3個用いている。

その他、石室外南側で出土した3個の石も、本遺跡で大型の石の出土がひじょうに少ない点からみて、石組み墓と何らかの関わりがあるものとみられる。一部が石室内にかかっている石は、レベルからみて床石とほぼ同時期に置かれたと思われるが、石室の閉塞石としてはやや小さい。また、東側壁から南東へ15cmの位置で出土した2個の石は、石組み墓と18cmのレベル差をもち、元の位置から動いている可能性が高いが、石組み墓開口部上には天井石がない点、西側壁より東側壁の石が少ない点、石組み墓南端の掘り方には閉塞石を置いた跡はみられない点などから、やはり石組み墓と関わりをもつものと思われる。

このような点を考えると、石組み墓は構築時そのままの姿ではなく、後に少し崩れているようである。仮に、天井石を水平の状態に復元して石室空間を作ってみると、石組み墓の高さは床面から50cmほどになる。さらに、検出状況や天井石がしっかり残っていて後世の削平がほとんどないことから石組み墓には盛土がなされなかったと思われる。

石室内から出土した遺物には骨片、骨粉、炭がある。骨粉、骨片は石室を埋めた暗褐色土(I層)のうち、しまりのよい最下部～床石直上にかけて検出された。I層最下部では粉状であったが、床石直上では最大長2.5cmの骨片が出土した。分布範囲はほぼ中央の3個の床石の範囲内で、特に東側の2個の石のくぼみ部分に多くみられた。しかし、骨を納める容器や副葬品は全くみられなかった。

骨片、骨粉は資料が小さく、量も少なかったので鑑定が困難であった。信州大学医学部の西沢寿晃氏に次のような見解をいただいた。

- ① 真白な粉が残るのは火葬にした場合が多く、本遺跡出土例も火葬の可能性が高い。
- ② 人間の骨か動物の骨かは断定できないが、骨の表面のザラつきは人間である。(動物の場合は焼いてもスベスベしている。また、火に焼けて焦げていることが多い。)
- ③ 最も大きな骨片は指や足の骨ではなく、腕などの長管骨のようである。
- ④ 頭部などはふつう比較的残りがよいが、本遺跡で出土していないのは、全部石室へ入れなかったせいかもしれない。
- ⑤ 頭部、骨盤などの骨が出土していないので、男女の識別は不可能である。

以上のことより、石室内から出土した骨片や骨粉は火葬人骨である可能性が高い。

炭は奥壁近くの床石の南に、骨粉とほぼ同じレベルで、直径2～3mmの粒状のものがわずかに認められた。断定することはできないが、石室内で火葬に付すことは石室の大きさ、炭の量から考えて無理である。石室外で火葬にされた骨が石室内に納められる際、骨の保存用として炭がいっしょに納められたか、あるいは、火葬された場所で骨といっしょにすくいあげられた炭が残ったものであろう。

以上のことから、本址は、二つの小尾根にはさまれた谷部の南斜面中腹に、河原石を使い、南に開口部

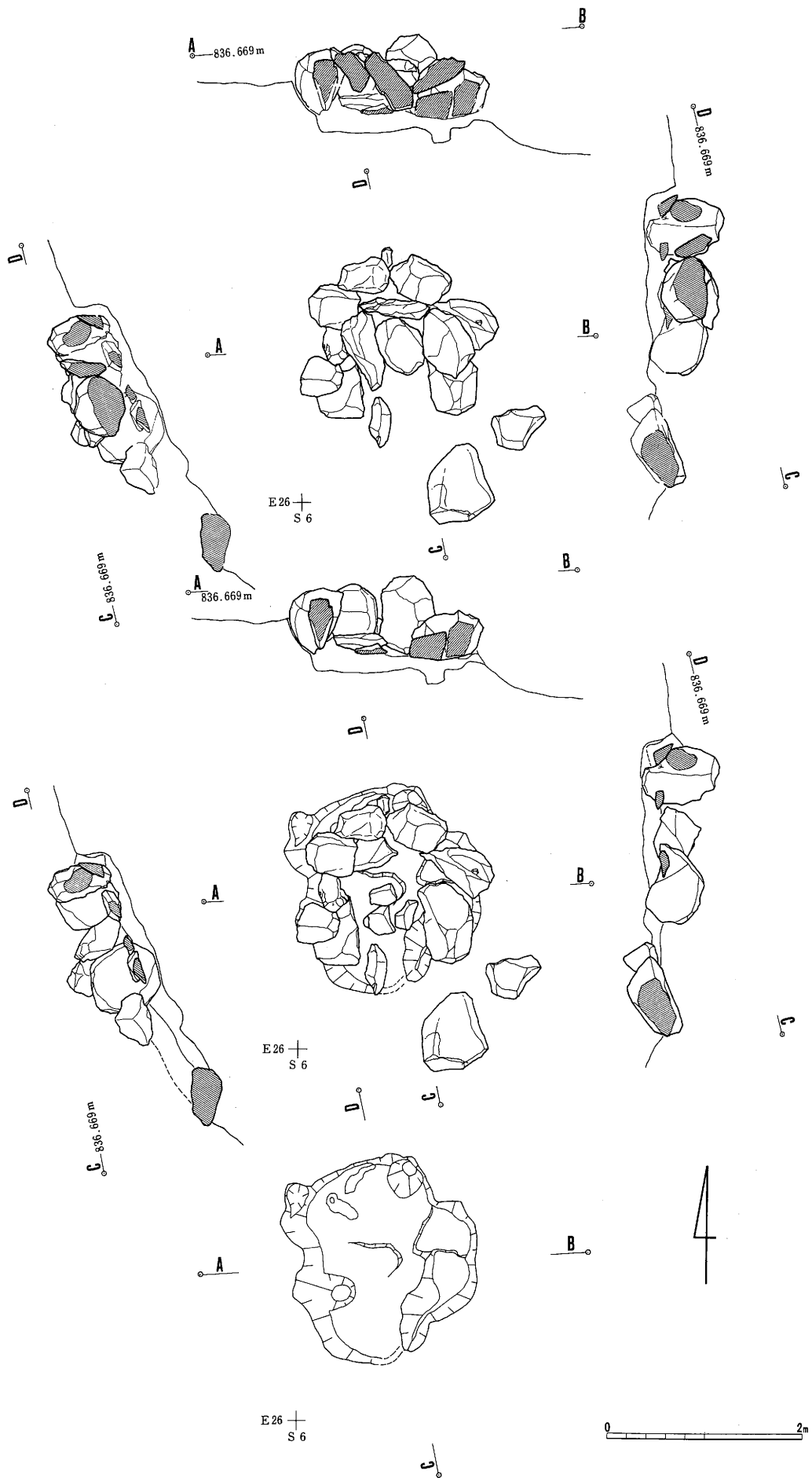


図148 膳棚B (白山) 遺跡 1号石組墓実測図 (1:60)

をもつ横穴式石室状の空間を作り、その内部に火葬に付した人骨を納めたものである(註1)といえるだろう。しかし、骨蔵器や副葬品が全くみられなかったため、構築年代を知ることは難しい(註2)。

現在、県内で知られている火葬墓は十数例である〔遮那藤麻呂1968〕が、そのほとんどは火葬骨が納められた骨蔵器が偶然に発見されたもので、出土状態の不明確なものが多く、伴出遺物もほとんどみられない。ただ大正14年に諏訪郡長地村東堀(現在の岡谷市長地東堀)で発見された火葬墓は、灰釉の長頸瓶の首を打ち欠いた骨蔵器の中に、火葬骨とともに皇朝十二銭の一つである隆平永宝を一枚副葬していた。骨蔵器が出土した場所は、長地小学校西側で、榎垣外遺跡の中の金山東地点にあたる(註3)。この付近は横河川が作る扇状地左側の緩斜面で、古くより開墾が進められたため、多量の須恵器、土師器が散布するが、封土は存在しなかった。骨蔵器は畑の段の地ならし中に発見されたが、それ以外の施設は認められなかった。火葬骨が入っていた長頸瓶と、蓋にされていた灰釉高台付杯より、およそ平安時代中ごろのものと報告されている〔藤森栄一1930〕。また第1節で報告した大久保B遺跡の2号墳墓も奈良時代の鏡を副葬している。

この2例はかなり時期が限定できるが、両者における立地や埋納構造の違いは明瞭である。本遺跡の石組み墓は、①立地(註4)、②南側に開口部をもつ石室構造、③骨蔵器をもたないこと、④骨の埋納のされ方などの諸点で、大久保B遺跡の墳墓と共通する特徴をもっており、石室の規模や副葬品の有無などの違いこそあれ、かなり近い時期に構築されたのではなかろうか。

#### (5) 近世の遺構と遺物

##### ① 祠址(図149)

本尾根の最頂部、標高にすると847m付近に、祠の祭られていたことは先にも述べた。これはごく小さなもので、今は訪れる人もほとんどいない状況であった。秋葉講を祭ってあるということであったが、それがいつ頃からのことなのかという記録も残っていない。今回の発掘調査によって、地下からかつての礎石と思われる配石や、往時の賽銭と思われる銭貨を検出することができた。

図149が、その祠址と思われる配石の遺構である。人頭大程度の平石が並び、その間にはあたかも石を固定、補強したかのように小石が埋められている。しかし配石の範囲は決して広いものではなく、4×3mに納まる。また、配石のすべてが礎石であったとは考えにくく、せいぜい1間四方前後の祠があったのではないかと想像される。

発見された銭貨は、ほとんどが寛永通宝で、1点の一銭硬貨を含む。

---

(註1) 火葬墓を構成する諸要素として、立地の問題、火化地と葬地との関連・墓の構造・蔵骨器の形式、あるいは副葬品の内容などがあげられる〔黒崎直1980〕。また、安井良三氏は、「火葬墓というものを理解するためには、蔵骨器以外の問題—立地・外相・蔵骨器の埋納の仕方即ち土中での在り方、等が注目されなければならない」〔安井良三1960〕とし、火葬墓を諸要素に分け、そのうちの構造の上から火葬墓を詳細に分類して、造営年代を判定しようとした。しかし、その分類項目は多岐にわたり、分類の成果が十分には生かされなかった。

(註2) 現在までに火葬墓は、奈良県・大阪府を中心とした近畿地方で数多く発見され、近畿地方の8～10世紀前半ごろまでの時期に限ってみても、180余基を数えるが、墓誌銘から年代が限定できる火葬墓はその1割にもみえない〔黒崎1980〕。このような状況の中で、火葬墓の年代を判断する手がかりとしては、火葬墓を構成する諸要素のうちの埋納の構造を考慮しながらも、蔵骨器と副葬品の形態・内容に直接求めるのが妥当とされている〔黒崎1980〕。

(註3) 『岡谷市文化財地図』より、付近一帯の片間町、金山東、古屋敷、トチノキ、青松垣外の各遺跡を総括して榎垣外遺跡として扱い、旧遺跡名を地点として残した〔金田進1983〕。

(註4) 大久保B遺跡や本遺跡のような立地は「風水の思想」にもとづくものといわれ〔斎藤忠1935〕、最近の例では太安萬侶墓に典型的にみられる〔水野正好1984〕。水野氏は、こうした立地の中の範囲を「墓域」あるいは「兆域」といった概念に当たるとしている。

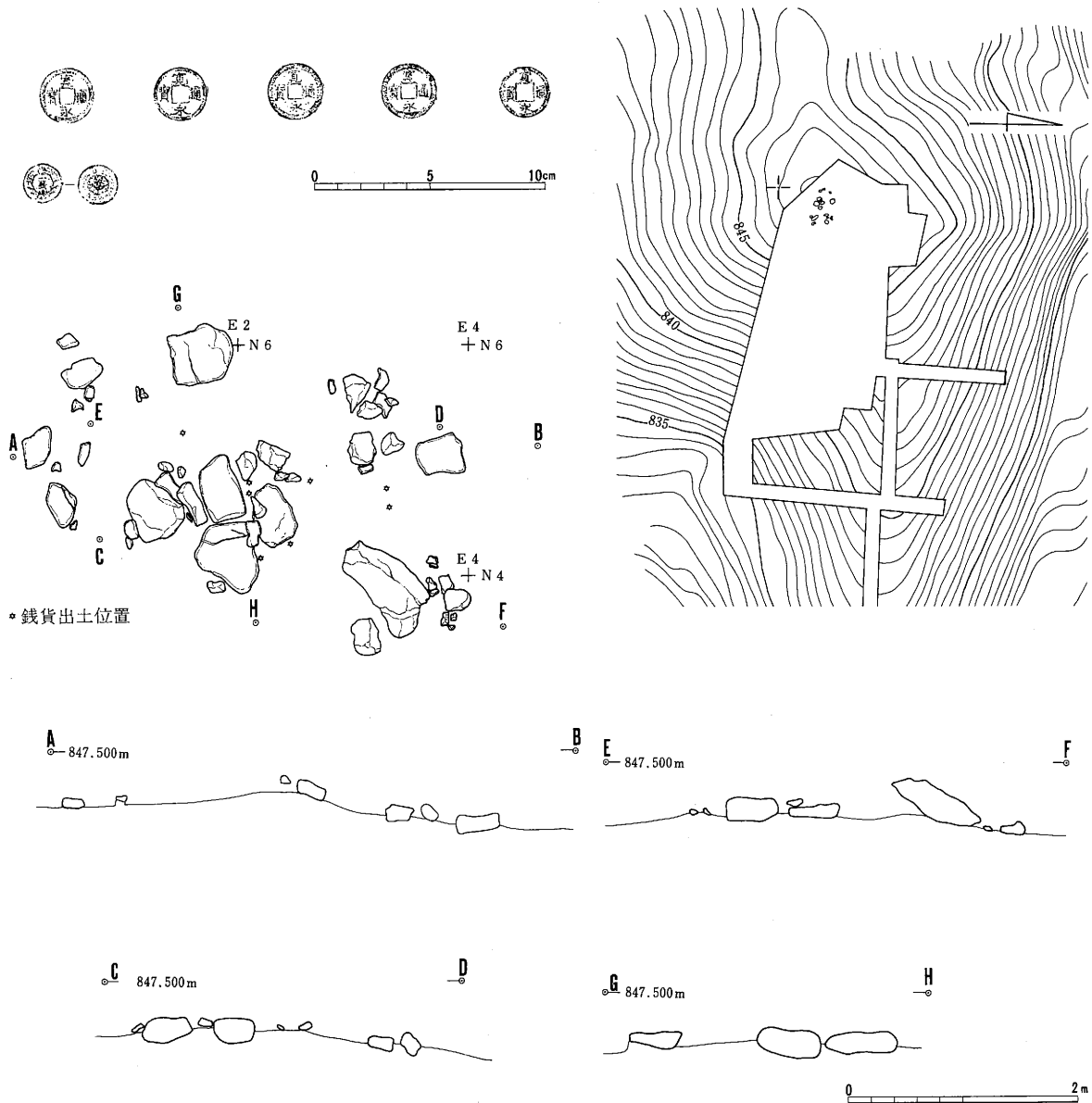


図149 膳棚B（白山）遺跡近世遺構実測図（1：60）及び出土銭貨拓影（1：3）

## 5. 小結

急峻な斜面ばかりのやせ尾根。従来ならば予想だにできなかった遺跡の立地も、今やそうした旧来の定説を覆すような場所にも人々の足跡の印されたことを多くの発掘調査によってはっきりと認識できるようになり、そして本遺跡も、そこに新たな一資料を提供することになったものとする。

それにしても、平坦な扇状地のはしに、忽然とそびえる小さな丘の上で、縄文時代中期初頭にいったいどのような生活があったのだろうか。しかも発見された住居は一軒だけで、小さいながらも立石まで持つことが何を物語るのであろう。本遺跡の住居が営まれた頃、岡谷市内の山麓一帯には同じような標高にいくつかの遺跡が点在する。梨久保遺跡や扇平遺跡はその代表的な集落遺跡であり、本遺跡の尾根の裏側には大洞遺跡がある。恐らく、それらの遺跡は有機的に結びつき、各々の役割をもって存在していたと思われるが、その中で、この膳棚B（白山）遺跡が、どのように位置付けられるべきかについて、今その十分な答えを導くに足るデータを持たない。遺跡を群として捉え、検討することによって、答えが得られる

のではないだろうか。それについては第4節大洞遺跡にまとめられているので、その項で本遺跡に対する理解を深めることができるのではないかと考える。

古代の石組み墓の発見も、意外な成果だった。小さいとはいえ1つの尾根を占拠して作られた墓の主は、いったいどういう人物だったのだろう。背後に山をおい、諏訪の盆地を一望できる立地は、現世の生活には不向きでも、死後の世界を送るには最適な場とされたのであろう。それだけに遺跡として調査されるケースは極めて稀で、偶然のことがない限りこうした遺構の発見は困難に近い。そうした意味で貴重な資料となり得たはずで、その歴史的意義や、考古学的な解釈については、大洞遺跡の例も含めて、第1節大久保B遺跡で考察されている。

小さな遺跡であったものの、逆にそれだけに従来になかった資料と、知見を得ることができたということの本遺跡のまとめとして記しておきたい。

#### 参考文献

- 会田進 1983 「榎垣外遺跡」 『長野県史考古資料編主要遺跡（中南信篇）』 長野県史刊行会  
黒崎直 1980 「近畿における8・9世紀の墳墓」 『奈良国立文化財研究所学報』第38冊研究論集VI 奈良国立文化財研究所  
斎藤忠 1935 「上代に於ける墳墓地の選定」 『歴史地理』65-6  
遮那藤麻呂 1968 「信濃における古代火葬墳墓のあり方」(一)、(二) 『伊那』16-6, 7 伊那史学会  
藤森栄一 1930 「隆平永宝を伴出せる蔵骨器」 『考古学』1-2 東京考古学会  
水野正好 1984 「奈良朝貴神の墳墓と送地」 『郵政考古紀要』IX 郵政考古学会  
安井良三 1960 「日本における古代火葬墳墓の分類」 『西田先生頌寿記念日本古代史論叢』

## 第7節 <sup>ぜんたな</sup>膳棚B遺跡 (G Z T)

### 1. 遺跡の概観

岡谷市1353番地一帯に所在する。塩嶺山地山麓の扇状地上一帯に立地し、南250mほどの所に今井十五社、同方向500mほどの所に岡谷市立神明小学校がある。

一帯は、塚間川によって形成された扇状地の扇央から扇端にかかる部分の南端に当たり、西から東へ緩く傾斜している。水田として利用されていた地で、水田面が常に湛水状態にあり、湧水地帯であることがうかがわれた。南西に隣接して膳棚A遺跡が、北東には15m幅ほどの低地をはさんで中島A遺跡が、北には柳海途遺跡がある。更に本遺跡西側の丘陵上には膳棚B (白山) 遺跡がある。

### 2. 調査の概要

隣接する膳棚A遺跡の北端の遺跡とも考えられるが、膳棚A遺跡は塩嶺山地の東斜面山麓部に立地しており、本遺跡はその下の扇状地上に立地することから別の遺跡としてとらえられた。本遺跡の範囲は、前述したように、北、北東、南西は他遺跡と隣接することから限定でき、南へはやや広がるかもしれないが、地形からみて今回の調査範囲がほぼ本遺跡の範囲と一致すると推定される。

調査対象面積は7,250㎡で、昭和58年4月下旬から同年10月上旬まで調査を実施した。この間、調査研究

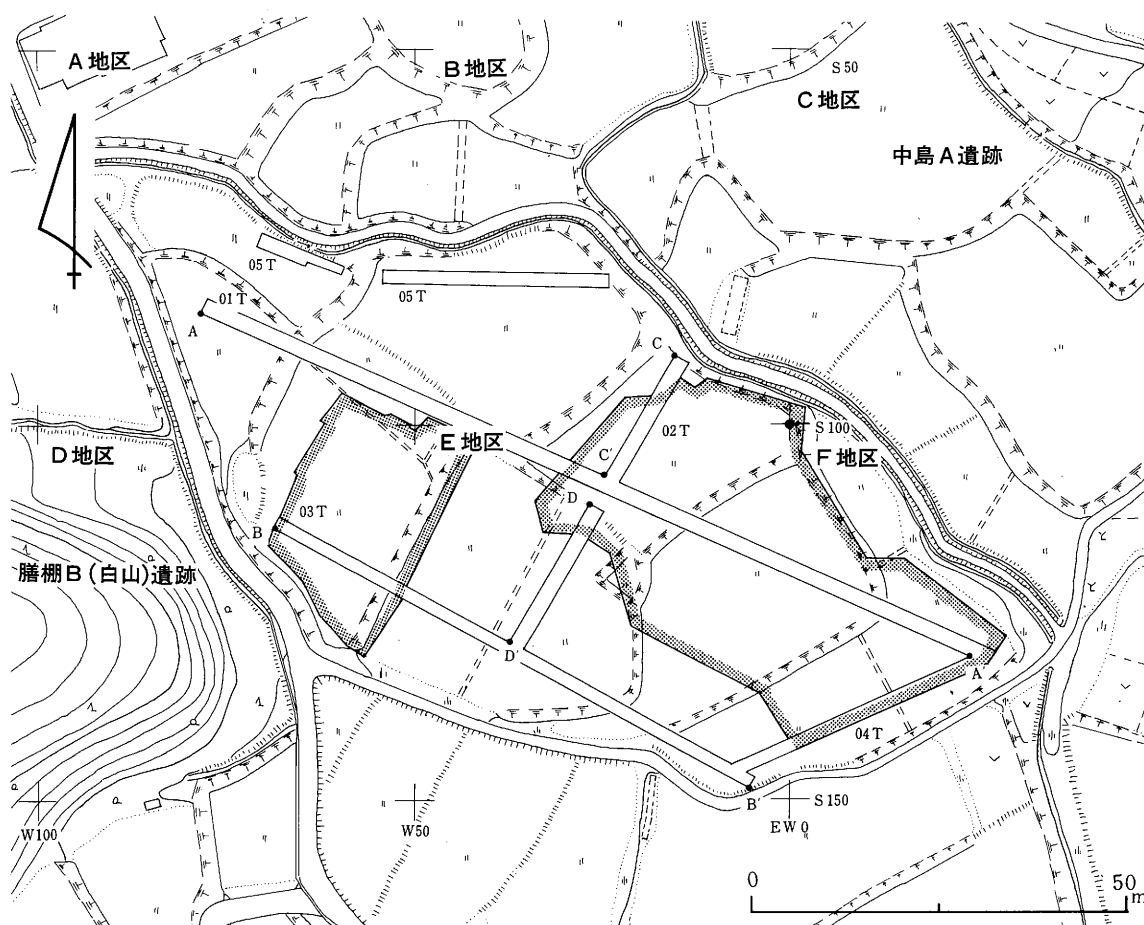


図150 膳棚B遺跡トレンチ配置・発掘範囲及び地形図 (1 : 1,000)

員は主として3名が当たり、地元の方々に発掘作業の協力をいただいて調査した。

調査に当たってまず遺跡の概要を知るべく、地形に直交、平行するトレンチ5本を調査区全域にわたるように設定して発掘した。その結果、予想通り湧水が激しく、また、砂層、礫層が複雑に分布する状況にあった。しかし、01トレンチの東半分と04トレンチ部分では、黒色土層と土器・石器等が多量ではないが認められた。そこで、この一帯を面的に拡張して調査することにし、耕土は重機を使って剥ぎ、以下は手掘りとした。一方、03トレンチの西端で木杭が出土し、土層断面には旧水田が埋没している状態を明瞭に認めたので、この一帯は手掘りで拡張して調査した。

測量は岡谷インター・チェンジ関連遺跡共通のSTA0+87.0を基準に算出した座標北を用い、南北及び東西に基準線を設け、50m区画の大地区A～Fを設定し、大地区内には更に2m区画のグリッドを設定した。遺物の取り上げは一部全点記録を行うとともに、グリッド別、層位別に取り上げた。標高は、前述の基準杭から水準測量によって、S100・EW0の杭高826,065mを出し、これを基準とした。遺構の測量には遣り方測量を用い、発掘範囲は光波測距儀を用いて計測した。また、水田址・河川址についてはトラバース測量、平板測量を併用して行った。

整理は昭和58年12月下旬から断続的に行ってきた。この間、昭和59年2月には第2回諏訪地区遺跡調査研究発表会でスライドを交えて発表した。また、昭和58年10月には、『長野県埋蔵文化財ニュース』No.6、同60年・3月には『長野県埋蔵文化財センター年報』1(註1)に概要を報告した。また、遺構外より出土した木簡については『木簡研究』第7号〔市沢英利1985〕に報告している。こうした経過の後、昭和61年8月から本格的なまとめを行い本報告に至った。

### 3. 調査の経過

#### 昭和58年

- 4月20日 発掘調査開始、01トレンチから掘り始める。黒色土から太形蛤刃石斧、黒曜石出土。
- 4月27日 03、04、05トレンチを掘り始める。耕土下が礫層であったり、黒色土層であったりして不安定な状況を呈している。
- 5月11日 01トレンチで土壌状の落ち込みを確認する。後に8号土壌と名付けたものである。
- 5月19日 03トレンチで確認されていた木杭の性格を確認するため、付近を拡張する。
- 5月27日 木杭は旧水田の土手であることが確認され、現水田以前の水田の状況をつかむため、一帯の拡張を本格的に始める。
- 6月2日 各トレンチの土層観察を終え、黒色土層の分布する01トレンチ東半分から04トレンチにかけて面的調査を行うため重機で耕土剥ぎを始める。
- 6月10日 拡張部分にグリッドを設定して本格的に掘り始める。
- 6月27日 III層と考えて掘り下げていた北側で、溝状の落ち込みがあらわれ、1号河川址とする。
- 6月30日 絡条体圧痕文土器片等が出土していた地点に方形の落ち込みが検出され、その規模から1号住居址とし、遣り方を設定する。また水田址の

調査を終える。

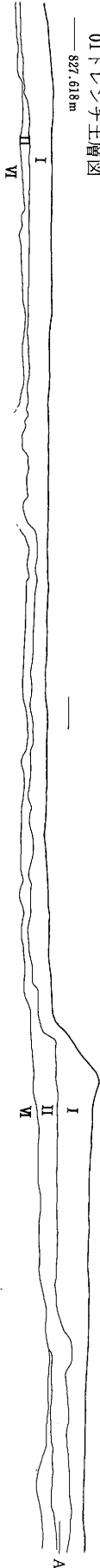
- 7月7日 1号住居址から絡条体圧痕文土器の大きな破片と石皿を伴うピットが検出される。1号河川址を掘り上げ、測量準備に入る。



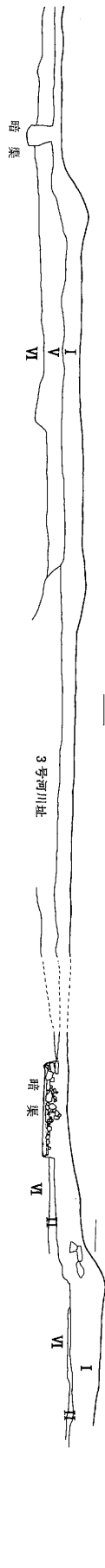
(註 1) 埋蔵文化財ニュース・年報では遺構の名称、数が本報告と異なっている。本報告が、各角度から検討しており、最終的な名称であり、数である。

01 トレンチ土層図

— 827.618m



— 826.618m



A' 825.618m

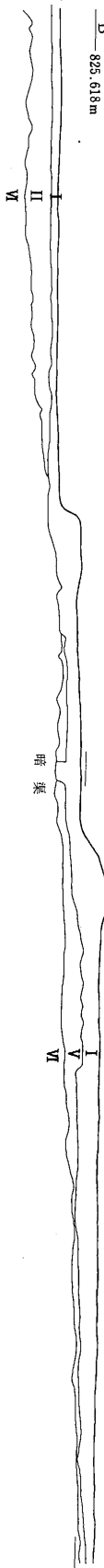


03 トレンチ土層図

826.618m

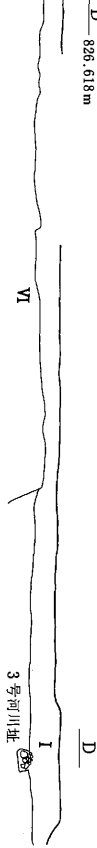


B 825.618m

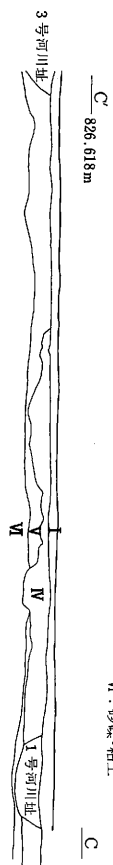


02 トレンチ土層図

D 826.618m



C' 826.618m



- I: 耕土 (Plowed soil)
- II: 砂 (Sand)
- III: 黒砂 (Black sand)
- IV: 砂 (Sand)
- V: 黒褐色土 (Blackish-brown soil)
- VI: 砂礫・粘土 (Sand and gravel/clay)



図151 膳棚B遺跡土層図 (1:160)



7月11日 1号住居址の西側に分布するⅢ、Ⅴ層を掘り下げる。早期末の土器片が比較的多く出土しており、出土地点を記録しながら取り上げる。

7月19日 1号住居址東側一帯のⅣ層を掘り下げるが遺物はない。

7月27日 1号住居址北側の調査に入る。Ⅲ層中から絡条体圧痕土器が出土する。

8月8日 1号住居址北側のⅢ層掘り下げと同じく西側のⅢ、Ⅴ層の掘り下げを並行して行う。前者からは土壌が、後者からは土器片が見られる。

8月10日 北側でのⅢ層を掘り終え、1、2、3号土壌がⅣ層上面で検出され、その精査に入る。

8月12日 Ⅴ層上面から玦状耳飾が出土する。その周辺には拳大から人頭大の石が散在し、1号集石址とする。

8月26日 1号集石址一帯とその南側のⅢ、Ⅴ層を掘り下げる。土器片は出土するが、遺構が確認できずに遺物の性格付けに悩む。3号河川址のトレンチ発掘を行い、植物遺体を採集する。

8月31日 Ⅴ層の掘り下げが進む。遺物は徐々に少なくなってきた。晩期条痕土器がかたまってきた。一帯が7号土壌となる。

9月9日 Ⅴ層がほぼ掘り上がる。1号集石址下で8号土壌のプランが確認される。

9月13日 1号土壌のリン分析試料のサンプリングを行う。また、03トレンチの木簡出土と思われる付近の調査を行うが弥生土器片が出土したのみである。

9月19日 Ⅴ層の残っていた部分を掘り下げると10号土壌が検出される。

9月29日 台風による大雨で中島A遺跡との水路が破損したため応急処理をする。1号土壌周辺のⅣ層を掘り下げる。遺物はない。

10月3日 1号土壌周辺のⅤ層を掘り終える。Ⅴ層からの遺物はない。

10月4日 発掘調査を終える。

昭和59年、60年

土器・石器の実測。一部遺構図版の作成を行う。

#### 4. 調査の結果

##### (1) 層序と地形

トレンチの土層断面の観察結果は図151に示す通りである。冒頭でも述べたように砂層・礫層が複雑に堆積しており、また河川址もからんでトレンチ間の土層対比には苦慮した。そうした中で、各トレンチの交

土層名	土の状態	分布	遺構・遺物との関係
I 耕土	現水田耕土・水田造成客土・旧水田耕土を含む。傾斜地のため、水田の南東側の客土が厚い	全面	現耕土下に暗渠が造られている。
II 砂礫	大小の礫を伴う砂の層である。締まった砂ではないか、礫を多く含むため、ツルハシを使わないと掘りづらい。	北西部一帯に多く分布し中島A遺跡との低地へ向って傾斜する。	01T北西端、05Tから遺物がごくわずか出土している。流れ込みのものである。
III 黒色土	小さな礫を含む、砂質の土である。黒の色調が強い。	北東部一帯から南部に分布する。	1号河川址が、本層を掘り込む。縄文時代早期末の土器片や石器を包含する。
IV 砂礫	砂の部分と礫が集中した部分とからなる。締りのない層であり、砂は中粒砂である。	北東部一帯に分布する。	上面で1号住居址、1.2.3.4.5.6号土壌を検出。
V 黒褐色土	黒褐色を呈し、白い粒々の岩片が入る土で、ばさばさしており1~0.5mmほどの砂粒が目立つ。	北東部一帯から南部に分布する。	1号集石址を本層上面、7.8号土壌を本層下位で検出。縄文時代早期末の土器や石器を包含する。
VI 砂礫粘土	青灰色の還元状況を示す。砂礫や粘土が互層になっている。木材を含む。	基盤とした層	上面で9、10号土壌を検出。木材の <sup>14</sup> C年代は15,570±220である。

図152 膳棚B遺跡土層模式図

点の状況を参考に本遺跡の層序を図152のようにとらえた。各層の状況は図の通りである。

これらの土層が調査区内でどのような状況にあるのか、その概略を述べておきたい。土層は大きく01・02トレンチ交点付近で東西に2分できる。西部は遺跡範囲北西端を頂点に北東向斜面と南向斜面に分けられ、前者は中島A遺跡との間の低地へと続き、VI層の上にII層、そしてI層がある。南向斜面はI層下にところどころII層、V層が見られ、VI層へと続く湧水の激しい地である。このように西部は、砂礫層が多く分布し、湧水も激しく比較的不安定な状況にあった。東部も西部同様01トレンチ付近で北東向斜面と南向斜面に分けられる。北東向斜面はやはり中島A遺跡との間の低地へ向かって傾斜しており、VI層の上にV層、IV層、III層、I層が見られる。南向斜面はVI層の上にV層、III層、I層があり、南端部でII層対比の砂礫がわずかに見られる。このように東部はIII層、V層といった黒色土が分布し、比較的安定した状況にあった。

以上、本遺跡一帯は背後から供給される砂礫層に覆われたり、浸食されたりする不安定な地であった。そうした中で、東部一帯はIII層・V層といった黒色土層が形成され、比較的安定した地であった。なお、基盤層としたVI層に含まれる木材の<sup>14</sup>C年代測定結果は15,570±220 (I-13.290)で、現状の地形形成はこれ以後に行われたものである。

## (2) 遺構と遺物の概観 (図153)

前述したように、不安定な遺跡立地条件にありながら、東部の黒色土層が分布する一帯から縄文時代早期末の生活址が、他時期のものをほとんど含まずに単純な状態で発見された。発見された遺構は、住居址

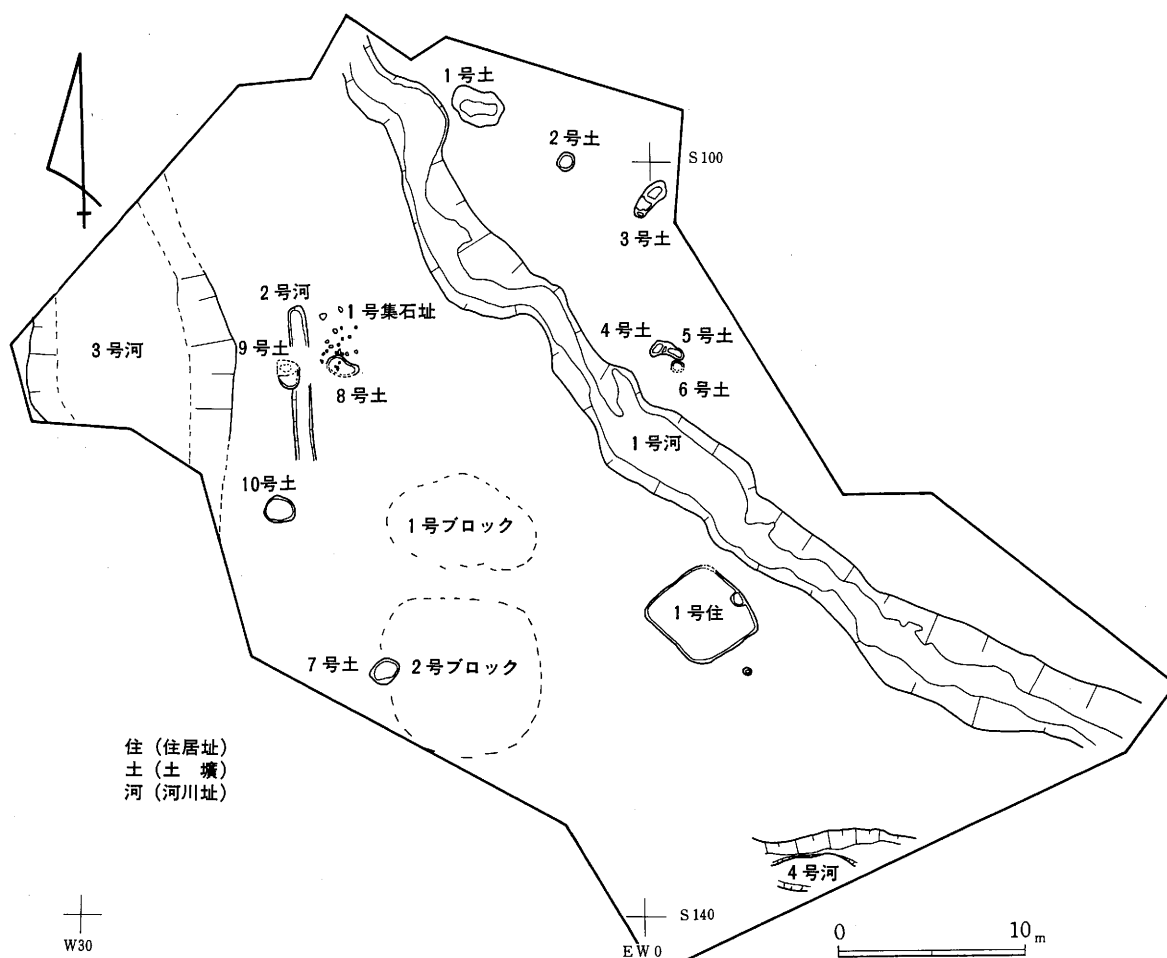


図153 膳棚B遺跡遺構配置図 (1:400)

1軒、土壙7基、集石址1基、ブロック2ヶ所である。ブロックは土器・石器が集中して出土した地点を指す。これらの遺構や各層から出土した土器群は全体量はそう多くないが、絡条体圧痕文土器を主体にして条痕文・東海系の薄手土器群が加わっている。石器は、黒曜石・チャート製の石器を中心に少なからず出土しており、土器群と同様この期の石器様相の一断面を示している。また縄文時代早期末葉に比定できる珧状耳飾りも2点出土している。なお、土器については下り林遺跡、石器についてはスクレイパー以外は大洞遺跡の分類に従って記述する。

このほか、縄文時代晩期末葉前後の遺構、遺物がわずかにある。これは、隣接する中島A遺跡との関連を示すものとなろう。平安時代後半から鎌倉時代のものと考えられる木簡が単独出土しているほか、水田の拡張造成過程も調査している。

### (3) 縄文時代の遺構と遺物

#### ① 遺構と遺物の出土状況

##### ア 住居址

##### (ア) 1号住居址 (図154・155)

S124・E2一帯、1号河川址中央すぐ南に位置する。III層掘り下げ中、一帯から絡条体圧痕文土器を中心に土器片が点々と出土していた。IV層上面近くになって、絡条体圧痕文の大きな土器片(5)が出土したた

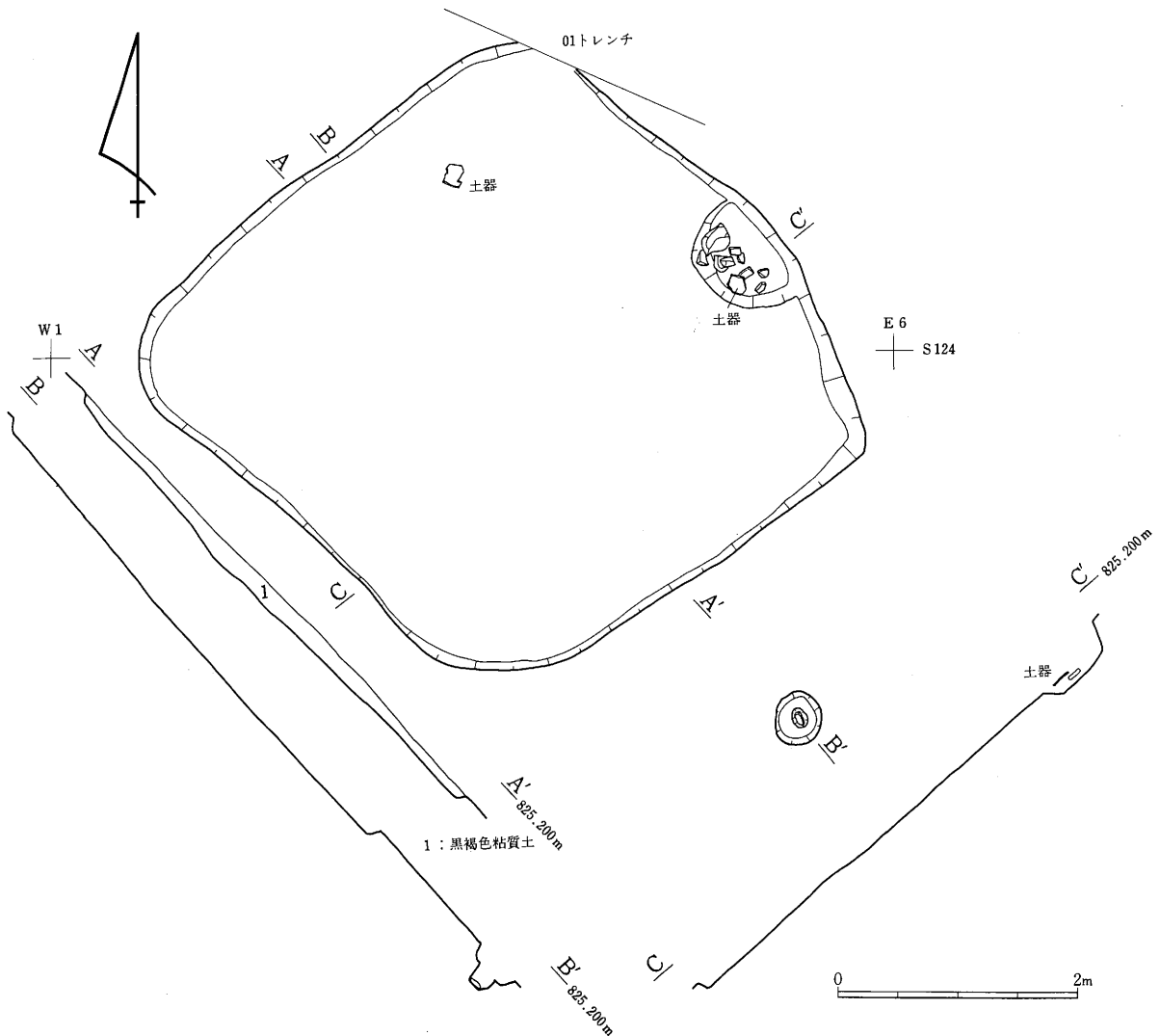


図154 膳棚B遺跡1号住居址実測図 (1:60)

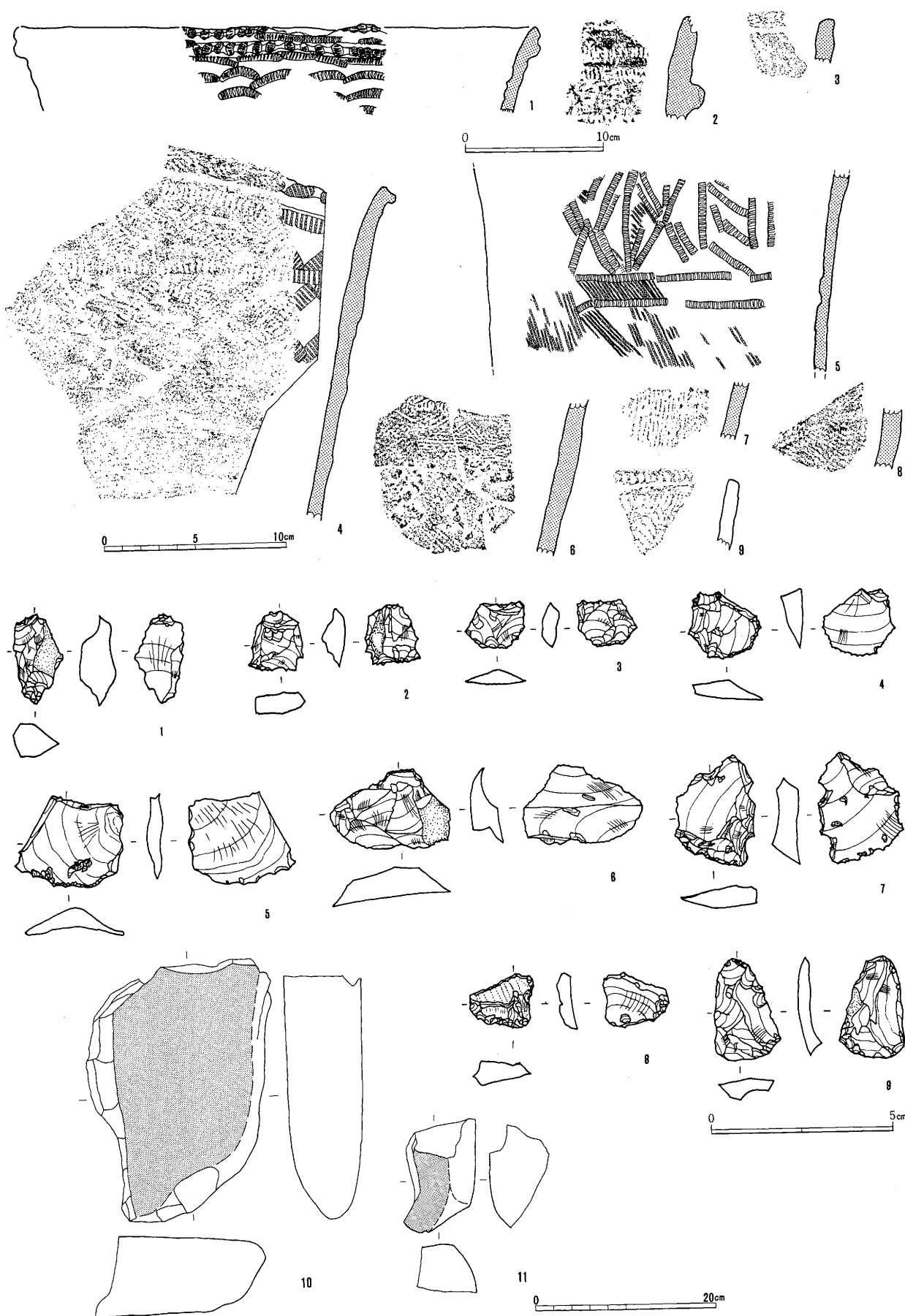


图155 膳棚B遺跡1号住居址出土遺物実測図・拓影

(1, 5 1 : 4、2~4、6~9 1 : 3、1~9 2 : 3、10, 11 1 : 6)

め一帯を精査したところ、方形に黒色土の落ち込みが見られ1号住居址とした。検出面はIV層上面である。

4.6×4.5mの規模をもつ不整形プランの住居址で、北側コーナーをトレンチ発掘時に破壊してしまっている。覆土はIII層に由来すると思われる黒褐色粘質土で、砂や拳大の円礫を含む。砂層であるIV層に掘り込まれているため壁は軟弱であるが、壁高10cmを計る。床面は砂層中でわかりにくかったが、黒色土と砂がかためられた部分があり、これを基準に床面をとらえた。住居内には、北東壁中央下に95×60cm、深さ10cmほどの楕円形のピットがあり、中から大きな土器片(4)と石皿(10・11)が出土し、この他幼児頭大の礫が数個入っていた。住居内には柱穴及び炉址は認められなかったが、南東壁外中央に底に石を伴うピットがあり、柱穴に関わるものとも考えることもできる。

遺物は、覆土中から散漫に出土する状況であり、南側には少なかった。

出土土器をみると、1～6は絡条体圧痕文を特徴とする土器である。1は推定口径35cmをはかり、口縁直下に隆帯をめぐらし、器面はていねいなナデ調整が加えられている。4は波状をなす大形の口縁部破片。口縁端部に折り返し状の細い隆帯がめぐる。口縁下には横位および山形・「X」字状の絡条体圧痕文が施され、以下胴部にかけては無文となる。外面はていねいなナデ調整が行われているものの、内面は器壁が粗くザラザラする。胎土に繊維のほか石英粒、粗砂などを多く含む。5は撚糸文を地文として絡条体圧痕文を「X」字状など複雑に施文している。胎土には繊維・粗砂を多く含み、焼成は不良。6は絡条体条痕を地文とする。これらはすべて第6類土器B種に含まれる。9は東海系の薄手土器。1片のみの出土であり、入海Ⅱ式～石山式にかけての過渡的特徴を備えている。

石器は、ピエス・エスキーユ3点、小剥離痕のある剥片6点、石皿2点が出土している。1・2はピエス・エスキーユ1類、3は同2類、4・5は小剥離痕のある剥片1類、6～9は同2類である。10・11は石皿である。この他石核2点、剥片69.6g(黒曜石42.8g、チャート26.8g)が出土している。

#### イ 土壌(図156・157)

検出された土壌は10基で、個々の状況は表15に示す通りである。

10基の土壌のうち、7号土壌は晩期末葉前後に、6・9・10号土壌は時期不明であるが他の6基は早期末葉と考えられる。

早期末葉の6基の土壌のうち1～5号土壌は1号住居址と同一検出面で、住居址北側に位置し、いずれも土器片等の遺物を若干含む。中でも1号土壌は規模も大きく、掘り方もしっかりしており、更に遺物量が多い状況からリン分析(註1)を行った。

リン分析試料のサンプリングは、土壌長軸方向中央に残した土層観察ベルトで行った。サンプリングに当たっては、図157のように土層ベルトを10cm方眼に機械的に区切り、これをナンバリングして各区画から移植ゴテ先一杯分をビニール袋に採取した。その結果及び濃度分布状況は図157に示す通りである。土壌外の分析を行っていないため土壌内が多いか少ないか何ともいえないが、土壌内においてもその濃淡がある。垂直的にみると、中位より上の方が全体的に濃度が高く、西、中央、東という具合にほぼ同じ大きさで濃度の高いブロックが存在する。こうした濃度分布が土壌の持つ用途とどう関わるのかはこれだけでは何とも言えない。今後、類例を待って考えたい。

7号土壌は18の条痕文系深鉢形土器が出土しており、検出面は8号土壌と同じV層下位であるが、晩期末葉前後のものである。18は口縁部が $\frac{1}{4}$ 弱残存し、胴下半を欠く。口縁部は強くヨコナデされやや凹む。口縁下には右下から左上方向への貝殻による条痕調整が右回りに施される。内面は平滑であるが、調整法は不明である。胎土には長石、石英の粒子を含み、中島A遺跡分類の縄文時代晩期末葉前後の第ⅡA群、甕に当たるものである。

(註 1)長野県中信農業試験場土壌肥料研究室松下利定氏に依頼した。

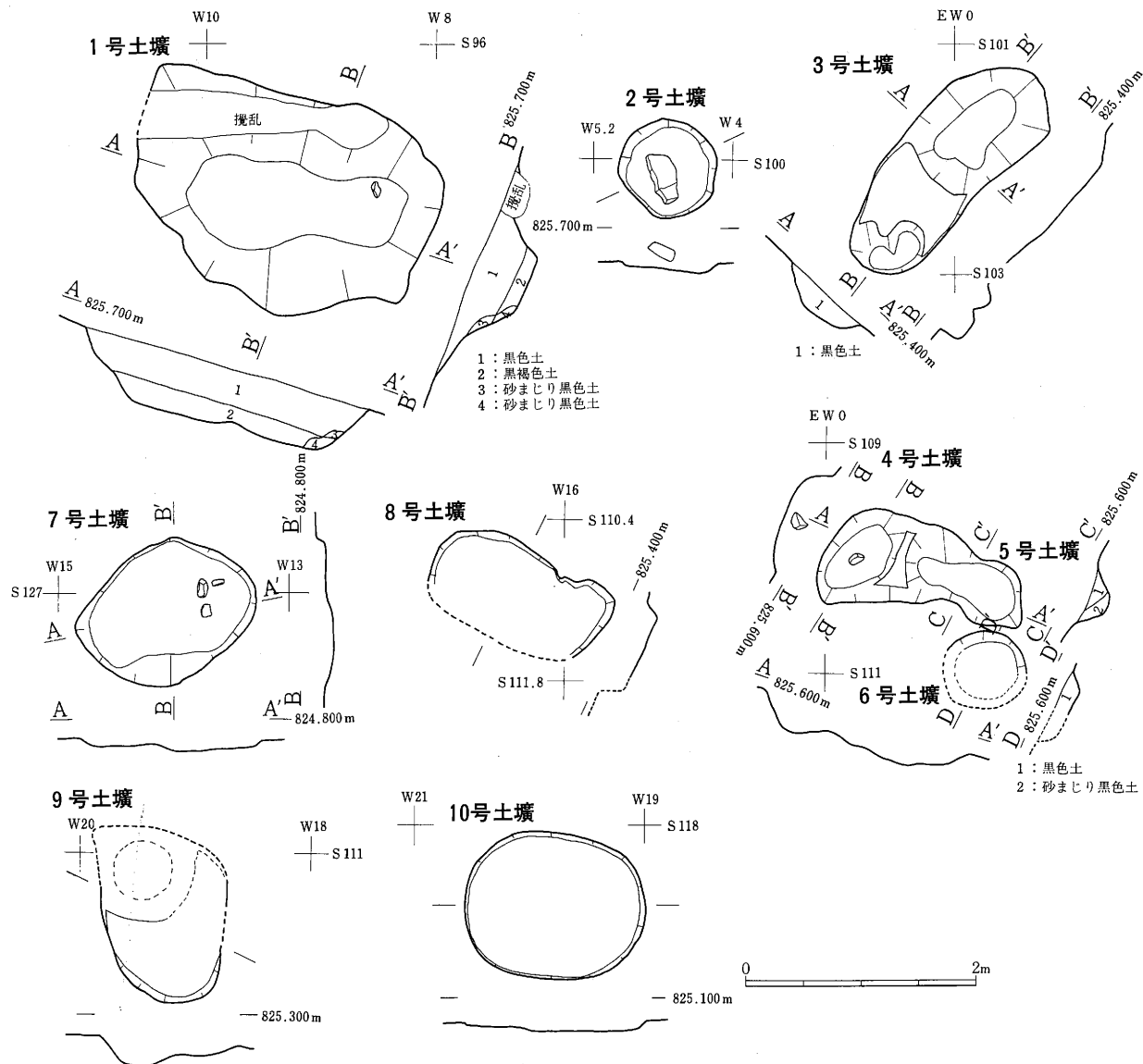
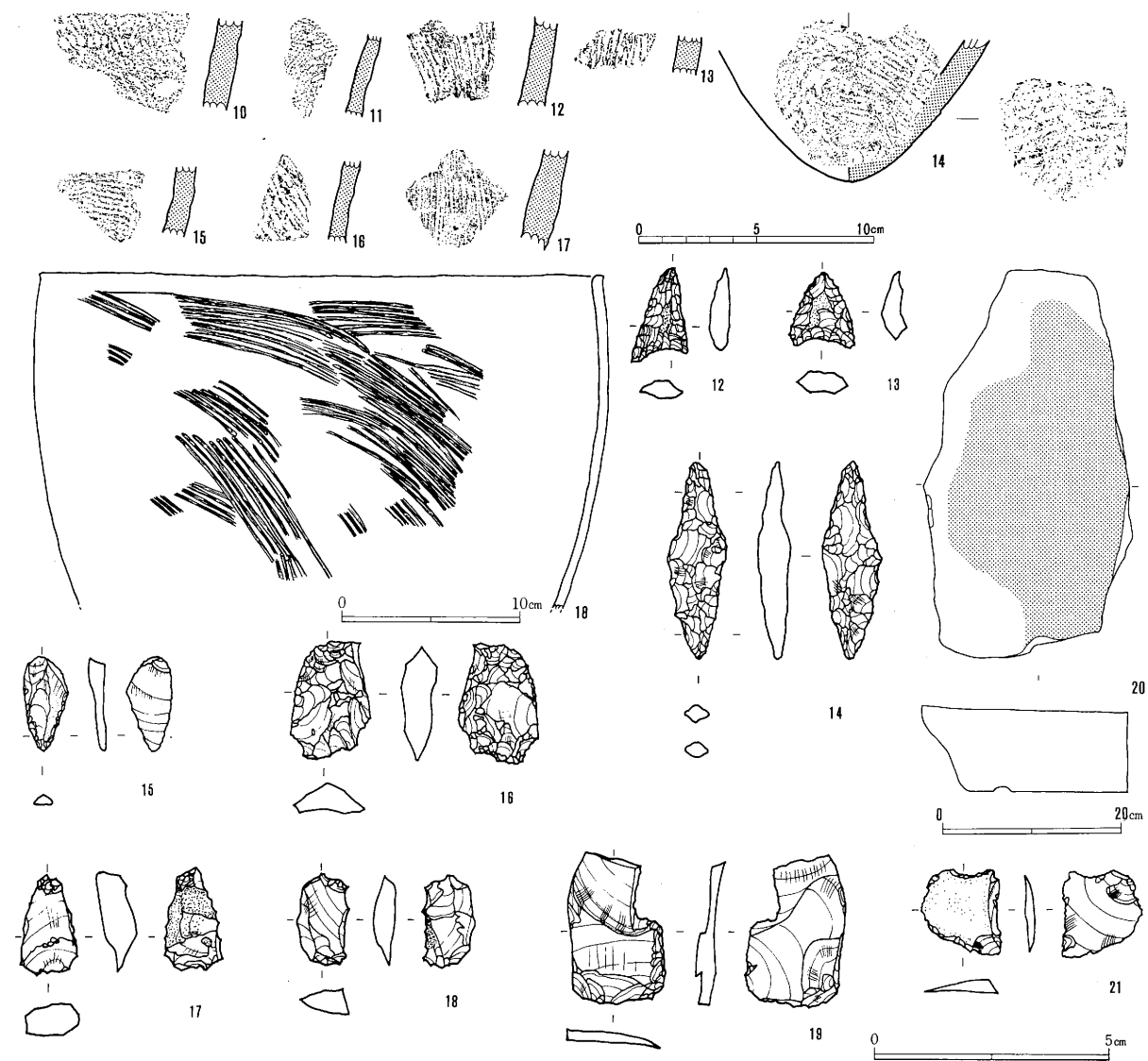


図156 膳棚B遺跡土壌実測図 (1 : 60)

土壌名称	平面形	規模 (長径×短径×深さcm)	検出層位	埋土	備考
1号土壌	楕円形	270×180×48	IV層上面	黒色土, (下半部は褐色味を帯びる)	リン分析を行う
2号土壌	円形	90×85×10	〃	黒色土	
3号土壌	楕円形	224×85×(20)	〃	黒色土	
4号土壌	楕円形	97×56×25	〃	黒色土	5号と切り合う (前後関係不明)
5号土壌	楕円形	118×55×23	〃	黒色土(小礫を含む)	4号土壌と切り合う
6号土壌	(円形)	?×?×?	〃	黒色土(小礫を含む)	
7号土壌	楕円形	160×113×12	V層下位	黒灰色土	
8号土壌	楕円形	155×?×15	〃	黒色土	1号集石址下から検出
9号土壌	(楕円形)	?×?×?	VI層上面	黒灰褐色土	2号河川址に切られる
10号土壌	楕円形	155×135×10	〃	黒灰色土	

表15 膳棚B遺跡土壌一覧表

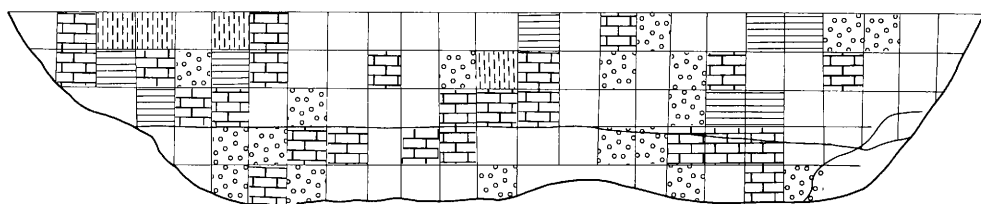


リン分析結果  $P_2O_5$  (%)

1	0.18	0.21	0.24	0.24	0.17	0.23	0.20	0.12	0.16	0.18	0.16	0.13	0.11	0.22	0.18	0.21	0.19	0.17	0.10	0.22	0.22	0.19	0.19	0.17	0.14	1
	0.20	0.22	0.21	0.19	0.22	0.21	0.18	0.15	0.20	0.18	0.19	0.23	0.21	0.17	0.19	0.17	0.19	0.21	0.18	0.18	0.20	0.16	0.18			
2	0.22	0.20	0.21	0.18	0.19	0.18	0.18	0.16	0.23	0.20	0.20	0.17	0.14	0.16	0.19	0.22	0.22	0.18	0.17	0.16	2					
	0.18	0.19	0.19	0.21	0.20	0.17	0.21	0.20	0.17	0.18	0.18	0.19	0.19	0.21	0.20	0.21	0.17	0.17	0.14							
3	0.19	0.21	0.19	0.15	0.15	0.17	0.14	0.19	3																	
	0.18	0.19	0.16	0.20	0.18	0.15																				

1 : IV層  
2 : V層  
3 : VI層

リン分析濃度分布状況



0.19%   
 0.20~0.21%   
 0.22%   
 0.23~0.24%

図157 膳棚B遺跡1号土壇 (10~14、12~19) 2号土壇 (20)、4・5号土壇 (15~17、21) 7号土壇 (18) 出土遺物実測図及び1号土壇リン分析結果 (10~17 1 : 3、18 1 : 4、12~19、21 2 : 3、20 1 : 8)

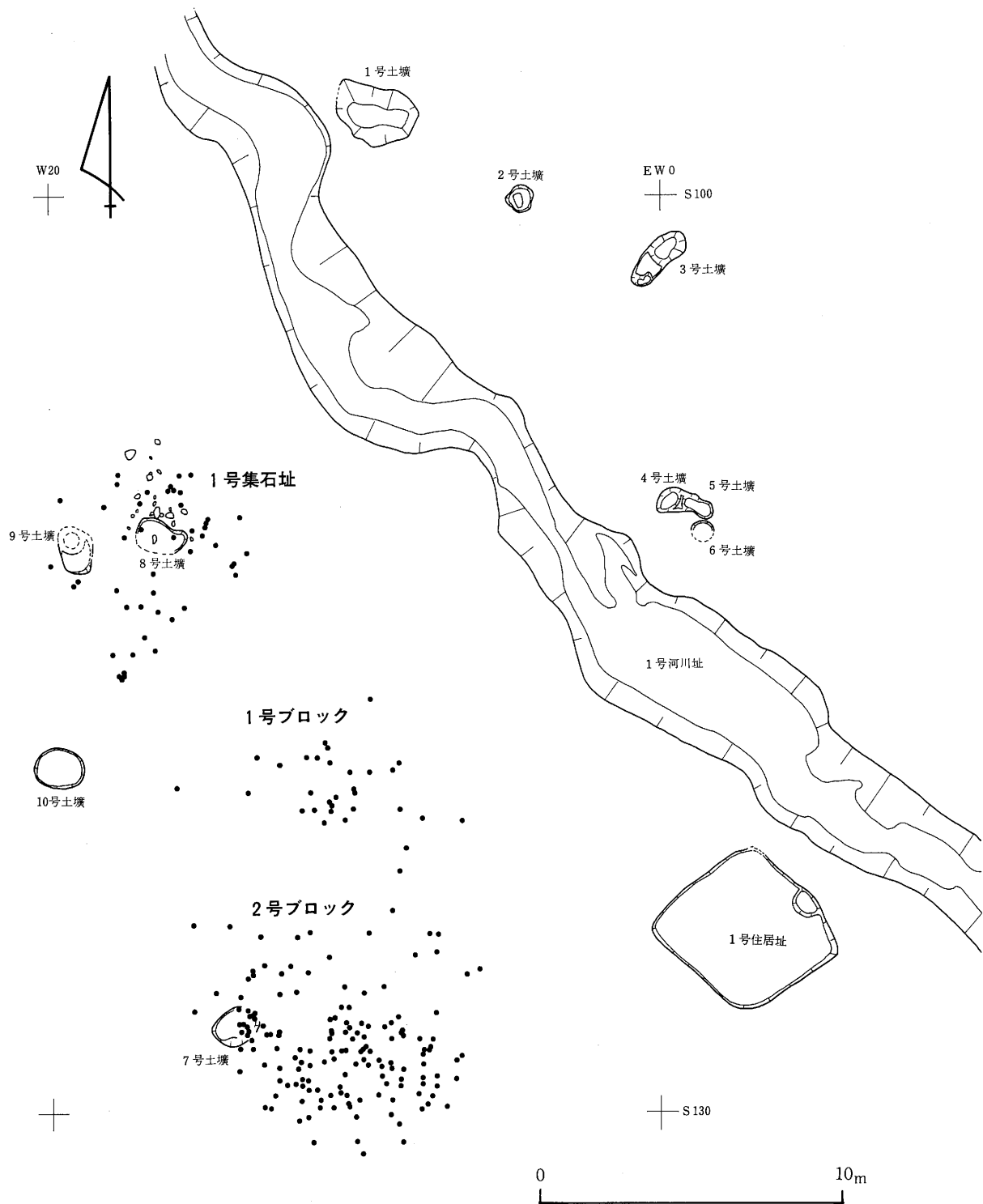


図158 膳棚B遺跡 1号集石址及び1号・2号ブロック実測図 (1:200)

ウ 集石とブロック (図158～図164)

1号住居址の西でⅢ、Ⅴ層の掘り下げに入ると絡条体圧痕文土器をはじめとして、早期末葉の土器群が石器群とともに出土した。そこで、グリッド杭を基準に出土地点を記録しながら掘り下げた。そうした状況下で、北端では集石が見られ1号集石址とした。また、集石址南側では土器、石器は出土しているものの遺構は見つからなかったが、調査終了後、遺物分布平面図を作成したところ、図158に示すようにその遺物集中範囲が明確に2分される状況が判明した。そこで、1号ブロック、2号ブロックとしてとらえるこ



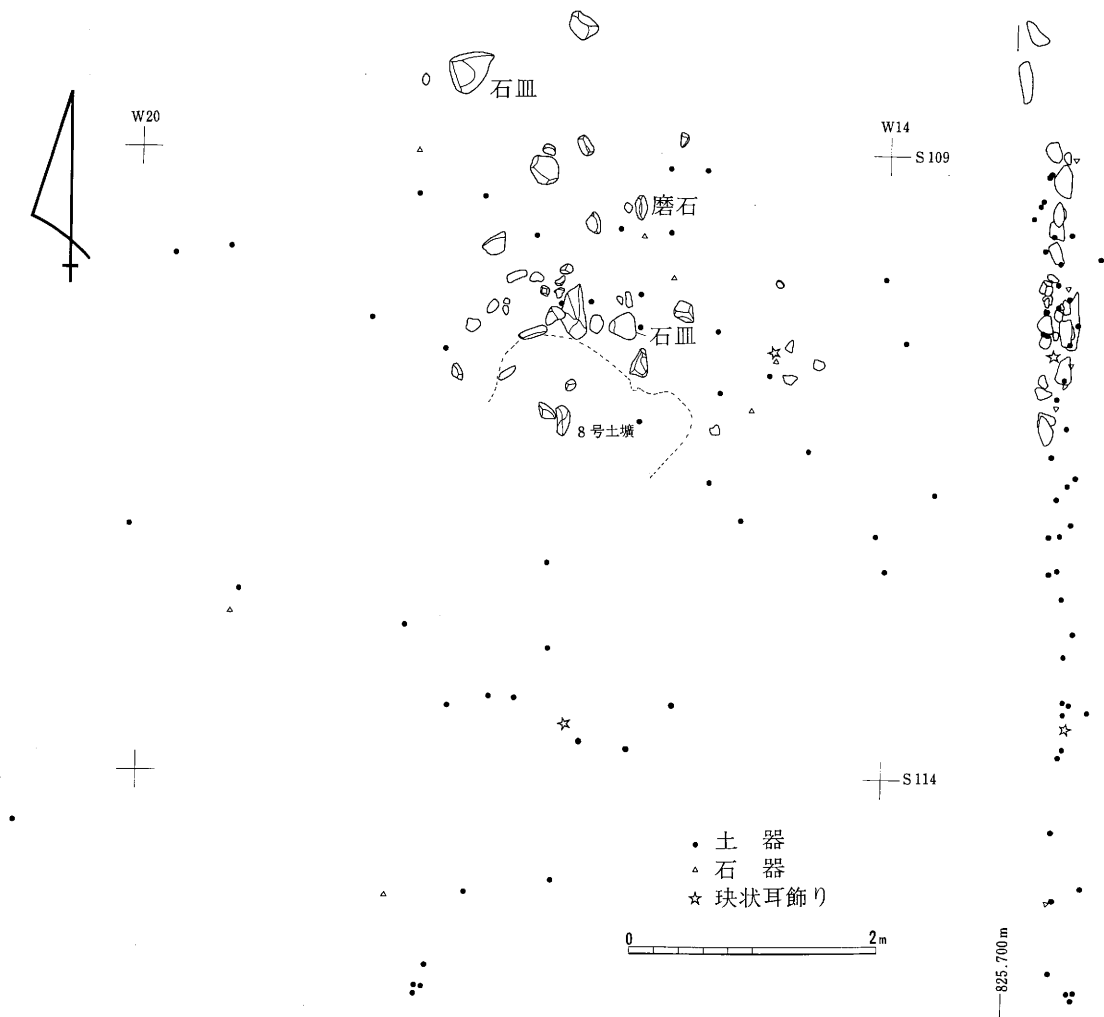


図159 膳棚B遺跡1号集石址実測図(1:60)

とにした。それぞれに属する遺物は、前述の出土地点のものはもちろん、一帯のグリッド出土遺物も含めて扱うことにした。その理由は、出土状況から考えて、ブロックに含めても問題ないと判断できたからである。以下、各遺構について述べる。

(ア) 1号集石址(図158~図161)

S110・W16一帯で、拳大から人頭大の石がⅢ層下部V層上面から出土し、これらが一定にまとまることから1号集石址とした。40個ほどの石が径3.5mほどで円形状にまとまり、垂直幅では約40cmの範囲に存在する。集石の中には、磨石、石皿が据えられたようにあった。この一帯から図159に示したような平面、垂直分布をもって土器、石器、玦状耳飾り2点が出土しており、これらを集石址の遺物とした。一方、集石の下から8号土壌が検出されたが集石址との関係は不明である。

63片の出土土器はすべて早期後半~末葉に位置づけられる。19は沈線により文様が構成される口縁部破片で、第2類土器に伴うものであろう。20~23は絡条体圧痕が施される例で、20は口縁から縦に太い隆帯が垂下している。21は絡条体による圧痕と条痕が併用されるもの。22は縦位と横位のモチーフをもち、一部に半截竹管による刺突文を加えている。内、外面ともにていねいな器面調整が行われ平滑である。20・21・23は第6類土器B種、22は同C種に細分される。24・25は捺糸文、26~29は条痕が施され、ともに絡条体を原体としているとみられ、第6類土器に含まれる胴部破片と考えたい。内面はにていねいにナデ調整を行っており、同類B種土器に似る。30・31は東海系の薄手土器である。図示した2片のほかに、無文の



图160 膳棚B遗迹1号集石址出土遗物实测图·拓影1 (19~31 1:3、22~44 2:3)

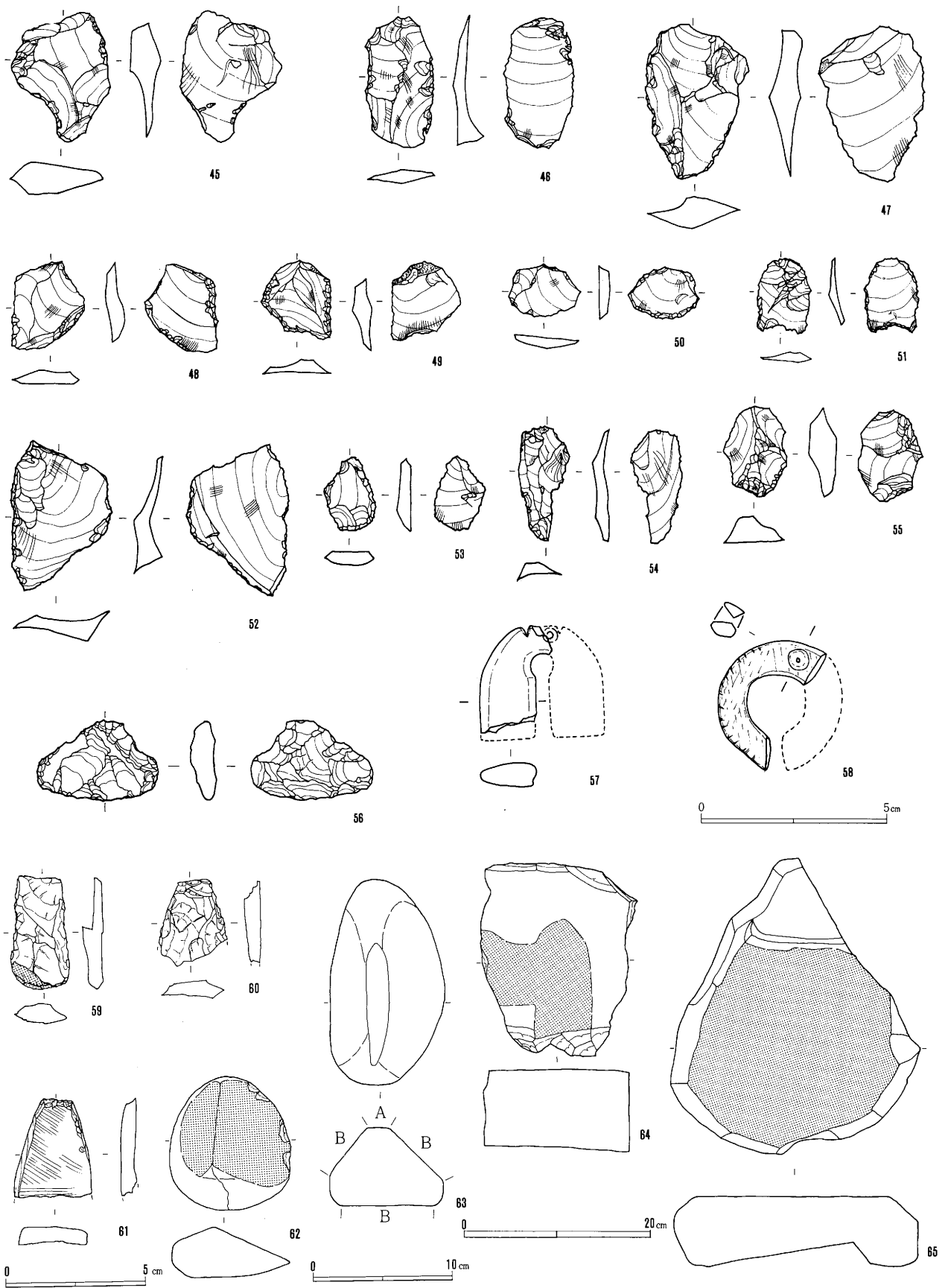


图161 膳棚B遗迹1号集石址出土遗物实测图2 (45~58 2 : 3、 59,60,62 1 : 4、 61 1 : 2、 63~65 1 : 6)

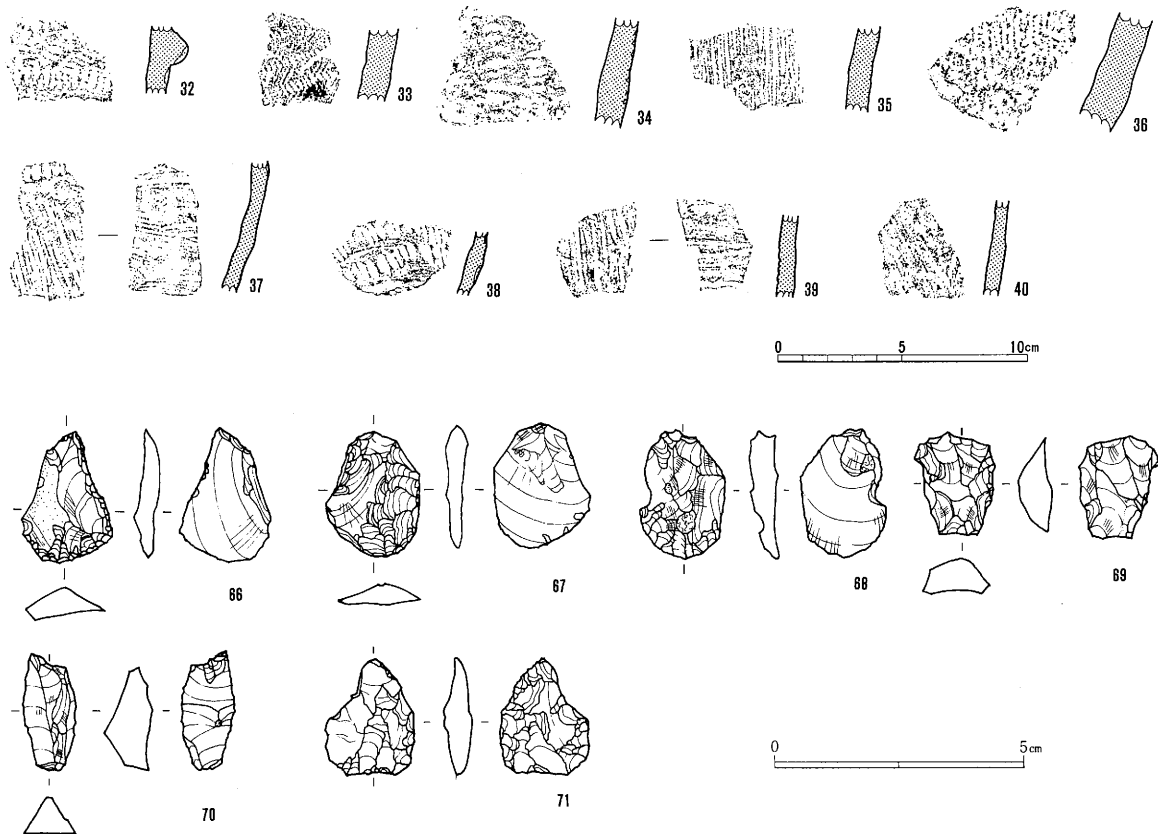


図162 膳棚B遺跡1号ブロック出土遺物実測図・拓影 (32~40 1:3、66~71 2:3)

胴部破片が6片出土している。31は爪形文を密に数条めぐらし、石山式に比定されよう。器厚4mmと薄手で、胎土への繊維の混入はごくわずかである。図示した土器のほか、無文の胴部破片が多数出土している。

出土石器は石鏃11点、石錐2点、スクレイパー9点、ピエス・エスキューユ11点、小剥離痕のある剥片35点、打製石斧2点、磨製石斧1点、磨石・凹石2点、石皿2点、その他の石器2点、原石9点、石核38点、剥片447g（黒曜石294g、チャート153g）がある。22~29は石鏃で、23は凹基2類、25・26は凹基3類、27は凸基1類、28は平基で、他は欠損品である。30・31は石錐で30が棒状3類、31が棒状4類、32~38はスクレイパーで、32・33は片面加工外湾状1類、34~36は同2類、37・38は同加工直線状である。39~44はピエス・エスキューユで、39~42は3類で他は碎片、45~50は小剥離痕のある剥片1類、51~55は同2類、56は両面加工のあるその他の石器である。59・60は打製石斧で、59の刃部先には磨耗痕が見られる。61は定角式の磨製石斧の欠損品、62・63は磨石である。63は大きい特殊磨石と同様の状況を示している。64・65は石皿である。

57・58は塊状耳飾りで共に蛇紋岩製と思われる。2個とも欠損しているが、58は欠損部を再加工しており、その状態では完形品である。それぞれの本来の形状は図に示すようであると考えられる。

(イ) 1号ブロック (図158、図162)

S119・W10一帯にあり、1号集石址と2号ブロックの中間に位置する。遺物出土範囲は10×5mほどの楕円形内で、中央にいく分かの集中が見られる。遺物はⅢ~Ⅴ層上半部で垂直幅20cmほどの分布をもって出土しているが、量は多くない。

出土土器は総数37片を数えるが、すべて早期末葉に属する。32・33は絡条体圧痕文が施された胴部破片で第6類土器B種。図示したもののほかに、同B-2種bの小破片が1点出土している。34は横位の爪形文を縦位に連ねている。胎土、調整は第6類土器Bに似る。35・36は絡条体条痕をもつ胴部破片。37~40

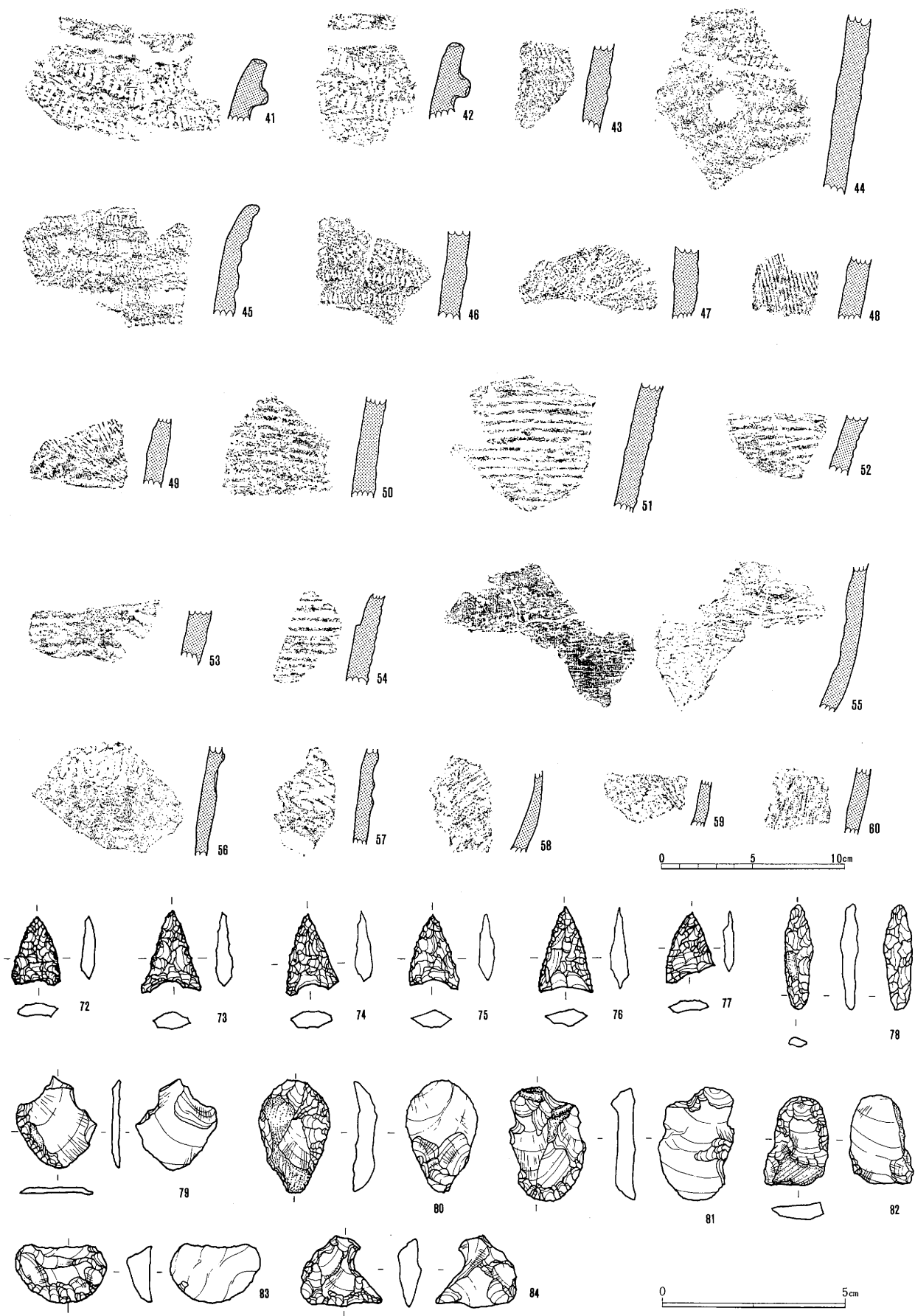


図163 膳棚B遺跡2号ブロック出土遺物実測図・拓影1 (41~60 1:3、72~84 2:3)

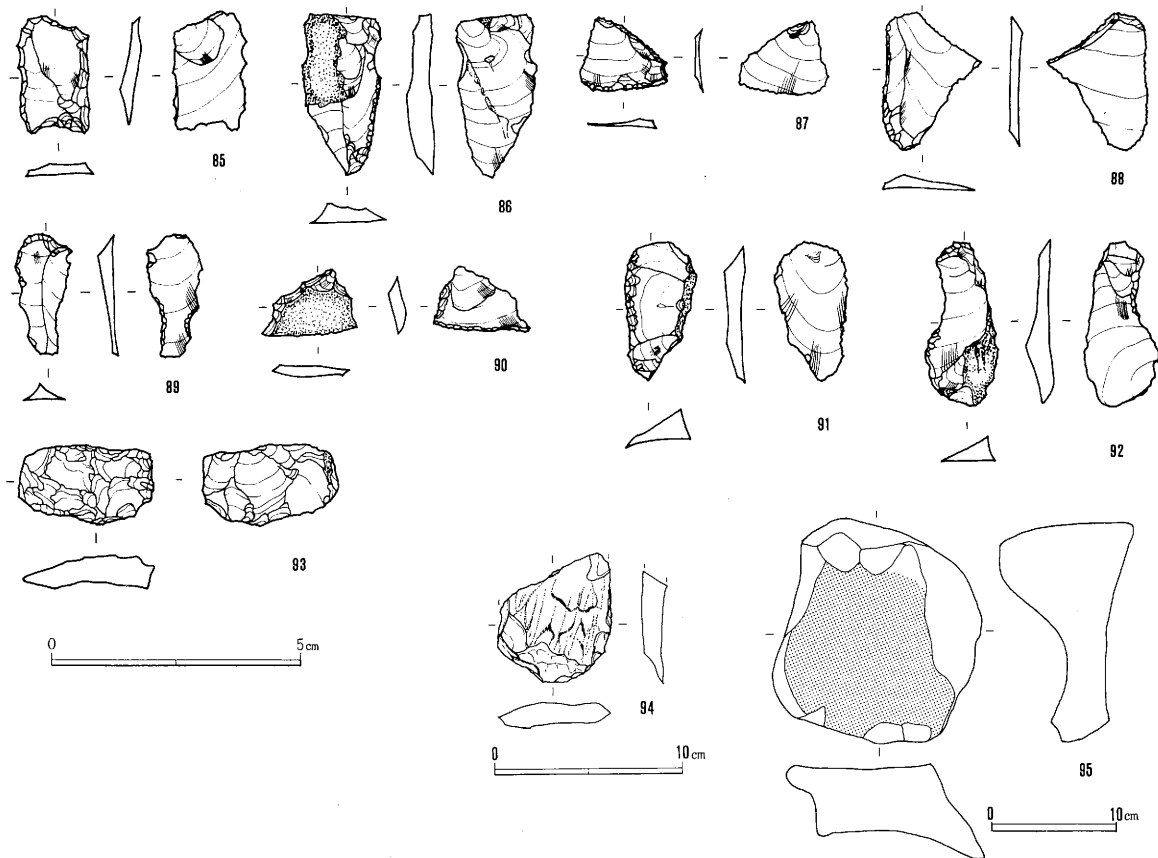


図164 膳棚B遺跡2号ブロック出土遺物実測図2 (85~93 2:3、94 1:4、95 1:6)

は東海系の薄手土器。38は扁平な薄い隆帯上に爪形状の連続切目を密に施している。37・38ともに入海式の新しい段階に位置づけられる。図示したもののほか、薄手の無文土器が20片出土しており、本ブロック出土土器の大半を占めている。

出土石器はスクレイパー3点、ピエス・エスキュー3点、その他の石器1点である。66~68はスクレイパーで片面加工外湾状1類である。69・70はピエス・エスキューの破片で、71は両面加工を持つその他の石器である。

(ウ) 2号ブロック (図158、図163、図164)

S128・W10一帯にあり、1号ブロックと接し南隣りにある。遺物出土範囲は10×8mほどの円形内で南側からの出土量が多い。

遺物はIII~V層上半部で垂直幅60×70cmの分布をもって出土した。また、出土遺物の中で接合関係にあるもの(41)や同一個体となるもの(41と42)がある。出土遺物量は1号ブロックに比べて多い。

出土土器は総数114片とまとまっている。41・42は同一個体の口縁部破片。波状をなし、口縁下には「たが」状の高い隆帯を波状にめぐらす。隆帯の上と両脇、さらに口唇部に絡条体圧痕文を施す。43は絡条体条痕をともなう胴部破片。その他図示したものを含めて出土した10片すべてが第6類土器B種に分類される。48・49は捺糸文が施された胴部破片。図示した2片のほか3片出土している。50~55は貝殻条痕をとどめるもので、50~54は表面、55は裏面に施されている。図示した以外に5片条痕のある破片が出土しているが、それらは1点をのぞき絡条体による条痕とみられる。56~60は東海系の薄手土器。57は爪形状のキザミをもつ細い隆帯を数条めぐらし、入海II式に比定される。58~60は外面に擦痕を残す。出土土器の多くは無文の小破片であり、厚手のもの58片、薄手のもの25片を数える。

出土石器は、石鏃10点、石錐2点、スクレイパー10点、ピエス・エスキュー4点、小剥離痕のある剥片



图165 膳棚B遺跡遺構外出土土器拓影（1：3）

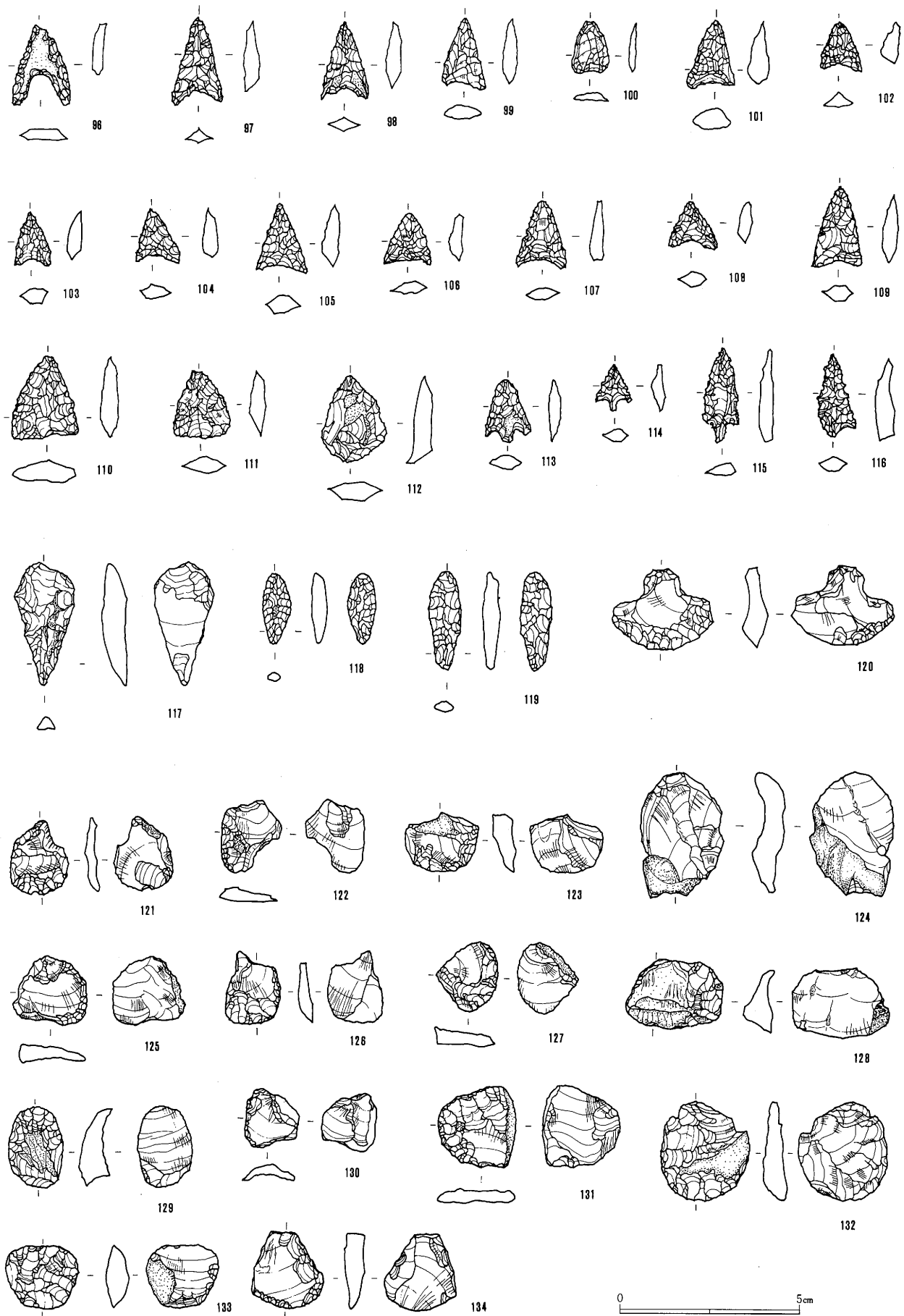


图166 膳棚B遺跡遺構外出土石器実測図1 (2:3)



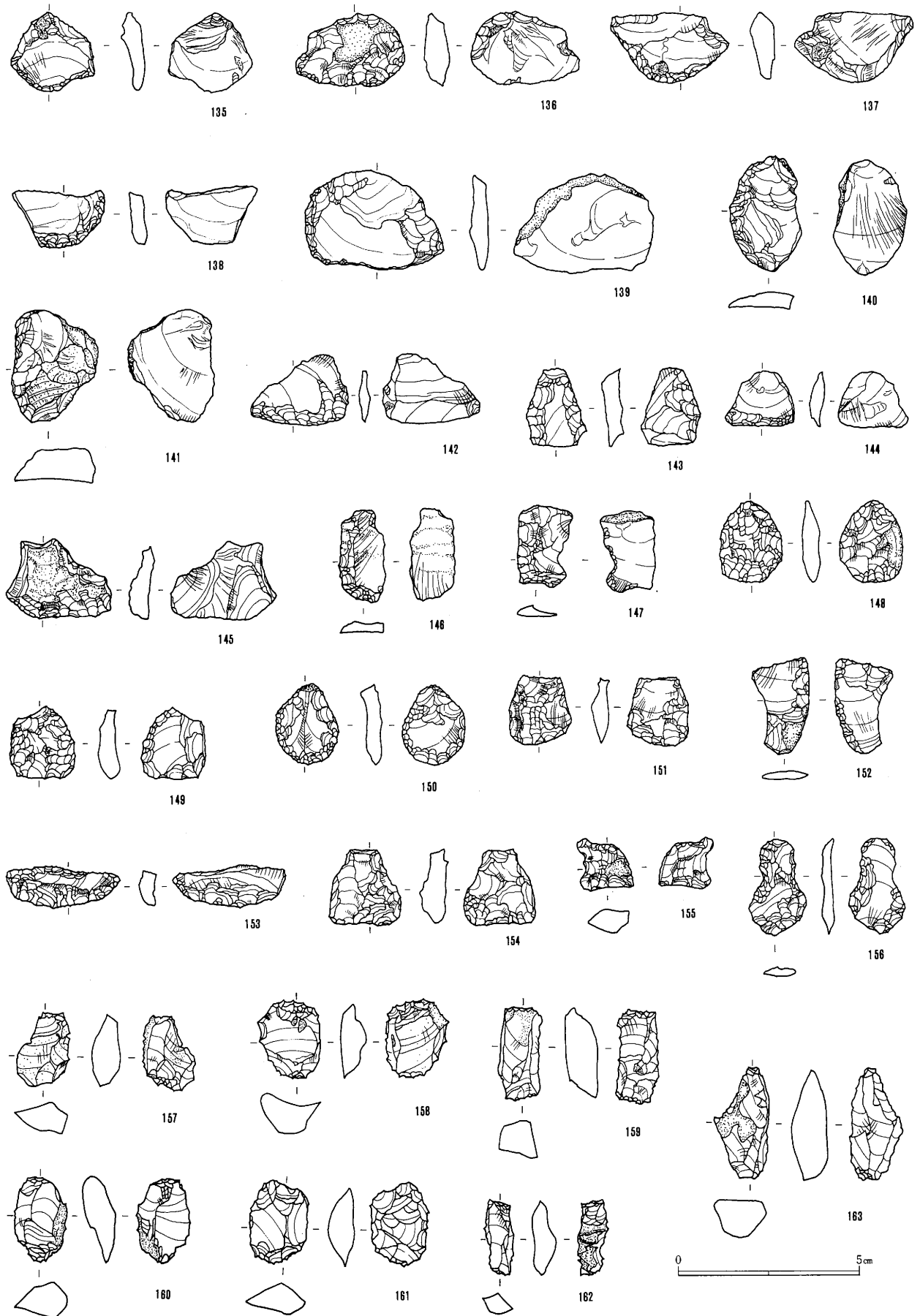


图167 膳棚B遺跡遺構外出土石器実測图2 (2:3)

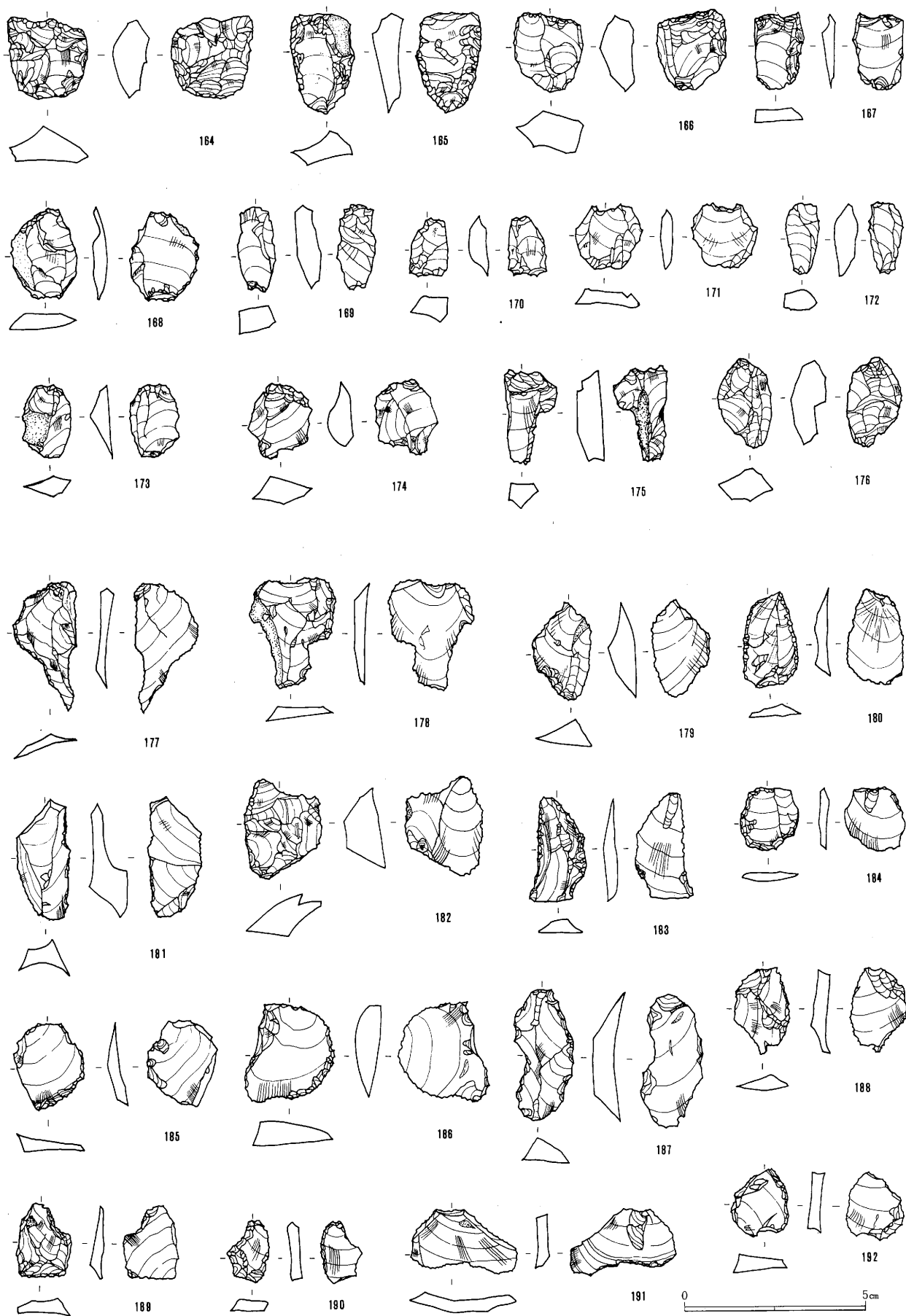


图168 膳棚B遺跡遺構外出土石器実測図3 (2:3)

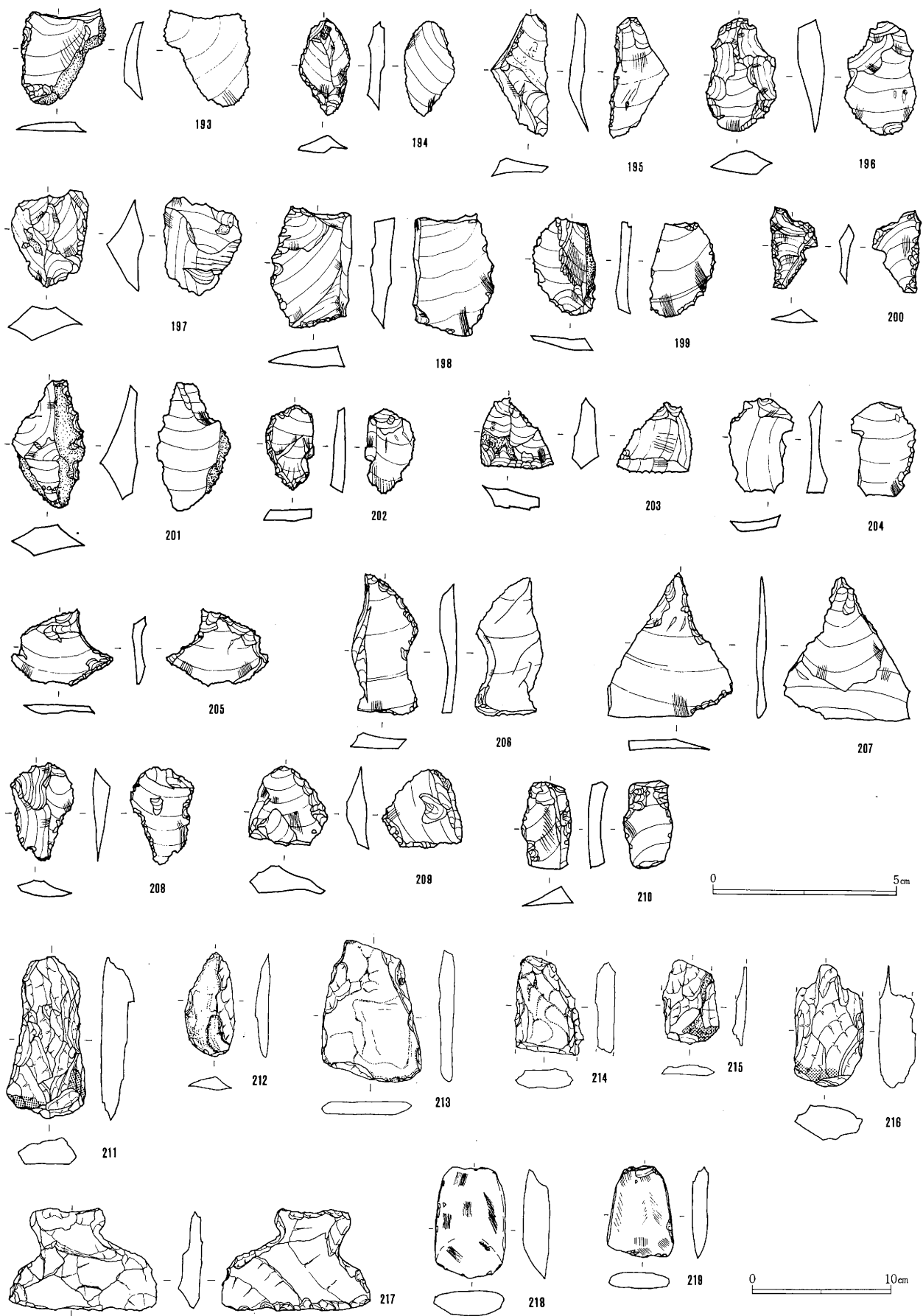


图169 膳棚B遺跡遺構外出土石器実測图4 (193~210 2 : 3、211~219 1 : 4)

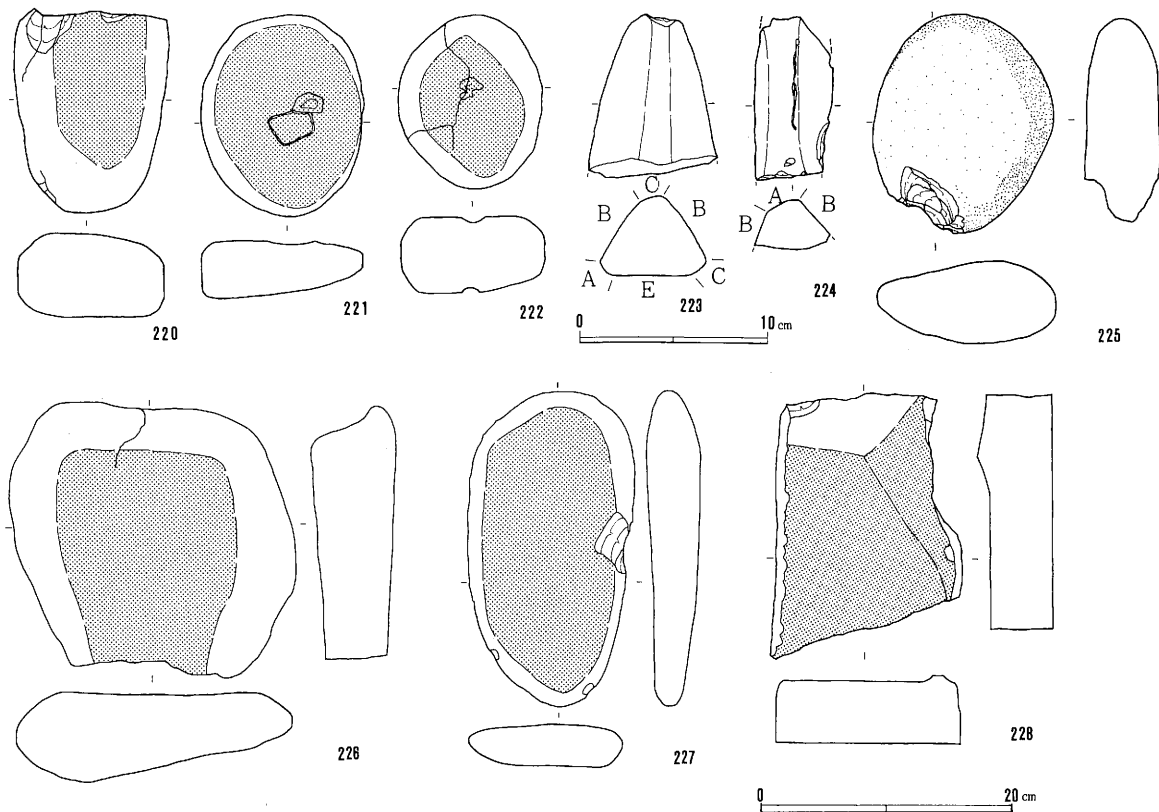


図170 膳棚B遺跡遺構外出土石器実測図5 (220~225 1 : 4、226~228 1 : 6)

図166~図170の遺構外出土石器の層位別出土状況は次のとおりである。

I層—96、102~108、110、113、116、120~122、131、132、143、146、148、152、155、158、163、171、174、175、182、183~188、190、194~200、209~211、213、216、219、227

II層—123、214、225

III層—114、115、119、124~129、136~138、141、145、149、150、153、154、156、159、160、164、166、169、170、177~181、191、192、201、203~208、212、215、220、222~224、226

IV層—109、111、117、130、162、228

V層—98、112、133、134、139、140、147、173、176、189、202、221

河川址—97、99~101、118、135、142、144、151、157、161、165、167、168、172、193、217、218

25点、打製石斧1点、石皿1点、その他の石器2点がある。72~77は石鏃で、73は凹基2類、72・74~76は凹基3類で、77は欠損品である。78は石錐で棒状4類、79~84はスクレイパーで、79~82は片面加工外湾状1類、83は同2類、84は同加工直線状である。85~90は小剝離痕のある剥片1類、91・92は同2類、93は両面加工を有するその他の石器である。94は打製石斧の欠損品、95は石皿である。

エ 遺構外出土遺物 (図165~図170)

(ア) 土器 (図165)

I層出土土器 (61~65) は総数19片と少ない。61・62は絡条体圧痕文で第6類土器B種に含まれる。このほかに微小破片が2点出土している。63・64は絡条体条痕をとどめる胴部破片。65は入海II式に比定される東海系の薄手土器である。

III層出土土器 (66~80) は総数84片を数え、層位的に最もまとまっている。66は鶉ガ島台式に属する胴部破片。67は口縁下に太い隆帯をめぐらし、隆帯上に弧状の短沈線を施している。68~75は絡条体圧痕文、

68～70は撚糸文、71・72は絡条体条痕をそれぞれ伴う。図示したもののほかに8片出土しているが、絡条体圧痕とともに撚糸文、絡条体条痕を伴うものが多い。すべて第6類土器B種に分類される。76～78は撚糸文、79は絡条体条痕をもつ胴部破片。80は東海系の薄手土器で、入海式に比定されよう。薄手土器片は総数10片を数える。

V層出土土器(81・82)のうち81は鶉ガ島台式～茅山下層式に属する胴部破片。原体LRの縄文を地文として、幾何学状の沈線文を描く。82は貝殻によると思われる条痕文をとどめている。出土総数18片のうち、絡条体圧痕文をもつ小片1片を含んでいる。

このほか、I・II・III層・河川址内から図示した後期前半土器(83～90)、晚期土器(92)、時期不明土器(91)をはじめ、後、晚期にかかると思われる無文土器が若干出土している。

#### (イ) 石器(図166～170)

遺構及び遺構外各層から出土している石器量は表16に示す通りである。

96～116は石鏃で、96は凹基1類、97・98は凹基2類、99～109は凹基3類、110・111は平基、112は凸基1類、113～116は有茎鏃である。117～119は石錐で、117はつまみを有するもの1類、118・119は棒状4類である。120は石匙で1点だけの出土である。121～153はスクレイパーで、121～134は片面加工外湾状1類、135～141は同2類、142～147は同加工直線状で、148～151は両面加工外湾状1類、152・153は同2類である。154～156は両面加工を有するその他の石器である。157～176はピエス・エスキューで、157～163は1類、164～166は2類、167～171は3類、172～176は碎片である。177～192は小剥離痕のある剥片1類で、193～210は同2類である。211～216は打製石斧、217は粗製大形石匙、218・219は定角式の磨製石斧である。220は磨石、221・222は磨石+凹石のもの、223・224は特殊磨石である(註1)。225は礫器、226～228は石皿である。

遺構	石鏃	石錐	石匙	スクレイパー	ピエス・エスキュー	小剥離痕のある剥片	打製石斧	横刃形石器	粗製大形石匙	磨製石斧	礫器	磨石・凹石	石皿	その他の石器	原石(個, g)		石核(個, g)		剥片(g)			
															総て黒曜石	黒曜石	チャート	黒曜石	チャート			
遺構	23	6	0	22	24	68	3	0	0	1	0	2	6	5	0	0	7	69.4	1	4.5	935.0	427.6
I	30	0	1	15	12	37	3	0	0	4	0	0	1	1	16	223.4	50	303.4	3	56.6	1,264.9	262.7
II	0	0	0	1	0	2	4	0	0	0	1	0	0	0	5	74.8	6	51.5	1	7.2	103.9	37.5
III	40	4	0	23	18	35	4	0	0	1	0	4	1	2	44	703.3	64	509.8	11	100.8	1,132.7	339.4
IV	3	1	0	2	2	3	0	0	0	1	0	0	1	1	1	23.8	11	81.7	1	3.3	100.8	46.3
V	2	0	0	9	4	10	0	0	0	1	0	0	1	0	21	295.0	90	485.5	6	54.1	432.9	167.5
河川址	9	1	0	3	11	5	2	0	1	1	0	1	0	1	6	88.3	14	59.0	1	3.2	148.1	56.2
合計	107	12	1	75	71	160	16	0	1	9	1	7	10	10	93	1,408.6	242	1,560.3	24	229.7	4,218.3	1,337.2

表16 膳棚B遺跡石器出土量一覧表

#### (4) 弥生時代以降の遺構と遺物

##### ④ 遺構と遺物の出土状況

##### ア 水田址(図171)

03トレンチ上部において、木杭が打ち込まれた状態で出土し、これより北西には客土、その下に水田耕土と思われる土が土層断面で確認できた。そこで、時期は不明ながら現在の水田より古い水田が良好な状態で埋もれていると予想して一帯を拡張し調査した。その結果、現水田下に旧水田の耕土面を検出し、水田規模が明らかにできた。

調査拡張範囲が現水田の1枚の大きさである。まず、現耕土を剥ぐと、45×8mほどの規模で長形状

(註1) 第4節 P185 註1参照

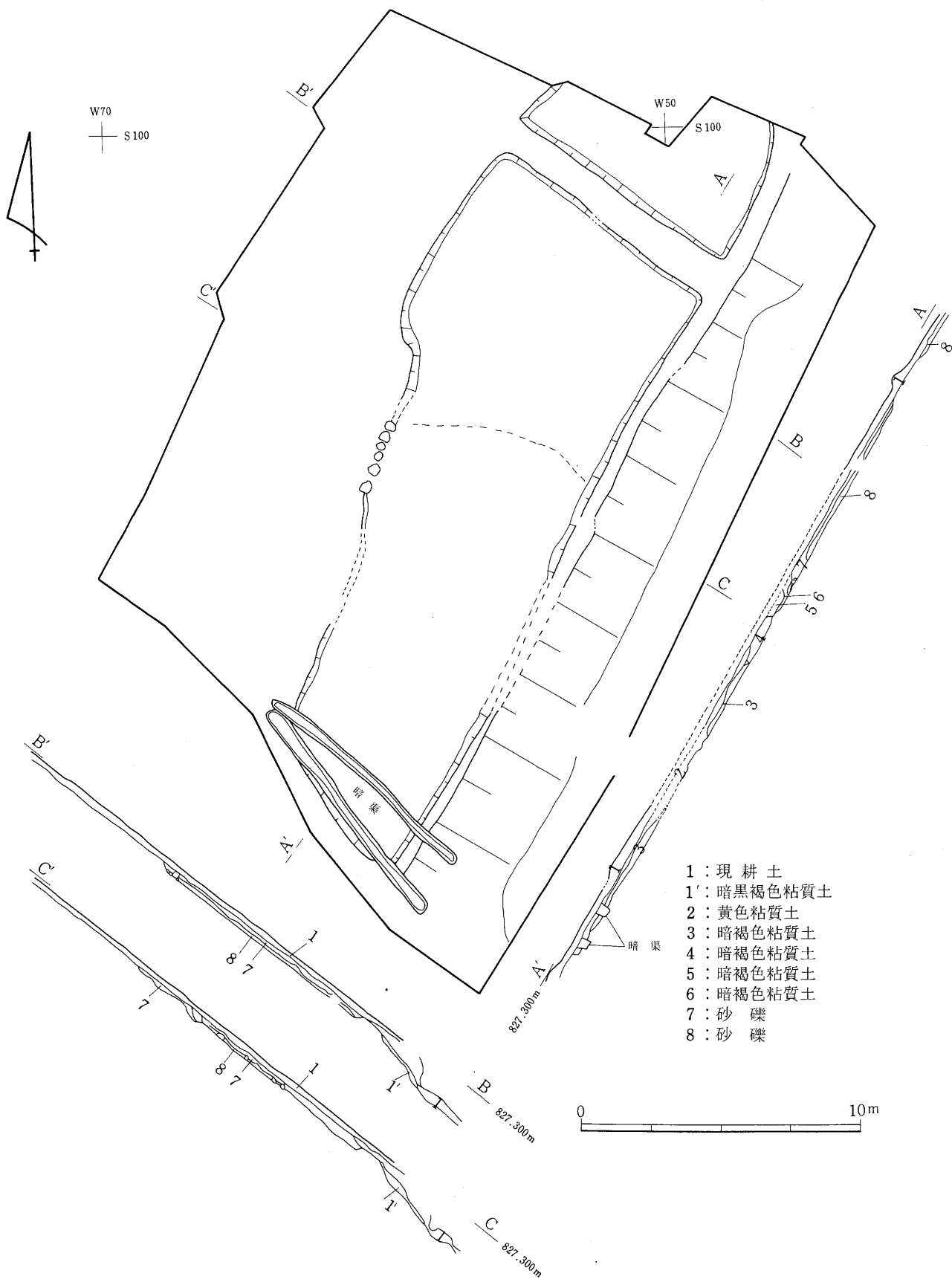


图171 膳棚B遺跡水田址実測図 (1:200)

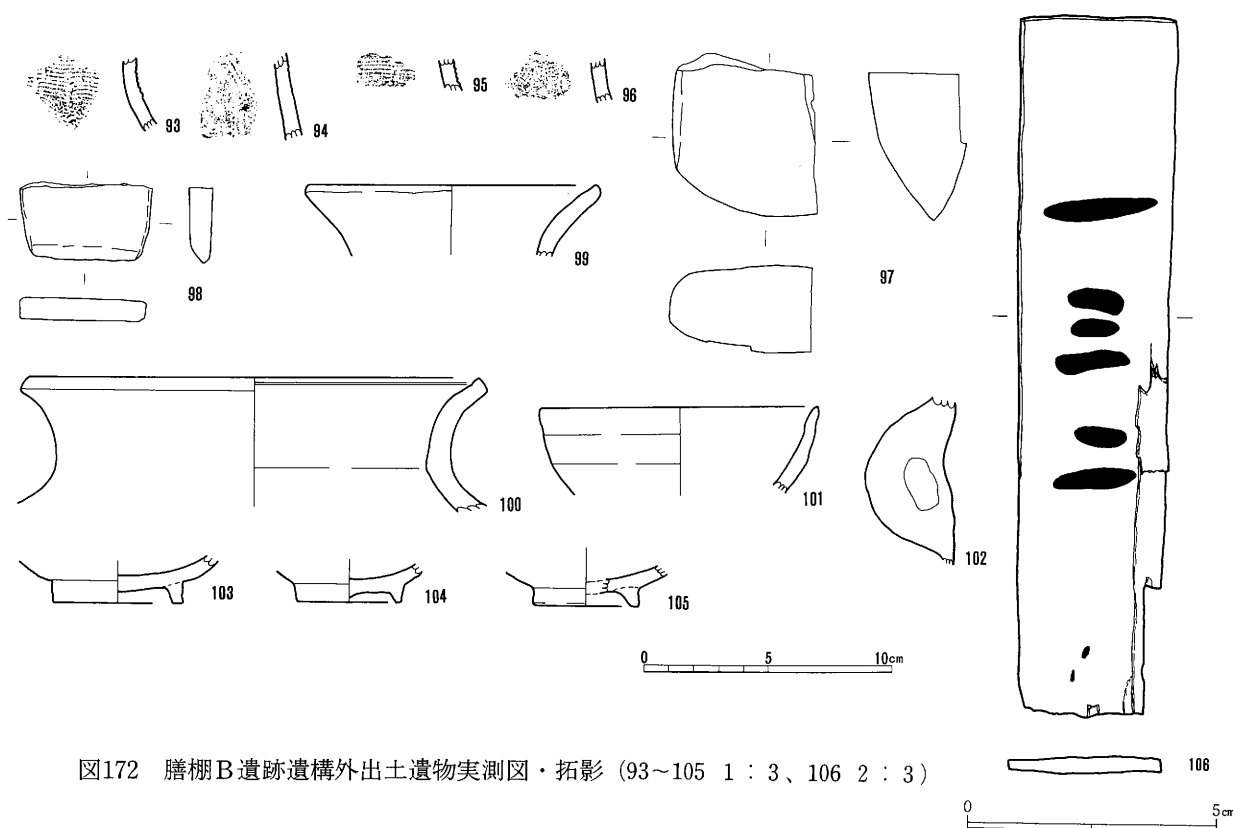


図172 膳棚B遺跡遺構外出土遺物実測図・拓影 (93~105 1 : 3、106 2 : 3)

に客土部分が露呈した。この客土を剥いだ状態が図171である。客土も北半分と南半分では土質が違っていたが(点線部)、客土の土質の違いか、それとも2枚の水田であったために土質が違ったのかは明らかにできてない。畦畔は、東側では現畦畔下にあり、その中心はやや西に寄っている。この畦畔が前述した木杭を芯にして構築されていた。南側も現畦畔と同じで、北には幅広の畦畔があり、その上部には現畦畔がある。西は、現水田中央東寄りに一部石列の部分があり、ここから一段落ちて区画をなす。これより西は地山が平坦面になっている。

以上の状況から、現水田下には45×8mほどの水田があり、これに客土して、現水田面を造成したととらえられる。おそらく、西と東で上下2枚になっていた水田の西側の一段高い水田を削って東側の一段低い水田を埋め、現在の大きさにしたものと考えられる。

さて、造成時期であるが客土から出土している遺物に近代の陶磁器類が含まれていることから、ごく最近のものと考えられる。このほか、本水田址の周辺には、このような水田造成がなされたであろう痕跡が土層断面からいくつか確認されている。

#### イ 遺構外出土遺物 (図172)

河川址及び、I層・II層を中心にしてわずかに土器、石器が出土している。93~96は櫛描波状文、簾状文が施された弥生時代後期と思われる土器片で、97は太形蛤刃石斧、98は扁平片刃石斧のそれぞれ欠損品である。99・100は古墳時代の壺、甕の口縁部破片であり、101・102は中世の遺物で、前者は天目茶碗の口縁部、後者は内耳土器の破片である。103~105は近世と思われる天目茶碗の底部破片である。

106は03トレンチ発掘時に水田床土下のII層に対比できる砂礫まじりの灰褐色土層中より出土した木筒である。一帯は砂礫層の分布する湧水の激しい地点で、当初木筒と気付かなかったため出土状況、出土地点の詳細は不明である。後日、出土地点と思われる場所を拡張したが、関連すると思われる遺構、遺物はなかった。またトレンチ調査時に周辺から弥生土器、内耳土器片がわずかに出土している。木筒は両側縁

が削られ、上部は切断されているが、下部は折れている。上端断面をみると樹皮を剥いだ痕がそのまま残っている状態が観察できる。木簡には、墨が薄くなっている部分もあるが「一三二」と記され、その下方に墨の痕跡とも思われる点状のものが見られる。しかしこれは単なる汚れかもしれない。時期的には平安時代から鎌倉時代もしくは、これより若干下がるかもしれないとの教示を受けている（註1）。

この他、銭貨が出土している。「寛永通宝」5枚、「元豊通宝」2枚である。

#### (5) 河川址

遺構ではないが、河川址を一部発掘した。立地環境との関わりもあるのでふれておく。

##### ① 1号河川址

調査区北側でやや弧を描くようにⅢ層下部で検出され、検出部分は全掘した。当初Ⅲ層と河川址覆土が似ているため両者が区別できなかったが、断面観察からⅢ層を切って存在することを確認した。底面近くには砂層があり、また、ポットホール状の穴も見られることから、水が流れていたととらえられた。覆土中から、縄文時代早期末～晩期土器片、弥生土器片、石器が出土している。流れ込み遺物と考えられる。

##### ② 2号河川址

3号河川址に平行し、その東側に位置する規模の小さいものである。Ⅴ層上面で検出し、北は1号集石址横からはじまるが、だんだん浅くなり、8m程南流したところで途切れる。覆土は、砂、砂礫、褐色土、砂まじりの褐色土、黒土と砂の混土層が入りまじっている。底はゆるいU字形をなしていて、黒曜石、時期不詳の土器片が出土している。9号土壙は本址に切られている。

##### ③ 3号河川址

2号河川址の西にある。01・02トレンチ発掘時に交点付近から土器片・植物遺体が出土したので拡張したところ、規模の大きな河川址となり、更に低湿地の様相を示した。検出面は耕土下である。2m幅でトレンチ状に発掘したところ、覆土は礫層、砂と泥の互層、黒色粘土層、砂礫層からなることがわかった。中から、古墳時代の土器片とブナ、トチノキ等の果実やモミの葉、木材が出土している。

##### ④ 4号河川址

南端にあり、Ⅴ層上面でその一部分が検出された。全体の状況は不明であるが、覆土は下部に砂層、上部に黒色土があり、繊維土器が1片出土している。

以上これらの河川址が調査区内に見られたが、その検出、発掘は一部分であるため、これらの時期及び相互関係は不明である。いずれにせよ、扇状地上を流れる自然河川の一部であることは間違いない。

## 5. 成果と課題

### (1) 縄文時代早期末葉の土器 ―絡条体圧痕文系土器をめぐって―

本遺跡からは、昨今報告書等においてその編年的位置づけが注目されつつある絡条体圧痕文系土器(第6類土器)がほぼ純粋な状態で出土している。とりわけ、1号住居址より一括出土した資料は器形・文様構成が明瞭であり、他遺跡との資料比較を行う上できわめて良好な資料であったことは、先に詳述したとおりである。絡条体圧痕文の施された土器群は、今日、絡条体圧痕文土器即ち子母口式土器という旧来の理解を離れ、早期末葉～前期初頭の土器群の中に存在が認められる土器とされるようになったが、資料的制約の中で時間的・空間的解明は緒についたばかりというのが実情であろう。こうした状況の中であって、当遺跡より出土した資料はほぼ絡条体圧痕文土器のみによって占められていること、さらに時期決定の指標

(註1) 奈良国立文化財研究所 鬼頭清明氏の御教示による。



の一つとなりうる東海系の薄手土器を遺構や地点ごとに相伴していることなど、他遺跡にない条件を備えており、絡条体圧痕文系土器の時間的位置づけや段階区分をする上で重要な意味をもつものと思われる。以下、本遺跡出土資料を中心として、本報告書に同時報告されている下り林・中島A両遺跡、さらに他地域の遺跡の資料をも含めて、同土器についての若干の整理を試みておきたい。

膳棚B遺跡より出土した絡条体圧痕文土器は、横方向・山形・「X」字状のモチーフを構成し、器内面に条痕文をともしないもの(B種)に限られ、下り林遺跡等で出土している一群(A種=裏面に条痕文をとめ胎土に多量の繊維を含むもので、「イモ虫」状の絡条体圧痕文が横位モチーフを中心に描かれる)は一切出土していない点の一つの特徴を見出すことができる。こうした特徴は岡谷市梨久保遺跡出土資料にも共通する〔小沢由香利1986〕が、この土器裏面を中心とする器面調整の相違は、本土器群を分類し時間的に細分する上で大変有効な属性の一つであると考えられる。こうした考えに基づき他遺跡の資料を検討すると以下のようになる。まず、下り林遺跡について見ると、同遺跡から出土している絡条体圧痕文土器はすべて先のA種に含まれるものであった。また、当膳棚B遺跡に隣接する中島A遺跡においては、A種土器とB種土器とが地点を全く異にし、かつ前者が層位的にみて下位より出土している事実が大きくクローズアップされてくる。このことは、A種土器とB種土器とが分離され、それが時間差として再編されることの蓋然性を物語るとともに、B種土器を純粋に出土する膳棚B遺跡の時間的位置づけを可能にしている。ここまで明らかのように、1号住居址を中心とする当遺跡出土資料が絡条体圧痕文系土器の中で一段階を画するものであり、それに先行するものとして下り林遺跡等で出土している一群の土器(A種)が存在するであろうことが確認される。この他、A・B両種に含まれない一群が存在する。C種土器とし分離した土器がそれで、繊細な絡条体圧痕文を横位と縦位のみのもので構成をもって施文している。膳棚B遺跡より1点、中島A遺跡より1点と数量的には極くわずかではあるが、胎土・調整・文様の各属性において共通する要素をもち、A・B両種土器とは明らかに異なっていることから、A種とB種との差異と同等に評価した。C種土器の類例は塩尻市青木沢遺跡〔小林康男ほか1985〕に求められ、同遺跡では捺糸文を地文とするC種比定土器を単独に出土している。A種やB種に対する時間的な位置づけは明確にはし難いものの、絡条体圧痕文系土器の中では新しい要素とされる〔笹沢浩1982〕・〔小沢1986〕捺糸文をとまなっている点、また、当膳棚B遺跡より出土した資料が、本遺跡出土土器の中でも新しい段階に比定される東海系の石山式土器を伴出している点などからすれば、B種土器よりも後出的としうるかもしれない。以上・膳棚B遺跡を中心とした下り林・中島A各遺跡出土の絡条体圧痕文系土器の比較・検討から今報告において2分類項目としたA種・B種・C種がそれぞれ段階区分をする上での単位となりうることに、それらがA種→B種→C種という時間的先後関係をもつであろうことが、それぞれ課題を残しながらも明確にしえたと思う。なお、B種土器は東海系土器との対比からみると入海Ⅱ式～石山式を伴出しており、それらに併行すると考えられるが、そのことは同種が捺糸文をもつものともたないもの、あるいはモチーフの差といった点から、入海Ⅱ式と石山式のそれぞれに対応する前後二段階に細分される余地を残している。

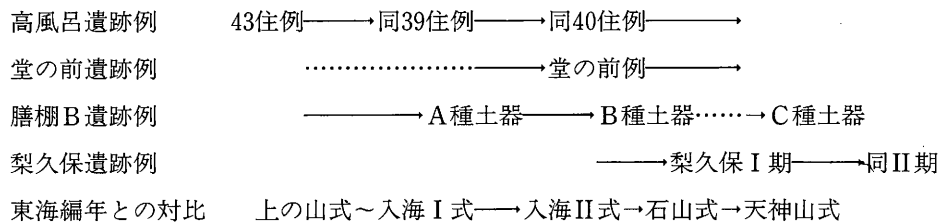
最後に、ここで得られた成果を、絡条体圧痕文系土器の好資料を出土し、その時間的位置づけ・段階設定を行っている茅野市高風呂遺跡例〔守矢昌文ほか1986〕、ならびに岡谷市梨久保遺跡例〔小沢1986〕と対比させて、絡条体圧痕文系土器の時間的位置づけと細分を試み、膳棚B遺跡の性格を理解するための一助としたい。

高風呂遺跡からは該期に属する3軒の住居址が検出され、それぞれに対応する3段階の細分を行っている。絡条体圧痕文土器を大きく、非装飾的なものと装飾的なものとに分け、前者から後者への変遷と理解し、その上限を茅山上層式の古い段階に、下限を入海式～天神山式のなかに求めている。絡条体圧痕文系土器の上限を茅山上層式の古段階まで遡らせることが妥当か否かは他資料による検証を待たねばなるまい

が、この非装飾的な一群は今回細分したA種土器の一部を含むとともに、それに先行するより古い様相をもっている点は評価されてよいと思われる。また、同遺跡第40号住居址出土土器を中心とする装飾的な一群は、東海系の入海Ⅱ式～天神山式までを含んでおり、さらに細分されると考えられるが、資料の特徴および先の伴出土器からすれば、当報告中のA種の一部とB種の一部とに相当しよう。類似した構成を示す例として塩尻市堂の前遺跡出土資料〔小林ほか1985〕があり、A種土器とB種土器との中間的な様相をもつ一群として理解される。

梨久保遺跡例も住居址出土資料に基づいて、絡条体圧痕文土器を二細分している。古段階（第Ⅰ期）として“条痕文系の土器と捺糸文を地文とする絡条体圧痕文土器の一部、さらに石山・天神山式に比定される土器群”の三者を当て、新段階（第Ⅱ期）としては“前期最初頭とする絡条体圧痕文土器と捺糸文・縄文施文土器群”を当てている。また、この新段階に後続するものとして“縄文を多用する花積下層期の様相の強い土器群”（第Ⅲ期）を設定している。梨久保遺跡出土の絡条体圧痕文土器の特徴は、条痕文を全くもたずほとんどすべて捺糸文を地文としている点にある。こうした特徴は上述した高風呂遺跡出土資料には見られなかったものであり、類例は当遺跡1号住居址出土資料の中に見ることができる（第6類土器B—2種a、第155図）。しかしながら、膳棚B遺跡の場合、条痕をもつものと条痕・捺糸文をともにもたないものが伴出している点で趣を異にしている。前述したように、捺糸文施文は前期へ接続する新しい要素であるといえ、その多用は梨久保遺跡報告文中でも述べられているように、絡条体圧痕文系土器の中でもより後出的なあり方を示していると考えられる。このことは膳棚B遺跡例が入海Ⅱ式～石山式を、梨久保遺跡例が石山式～天神山式をそれぞれ共伴している点からも裏付けられよう。

膳棚B遺跡出土の絡条体圧痕文土器を中心とした他遺跡例との比較を通して、同系土器の大雑把な変遷を追ってみたが、今一度整理すると以下ようになる。

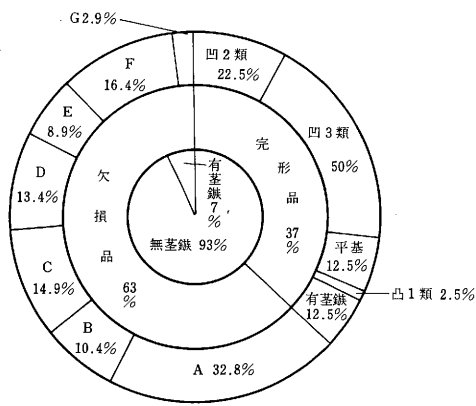


おおむね上記のような段階変遷を想定しえたが、資料的に不備な点も多々あり、今後の資料増加に待つ部分を少なからず残している点は否めない。とりわけ、絡条体圧痕文系土器の発生的系統性を含めた展開と消長に関するトータルな視点の確立、また細部にわたっては器形・文様モチーフの変化、あるいは共伴、共存する土器群との関係などが、本土器群を理解する上での重要な課題として検討されてゆかねばならないであろう。

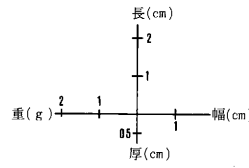
## (2) 縄文時代早期末葉の石器（図173）

本遺跡出土の石器群は、土器の伴出状況を対比させると縄文時代早期末葉ないし後・晩期のものととらえられる。更に、出土土器の量比をみると、早期末葉の石器群がその主体を占め、後・晩期は少量である。また、発見遺構の数も早期末葉が大半である。こうした状況を考慮すると、本遺跡出土石器群の大半は、基本的には早期末葉の石器群と大枠でとらえて問題ないと考えられる。とはいえ、石器は生産用具であるため、土器に比べてその移動範囲は大きく、本遺跡の場合も当然考慮しなくてはならない。

本遺跡出土の石器群は表16に示した通りで、この中でまず早期末葉とおさえられるのは該当遺構出土の

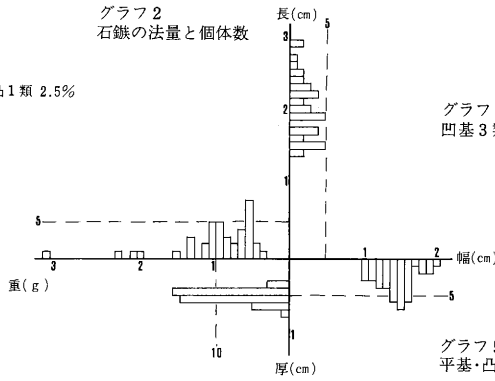


グラフ1 石鏃分類別比率 欠損状況等

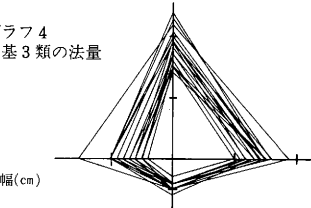


グラフ3 凹基2類の法量

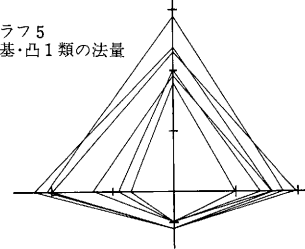
グラフ2 石鏃の法量と個体数



グラフ4 凹基3類の法量



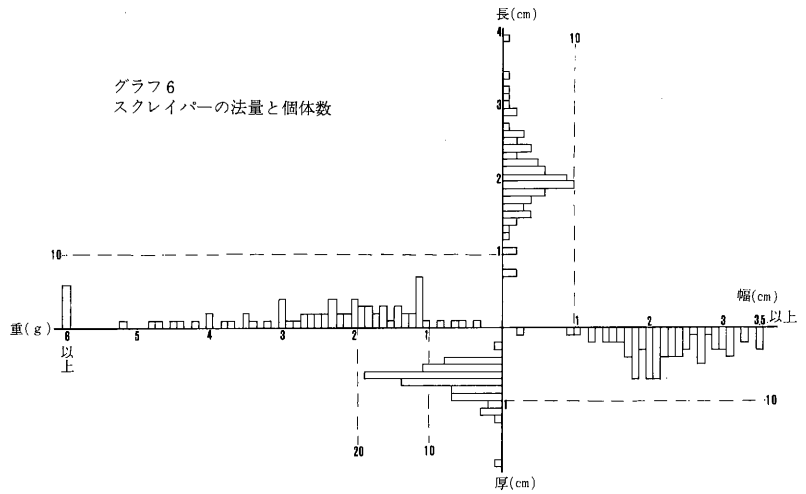
グラフ5 平基・凸1類の法量



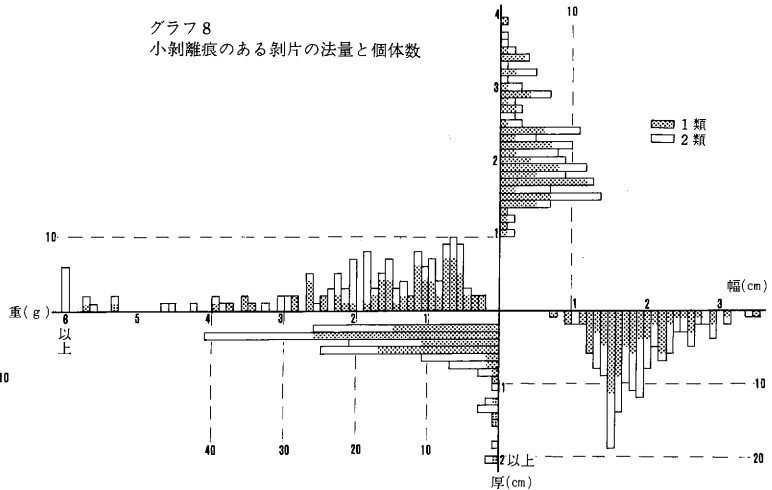
スクレイパー分類図

片面加工	外湾状1類		129
	外湾状2類		136
	直線状		145
両面加工	外湾状1類		150
	外湾状2類		152
	直線状		

グラフ6 スクレイパーの法量と個体数



グラフ8 小剥離痕のある剥片の法量と個体数



グラフ7 ビエス・エスキューノの法量と個体数

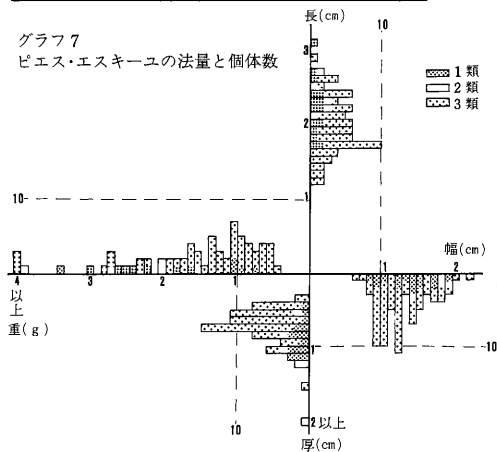


図173 膳棚B遺跡石器様相図

ものである。次に、遺構外出土のものを考えると、I層は時期を限定できず、II層・河川址出土例も伴出土器からみて同様である。III層出土例は、その量が多く問題となる。III層からは早期末葉の土器群が主体的に出土しているが、後・晩期の土器や有茎鏃も若干混在している。しかし、早期末葉の遺構の検出状況からその掘り込み面はIII層中にあると考えられ、III層出土の石器群は明らかに後の時期とされるものを除けば、早期末葉ととらえて問題なかろう。以下のIV・V層出土品は、伴出土器の関係・III層との関係からして、早期末葉とすることができる。

以上、本遺跡出土石器群のうち、早期末葉に限定できる石器群は該当遺構及びIII・IV・V層出土のものとしてすることができる。

こうしてとらえられた早期末葉の石器群は、石鏃64点、石錐11点、スクレイパー56点、ピエス・エスキュー48点、小剥離痕のある剥片116点、打製石斧7点、磨製石斧3点、磨石・凹石6点、石皿9点、その他の石器8点になり、一応の器種が揃うまとまった資料とすることができる。これらの組成状況は、第4節の大洞遺跡の項で示し、他遺跡との比較も行い、その結果、スクレイパー、ピエス・エスキューが他遺跡に比べて高い比率にある特徴が認められた。また、同時期の遺跡の中ではその生産基盤を主として狩猟に置いたであろうと考えられる大洞遺跡の器種組成と類似している状況もうかがえた。本遺跡は石器の器種組成から大洞遺跡と同様に狩猟に重きをおく遺跡ととらえられる。スクレイパーを解体処理具とすれば、その比率の高さもこのことを裏づけるだろう。

次に各石器の様相を概観し、そこにどんな特徴があるか考えてみたい。石鏃では、大洞遺跡分類の凹基2類・3類、凸基1類、平基があり、完形品でみるとその数は、それぞれ7・10・1・5点となって、基部の挟りが浅い、もしくは無いものが大半を占める。大洞遺跡の項で触れたが、こうした石鏃のあり方が本時期の特徴となる可能性を持っている。法量等については早期末葉と限定していないがグラフ1～5に示してある。石錐は、形状では棒状で、刃部調整では4類が多いものの数が少なく極立った特徴を指摘することはできない。

スクレイパーは特徴的で図173に示すように細分できる。すなわち、片面・両面加工とも刃部外湾状となるものには、刃部を母指状に作り出すか、ゆるやかに外湾させているかの二者があり、前者を1類、後者を2類とした。遺跡全体では前者が片面・両面加工合わせて33個、後者は24個、早期末葉に限定してみると27個と19個となり、この両方でスクレイパーの大半を占めると共に、1類が2類を圧倒している。1類は形状が定形的である一方、1類・2類及び直線状いずれの刃部調整もていねいである。こうした特徴は、前期末から中期初頭の大洞遺跡のスクレイパーには見られなかった傾向で、1類の存在及び、刃部調整のていねいな点は本遺跡のスクレイパーの特徴とすることができよう。更に、他遺跡との比較から早期末葉の特徴とできるかどうか検討していきたい点でもある。

ピエス・エスキュー、小剥離痕のある剥片では特別な状況は認められないが、共に小さいという感じがする。事実、グラフ7と8の法量を大洞遺跡と比べてみても全体に小ぶりであることは確かである。一方、打製石斧、磨製石斧、磨石・凹石、石皿については量が少なく際立った特徴を指摘することはできない。

もう一点、石器群の特徴として石質の問題があげられる。早期末葉の石器群に限定して黒曜石製とチャート製の点数を挙げてみると、石鏃は42と22、石錐は2と9、スクレイパーは49と7、ピエス・エスキューは47と1、小剥離痕のある剥片103と13という数になる。前二者では、チャートを用いている点が特徴的で、石錐ではチャート製の方がその主体となっている。後三者では、この逆で黒曜石製品がその主流を占めている。一方、これらの材料であったり製作時に生じたりする原石・石核・剥片の合計重量を黒曜石とチャートで比較すると約5：1となり、チャートが石器製作において重要な位置にあったといえる。こうした状況は大洞遺跡には認められず、本遺跡との間には何らかの差異があるものと考えられる。この点に

については、本遺跡の時期、すなわち早期末葉においては、十分に黒曜石が普及する状況になかった、もしくは黒曜石だけに固執していなかったといった状況が想定でき、今後の課題である。

以上、本遺跡の早期末葉ととらえられる石器群の器種組成、各器種の様相、石質の問題について考えてきた。その結果、スクレイパーが多く、しかも形態に特徴があることが示され、凹基石鏃の基部形状が特徴的であることが指摘できた。また、石質については、チャートの利用度が高いという点が明らかにできた。それぞれに今後の課題を含んでいることも述べたが、この他にも、製作技術の問題、使用痕とその用途の問題等課題は多く、こうした点の解決をはかりながら、早期末葉の石器群がもつ特質をよりの確につかんでいきたい。

### (3) 縄文時代早期末葉の遺構群

早期末葉ととらえた遺構群は、住居址1軒、土壙6基、集石址1基、ブロック2ヶ所である。また時期不明とした6号土壙は検出面及び4・5号土壙と隣接するあり方からして早期末葉に含められると判断でき、土壙は7基となる。これらの遺構群は、その検出状況及び配置、出土土器の様相からほぼ同一時期とすることができ、当時の生活面はⅢ層中であつたと考えられる。

まず、これらの遺構群の配置状況をみると調査区中央東寄りに住居址があり、北に土壙群、北西に集石址、西にブロックが存在する。これらは隣接しており、互いに関連を持って存在していたであろうと考えられる。住居址は当然居住の場である。しかし、ここには炉は見られず、調理等の場は他に求められる。土壙群は7基と数は少ないが、うち6基が北にまとまっている。これらの用途については、1号土壙でリン分析を行ったものの決定はできていない。まとまっていること、住居とは分離していることを考えると墓域としての場が想定できよう。集石址は、住居址の北西にやや離れて位置し、石皿・磨石が集石の中に据えられたようにあり、早期末葉の石器群の全器種が少なからず出土している。また、原石・石核・剥片も少なからずある。こうした状況から集石址は日常生活での作業の場（石器製作の場、調理の場等）という性格が想定できよう。ブロックは、前述した通り発掘時には下に遺構が存在するのではないかと考え調査していたため、その観察は不十分である。1号と2号を比較すると、1号は2号に比べて遺物量は非常に少ないものの、出土土器は東海系の薄手土器で大半が占められる。2号は厚手の繊維土器が大半を占め、接合関係もわずかに認められ、石器では集石址と同じ程度の出土量があるが磨製石斧、磨石・凹石を欠いている。この比較からだけでその性格を語ることはできないが、従来からこうしたブロックは廃棄場としてとらえている場合が多く、本遺跡の場合もそうしたものの一つであろうと考えたい。

以上、発見された遺構群から、居住の場・作業の場・廃棄の場・墓域が想定でき、本遺跡が早期末葉における生活址の一端であつたことが類推できた。そして、石器組成からみてその生産基盤は狩猟に置かれたであろうと考えられる。しかし、住居址一軒だけで生活していたとは考えられず、砂礫層分布域に既に流出してしまった数軒の住居址を想定し、これらとともに集落を構成していたととらえたい。隣接する中島A遺跡からもこの期の土器片が出土しており妥当性はあろう。

一方、本地方において早期末葉の遺跡の発掘例は増加してきているものの、本遺跡のように該期の単純遺跡でしかも機能・性格を異にする遺構群が発見された例は稀有である。そうした点で、本遺跡の遺構・遺物の持つ意味は重要といえる。また、本遺跡の絡条体圧痕文土器をはじめとする厚手の繊維土器に伴出した東海系の薄手土器は搬入品そのものであり、小地域における独自の土器製作の成立と共にその交流があつたことを示している。こうした独自の土器製作の成立は、独自の文化の形成を示唆しており、それが互いに交流していることはそれぞれが補完関係にあつたことも示していよう。この補完関係の内容については説明できる現状ではなく今後の課題である。更に、岡谷市には本報告書所収の下り林遺跡のほか該期

の遺跡が点在している。こうした遺跡群の関連を解明しながら、縄文時代の「上昇期」ととらえられているこの期の本地方での状況を明らかにしていく必要がある。

## 6. 小結

本遺跡は、扇状地の扇央から扇端部にかけての比較的不安定な地に立地する遺跡である。当初、水田面が湛水状態になっていたりして、湧水の激しい地で、遺構の存在を疑問視する向きもあった。しかし、発掘調査の結果、縄文時代早期末葉の集落の一部と考えられる住居址・土壇・集石址・ブロックといった遺構群が存在していたことが明らかにできた。これは、当地方では比較的不明とされてきた早期末葉の土器群、石器群、集落のあり方に光を当てる上で十分な資料といえるものである。

一方、この他の時期の遺物も若干出土しているが、量はごくわずかである。そうした中で、木簡の出土は特記できるものである。遺構や関連する遺物の発見はなく、単独である点でその資料性はやや落ちるが、今後の研究の中で役立てられよう。

### 参考文献

- 市沢英利 1985 「膳棚B遺跡」『木簡研究』第7号 木簡学会  
岡本勇・戸沢充則 1965 「関東」『日本の考古学』II 河出書房  
小沢由香利 1986 「縄文時代早期末～前期初頭土器の分類と検討」『梨久保遺跡』岡谷市教育委員会  
神奈川考古同人会 1983 「シンポジウム 縄文時代早期末・前期初頭の諸問題」『神奈川考古』第17号  
小林康男ほか 1985 『堂の前・福沢・青木沢遺跡』塩尻市教育委員会  
笹沢浩 1982 「阿久遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—原村その5』長野県教育委員会  
山崎丈ほか 1986 『向山遺跡』東久留米市教育委員会  
守矢昌文ほか 1986 『高風呂遺跡』茅野市教育委員会

## 第8節 <sup>なかじま</sup>中島A遺跡 (GNJ)

### 1. 遺跡の概観

岡谷市1386～87、1402番地を中心に所在する。

塚間川の形成した扇状地の扇中央に位置する。塩尻峠のふもとで、国道20号線が遺跡付近を通っており、市街地をはずれた水田地帯のまん中である。

原地形は読みとりにくいが、小さな沢がいく筋も扇状地を開析して起伏に富んだ地形が形成されている。西側を大きな沢に、東側を塚間川の本流にそれぞれ開析された、狭いが小高い丘陵状の畑を中心として、中島A遺跡が認定されていた。西側の沢筋の水田面との比高差は約1.5mあり、その著しい段差から「中島」という地名がつけられたかと思われる。

しかし発掘調査の結果、このような立地に関する認識は修正が必要になった。詳しくは後述するが、当初遺跡の中心と考えられていた小丘陵の西側の段差は、沢の開析によるのではなく、断層崖であることが判明した。断層による沈降部は浅い皿状の池となり、次第に埋没して低湿地化していた。また扇状地を開析する沢は遺跡に直接関係しておらず、塚間川の本流も再堆積ローム層を人工的に切り込んでおり、やはり遺跡立地には直結していないと判断された。このような所見から、遺跡は、扇状地扇中央付近に形成された断層崖の縁辺、及び断層によって生じた小さな池の周辺に立地していた、とすることができよう。

断層崖上は小丘陵となって、再堆積ロームの土壌化が進まず、配水の不利もあって畑に利用されているが、表土はかなり流失しているとみなくてはなるまい。断層崖下の低湿地は、その上に形成された厚い表土で保護され、水田が開かれている。断層崖の斜面は用水路となり、自然崩落と相まって、本来の姿は失われていると思われる。

本遺跡に隣接して、膳棚B・中島B・柳海途の各遺跡が存在するが、発掘調査の結果、相互に有機的関連があることが判明した。また、岡谷市教育委員会により、周辺の遺跡の確認調査が行われているが、遺構・遺物が若干ながらも発見されており、扇状地一帯に遺跡が展開していた可能性がある。

### 2. 調査の概要

断層崖上の畑を中心に縄文～弥生時代の遺物が採集されており、断層崖下も含めて遺跡の範囲が想定されていた。遺跡の大半は岡谷インターチェンジ用地内にかかり、東南端等が用地外に延長するとの当初の予想は、調査の結果概ね正しいとみなされた。しかし遺跡範囲の大半は調査でき、その性格もほぼ捉えきれたと考えている。

調査面積は9,880㎡、用地買収の都合と予想以上に重層した遺跡の状況から、3年次にわたる調査となった。昭和57年度は、5月中旬の鍬入れ式に始まり、7月中旬まで断層崖上の畑の北半の発掘調査を行った。翌昭和58年には、4月下旬～12月中旬まで低湿地の包含層主要部分を、昭和59年には4月下旬～8月中旬まで低湿地の下層と断層崖上の畑の南半を調査した。調査研究員は各年度それぞれ、7名、4名、2名が主として当たった。整理作業は昭和57年12月から開始し、昭和59年度上半期に一時中断したものの、継続的に行われて本報告の刊行に至った。この間、当センター発行の『長野県埋蔵文化財ニュース』No.1、6、10等や、『長野県埋蔵文化財センター年報』1に、調査の途中経過や調査中の所見を報告した。

昭和57年度調査域は塚間川の右岸と左岸に分かれる。その右岸側は遺跡の中心地で集落が存在すると予想されていたため、土層把握のためのトレンチ調査実施後、ほぼ全範囲を面的に調査したが、土壌がわず

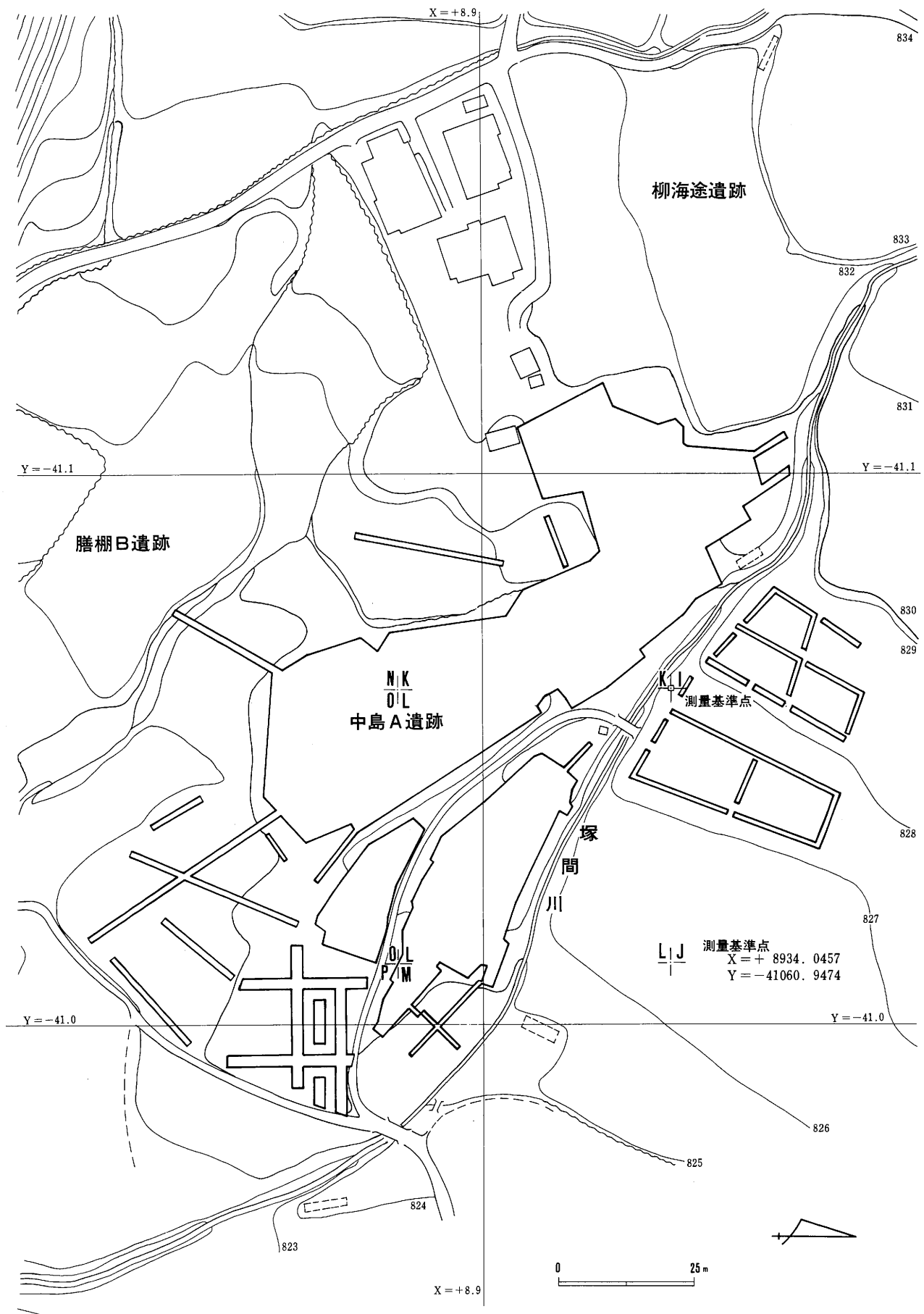


図174 中島A遺跡発掘範囲及び地形図 (1 : 1,000)



かに発見されたに留まった。左岸側は遺跡の性格把握のためトレンチ調査から着手した。自然流路跡とみられる砂礫層が全域に存在し、砂礫層やその直上の腐植土層から遺物が散見されただけで、面的調査は不要と判断した。また、塚間川は両岸に再堆積ローム層が露出し、掘り割り状であることが観察され、人工的な流路であると判断された。昭和57年度の調査は重機を用いず、すべて手作業によった。

昭和58年度調査域は、断層崖上に集落があれば遺物廃棄場に利用されそうな立地であった。初年度の調査で集落が否定的となったため、改めて遺跡の性格を捉えるべくトレンチ調査から着手した。隣接する中島B遺跡の調査結果を踏まえて先土器時代相当層まで確認した上で調査方法を検討することにした。その結果、発掘域の南半と北半で遺跡の性格が異なることがわかった。南半は旧表土層に遺物が散見されたにすぎないが、前年大久保B遺跡で検出したのと同様な断層が全域に延びていた。考古学的には面的調査は不要と判断したが、岡谷断層発掘調査研究グループが独自に調査を行うことになった。北半は断層崖下の池状の低湿地に泥炭層が形成され、その縁辺から縄文時代晩期末葉前後の遺物が集中的に発見されたため、面的な調査が必要と判断された。但し、断層崖斜面は使用中の用水路が残されていて調査不能、低湿地を横断する通路も利用者があって撤去不能であった。面的調査は低湿地の厚い表土剥ぎから開始し、重機を用いて泥炭層より1層上のIII層の上面まで除去した。低湿地の急激な乾燥を防ぐため、手掘りの溝1本で排水を試みたが、排水力が低く作業能率を低下させてしまい、最後まで排水方法に苦慮した。包含層は4層に及び、層別に発掘したが、層の面的広がりや把握と部分的に存在する層の把握は完璧とは言えない。有機質遺物は地点を決めて土壌ごとサンプルし、他は一般的発掘方法によったが、人工遺物は少量得るに留まった。遺物は出土状況からみて平面的位置の厳密な測量は不要と判断し、グリッド別に略測して取り上げた。大形材等の有機物は、加工痕がなければ選択的に取り上げるにとどめた。遺構の測量は割り付けによった。III～V層はほぼ完掘したものの、より下位の層からも遺物が発見されたため、冬期に至っても調査を終了できなかった。下層の調査を次年度へ延伸することが了承されたので、湿地全域にシートを敷き、砂を10cm程入れて湧水をその上に溜めて保全を図った。保全作業も含め、表土剥ぎ以外はすべて手作業によった。なお、低湿地という性格上、地質学や生物学の専門家から調査方法について多大な助言を得た。

昭和59年度の調査域は低湿地の下層と断層崖上の畑の南半であった。低湿地は冬期の保全に成功し調査が続行できた。低湿地を横断する通路も重機を用いて撤去できた。低湿地下層も面的調査を実施したが、遺構はなく、遺物もわずかであった。断層崖上は集落域の可能性があり、トレンチを密に設定して調査したが、遺構は皆無であった。遺物の取り上げや測量は昭和58年に準じた。また、通路の撤去以外は手作業で行った。

測量は断層崖上は遣り方測量で行い、低湿地は座標に合わせた杭を用いた割り付けによった。発掘域や土層図のポイントは光波測距儀で計測し、座標値に換算して作図した。測量基準点は、岡谷インターチェンジ関連遺跡共通の、日本道路公団の工事用センター杭、BSTA 0+87.0を用い、座標北は複数の工事用杭の座標値から換算した。基準点の座標値は $X=8934.0457$ 、 $Y=-41060.9474$ 、である。標高は測量基準点と同一杭上のレベル値を基準にした。その値は827.773mである。大地区は岡谷インターチェンジ関連遺跡全体を一括して設定した。

整理作業では、有機質遺物の鑑定を植物・動物の専門家に依頼した。鑑定終了後生物遺体はアルコール等を用いて保存し、遺物については保存処理を行っている。

### 3. 調査の経過

#### 昭和57年

- 5月11日 発掘調査の鍬入れ式。塚間川左岸からトレンチ調査開始。
- 5月19日 左岸は面的調査不要と判断。右岸のトレンチ調査に着手。
- 5月28日 右岸の面的調査に着手。土壌を検出。
- 6月7日 信州大学酒井潤一助教授に地質調査依頼。分層についての指導を得る。
- 6月22日 再堆積ローム層のトレンチ調査。先土器時代の層をさぐるが遺物皆無。
- 7月13日 本年度分調査終了。
- 12月13日 整理作業に着手。遺構は図版作成まで、遺物は実測まで、年度内に終了させる。

#### 昭和58年

- 4月20日 発掘調査開始。トレンチ調査に着手。
- 4月21日 泥炭層及び縄文時代晩期末葉前後の包含層発見。
- 5月2日 発掘域南半に溝状の落ち込み発見。
- 5月25日 信州大学小坂共栄助手来所。溝状の落ち込みは断層と判定。低湿地の表土剥ぎ開始。
- 6月3日 低湿地泥炭層以下のトレンチ調査。排水難航。
- 6月23日 低湿地の面的調査開始。板出土。木器用仮水槽作成。土器等の水洗・注記を、松塩筑調査事務所開始。
- 7月14日 泥炭層の調査に着手。信州大学酒井潤一助教授来所。花粉分析を依頼しサンプリング。
- 7月18日 27日まで岡谷断層発掘調査研究グループによる断層調査。低湿地は断層に伴う横ずれで生じたことが判明。断層の年代決定のための調査等に協力する。
- 8月2日 低湿地東縁に連続する遺物ブロック発見。低湿地中央の調査と平行して調査を進める。
- 8月26日 弥生時代の1号祭祀遺構発見。泥炭層直下より縄文時代後期土器発見。
- 9月5日 奈文研光谷拓実技官来所。材の処置について教示を得る。
- 9月13日 弥生時代の地表であるIVc層発見。
- 10月18日 柳海途遺跡との間に残った低湿地の延長部分の調査が許可され、重機で表土剥ぎ。併せて溜め池を掘削し排水に成功。
- 11月4日 弥生時代の2号祭祀遺構を発見。



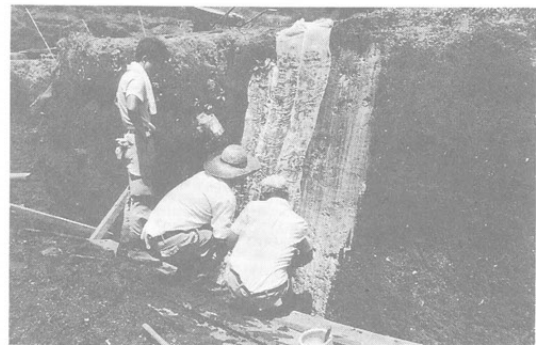
- 11月18日 遺物ブロックの主要部は掘りきるが、遺構及び泥炭層の調査が残る。
- 12月8日 泥炭層以下の層の調査を次年度へ持ち越すことが了承される。
- 12月14日 シート張りとはり完了。本年度発掘調査終了。



- 12月15日 整理作業着手。遺構図類の補訂・整備や状況の記録の統一、遺物の水洗・注記までを年度内に終了させる。

#### 昭和59年

- 3月14日 愛媛大学下条信行講師招聘。石戈かと思われる石器の鑑定依頼。
- 3月15日 信州大学大参義一教授招聘。出土土器について教示を得る。
- 4月23日 発掘調査再開。断層崖上のトレンチ調査に着手。低湿地も排水と砂の排除開始。
- 5月15日 断層崖上は遺構がなく、調査終了。
- 6月18日 低湿地泥炭層直下層の中位以下には遺物全くなし。面的調査終了。
- 7月3日 低湿地を横断する通路下の調査に重点が移る。土層転写実施。



- 7月16日 岡谷断層発掘調査研究グループの断層調査。25日まで実施。
- 8月18日 実測と撤収終了。調査完了。
- 11月1日 整理作業開始。遺構図類の補訂、遺物の接合までを年度内に完了。

#### 昭和60年

- 4月1日 整理計画立て直し。刊行に向けて本格的な作業開始。

#### 昭和62年

- 1月25日 原稿執筆終了。

## 4. 調査の結果

### (1) 地形形成と層序

#### ① 中島A遺跡付近における地形形成

法政大学 東郷正美（岡谷断層発掘調査研究グループ）

図175は、中島A遺跡付近の詳細地形分類図である。諏訪湖北岸平野の北西縁で南東に向かって広がる塚間川扇状地の扇央部にあたるこの付近では、この図のように、塚間川扇状地の主扇面に相当する最も上位のI面はすでに開析を受けつつあり、それより下位により新しい地形面II、III面の発達を認めることができる。中島A遺跡は、その中で最も下位のIII面上に位置している。このIII面とその北東側に分布するI面とは、北部においては北西—南東方向に直線的な低崖で境されている。今回の調査で、この崖線沿いには、III面構成物など完新世堆積物を変位させている見事な断層露頭が見出され、顕著な活断層が存在することが明らかとなった（図175）。中島A遺跡付近の地形形成にはこの活断層の“動き”が重要な役割を果たしていると考えられる。

活断層の分布状態およびそれによる地層の変位状態などを詳しく把握するために、図175に示す8つのトレンチ(A~G、X)を掘削して調査したが、図176は、その成果の一部で、A、E、Gトレンチのそれぞれ南東側壁面の地質スケッチである。これらで代表されるように、北東—南西方向に掘削した7つのトレンチすべての北西側と南東側の壁面には、顕著なそして場所によっては複雑な様相を呈する活断層帯が認められた。トレンチ調査および地表調査で確認した断層の分布状態を図175に示す。断層帯はこのように雁行する比較的短い断層からなり、大勢として北西—南東方向に連なっていた。Gトレンチ以北に関しては、I面とIII面の分布境界線に沿って北西方に延びていることは確かで、その先は塩嶺峠方面に向かい、一方、Aトレンチ以南については、しばらくの間地形的表現が定かでないが、十五社神社付近にテクトニックな高まりとみなされる異常な小丘地形が認められるので、その北東縁に続くものと推定される。すなわち、この断層は、諏訪盆地の南西縁に沿って分布しており、同盆地の形成に深く関与した糸静線活断層系の一部（岡谷断層）にあたると思なされる。

トレンチ壁面に現れた断層帯はどの地点でも垂直に近いものであった（図176）。しかし、断層帯およびその近傍の様相は壁面によって著しく異なり、断層帯に沿って地層の落込みを示す構造が見られるかと思えば、一方別の壁面では逆に地層が上方に抜け出るように変位していたり、下位にある堆積物の一部が断層面に沿ってしぼり出されたことを示す構造などが認められる。後述のように、見掛け上南西側落ちの上下変位を示すが、正断層的な部分があれば逆断層的な部分もあり、見掛けの上下変位様式が断層線に沿って変化している。

さらに、一連の堆積物であるにもかかわらず、断層を介するとその層厚、層相が不連続となっているケースもしばしば観察される。このような諸事実は、トレンチ壁面に現れた断層（岡谷断層）が横ずれ断層であることを示している。糸静線活断層系中部は、東西方向の圧縮応力場下において北西走向をとり、結果として左横ずれの卓越する変位を累積しつつあるが、これと調和する事実であるといえよう。

岡谷断層は、図176で明らかのように、トレンチ壁面に露出した地層群のほぼすべてを変位させており、地質学的にごく近い過去にその最新の活動があったものと思われる。トレンチ壁面に現れた地層群については、すべて未固結で、礫・砂・シルトや黒色腐植土などからなっている。ここでは、それらを層相の大きな変化に注目して9つに分類し、上位のものから順に1層、2層……9層とよぶ。1層は低湿地性環境下で堆積した厚く顕著な黒色腐植土層群であり、中島A遺跡付近では、その堆積面がIII面に相当する。2層は礫層～砂礫層、3層は一部に厚い泥炭が発達する腐植質砂礫層、4層は淘汰の悪い礫層、5層は一部

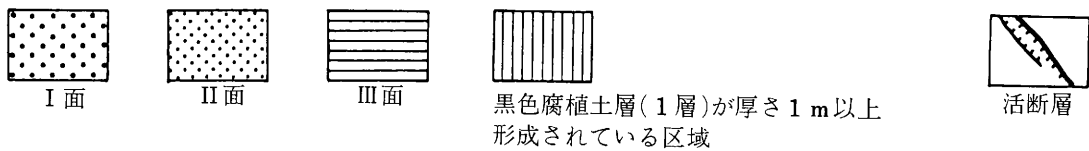
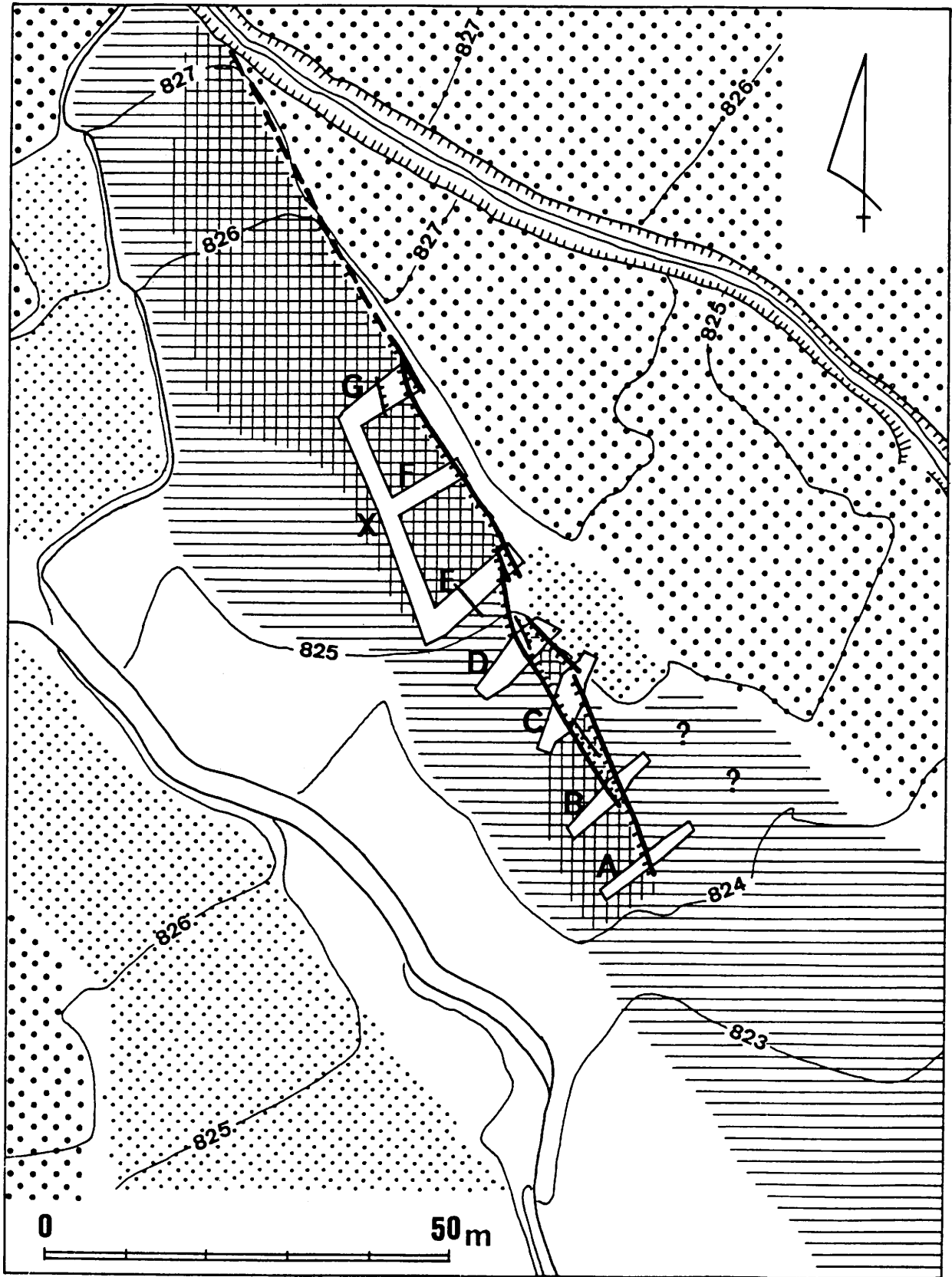


図175 中島A遺跡付近の地形分類図

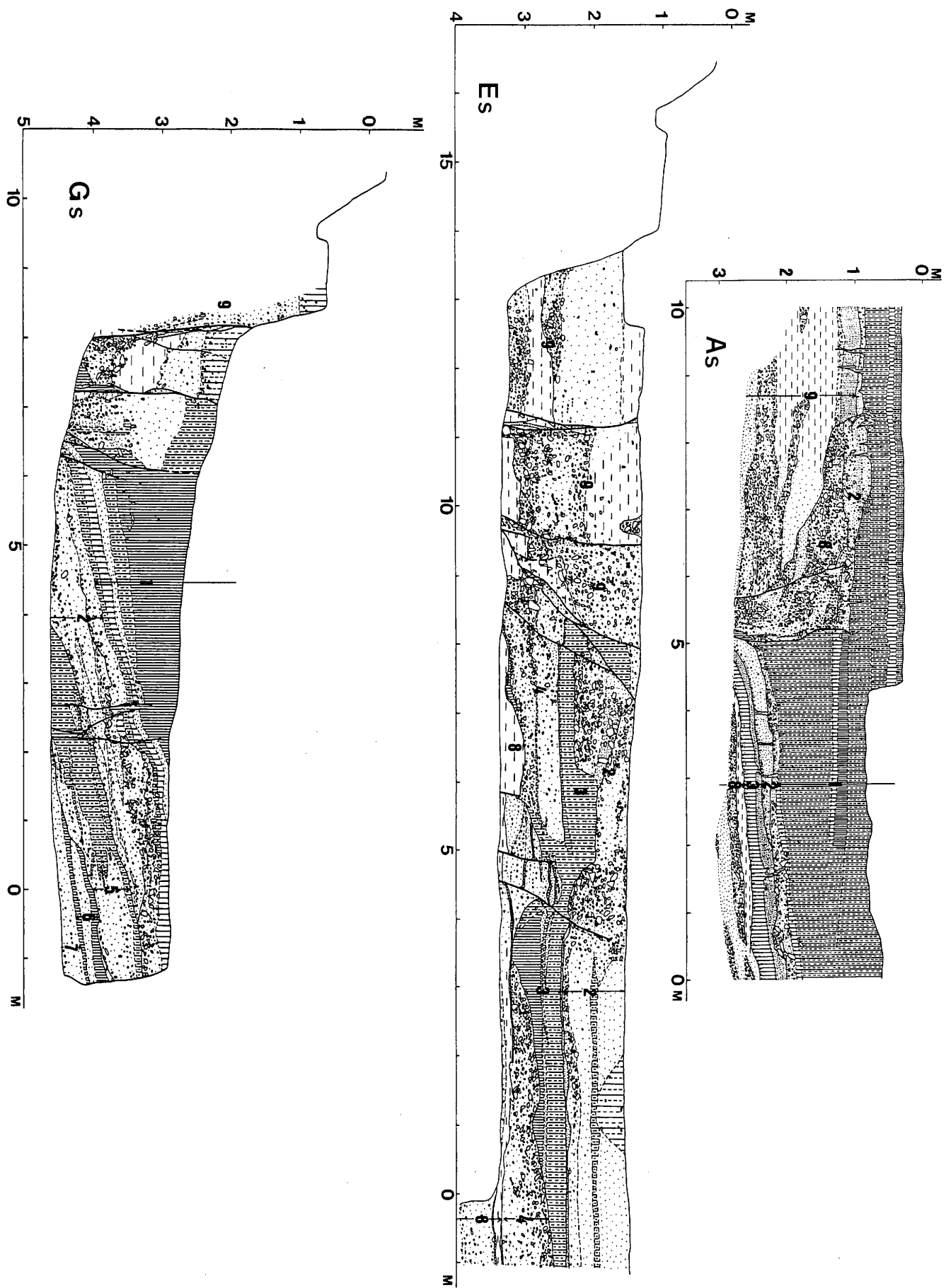


図176 中島A遺跡A・E・Gトレンチ南東側壁面スケッチ

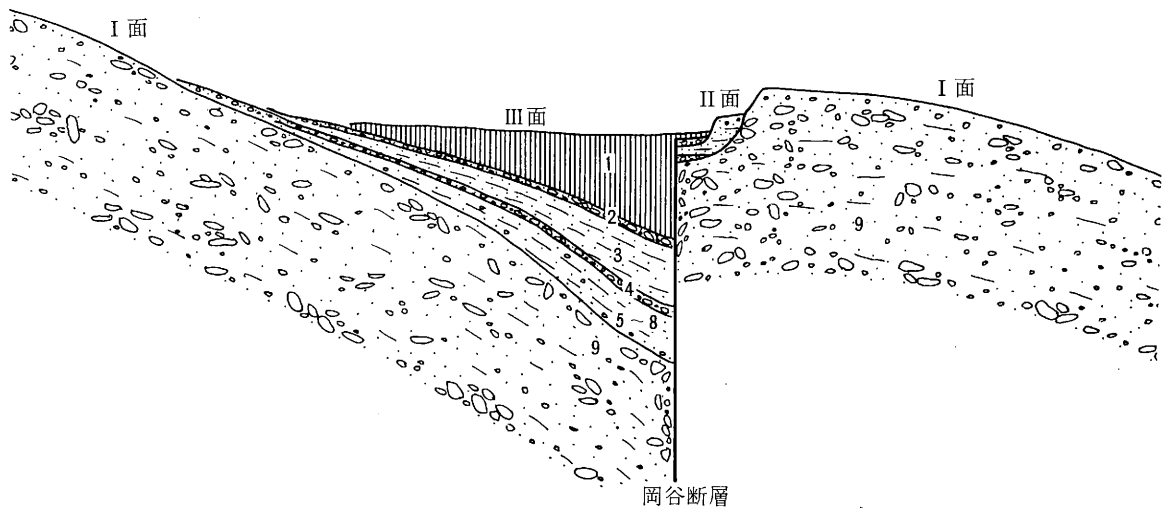


図177 岡谷断層を横断する総合模式断面図

に顕著な泥炭層が発達する砂礫層、6層は泥炭層と砂礫層の互層、7層は砂礫層～礫層、8層は顕著なシルト層をまじえる礫層、9層は淘汰不良の礫層が主体をなす厚い扇状地礫層であり、事実上、I面構成層とみなされる。これらの地層それぞれの主分布域は、9層を除くと、いずれも岡谷断層の南西側にほぼ限られており(図176・図177)、1～8層は、岡谷断層の活動により生じた同断層線南西側の相対的凹みを埋めるように堆積した地層群である。

図176を見ると、Gトレンチ付近では1層は、分布が岡谷断層の南西側に限られるとともに、断層に近づくにしたがって急に厚さを増す傾向を示すことがわかる。そして、この付近では、明らかに1層の下部および2層以下は断層のある方すなわち見掛け上北西方に傾斜している(図176)。したがって、1層、少なくともその一部は岡谷断層に沿い、その南西側に生じたテクトニックな凹みに堆積したものとみなせる。Aトレンチのスケッチ(図176)も、同トレンチ付近における1層が同様な堆積の仕方をしたものであることをあらわしている。ところが、DトレンチからEトレンチ南東壁面付近においては、1層はほとんど堆積していない(図176)ので、A・Gトレンチ付近でそれぞれ1層の堆積を促した凹みは一連のものではない。もっと下位に分布する3層や5層、6層なども、顕著な泥炭層・シルト～細砂層の発達する堆積物で、やはり断層に近づくにしたがい厚さを増す傾向を示すが、例えば、3層に注目すると、Eトレンチ付近で最も厚く、その北西方では間も無く(Fトレンチ付近)分布が途絶えるとともに、南東側においても、そこを離れるに従い薄くなっており、その平面的な分布域は明らかに限られている。5層や6層さらに7層につ

No.	遺跡名	場所	層位	試料	コード番号	<sup>14</sup> C年代(Y, B, P)	備考
1	中島 A	Aトレンチ南東壁	1層最下部	腐植土	TH-931	8330±200	※
2	"	Eトレンチ "	3層	"	I-13760	10790±250	
3	"	Dトレンチ北西壁	3層	"	I-13289	11740±160	※
4	"	Xトレンチ "	8層	木片	I-13762	12570±170	
5	膳棚 B		8層(?)	"	I-13290	15570±220	※
6	中島 A	北端	9層上部	"	I-13761	17170±270	
7	中島 B		"	"	I-13763	18100±310	

※は岡谷断層発掘調査研究グループ未公表資料

表17 岡谷断層関係<sup>14</sup>C年代測定値一覧表

いても、A～Eトレンチでは認められないので、分布の中心はF～Gトレンチ付近あるいはその北西方に偏っているとみなせる。このような諸事実から、岡谷断層の南西側が一様に凹んでいるわけではないこと、断層に沿う小規模な凹地の形成は時期を違えて何度もあったこと、そして、その凹む場所は時期によって変化し、必ずしも一定していないことなどがわかり、縦ずれ主体の断層変位では生じ得ない特徴が認められる。岡谷断層は、上述のように横ずれ(左ずれ)断層である。中島A遺跡付近で認められる断層群は、図176の通り右雁行配列をなしており、左横ずれ断層である岡谷断層の剪断割れ目に見合うものとなっている。このような横ずれ断層においては、断層が雁行したり屈曲したりすることに関わって両側地塊では断層に直交する方向の変形が生じ、結果として高まり(bulge)や凹み(fault sag)が形成されやすい。このような事柄を考え合わせると、中島A遺跡付近での上記のような凹地は岡谷断層の横ずれ運動に関係して生じたものと解するのが妥当である。

1～9層の形成年代推定上手がかりとなる<sup>14</sup>C年代測定資料をとりまとめて表17に示す。この資料によってI面の離水は1.7～1.8万年前頃に推定され、塚間川扇状地は最終氷期の最寒冷期に形成されたものと思われる。以来、その扇状地にあたる中島A遺跡付近では、上述のように、岡谷断層の活動のたびごとに扇面は切断・左ずれして断層線沿いにはfault sagが生じ、そのような凹地、とりわけ上流側にあたる断層の南西側に形成された凹みを埋積するように新しい地層の堆積が次々行われ、今日に至ったとみなされる。なお、この間における堆積相の時代的移り変わりに注目すると、当初は粗粒物質で速やかに凹地の埋立てが行われていたが、2層堆積期前後からは低湿地と化す傾向にあることがうかがわれる。とくに最近の中島A遺跡付近においては、AトレンチあるいはGトレンチ付近を中心に低湿地状態がながく続いており、その結果最大層厚4mにもおよぶ黒色腐植土層(1層)が生じている。表17で1層基底付近の<sup>14</sup>C年代が8000年余前、3層については11000年前後となっているので、このような低湿地化傾向は、完新世に入って顕著になったと考えられ、後氷期の気候変動と密接なかわりがあるものと推定される。

(昭和61年12月8日)

## ② 地区の区分

断層に起因する複雑な微地形のため、層序も場所によって随分異なる。そこで、地形及び層序の差から遺跡をいくつかの地区に区分し、以後それに従って説明することにした。地区は調査上設定した大地区とは必ずしも対応しないが、便宜上手近な大地区の名を借りて名称とする。

遺跡は低湿地と低湿地以外に大別され、後者は断層崖上と断層崖下に区分できる。低湿地及びその縁辺を「K・L」地区と呼ぶ。断層崖上は、塚間川左岸・右岸で層序が異なる。左岸を「J」地区、右岸を「P」地区と呼ぶ。断層崖下は低湿地を挟んで南東側と北西側にわかれる。低湿地の南東側を「O」地区、北西側を「I」地区と呼ぶ。

## ③ 層序(図179～181)

地区別に層序を説明し、最後に各地区相互の対比を行う。

K・L地区の基本的層序は以下の通りである。

I層：水田耕土及び床土である。

II層：粘性の強い腐植土で、植物遺体は含まれない。旧表土と思われる。

III層：黒色の腐植土で植物遺体を含み、砂が若干混じる。分解した泥炭が主要な母材であろう。板や切り痕のある枝、内耳土器等が散見される。

IV層：泥炭を主体とする層で、IV a～IV d層に細分する。

IV a層：植物遺体からなる泥炭層で、樹皮や葉等も原形を留めている。板や切り痕のある枝を含む。

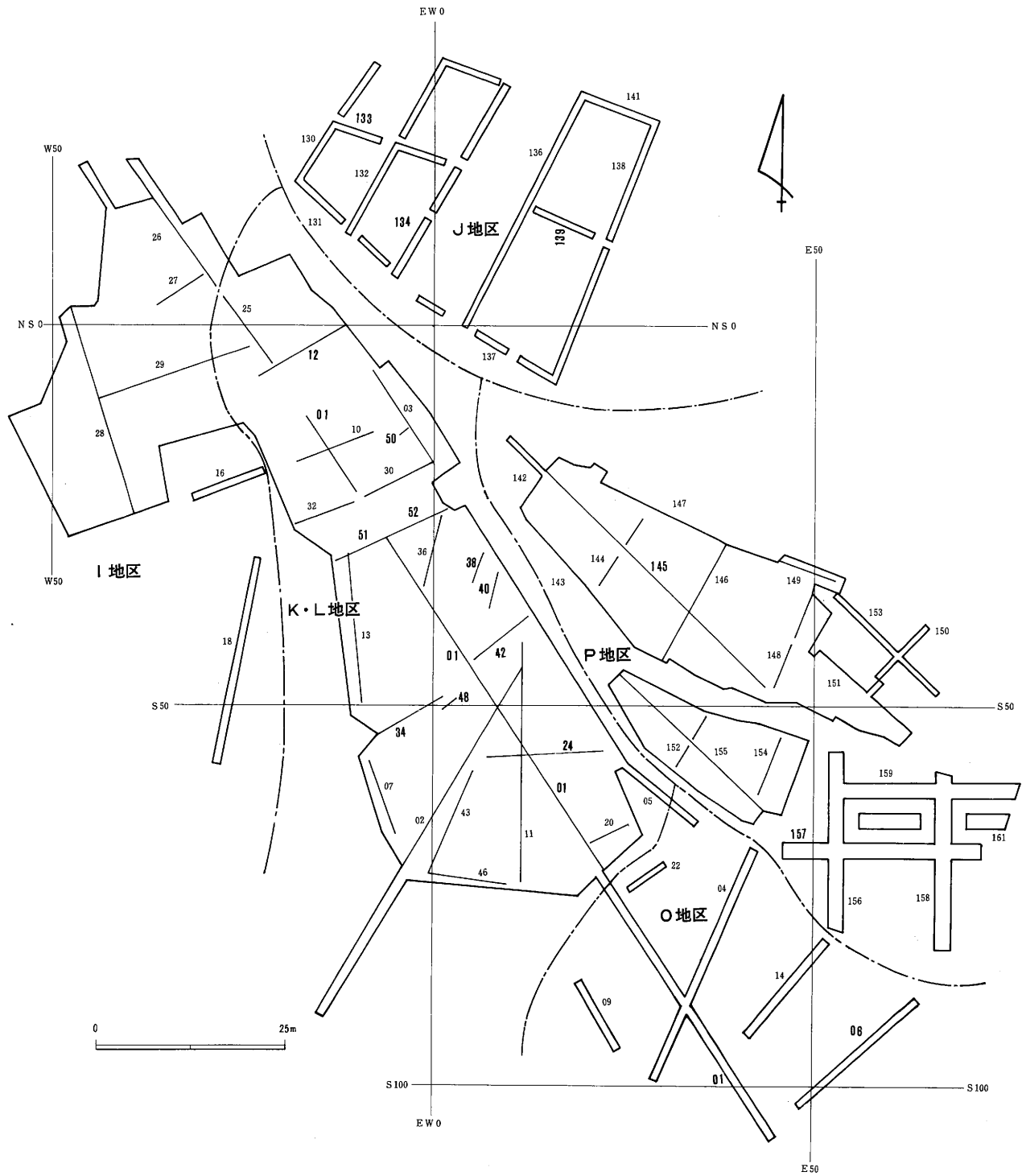


図178 中島A遺跡トレンチ配置及び地区区分図 (1:800)

IV b層：多量の植物遺体を含む粘性の強い暗褐色土で厚い。遺体はある程度分解が進んでいる。

板や切り痕のある枝等を含む。低湿地縁辺では周辺から崩落・流入した礫や砂を含む。

IV c層：多量の樹皮を含む粘性の強い褐色土で薄い。樹皮の色調からIV b層よりかなり白っぽく見える。植物遺体を多量に含む。弥生時代中期初頭の遺構・遺物が上面で発見されており、該期の地表面と考えられる。

IV d層：IV b層近似の植物遺体を多量に含む粘性の強い暗褐色土。ブナ等の種子が多量に含まれる。



V層：断層崖下に堆積した砂質土層・粘質土層で、V a・V b層に細分する。

V a層：腐植質を多量に含む砂質層で、粘性はない。大小の礫を多量に含み、断層崖上または斜面の崩落物から形成されたとみられる。発掘時にはIV b～IV d層との識別が不十分であった。縄文時代晩期末葉前後の遺物を多量に含み、該期の包含層であるが、下位には遺物が含まれない。

V b層：白みの強い粘質土で薄い。礫や植物遺体が少量含まれるが分布域が狭く、その由来も不明である。縄文時代晩期末葉前後の遺物を多量に含み、該期の包含層である。

VI層：風化した砂と粘土から成り、強い粘性を示す黒褐色土層である。上半には腐植質や植物遺体が含まれる。縄文時代早期～後期の遺物が上位に散見される。

VII層：腐植を含まない砂層や砂礫層である。地質学的には何層にも区分されるはずだが、考古学的には無意味なので一括した。層理面は明瞭で、断層運動に伴うと思われる傾斜やゆがみが観察された。遺物は皆無で、低湿地における基盤層と理解してよいだろう。

VIII層：基盤となる再堆積ローム層で、礫を多く含む。酸化鉄を含むために赤みが強く、硬い。

VIII層は断層崖上の、VII層は断層崖下のそれぞれ基盤となる。VII層上面では既に浅い池状のくぼ地が形成されており、VI層上面でもその地形は踏襲される。VI層は上位に植物遺体を含み、くぼ地は池と化した。既に示した気候変動との関わりが看取される。V層は断層崖縁辺に限られており、くぼ地中央では泥炭を主体とするIV層が併行して形成されたとと思われる。IV d層とV層下位は併行する可能性があり、V a層の最上位はIV b・IV a層に併行して形成された可能性もあるが、発掘時には確認できなかった。V a層は断層崖縁辺全域に堆積しているが、V b層はS55・E20付近を中心に狭い分布域しかない。くぼ地は皿状のため、IV層はくぼ地の中央から形成され始める。IV d層はくぼ地中央に限られ、IV c層以上III層までがV層の分布域に接するようになる。くぼ地はやがてII層により埋められて地表は常時滞水する状態ではなくなり、やがて水田化された。

J地区の基本層序は以下の通りである。

I層：水田耕土・床土を主とする層である。現水田のI a層、旧水田のI b層、川または溝上位を埋める灰褐色の砂のI c層、同下位を埋め腐植を含む砂のI d層に区分する。

II層：黒色の砂質土層である。旧表土の可能性があり、縄文時代の遺物が散見される。

III層：砂礫層である。

IV層：灰褐色で粘性のある砂質土層である。斑状に酸化鉄が沈澱する。

V層：砂礫層である。縄文～弥生時代の遺物が散見される。

VI層：再堆積ローム層でJ地区の基盤となる。

VI層を基盤にし、塚間川の氾濫の結果とみられるIII～V層が全域に堆積する。II層も全域にみられる。溝または川は旧塚間川の可能性があり、旧水田耕土層を切って残されている。

P地区の基本層序は以下の通りである。

I層：黒褐色の砂質土で、現耕土のI a層とより腐植の多いI b層に細分される場所もある。

II層：暗褐色の砂質土層で、基盤が土壌化したものとみられる。上面から土壌が検出され遺物は全くない。小河川址が残される。

III層：灰褐色の砂質土層で、基盤が若干土壌化したものとみられる。

IV層：基盤となる再堆積ローム層で、礫を含み硬い。

IV層を基盤にしてその表面が土壌化した単純な状態である。断層崖上で周囲より隆起している地形のためであろう。II層の小河川址はP地区の南半に残される。

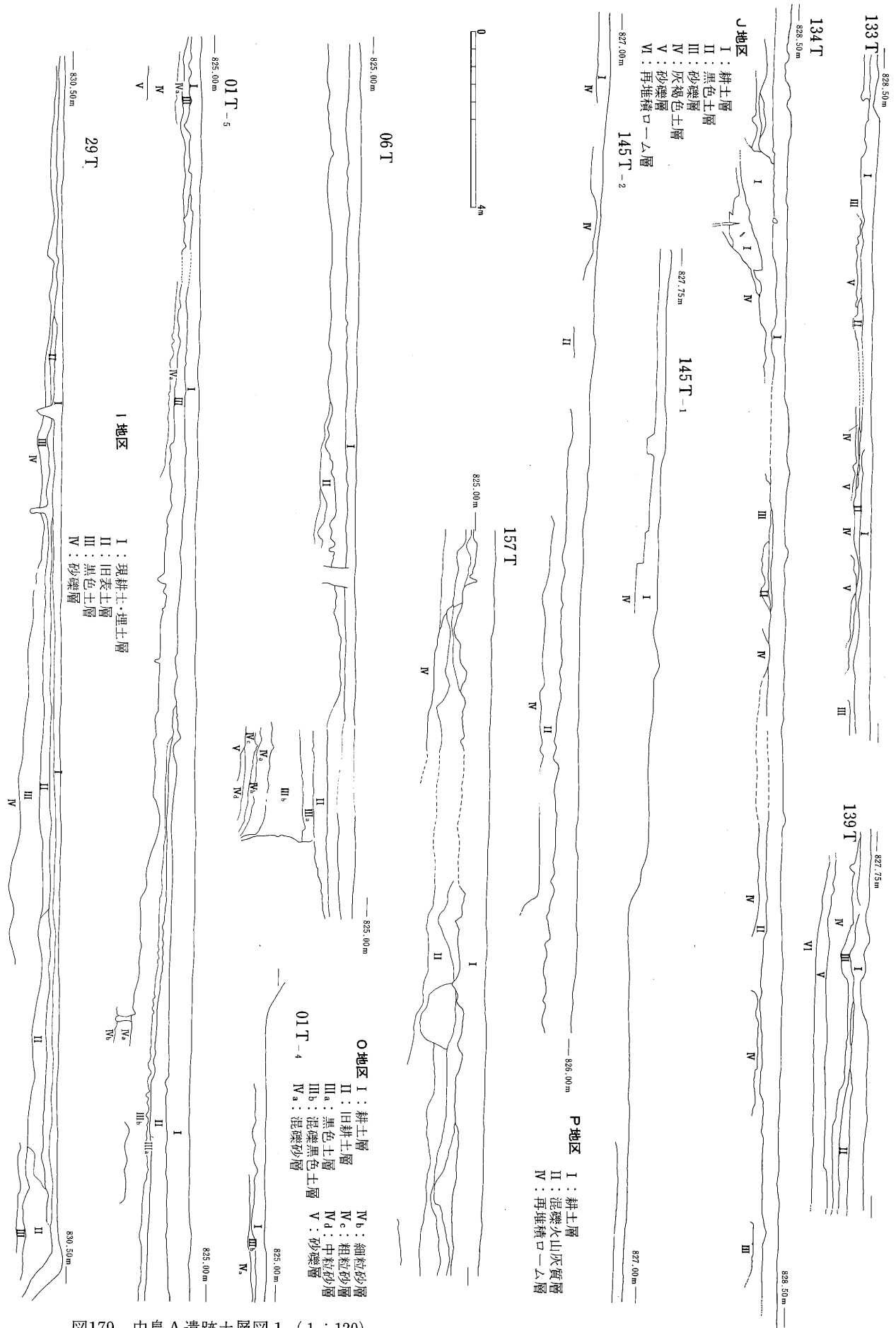
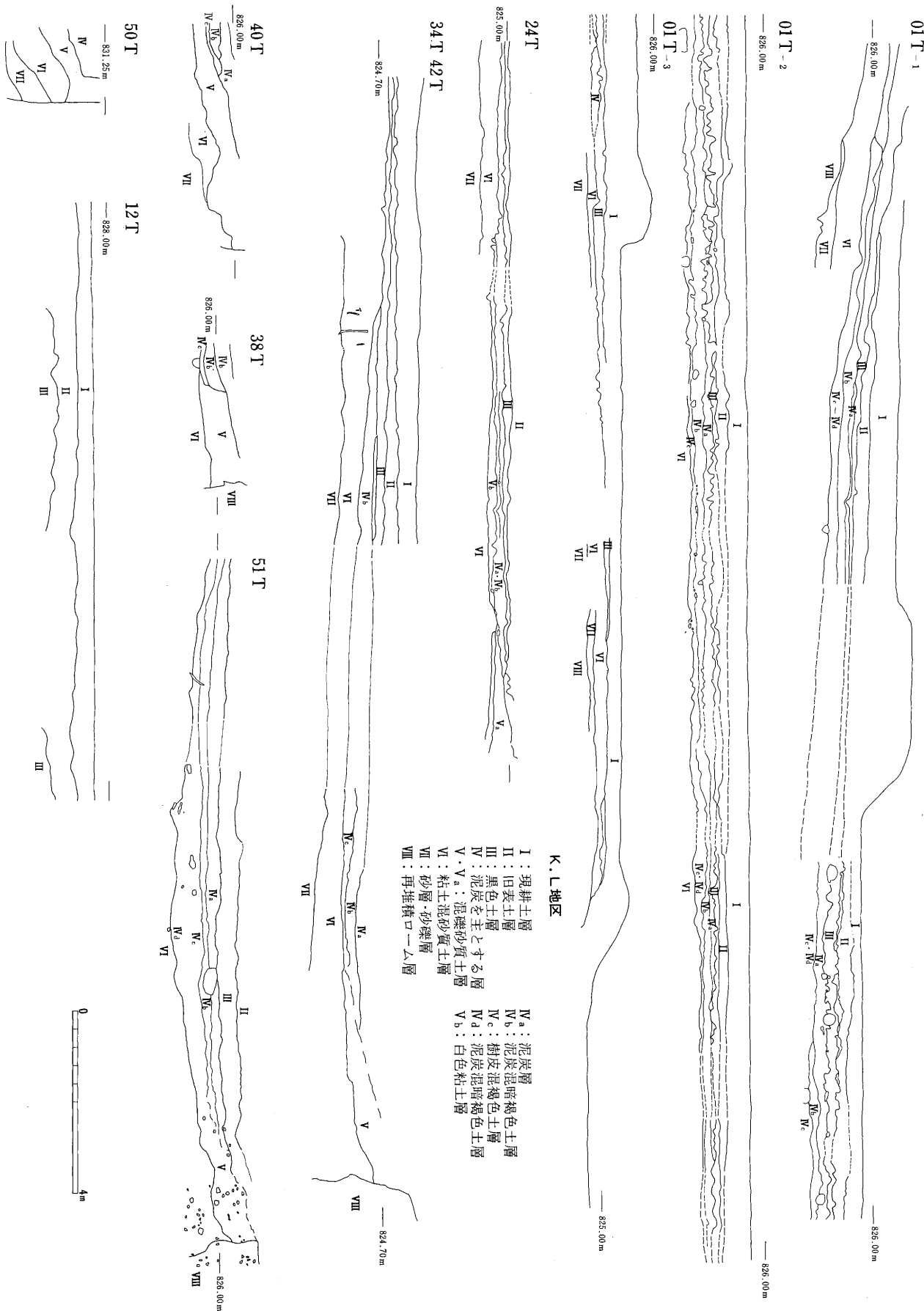


图179 中島A遺跡土層图 1 (1:120)



- K. I. 地区
- I : 現耕土層
  - II : 旧表土層
  - III : 黒色土層
  - IV : 泥炭を主とする層
  - V : V.a : 混雑砂質土層
  - VI : 粘土混砂質土層
  - VII : 砂層・砂礫層
  - VIII : 再堆積ローム層
  - IV.a : 泥炭層
  - IV.b : 泥炭混暗褐色土層
  - IV.c : 樹皮混暗褐色土層
  - IV.d : 泥炭混暗褐色土層
  - V.b : 白色粘土層

図180 中島A遺跡土層図2 (1:120)

O地区の基本的層序は下記の通りである。

I層：水田耕土及び床土層である。現耕土のI a層と旧耕土のI b層に区分できる。

II層：黒褐色の砂質土層で、旧表土と思われる。断層線を覆い、縄文時代～近世の遺物を含む。

III層：上位は黒色で粘性の少ない砂質土のIII a層、下位はIII a層に茶褐色の砂質土が混入したIII b層に区分される。断層崖下にみられ、縄文時代中期の遺物を少量含む。

IV層：砂または粘土層、砂礫層等地質学的には区分すべき層を一括した。断層崖下にあり上位から縄文時代早期の遺物が出土した

V層：ローム質土を混じえた砂礫層で、酸化鉄が沈着する。断層崖上の基盤となる。

I地区の基本的層序は下記の通りである。

I層：水田耕土・床土・盛土層である。

II層：黒色の砂質土層で旧表土とみられる。縄文時代早期の遺物を主に含んでいる。

III層：黒褐色の粗い砂質土層である。縄文時代早期の遺物が一定量含まれ、該期の包含層とみられる。

IV層：茶褐色の粗い砂質土層である。基盤となる層と思われる。

基盤となるIV層は北西側斜面より運ばれた扇状地堆積物とみられ、その表面が土壌化したのがIII・II層であろう。

各地区の層序を対比する(図181)。基盤は断層崖上と断層崖下で異なる。前者はK・L地区のVIII層、P地区IV層、J地区VI層、O地区V層で、中島B遺跡の基盤と共通する。後者はK・L地区VII層、O地区IV層、I地区IV層で、膳棚B遺跡や柳海途遺跡の基盤と共通する。縄文時代晩期以前の遺物を含むK・L地区VI層、O地区III層、I地区II層は、一定の共通した年代幅の中に納まるだろうし、成因も共通するかもしれない。K・L地区のV層及びIV c層に対比できる層は他地区には存在しないが、その時期の地表面を求めれば、P地区II層、J地区VI層、O地区III層、I地区III層の各々上面が該当しそうである。またK・L地区のIII～IV b層に対比できる層もないが、J地区II～V層、O地区II層とは一定の時間を共有する可能性があるだろう。

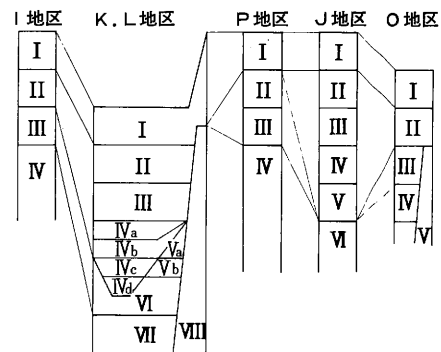


図181 中島A遺跡柱状図

#### ④ 文化層の年代(表18)

文化層の年代決定は、考古資料を用いた相対年代決定を優先したい。絶対年代推定資料として<sup>14</sup>C年代測定を実施したが、年代を決定するに足る考古資料を欠く層の相対年代推定にも一定の有効性があるだろう。測定結果は表18の通りである。なお花粉分析において中島B遺跡採取試料も採用したので、同試料採取層準の年代測定結果も同時に掲載した。

考古学的年代観と一見して整合しないのは試料8と10である。試料8は試料9の結果に近似しており、サンプリング時の層認定の誤りまたはIV a層に属した材の一部がIV c層に混入したものと解せられ、試料10はVI層ではなくVII層に属すると解せられる。従って試料8、10とも考古学的年代観を損なうことはないとする。

相対年代を決定できないIV a、IV b、IV d層については、考古資料と<sup>14</sup>C年代測定結果から推定したい。

IV a層・IV b層からは板・切り痕のある枝と縄文時代晩期末葉前後の土器が出土している。板等の木製品はIII層からも出土しており、枝の切り痕は後述のように金属器を用いている可能性が高い。<sup>14</sup>C年代測定値は、III層～IV b層の間に大きな差がないことを示しており、木製品や板の切り痕とは整合的である。縄

試料	遺跡	位置	層準	年代 (BP)	資料	考古学的年代観
1	中島A	S37・E7	K・L地区 III層	950±80	材	平安時代以後
2	"	S35・W3	" IV a層	940±80	切痕のある枝、写真図版PL-88	金属器を持つ時代
3	"	S49・E5	" IV a層	1,070±80	泥炭	"
4	"	S29・E1	" IV b層	760±80	切痕のある枝、写真図版PL-88	"
5	"	S49・E7	" IV b層	1,130±80	" " PL-88	"
6	"	S51・W1	" IV b or VI層	990±80	材	"
7	"	S39・E9	" IV c層	2,050±80	泥炭	弥生時代中期初頭
8	"	S45・E7	" IV c層	2,840±90	材	"
9	"	S39・E3	" IV d層	3,050±90	材	?
10	"	S43・E5	" VI~VII層	11,800±180	粘土	縄文時代早期~後期
11	中島B	N47・W44	G・I地区 III a層	1,320±80	泥炭、花粉分析試料307~310と同一層	
12	"	N47・W44	" III b層	1,640±80	" " 318 "	
13	"	N60・W53	" III a層	2,030±100	" " 334~337 "	

年代測定は松下テラダイン・ジャパン社による。半減周期は5,568年を用いてある。

表18 中島A遺跡付近<sup>14</sup>C年代測定値一覧表

文時代晩期末葉前後の土器はV層からの混入物と解し、<sup>14</sup>C年代測定値の安定性を考えれば、IV a・IV b層はIII層と大差ない時代に帰属させられる。III~IV b層の差は、むしろ泥炭の分解度の違いに帰せられるかもしれない。

IV d層は記述の通り試料8・9の測定値以外の資料を欠く。相対年代決定は保留したいが、少なくとも縄文時代に成立した泥炭層であることは確実であろう。

## (2) 古環境の復元

### ① 花粉分析

信州大学 酒井潤一

#### ア、分析試料

分析試料は中島A遺跡K・L地区、中島B遺跡G I地区より採取した84個の泥炭・泥炭質シルト・泥炭質砂・泥炭質細粒砂である。中島B遺跡の資料は、中島A遺跡の主要な文化層と同時代の可能性が高い層から採取しており、中島A遺跡の古環境復元に有効であるとみられるため、ここで一括して分析してある。試料の採取と分析は2年次にわたって行なった。

#### イ、分析方法

(A)、試料20~50gを100ccビーカーにとり、10%KOH溶液につけて24時間放置。(B)、60メッシュふるいの篩を通しながら、2 l ポリビーカーに移す。(C)、12時間おきに水洗、6~8回(上澄液を $\frac{2}{3}$ 位捨て、水を加える)。(D)、500ccコニカルビーカーに移す。(E)、上澄液を捨て、10%KOH溶液を加え、7分間湯煎。(F)、90分おきに水洗、30回。(G)、50cc遠沈管に移し、遠心分離(1,500回転/10分間)。(H)、70%ZnCl<sub>2</sub>溶液を加え、遠心分離(1,500回転/10分間)。(I)、浮遊した花粉化石をピペットで集める。(J)、(H)・(I)をもう一回くり返す。(K)、集めた花粉化石を50cc遠沈管で遠心分離(1,500回転/10分間)。(L)、遠心分離により数回水洗。(M)、HFを加えて24時間放置。(N)、遠心分離により3回水洗。(O)、氷酢酸で洗滌。(P)、アセトリシス処理(conc H<sub>2</sub>SO<sub>4</sub>:無水酢酸=1:9の混合液を加え、60秒間湯煎)。(Q)、遠心分離。(R)、氷酢酸で洗滌。(S)、遠心分離により3回水洗。(T)、グリセリン・ゼリーで封入。(U)、マニキュアで密封。

#### ウ、検鏡

ニコン・オプチホト生物顕微鏡を用い、600倍、必要に応じ油浸1,500倍で検鏡した。木本花粉（AP）が200個をこえるまで検鏡することを原則としたが、花粉化石が著しく少ない試料では、木本花粉と草本花粉（NAP）の合計が200個をこえるようにした。

試料1～57、201～207、301～340の木本花粉出現率（百分率）は、(A)の式で表わし、試料102～109の木本花粉及び草本花粉の出現率（百分率）は、(B)の式で表わした。

$$(A) \frac{\text{各タクサの花粉数}}{\text{木本花粉総数}} \times 100 \quad (B) \frac{\text{各タクサの花粉数}}{\text{木本花粉数} + \text{草本花粉数}} \times 100$$

これらの出現率をもとに、花粉ダイアグラムを作成したのが図182～図186である。なお出現率が0.5%に満たないものは●印で表現した。

分析した84個の試料のうち、試料101からは全く花粉が検出されなかったがその他の試料からはすべて花粉化石が検出された。数個の試料は200個に達しなかったものの、ダイアグラムに表現してみると、著しい不自然さが見当たらないので、信頼しうるデータと考えられる。

#### エ、検鏡結果

(ア) 中島A遺跡 S23・W10付近及びS45・E5付近（図182～184）

中島B遺跡における分析結果を踏まえれば、下位より次のように分帯できる。

I帯：〔試料109・108〕 *Tsuga*（ツガ属）・*Pinus*（マツ属）・*Gramineae*（イネ科）が優占し、*Quercus*（コナラ亜属）・*Fagus*（ブナ属）・*Carpinus*（クマシデ属）が欠如する。

II帯：〔試料107～102〕 *Quercus*と*Tsuga*が優占する。II帯は*Artemisia*（ヨモギ属）が優占するII-1亜帯〔試料107・105〕と*Cyperaceae*（カヤツリグサ科）が優占するII-2亜帯〔試料104・102〕とに細分される。

III帯：〔試料227～212、57～43〕 *Abies*（モミ属）・*Quercus*・*Ulmus-Zelkova*（ニレ属-ケヤキ属）によって特徴づけられる。しかしS23・W10付近では草本花粉、特に*Cichoriodeae*（タンポポ科）がきわめて高率であることから、S23・W10付近とS44・E5付近のIII帯は各々同一層準ではなく、前者をIII-1亜帯、後者をIII-2亜帯に区分する。後者の方が水域の中心に位置し堆積物が厚く、試料採取がIII-1亜帯に及んでいない可能性が強く、一方、前者の方は水域の周辺部に位置するため、III-2亜帯が堆積しなかったか、削剥された可能性が強いからである。

IV帯：〔試料210～201、41～32〕 中島B遺跡N47・W44付近と同様に、*Abies*の優占によって特徴づけられる。

V帯：〔試料30～1〕 V帯はさらに、V-1亜帯〔試料30～27〕、V-2亜帯〔試料25～12〕、V-3亜帯〔試料10～5〕、V-4亜帯〔試料3～1〕に細分できる。V-1亜帯は*Fagopyrum*（ソバ属）を含まない。*Fagopyrum*がV-2亜帯から出現するのは中島B遺跡N47・W44付近と同様である。V-4亜帯は草本の*Artemisia*がきわめて高率であり、中島B遺跡N60・W53付近におけるV-3亜帯にはみられない特徴であるため、V-4亜帯として区分するのが妥当である。

(イ) 中島B遺跡、N47・W44付近（図185・186）

*Pinus*、*Abies*、*Quercus*の変化によって下位より下記のように分帯される。

IV帯：〔試料328～316〕 *Abies*の優占によって特徴づけられる。また、*Quercus*、*Tsuga*も高率である。草本花粉は少ない。IV帯は、*Quercus*の変化によって、IV-1亜帯〔試料328～322〕とIV-2亜帯〔試料321～316〕に細分できる。

V帯：〔試料314～304〕 *Quercus*の優占、*Pinus*及び草本花粉の増加、*Abies*の著しい減少によって特

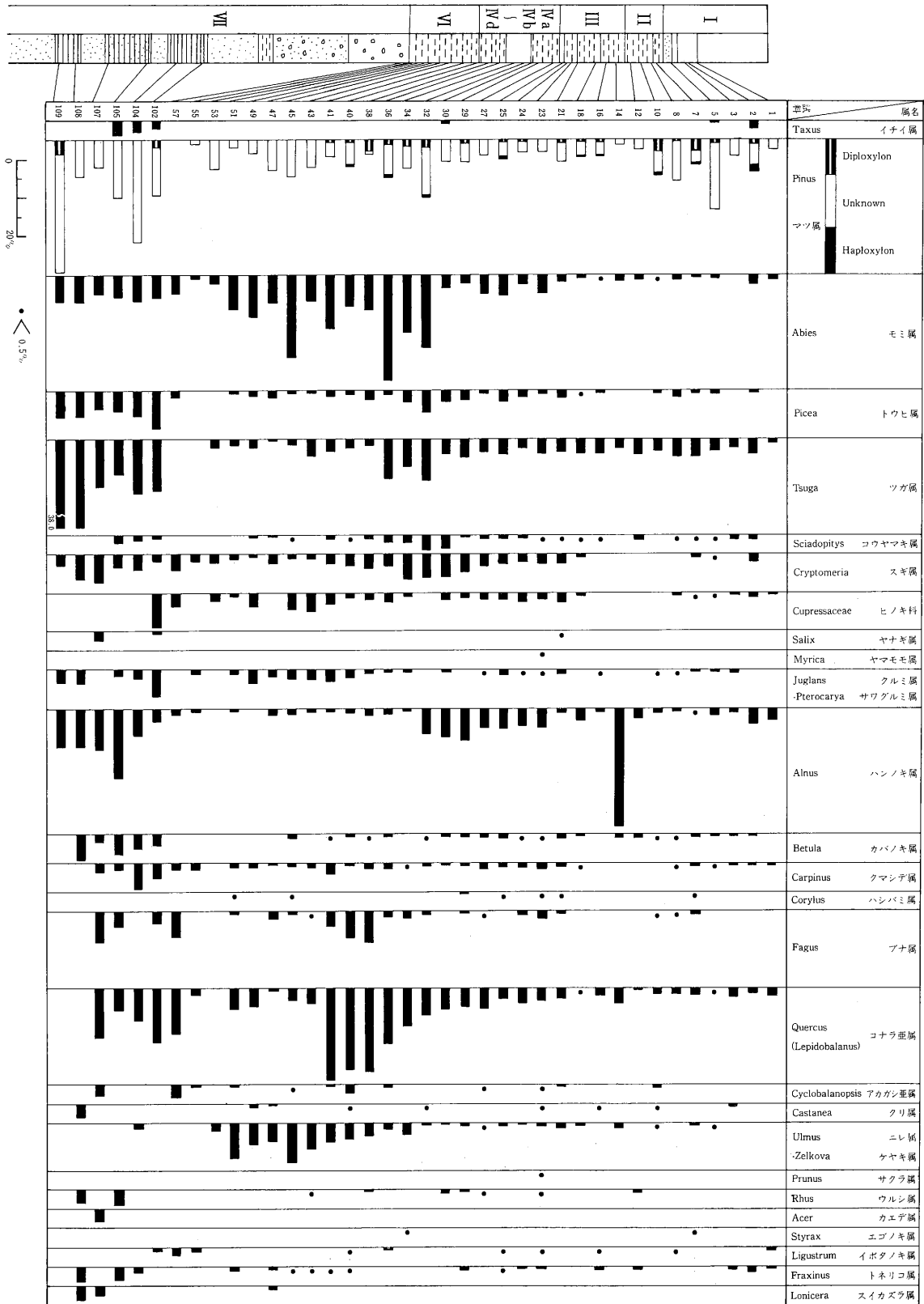


図182 中島A遺跡 S 23 · W10付近採取の花粉分析ダイアグラム 1

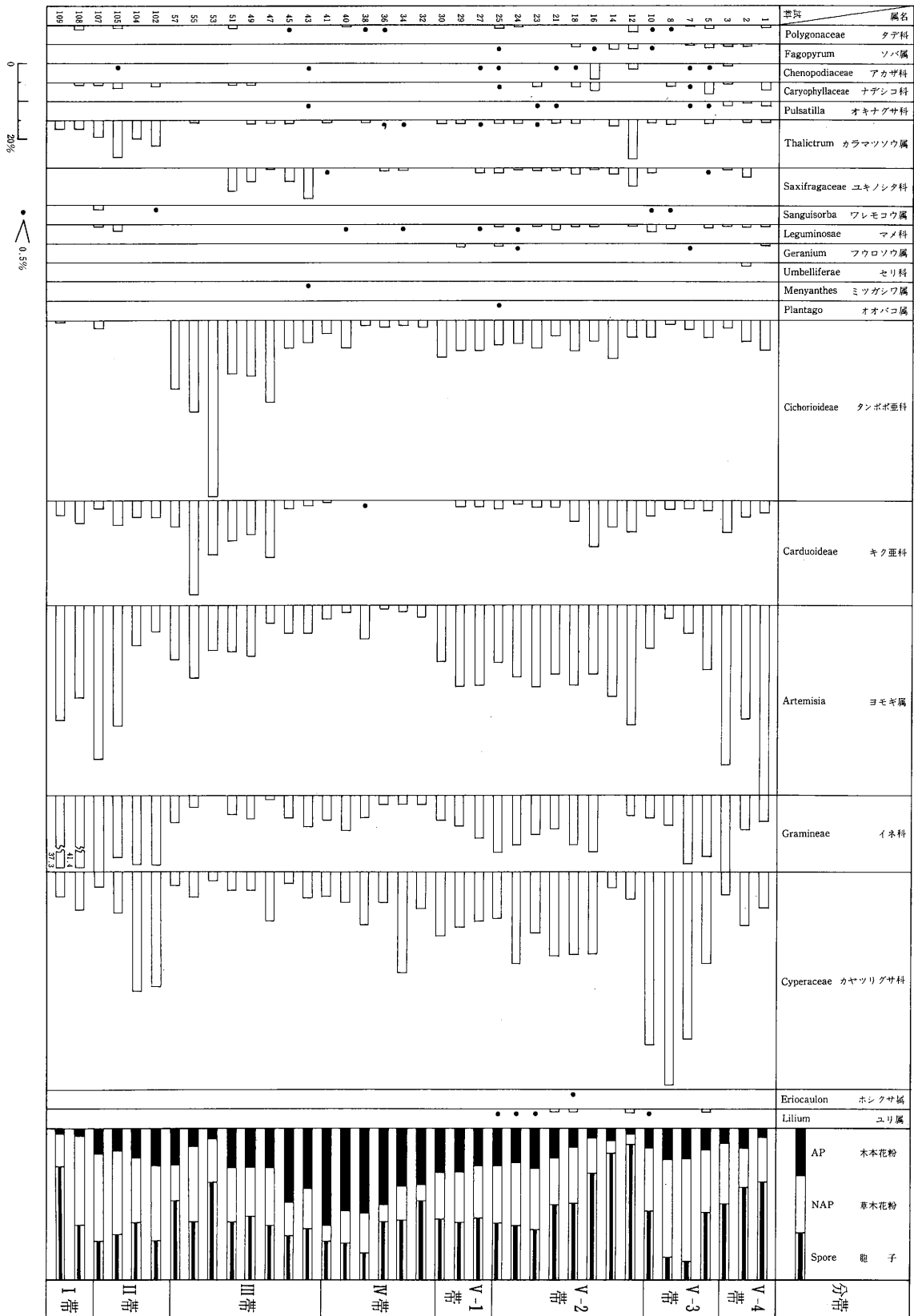


図183 中島A遺跡S23・W10付近採取の花粉分析ダイヤグラム2



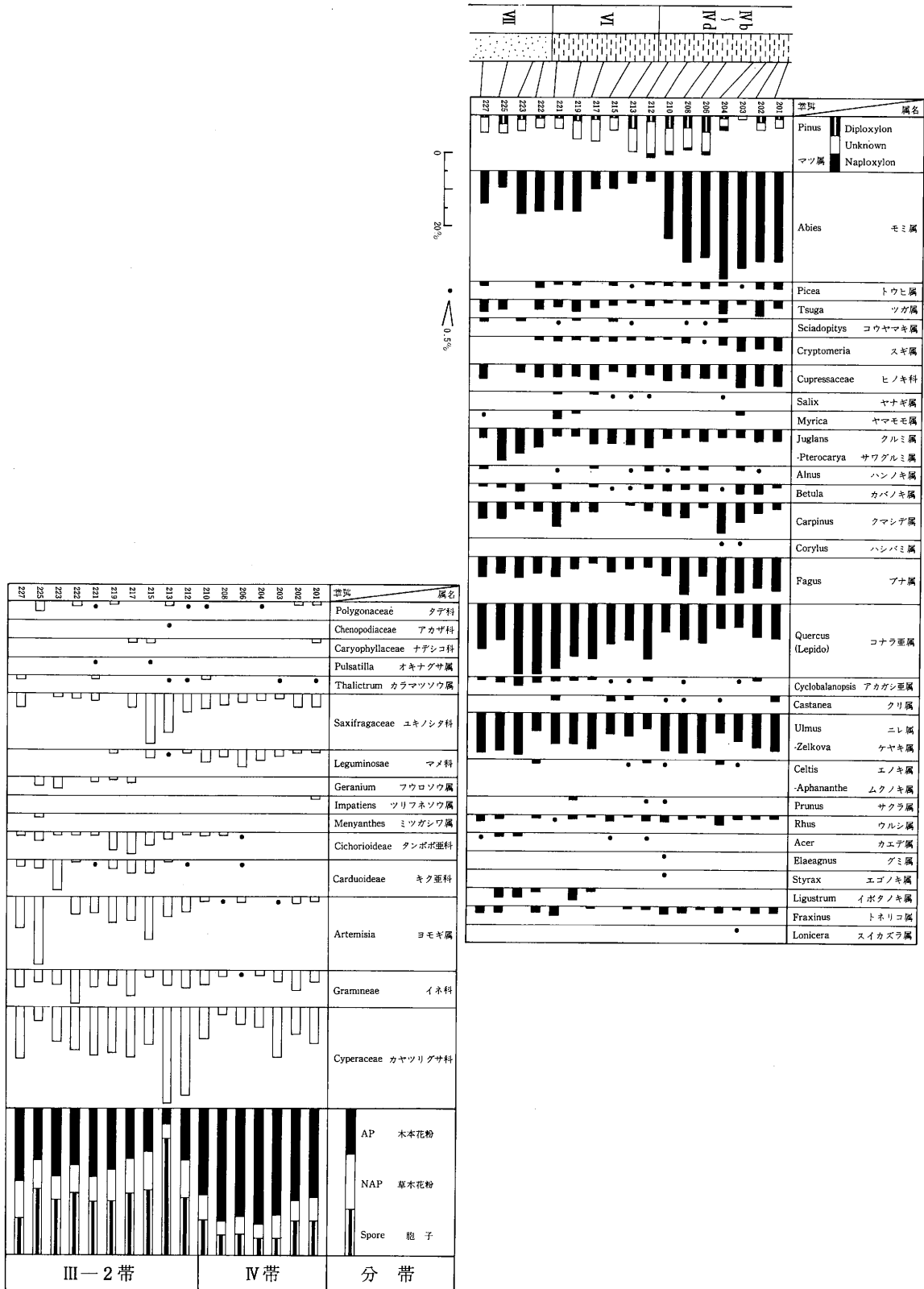


図184 中島A遺跡S44・E5付近採取の花粉分析ダイアグラム

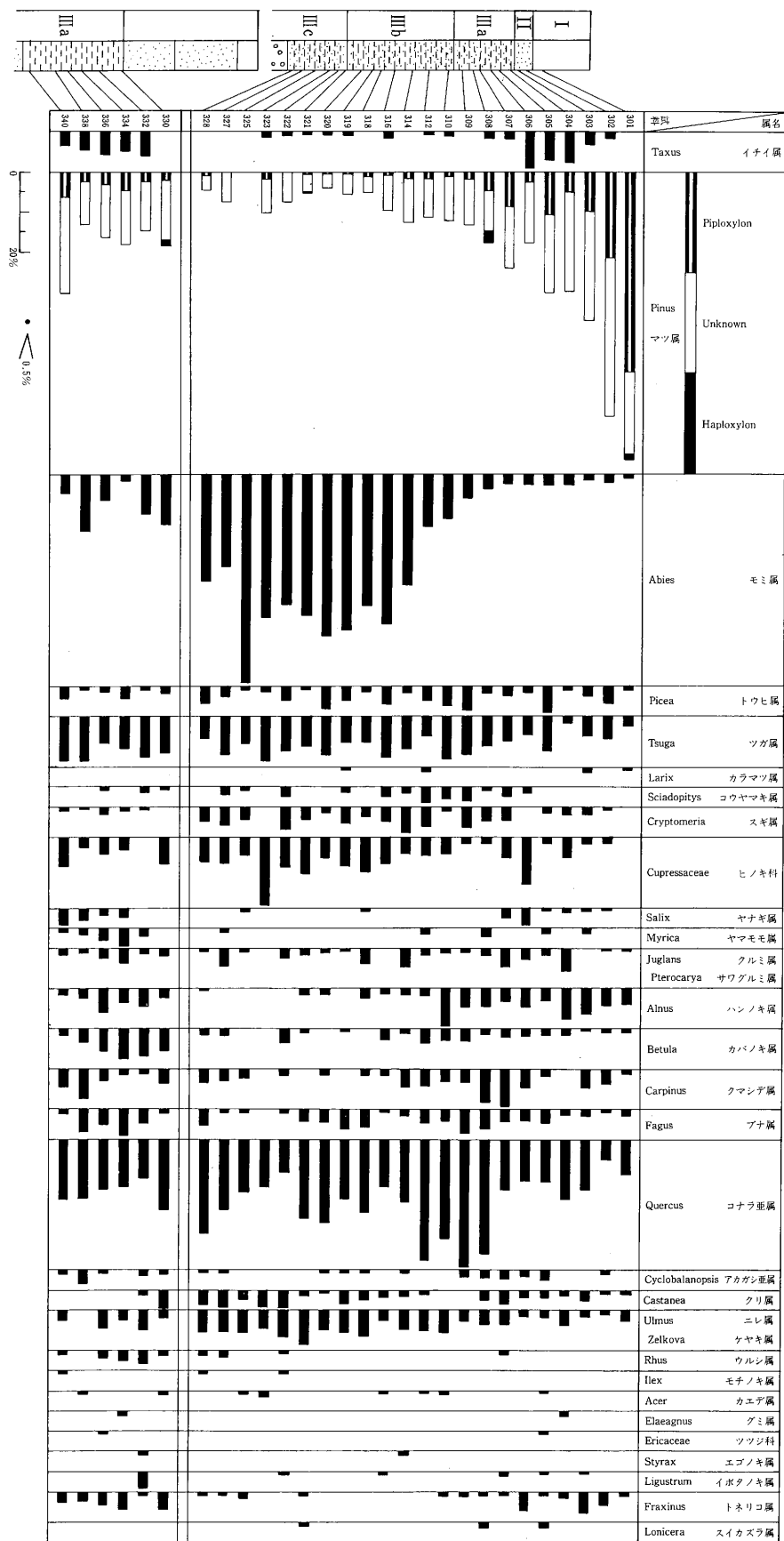


図185 中島B遺跡N47・W44及びN60・W53付近採取の花粉分析ダイアグラム 1

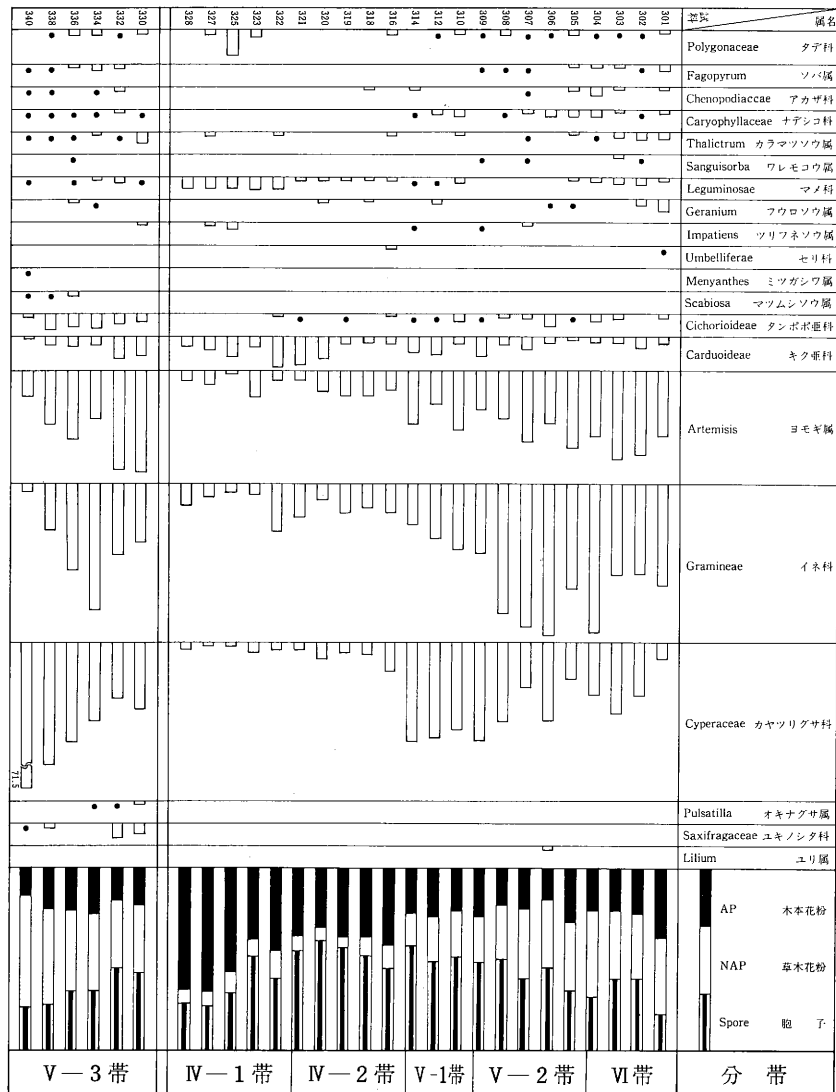


図186 中島B遺跡N47・W44及びN60・W53付近採取の花粉分析ダイアグラム 2

微づけられる。V帯は*Fagopyrum*の有無によって、V-1亜帯(試料314~310)及びV-2亜帯(試料309~304)に細分できる。*Fagopyrum*はV-2亜帯で初めて出現する。

VI帯：(試料303~301) *Pinus*と草本花粉の著しい優占によって特徴づけられる。

(㊦) 中島B遺跡、N60・W53付近(図185・186)

*Pinus*・*Quercus*・*Tsuga*・*Abies*などの木本花粉と、*Cyperaceae*・*Artemisia*・*Gramineae*などの草本花粉が高率であり、N47・W44付近のV帯の特徴と一致する。*Fagopyrum*も出現する。しかしV-2亜帯よりも層位的に上位に位置すること、最下部の試料340で、*Cyperaceae*が極めて高率であることから、本地点の試料340~330をV-3亜帯と区分するのが妥当である。

#### オ、考察

(i)、45~50 $\mu$ の大型*Gramineae*(栽培種のイネ、*Oryza*を含む可能性が大きい)が出現し始めるのは、中島B遺跡、N47・W44付近の試料312からである。ほぼV-1亜帯から出現し始めるとしてよいだろう。

(ii)、ソバ(*Fagopyrum*)が出現し始めるのはV-2亜帯からである。その下位のV-1亜帯から*Abies*(大

形植物遺体によれば、*Abies firma* (モミ) が急速に減少し *Pinus* と *Alnus* が増加する。*Abies* の減少は自然の気候変化などによるものではなく、遺跡周辺の森林が開墾などで人為的に破壊され、代って *Pinus* や *Alnus* の二次林が拡大したことを示す可能性が大きい。この直上の V-2 亜帯からソバが出現し始めることもこの可能性を裏づけている。

先に述べたように、*Abies* が *Abies firma* (モミ) であり、*Cryptomeria* や落葉広葉樹が普遍的に出現することから、古気候は全般を通じて、現在と同じかやや冷涼であったものと推定される。

(昭和60年 3月31日)

## ② 植物遺体の同定

松本第一高等学校 中島豊志

### ア、樹種鑑定 (表19)

#### (ア) 分析試料

鑑定した試料は、中島A遺跡K・L地区から採取された52個の材幹および枝材である。VI層より5個、IVd層より4個、IVc層より4個、IVb層より15個、IVa層より21個、III層より1個、IV層のいずれかから2個である。

#### (イ) 分析 (鑑定) 方法・検鏡

(A)、試料より10cm角程度で材を切りだす。枝材については、5～6cmで輪切りにする。(B)、1辺約2～3cmのブロックを切りだす。正確に横断面 (木口)・放射断面 (柾目)・接線断面 (板目) を出す様に調整する。(C)、非常に固いものは、KOH10%溶液に24時間つけてから、水洗、HClで中和した。また色の濃いものは、次亜塩素酸ナトリウムで脱色して、水洗した。その後70%アルコールに2日以上つけた。(D)、両刃カミソリの刃、マイクロームの替刃、眼科用のメスの刃などを使って、各断面の切片を作製する。(E)、ゼラチン：水：グリセリン＝3：2：4のグリセリンゼリーで封入。カバーガラスのまわりは、無色のマニキュアで厚く封じた。切片は無染色である。

#### (ウ) 鑑定基準・樹種の特徴

鑑定基準となる樹種の特徴は以下の通りである (順不同)。

##### (A)、ハンノキ属 (*Alnus* sp.)

散孔材で放射方向に3～7個道管が集孔している。せん孔は階段状、壁孔は並列状で、道管-放射組織間壁孔は道管壁孔と同じである。放射組織は同性単列である。不完全な集合放射組織をもつヤシャブシのグループと、完全な集合放射組織をもつハンノキのグループを区別した。

##### (B)、コナラ属・コナラ亜属 (*Quercus* sp.)

環孔材で孔圏は1～2列、孔圏外道管は火炎状～放射状～散在である。短接線状の柔組織 (軸方向)、周囲仮道管、幅の広い複合放射組織などが特徴である。孔圏外道管の壁がうすく多角形を示し、道管-放射組織間壁孔があまり柵状にならないコナラ・ミズナラ・カシワのグループと、孔圏外道管が円形・厚壁で大型の柵状の道管-放射組織間壁孔をもつクヌギ・アベマキのグループを区別した。

##### (C)、ケヤキ (*Zelkova serrata*)

環孔材で孔圏はほぼ一列、孔圏外道管が波状・斜状に集孔する。軸方向柔組織は周囲状～翼状に分布する。単せん孔・並列状壁孔をもつ道管で、小道管にはらせん肥厚がある。放射組織は異性III型で、上下の一群は方～円形で大形である。

##### (D)、トネリコ属 (*Fraxines* sp.)

環孔材で孔圏は3～4列、道管径が400 $\mu$ をこえる。孔圏外道管は2～3個放射状に分布するか散在しており、厚膜で外形は多角形、内形は円形である。夏材部で軸方向柔組織が連合翼状をしめし、それが帯状

になっている。他に短接線状に分布するものが存在する。放射組織は同性単列であるが、一部複列で異性Ⅲ型を示すものがある。以上よりヤチダモに同定した。

(E)、ニレ属 (*Ulmus* sp.)

環孔材で孔圏は2～3列、孔圏外道管は波状～斜状に集孔するが、夏材部ではそれが連なって帯状に分布している。軸方向柔組織は、これらの道管と混在して分布するものと、年輪界にイニシャル柔組織を示すものがある。道管は単せん孔で交互状の壁孔をもち、チロースが著しい。放射組織は異性Ⅱ～Ⅲ型であるが、方形～直立のものと平状のものとの区別のつかないものが見られる。

(F)、クリガシ属 (*Castanopsis* sp.)

環孔材であるが、孔圏はまばらで、全体として放射孔材的である。短接線状柔組織がみとめられる。道管は単せん孔で並列状の壁孔をもち、チロースが顕著である。放射組織はほとんど単列で同性であるが、やや集合したものや、複合的なものが混在しており、スダジイとツブラジイの中間的な形態である。

(G)、ブナ (*Fagus crenata*)

散孔材で、放射方向・接線方向に2～3個集孔するものがあり全体に分布数が多い。複合放射組織により、年輪界が波うっている。柔組織(軸方向)は短接線状であるが道管が多いため、不顕著である。放射組織は、複合のもの以外は、単～複～多列のものがあるが異性Ⅲ型を示す。道管は単せん孔と階段せん孔が共に見られ、並列状の壁孔をもつ。夏材部に木繊維が帯状に分布している。

(H)、クリ (*Castanea crenata*)

環孔材で孔圏3列、道管径は500 $\mu$ mを越す。孔圏外道管は火炎状に配列する。短接線状～散在柔組織配列を示す。周囲仮道管。道管は単せん孔で交互状壁孔、小道管は階段状せん孔を示す。放射組織は同性単列である。

(I)、モミ (*Abies firma*)

針葉樹で仮道管と放射柔組織がほとんどである。年輪界の移行は急である。放射柔組織にはじゅず状末端壁がみられ、分野壁孔は、主にヒノキ型・時にトウヒ型で、1分野2～3個である。傷害樹脂道がみられるものがあり、樹脂細胞が輪縁にみられるものがあつた。

(J)、コブシ (*Magnolia cf. kobus*)

散孔材であるが、夏材部は道管数が少なく、放射方向に数個集孔している。春材部は夏材部の倍以上の幅があるが、道管は斜状に配列しており、軸方向に2個、あるいは放射方向に2～3個集孔している。ターミナル柔組織が顕著で、1～2列である。

放射組織は、異性でⅡ～Ⅲ型で上下の1～2列が方形細胞である。道管は単せん孔、並列状の壁孔をもつが一部分は連なって階段状になっている。夏材部の変化の様子から *Magnolia* の中ではコブシに近いとした。

(K)、カツラ (*Cercidiphyllum japonicum*)

散孔材で道管の占有率が高く、道管は多角形をしている。不規則に2個集孔しているものがある。柔組織は散在で数は少ない。道管は階段せん孔である。放射組織は1つの中に1～2列が混在しており、異性Ⅱ型、2列の部分は平伏細胞である。

道管－放射組織間壁孔は大きく階段状～並列状である。

(エ) 鑑定結果

層ごとの特徴を述べると次のようである。

- (i)、IV a 層ではコナラ亜属がもっとも多く、ハンノキ属を混えている。IV b 層では上記樹種に加えてクリ・ケヤキ・ヤチダモ・ニレ属が加わってくる。

種	属	層 準						
		VI	IV d	IV c	IV b	IV a	(IV)	III
モ	ミ <i>Abies firma</i>	4	1					
ヤ シ ャ ブ シ	<i>Alnus sp.</i>					2		
ハ ン ノ キ	<i>Alnus sp.</i>				2	9	1	1
ク	リ <i>Castanea crenata</i>				1			
スタジイ・ツブラジイ	<i>Castanopsts sp.</i>				1			
ブ	ナ <i>Fagus crenata</i>		1		1			
クヌギ・アベマキ	<i>Quercus sp.</i>			1	2	4		
コナラ・ミズナラ・カシワ	<i>Quercus sp.</i>				3	6		
ニ	レ 属 <i>Ulmus sp.</i>				3			
ケ	ヤ キ <i>Zelkova serrata</i>	1			1			
カ	ツ ラ <i>Cercidiphyllum japonicum</i>			1				
コ	ブ シ <i>Magnolia Kobus</i>		1					
ト	ネ リ コ 属 <i>Fraxinus sp.</i>			1				
ヤ	チ ダ モ <i>Fraxinus mandshurica var japonica</i>			1	1			

表19 中島A遺跡出土樹種一覧表

(ii)、IV c・IV d・VI層のものは同定数がいずれも4～5個と少ないが、IV c層はヤチダモ、IV d層はコブシ・ブナ、VI層は圧倒的に多いモミによって特徴づけられている。

(iii)、III層はハンノキ1個のみである。(予察的に行ったものではスギが1個でている。)

(オ) 考察

数多く発見された、コナラ亜属やブナなどは、温帯上部のいわゆるブナ林の主要素である。またハンノキのグループやヤチダモなどは、湿地～川原など水辺に進出する先駆種であり、周辺には荒地が広く存在することを予測させる。但し、材の検討数・種数が不十分なため、後述する種子・果実とのくい違いがあり、明確に断定できない。特にVI・IV c・IV d層は材をより多く検討する必要がある。

イ 種子及び果実鑑定 (表20)

(ア) 分析・検討・試料

鑑定した試料は、中島A遺跡K・L地区から採取されたもので、洗浄され、ポリ管に50%アルコールで保存されたものである。鑑定した試料はVI層27点、IV d層5点、IV c層39点、IV b層10点、IV a層3点、III層2点であるが、サンプリング時に採取層の誤認がありそうで、IV c層の試料にはIV d・IV b層出土試料が混入しているかもしれない。

(イ) おもな種子及び果実・葉の特徴

(A)、コナラ (*Quercus serrata*)

堅果が発見された。長さ1.8cm～2.3cm、幅1cm内外の円筒形。発芽部がこわされているものが多い。殻斗の着痕、大きさで同定した。

(B)、ブナ (*Fagus crenata*)

種子は、長さ1.5cm内外の三角形で、先端が割れている。殻斗(統苞)は突起が多く磨耗しており、果柄は0.8～1cm。種子を苞んでいるものは、種子が外にみえない。

(C)、ハクウンボク (*Styrax obassia*)

種子は、丸味のあるラクビーボール形で、長さ1～1.5cm、幅1cm内外、基部には大きな臍点が存在する。浅くうすい線刻が長径に沿って3～4本みられる。

(D)、トチノキ (*Aesculus furbinata*)

径3cm内外のほぼ球形な蒴果と1～2cm径の未熟蒴果、および果皮(厚さ3～6mm)、種子(偏平な球形で

径2 cm内外、しわがよってつぶれているものが多い。)が発見された。未熟蒴果には、先端に花被片が残存しており、種子は小形で、三室にわかれる。

(E)、オニグルミ (*Juglans sieboldiana*)

核および核片が発見された。核(内果皮)表面の凹凸は激しくなく、内室は狭い。縫合部の先端は尖らない。長さ3.5~4 cm。

(F)、モモ (*Prunus persica*)

核は扁平な卵形で、表面の凸凹が激しく維管束が残存している。縫合部が横に張り出しており、先端は尖る。縫合部の一端近くに深い溝が走っている

(G)、スモモ (*Prunus salicina*)

扁平な楕円体、一端に明瞭な臍点ありくぼんでいる。縫合部の一端は、心皮の重なりのため、しわがよっており、3本の溝が側面に沿って走っている。表面にはわずかな凹凸が波状にある。

(H)、モミ (*Abies firma*)

葉が多数、および種鱗が出土した。葉は長さ1.5~2 cmの広い線形で、吸ばん状の葉柄があり、先端は凹んで、表面には中央に溝がはしる。裏面は中肋があり両側には気孔条がある。断面には、下表皮、厚膜細胞があり、樹脂道の形態よりモミに同定した。

(I)、カラマツ (*Larix leptolepis*)

薄い線形の葉が一枚出土した。他に比較して保存がよく、果柄部や先端もよくのこっており、現世の混入ではないかと思われる。

(ウ) 鑑定結果

層ごとの特徴は次の通りである。

- (i) 全体としてオニグルミとコナラが多く、ついでトチノキ、ブナ、ハクウンボク、モミなどが多かった。
- (ii) モミは全層にわたっており、特にIV d層に圧倒的である。
- (iii) オニグルミはVIとIV c層に多く、これはコナラも同様。両種ともIII・IV a層からは出ない。
- (iv) ハクウンボクがVI層に、コナラがIV c層にのみ出土する。
- (v) ホウノキがIV c層のみに出土する。

(エ) 考察

種	層 準					
	VI	IV d	IV c	IV b	IV a	III
モミ <i>Abies firma</i> SIEB. et ZUCC.	1	(4)	(3) 2	(3) 2	(2)	
カラマツ <i>Larix leptolepis</i> GORDON		(1)				
オニグルミ <i>Juglans sieboldiana</i> MAXIM	15		7	2		
ブナ <i>Fagus crenata</i> BLUME	2		7		1	
コナラ <i>Quercus serrata</i> THUNB	2		6	1		
ホウノキ <i>Magnolia obovata</i> THUNB			2			
モモ <i>Prunus persica</i> STOCKES						1
スモモ <i>Prunus salicina</i> LINDLE						1
トチノキ <i>Aesculus turbinata</i> BLUME	4		13	1		
ハクウンボク <i>Styrax obassia</i> SIEB. et ZUCC	3					

IV層出土試料中には、IV b・IV d層出土試料が混入している疑いがある。( )は葉。

表20 中島A遺跡出土種子一覧表

ブナ・コナラ・ハウノキ・トチノキなど、温帯上部（中部地方でいえば1000m内外）の森林の樹種が多い。この結果だけからは、ほぼ現在と同じ位の気候が推定される。モミが発見されたことは、降水量の多さを推定させる。オニグルミには食害されたものが多く、ネズミやリス類の存在を感じさせる。

また材と種子を統合してみると以下の点が指摘できる。

- (i) 果実・種子で多いトチノキ・オニグルミは材ではまったく出土せず、材でVI層から集中して出土するモミは、葉ではVI層からはほとんど出土しない。また逆にハンノキ属・ケヤキ・トネリコ属・ニレ属など材で産出している種が、種子は全く出土しない。以上は検討数の少なさと、小さな種子が取り上げられていないことによると思われる。今後、泥炭質シルト等の洗い出しが必要であろう。
- (ii) 人為が加わった材がはっきりしていない。また、食料にされた植物のはっきりした証拠もでない。

(昭和60年9月7日)

### ③ 昆虫鞘翅の同定(表21)

鑑定に供した試料は、種子類同様、発掘調査中に任意にサンプルしたものである。同定は塩尻市立丘中学校教諭小林比佐雄氏に依頼した。小形の昆虫や遺存状態の悪い個体は欠落する可能性が高い上、試料数も少なかったため、同定者からの所見を得るには至らなかった。同定結果のみ表21に示す。

VI層以下からは出土せず、IV a・IV c層もわずかな試料しかない。IV a・IV c層の昆虫鞘翅は樹林に付着していたものと思われる。IV b層以上では水生昆虫が頻出する。大形で目立つため多数採取されたのだ

種	科	目	層 準				
			IV d	IV c	IV b・IV a	III	II・I・?
(オ サ ム シ)	オ サ ム シ 科	鞘翅目			2	2	3
(ゴ ミ ム シ)	ゴ ミ ム シ 科	"			1	1	1
コクロマメゲンゴロウ	ゲ ン ゴ ロ ウ 科	"			1		
ゲ ン ゴ ロ ウ					1		
ガ ム シ	ガ ム シ 科	"	1		15	2	6
ク ロ シ デ ム シ	シ デ ム シ 科	"			1		
ヒ ラ タ シ デ ム シ (シ デ ム シ)					1		1
(クワガタムシ)	クワガタムシ科	"			3		
セ ン チ コ ガ ネ	セ ン チ コ ガ ネ 科	"			2		3
ダ イ コ ク コ ガ ネ コ ガ ネ ム シ ア オ カ ナ ブ ン	コ ガ ネ ム シ 科	"			1 2		1
ア オ タ ム シ (タ マ ム シ)	タ マ ム シ 科	"					1
			1	1	2	1	5
(コメツキムシ)	コメツキムシ科	"					
(カッコウムシ)	カッコウムシ科	"					1
(ゴミムシダマシ)	ゴミムシダマシ科	"			1		
(ハムシダマシ)	ハムシダマシ科	"					1
(ハ ム シ)	ハ ム シ 科	"			1		
(スズメガ)	スズメガ科	鱗翅目			1		

表21 中島A遺跡出土昆虫鞘翅一覧表



ろうが、池と化した低湿地の存在を裏づけるだろう。

#### ④ 文化層と環境

各種分析結果からは次のような事柄が指摘できよう。

- (i)：花粉分析からは、全般的な気候の冷涼性と、花粉分帯にみられる植生の変遷が指摘できる。IV c 層の状況が抽出し得ないのが残念だが、IV a 層に対比しうる V-1 帯から自然植生が破壊され、農耕が開始される。
- (ii)：植物遺体の同定からは、湿地の植生と温帯上部（ブナ林）の植生が捉えられ、現在と同程度の気候が推定されたが、層別の植生の変遷は把握できなかった。また、樹木と種子との間に種構成のずれがあることも指摘できた。
- (iii)：昆虫鞘翅の同定からは、少なくとも IV b 層以上では低湿地は滞水状態であったことが指摘できた。発掘所見も踏まえてこれらの結果を総合すると、以下のような事柄が指摘できよう。
- (iv)：全期間を通じ気候は現在と同等かやや冷涼であろう。
- (v)：弥生時代以前（IV a 層以下）の環境については特に指摘できない。
- (vi)：弥生時代中期初頭（IV c 層）では、自然植生に改変を加えた積極的証拠はない。堅果種子の多さ及び樹木と種子とで構成比を異にするのは、意図的な種子の採集の可能性を示している。低湿地は既に池と化している。
- (vii)：平安時代（IV b、IV a、III層）では、IV a 層から自然植生の破壊が認められる。しかし樹木の多出する IV b 層から既に自然林の伐採が始まっていたとみられる。湿地性の樹種以外は他所から人為的に運び込まれて投棄されたものと思われるからである。堅果種子の激減はそれらの採集が主要な食料獲得手段でなくなったことを意味しよう。そして、ソバ・イネの栽培が開始される。

#### (3) 遺構・遺物の概観（図187）

地区別・層位別に検出遺構と出土遺物を概観する。

低湿地を中心とする K・L 地区では III～IV b 層・IV c 層・V 層・VI 層から遺構・遺物が発見された。VI 層からは縄文時代早期末葉～晩期前葉の遺物が若干出土した。V 層からは遺物のブロック 5ヶ所が検出され、縄文時代晩期末葉前後の土器や石鏃・打製石斧を主体とする石器が多数出土し、土偶や玉もわずかながら発見された。IV c 層からはパミスを貼って配石をもつ祭祀遺構 2基が検出され、弥生時代中期初頭の土器や石製品、植物遺体などが出土した。III～IV b 層からは、板、はし状木製品、平安時代の須恵器、灰釉陶器が出土し、多量の植物遺体・動物遺体も発見された。また I・II 層からは中～近世の土器や貨幣が発見された。

断層崖上の J 地区では、II～V 層から流入品とみられる縄文～弥生時代の土器片・石器片が散見されるに留まり、P 地区では II 層上面から時期不明の土壌数基が検出されたものの、遺物は I 層から縄文時代～近世の土器・石器や陶器が少量出土しただけであった。

断層崖下、低湿地より南側の O 地区では III 層上面で大規模な断層が発見され、既述のように専門的調査がなされた。III～IV 層からは縄文時代の遺物が散見され、断層を覆う II 層からは縄文時代～中・近世の遺物が若干出土した。やはり断層崖下、低湿地より北側の斜面に当たる I 地区では、III 層から縄文時代早期末葉の土器がある程度まとまって出土し、II 層からも同時期を主とした縄文時代の遺物が得られた。

各地区出土遺物のうち、縄文時代早期末葉の土器は、第 2 節下り林遺跡で示した分類（P58～P65）に従って記述し、縄文時代晩期末葉前後の土器、弥生時代中期初頭の土器は、独自の基準を設けて分類し記述する。その他の遺物については一般的分類に従って記述する。

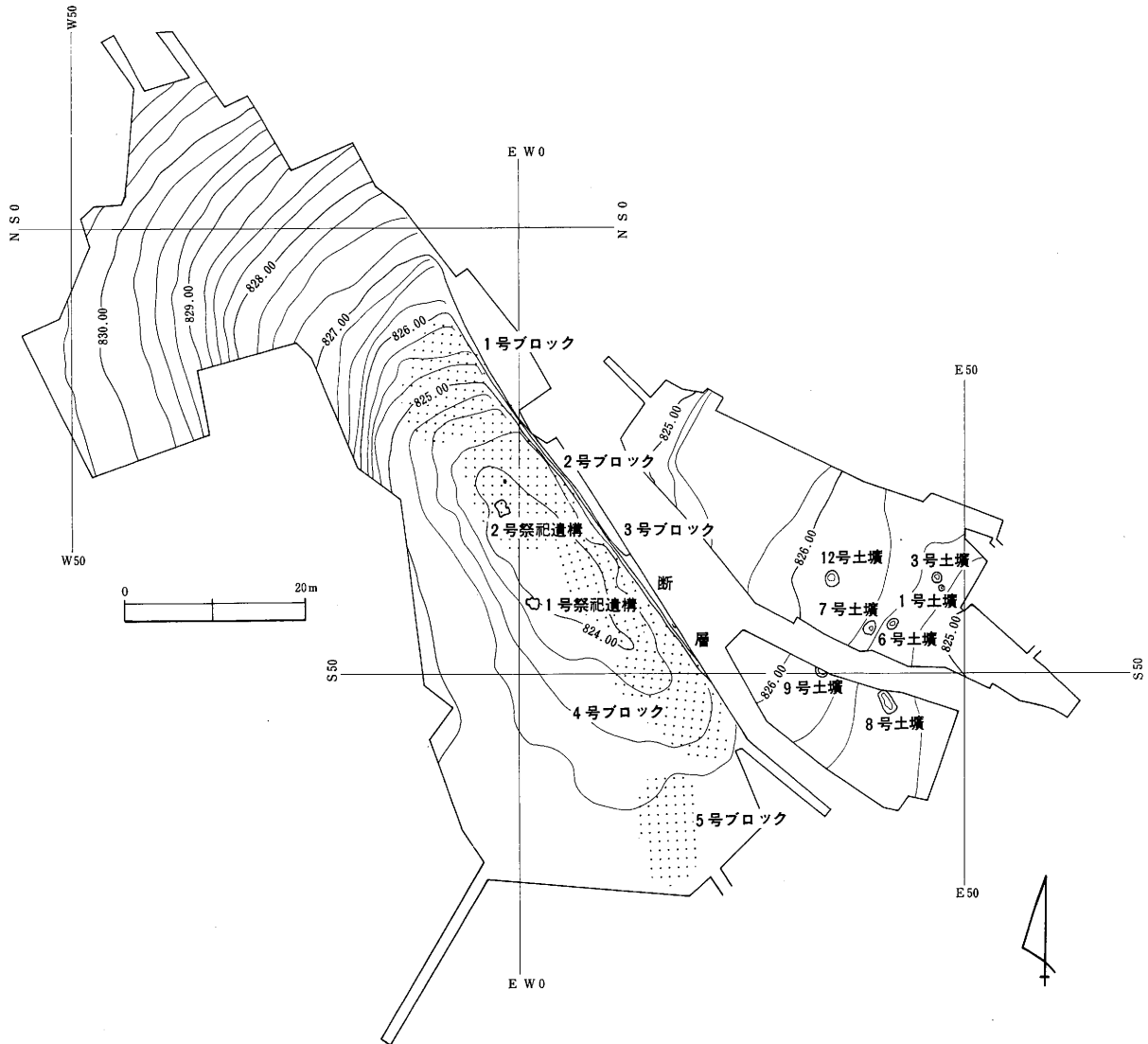


図187 中島A遺跡K・L地区遺構配置図 (1:500)

(4) J・P・O・I地区の遺構と遺物

① J地区の遺物 (図189)

II～V層から流入品とみられる遺物が少量出土した。遺物はさほど磨滅しておらず、特に集中することもなかった。

遺物には縄文時代の土器(1～7)と石器(1～2)、弥生時代以降の土器・陶器(532・558～560)がある。縄文時代の土器はすべて晩期末葉前後に属す。石器は無茎石鏃と乳棒状磨製石斧である。弥生時代の土器には甕(559・560)と内面に楯描横走文をもつ高杯(558)がある。また、古墳時代の高杯(532)や平安時代の灰釉陶器瓶、中世の陶器平碗なども出土している。

② P地区の遺構と遺物 (図188・190、表22)

II層上面で土坑が7基検出された。方形で大形の8号土坑以外は円形である。8号土坑はII層中にみられる砂礫層(小河川址)を切り込んでつくられるため、壁や底・埋土に礫が多量に含まれる。いずれの埋土もI層と同質だが、若干II層の崩落物が底に残される土坑もある。伴出遺物は皆無で時期を決定できない。

I層(耕土層)からは遺物が散漫に出土したが、いずれも耕作によって動かされていると判断できた。

遺物には縄文時代の土器(8～18)と石器(3～13)、中～近世の土師器や内耳土器・陶器がある。縄文時

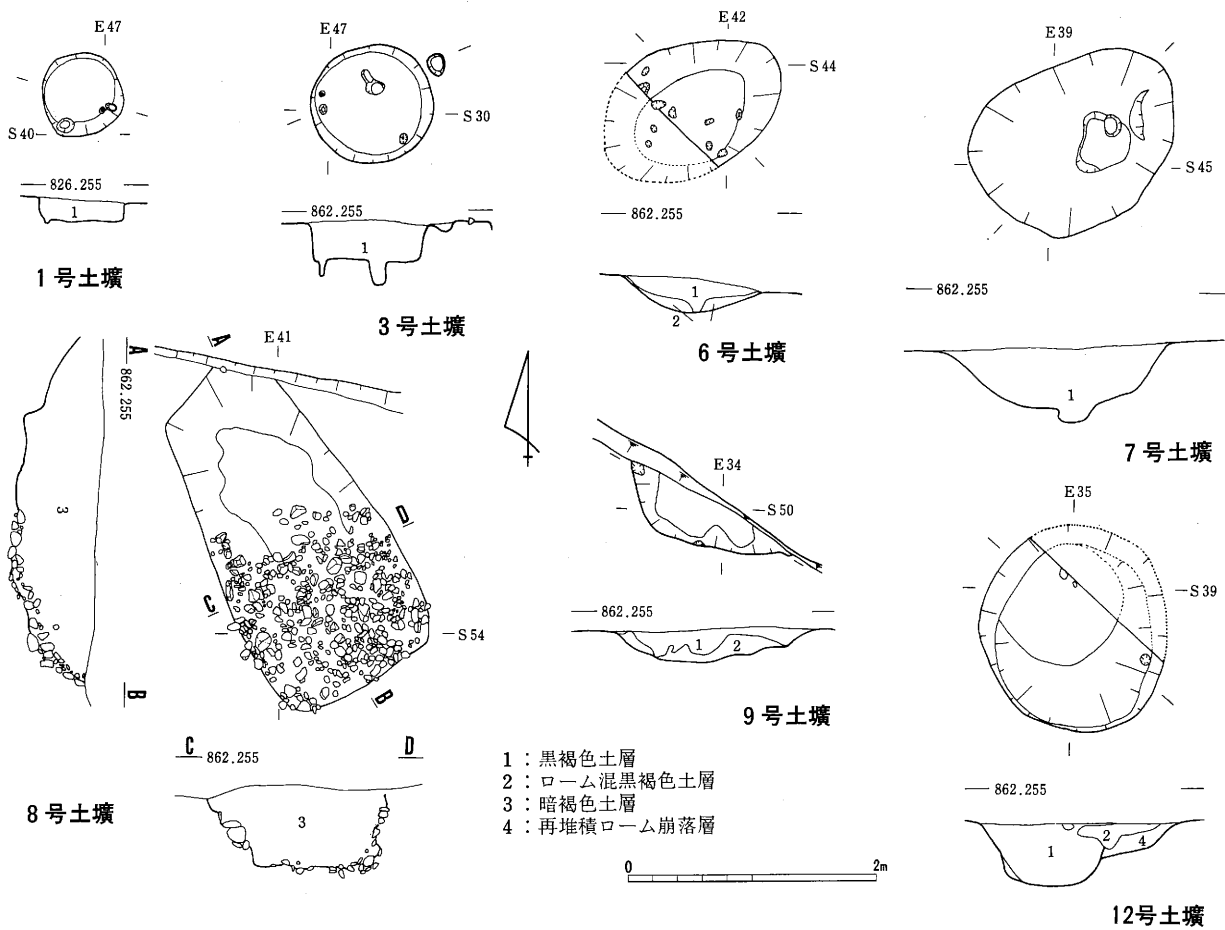


図188 中島A遺跡P地区土壙実測図 (1:60)

代の土器は、前期末葉(8)、中期後半(9)、後期初頭～前葉(10～14)、晩期末葉前後(15～18)と多様である。石器類は無茎石鏃(3)、有茎石鏃(4・5)、石錐(7)、スクレイパー(6)、小剥離痕のある剥片、打製石斧(8～12)、乳棒状磨製石斧(13)、特殊磨石、剥片・石核・原石等である。石槍も1点あり(75)、砂岩製で基部が丸い形態をとっているのので、縄文時代草創期に属するだろう。

③ O地区の断層と遺物(図191・192)

遺構は発見されず、I～IV層から少量の遺物が出土したにすぎないが、III層上面で大規模な断層が発見され、岡谷断層発掘調査研究グループによって専門的調査が実施された。そして、既述の通り本遺跡周辺の地質学的環境が解明されることになったのである。ところで、I～IV層とも遺物の出土状況は散漫で、特に集中するわけでもなかったが、断層に切られるIV・III a・III b層と断層を覆うII層から出土した遺物は、⑤で報告するK・L地区の断層崖付近の遺物出土状況及び出土遺物ともども、断層を引き起こした地

名称	規模(長径×短径×深さ)cm	平面形	検出面	埋土	備考
1号土壙	70 × 65 × 20	円形	II層上面	I層質土	
3号土壙	100 × 95 × 30	円形	"	"	
6号土壙	? × 105 × 30	楕円形	"	"	現道路下で完掘せず
7号土壙	175 × 130 × 50	不整楕円形	"	"	
8号土壙	(280) × 145 × 65	方形	"	"	埋土、底、壁に礫多し
9号土壙	(50) × ? × 25	?	"	"	現道路下で完掘せず
12号土壙	165 × ? × 50	?	"	I層及びII層質土	"

表22 中島A遺跡P地区土壙一覧表

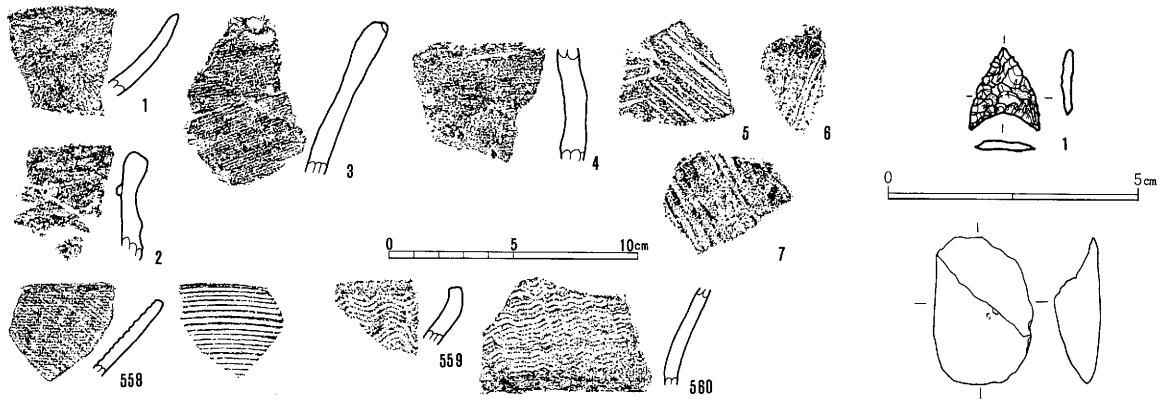


图189 中島A遺跡J地区出土遺物実測図・拓影

(土器 1~7, 558~560 1:3、石器 1 2:3 2 1:4)

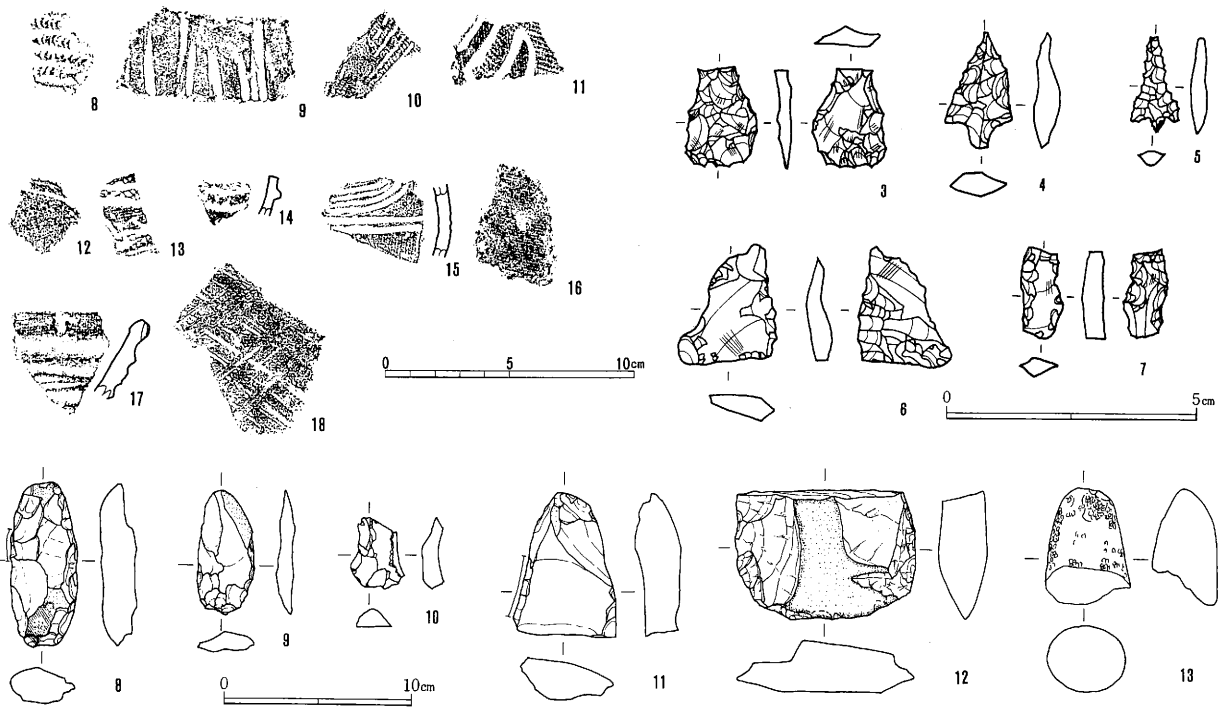


图190 中島A遺跡P地区出土遺物実測図・拓影 (土器 8~18 1:3、石器 3~7 2:3 8~13 1:4)

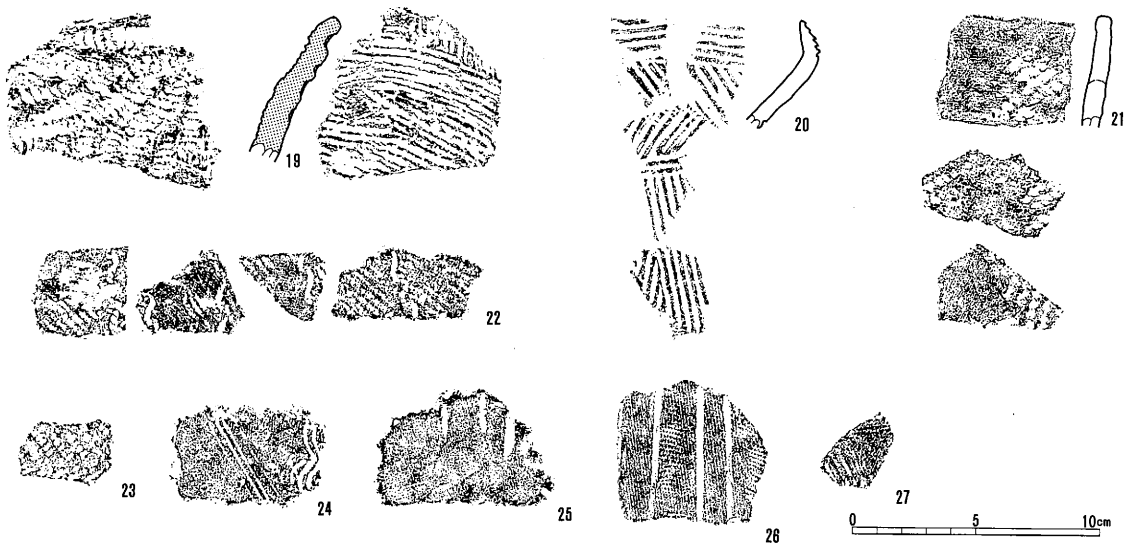


图191 中島A遺跡O地区出土土器拓影 (1:3)

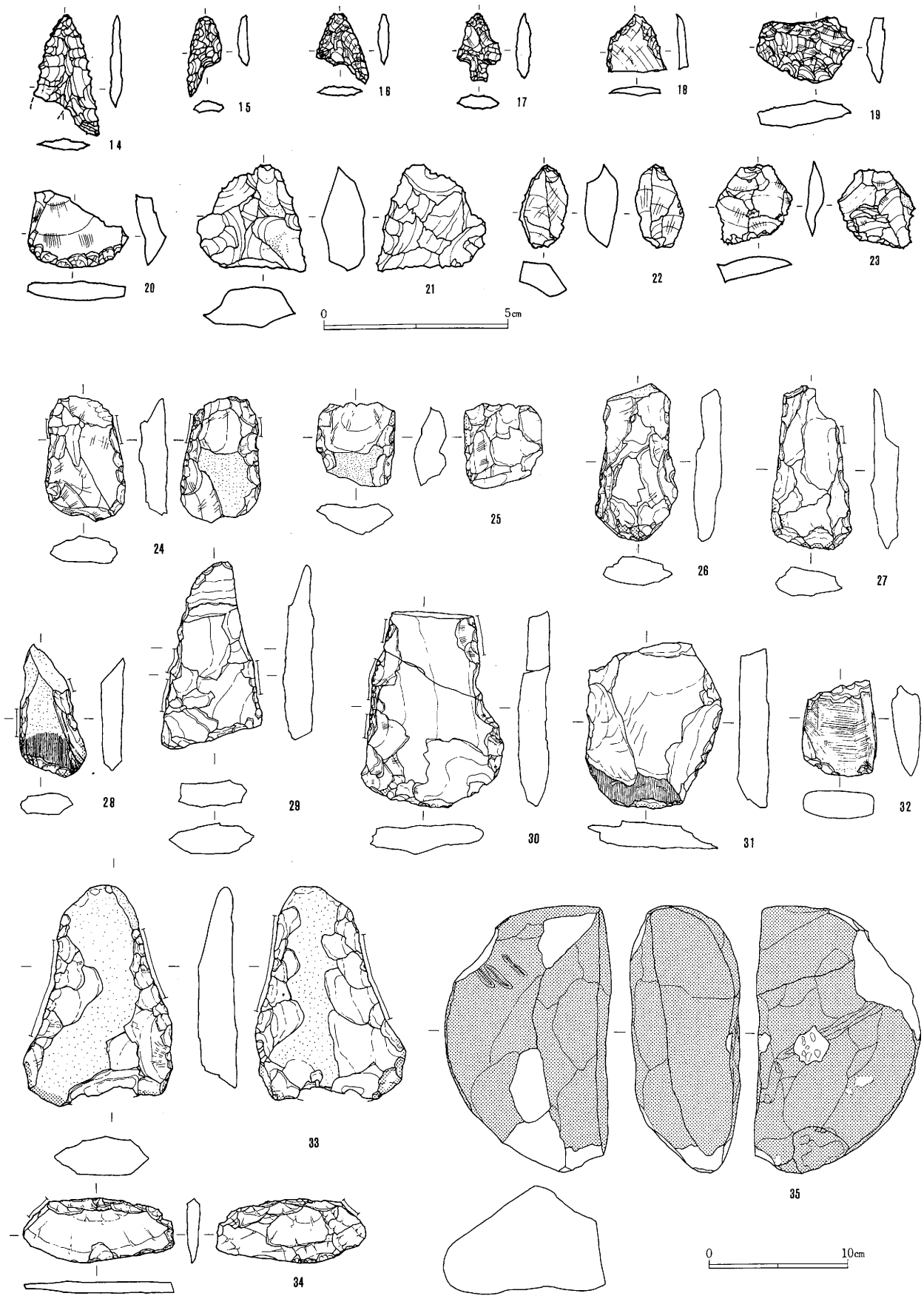


図192 中島A遺跡O地区出土石器実測図 (14~23 2 : 3 24~35 1 : 4)

震の発生年代を推定する資料となる。

遺物が含まれる最下層はIV層で、縄文時代早期末葉の土器1点(19)と小剥離痕のある剥片1点がある。19は絡条体圧痕文が施されており、圧痕は深く「イモ虫」状をなし、器面は凹凸が著しい。横位および斜位の構成をとるが定型的なモチーフとはなりえていない。内面には明瞭な条痕をとどめている。胎土中には多量の繊維のほか、白色・褐色の粒子を多く含んでいる。下り林遺跡の分類に従えば、第6類土器A種に相当する。IV a・IV b層からは縄文時代中期の土器(21・22・24)若干と、スクレイパー2点(20・21)、小剥離痕のある剥片6点、打製石斧4点(29・33)、凹石1点、砥石1点(35)が出土した。断層崖を覆うII層からは縄文時代前期末葉(20)、晩期末葉頃(27)の土器と、石鏃(17)、スクレイパー(19)、小剥離痕のある剥片、打製石斧(24・26・31)などとともに、平安時代の杯や中世以降の土師器・内耳土器、16世紀末の志野丸皿(555)が出土している。層位不明の磨製石斧(32)は曹長石製だが、この石材は岡谷市付近では得られないという。

各層とも遺物量が少なく年代観を確定しきれないものの、IV層は縄文時代早期末葉以後、III層は同中期末葉以後に成立し、II層は16世紀以降に断層を覆ったという可能性が考えられる。断層を引きおこした最新の地震は縄文時代中期以降16世紀までの間に発生した可能性があり、この時間幅はK・L地区の発掘調査所見によってさらに限定し得る(P286参照)。

#### ④ I地区の遺物(図193・194)

遺構は検出されなかったが、III層から縄文時代早期末葉の土器と石器がある程度出土した。図193に層別の土器の出土状況を示したが、特に集中する場所はない。しかし、隣接する膳棚B遺跡の同時期の包含層も遺物の分布密度はさほどではないので、I地区III層もそれと同様の包含層の可能性が高い。旧地表と考えられるII層出土の遺物も、わずかに他時期の遺物が混入するものの、大半は早期末葉に属している。これらII～III層の遺物分布域はこれ以上把握できなかったが、南西側、北西側とも段を違えた水田となっていて、包含層が削平されてしまったものと考えられるためである。

II～III層出土遺物には、土器と石器がある。

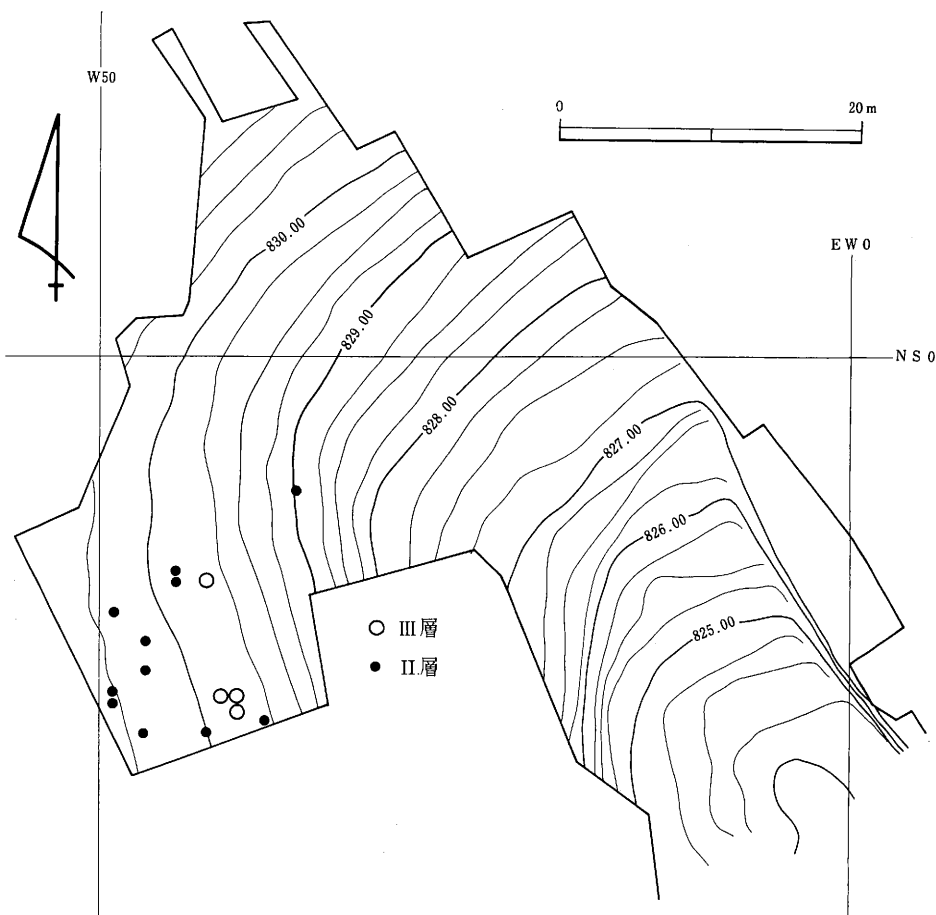


図193 中島A遺跡I地区縄文時代早期土器分布図(1:500)

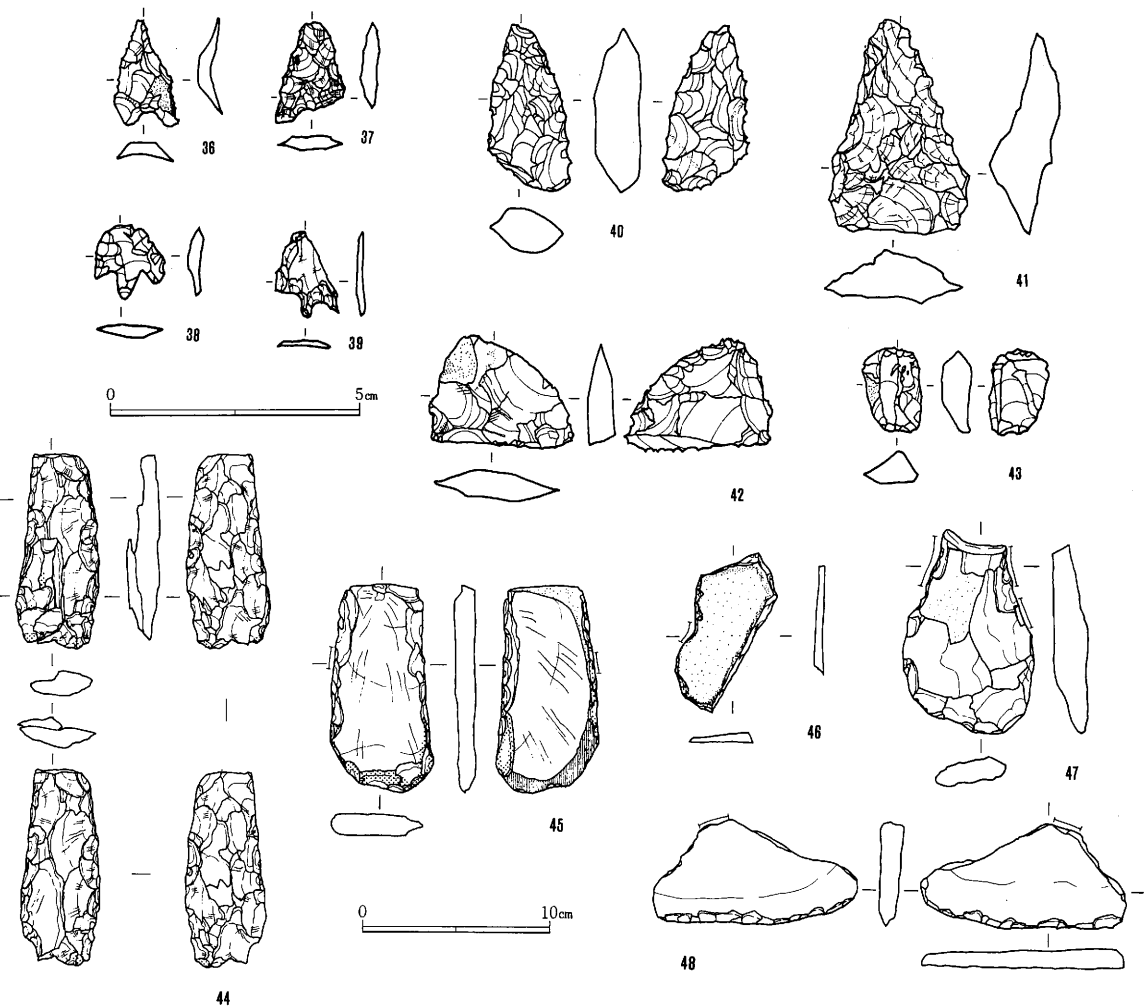
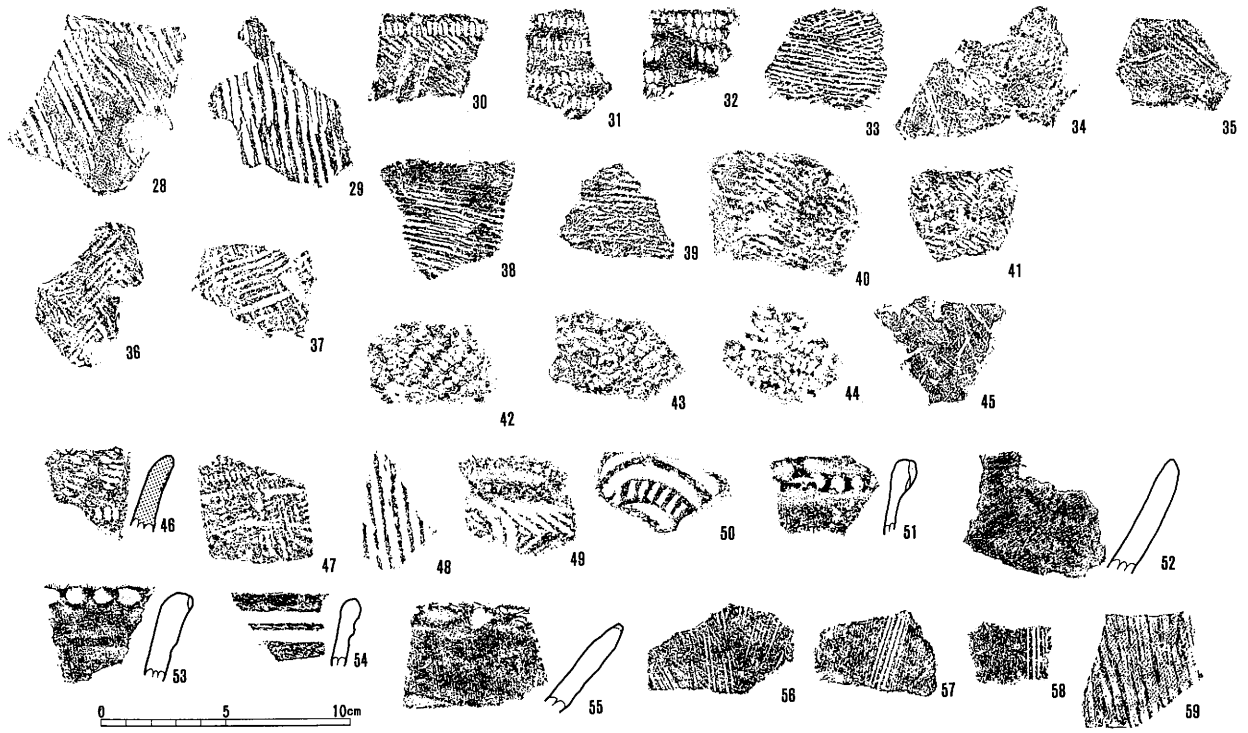


図194 中島A遺跡I地区出土遺物実測図・拓影

(土器28~45 II・III層出土、46~49 I層出土 1:3、石器36~43 2:3 44~48 1:4)

土器では、28・29は同一個体で斜行する撚糸文を地文として、横位の絡条体圧痕文を施している。下り林遺跡の第6類土器B-1種aに相当する。30は同種bに相当し圧痕文下に絡条体条痕を斜走させている。31・32は同種d。33～41は第9類土器に含まれる。条痕のみをとどめるもので、貝殻による36・37はA種に、絡条体条痕とみられる33～35・38～41はB種に分類される。42～44は縄文の施された第7類土器。胎土中に繊維が多く吸水性に富む。45は無文の胴部破片である。これらの土器の様相は膳棚B遺跡出土土器とよく似ており、両者には深い関連性があるものと推察される。石器には石鏃4点(39)、石槍4点(40～42)、スクレイパー2点、小剥離痕のある剥片11点、打製石斧7点(47)、横刃形石器1点(49)等があるが、石鏃39は混入品の疑いがある。石槍4点は本遺跡出土石槍の約半数に当たり、すべてチャート製で、素材の古い剥離面を残したり、器体中央に瘤状の剥離し残した部分を残したりする。

I層出土の遺物には縄文時代早期末葉(46・47)、前期末葉(48・49)、中期後半(50)、晩期前葉(51)、同末葉前後(52～59)の各時期の土器と、石鏃(36～38)、ピエス・エスキーユ(43)、スクレイパー、打製石斧(45・46・48)などがある。また内耳土器や中・近世の陶器片も含まれる。縄文時代早期末葉の土器の概略を示すと、46・47はともに第6類土器であり、それぞれB-2種d・cに細分される。46は斜位と横位、47は横位と縦位のモチーフを構成している。47は絡条体による圧痕が細く短く繊細である。器壁に条痕をもたず、ていねいな調整が加えられている。

#### (5) K・L地区 縄文時代晩期前葉以前の遺物(図195～201)

K・L地区のVI層には縄文時代早期末葉～晩期前葉の遺物がややまとまって含まれている。そのうち、後期中葉～晩期前葉の遺物のごく少ないので、VI層は後期前葉以前の遺物を含む層と考えたほうがよいだろう。発掘時には充分検討してないが、断層の成立は縄文時代中期末葉～16世紀間だとするO地区の所見に従えば、縄文時代後期前葉の遺物を含むVI層は断層によって切られている可能性が高い。一方、断層崖斜面に堆積したV層からは縄文時代晩期末葉前後の遺物が大量に出土した。V層が断層崖を覆うのならば、断層成立の年代観をさらに限定し、縄文時代後期前葉～晩期末葉前後の間とすることができよう。

VI層出土土器の分布と接合を見ると(図195)、VI層の分布に従うためか断層縁辺には量が少ない。時期別にはある程度まとまりがないでもないが、ブロックとするには量が少なすぎるようだ。土器の風化が著しいことからみれば、VI層ごと北西側山麓寄りから流れてきたか、低湿地に単独で投棄されたことが考えられるだろう。早期末葉の遺物は膳棚B遺跡やI地区で生活した人々と関係があったのだろうが、他の時期には近隣に遺跡が発見されていない。石器・石片もある程度発見されており、土器と伴するはずだが、土器の時間幅が大きいので、時期を特定できない。

V層以上からも、晩期末葉前後のブロック内も含め、該期の土器が出土している。石器の中にも後期以前のもが含まれているはずだが、それを具体的に指摘できる例は稀であった。以上の状況から該期の遺物をVI層とV層以上とに区分して図示したがその説明は一括して行いたい。

草創期の遺物には黒曜石製尖頭器1点(76)がある。ほぼ完形で基部は尖り、整形もていねいで、現重量は21.3gある。

早期～晩期の遺物で時期が推定できるのは土器だけである。早期の土器は、末葉頃に属する(60～64、99～107)。60は波状をなす口縁部破片。大きな爪形文を一条波状にめぐらしている。胎土に繊維・石英粗粒などを含み、器面には貝殻による条痕をとどめている。下り林遺跡の第11類土器に含めておきたい。61・62は縄文が施されるもの。63・64は外面に貝殻条痕をとどめる胴部破片。61～64は胎土中の繊維が多く脆弱である。99～101は絡条体圧痕文が施される第6類土器。99はB-2種d、100はB-1種c、101は絡条体圧痕と絡条体条痕が併用されている。102～104は撚糸文が施されるもの。第8類土器に分類されるが、



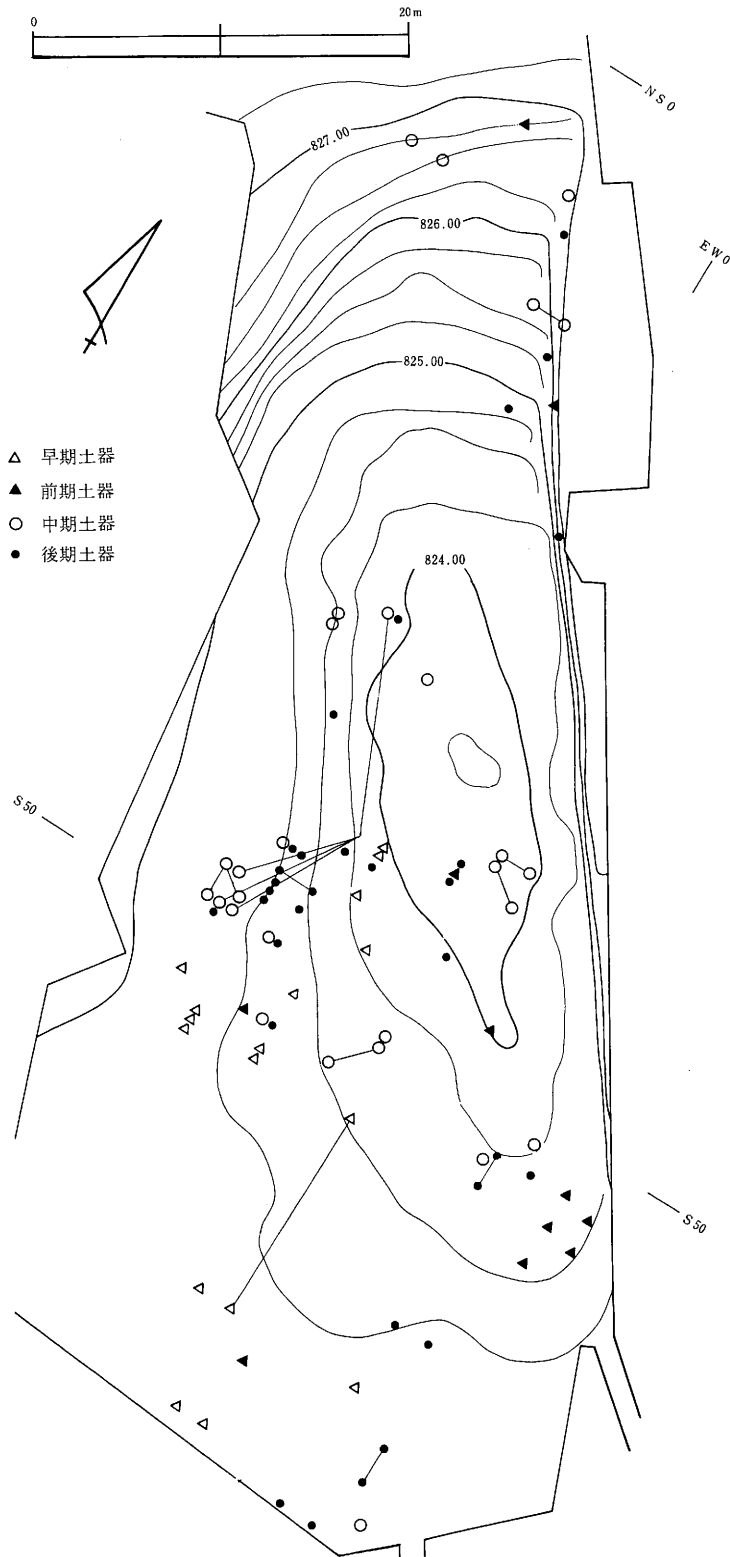


図195 中島A遺跡K・L地区VI層の土器分布図 (1:400)

第6類土器の胴部破片である可能性が強い。105~107は縄文の施される第7類土器。105・106はLR、107は0段多条の原体をそれぞれ用いている。

前期には諸磯a式(108)、諸磯c式(65)、前期末葉の土器(66、109)があるがいずれも微量である。

中期には初頭の梨久保式(67~70、110~114)、中葉の井戸尻式(71~75、115~117)がある。後葉に入ると、その前半の曾利式系統の土器(76~78、118~124)と加曾利E式系統の土器(79~81、125~127、131~134)があり、その後半~末葉ではやはり曾利式系統の土器(82~84)と加曾利E式系統の土器(128)がある。

後期には初頭の称名寺式(85~88、136~149)、三十稲場式(89・90・150)、前葉の堀ノ内式(91~95、151~155)、中葉の加曾利B式(156~158)、末葉の羽状沈線文系の土器(96、129、159~160)がある。

晩期前葉には隆帯文をもつ土器(97・130・161)と三叉文をもつ佐野式系統の土器(98・162・163)がある。

VI層出土の石器には、石鏃24点(49~55)、石錐1点(56)、石匙3点(57)、スクレイパー5点(58~60)、ピエス・エスキーユ4点(61~64)、小剥離痕のある剥片58点、打製石斧25点(65~71)、同小剥片13点、横刃形石器1点(72)、磨石1点(74)、凹石1点、特殊磨石2点(73)などがあり、剥片・石核・原石類も多い。石鏃と打製石斧類の多さには注意を要するだろう。